ＩＳ　〈インフィニット・ストラトス〉　転生者は・・・

IS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　転生者は・・・

【Ｎコード】
Ｎ９８６９Ｒ

【作者名】
ＩＳ

【あらすじ】
ＩＳ世界への転生物語、始まります。

これまでの経験を生かせたら良いな。と思ってるので、よろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ
４月３日、タイトルを少し変更しました。
最近、更新速度低下中。本当にすみません。

プロローグ（前書き）

自分が転生ものを書いたらこうなる。てきな感じですね。

早速どうぞ

プロローグ

目を覚ますと、そこは真っ白でどこまでも続いていそうな空間だった。

「う……。こ、ここ…は？」

まだぼやける視界の中、周囲を見渡す。

が、何もない。真っ白な空間が続くだけ。

「それより、どうしてこんなとこに…？」

ここに来てしまった理由を思い出そうとしても、何も思い出せない。

――と。

「ほっほっほ。目が覚めたようじゃな■■■■」

最後のところが聞こえなかったが、それより重大なことがある。

「あなたは？」

「わしか？　わしは…神、と呼ばれるものじゃ」

神？

「そう、神じゃ」

「！？　思考を読まれた！？」

「ほっほっ、神じゃからな。このくらいは簡単じゃ」

――信じるしかない、か。

「そうでなければ困る」

「…思考を読まないで欲しいんだけど……」

「ふぉっふぉっ、すまないの。これはこの空間にいる限りデフォルトでな」

「あなたみたいなおじいさんが横文字を使うと、違和感が…」

「しかたのうて。これでも神じゃぞ？　人間界のことなど全て分かる」

「そう、ですか。…やっとですけど、どうして俺はここに？」

「お主は死んだ。今は魂だけの状態じゃ。…わしが連れて来たんじゃがの」

「じゃあ、どうしてここに連れてきたんですか？」

「すまんかった！！！」

突然土下座をした神。地面？　に何度も頭を打ち付けてる。

「え？　ちょっ！？　急にどうしたんですか！？」

さすがにこれは慌てる！　ガンガンガンガンと効果音が付きそうなくらい頭を下げてる！

「実はのぉ…おぬしはわしの部下のうっかりで死んでしもうたんじゃ」

「…とにかく、頭を上げてください。話が出来ませんから」

「そうじゃの…本当にスマン」

「やったのはあなたじゃないんでしょう？　なら良いです。あなたが謝ることはないです」

「やったやつには厳重な罰を下しておいたからの。でも、それではわしの気が治まらんのじゃ。責任者として」

「謝罪は十分受け取りましたから。あなたが俺をここに呼んだ理由

があるんでしょ？」

「おお、そうじゃった。話すが、かまわないか？」

「はい。ぜひ」

「おぬしにはお詫びとして転生の権利を与える。して第二の人生を歩むか、せずに輪廻の輪に戻るのかをまずは決めてくれい」

転生って…テンプレだな。断る理由もないし。

「じゃあ、転生でお願いします」

「わかった。次にその転生先なんじゃが…死んだ直後のおぬしと関連するところでなければ無理じゃ」

「……その死んだ直前と直後の記憶がないんですけど…」

「おお、わすれておった。……これじゃな」

俺の目の前に出てきたのは…バッグ？　あ、俺のだ。

「そうじゃ。死んだときの所持品じゃ。コレの中身…たとえばコレとかじゃな」

勝手に俺のバッグを開いた神。そこから出したのは――

「あ、ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の７巻！　そういえば読む前に死んだんだっけ…読みたかった……延期した発売まで待ち遠しかったのに……」

「それについては本当にすまぬ。……ほれ、この空間で読むか？」

「良いんですか？」

「別にかまわのうて。わしがおぬしと話すために作った空間じゃ…
…読み終わったら呼んでくれ。またここに来るからの」

「ありがとうございます」

「このくらい良いわい。ではまたな」

突然空間に切れ目が入ったと思ったら、神はそこに入ってここから消えた。

「やっぱり偽者なわけ無いよな…まあ、読むか」

（2時間くらい）

「ふぅ、今回も面白かった。……神様？」

「…読み終わったかの」

消えたときと同じように、空間に切れ目が入ってそこから神が出てきた。

「はい。終わりました」

「うむ、それで転生はどうするのじゃ？　他には…」

俺のバッグの中の物が、触れていないのに浮かんで出てくる…すげぇ。

「ほっほっ、このくらい簡単じゃ」

…そういえば思考は読まれてるんだった。

「そうじゃぞ。で、このくらいか」

俺のバッグの中から出てきたのは、ＰＳＰ・モンハン３ｒｄの箱・遊戯王カード・カードのスリーブ（けいおん）・漫画版ＩＳ２巻…その他イヤホン等。

「これだと行けるのは、ＩＳ・モンハン・遊戯王・けいおん…ってことですか？」

「ふむ、そうなるの。モンハンと遊戯王の場合時代は選べるぞ」

モンハンの時代…つまりこれまでのシリーズもＯＫということだろう。遊戯王はいわずもがな。

「そういうことじゃ。して、どうする？」

「……じゃあ、ＩＳの世界でお願いします」

「ＩＳで良いんじゃの？」

「ええ」

「わかった。次に願いを叶えよう。言ってみぃ」

「…まずＩＳの才能ですね。行っても見てるだけではつまらないですし」

「ふむ。それもそうじゃな。次は？」

「身体スペックの強化をおねがいします」

「どのくらいがいいかの？」

「全てが世界一レベルで」

「ほっほっ、以外と強欲じゃの。良いぞ。他には？」

「じゃあ、専用ＩＳを。ＩＳは『ガンダムＯＯ』の機体のどれにも変化できるってできますか？」

「かまわんぞ。じゃが、機体は段階的に開放されるようにするがかまわないな？　まずは第三世代機までからじゃ」

「それはセカンドシフトで、ということですか？」

「うむ。セカンドシフトで第４世代機になれるようになる」

「…第５世代機は？」

「あれはサードシフト…となるのかの？　セカンドシフトの先じゃ。その名称は勝手にしてくれてかまわないぞ。後はそうじゃな……」

一瞬思案顔になった神。すぐにいままでどおりに戻る。

「ＡＩを付けるとしよう、人格はティエリア・アーデ。いいかの？」

どうやら、ガンダムＯＯに情報を引きだしていたらしい。

「むしろありがとうございます。そこまでしてくれて…」

「いいのだよ。部下の罪償いじゃ。他にもなにかあるのかの？」

「特に無いです。もういいですよ」

「そうか。早速行ってもらうことになるんじゃが？」

「かまいません。むしろ早く行きたくてうずうずしてるんで」

「では、準備を始めるかの…◆◆◆◆◆◆◆◆」

理解のできない言葉を発しはじめた神。この理解できないのは、英語などを聞いたときの分からないではなく、根本から理解できない。

「◆◆◆◆◆◆…コレでよし。こちらの準備は整ったぞい。最後の注意じゃ、おぬしが入るのは原作に限りなく…９９．９％似た世界じゃ。残りの０．１％でバグかなにかが起きるかも知れないが、それは君に対処してもらうことになる。こちらからは介入できないからの。…君から何かあるかい？」

「分かりました。では最後に…神様の名前を教えてください」

「そういえば名乗っていなかったの。わしは『ゼウス』じゃ」

「最高神様でしたか。手間を掛けました」

「最初からよいと言っておる。こちらのミスじゃからの…では行くぞ。時間軸は原作の３日前、それ以外の詳しいことはそれに聞いてくれ」

それ、が何を指すのかはすぐにわかった。今まで無かった物があることで、首に違和感がある。ネックレスだ。ソレスタルビーイングのマークの。

「頼んだＩＳ…ですか？」

「うむ。ではな、さよならじゃ」

「はい……さようなら。ありがとうございました」

最後に深く頭を下げると、俺の意識は白に塗りつぶされた。

最後に見えたのは、なにか大切なものを見送るような表情をした神様――ゼウス様――だった。

◇

「行ってしまったの…」

ワシは、いまこの空間に居た少年を見送った。

「ミカよ…これでよかったのじゃろうか？　わしから唯一してやれることだったんじゃ…」

そう。彼はわしとミカ…神と人間の間に生まれた子。

人間界に残っていたミカは、少し前にこちらに来た…つまり人間界で死んだ。

わしは『わしらの仲間…神になることが出来る』と提案したが、彼女は断った。代わりに…

「あなたはあの子を見守ってください。それが、あなたの責任でもありますから」

そういって、輪廻の輪に戻っていった。

じゃから、彼が人間界死んだとわかった瞬間にこの場所に呼んだ。

願いを叶えてやるために。いままで何も出来なかったわしからの

唯一できた事じゃ。

「がんばるのじゃぞ『拓神（たくみ）』。わしらはいつでも見守っておるから…」

わしはその空間にその言葉を残すと、その空間から去った。

プロローグ（後書き）

連載小説としていますが、更新するのか不明です。

こちらは気が向いたら書く程度だと思うので。

何か要望等あれば感想で。

では、ありがとうございましたｍ（＿＿）ｍ

異世界へ（前書き）

早速第１話投稿です！

異世界へ

真っ白な空間で白に包まれた俺は――――――

「ううっ…ここは？　…部屋？」

まず目に入ったのは、天井。普通のだ。
周りを見てもテーブルやテレビなど、普通のものしか置いてない。
どうやら俺は床に倒れていたみたいだ。

『目が覚めたのか』

俺以外いないはずの部屋に、俺以外の声が響く。

「！？　どこだ？」

『ここだ。すぐにわかると思ったんだが？』

発信源はネックレス…いや、俺のＩＳだった。

「ああ、そういやそうだったな…ティエリア、で良いのか？」

『ああ、構わない。早速本題に入るとしよう。ここについての説明を始めるが、良いか？』

「頼む」

『了解した。ここは神の言った通り、原作の始まる3日前の君の家だ。君の交友関係などについては…分かっているだろう？』

「は？　いや、だってなにも……あれ？」

『それについても説明する。君はこの世界の君に酷似した魂の持ち主と入れ替わった、だから記憶もある。神によって色々と変化しているがそのあたりは良いだろう。次に僕についての説明だ。僕はティアリアという名称だが、それはこのＩＳのについているＡＩの名称だ。だからこのＩＳに名前は無い。付けてくれないか？』

「わかった…といっても、神に頼んだ時点で決めてたんだけどな。名前は『マイスターズ』」

『了解。名称の書き換えを実行する。名称を『マイスターズ』へ変更、以後の変更は不可能だ』

「構わない。説明を続けてくれ」

『そうだな。この機体は君が望んだとおり全てのガンダムに…いや、それ以外にもなれる。フラッグやティエレンだな。その変化の制約については説明を受けているな？』

「神様から聞いた。今の状態じゃガンダムは、エクシア・デュナメス・キュリオス・ヴァーチェしか使えないんだろ？」

『そうだ。いつなるのかは知らないが、第二形態移行（セカンドシフト）でダブルオー・ケルディム・アリオス・セラヴィーが使えるようになる』

「そういえば、ナドレはともかくセラフィムはどうなるんだ？　背中にくっついてるよな…？」

『……今の僕には分からないな。シフトしてからでないとどうとも言えない』

「そうか。…トランザムは？」

『使用可能だ。分かっているとは思うが、第三世代機は使用後の性能低下が大きい』

「知ってる。使いどころを見極めないと…だろ？」

『理解しているならいい』

「あとは、それ以前の機体…Ｏガンダムとかも使えるってことで良いんだよな？」

『もちろん使用できる。エクシア等に比べ性能は低いぞ？』

「別に良い。聞いただけだ」

『そうか。では説明の続きといこう。このＩＳのコアはＧＮドライヴになっている。つまり４６８機目のＩＳだ』

「それってまずいんじゃないのか？」

『君の交友関係を思い出せば理由付けになる』

「俺の？　ちょっと待っててくれ……束さん！？　俺、束さんと面識あんの？」

『そういうことだ。僕は篠ノ乃束に作られたということになっている。そして君は篠ノ乃束の興味がある人間のうちの一人だ』

「結構都合が良いな…」

『そうでなければ僕の存在が不自然になる。それと、君は自由国籍権を持っていて今は日本に所属…ということになっている』

「神様サポートありがたいなぁ。……俺はメインの原作キャラとの関係は無いんだよな？」

『君の記憶だと、篠ノ乃束以外との面識は無いな。篠ノ乃束の話で織斑千冬・一夏、篠ノ乃箒を知っている程度か』

「…そういえば今更なんだが……」

『ん？　どうした？』

「何でティエリアが俺の記憶を知ってるんだ？」

『ああ、そういえばこれは説明していなかったか。原作と関わっている君の記憶は僕にもある。神がやったんだろうな』

「ふーん、原作に関わることだけなんだな？」

『そうだ。それ以外に君の記憶に関するデータは無い。簡単な説明はここまでだな。君から他に聞きたいことはあるのか？』

「…この世界での俺の両親は？」

『そのデータは僕には…いや、すまない。あった。父親は6年前に、母親は2年前に亡くなっている』

「あっちの俺と同じ…か」

『そうなのか…それについては僕からは何も言えない』

「分かってる…わかってるさ……さて、説明も受けたことだし準備を始めるか」

『IS学園に行く準備か？』

「そうだ。それ以外に何がある？」

『いや何も無い。だが、そこのバッグの中に全て入っているのでは？』

「え？　……本当だ。制服以外大体のものは入ってる」

『それも神がやったんだろう。ちなみに制服はそこにかかっているぞ』

「ああ、これか。そうなると……何もすることが無いな…この近くにＩＳを動かせる場所は？」

『検索してみよう……近くに山がある。その山中なら問題ないだろう。君も知ってのとおりＧＮ粒子にはレーダーなどを無効化する作用があるからな』

「…やっぱり便利だなＧＮ粒子。行こうか」

『案内は僕がする』

「人前でか？」

――心配するな。これで良いだろう。

頭の中に声が響いた。

「どういうことだ？　頭の中に声が…」

――プライベートチャンネルだ。その応用だと考えてもらって良い。

――こんな感じか？

――そうだ。それでいい。これなら人前でも問題ない。

――そうだな。

――では早速行くとしよう。

◆

来たのは家から歩いて１０分ほどの山。その山中。

――人がいないのならここらへんで良いだろ？

――上も木で覆われてるしちょうど良いだろう。

――んじゃ、さっそく。

ネックレスを右手で掴む。

「『マイスターズ』起動！」

異世界へ（後書き）

…そういえば、主人公の名前出してませんでしたね。うっかりです。

（オイ！

次回、『ＩＳ起動』

それは、全ての物語の始まり。

ＩＳ起動（前書き）

ガンダァァァム！！！

言いたかっただけです。

では本編へどうぞ。

ＩＳ起動

「『マイスターズ』起動！」

青白い緑色の粒子…オリジナルのＧＮドライヴより生成されるＧＮ粒子が全身の装甲を構築する。

現れたのは、背中にはエクシアなどと比べ大きめなコーン状の物、グレーと白のカラーリングを施された全身装甲の機体『Ｏガンダム』

俺の顔も装甲に包まれて、それでも周りは３６０度見渡せるようになった。

ちなみに視界の隅っこにミニティエリアが居る。

『ふむ、フォーマットと最適化（フッティング）…一次移行（ファースト・シフト）をしていない現状ではＯガンダムが出てきたというわけか』

「いや、ティエリアも知らなかったのかよ！」

『些細なことだ、気にするな。まずは武装の展開をやってみてくれ』

「お前ＡＩだよな？　…まあいいや、了解。武装は何が？」

『ビームガン、ガンダムシールド、それから右肩の後ろにもともとビームサーベルがある』

「サーベルはデフォか。じゃビームガンから」

目の前の画面？　――良く分からないな――に出てきたビームガンの画像。それが手の中にあることをイメージする。

三秒くらいだろうか？　装甲に包まれた手の中になにかが出現した気がした。

そのなにかは、もちろんビームガンであるわけだが。

『遅いな。実戦では使えない』

「仕方ないだろ？　こんなこと初めてなんだからさ」

ちなみに手の中に出てくるイメージは投影だったりする。

『仕方ない、か。試し撃ちをしてみよう。目の前のモニターに的が表示されるから、それを撃つんだ』

「……山の中とはいえ、こんなとこでビーム兵器撃っていいのか？」

『そこは気にしなくて良い、本当にビームは出ないからな。モニターにそう表示するだけだ』

「そんなことまで出来るのか。じゃ、お構いなく」

『はじめるぞ…3・2・1・スタート』

視界に円状の的が出現する。

それに向かってトリガーを引くと、中心より上にそれたところに当たって的が消えた。

すると、今度は違うところに的が出現する。
どうやら、一つ当てるごとに次の的が表示されるらしい。
それに向けて次々とトリガーを引く。

１０枚目を撃ち抜くと、そこで次の的が表示され無くなった。
ちなみに、最後の一つ以外は中心に当てられなかったのが悔しい。

『筋は良いみたいだな』

「神様に頼んだ恩恵だろ？　『身体スペックの向上』を」

『僕はただ力が強くなる方向だと思っていたが…スペックのうちにはそれも入るということか。なら、後は経験しかないな』

「オーライ。じゃ次に行くか」

『次はガンダムシールドを展開してみてくれ』

先ほどと同じように目の前のモニターにシールドの画像が表示される。やっているのはティエリアだろうがな。
これまた先ほどと同じように、しかしこんどは左腕に装備される盾をイメージ。
数秒後、左腕にしっかりとした重さが感じられた。

「成功だな」

『やっぱり遅いが…仕方が無い。まだ初めて一時間と経っていないんだ』

「むしろ一時間以内でここまで出来る俺って…あ、そうだティエリア」

『ん？　なんだ？』

「一次移行（ファースト・シフト）ってどうなってるんだ？」

『すまないが、まだ時間がかかりそうだ。僕はそちらに集中するから、展開（オープン）と収納（クローズ）の練習をしていてくれ』

「ん、りょーかい」

ひたすらビームガンを出してしまって、出してしまってをエンドレス。

一秒くらいでガンを出せるようになったら、次にシールド。

こっちも一秒くらいで出せるようになったところで、ティエリアから声がかかった。

『こちらは完了した。すぐモニターに完了の表示が出るだろうから押してくれ』

それとほぼ同時にモニターの中央、そこに

――――フォーマットと最適化が完了しました。確認ボタンを押してください――――

そう表示された。
すぐに中央の確認ボタンを押す。

『一次移行を実行。『マイスターズ』再起動』

ティエリアがそう言うと、俺の体から装甲が粒子に戻る。
その後、その粒子は再度俺の体に装甲を纏わせた。

『モードＧＮ－００１『エクシア』を選択（セレクト）、再起動完了』

俺の体に纏われた装甲の色はトリコロール。
そして右腕には己の腕ほども長さのある刀身。
そこには『ガンダムエクシア』を纏った俺が居た。

『一次移行・パーソナライズ完了。これでこの機体は本当の意味で君の専用機になったわけだ』

「ティエリア、ご苦労様」

『…僕は自分のやるべきことをしただけだ。感謝されるいわれは無い』

「それでもさ。そうだ、他の機体に変わるタイムラグは？」

『装甲を変更する準備に１０秒ほど時間をもらうことになるが…それが済めば一瞬で変更可能だ』

「わかった、じゃあ早速…『デュナメス』に変更」

『・・・・・・・・・設定完了。モード選択（セレクト）ＧＮ－００２『デュナメス』』

また一瞬装甲が粒子に還り、今度はモスグリーンと白の装甲に包まれる。

右肩にはＧＮスナイパーライフルがマウントされ、マントのようなＧＮフルシールドを装備したデュナメス。

「この初期装備って何か決まりでもあるのか？」

『その機体にとって標準な装備は、装甲の展開と同時に装備されるようになっている。もちろん収納は可能だ』

「そういうこと、了解」

その後は一応第３世代ガンダムの全てになってみて、それぞれある程度動いたところで今日の所の訓練は終わりになった。

ＩＳ起動（後書き）

あ、また主人公の名前出し忘れた…神様がチラッと言っただけ。

というか出すタイミング逃しました。どうしましょう？

多分何とかできるんで、何とかします。

次回、『初戦闘』

主人公、ガンダムになる。

初戦闘（前書き）

この小説での初戦闘シーン！

では、どうぞ

初戦闘

あの次の日は、同じ場所で簡単な訓練をした。

そしてその次の日。
つまり、ＩＳ学園に行く前日。

ピピピピピピピピ…ピッ

自宅の固定電話が鳴った。

「誰が…？　はい、もしもし」

『ああ、初めましてかな？』

「ええと、あなたは？」

『私は織斑千冬。ＩＳ学園で教師をしている者だ』

千冬さんキター！

てか、電話ごしなのに迫力があるんですけどぉ！？

「あ、初めまして。俺は『玖蘭拓神（くらんたくみ）』です」

『間違いないようだな。分かっているとは思うが、君は明日から我がＩＳ学園の生徒だ。それで出来ることなら今日のうち…いや、なるべく早く来てもらいたいのだが…』

「では、今からそちらに向かってもいいですか？」

『そうか、わかった。では門の所で私が待っているので、早く来て欲しい』

「すみません、ありがとうございます。ではまた後ほど」

『ああ、ではな』

プチッ…

めっさ緊張した。とにかく緊張した。

なんて言うんだろう？　覇気？　そんな感じのものが、声だけの電話でもわかった。

コレも身体スペック上昇の効力なのか？　相手のそういうのを感じ取れるっていう。

『今のが、織斑千冬という人物か？』

…急だなティエリア。

「ああ。本人がそう言ってたし、そうだろ」

『なんというか、ＡＩの僕が何か…恐怖に準ずるものを感じたのだが…？』

あはは、千冬さんハンパねぇ。

「気にしたら負けだ。とにかく行くぞ。持ち物はこのバッグと制服で良いんだろうな？」

『…ああ、問題ない。早く行くとしよう』

「だな」

おそくなりましたー
が通用する相手だとは思えないよ…。

三十分ほどタクシーに揺られて…

「ここ…か」

――データには入っていたのだが、実際に来てみるとやはり違うな。

市街地なので念話的な状態のティエリア。
ちなみに、待機状態でもＡＩのティエリアにはそういう視覚など

が感じ取れるらしい。
ふと此方を見ている、本で見覚えのある黒いスーツを纏った女性。
が、此方に近づいてきた。多分織斑先生だろう。

「む？　君が『玖蘭拓神』か？」

「は、はい」

「改めて自己紹介と行こう。私は『織斑千冬』ここの教師をやっている」

「初めまして。『玖蘭拓神』です。よろしくお願いします」

「ああ、よろしくな。では早速だが中に入る。ついてきてくれ」

「わかりました」

俺はそのまま織斑先生について、ＩＳ学園の門をくぐった。

そして連れてこられたのは…

「アリーナ？」

「すまないが君にはこれから模擬戦をやってもらおうと思う。機体はあるのだろう？」

どうして知っているのかが気になる。まあ、そこは神様が何かした。ということにしておこう。

「はい、問題ありませんけど…相手は？」

「連絡はしたから、もうすぐ来ると思うが…「お待たせしました織斑先生」来たか」

ん？　ＩＳのアニメでも聞き覚えの無い声だ。

声のした後ろを向く。

「あら、君が話題の子の片方よね？　私はここの生徒会長『更識楯無』あなたの模擬戦の相手をするわ」

ええ～。だってこの人学園最強でしょ？　というか話題になってたんだ。

俺、いくら超高性能の機体とはいえ初めて使ったのは一昨日なんだけど…やるしかないか

――そういうことだな。

――ティエリア、なぜ俺の心を読んだ？

――いや、そんな感じがしただけだ。

――あっそ。戦闘中のサポートは任せた。

――了解している。

「俺は『玖蘭拓神』です。よろしくお願いします、生徒会長さん」

「ええ、よろしく♪」

うん、今のだけでわかったことがある。
原作の一夏が言ってた通り、空気だけでこの人は人たらしってことがわかったよ。

「話はそこまでにして、そろそろ二人とも準備してくれ」

「了解です、織斑先生」

「わかりました」

織斑先生にせかされ、アリーナの中央付近で向かい合う。
会長がＩＳを展開したのを見て、こちらも『マイスターズ』を起動させた。

「行くぞ『マイスターズ』。モード選択（セレクト）Ｏガンダム」

ちなみに一次移行してからＯガンダムを装備したら、セカンド終盤の実戦配備型になってた。

――まずは小手調べとでも言う気なのか？　明らかに技量はあちらが上だぞ？

――いいのさ、後で本気を出す。エクシアをセブンソード込みで展開する用意をしておいてくれ。

――ふう、了解した。

『『マイスターズ』起動。モード選択ＧＮ－０００『Ｏガンダム』』

粒子がＯガンダムの装甲を構築する。

前のグレーと白ではなく、ファーストガンダムを彷彿とさせるカラーリングで。

装甲の展開と同時に、ビームガンとガンダムシールドも展開させる。

ＩＳとしてこの機体は異形だと思う。

全身装甲は、防御力はあっても機動力を失うだけ。

それはともかくとして、全身の線が細い。

それに大体の場合大きなものを装備されるメインスラスターは、背中のコーン状のだけだ。

現に、織斑先生の表情がかろうじて変化したのが見て取れた。

「あら、なにか面白そうなＩＳじゃない？」

「そうですか？　俺としては露出が多いと目のやり場に困るんですが」

「あら、拓神くんったらえっちい」

「はぁ、おしゃべりはそこまでだ。双方とも準備は良いな？」

あら、織斑先生に軽く呆れられちった。

まあ、露出は戦闘中に意識できるほど余裕は無いと思っていいだろうな。

流石に本気は出してこないとは思うけど、生徒の中で学園最強だ

し気は抜けない。

「問題ありません」

「俺もＯＫです」

「では……初めっ！」

織斑先生の良く通る声で、互いに動き出した。

まず俺は、ビームガン（以下ガンと表記）で会長向けて射撃。

まあ、簡単に回避された。

会長は上に動いたので、俺も地に着いている脚を浮かせ、上空へと飛翔する。

俺の動きが一瞬止まったところで、会長はランスを構えて直線の突進を繰り出してきた。

早く避けすぎても追尾されるだけなので、ギリギリまでその場でガンを撃つが、水のヴェールにガードされ会長には届かない。

そして俺は忘れていた。あのランスの武装の事を。

ズガガガガガガッ！

――げっ、あのガトリングのこと忘れてた！

――君は馬鹿なのか？

――ガンダムシールド（以下シールドと表記）、ＧＮフィールド展開！

――了解！

シールドを構えて、そのシールドの中心からＧＮフィールドを半円形に発生させてガトリングの弾を防御。

しかし、突進を避けることが出来ず、ランスの切っ先がＧＮフィールドにぶち当たる。

目の前には会長の笑み。と、ランスに水が渦巻き、ドリルのようになって――ＧＮフィールドを突破してきた。

「おわっ！？」

ＧＮフィールドを解除。すぐに横に回避したが、かすってシールドエネルギー（以下Ｓ・Ｅと表記）をわずかに持っていかれた。

――Ｓ・Ｅ残量５７８――

視界の隅のＳ・Ｅゲージが減る。

すぐさま此方に背を向けた状態の会長向けて、ガンを撃つ。

しかし、これまた横ロールで軽々と回避される。すぐにガトリングの弾丸が俺を襲う。

「ＧＮフィールド！」

「ふふっ、甘いわよ？」

目の前のガトリングを向けている会長が――

水になって崩れた。

「しまった！　本体は――――ぐぅっ！？」

ＧＮフィールドをエネルギー削減のため、半円形にしたのがあだだった。

後ろに回りこまれて、水でドリルとなったランスの薙ぎ払いを受ける。

今度は結構なＳ・Ｅを持っていかれた。

――――Ｓ・Ｅ残量４０１――――

くそっ、１５０以上持っていかれた！

でも、接近戦なら受けるさ！

ガンを左手に持ち替えて、右手は右肩の後ろの白い円筒形の物を引き抜く。

そしてそれから、粒子の刃を展開させる。ビームサーベル（以下サーベルと表記）

スラスターから粒子を噴出し、会長に接近。サーベルを横に凪ぐ。

でも軽くランスで受け流され、次の一撃も薙ぎ払われる。

やっぱこの人強い！

ちょっ、Ｏガンダムでも2世代ＩＳ並みには性能高いんだけど！？

「アハッ♪」

しかも余裕綽々…

やっぱ俺の技量か。うん、そうだな。

「こうなったら…ＧＮフェザー展開！」

――了解、粒子開放。ＧＮフェザー展開。

背中のコーン状スラスターから、ＧＮ粒子を羽のように大きく広げる。

この状態では粒子を一気に消費するが、機動力と機体制動力が大幅に上がる。以上ティエリアに聞いた話。

「はぁっ！」

再度接近してビームサーベルを、今度は上から振り下ろす。

ランスで逸らされたが、それでも良い。

本命は、左手のガン。

超至近距離でガンをぶっ放す。

またも水のヴェールで防御されるが、いくつかはそれを抜いて会長に被弾させた。

「あらら、食らっちゃった」

「それにしてはえらく余裕綽々じゃないですかっと！」

あまり至近距離に居続けるというのは好ましくないので、ガンを連射しながら距離を取る。

――――Ｓ・Ｅ残量３５７――――

今の交錯で食らわされていたのか…流石としか言えないぞ？

まあ、そろそろあれを使っても良いのかな？

――そろそろチェンジする。準備を

――準備は終わっているから、いつでもいける。

――ナイスだ。

ティエリアとの会話を終えた俺は、右手のサーベルを会長向けて槍のように投げる。

手を離れても、中に残っている粒子で一定時間は刀身は形成されるので当たればＳ・Ｅを削れる。

まあ、案の定ランスで弾かれた。でもそれで良い。

俺はガンでそのサーベルの発振器を撃つ。

会長が驚いたようだが、気にしない。

発振器は中に残った粒子をぶちまけて爆発、煙幕の代わりになる。

――ティエリア、モード選択『エクシア』

『了解。モード選択ＧＮ－００１『エクシア』』

会長が煙幕の中に居るうちに装甲の換装をする。

普通の煙幕だとＩＳのハイパーセンサーの前では無力に等しい。

でもあれは“ＧＮ粒子を含んだ”煙幕。

視覚を妨害できる。…これもまたティエリアに聞いた。

すぐに煙は払われるが、俺の換装は済んでいる。

トリコロールの装甲に、胸部の中央には円形のクリスタル。

右腕には折りたたまれた長大な刀身。

両腰にはＧＮブレイドがロングとショートの一本づつ。
両肩の装甲の後ろにはサーベルの発振器、リアスカートにはビームダガー（以下ダガーと表記）の発振器。

ＧＮ－００１『エクシア』セブンソード

「いままで初期設定だったのかな？」

「違いますよ。これがこの機体の機能です」

機能…で良いんだよな？　というかそうでなければ怪しすぎる。
ま、そんなことはどうでも良いか。
エクシアの力。試させてもらう！

「エクシア、目標を駆逐する！」

初戦闘（後書き）

戦闘の決着は次回で。

そして名前の出し方が雑なのは…本当にスミマセン。
明らかにタイミングを逃してしまいました。

それと、主人公は機体性能と身体スペックはあっても経験無いんで
（笑

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回「決着」

勝利はどちらに…

決着（前書き）

楯無さんとの決着です。

戦闘シーン、大丈夫かな？

では、どうぞ。

決着

「エクシア、目標を駆逐する！」

そういえば俺っていままで

技能　会長＞俺
機体性能　会長＞俺

で戦ってたんだよな…あそこまでガンバった俺に拍手だな。
いや、手加減されてたけども。

「はあぁぁぁっ！」

さっきまでのOガンダムとは世代の違いを見せてやんよ！
体感で分かってるが、見える景色の流れるスピードが明らかに違う。
そのまま会長向けてさらに加速。
ははっ、会長驚いてるな。ただ外見が変わっただけじゃないんでなあ！
ＧＮソード（以下ソード）の刀身を展開。
ランスのガトリングを避けながら、ソードの範囲内に入って、機体を一度左に振ってから右に振りつつソードを振る。
機体重量も乗せた一撃だ。スピードも十分。

ガギィッ！！

重い音を立てて会長はランスでソードを防いだ。

これなら、押し切れる！

「うおおっ！　そんでもって、おまけぇ！」

押し切りながら、右腰からＧＮショートブレイド（以下――ブレイドと表記）を抜き放ち、会長の機体の非固定部位（アンロック・ユニット）である右側のアクア・クリスタルに突き立てる。

水のヴェールで守られていたが、それはＧＮフィールドのようなもの。実体剣であるショートブレイドなら！

思惑通り、水のヴェールを突き破りショートブレイドはアクア・クリスタルに突き刺さる。

引き抜くことはせず、アクア・クリスタルが爆散する前に、ランスを押し切って距離を取る。

そのすぐ後にショートブレイドが突き刺さったアクア・クリスタルは爆散、ショートブレイドは地面に落下して突き刺さった。

「どうです？」

「っ…やるわね。おねーさん、そろそろ本気になろうかしら？」

「やっぱり手加減されてましたか…来てください。俺はあなたの全力と戦いたい」

「それなら、行くわよ？」

茶化したような言い方だが、接近してきている会長の機体の動き

は今までと違う。
全体的に速く、鋭くなっている。

「望むところです！」

GNロングブレイドを左手で左腰から抜く。
そしてソードをライフルモードにして会長向けて撃つ。
さっきまではもう『少しで当たるかも』という感じだったが、いまは『当たらない』までになってしまっている。
その間に接近してきた会長は、ランスでの突きを連発してくる。
左手のロングブレイドでいなしてはいるが、いかんせん技量が違う。
何度も何度もギリギリに迫ってきて俺のS・Eを削っていく。
ソードをソードモードに戻して突きをはなっても、残った左側の水のヴェールでその矛先はずらされ決定打にはならない。

――ティエリア、何とかできないか！？

――やれやれ、今回やっと登場か。

――あ？　なんか言ったか？

――別に何も。コレはなんとも出来ないな、君の技量次第だ。

ちくせう。ティエリアからも見放されたよこんちくしょー

そんな間にも

「ちょっ、激しすぎますよ！」

「あははっ、どうしたの？」

「こんのぉ！」

会長のランスでの猛攻。

本気（マジ）で本気だろコレは！

それなら、と振り下ろした右のソードを振り上げて――

ガキッ！

会長の左手にはいつ展開したのか、蛇腹剣が。

それでソードは押さえられた。

左手だけで何とかするしかねぇのか！

――ティエリア、オーバーブーストいけるか？

――それならトランザムの方が良いと思うが？

――それは本当の奥の手、いまはオーバーブーストだ。

――了解、いつでもいける。合図を。

――オーライ。

「なら、これで！　オーバーブースト！」

『ＧＮドライヴ安全装置解除、オーバーブーストモード』

背中にあるコーン状スラスター周りの３つのツメのようなロックが解除され、ＧＮドライヴの出力が最大まで上がる。

それに同調するように胸の円形クリスタルも強く光る。

「おおおぉぉっ！」

ジジジジィィ

「！？　そんなっ！」

会長の初驚き声ゲット。

理由は右の蛇腹剣にソードが食い込み始めたから。

俺はオーバーブーストで上昇した出力の多くをソードに回して、刀身に纏わせるＧＮ粒子の量を増大させ、切れ味を一気に上げて蛇腹剣を切った。

そのまま押さえの無くなったソードを振り上げる。

会長は下がって回避しようとしてるが

がしっ。

「これなら逃がさない！」

意識が蛇腹剣のほうに向いた隙にロングブレイドを手放し、会長の右腕を掴んで下がらせない。

俺の蛇腹剣を切り裂いて振り上げたソードは、会長の左わき腹の装甲を捕えて一部を破砕させた。

正直このオーバーブーストでの出力を回したソードの威力は剣を切るほどだ。高すぎる。

そのためらいで絶対防御を使わせるチャンスを無くした…傷つけるよりかは良いんだが。

「きゃあっ！」

手首だけでランスを向けられたので、手を放して一度距離を取る。

「以外とカワイイ声出すんですね」

「っ…お、おねーさんをからかっちゃだめでしょ。それに今のでやろうと思えばあなたは勝てたはず」

「一応は本心ですけどね……そうだったんですか？　でもまあ、俺はそろそろS・Eが限界です」

一応ごまかしの言葉を言っておく。一応はごまかされてくれるだろう。

「そういうことにしておくわ…こっちもさっきので限界ね。次の一撃で終わるわよ」

あちらは分からないが、先ほどの攻防でこっちのS・Eはすでに一〇〇を下回ってしまっている。

「なら、これで決めましょう」

「いいわよ。私もそう思ってたし」

ソードの剣先を会長に向ける。

会長もランスをこちらに向けて構える。

一瞬の間――

同時に最大加速で動き出す。
ＧＮドライヴの出力の多くをソードに集中させて、加速していく。

ギャギャギャッ！

ソードとランスとが点でぶつかり合い、互いの先を逸らす。
俺のソードは会長の先ほど装甲を壊した左わき腹に。
会長のランスは俺の右わき腹へ。

ズザッ！――――

『そこまで！　模擬戦終了！　勝者――』

――“玖蘭拓神”！』

俺の勝利を告げる織斑先生の声。
俺は視界の隅のシールドエネルギー残量を確認する。

――S・E残量3――――

ははっ、とんでもなくギリギリじゃねぇか。
俺と会長は抱き合うような格好で静止したままだ。
自分の腹を見てみると、そこにあるランスの穂先は欠けていた。
さっきの衝突で威力が勝る俺のソードがやったんだとおもう。
…それでギリギリ威力が減少して勝ったんだと思うが。

スッ、とランスが量子に変換されて消えた。それと同時に目の前の会長のISの装甲も消える。

「おっと」

体が反応して、会長を不意に抱きとめる。
…うん、お姫様抱っこだね。
ついでにもう戦闘も終わったし、息苦しい感じがするので頭部の装甲だけ解除する。

「あらら、負けちゃった」

「会長が最初から本気なら負けてましたよ」

「それはこっちの台詞でもあるかな…？」

「じゃあ会長、お互い様ってことで」

「そうね…それに私のことは楯無って呼んで」

これが彼女の家で当主が使う名だというのは知っているが、さすがに知っていたらマズイことになる。それに本名は知らない。

「分かりましたよ、楯無さん」

「それでよろしい」

なんだか、この人には織斑先生とは違う意味で抗えない気がする。

「それと…そろそろ下に下りてもらって良いかな？　このままは恥ずかしいよ」

少し頬を朱に染めて訴えてくる会ちょ――楯無さん。

そこで今の体勢を思い出した。

ＩＳスーツ姿の楯無さんを俺がお姫様抱っこしている…

それとＩＳスーツって体型がくっきりわかっちゃうんだよね…本当にこの人スタイル良いよなあ。

「あっ、ごめんなさい」

「……別に嫌な気はしないんだけどね」

楯無さんのつぶやきは、頭部装甲を解除したせいでハイパーセンサーが無く、聞き取れなかった。

そしてこのまま急降下して下りるわけにもいかないので、この体勢のままなるべく早く下りた。

決着（後書き）

ということで勝ったのは拓神でした！

引き分けにしようかとも思ったんですけどね、それだと2人ともども落下っていう…

そしてコレはフラグが立ったのか？
どう見えます？

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回「ＩＳ学園入学」

それは、学園生活の始まり。

ＩＳ学園入学（前書き）

色々と不安な回です

では、どうぞ。

下りるとすぐに織斑先生が近づいてきた。
というか、最後にダブルオーの最終回のパクリみたいな展開になるとは…いや、俺が勝ったけど、引き分けじゃなかったけど。

「ふむ、まさか更識が負けるとはな」

「私もまさか負けるなんて思ってませんでしたよ？　……っ」

一瞬歪んだ楯無さんの表情。

「楯無さん、どうしたんです？」

「ううん、ちょっとね」

左手で最後の一撃を当てた左の脇腹を押さえていた。
まさか…絶対防御抜いちゃった？

「大丈夫ですか！？」

「平気よ平気。ちょっと最後ので、ね。外傷はないから安心なさい」

「玖蘭、本人が大丈夫と言っているんだ、気にすることは無い」

千冬さんにまで言われると、もうなにも言えない。
そうだ、これを聞いておかねば。

「あの織斑先生、今回の模擬戦の意味は？」

「ん？　ああ、テストだ。どちらにせよ入学してもらうことにはなっているが、実力ぐらいは知っておきたい。それで本来なら教師陣のだれかが相手の予定だったんだが、更識が立候補したから模擬戦をやってもらった。というわけだ」

生徒の最強に相手させるなよ…絶対に教師よりも強いだろ楯無さんは。
今回のバトル、あっちに俺の機体の情報が無かったようだから勝てたけど、知っていたら不意をつくこと出来ないだろうしな。
それに広いところで良かった。楯無さんの機体のあの技は正直しんどい。

「あーあ、それにしても負けかあ～。最強の座は譲らなきゃいけないのかな？」

「いえ、技量だったら楯無さんのほうが上ですよ。それにこっちの情報で事前に対策されたら勝てませんでしたよ？　それに――」

「それに？」

「会長って絶対仕事面倒ですよね」

俺がそういうと、楯無さんは笑い始めた。

「ぷっ…あははははっ、ストレート過ぎるよ？　あははっ、いや、その通りなんだけど…」

なぜここまで笑われなきゃいけない？　少しは笑われると思ったけどここまでとは…

ひとしきり笑った楯無さんは、そこで一度姿勢を直す。そして

「ふぅ。さて、じゃあ改めて…玖蘭拓神君、ようこそＩＳ学園へ」

そう、笑顔で言ってきた。

……ハッ、違うぞ！　楯無さんの綺麗な笑顔に見惚れたわけじゃないからな！

――実際はそうだろう？

――ティエリア、テメェ！　心を読むな！

――僕は鎌をかけただけだ。自爆したのは君の方にすぎない。

――あっ…やっぱり畜生テメェ！

――ふふっ、まだ君も甘いな。

畜生、完全にバカにされてる。

一週間くらい無視してくれようかって…出来ないよなあ。ティエリアにはＩＳのサポートしてもらわないといけないし。

「あ、は、はい。よろしくお願いします」

俺はそういって一度頭を下げた。

くそ、ティエリアに言われたせいで絶対顔赤くなってるよ…

「あら？　拓神くんどうかした？　おねーさんに見惚れちゃったかなー？」

「なっ、そ、それは無いですよ！」

「えー、それはそれでおねーさん傷つくなあ」

ちくせう、ペースを乗っ取られた！

ペースジャックか……考えててむなしいから止めよう。

「…更識、玖蘭をからかうのはそこまでにしておけ」

ああ、今は織斑先生が天使に見える――

「もっとも、今の件について玖蘭はその通りだったようだが」

わあ、天使が悪魔に変わったぜ？　…どこのシェ○ルだよ！

「お、織斑先生まで何を！？」

「あら、おねーさん嬉しいな。……じゃあ、織斑先生私はこれで」

散々俺を弄った楯無さんは織斑先生にそう告げると、さっさとアリーナから出て行ってしまう。

うわっ、なにこの空気！？

「さて、改めて私からも歓迎しよう。それと、ほら」

少し苦笑気味の織斑先生から投げ渡されたのは、俺のバッグ。

そういえばさっきは、織斑先生の近くに置いてから戦い始めたんだっけ？

「あ、ありがとうございます」

「では行くぞ、寮を案内する」

「はい」

アリーナの外へと歩き出した織斑先生を追って、俺もアリーナから外へ出た。

◇

楯無ｓｉｄｅ

拓神くんとの模擬戦を終えた私は、ピットの更衣室に戻ってきていた。

（それにしても、前に負けたのっていつだったかしら？）

なにも伊達や酔狂でこの学園最強の称号である生徒会長を名乗っているわけではない。

それにその程度では、ロシアの代表操縦者など任されない。

それでも、彼には負けた。

本気を出しても、負けた。

向こうの機体の情報は何も無かった…それはただの言い訳。

（はあ、悔しいなあ…）

それでも楯無は何か清々しい気持ちになっていた。

本気でやり合って負けた。その事実で。

それと同時に何か違う気持ちも感じていた。

（でも彼、かっこよかったな…）

容姿の方じゃなくて…いや、容姿もそれなりだったけれど。

最後の一撃。お互いに突っ込んだけれど、わざわざまっすぐ突っ込む必要も無かった。

最初にその意思を示したのはこっち。でも、彼にはまだ余力があ

ったはず。
それでも、あれを受けてたった。なにもせずただ一直線に。
もし他のアクションを起こしたら、こっちも対応するつもりだった。というよりむしろそうしてくると思っていた。
それでもただ真っ直ぐに向かってきた。

ふと体を動かしたせいで、ロッカーの扉に左わき腹をぶつけてしまう。

「――――っ…」

ぶつけた痛みではない痛み。
それはさっきの戦闘で受けたダメージだった。
彼には何も無いといったけれど、実際は少し血が出ていた。
むしろ、絶対防御を抜かれてその程度で済んだことを良かったと思うべき。
けれど彼には心配をかけたくないと思った。

（これは…惚れちゃったのかな？　…彼に）

戦闘中は全身装甲のＩＳだったから、表情を見ることは出来なかった。でもきっと真面目な視線で私を見ていただろう。
そう、“私を見ていた”
それを考えると、ドクンと胸が強く脈打つのがわかる。
それに対して自分でも苦笑してしまう。

（何やってるんだろ私、私らしくも無い）

いつしか楯無のその苦笑は、妖艶さを含むものに変化していた。

（玖蘭拓神…君の心、奪うよ。多少強引にでもね）

◇

「君の部屋はここになる」

織斑先生に連れられて寮の中を案内された後、俺の部屋となる場所に案内された。

…なぜかその最中に肉食の動物に狙われたような錯覚があったんだ…いや、本当に狙われたことは無いぞ？

「一人部屋だ、それと…これを渡しておく」

受け取ったのは部屋の鍵。

部屋番号は『１０４５』原作で一夏と箒の部屋が確か……忘れた。

番号なんて覚えてない。
部屋の場所はこの階の隅で、隣の部屋は今は倉庫になっているらしい。
女子と隣の部屋は、どちらにも何かしらの影響があると考えての配置だろう。妥当だ。
…それだとしたら、一夏は良いのか？　まあ、気にしない方向で行こう

「ありがとうございます。あと、質問良いですか？」

「なんだ？」

「トイレはどうすれば…？」

「寮では部屋の中にある。校舎に居るときは、不便だと思うが男性教師用の所を使ってもらうことになるな。そのうち設置工事も完了するだろうからそれまでな」

「分かりました」

「なら、私は仕事に戻る。何かあれば聞きに来ても良い、職員室にいるからな。それと明日については分かっているな？」

「はい、大丈夫です」

「よろしい。ではな」

「はい、また」

ツカツカと歩いていった織斑先生が、視界から消えたところでほ

っと息を吐く。
あの人は一緒に居るだけで威圧感が強い。
世界最強の威厳というヤツか？

◆

翌日、俺は教室（１－１）の自分の席に着いていた。

……うん、いまならすぐ近くに居る一夏の気持ちがすげぇわかる。
好奇心の目線でめっちゃ見られてる。
完全に上○動物園のパンダ状態だ。ああ、昔のね。
それはともかく居ずらい。今すぐにでもここから逃げ出したい。

「全員揃ってますねー。それではＳＨＲ（ショートホームルーム）を始めますよー」

ＩＳ学園入学（後書き）

感想で楯無さんヒロインで良いと思うとも言われたので、楯無さんヒロインで進めていくつもりです。

というか主人公の拓神が狙われました（笑

そしてようやく次回から原作突入です！

厳密に言えば今回の最後の最後からですが（細かいよ！

では、感想・アドバイス等お待ちしていますｍ（＿＿）ｍ

次回、「クラスメイトは全員女」

それは、原作の始まり。

お知らせ

さっそくですが
この小説の主人公の名前を『奏拓神』から『玖蘭(くらん)拓神』に変えようと思います。

理由は、単純に名字なのに名前っぽいと友達からいわれたり自分でもそう思ったりなので。

…ネーミングセンス無いんですよ。

今のうちならまだ修正しても大丈夫かな?と思ったので変えさせてもらいます。

ちなみに奏という名字になったのは、エンジェルビーツを見てたから…で分かりますかね?

すっごく後悔してます。

では、これで失礼します。

本編の方は今日中には次話を上げるつもりです。

では。m(_ _)m

クラスメイトは全員女！？（前書き）

原作突入！

漆黒の方ではシャル以外のキャラとの絡みが少なかったので、改善できたら良いと思ってます。

では、どうぞ。

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

今自己紹介したうちのクラスの副担任山田真耶先生。
本当に身長低いな…それに胸デカッ！　体のバランス崩壊してないか？

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

そして変な緊張感に包まれ、静かな教室。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちなみに俺はこの副担任に対してかわいそうだな～とかは考えたりしない。
というか、今は余計なことをしたくは無い。

理由は簡単。

ご存知の通り？　ここに居る俺と一夏以外、クラスメイトは全員女子だから。

（ちょっ、本当にナニコレ！…珍〇景じゃないぞ？　本当にここに居て良いのかすら不安になるくらいなんですけど！？）

真ん中の席。その先頭でもう一人の男子、『織斑一夏』は誰かに視線を送って…うなだれた。

「織斑くん。織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ！？」

うん、原作どおりだな…ぷっ、ゴメン笑いがっ！
俺が笑いを堪えていると、一夏の自己紹介が始まった。

「えー、えっと織斑一夏です。よろしくお願いします」

いやーな沈黙。
クラス中の女子が『もっとなにか喋ってよ』の目線を一夏に送ってる。

「……」

一夏、横に目線送ってもどうせ取り合ってもらえないから。

「……以上です」

がたたっ

教室のそこらで聞こえるずっこける音。
ギャグパートだね、わかるよ。その証拠にすぐさま元通りになったから。

そして後ろを向いている一夏の背後から忍び寄る影。

パァンッ！

…それって本当に出席簿から出て良い音なのか？　誰か答えてくれっ！！

「げぇっ、関羽！？」

パァンッ！

はい、２撃目～
それよりもやっぱり一夏ってバカなんだな。そんなことといえば叩かれるって分かってるだろうに…
しかも音がデカイから、女子が若干引いてるんだけど…

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

いま一夏を叩いたのは、皆さんご存知『織斑千冬』先生。
…うん、もう呂布とかで良いと思うんだ。

ギロッ

睨まれた……考えることを読む力でもあるのかあの人は…怖い。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いぇっ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

それは脅迫って言うと思う今日この頃の俺だ。

つーかこの人に逆らう人が居るとは思えない。逆らったら最後…ご愁傷様です。

しかもそれが簡単に想像できてしまうことが余計に怖い。

「キャーーー！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

耳ガッ、耳がぁ！！　…なんてことは無いが、うるさい。

そして三番目、どこから来ようと関係ない。むしろここには外国から来てるやつもいるから。

あと最後のヤツ、じゃあ死ね。

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

恐らく後者だと思います。

「きゃあああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

ご覧の通りなんで。
つーかここはなんなんだ？　ドMの集まりか何かなのか！？

「で？　満足に挨拶もできんのか、お前は」

「いや、千冬姉俺は――」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ」

はい、3発目。一夏の脳細胞は1万5千個死滅ー。

「……はい、織斑先生」

そろそろ一夏が不憫に思えてきた。

「え……？　織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
「それじゃあ世界で二人だけＩＳを使えるって言うのも何か関係が？」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

最後のヤツはともかく、もちろんもう一人は俺だ。

すでに世間には公表されているらしい。俺がこっちに来た後だがな。

「さて、もう一人の男子。自己紹介をしろ」

「はい」

指名されちったぜい。

やべっ、準備してなかった！　みんな見てるんだニャー。

「えー、玖蘭拓神（くらんたくみ）です。趣味は読書とモノ作り。あとは…専用機持ちです。一年間よろしくお願いします」

専用機持ちのところは、自分のネックレスを持ちながら言った。

よかった。何も言われなかった。

「まあ、いいだろう。これでＳＨＲは終了だ。諸君らにはこれからＩＳの基本動作を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

だから、それは指導という名の脅迫でしょ…理不尽だ。

◆

「ふむ……」

授業の一時間目でわかったこと。
どうやらＩＳについての基本的なこと…経験以外、知識については理解できた。というか、なぜか分かる。

――ティエリア、これは…

――あの神の仕業…いや、恩恵だろう。

――だよな。

やっぱりか、ありがたいな。
さてと、一夏に接触しなきゃな。女子の中で唯一の男子が他に居ると安心感がある。

「えっと、織斑一夏…でいいんだよな？」

「ああ、えっと、玖蘭拓神か。俺のことは一夏でいいぜ」

「んじゃ、俺のことも拓神でいい」

「わかった。それにしても助かったよ。他に男子が居てくれてさ」

「それは俺もだ。男子一人は耐えられない」

うんうん、と頷きあう俺ら。
そのあと、がしっと握手をしたところで。

「…ちょっといいか？」

「え？」

「えっと、篠ノ乃さん。だよね？」

「ああ、そうだ。一夏を借りてもいいか？」

「だとよ、行ってきてきていいぞ？」

「お、おう。じゃあな拓神」

篠ノ乃さんは、一夏を連れて廊下に出た。
俺はすることがなくなったので、自分の机に戻る。
ちなみに俺の席の隣はのほほんさんこと『布仏本音』。
ぶかぶかの制服を着ていて、手は完全に制服の袖の中。

「よろしくな。えっと…のほほんさん？」

「わぁ～あだ名で呼んでもらえた～。よろしくねえ～…たっくん」

なつかしいあだ名で呼ばれたな。
前世での小さい頃のあだ名だぞ、それ。

「おう、よろしく」

さて、のほほんさんとの挨拶を済ませたところでっと。

――ティエリア、これからどうすれば良いと思う？

――突然で意味がわからないのだが？

――ああ、使う機体だよ。

――？　それならガンダムで良いじゃないか。

――違う。俺が使うのはガンダムでも、どこの世代にするのかってこと。

――それなら、第三世代ガンダムじゃないのか？

――でも強すぎるんだよ、あれ。普通に剣を剣で切るってふざけてるのかってくらいに。

――良いだろう？　手を抜いていると足元をすくわれるぞ。

――それでもだ。全力を見せたくない。

――それなら第二世代ガンダムを使うと良い。

――第二世代か…アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２は使えるな？

――問題ない。

――なら、次からそれで。装備はプロトＧＮソードとシールド、ビームライフルをあらかじめ用意してくれ。

――了解した。次からＩＳを装備するときはアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２でいいな？

――そうだ。任せたぞティエリア。

さて、これでこれからの準備も出来たな…あ、聞き忘れた

――なあ、ＧＮセファーとかってどうなってるんだ？

――？　展開は可能だ。その機体に装備できるなら、だが。

――たしかあれって、コーン型スラスターの機体になら装備できたよな？

――セファーラジエル第四形態または第五形態と同じ装備方法なら、できるな。

――なら、アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２のスラスターをスリースラスタータイプからコーンスラスタータイプに換装する用意と、ＧＮセファーのプロトＧＮビットを第四形態でＴＹＰＥ－Ｆ２に装備する用意を整えておいてくれ。

――わかった。調整に加えプロトビットのカラーリングの方も変えておこう。

――ああ、これもよろしくな。

――了解している。

これで全部よし。

さて、学園生活を楽しませてもらうとしようか！

クラスメイトは全員女！？（後書き）

お知らせの最後で昨日中には投稿するといいましたが、日をまたいでしまいました。スミマセンｍ（＿＿）ｍ

ガンダムＯＯについて知らない人にとって最後のティエリアとの会話は意味不明かもしれませんが…それもスミマセン。

それと、途中で主人公の口調が土御門化しましたけど、変わるのは仕様なので気にしないでください。

それと彼のＩＳは、ティエリアのおかげでガンダムＯＯの設定にそっていれば、結構自由に改造がききます。やるのはティエリアですが。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回、「クラスメイトは全員女子！？　２」
それは、学園生活最初の一コマ。

主人公設定（前書き）

設定発表です！

ネタバレは無い…ようにしたつもりです。

４月１３日更新

主人公設定

主人公
名前「玖蘭拓神（くらんたくみ）」

黒髪、黒目の日本人。
容姿の近いイメージとしては黒髪黒目ですこしクールな感じになった「夢喰いメリー」の夢路。

転生者で、神から力をもらっている。

本人は知らないが、神と人の間に出来た子供。（半神）
力として身体スペックの上昇というものをもらったが、それは神にかけられていた半神としてのリミッターをそこまで外したに過ぎない。
神がリミッターを全て外すと、神の力の一部（半分ほど）を使用できる。
寿命も今はリミッターで普通の人と同じ年の取り方をするが、本来なら数千年ほど生きることが出来る。

現在は自分のことを知っていて、リミッターも解除済み。

専用ＩＳ
『マイスターズ』

神からもらったＩＳ。
ＡＩとして『ティアリア・アーデ』の人格を持たされている。

『ガンダムＯＯ』の機体になることが出来、改造もかなり自由にきく。
今は第三世代ガンダムまでしか使えないが、今後第四世代・第五世代機と使えるようになる予定。

現在使用した機体（またはその予定）

『Ｏガンダム』（実戦配備型も）

『ガンダムエクシア』

『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』
（ティエリアにＧＮセファーとのドッキングが出来るように改造の要請がしてある）

『セファーアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』
背のスラスターをコーンスラスターに変更、ＧＮセファーとドッキングしてプロトＧＮビットを６基搭載しているアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２。ビットはセファーラジエル第四形態と同じ搭載方法。

『ガンダムデュナメス』

『ガンダムキュリオス』

『ガンダムヴァーチェ』
（今後は第三世代型を率先して使う予定）

主人公設定（後書き）

こんな感じです。

何かありましたら、感想に書いてください。m（＿＿）m

さきほどの授業の時、原作どおり一夏が

「全部分かりません」

発言をしてくれたおかげで笑いを堪えるのがさっきより大変だった。

それと山田先生が一部暴走した以外では、特に問題は無かったと思う。

そして二時間目の休み時間。

俺と一夏は男子同士ということで早速意気投合。勉強が分かっていたＩＳについての勉強を教えてくれ、とのことなので今の授業についての復習を一夏にしていた。

「だから、これは……どういうことだ？」

「今言ったろ？　それはここのこと。それに――――『ちょっと、よろしくて？』あ、はい？」

「へ？」

そういえば今の時間帯だったっけセシリアが一夏のとこに来るのって。

「訊いてます？　お返事は？」

「なんのようだ？」

「あ、ああ。訊いてるけど…どういう用件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

まず、オルコッ党の皆さんゴメンナサイ。

今のセシリア、俺の中で高感度はマイナス…すげぇマイナスだニャー。

原作読んでてもむかついたからな、ここのセシリアは。

デレとの差が激しすぎるぞセシリア！（某上級大尉風に）

「悪いけど、俺はもともとこんな感じだからさ」

「悪いな、俺。君の事知らないし」

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

どこまで自分大好きだよ。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、なに？」

がたたっ！

さっきの時と同じようにギャグパートだニャー。

はい、もう良いです。ご苦労様でしたー。

「あ、あ、あ…」

「『あ』？」

セシリア、プルプル震えてるんですけど。

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん」

「一夏、代表候補生って今見た教科書に書いてあっただろうが！」

「え？　あ、ああ。本当だ…えっといわゆるエリートってやつか？」

「そう！　エリートなのですわ！」

セシリア元気にふっかーつ。感情の起伏が激しいなあ…

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

せーの

「「そうか、それはラッキーだ（棒読み）」」

「お二人とも……馬鹿にしていますの？」

「俺は馬鹿にしてるＺＥ！」

「あっ、あなたねぇ……大体、あなた方はＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。あなた達二人だけが唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが…」

「ん？　教科書の内容くらいは完璧に理解してるぞ？　それに俺たちがここに居るのは“保護する”っていう意味合いが強いからな。そのくらい理解できるだろ」

「えっ、そうなのか拓神！？」

「っ――人の気に障るようなことばかり……ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

「いや、別にお前に優しくしてもらわなくても」

怒りのボルテージ上昇って所か？　さらに震えてるんだが。

「まあ、わたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから？　ＩＳについて分からないところがあれば、泣いて頼まれたら教えてあげてもよくってよ？」

「わざわざお前に頼むなら一夏は俺のとこに来るよ」

「まあ、そうだな。でも入試ってあれか？　ＩＳ動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あ、それ俺も倒したぞ教官」

一夏の場合山田先生が相手であっちが自爆しただけだからな。

俺なんか、なんであんなギリギリの戦いをしなきゃいけないんだよ…てかまず教官じゃねぇし。生徒会長だし。

「俺もだな。危なかったぜ？　残りＳ・Ｅは一桁だったからな」

「は……？」

本当だよコンチクショー。

まったく、自分でもよく勝てたと思う。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではっつーオチだろ？」

「だよな」

「つ、つまり、わたくしだけではないと…？」

「いや、知らないけど」

「そうなんじゃないのか？　女子ならお前だけなんだろ？　こっちは俺たちしか居ないんだし」

「あなた！　あなたも教官を倒したっていうの！？」

「うん、まあ、たぶん」

「俺は確実にな」

「あなたはともかく、多分！？　多分ってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン

チャイムだ。

「タイムアップだ。オルコット」

「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって

！？」

いや、来られても困るんだぜい？

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する――ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

一夏が頭から？マークをだしてるのを気にしたら負けだ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力推移うぃ測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更が無いからそのつもりで」

あー、一夏が推薦されるのは当たり前として俺もだよな…

「はい！　織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「私は玖蘭くんを推薦します！」

「あ、それもいいわね。はい！　私も玖蘭君くんを推薦します！」

「では候補者は織斑一夏と玖蘭拓神……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

あ、一夏が立ち上がった。
どうせこの後は決闘の流れになるからなあ…別に原作のセシリアみたいに押し付ければいいんだし。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他には居ないのか？　いないなら織斑か玖蘭、どちらかになるが」

「はい、織斑先生。俺も一夏を推薦しまーす」

「なっ、拓神てめぇ！　じゃ、じゃあ俺は拓神を推薦します！　ってかちょっと待ってください！　俺はそんなのやりまー―」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権は無い。選ばれた以上は覚悟をしろ」

バンッ！

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

一夏がなにか言おうとしたのを遮って、セシリアが机をたたきながら立ち上がった。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

実際に聞くと結構イライラするもんだなこれ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……誰が猿だコノヤロウ。じゃあお前会長に勝ってみろ、無理だから。

イラつく…ふぅ、俺、耐えるんだニャー。

「いいですか！？　クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

弱いやつほどよく吼えるってか？

そろそろ限界だぜい。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で――――」

ブチッ

ごめん、もう無理だ。一夏もそうみたいだからな。

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「後進的って…笑わせんな。ならイギリスだって同程度だろうが」

言っちゃった、テヘ☆…うん、キモイね、ゴメン。

「なっ……！？」

おーおー、セシリア顔真っ赤だなあ。

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「はあっ…先に俺らの祖国を侮辱したのあんただろ」

「っ――――決闘ですわ！」

またバンッと机をたたくセシリア…手、痛そうだな。

「おう。いいぜ、四の五の言うより分かりやすい」

「受けた。やってやんよ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

雑魚は吼えてれば良いと思う、うん。

「んじゃ、ハンデはどのくらい付けるか？」

「あら、早速お願いかしら？」

「違う。俺と一夏がどのくらいハンデをつければ良いのか、だ」

クラスから、ドッと爆笑が起こった。

「く、玖蘭くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「二人は確かにＩＳを使えるかも知れないけど、それは言いすぎよ」

「ったく、それは男がＩＳを使えない場合の話だろ？　俺と一夏は使えてるんだ。つまり、お前らと同等ってことだよ」

俺がそういうと、理解したのか笑いは収まる。

確かに今は女の方が強い。それはＩＳが既存の兵器を上回る圧倒的な戦闘能力を有しているから。

でもそれは男がＩＳに乗れないからであって、乗れるのなら対等ということ…簡単だぜい。

「そ、それでもオルコットさんは代表候補生なんだよ？」

女子のうちの誰かがそう言った。

「なら、お互いにハンデは無しだ。それで良いよな？　一夏も」

「あ、ああ。それでいい」

「わたくしもそれで構いませんわ！」

と、俺に隣ののほほんさんが話しかけてきた

「ねえねえたっくん。今からでもハンデもらったほうがいいんじゃ

ないのかなあ？」

「伊達に専用機を持ってるわけじゃないさ。……それに知ってるだろ？　俺は会長に勝ったんだ、あの程度に負けるワケが無い」

後半はのほほんさんだけに聞こえる音量で話す。コレは原作でのほほんさんが会長とつながりがあるのを知っていたからそうした。

すると、のほほんさんは一瞬だけ少し目を見開く。

「……どうして？　どうして知ってるっておもったの～？」

「秘密だよ。それに負けたらあの人に申し訳ないだろ」

さすがに転生者などと言って信じてもらえるとは思えないんだにゃー。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と玖蘭、オルコットは各自準備をしておくように。それでは授業を始める」

さて、一週間後が楽しみになった…フラグは立てないようにしないと。

なぜかって？　そうじゃなきゃ原作どおりの一夏の面白い展開にならないじゃん。

クラスメイトは全員女！？　2（後書き）

無いとは思いますが、オルコッ党の方で不快にかんじたらスミマセン。

戦闘はなるべく早く…次々回くらいに入れられるかな？

感想・アドバイス等お待ちしていますｍ（＿＿）ｍ

次回「拓神の……」
それは、とある人の暴走。

拓神の……（前書き）

前話投稿してからずっと書いてました。

では、どうぞ

拓神の……

放課後。
一夏は机に頭から煙を出しながら伏せていたから、放置してきた。
俺は自室に帰る途中だ。女子からの視線が痛い。接触してくるわけでもなく、ただ見てるから。

ガチャッ

「あ、お帰りなさい♪」

バタンッ

疲れたな今日は。
なぜ楯無さんが部屋居る幻覚を見なきゃいけないんだ？
まあ、所詮幻覚だ。さっさと休もう。

ガチャッ

「急に閉めるなんて、酷いなあ君は……来ちゃった♪」

畜生。幻覚でも嘘でも無かった。
現実だよ、これが。
何しに来たんだ！？

「はあ、なんですかその彼氏の家に突然来た彼女みたいなノリは？
それよりどうやって入ったんですか」

部屋に入り、ベッドに腰掛けてから話を切り出す。
なぜか隣に楯無さんが座ったのは…気にしない方向で。

「悪くないわね……鍵は生徒会長権限で開けちゃった♪」

なにが悪くないんだ！？
それに開けちゃった。って…プライバシーのカケラも無いよ…

「で？　何しに来たんですか？」

「私が生徒会長ってのは知ってるわよね。それで生徒会のメンバーは会長が選べるの」

知ってるというか今言ってたし『生徒会長権限』って。
そしてなんだこの嫌な予感しかしない空気は……

「そういうわけで、玖蘭拓神くん。君を生徒会副会長に任命します！」

やっぱりかぁぁぁぁ！

「拒否権は…？」

「無いよ？　生徒会長命令だから」

ですよねー…はぁっ。
一応、抗議の目線を隣に送って――

「あはっ♪」

分かってた、うん。抵抗が無意味なことくらい分かってたよ…

「分かりましたよ。やれば良いんでしょう？」

「うん、もの分かりの良い子はおねーさん好きだな」

「そうですか。てかそれなら放送で呼び出せばいいんじゃないんですか？」

「もう、つれないなあ……もう一つあるわよ。どうして私と本音が繋がってるって知ってるの？」

こっちが本命だろうなあ…というかのほほんさん、見かけによらず行動が早い。

本当に余計なこと言ったよな…俺。

「企業秘密です…企業所属じゃないですけど、とにかく秘密です」

「え～、教えてくれないの？」

「秘密ですって」

「どうしても？」

「どうしても」

俺の部屋に来たわけはコレだろうなあ、逃げられなくするってい

う。
話すとなると、転生についても話さなきゃならないもんな。
てか言っても信じてもらえるかどうか不安なんだけど…
「なら、教えてもらおうかな～」
ちょっ、なに手をワキワキさせてるんですか！？
「は？　というか何をするつもり――」
「こうする♪」
「えっ、ちょっ、くすぐりっ、あはははは…だめ、止めてくださっ、あはははっ――」
「ほら、早く喋って楽になろうよ」
「しゃっ、喋りませんよっ、くっ、くはははは――っう、だめっ、らめぇ――！」

「はあっ、はあっ、はあっ…何するんですか！」

「拓神くんが喋らないのがいけないんだよ？　で、どうなの？」

「だから喋らな――『もう一回、行っとく？』…分かりました。喋ります」

無理。もう無理。精神が崩壊する。喉痛い。

そういうことで仕方なく喋ることにする。

まあ、どうせ考えておいた嘘だし。本当のことなんか説明できるわけない。

「えっと、簡単に言うと前に日本の裏側のことを調べたんですよ。そこで更識の名前を見ました。それと布仏家との関係やらも見ました…これで良いですか？　現・更識家当主さん」

「あら、そこまで知ってるんだ。おねーさん驚き」

楯無さんがどこからともなく取り出した扇子。

それをバッと開くと、そこには達筆な文字で『驚愕』の二文字。

「でも、本当は違うでしょう？」

「う、嘘じゃありませんよ」

「そう。ま、いつか本当を教えてもらうよ♪」

だめだ。これはまたいつか問い詰められる。

「ん～じゃあ、今日のところはコレで帰らせてもらうよ♪」

ほっ、と心の中でつい息を漏らす。

次回が無ければ良いのに…

楯無さんは立ち上がってドアの方に歩いていく。

一応見送ろうと俺もベッドから立ち上がると、

「あ、そうだ。まだ後一つ」

そういって俺のほうに戻ってきた。

「まだあったんですか？　今度は何を――――んっ！？」

一回のまばたきで次に目を開けると、ドアップの楯無さんの顔。

それと、唇にはなにか柔らかい感触。

……って、はあ！？

すっと俺から離れた楯無さん。

「え、ちょっ、な、な、なにをっ…！？」

キスされた！？　一体なぜに！？

「君の心、いつか私が奪うよ。……じゃあね」

顔を赤くした楯無さんは、それだけ早口で言うとさっさと部屋から出て行ってしまう。

「……えっと…？」

お、俺はいつあの人にフラグを立てた？
そんな記憶は無いぞ。お姫様抱っこ…じゃ理由が軽すぎ。
それともなんだ、あの勝負に勝ったからなのか？
……あー、わかんねぇ！！
それにファーストキス奪われたし…これはいいや。
ともかく俺はどうすれば良いんだよぉ！

寝てしまおうとベッドに飛び込んでうつぶせのまま布団をかぶる。
って……寝れるわけ無いだろ！

……第一、俺は転生者なんだ。
本来ならこの世界には存在しない人物。
『俺』と酷似した魂を持っている人物は居ても『俺』は居ない。

逆に言おう。
俺はこの世界に居てはいけない人物。
ここが本当の『インフィニット・ストラトス』という物語のパラレルワールドだとしても。
俺が幸せになる権利は俺と酷似した魂を持つやつから奪ったもの。
奪った権利なんか…使うべきじゃない。本来の俺の権利じゃない。
今の俺にある権利は『前に進む』これだけ。未来（さき）を目指すだけ。
むしろこれだけあれば十分だ。この世界で生きていけるなら……

『拓神……』

俺が思考の渦にはまっている中、ティエリアの外部音声だけが、部屋に反響した。

◆

数日後の放課後

この前のことのせいで、最近寝不足。

授業の事など、まったく記憶に無い。ただ意識を保って前を見ていただけ。

休み時間はもっぱら寝て、授業が始まる前にのほほん…めんどい、本音に起こしてもらってる。

「はあっ…俺にどうしろってんだ」

低っくいテンションのまま部屋のドアを開ける。
今日もあの人は居ないよな……？

ガチャッ

「お帰りなさい。ご飯にする？　お風呂にする？　それとも私？」

バガンッ！

ドアを、出るはずの無い音を立てながら閉めた俺は悪くない。
くそっ、まだ寝不足なのか…？
楯無（裸エプロン）の幻覚を見るなんて…つーか服装がなんでだよ。溜まってるのか？

改めて、部屋のドアを開ける。

「お帰りなさい。私にする？　私にする？　それともわ・た・し？」

「選択肢がないです。…楯無さんを選んだらどうなるんです？」

「わたしとえっちぃことが出来るよ♪」

「そうですか…帰ってください。というか、一人にしてください。
今は人と話す気分じゃないんで」

「……それって私のせい？」

「ええ、そうですよ。だから早く出てって――ぐうっ…なんです

か？」

制服から着替えることもせずにベッドで横になった俺の腹の上に、楯無さんが馬乗りになった。

「それは、おねーさんに相談してもどうしようもないこと？」

「……そうです、俺の問題なので」

「想い人の悩みを解決はおろか聞くこともできないのは、つらいなあ」

「……そういえば、俺のどこがいいんですか？　この前突然あんなことをされたんですから、それを聞く権利くらいありますよね？」

「うふふっ、それは乙女の秘密…って言いたいけど、教えてあげる。といっても私もわかんないんだよね。この前の入学前の模擬戦、あれが終わったあとで好きになってたとしか言えないから」

「まったく不確定な想いですね。……それで俺はファーストキス奪われたんですか」

「あら、想いなんて不安定なものよ？　それに私もファーストキスだったわよ？」

「男と女のファーストキスは重さが違いますから、大切にすべきなんじゃないんですか？」

「なら、そのファーストキスをあげた代わりに君の悩みを教えてくれない？」

「…卑怯ですよ、それは。どの道こんなこと誰にも話す気はありません」

それよりか話せるわけが無いんだ。

「なら、私はどうすればいいの？」

「一人にさせ『ダメ』…さいですか」

「確かに君のことはまだあんまり知らないよ？　けど、少なくとも君の力にはなりたい…」

その体を俺のほうに倒して顔を近づけてくる楯無さん。

今更なんだけど、その服装…もはや服装と言っていいのかもわからないのは刺激強いなあ。

「ならまずは、その服装を何とかして欲しいなって思うんですけど」

「話を逸らさないで？　私はどうしたら良いの？　どうしたら君の力になれる？」

「……ふぅ、本当どうしたら良いんでしょうね」

「君の話を聞けば良いの？　君のために動けば良いの？　私の体を許せば良いの？」

「あなたみたいな人が言うセリフじゃないですよ、それは…俺みたいに純情なヤツは本気にしますから」

「本気にしてもらっても構わないわ」

まったく、この人は何がしたいのかわからない。
俺を自分のものにしたいのか、どうしたいのか…

「楯無さん、あなたは何がしたいんですか？」

「あら、この前言ったはずよ？　『君の心を奪う』って。でも…」

「でも？」

「まずはカラダから奪っちゃおうかな」

「なっ！？」

完全に自分の体を俺に乗せてきた楯無さん。顔は俺の首に。

「っ！？　や、止めてください！」

そして首筋を甘噛みされる。
くっ、理性を持って行かれ…

ガッ！

「きゃっ！」

「はあっ、はあっ、……すいません。外の風にでも当たってきます」

楯無さんの体を自分から引き剥がすと、俺は部屋から出て行った。

…逃げたんだ、自分から。自分に向けられた気持ちから。

拓神の……（後書き）

楯無さんの暴走

転生者って初めのころは、色々やって楽しんだりしてるのに、うちのは早速悩んでます。

あるぇー？　なんでこうなった？

では、感想・アドバイス等お願いしますm（＿＿）m

次回『深紅の正義の女神と蒼い雫』
それは、プライドのぶつかり合い。

拓神の気持ち（前書き）

短いです。

そして次回は前話の次回予告どおりになります。

では、どうぞ

楯無さんを押しのけて部屋から出た俺は、屋上に上がってきた。
さっき言った通り、風に当たるため。

――ティエリア、ＧＮ粒子の散布は装甲を展開しなくても可能か？

――可能だ。散布するか？

――ああ、やってくれ。

ネックレストップから、青白く淡い緑色の色の粒子が放出されて屋上中を覆う。
ここの監視カメラ等の通信は無線でメインコンピュータへと送られると聞いたから、ＧＮ粒子を撒けば監視カメラに俺は写らない。
正確には記録に残らない。

そして誰も居ないことを確認してから、ティエリアに話しかける。

「なあ、ティエリア。俺はどうしたら良いんだ？」

『君が何で悩んでいるのかは知らない、僕は心が読めるわけじゃないからな。ただ君をサポートするのが僕の役目だ』

「さっきの話、聞いてたんだろ？」

『……ああ』

「なら分かるだろ」

『更識楯無の想いを受け入れて良いのかどうか。ということか？』

「ああ、その通りだ」

『残念だが、それについて僕からは何も言えないな』

「どうして？」

『君がどういう風に考えているのか、僕には分からない。だけれど、最後に決めるのは君だ。彼女に転生者ということを教えるのか、教えないのか、他にも選択肢は多く存在する。その中から選び取るのが君だろう』

「ははっ、何も言い返せないな…」

『君の決めたことなら、僕は否定しない。それが僕だ』

「結局は自分で決めろってことかよ」

『…そうなる』

「……」

『……』

ヒュウゥゥ…と、風の音だけがこの場を支配する。

その中で、俺は口を開いた。

「……俺はさ、多分寂しいんだよ。前世でも今でも両親は居ない…まあ、前世ではそのぶん良い友達は居たけど、友達は友達。肉親とは違う絆だ。結局さ、失うのが怖いんだと思う。大切な人を作って、それを失ってしまうのが…な」

『そのための力が僕だろう？　君が君とその周りの世界を守るための』

「まあ、そうなんだけどな。でもそれに第一、俺があの人が好きなのかどうか確信できてない。あっちは好意を持ってるけど……俺は分からない」

『なら、それでいいんじゃないか？』

「え？」

『まだ分からないのなら、分かるまで待てばいい。そしてその間にどうすれば良いのかを考えればいいじゃないか』

「……確かに、それが一番良いのかもな」

『それに、僕に言えるのはここまでだ。後は自分で考えるんだ、どうすればいいのかを』

「ありがとうティエリア。解決できた」

『それは彼女に言うべきことだろう？　それに気づかせてくれた彼女に』

「そうだな。……ＧＮ粒子の散布中止していいぞ」

『了解』

辺りを舞っていた緑の粒子が消えた。

◆

さて、部屋に帰ろう。

部屋に戻った俺の目に最初に入ったのは、

「寝ちゃってるし」

さっきまで俺が横になっていたベッドで寝ている楯無さんだった。
幸せそうに寝息を立てている。…服装はさっきのまま。
楯無さんに布団をしっかり掛け直してから、どうするか考えた。
でも幸いなことに、ここは二人部屋なのをひとりで使ってるから、
空いているほうのベッドに俺は横になれた。

「おやすみ、楯無さん」

翌朝、なぜか俺の方のベッドに楯無さんが入り込んでいて朝から
騒いでたのは言うまでも無い。

拓神の気持ち（後書き）

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

改めて次回『深紅の正義の女神と蒼い雫』

深紅の正義の女神と蒼雫（前書き）

不安が残る戦闘シーン…大丈夫だと思います。

では、どうぞ

深紅の正義の女神と蒼雫

あれから数日、週は明け月曜日。
つまり、セシリアとの戦いの日。

決闘の方式は勝ち抜き戦になった。
まず一夏対セシリア
次に勝った方対俺

俺達はピットに居るのだが…一夏と箒の間に変な空気が流れている。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしれないんだけど」

「そうか。気のせいだろう」

数日前から仲が悪くなっていたけど、もうそれは無いみたいだにゃー。

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目　を　そ　ら　す　な」

話しかけるに話しかけられないんだぜい。

「し、仕方が無いだろう。お前のＩＳが無かったのだから」

「まあ、そうだけど――じゃない！　知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

ちなみに俺が一夏に教えようとしたら、黒いオーラを纏った箒さんに却下された。

「……」

「目　を　そ　ら　す　な　っ」

ちなみに一夏の白式はまだ届いてない。

そろそろ来る頃だと思うんだけどなー。

……おい、なぜ話を止めた一夏。

空気がさらに悪くなってんぞ？

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

はい、先生。3回も言う必要は無いと思います。
ピットのドアが開いて中に駆け込んできたのはおなじみの副担任山田先生。

「どうしたんですか？」

「ああ、玖蘭くん。え、えっと織斑くんは…居ますね」

かなりあせってるようだ。
理由は知っているので何も言わない。

「え、えっとですね、来ました！　織斑くんの専用ＩＳ！」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

その山田先生の後ろから織斑先生登場。
一夏はいまだにポカンとしてる…織斑先生に頭を叩かれすぎたのか？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ一夏」

「え、えっと？」

「お前のＩＳが来たんだよ」

まだ惚けていやがる。

「「「「早く！」」」」

俺と織斑先生、山田先生、箒の声がハモって一夏を急かす。

ごごんっ、と重い音を立てながら斜めに開くピットの搬入口。

その向こう側には

――――『白』が居た。

コレが白式…真っ白だな。良い意味で。

「これが……」

「はい！　織斑くんの専用ＩＳ『白式（びゃくしき）』です！」

一夏はその後、織斑先生に指示され急いで『白式』を装備した。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

やっぱり織斑先生ってブラコンなのか？

「玖蘭、何か言いたげだな？」

「い、いえっ、なんでもないです。はい」

禁句だな。直接言ったら殺される。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ、ああ。……勝って来い」

一夏はそれに頷いて応えると、俺こんどは俺に意識を向けた。
それがわかった俺は、こっちから話を切り出す。

「負けんなよ？」

「もちろんだ」

「次の試合で戦うのは俺とお前だ…勝て」

「分かってる」

結果は俺には分かってるのにな……なんかやるせないぞこれ。

◆

結果

原作どおり一夏はセシリアに負けた。

三十分近く逃げ回って、一次移行を済ませ、ワンオフ・アビリティーである『零落白夜（れいらくびゃくや）』を発動させて……Ｓ・Ｅを使い切って負けた。

「馬鹿だな」

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

ティリン！　一夏が「馬鹿者」から「大馬鹿者」にレベルアップした！

…うん、どうでも良いや。

「さて、先ほども言ったが時間に限りがある。玖蘭、早く行け」

「了解です」

リニアカタパルトの近くで、ＩＳを起動させる

「行くぞ『マイスターズ』」

『『マイスターズ』起動、モード選択（セレクト）ＧＮＹ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』』

ＧＮ粒子が俺の体に装甲を構築していく。
今までとはまるで違う深紅の装甲。違うのは頭部装甲のマスクとデュアル・アイ、Ｖ字アンテナの先だけ。
それと同時に右腕にはプロトＧＮソード、左腕にはＧＮシールド、左手にＧＮビームライフルが装備される。

「…行きます」

誰に言うわけでもなくそうつぶやく。
ピットのリニアカタパルトに足を乗せ、前傾姿勢に。
射出と同時、グッと相殺し切れなかったＧが俺の体に掛かる。

深紅の正義の女神が、アリーナに飛び出した。

◆

深紅の機体がアリーナに出ると同時、一夏の戦いで喧騒に包まれていたアリーナは不気味なほどに静まる。

理由は簡単、全身装甲なだけでも異常なのだ。しかしそれをさらに際立たせるような深紅のカラーリング。

その名である『アストレア』。『正義の女神』を意味するその名とは正反対に位置するような印象をもたらす機体。

「よぉ、待たせたな。オルコット」

「っ――――あら、逃げずに来ましたのね」

一夏との戦闘で失ったエネルギーなどを補給して戻ってきたセシリアはその雰囲気に飲まれかけ、冷や汗を流しているようだが気にすることではない。

今のアイツは『敵』だ。そして戦闘は既に始まっている。

――――戦闘待機状態のＩＳを確認。操縦者セシリア・オルコット・ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――――

ハイパーセンサーに表示される敵の情報。

一度だけ読み流して、そのウィンドウを消す。

うつむいている頭部を上げ、そのデュアル・アイでセシリアを捕える。

ブルー・ティアーズ、イギリスの第三世代ＩＳ。四枚の特徴的なフィンアーマーを背に従え、それを纏っているセシリアの手には大型ＢＴライフル《スターライトｍｋ？》が握られている。

――ティエリア、両膝のハードポイントにピストルの展開を頼む。

――了解した、ＧＮピストル展開。

両膝の外側に一瞬だけ量子的な空間の揺らぎが出来たと同時に、そこから出たＧＮ粒子がピストルの本体とホルスターを構築して装備される。

「こっちの準備は終わりだ。いつでも来い、セシリア・オルコット」

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認――

「わかりましたわ」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填――

「では……早速ですみませんが、お別れですわ！」

キュイン！

というライフルからＢＴレーザーの発射された音。
左腕のシールドをその射線に持っていって、ガード。Ｓ・Ｅの減少は無し。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

それ、さっきも言ってたけど恥ずかしくないのか？　人の事言えないけど。

すぐにＢＴライフルからのレーザーが襲い掛かってくる。
それをただ回避。逃げられないものはシールドでガード。

「その程度か！」

「まだですわ！　ブルー・ティアーズ！」

セシリアの背のフィン状のパーツが分離、独立機動兵装――いわゆるビットとかファングとかのこと――として此方に向かってくる。
セシリアの機体のこの兵器の名称はブルー・ティアーズ。機体名もブルー・ティアーズ……うん、ややこしいね。

「っと、ほいさっと、よっ」

四基のビットが放ってくるレーザーの隙間に自分をねじ込むようにして回避していく。
セシリアはこのビットを操作するのに集中力が必要だから、コイ

ツらで攻撃してきてるときは他の攻撃は来ないと考えて良い。

「ど、どうしてあたりませんの！？」

機体性能に差があるのは確かだが、その前にあせりすぎだ。もっと冷静に操作したほうがいい。ビットが無駄な動きをしてる。

「ほらほら！　最初の威勢はどこ行った！」

俺はまだ一回も攻撃をしてない。出来ないじゃなくてしてない。

「さ、そろそろ終わらせるぜ？」

「なにをおっしゃってるのですか！」

ビームの雨をかいくぐり、右手に右のホルスターからピストルを引き抜く。

ＩＳのハイパーセンサーは３６０。を視認できる。わざわざ後ろを向かなくてもそう意識すれば見える。

俺の隙を突こうと背後に回りこんだビット向けて、右手のピストルを撃つ……まず一基。

その攻撃で出来た隙を突いてきたビットの攻撃を避けて、左手のビームライフルで撃つ……二基。

上下から同時に責めてきた二基を、両腕のＧＮバルカンで蜂の巣にして……全四基撃墜。

「なっ！？　そんな…わたくしのブルーティアーズが！？」

予測しやすい動き方で助かったぜい。

相手の死角と隙を突いてこようとばかりするから、逆にそれを利用して誘導して撃墜…後半は作業だった。

「ビットの動きが読みやすい。だから、一夏程度に動きを読まれる…そのくらいわかんだろ？」

ｏｒｚになってる一夏が脳内に浮かんだ…ワロスｗ

「くっ！」

残ったＢＴライフル《スターライトｍｋ？》のＢＴレーザーによる射撃。

ＢＴ兵器を高い適合率で運用すれば偏向射撃…曲がるＢＴレーザーを撃てるが、今のセシリアは出来ない。そのただ直進してくるのを避けるくらい簡単だ。なんならシールドで防御してても良い。

右手のピストルをホルスターに戻し、最初から装備されているプロトＧＮソードの刀身を展開する。

エクシアのＧＮソードと違ってトンファーのようにして前方に長い刀身が展開される、コレにはライフルの機能はない。

右手にせり出したプロトＧＮソードのグリップを握って、セシリアに接近する。

「まだですわ！　まだブルー・ティアーズは残ってますわ！」

腰の装甲の一部が動いたと思ったら、それは残り二基の実弾（ミサイル）仕様

のブルー・ティアーズ。そこから二つの弾頭が発射された。

「この程度！」

左手のビームライフルを片方のミサイル向けて投げる。それはビームライフルと共に爆散した。

セシリアはまさか武器を投げてくるとは思っていなかったようで、唖然としてる。

残った片方のミサイル。それを左手で左足のホルスターからピストルを出して、撃って破壊。…よし、対処完了！

「もう終わりか？　だったら終わらせるぞ！」

左手のピストルをホルスターに仕舞って、腰からビームサーベルを引き抜く。

右手のプロトＧＮソード、左手のビームサーベルの二刀流になった俺はセシリアのレーザーをかいくぐってに接近する。

「そぉら！」

こういうときは、瞬時加速（イグニッション・ブースト）が出来ないのが残念だ。

そんなことは置いといて、至近距離まで接近した俺は左手のビームサーベルでＢＴライフル《スターライトｍｋ？》の銃身を切り裂く。

そして右手のプロトＧＮソードで、左腰にある実弾仕様のブルー・ティアーズをセシリアのＳ・Ｅを削りつつ切って破壊。

セシリアとすれ違った格好になった俺は、体を左回しに回転させて右腰のブルー・ティアーズもビームサーベルで破壊。そのままセシリアを切る。

「これで……トドメ！」

「きゃああっ！」

そして、その回転の勢いのまま右手のプロトＧＮソードで……突き刺す！

ビーッ！

『試合終了。勝者――玖蘭拓神』

深紅の正義の女神と蒼雫（後書き）

自分で戦闘シーン書いててあれ？となりましたが…大丈夫ですよね？

何かありましたら報告お願いします。

感想・アドバイス等お待ちしていますｍ（＿＿）ｍ

次回『クラス代表決定！』
それは、押し付けとも言う

クラス代表決定！（前書き）

昼前に投稿できました！

それでは、どうぞ。

クラス代表決定！

ピットに戻った俺を迎えたのは、案の定一夏だった。

「お前すげえな。何で避けられるんだ？」

「経験の差。それより、むしろたった二回のＩＳ起動であそこまで出来たお前がすごい」

ＩＳを解除して、から話を切り返す。

これは本音。なんでたった2回しか…間違えて起動させたのを加えれば3回だが、それだけで油断しているとはいえ代表候補にあそこまで肉薄できるのはもはや才能の域だ。

「そ、そうか？」

「お前が照れてもムカツクだけだからやめろ」

「ヒデェ！」

うん、一夏って弄りやすいし、弄って楽しいっていう一石二鳥なんだぜい。

「さて、もういいよな？」

「なにがだ？」

「部屋に帰って良いのかってこと。もう終わったんだろ？」

「いいんじゃないのか？　なんだったら千冬姉に――」

バシンッ！

「学園では織斑先生と呼べ」

デッデッデ、ドーデドー、ドーデドー…

一夏の頭を叩きながらダースベイダーのテーマで織斑先生登場。

「ああ、もう帰って良い。むしろ早く帰れ、時間が押している」

「了解でーす」

さ、楯無さんが居ないことを祈って自室に戻るか。

◆

結果

「この世界に神は居ない…」

いや、居たけど。実際に一回会ってるけど！
何でまた楯無さんが居るんだ！　しかもベッドに寝転んで！　今回は普通に制服なのが唯一の救いだけど！

「あ、おかえりー。って何言ってるの？」

「何でまた居るんですか？　ここは楯無さんの部屋じゃないですよ」

「いいじゃない、あなたに会いに来たんだし」

あーくそっ、感情をストレートにぶつけてくるんじゃねえ！

「あー、さいですか」

「もう、ほんとにつれないなあ」

俺は、楯無さんの寝転んでいるベッドの隅っこに腰掛けた。

「って、抱きつかないでくださいよ！」

なぜかすぐさま後ろから抱きつかれたぜい。
服越しでも背中に二つの柔らかい感触が…！

「それで？　あの悩みは解決した？」

俺の肩越しに顔を出してくる楯無さん。
ちょっ、余計に背中の感触がっ！
コレについては真面目に話をさせろ！

「ええ、おかげさまで。解決できましたよ」

「そっか、なら良かった」

「ありがとうございます」

「へ？　なにが？」

「……なんとなくです」

「あら、そう？　別に嫌な気はしないから良いけど」

この件については本当に感謝してますよ、楯無さん。

「で？　そろそろ離れてくれないんですか？」

「んー、嫌」

で、さらに抱きつかれました。抜け出せないぜ！

「あら、嫌だった？」

「……ノーコメントで」

「んふふ、どうしたの？」

ドSだぁぁぁ！

分かってはいたけど、この人ドSだ！

「ほら、おねーさんに言ってみなさい？」

「……胸の感触が心地良いです」

「あは♪　拓神くん、えっちぃ」

「聞いたのは楯無さんですよ……」

あー、もう。本当にペースを乱される！

「本当にえっちぃこと、する？」

「しません。俺の理性を壊そうとしないで離れてください」

いろいろと確信犯な行動が多いんだよこの人……

「むー、いけず」

「なんとでも言ってください。手は出しませんから」

「いけず、へたれ、えっち、それに――」

「わざわざ探してまで言うな！」

俺のライフ（心の）はもうゼロだ！

「敬語、なくなってるわよ？」

「あっ、うっかり……」

「じゃあ、生徒会長命令！　私に対して敬語禁止！」

「なんつーことに権限使ってるんですか！」

「敬語禁止だよ？　じゃあ、罰ゲームね♪」

は？　何を言ってるんだこの人は。

「えい！」

「は？――――げふっ！？」

答：後ろに引き倒されました。
おかげで肺の中の酸素を強制排出することになったんだぜい。

「げほっ、げほっ…なにを――――」

「んふふ、命令違反をするごとに私が近づいて行っちゃうぞ」

引き倒された＝楯無さんは俺の上。
俺の上＋近づいてくる＝唇を奪われる。
なんなんだよ…この計算式は……

「お、俺の純情を奪うつもりですか――――あっ」

口調ってすぐには治らないものなんだが…

「はいダメー。んー、後二回くらいでくっついちゃうな～」

「仕方ない。……そろそろどいてくれ、楯無」

「よし、合格！　ご褒美にキスを――――」

「やめい！　されないために敬語なくしたのにされてたまるか！」

「えー、おねーさん残念」

この後も散々騒いだ挙句、寝るときには居なかったはずの楯無が起きたら布団の中に潜り込んでいるというおかしい日常（いつも）を送ることになった。

◇

「はい、ということで一組のクラス代表は織斑くんに決定しました！　一つながりでいいですね！」

え？　勝ったのは俺だって？　面倒じゃん、ただでさえ副会長とかやらされてるのに。

「はい、先生」

「織斑くん、なんですか？」

「どうして俺がクラス代表なんですか？　負けましたよ？」

そんなこと決まってるだろ。

「俺がパスしたからだ。そんでもって」

「わたくしも辞退したからですわ！」

妙に熱っぽい視線を一夏に向けるセシリア。

よし、俺へのフラグは回避できた。

「それで、まあ、わたくしも大人げなかったことを反省しまして、“一夏さん”にクラス代表を譲ることにいたしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧、クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの」

そして一夏にフラグが立った。

よし、原作どおりだ！

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく世界で唯一男子が居るクラスなんだからどっちか持ち上げないとねー」

「あー、でも私は玖蘭君のほうがよかったかも」

「私達は貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で２度美味しいね織斑くんは」

ザマァｗ一夏売られたｗ

そして三人目、あからさまに残念そうにするな、俺は絶対やらないから。

「なっ、そんなのって！？」

「抵抗するな一夏。敗者は勝者に従え」

「うぅ……」

うんうん、本当にこの言葉を作った人に感謝だな……あるぇ？
俺楯無さんに勝ったはずなのに従わされてる気がする……まあ、
あの人だもんな。

バン！

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

おっと、話が進んでたみたいだ。
それにしても箒、もうちょっと殺気を仕舞ってくれると嬉しいんだぜい。
それと、このクラスでは立ち上がるときに机を叩くのは絶対なのか？

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ乃さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！　頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

「え、箒ってランクＣなのか？」

はあ、一夏がまた余計なことを……

パンッ

手を叩いた音が教室に響く。
叩いたのは――――

「あのなあ……」

俺だ。

「お前ら、本当に一夏のためにって思ってるのか？」

「あ、当たり前だ！」

「そうですわ！」

「なら、もっとも効率の良い方法を考えろ。どっちか片方じゃなくてオルコットは遠距離、篠ノ乃は近距離でそれぞれやった方が一夏のためだ」

「そ、それは……」

「ま、まあ…そうですわね…」

このくらいで良いか。

流石に争いが醜すぎるんだにゃー。

「座れ馬鹿共」

わお、急に辛辣だな織斑先生。

バシンッ！

「その得意げな顔は何だ。やめろ」

原作細かいところまで憶えてないな…確か一夏が馬鹿なこと考えたんだっけな。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたら平等にひよっこだ」

ゴミってのは流石に言いすぎな気もするけど、それが織斑先生だぜい。

「それにいまのは玖蘭が正しい。お前ら二人は自分の意見を相手に

押し付けようとしているだけだ、もう少し考えて行動しろ。わかったか？」

「「はい……」」

「分かればいい」

やった、織斑先生に肯定された！

やっぱり弟想いの姉なんだよな、織斑先生は。

「玖蘭、得意げになってまた何か失礼なことを考えていないか？」

「そ、そんなことはありません！　はい！」

「……まあいい。では、クラス代表は織斑一夏。異存は無いな？」

はーいと、一夏以外が一団となって返事をする。

こうして、うちのクラス代表は一夏に決定した。

クラス代表決定！（後書き）

ちなみに、拓神が帰ったら楯無さんが部屋に居るのはデフォです。

まだ引越しはしてきてませんが、ほぼ毎日居ます。（笑

では、感想・アドバイス等お待ちしてますｍ（＿＿）ｍ

次回『転校生は（一夏の）セカンド幼なじみ』

それは、一夏ラバーズの増員。

転校生はセカンド幼馴染（前書き）

思うところまで進みませんでしたが、きりがよかったので投稿です。

日をまたがなくてよかった～

では、どうぞ

「これより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、玖蘭、オルコット。試しに飛んで見せろ」

四月も下旬。

俺がこっちの世界に転生してきてから、もうすぐで一ヶ月になろうとしている。

（もう一ヶ月か……）

この新しい世界・環境でそれなりに楽しめている……楯無さんについては保留だが。

「どうした玖蘭、早く展開しろ」

「あ、すいません」

――なにを惚けていた？

――ああ、ティエリア。いや、もうすぐでこっちに転生してきて一ヶ月だな、って。

――そうだな。時間が過ぎるのは早いものだ…早く機体を展開しよう。怒られたくは無いだろう？

――ああ、そうだったな。…『マイスターズ』起動。

『『マイスターズ』起動。選択（セレクト）ＧＮ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』』

普通なら、その展開されることを意識したりして装甲を展開させるが、俺についてはティエリアがやってくれる。

……ＩＳにあると言われてる深層心理と対話ができて、理解しあえればこんな感じに出来るのだろうか？　出来たら良いと思うけど……ダブルオーライザーの意識共有空間ならできるのか？

まあ、そんなことはさておき。いつも通りネックレストップからＧＮ粒子が放出されて、それが俺の体に装甲を創る。

機体は前回と同じくアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２。深紅の機体だ。

展開にかかる時間は――大体０．３秒くらい。

ＩＳはフッティングを完了させると、その登録操縦者の身にアクセサリーとなって待機する。

俺だったらネックレストップ、セシリアは左耳のイヤーカフス、一夏は……右手首になぜか防具であるガンレット。

俺が意識を現実世界にしっかりと引き戻したときには、一夏の『白式』も展開が終わっていた。

「よし、飛べ」

織斑先生に言われ、セシリアに続くように上昇する。
俺のイメージとしては、ＧＮ粒子で浮き上がる感じ。
それからかなり出遅れて、しかも俺たちと比べのろのろとした速度で、一夏が俺とセシリアの居る高度まで上がってくる。

「何をやっている。玖蘭の機体はともかくブルー・ティアーズと白式では、スペックは白式のほうが上だぞ」

そして、いつも通り厳しい織斑先生。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分にあった方法を探すのが建設的でしてよ」

「十人十色ってわけだ。ＯＫ？」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？　反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「賢明だな。一夏の頭じゃ一割理解できればいいほうだ」

「お前ってたまにとことん酷いこと言うよな…オブラートに包むとか無いのか？」

「無いな…その方が楽しいから」

「コノヤロウ！」

やっぱり一夏弄りは止められない止まらないんだぜい。

報告として原作どおり一夏に惚れたセシリアは、このごろ毎日のように一夏の訓練に付き合っている。

原作との違いといえば、俺が言ったあの言葉をしっかり理解してくれているようで、箒とセシリアがそれぞれの分野で一夏の訓練をしてる。

え、俺？　一夏の模擬戦相手だぞ。…いじめてるだけだけど。

「あの、一夏さん、よろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。そのときは二人きりで――」

「一夏！　いつまでそんなところに居る！　早く降りて来い！」

コアネットワークの通信に介入して、セシリアの台詞を遮った箒。下…ここは上空二〇〇メートル。地上で山田先生のインカムを奪った箒がそれに向かって怒鳴ってる。

ちなみにＧＮ粒子は、コアネットワークの通信の妨害は出来ないようだ。ただしこれは通常濃度の場合で、高濃度の粒子空間を形成した場合どうなるかは今のところ不明。ティエリアもやってみなければ分からないとのこと。……高濃度粒子空間を作ったら、妨害以前に意識共有空間を生み出しそうだけどな。

「織斑、玖蘭、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目

標は地上から十センチだ」

「了解です。では、お先に」

まずセシリアが降下。危なげなく完全停止を成功させる。

「んじゃ、次は俺が行くわ」

上体を入れ替え、頭を下にして降下。

ティエリアから限界点突破の注意が出されたところで、体勢を元に戻して粒子を噴射、停止する。

「んー、十一センチか。惜しいな」

そして最後は一夏。

地上向けて加速して――

ギュンッ――――――――――ズドォォンッ！！！

うん、墜落したね。

地面にクレーター作って。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を空けてどうする」

「……すみません」

その後、一夏の身を心配して来たセシリアに箒が突っかかって――

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっていろ」

織斑先生に怒られるという…最近毎日だよな。見てて飽きないからいいんだけど。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

兄妹漫才ご馳走様です。

一夏は右手を前に突き出して、その手首を左手で掴む。

その右手の中から光の奔流があふれ出して、光が収まると武装――雪片弐型――を形成(かたな)した。

「遅い。〇．五秒で出せるようになれ」

はい、一夏の一週間の訓練結果は一瞬で蹴られましたとさ。

「次、玖蘭。展開しろ」

「了解」

今のアストレアに武装は展開していない。
ある武装は、腕の装甲内にあるＧＮバルカンだけだ。

展開するのは、プロトＧＮソード。
右腕のハードポイントに装備されるそれが、もとよりそこにあるようにイメージを固める。
ＧＮ粒子が量子的な揺らめきの中から放出され、それがプロトＧＮソードを構築した。ここまで〇．六秒。
これはティエリアの補助無しで、今の俺の最速。
補助…というかティエリアに言って展開してもらうと展開が〇．一秒で終わる。ということで、いつもはもっぱらティエリアに展開してもらってる。

「後一歩、と言ったところか。お前は〇．三秒で出せるようになれ」

「分かりました」

さーて、またオープンクローズ・エンドレスでもやりますか。
これはネーミングそのままで、展開と収納をひたすらに繰り返す…初展開のときからやってるやつだにゃー。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げて、腕を横に突き出す。一夏のように光の奔流を出すことなく、一瞬で光から武装――スターライトｍｋ？――が構築された――――ってちょ！

「流石だな代表候補生。――――ただしそのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

そうだそうだ！　今銃身が俺のほう向けて展開されてんだよ！

しかも展開と同時にマガジンはセットされて、セシリアの視線一つで安全装置（セーフティー）は外れるから余計にたちが悪い。

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――――」

「直せ。いいな？」

セシリアを一睨みで制圧した織斑先生。良い兵士が育成されそうだ。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あっ、はっ、はいっ」

何を考えていたのかは知らないが、焦るセシリア…以外とレアな光景？

スターライトｍｋ？を収納（クローズ）して、近接用の武装…確かインターセ

プターだったっけ？　を展開（オープン）させようとするセシリア。

――が、展開させようとしている右手の中で光がまとまらず漂っているだけ。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！　《インターセプター》！」

セシリアは、かなーりヤケクソ気味に武器名を叫んだ。すると光はまとまって武器が構成された。

コレは初心者用の武装展開方法で、プライドが高く代表候補生でもあるセシリアにとっては屈辱的なんだろうな～と、他人事の俺。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！　ですから、問題ありませんわ！」

「ほう、先の戦闘では初心者である織斑にも懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

俺の場合、全武装を破壊してやったけどな。

理由？　プライドを砕いてやりたかったからだけど？

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

土を探してる一夏に話しかける。

「よっ」

「ああ、拓神。手伝ってくれ――」

「がんばれ」

思いっきり笑顔で言ってやる。

いやー、やっぱり楽しいね。一夏弄り。

あ、そういえば明日か。鈴がここに来るのは。

転校生はセカンド幼馴染（後書き）

ということで、次回は鈴が登場する予定です！

楯無さん、また暴走させてしまおうか…（クフフフ…

では、感想・アドバイス等お待ちしていますm（＿＿）m

次回「一夏のセカンド幼馴染」

鈍感な馬鹿は死ねば良いと思う（ｂｙ拓神）

一夏のセカンド幼馴染（前書き）

昼前までに…出来ることなら深夜には投稿しておきたかったんですが、まさかの寝落ち……

でもまあ、気を取り直して。どうぞ

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表就任おめでとう！」

女子の誰かがそう言ったと同時、ぱん、ぱんっとクラッカーが一夏向けて乱射される。

今は夕食後の自由時間。場所は食堂。一組のメンバーは全員揃っていて、それぞれ飲み物を手に盛り上がっている。

壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれたデカイ紙。

実際のところ、パーティという名目で騒ぎたいんだと思う。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

おい、さっきから「ほんとほんと』とだけ言ってるお前、二組だろ。何でここに居るんだよ――気にしないけど。

正直なところ、紛れ込んでるクラス外のメンバーも多々居る。だって明らかにクラスのメンバー以上の人数が食堂に居るからな。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と玖蘭拓

神君に特別インタビューをしに来ました～！」

女子一堂がオー、と盛り上がる。今のどこに盛り上がる要素があったのかは不明。

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部部長やってまーす。はいこれ名刺」

渡された名刺の名前を見る。画数多い名前だなぁ…書くのに一苦労するのは間違い無しだぜい？

そして、何で学生なのに名刺を持ってるのかは気にしちゃいけないんだ。

「ではまず織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

一夏にボイスレコーダーを押し付けるように向けた。

「え、えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

このセンパイが、何を望んでるのか分からなくなってきたぞ？

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「じゃあ、まあ適当に捏造しておくから良いとして」

結局捏造!?　取材の意味は!?

「じゃあ次、玖蘭君！　何か一言！」

ああ、やっぱり俺にも来るんだ。

んー、どうしようか…中二発言しても大丈夫だよね♪

「戦闘中の俺に触れるな！　…とかどうです？」

「おお、いいね～！　捏造のしがいがあるよ！」

だーかーらー、捏造するなよ！

…いや、俺のこの発言は捏造してほしいけど。

「はい次、セシリアちゃん！」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言ってるが、すぐにコメントできる位置に居たのは気のせいか？

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したのかというと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

ナイスですセンパイ、コイツはノリだすと終わらないんで。

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑くんに惚れたからってことにしておこう」

「なっ、な、ななっ……！？」

図星で真っ赤になるセシリア。というか今の発言は心でも読んだのか？

そしてセシリア、分かりやすすぎる。

「何を馬鹿なことを」

唐変朴（いちか）再登場。

「そ、そうかなー？」

「そ、そうですわ！　何をもって馬鹿としているのかしら！？　だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず三人で並んで。写真取るから」

「えっ？」

その「えっ？」は「本当に？」のなのか？　それとも「俺が入るから」なのか？

「注目の専用機持ちだからねー。あ、こうしてこうして」

センパイに手を引かれて、三人の手が重なる。

一夏を中心に向かって左がセシリア、右が俺だ。

「よし、それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え、えっと…？」

「…７４．３７５！」

「玖蘭君正解～！」

うん、身体スペック上昇はこういうところでも出るんだよね。

パシャッと切られるシャッター。

――それと同時、その場の全員がシャッターに納まった。

「なんで全員入ってるんだ？」

「なんつー行動力…」

一瞬、みんなの影がブレたからな…すげえスピードだぜい。

その後、結局十時を回る頃まで『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は続いた。

……こういうときの女子のパワーってすごいのな。

◆

「ただいま」

「お帰りなさい」

うん、いつも通りだ。いつも通り楯無が部屋に居る。
俺もいつも通り、楯無の寝転んでいるベッドに腰掛ける。

「ほんと、何で毎日ここに居るんだ？」

「分かってるでしょ？　君に愛に来てるの」

「あいって漢字が違うよな？」

「あら、そうだった？」

楽しげにケラケラと笑う楯無。
この間のアレ以降、敬語は使ってない。というか、使ったらまた押し倒されるなり何なりされる。

「で、私が居るのに、他の女の子と遊んできたんだ～？」

「まだその気持ちは受け取ってないよ」

「気づいてて放置してるんだ。ヒドーい」

「第一、自分の気持ちが分かってないんだ。他人の気持ちは受け入れられない」

「それなら、最初に言ったはずよ？　『君の心、いつか私が奪う』って……もう、恥ずかしいんだから言わせないでよ」

「俺は言わせてない。それに言われる方も恥ずかしいからな？」

「ま、それでも……気づかせてあげるだけだよっ♪」

「良くそんなことを恥ずかしげも無く――――んむっ！？」

すっと俺の目の前に回りこんだ楯無に唇を奪われた――――ってまたか！

そしてそのままベッドに押し倒される。

「――――ぷはっ……君の心を奪うために、私はどんなことだってするよ」

何度でもね。と付け足した楯無。

今、その顔は超至近距離。かろうじて触れない程度。

そして見つめてくる二つの瞳。そしてそれは……俺を、俺だけを求めてる。

「俺の純情、奪わないでくれよ…」

「何度も言ったよ？　君の心を奪うって」

「ほんと、どうして俺？」

「わからなかった。でも、今は…魂が惹かれてるって言うのかな、そう、そんな感じ」

「…重くないか？」

「女の気持ちは重いのよ？」

「さいですか…まあ、とにかく離れてくれ」

「え？　なんで？」

「とぼけるな…そして自分の服装とかを改めて見てみろ」

楯無の今の服装＝下着にワイシャツのみ。

「えっちぃなあ、拓神は」

「原因はそっちだ。…まったく、自覚を持て。色々と」

「自覚ならあるわよ。ただ自重してないだけ…君の前限定だけど」

「なら自重しろ。その気持ちは嬉しいけど、まだ受け取れない」

「ちぇー、いくじなし。据え膳食わぬは男の恥だよ？」

「自分が好きかどうかも分からない女を抱くわけにはいかないんだ」

「ま、今はまだ良いよ。いつか必ず……けどね」

一部聞き取れなかったが、そう言った楯無は俺の上からどいた。

「で、なぜに手を離さないんだ？」

「せめて一緒に寝よ？」

ったく……はぁ。

「……仕方ない」

「やった♪」

起こしかけた体を元に戻して、普通にベッドに寝転ぶ。

その俺の右腕には、楯無がくっついた。制服のままだけど…まあいいだろ、もう一着あるし。

その後、色々な原因で寝つけなかったのと、朝については……言わなくても分かるだろ？

◆

「織斑くん、玖蘭くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

翌朝、眠気と戦っている俺と席に着いた一夏にクラスメイトが話しかけてきた。

「転校生？　今の時期に？」

「ああ、知ってる。中国からのだろ？」

知ってるってのは、もちろん原作でだ。

「そうそう、なんでも中国の代表候補生なんだって」

「ふーん」

とういうか、各国の代表候補生の情報って代表候補の間でも公開されて無いのか？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐことのものでもあるまい」

箒、今まで自分の席にいたのにいつの間に一夏のそばに来た？

「ああ、たしか二組に転入してくるって話だったぞ？」

この程度なら知ってても怪しまれないんだぜい。

「へえ、どんなやつだんだろうな」

答：お前のよく知ってる女子です。

「む……気になるのか？」

「ん？　ああ、少しは」

「ふん……」

素直じゃないなー、箒は。

……ここまで向けられてる好意に気づかない一夏も一夏なんだが。

「大体、今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？　来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！　そうですわ一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さん、玖蘭さんだけなのですから」

よかった…一夏の事ばかり気にして俺のこと忘れられてるかと思った…

あ、そういえば。

――なあ、ティエリア。俺の原作に関する知識はお前と共有してるんだよな？

――久々に出番か…ああ、その通りだ。クラス対抗戦で介入してくる無人機についても分かっている。

――わかってるならオーケーだ。当日は索敵を頼むぞ。

――了解した。

さて、どうするか…アリーナの観客席からアリーナのシールドを破壊するのは色々と危険だよな。ということはアリーナの外で観戦か。

場所ならいくらでも空いてるだろ。なんなら楯無に頼んでも良いし。

それと、俺も訓練しとかないといけないよな…機体性能に頼ってばかりじゃそのうち負ける。

これは……楯無に頼むか。嬉々として受けてくれそうだしな。

他には……神の言ってた『バグ』。それが起きるのか、起きないのか。どんな影響を与えるのか…これればかりは分からない。

「織斑くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってくるクラスは一組と四組だけだから、余裕だよ」

ああ、また考えてて時間が過ぎてた。

ちなみにフリーパスというのはクラス対抗戦一位のクラスに配られる優勝賞品で、学食デザート半年間無料券だ。

さて、原作通りだとそろそろかな？

「――その情報、古いよ」

来たか。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

教室の入り口に出てきた人影、一夏が反応した。

「鈴？　……お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生。凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏のセカンド幼馴染（後書き）

サブタイトルで言ってるのに結局最後の最後にだけ登場した鈴…ゴメン。

感想・アドバイスお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回「中国の代表候補生」
それは、新たな火種。

中国の代表候補生（前書き）

これ以降、更新速度がガクンと落ちます。

理由は、春休みが終わってしまうので＾＾；

では、どうぞ

中国の代表候補生

「そうよ、中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

一夏の方を見て、ふっと笑みを見せた鈴。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

はあ、まった余計なことを…

「んなっ……！？　何てこと言うのよ、アンタは！」

さて、俺は席に戻るか。鈴の背後に鬼が見えたからな。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！

織斑先生の一撃。

うん、今日も良い快音だ。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

圧倒的な力、これこそが織斑先生！

はあ、なんでこんな馬鹿なこと考えてんだろ。

「す、すみません……」

織斑先生にビビッてそこからどいた鈴。

「また後で来るからね！　逃げないでよ、一夏！」

そんな台詞を残して、ダッシュで帰ってった。

それでも、転入生が一夏と知り合いとなれば質問攻めにされるわけで…

箒とセシリアを先頭に、クラスの女子が一夏に詰め寄る。…織斑先生が居るのにだにゃー。

バシンッ、バシンッ、バシンッ、バシンッ！

「席に着け馬鹿ども」

あーあ、一夏のせいで出席簿アタックの餌食となった女子が多数…

あ、俺？　だからさっき席に戻ったんだぜい？

授業中、集中してなかった（出来なかった）箒とセシリアが何度も出席簿の餌食になったのは余談だ。

◆

時間は飛んで昼休み

一夏たち？　知らないけど？　今も一緒に居ないし。理由は――

「それで、用事ってなあに？」

楯無と一緒に居るから。

呼び出したの俺だけどね。ちなみに場所は生徒会室だ。

「変な想像しないでくれよ？　普通の話だから」

「あら、残念」

「期待してたのかよ…」

「少しね」

「…楯無はクラス代表とかやってるのか？」

「ううん、私は生徒会長だけ。でもどうして？」

「ならよかった、これが本題。今日の放課後、ＩＳの訓練に付き合ってくれないか？」

「必要なの？　私に勝ってるのに」

「それは楯無がこっちのことを知らなかったからだろ？　単純な技量じゃ楯無のほうが上だよ」

「まあ、今日は仕事無いし、いいわよ。で、どこで？」

「放課後、第三アリーナでよろしく」

「わかったわ……もう、君から呼び出されるなんて、告白されるのかと思ったのだけれど」

「昨日の話から、時間経ってないだろ」

「そうね。で、付き合う報酬は？」

「…必要なのか？」

「できるのなら、君の心が欲しいな」

「俺の心どんだけ安いんだ…俺と一緒に居られるってのだけじゃダメ？」

「そんなの、いつもじゃない」

「…無許可だけどな」

「ま、冗談よ。じゃあまた放課後ね♪」

ちくせう、コイツに振り回されるのは絶対なのか…

◇

また時間は飛んで放課後、第三アリーナ。

ガキッ、ガキャンッ！

金属のぶつかり合う音。

発生源は俺と楯無。

理由は、模擬戦をやろうという楯無の提案から。

一応言っておくが、俺の装備している機体はアストレアＴＹＰＥ

―F2だ。

「おわっ！」

「ほら、どうしたの？」

楯無のランスのひと薙ぎをシールドでガード。
でも、そのまま弾き飛ばされる。
体勢を崩されたが、その体勢のまま左手のビームライフルを撃つ。
まあ、狙いが元から雑なので当たるわけもなく牽制程度。それでもその間に体勢を整えて再度接近。
遠距離からの射撃では、楯無の機体――霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）――の水のヴェールで、ビーム兵器が主なこの機体の射撃は威力と弾速を減速させられた挙句回避される。だから、クロスレンジでの近接格闘戦。

「このっ！」

接近した勢いのまま右腕のプロトＧＮソードを横に振る。
それはランスで弾かれ、そのランスは俺に向かってきた。
それをシールドを斜めに構え、受け止めるのではなく受け流す。
その後、楯無に蹴りを入れて一度離れた。

「もう、女の子を蹴るなんて酷いなあ」

「模擬戦でも戦闘だから、なりふり構ってられない」

プロトＧＮソードの刀身を折り畳む。グリップも収納してハードポイントだけで保持させて、ビームサーベルを引き抜く。
左手も、シールドとビームライフルを収納（クローズ）。腰からビームサーベ

ルを引き抜く。

「行くぞっ！」

「来なさい。おねーさんが受け止めてあげる」

「まだそんな軽口を言う余裕あるのかよ…！」

楯無にビームサーベル二刀流で切りかかる。

だが両方とも受け止められる、あるいは弾かれて決定打が入れられない。

だったら――

――ティエリア！　右足ハードポイントにＧＮミサイルユミット！

――了解！

セシリア戦でピストルのホルスターを展開したハードポイントにミサイルユニットを装備する、それと同時に発射。

それに一瞬驚いた顔をした楯無は、ランスで俺のビームサーベルを弾いてすぐさま“後ろ向きの”瞬時加速（イグニッション・ブースト）で距離を取った。そして追尾してきているミサイル十八発をランスのガトリングで全て撃ち落とし、落されたミサイルの爆煙の中から楯無が飛び出して向かってくる。

「さすが…ですよっ！」

全くあの状況から回避とか…

俺も、向かってきた楯無に両手のビームサーベルを構えて向かっていく。

「褒めてもらっちゃった♪」

そして、楽しげな楯無の声が

――俺の“後ろから”聞こえた。

っ！　まさかっ！？

そのまさかは的中。目の前の楯無は水になって崩壊、直後には背中に重い衝撃が走る。

「あぐっ！」

「同じ手に二度も引っかかっちゃダメだぞ？」

吹き飛ばされた俺に対する突きの連発。そして――

――――S・E残量0――――

◆

「負けたぁ……」

ヒュー、と自然落下中。もちろんＩＳは装備したまま。

ギリギリで浮くようにして、着地する。

「あは♪　私の勝ち」

ＩＳを解除すると、同じくＩＳを解除した楯無が近寄ってきた。

「どうやって見分けろって言うんだよ…あれ」

「見分けられたら困るもの。でも、冷静に考えれば対処は可能よ」

「じゃあ今回は俺のミス…か？」

「そうね、あの爆煙のおかげ。あんな至近距離でミサイル撃ってきたのは驚いたけど」

「…避けることは予想済みだ」

「あら、以心伝心のようでおねーさん嬉しいな♪」

はあ……疲れた。

「…それで？　どうだった、俺は」

「んー、問題なしだよ。教えることは何も無い。あとはそれぞれの動きを洗練することと、冷静に状況を見て行動することくらいかな。後者は経験あるのみだけどね」

「そうか。なら、付き合ってもらって悪かったな」

「いいよ、君のためならね♪」

じゃあね、と言い残して楯無はアリーナから出て行った。

さて、この後どうするか…？　ん、あれは…

アリーナの出入り口には、楯無と入れ替わるように一夏たちが来ていた。

「ま、問題に巻き込まれたくは無いな」

どうせまた楯無は俺の部屋に居座ってるんだろうな、と思いつつ一夏たちと軽い会話だけをして俺もアリーナから出た。

◆

「なあ楯無、お前何をした？」

「？　何って…引越し？」

なぜ疑問系だ。

「今日から私、ここに住むから」

「今更な気もしないでもないが……つーか既に荷解き終わってんのかよ…」

部屋を見回すと、今まで無かった物が色々と置いてある。

「てか、なぜ引越し？」

「善は急げっていうでしょう？」

「俺にとっては善じゃないんだが…」

もはや抵抗する気が起きない。

流石に荷解きまでされると…原作の一夏がどれだけ振り回された

のか、こんなにも早く実感することになるとは。

「これで毎日君に迫れるね♪」

「迫るな！」

本当止めてくれ、無理だ。多分持って一週間くらいで理性が切れる。

「…七割は冗談よ」

「残りの三割は！？」

「じゃ、改めてよろしくね♪」

本当に残りの三割はなんなんだ！

ああ、これで残った平穏の全てが壊されたよコンチクショウ。

本日の報告

ＩＳ操縦技能→

楯無からの好感度→

平穏←

……現実逃避だ。このくらいさせてくれ。

中国の代表候補生（後書き）

……鈴が、居ない。

どうしてこうしちゃったんだろう…？

ちなみに、主人公と楯無の強さは互角です。
アストレアをつかった場合で、ですが。

ああ、春休みが終わってしまった…前書きの通り更新速度がかなり落ちます。

では、感想・アドバイス待ってますm（＿＿）m

次回「クラス対抗戦！」
それは、何かが起こる前触れ…

クラス対抗戦！（前書き）

今日は投稿できました。

では、どうぞ

クラス対抗戦！

楯無が俺の部屋に越してきた翌日、生徒玄関の廊下に張り出された紙があった。

『クラス対抗戦（リーグマッチ）日程表』

一組（一夏）の最初の対戦相手は、二組（鈴）だった。

◆

五月、あれから数週間経った。

同室になってから楯無はある程度自重をしているので（それでも服装は過激が多々）なんとか耐えている。いろんな意味で。

それとこの数週間の報告から行こうと思う。

鈴の機嫌が悪い。それはそれは機嫌が悪い。機嫌が悪いですよオーラを常に纏ってる。

理由は一夏。原作どおりに鈴の約束を憶えていなかった。…いや、覚えてはいたのだが間違って覚えていたから。

話は変わるが、クラスの女子が落ち着いてきた。もう俺たちが居ることにある程度なれたんだろうけど、それでもまだ学園内での話題などの中心ではある。

……そういえば楯無って、俺の部屋に居ることがなんでばれてないんだろう？　確かに俺の部屋は寮の隅だけど…まあ、気にしたら負けなんだぜい。

そして、一夏について。一夏のクラス対抗戦に向けた訓練だが、最近俺は参加してない。というかさせてもらえない。箒とセシリアに。

で、そんな俺が放課後（今日）何をやっているのかというと

「ほら、ぼーっとしてないで手を動かして」

「何でこんなことになってるんだ…」

「それは、お嬢様があなたのことばかりで生徒会の仕事に手を付けていなかったからです」

ちなみに最後のは『布仏虚（のほとけうつほ）』先輩。

名字で分かるだろうが、『布仏本音』――通称のほほんさん――の姉。

俺の今の状況は、生徒会副会長として書類の処理。

それにしても何でこんなに書類が溜まってるんだよ…楯無ィ！

「それって俺のせいなんですか？」

「ええ、一割ほどは」

「……なにがその一割なんだ…」

「ほら二人とも、口じゃなくて手動かして」

お前のせいだろう！？　何でこんなにアニメみたいに――ここは物語の世界だけど――書類がタワーになってるんだよ！

もう愚痴っても仕方が無いので、心の中でぶつぶつ言いながら手を動かす。

書類に目を通して、備品の要求だったらそれに関する書類を書く。他のもそれぞれ書類を書くなり何なりして処理していく。

ああ、本音の手でも借りたい…やっぱ却下。アイツは生徒会だけど作業効率を著しく下げてくれやがる。

――そして終わんねぇ！

誰だこの楯無に対するラブレターみたいな封筒を紛れ込ませたやつ！　レズか！　百合なのか！　Ｇでしなのか！　そして楯無どれだけ人気なんだよ！

それを楯無の頭向けて投げる――捕られた！？　こっち向いてないのに！？　革新者（イノベイター）！？　いや、知らないけど。

…あーダメだ。疲れてなんかテンションがおかしい。

どのくらいおかしいかっていうと、今楯無に迫られたら押し倒しそうなくらい。

それはダメだ。心を無にしろ、無にして手だけを動かすんだ……

数時間経過

「よし、これで終わりよ」

終わったのか…？　楯無、俺はもう……（ガクッ

「あれ？　拓神？　おーい、どうしたの？」

「どうやら、疲れきって寝てしまわれたのかと」

「そっか、なら私のキスで――」

！　俺の何かしらの危機！

周りの確認もしないで、地を蹴ってイスごと後ろに飛ぶ！

「あら、惜しい」

「なにをしようとした？」

「寝ちゃってたから、キスで目を覚ましてあげようと思ってね♪」

危機に面したのは俺の純情だったか…今更な気もしないでもないけど。

「またそんなことを…もう終わったんですよね？」

「ええ、これで終了ですよ」

「楯無、今度からこういうことは無くせよ？」

「私の気持ちを受け入れてくれたらいいよ」

しょっぱなからジョーカー使ってきやがった。

でも、こっちにもそれに匹敵するカードくらいある！

「なら添い寝禁止。俺が拒絶する」

「え、それは無いよ～」

しくしくと泣いたふりの楯無。

そして虚先輩！　あなたはなに「あらあら、まあまあ」な雰囲気を纏って微笑ましくこの光景を見ているんですか！　あなたは楯無の母親かなにかですか！

「つか、会長が仕事しないってどうかしてるぜ……ま、とにかく終

わったなら帰るぞ楯無」

「はーい」

え？　最近俺の楯無に対する態度が軟化してるんじゃないかって？　そんなわけないだろ……え、そう見える？　マジで？　…そんなわけ無い…と信じたい。

◆

クラス対抗戦当日

うん、原作だと襲撃がある日だね。
ということで、俺は――――

「なぜお前がここに居る？」

今のは織斑先生。
俺の居る場所は、先生とかが居る管制室。
ここに居る理由？　いや、だってここなら扉をロックされた後でも外に出れるから。

「だってここなら、よく見えるじゃないですか」

「…誰も許可を出した憶えはないんだが？」

えっと、それは。

「私が出しました」

そう、楯無生徒会長の力。…つーか、どこまで権限あるんだ生徒会長。

「そういうことです」

「はあ……邪魔だけはしてくれるなよ」

それだけ言った織斑先生は、自分の仕事に戻っていった。

「悪いな、楯無」

「いいのよ。どうせ私の副官って扱いで…というか実際、拓神（副会長）は私（会長）のサポート役なんだけれど」

「くくっ、確かに……さて、始まる」

「ええ、見させてもらいましょうか。織斑先生の弟の力」

「…アイツ吸い込みは早くても、まだＩＳに乗って一ヶ月程度だから…代表候補生相手だときついんじゃない？」

「でも、セシリアちゃんには肉薄したって聞いたわよ？」

「情報源は本音か……セシリアの油断が引き起こした奇跡だよ、あれは。本当ならあんなに甘くないからさ」

こんなことを自慢げに喋ってる俺のＩＳ起動時間は一夏と同程度です、はい。

……んにゃ、始まったか。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーーッ！

ブザーが鳴り終わると同時に、一夏と鈴は動き出した。

まず、鈴がその手に大型の青竜刀――双天牙月（そうてんがげつ）――を展開（オープン）、一夏に切りかかる。

ガギィィン！

一夏はそれを瞬時に展開した雪片弐型で受け、金属音をあたりにばら撒いた。

何かを喋っているみたいだけれど、こっちには聞こえてこない。
恐らくＩＳのオープンチャンネルで会話をしてる。

そこから、鈴が攻めた。
鈴の双天牙月は、バトンの両端に刀身が付いているような感じだ。
それをバトンのように回転させながら、縦・横・斜めと一夏に向かって斬り込んで行く。
一夏はかろうじてそれをさばくが、状況は変わらない。
その状況を立て直すために、一夏は距離を取ろうとして――

吹き飛ばされた。
見えたのは、鈴の両肩にある丸っこいアーマーがスライドして開いて、その中心が光っただけ。
今ので一夏に隙ができると、そのアーマー内の球体がもう一度光る。
それも一夏に直撃したようで（弾が見えないから、どうなのか分からない）一夏は地面に叩きつけられた。

「あれは…」

「衝撃砲。空間に直接圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃を砲弾として撃ち出す。セシリアちゃんのブルー・ティアーズと同

じ第三世代型兵器だね」

楯無、説明ありがとう。

「データとしては知ってたけど、あそこまで…」

「だね。完成度高いんじゃない？　それに砲身の角度とか、制限無いみたいよ」

このＩＳのアニメだと、流石にそんな見えない兵器なんてテレビとして……まあ、あれだから分かるようになってたけど、実際は全く見えないな……

「回避、面倒だなあ」

「あら、不可能じゃないんだ」

「いざとなったらシールドで防げばいいし。弾道は直線だから」

ちなみにこんな最中でも、一夏は衝撃砲の回避にいそしんでる。やっぱ、リアルと二次元は違うって事だな……たしか、そろそろだったか？

アリーナのほぼ中央で向き合った二人が、なにやら言葉を交わす。鈴が双天牙月を一回転させて構えると、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を発動させた。

――不明機、来るぞ。

――了解。

――――ズドオオオオンッ！

衝撃がアリーナ全体に走る。ここも少し揺れた。

アリーナの中央からは砂埃が舞い上がっていて、状況が視認できない。

「……来たか」

「何が？」

ボソッとつぶやいたんだけど、隣には流石に聞こえたか。

「こっちの話。……織斑先生、状況は？」

「最悪だ」

返ってきたのは一言。

そして山田先生の悲鳴にも近い声。

「し、しょ、所属不明のＩＳがアリーナに侵入！」

「……それと同時にアリーナのシールドレベルが４に設定、全ての出入り口に強固な電子ロック……山田先生、隔壁の展開を」

「りょ、了解！」

アリーナと観客席を隔てる隔壁が閉鎖された。

「所属不明機の侵入？　……一体…？」

「楯無、状況の理解は出来たか？」

「…ええ、もちろん」

そうか、ならいい。

山田先生は、インカム――通信先は一夏と鈴――に向かって避難の指示を叫ぶように言っているが、一夏たちは食い止めると言っている……行こうか。

「織斑先生、あの機体の撃墜許可を」

「先も言ったが、アリーナのシールドレベルが４に設定されている。無理だ」

「余裕です。いけます」

「……簡単だと言われると教師としては複雑だな……まあいい、許可する。出来ることなら侵入機の損害は最小限に抑えろ」

「了解…行くぞ楯無」

「わかったわ」

俺は、楯無を連れて管制室からアリーナの外へと出た。

クラス対抗戦！（後書き）

あいかわらず鈴の出番がっ…！

そしてティエリアは一言…

次の更新は不明です。
出来るなら明日も更新したいと思います。

次回「アンノウン」
それは、誰が仕組んだものなのか…

アンノウン（前書き）

7巻発売されましたね。イヤッフー！

もちろん今日買って来ましたよ。この投稿終わったら読み始めます。

では、どうぞ

アンノウン

管制室から外に出てきた俺と楯無。

「で、どうするつもりなの？」

「単純。アリーナのシールドバリアーを破って、俺とお前で突入。一夏と凰を下がらせたら、撃墜」

「ん。了解」

「『マイスターズ』起動」

『『マイスターズ』起動。モード選択（セレクト）ＧＮＹ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』』

「行くよ、『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』」

俺はともかく、楯無の場合ＩＳを緊急展開したからエネルギーが余計に減ってるだろうけど…楯無なら心配無用だろ。

緊急展開は、ＩＳスーツを着用しないで展開するもので、ＩＳの中に格納されるＩＳスーツの構築から行われるから、エネルギーを消費する。

――ティエリア、ヴァーチェの準備を。

――最近出番が…いやなんでもない、了解した。平行してＧＮバズーカへ圧縮粒子のチャージを始めておく。

――ああ、よろしく。

「楯無、行くぞ」

「わかってるわよ」

俺の深紅と楯無の水色の機体は、並んで飛び立った。
急いでアリーナ上部に上昇する。

――ティエリア、モード選択。ヴァーチェ

『了解、モード選択ＧＮ－００５『ガンダムヴァーチェ』』

ＧＮ粒子が、装甲を創りなおす。
深紅の装甲から、白と黒の装甲に。
右手には大きなＧＮバズーカ。肩には二連式ビーム砲塔であるＧＮキャノンが両肩一基づつで二基。
外見は、今まで使ってきたスリムな機体と全く違う。装甲は大き

く鈍重なイメージを見るものに与える。
が、実際はＧＮ粒子の質量軽減効果で外見から想定されるよりもずっと軽い…といっても今までの機体と比べたら十分重い。
てか、原作だとこれでフラッグより軽いとか…

「その機体って、技術公開されて無いわよね？」

「ああ、オーバーテクノロジーの塊だ。だからあの機体に固定してるっつーのに」

――喋って良いのか？

――いいさ。

――そうか…

「…技術提供してもらえない？」

「無理。それよりお喋りはお終いだ。準備しとけ……ヴァーチェ、目標を破壊する」

バズーカを正面に両手で構えて砲身を展開、内部から砲身が延長するようにせりだす。胸部装甲を開き、ＧＮドライヴと直結。

「ＧＮバズーカバーストモード、粒子チャージ完了……圧縮粒子開放！」

バズーカとキャノンから放たれた、ゆうにヴァーチェの四から五倍はあるような図太いビームが、シールドバリアーにぶち当たり貫通。バリアーに大穴をこじ開けた。

「すごい威力……行くわよ」

「分かってる」

まず楯無がその穴からアリーナ内に侵入。すぐに俺も、機体をアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２に戻して突入する。

突入すると、一夏と鈴は固まっていた。

理由は……ヴァーチェのビームだな。コイツらの目の前に撃ったし。

楯無にアンノウンは任せて、俺は二人の元に飛ぶ。

「救援登場ってか？　一夏、凰、二人で引け」

「な、そんなこと……！」

「ボロボロのヤツらが居ても邪魔だ。早く引け！　アイツの押さえにも限界がある！」

視線をアンノウンのほうに戻すと、楯無が一人で相手をしてる。
それでも普通にやってるのはさすがってとこか。

「アリーナからはまだ出れない。だから隅っこに行ってろ！」

「わ、わかったわよ！　行くわよ一夏！」

「お、おい！」

凰が一夏を引きずってたが…ま、いいだろ。
いつの間にか仲直りはしたみたいだしな……さて、俺も戦闘参加だ。

楯無の前に出て、ビームの一発をシールドで受ける……威力はそれなりか。

「待たせたな！」

「遅いわよ？」

「そんなすぐ墜ちるタマじゃないだろ、お前は」

「まあね」

ビームを回避しながら、会話をかわす。

「じゃ、接近するから援護よろしく」

「なんなら、私が行くけど？」

「女を前に出すようじゃ、だめだ」

「そういう言動は、さらに私の気持ちを駆り立てちゃうんだけどなあ」

「…ちっ、ミスったか。まあいい、援護任せた！」

シールドを構えながらも、右腕のプロトＧＮソードを展開。楯無のガトリングの援護を受けつつ、ビームをかいくぐって接近する。

ソードの距離まで接近したところで、斬撃を放つ。

「スラスター、多すぎなんじゃね？」

が、簡単に回避された。

このアンノウン、体中にスラスターが付いてて加速力がハンパ無い。零距離から一秒とかからず離脱してくれやがった。

そして、体をコマのように回してのビーム射撃。これで離れての回避を余儀なくされた。

「打開策無いか？」

さっきのを少しづつ変えて攻めてみたが、結果は同じ。

大量のスラスターが生み出す加速力で、一瞬で接近の間合いから離脱される。

そしてその後の回転ビーム、これで近づけない。

「…ビームは避けられる、接近戦でもいままでのスラスター出力なら結果は見えてるわね」

「なら不意打ちか…。ん？　ちょっと待て」

「どうかした？」

「アイツ、さっきから動きが機械じみてないか？　一夏たちのときからな」

本当を知ってるんだけどな…悪い。

「そういえばそうね。パターンで動いてるもの」

このパターンというのは、アイツが回避の後に必ず回転ビーム攻撃をしてくることだ。

「それに生身の人間から感じ取れる乱れとかが無い…」

「無人機ってこと？　でもどこの国も開発には成功してないわよ」

「普通の生徒から言われたなら信じないんだが、更識家の人間から言われるとな…」

「…でもあれ、どう見ても無人機よ…現にこうやって会話してても攻撃してこない。人が乗ってたら、こんな作戦会議でもされるような隙を見逃すわけ無いわ」

「どっちだよ…なら結論は無人機、ってことで良いな？」

「ええ、そのつもりで攻めましょう」

「オーライ…そういや、水分身って使えないのか？」

「相手が機械なら、すぐに見分けられるでしょうね」

「だよなあ……よし」

――ティエリア、ＧＮセファー展開よろしく。

――使うのか…了解した。ＧＮセファー、展開。

背中のスリースラスタータイプのスラスターが、エクシアなどのようなコーンスラスタータイプに換装。それにコアブロックがかぶさるように展開され、コアブロックの両端から左右に広がるように片側三つのＧＮプロトビットが装備された。

『ガンダムセファーアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』

機体名称の意味的には、『正義の女神の書』…といったところか。

――ビットの制御は任せる。

――了解した。

コアブロックだけを残し、プロトビットが俺から離れて無人機に向かっていく。

「その機体性能に加え、あの大出力ビーム。さらに自律機動兵装（ビット）…ほんとなんなの？　その機体」

楯無に軽く呆れられたんだが…まあ、これがなにかと聞かれたら――――

「『ガンダム』だ、このＩＳの機体名称じゃないけどな。…さっさと終わらせる、合わせるぞ」

「オッケー」

俺と楯無は、プロトビットに翻弄されている無人機へ接近していく。

至近距離まで接近すると、俺はプロトＧＮソード。楯無はランスで攻撃を繰り出す。

ビットで動きを制限されているぶん、回避行動を取れないアンノウンにさっきまでのが嘘のように攻撃が当たる。

俺がソードを振りぬく、それで出来た隙を突いてこようとする無人機に楯無のランスが当たる。ランスを弾かれ、隙が出来た楯無を俺がフォローする。

ビットは粒子の切れたものから、コアブロックに帰ってきて粒子を補給・再展開を繰り返している。

こちらの圧倒的攻勢の中、数分で無人機は地に伏せた。

◆

「拓神、お疲れ様」

「お互いにな」

ＩＳを展開したまま（俺は頭部装甲と追加のセファーを解除した）、楯無と労いあう。

徹底的に攻撃して停止も確認したため、原作のように墜ちた後でビームの不意打ちを撃ってくるようなことは無かった。

［お、おい。拓神大丈夫か？］

一夏からプライベートチャンネルで通信。

［ん？　お前に心配されるレベルじゃねぇよ。俺もこいつも］

［そ、そうだ！　その、お前と居るのは誰だ？］

［直接話せ。つーかいつまでもそこに居ないでこっちに来い］

［あ、ああ。了解］

俺が指示したとおり、隅に行ってた一夏と凰がこっちに戻ってくる。

「ありがとう、助かったわ」

「いや、礼はいいさ。それより……」

「凰って、一夏のこと好きなのか？」

「にゃっ！？　そ、そそ、そんなわけ無い…じゃないっ」

確定。やっぱりこうやって人を弄るのは楽しいぜい。

「拓神、とにかく助かった。で、そっちの人は…？」

「初めまして、織斑一夏くん。私は更識楯無。２年生よ」

「あ、先輩だったんですか…ありがとうございました」

「別に良いわ、私は拓神についてきただけだからね♪」

そう言った楯無は、ＩＳの腕を解除して装甲のない俺の首に後ろから巻きついてくる。

「楯無っ！　ヤメロっ！」

「ぶー、いいじゃない」

「良くないから！　それに――――っ！？」

嫌な予感がする…なにか黒いモノが近づいてくるような…なんなんだこれは……？

「どうかした？」

「……」

「お、おい。拓神どうした？」

「アンタ、どうしちゃったのよ？」

「来る…なにか、禍禍（まがまが）しいものが……どこから…」

「拓神？」

「楯無、離れろ…」

「う、うん」

楯無は俺が真剣になったのを感じて、普通に離れてくれた。

なんだ、なんなんだこの嫌な予感はっ……！

…ガキャン

「っ！？」

とっさにその場から振り向く。

居るのは、俺のほうを向いている楯無と――

さっき倒したはずの無人機。

アンノウン（後書き）

感想で、敵は一機だけじゃないかも…といただきましたが、ソレではなく復活という方向に走りました！

どうでしょう？
他の小説で違うのが出てくる、ってけっこうあった気がしたので。

あとカリキュラム様。
感想返しでトランザムは当分無い…
と言いましたが、早々に解禁です。スミマセン。

では、感想・アドバイスお願いしますm（＿＿）m

次回「トランザム」
その力はなにがために…

トランザム（前書き）

まだ7巻を読み終わらない…途中で漆黒の方を書き始めたのがいけませんでしたね。

ちなみにこれは、一昨日のうちに書き上げたやつを確認したやつなので。

では、どうぞ

さっき倒したはずの無人機。

しかも与えた損傷も左腕以外は修復されていて、俺が断ち切ったはずの左腕の部分は黒い腕……いや、黒いとしか表現の出来ない腕ではない何か。

そしてコイツから、さっき感じた禍禍しいものを感じる。

コイツは、膝を折って少し身をかがめると…

かがめる…？　不味いっ！

「楯無後ろだ！　避けろ！」

「え？　何が――――ぐっ！？」

ダッシュの要領で急加速・急接近してきた無人機に、楯無は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた楯無を見ると、ＩＳは解除されていた。

幸い、ダメージを受けたときはＩＳは腕以外展開していたので命は大丈夫だと思う。装甲を解除した腕も絶対防御で守られる。

「楯無ぃっ！」

それでも叫ばざるを得ない。
…もう俺は、親しい人を失いたくは無い……！
なおさら、自分にそれだけの力があるときは！

「うっ……だ、大丈夫よ。戦闘は無理っぽいけど、体は大丈夫」

声は、震えていた。絶対防御で体への損傷は無くせても、衝撃を消しきることは出来ない。
今のは衝撃だけでも楯無を戦闘不能に出来る威力はあったということだ。

「ちっ…一夏、凰！」

「な、なんだ？」

「なによ！」

「楯無を連れてここから出て行け！」

もう扉のロックは解除されてるはずだ。

「…今度は俺も戦う！」

「さっきも言っただろ！　お前らは消耗しすぎてる！　邪魔だ！」

「そ、そりゃその通りだけどさ…」

「わかったなら早く！　楯無に余計なダメージが出る前に保健室に運べ！」

「で、でも…っ」

「ああ、もう一夏！　アイツの言ってることが今は正しいの！　それくらい分かるでしょ！　早く先輩を拾って逃げるわよ！」

「……っ…わ、わかった。行こう」

行ったか…扉も開くみたいだな。

頭部装甲を再展開展開してから、オープンチャンネルの回線を開く。

「織斑先生」

『なんだ？』

「今の見てましたよね」

『ああ。そいつはなんなのだ？　停止は此方でも確認したというのに……』

「分かりませんよ…言えることは殲滅すべき対象というところです。それより扉をロックしてシールドバリアもレベル四に引き戻してください」

『……わかった。死ぬなよ』

『ちょっ、織斑先生!?』

『本人が言ってるんだ。やらせてみるさ…』

「ありがとうございます」

山田先生が驚いた声を上げた…でもこれで良い、少なくとも時間は稼げる。

それより――

「まだ自分の気持ちが理解できてないんだ……それまでは死ねない」

俺の目下の一番の問題、こんなとこで中断させられてたまるか。

――拓神、これでは…

――刺し違えるつもりは無いって。今いった通り死ぬつもりも無い。

――だが相手は未知数だぞ…

――ああ、見れば分かる。でもやらなきゃいけない。

――まったく君は……わかった、全力でサポートしよう。

――サンキュ…さっそくだ、アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２フル装備展開。

――了解。

自分の持つ装備が、一度全て粒子に戻る。

その後再構築され右手にはプロトＧＮランチャー、左手にはＮＧＮバズーカ、左右の腕部ハードポイントにはＧＮハンドミサイルユニット、両足のハードポイントにはＧＮピストルとそのホルスター、両腰のラッチにはＧＮビームライフルが二丁。

俺がここまでを終えたところで、復活した無人機はその頭の中心にあるモノアイをぎょろりと動かし、此方を見つけた…いや捕捉された。いままでなぜ動かなかったのかは知らないが好都合だから気にしない。

「行くぜ！」

その俺の言葉に反応したように、無人機は右手の平の銃口からビームを発射してきた。

重武装化の影響で機動力は下がっているが、避けることは普通にできる。

ソレを避けて、右手のプロトＧＮランチャーを放つ。

太いビームを、無人機は持ち前の機動力で避けた。

バシュッ！

俺はその回避先に向かって、左のＮＧＮバズーカを撃つ。

その弾は無人機がまた撃った右手からのビームに破壊され、ビームが俺のほうに向かってくる。

ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ！

それをギリギリでかわし、ＮＧＮバズーカを連射する。反動で跳ね上がる銃口を押さえつけながら、弾切れまでトリガーを引く。

それも回避または撃墜した無人機は、ビームを連射する。

そのうちの一発が、俺への直撃コース。それに向かって弾切れのＮＧＮバズーカを投げつけ、自分は回避。

そのＮＧＮバズーカが破壊されたときに生じた爆煙にまぎれて、両腕のＧＮハンドミサイルユニットを全弾発射。

ズドドドドドド……ッ！

……煙が晴れたとき、目の前にはほぼ無傷の無人機。

「これでもダメか…厄介すぎるぞ、テメェ」

無人機に向かって言い放つ。まあ、もとより返答は期待してないし、返答は無い。

――ティエリア？

――なんだ？

――エクシアをフル装備で用意を。

――了解。

空いた左手で右腰のビームライフルを持つ。
あらかじめ機体に装備しておいた武装を取るほうが、展開より面倒じゃなくて良い。

ビームライフルで射撃。
それがかわされたのを確認して、そこに向け右手のプロトＧＮランチャーを撃つ。
これもまた回避され、地面に当たって砂埃を巻き上げた。

――準備は完了した、いつでも。

――了解。

ビームライフルを収納、プロトＧＮランチャーを右側のグラビカルアンテナを外して装備。ＧＮドライヴと直結して、両手で構える。
こちらが攻撃を止めてなにやら始めたのを確認して、無人機はビームを撃ってくる。
それを回避してるうちに、粒子のチャージが完了した。

「食らっとけ！」

ズガア――ッ！！！

さっきまでのビームとは違う威力を秘めたビームが、無人機のビームとぶつかる。

此方のビームはぶつかった瞬間に、相手のビームを弾きながら突き進んだ。
それで結果はかすり程度。それでも当たったから良いとしよう。

「モード選択エクシア」

『モード選択ＧＮ－００１『ガンダムエクシア』』

装甲が一瞬で粒子に返還され、装甲を再構築する。
初めての楯無戦で使ったと同じトリコロールの装甲。

エクシア・セブンソード

「エクシア、目標を…殲滅する」

今までのでわかったことは、この無人機には近接武装は無い。
その代わりに、接近させないことに主眼を置いてる。そのための各部に装備されたスラスターとビーム。
なら、それを突破してやれば良い。解決策は簡単だった。
先ほど楯無を吹き飛ばしたのは、ただの体当たり。不意打ちでしか使えないような技だ。

スラスターを全開にして、一気に接近する。
無人機はいままでの対応通り、体中のスラスターでその場から飛びのいた。
俺は機体の向きを無理矢理にでも変えて追撃する。

ＰＩＣで相殺できなかった慣性が体をきしませるが、戦闘には何の問題も無い。
無人機に追いついた俺は、右腕のＧＮソードの刀身を展開して切りかかる。

それは黒くなった左腕で“受け止められた”。
ＧＮ粒子のコーティングで切れ味を高めたＧＮソードを。
そして右手の平、ビームの銃口を向けられる

「チッ、食らうかよ！」

空いたままの左手でＧＮショートブレイドを腰のアタッチメントから引きぬいて、無人機の右手の平に突き刺した。

…突き刺さった？　絶対防御が消えてるのか？
どうしてだ？　絶対防御はＩＳの根幹を成す機能で解除は出来ないはず……でも、それなら壊すのには好都合だ。

ザシュッ！

右手はＧＮソードを黒い左腕で受け止められて動かせないため、左手のショートブレイドだけで無人機の右腕を切り落とす。切断力だけならＧＮソードよりも、これとロングブレイドの方が上だ。

右腕を切り落とされた無人機は、左腕を振り払う。
それでＧＮソードを弾かれて、俺はバランスを崩す。
その隙に、無人機は一度距離を取った。

……どうするつもりだ？

見ていると、右腕の切断面から黒いナニカがズズズッとあふれ出して……右腕を構築した。

「……なんなんだよ、お前はぁ！」

これ以上余計なことをされても困る。

だから俺は、両手の剣を構えて無人機に突っ込んだ。

最後の手段を使って。

「トランザム！」

機体が赤に染まる。

正確には、機体に蓄積された高濃度圧縮粒子を開放している影響で赤く染まる…が、そんなことはどうでもいい。

俺は口を開いた。誰に伝えるでもなく、自分に言い聞かせる。

「俺は――――」

トランザムの発動でさっきまでの三倍の性能を手に入れた俺は、残像を残しながら無人機に切りかかる。

左手のショートブレイドで黒く変化した右腕を刺し貫き、そのままアリーナの壁に押し付けて右腕を壁に縫い付ける。

「俺は守る！」

残った左腕での抵抗をかわしてロングブレイドを引き抜き、それを左肩の付け根に突き刺し、こちらも壁に縫い付ける。

「俺と、その周りの世界を！」

抵抗できなくなった無人機の胸部に、リアスカートからビームダガーを二本とも引き抜いて突き刺す。

「それが自己満足でも！」

さらに両肩のビームサーベルを引き抜いて、無人機の腹部に。

「俺とガンダムで！」

最後にＧＮソードの刀身を展開。無人機を縦一文字に切り捨てる。

「それが――俺だ！」

ダメージを負った無人機の各部から、スパークが起こる。
それは広がっていき、黒いナニカを撒き散らしながら無人機は爆発した。
そして、その黒いナニカはその場で何も残さず消滅した。

残ったのは、その場に立つエクシアと無人機の残骸のみ。
エクシアは、その機体を粒子に返還され拓神に戻る。
そして拓神は、その場で崩れるように倒れた。

トランザム（後書き）

俺が、ガンダムだ！

を最後にしようかとも考えたんですけどね。
刹那みたいにガンダムに信仰心持ってるわけではない主人公なので。

ファーストのあのシーンはかっこよかったですよね…金ジムフルボッコｗｗ　あれをオーバーキルだと思うのは俺だけでしょうか？

本編について、ＧＮソードを止められたのにブレイドが通った件については、トランザムで威力上昇してるからです…って説明要りませんよね。

では、感想・アドバイス待ってますｍ（＿＿）ｍ

次回「事の結果」
それは、一時の平穏。

拓神の真実（前書き）

１２時までには更新したかった！

…ちくせう。

サブタイトル、前回のは次話に持越しです。２度目ですいません。

４月１０日午前２時時点で総合ユニーク２００００突破！

感謝感激の嵐です！

では、今回もよろしくお願いします。どうぞ

「う……ん？」

俺が目を覚ますと…

「って、俺はいつ気を失った？」

はて？　理由が思い浮かばない。

――君は、あの敵を倒した後倒れたんだ。

――ティエリア……そうなのか！？

――…憶えていないのか？

――滅多刺しにして、ＧＮソードで斬ったところまでは憶えてる。

――その表現はともかく、君はトランザムが終了すると同時に倒れ込んだんだ。僕は一度回収されて調べられた。

――へえ…っておい！　大丈夫なのかよ！

――心配することはない。僕と君、両方の許可がなければこのＩ

Sの重要な情報は提示することはできないからな。

――それで、見られたのは？

――基本的なスペック・拡張領域（パス・スロット）、その位だ。

――基本的なスペックって？

――Oガンダムのスペックだ。それが標準で他が強化、または弱体化となるんだ。

弱体化、というのはアンフやティエレンなどに変化すること。ちなみに俺は、ガンダム以外に乗る気は…あるな。隊長機のブレイヴなら良いと思ってる。

OO劇場版のあの人はかっこよすぎた。

――そうか、ならいい。その状態だと拡張領域もOガンダムのものだろ？

――そうだ。では、僕からの報告はこのくらいだ、拓神はもう少し休むと良い。

――ああ、ありがとなティエリア。

「ふう…気を失った原因は……気の疲れと体の疲れ両方だろうな」

そしてここは保健室か。

そんなことを考えていると……

シャッ！

「気がついたか」

俺の寝ていたベッド周りのカーテンを開けた織斑先生が居た。

「は、はい」

「そうか。…悪いがお前のＩＳを調べさせてもらった」

うん、知ってる。今さっき聞いた。

「どういうことだ？　ほとんどデータの開示が出来ないなど…」

「まあ、その通りです。ブロックがあって自分でも見れない部分が多いんで」

「なに？　お前…搭乗者でもか」

「はい。機能とかは分かるんですけど、データの開示は…」

出来るよ。うん、ばっちりと。詳しいデータのところまで。

「そうなのか。……では、今日の襲撃のときのことを話してもらおうか。使っていた機体は良い、更識のときも使っていたからな。あの赤くなったのはなんだ？」

「ワンオフ・アビリティー『トランザム』です。機体の各部に圧縮・

蓄積したエネルギーを開放することで性能を三倍に引き上げる機能ですよ」

「ふむ……それなら何も聞くまい。次だ、あの無人機はなぜ復活した？　一度は停止を此方でも確認した、そして復活したときに“ＩＳコアの反応は停止したまま”だった。なにか知っていることは？」

「なにも。知っていたなら楯無をやらせてませんから。というか、そんなこと…ありえない」

真面目に、織斑先生の目を見て言う。
これだけは本当になんなのかが分からない。

「そう、ありえないんだ。ＩＳコアが停止しているのに再起動するなんてことは。だからあの時、更識は不意を突かれた。……まあ、その様子では本当に何も知っていないんだろう？　私の話はこれで終わりだ」

ゆっくり休め。と言い残して、織斑先生は保健室から出て行った。
その後も、あの機体について考えた。でも、まだ疲れが溜まっているのか上手い思考が出来なかった。

今は休むとき。

そう考えた俺は、ベッドに横になって意識を沈めた。

◆

ふとなにかを感じて目を覚ますと、そこは――

――あの、真っ白な空間だった。

「っておい！　なんでここだよ！　俺また死んだのか！？」

正直、なんでここに戻ってきたのか分からないんだが…？

「安心せい、まだお主は死んではおらん」

「ほっ、よかった…っていつのまに」

本当、いつの間に来たよ。神サマ？

「最初から居たぞ？　おぬしを呼んだのはわしじゃからな」

「あ、そういえば心って読まれるんでしたっけ？」

「ああ、そうじゃの。…それと敬語は止めにせんか？　その方がおぬしもやりやすいじゃろ」

「あ、わかり――わかったよ」

「うむ、それでよい。それで、ここに呼んだ理由じゃが――アレ、と言えば分かるかの？」

「復活した無人機…か？」

「その通りじゃ。そしてあれが、おぬしをあの世界に送ったときに言った“バグ”じゃ」

「――ッ！？　あれが？」

「本来なら、ありえないことだったじゃろう？」

「あ、ああ。ＩＳコアが停止したＩＳが動くなんてのは…ありえない」

「ふむ、バグは我ら神にも予測不能なのじゃ。今回はまだあの程度だったから良いとして、これ以上のものも出てくるかもしれぬ」

「あれがあの程度かよ…笑えないぞ？」

「それがバグという存在じゃ。そしてバグはその世界のどこかに巣のようなものを作る」

「それは…破壊すればどうなる？」

「破壊できれば、二度とバグは現れない…じゃが、巣自体が砦といって過言ではないのじゃ。我ら神なら“浄化”という手段を使えばバグは消せるが、神は世界に干渉できない」

「……自分達でなんとかしろ、と？」

「そうなる……それで、おぬしに話が――いや、話さねばならんことがある」

「バグについてか？」

「いや、違う」

「新しい力をくれる…とかか？」

「似ているが…違うの。話を聞いてくれるか？」

「断る理由はない。聞くさ」

「覚悟をするんじゃ。聞かなくてもよいのじゃぞ？」

「…そういってくるってことは、それだけの覚悟が必要ってことか」

「その通りじゃ…して、どうする？」

「聞かせてくれ。俺は、すべてを知っていたい」

「よかろう。では早速じゃが――

――おぬしは半神と呼ばれる存在じゃ」

…最初っからぶっ飛んでないか？

「そりゃまた…どういうことだ？」

「その通り、半神ということじゃ」

一瞬、タイ〇ースが浮かんだのは気のせいだ。

「……理由は？」

「おぬしの母親…ミカが、神との間に子を…お主を産んだからじゃ」

「…続けてくれ」

「うむ。他の神も、人間と子を作ることはある。そうすると、その神のチカラの一部が遺伝すると天才と呼ばれる存在が生まれる」

「待ってくれ。俺はなにも無かったぞ？　前世でも普通を貫いてた」

「それはな、おぬしが最上級神との間に出来た子だからじゃ」

「…意味が分からないぞ？」

「神の力の一部が遺伝する。そしてそれはその神のチカラによって遺伝するチカラの量は変化するんじゃ。そして最上級神はその通り、神として最上級のチカラを持っておる。下層の神がいくら……何千何万と集まろうと一蹴できるほどの圧倒的なチカラをな」

「つまり、俺にはその分強力なチカラが遺伝した…と？　ならなおさらおかしいんじゃないか？　どうしてそのチカラが俺にはなかった？」

「理由はリミッター、枷を付けていたからじゃ。おぬしが考えたとおり、そのチカラゆえ遺伝するチカラも最下層の神より高い。半神とは言っているが、神より強い力を持っておる。そして、それは世界のバランスを壊す」

「つまり、世界のバランスを壊さないために俺にリミッターを付けた…？」

「そのとおりじゃ。聞き入れた願い『身体スペックの上昇』もその枷の一部を外したに過ぎないからの」

「……って待ってくれ。これまでを通して一つ疑問がある」

「なんじゃ？」

「神は、世界に干渉できないんじゃないのか？」

「…それについては、おぬしの元居た世界は特別なのじゃよ。一番最初に生まれた世界にして、唯一神が干渉できる世界。それがおぬしの元居た世界なんじゃ」

「…ああ、そういうことなのか……わかった。話を戻してくれ」

「わかった。ここからが本当の本題じゃ、おぬしは半神としてのチカラの枷を外すつもりはないか？」

「そのチカラを俺に持てと？」

「そうすれば、バグの排除も楽になる。これはわしからの提案じゃ」

……バグは、俺が招き寄せたモノだ。
そして、それで楯無は傷ついた。
責任は…取るべきだよなあ。

「俺がそのチカラを受け取るとどうなる？」

「うむ…まずは寿命じゃ。人間の何十倍もの悠久の時を過ごしてもらうことになる。そして身体能力…これに説明はいらないの？　そして最後に神力（しんりょく）という我ら神が使うチカラの一部を使えるようになる。これが大まかなところじゃ」

「……前の二つはともかく、神力ってのがあれば俺でも“浄化”できるんじゃないか？」

「それは…残念じゃが無理じゃ。浄化は神力だけで成り立ってはいないんじゃよ」

「そうか…バグの巣は実力で排除しないといけない、と」

「そうなってしまう」

「いいさ、もともと俺が入ったことで起きた事。責任は取る」

「そうか。……立派になったの、拓神」

「…え？」

「ん？　どうしたのじゃ？」

「今の言い草、俺の昔を知ってるみたいだったなーとおもってさ」

「気のせいじゃよ、そんな――」

「まさか、アンタが俺の父親…っつーオチはないよな？」

「違うの、それは間違いじゃ。わしの知り合いではあるんじゃがな」

「……そうか、ならいい」

「さて、本題に戻るぞ？　チカラを受け取るか否か……どうする？」

「俺は――」

「俺は、そのチカラを受け取る。…自分の起こした事の後始末くらいは、自分でやるさ」

「……わかった。おぬしの枷を開放するとしよう――――◆◆◆

ガラスの割れるような音。
それは、俺の体から響いた。

――――…終わったぞ。実感があるじゃろ？　今まで無かった…いや、感知できなかったナニカがわかるじゃろ？」

「ああ……心地良い気分だ」

「ほっほっほ。いままで、手足に鉄球を付けられて動いていたのと同じじゃからの。それが外されたんじゃ」

「そろそろ、あちらに戻るか？」

「最後に一つだけ」

「？」

「大切な人が出来たとして、その人と、一緒に居るにはどうすれば良い？」

「……それは…おぬしの体液…唾液で良い。それに神力を込めてその相手の体内に流し込む…口付けでいいじゃろ。それで成立する」

「それは、相手も半神にする…って解釈でいいのか？」

「うむ、そういうことじゃ」

「…わかった。もういいよ。俺の事は終わった」

「そうか、では送るぞ」

「ああ。じゃあな

――父さん」

その言葉を残して、俺は真っ白な空間から消え去った。
なんでわかったのか？
チカラを開放して俺も神力を使えるようになった…つまり相手の神力も読み取れる。
それであの神…父さんの神力を感じた。そしてそれは、俺と似ていた。いや、ほとんど同じだったんだ。
あとは、親子の間だけで通じるナニカってあると思わないか？
本当なら、それだけで十分…だろ？

そして、一度白に塗りつぶされた俺の意識は再上昇する。

――――今の俺が居る世界に。

拓神の真実（後書き）

半神、という設定を絡ませてみました。

出すのは、もう少し後半でも良いかな…とは思ったんですけど、このあたりで出すことに。

そして前話でなんで再起動したＩＳに楯無が気づかなかったのか、という点。これはＩＳのコアが動いてないのに、アレは動いたから。あとはバグによる補正です。

では、感想・アドバイスお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回「事の結果」

拓神と楯無（前書き）

またもやサブタイは持ち越し…何やってるんだろうか……

こんばんわ、マクロスFサヨナラノツバサを小説だけ読んだ作者です。

では、本編どうぞ。

「う……ふぁああっ、と」

真っ白な空間から浮上した意識が覚めて、最初に見たのは夕焼けの朱に染まる保健室。

「もう夕方になってたのか……ん？」

上体を起こして周囲を見渡す。
すると視界の隅に、見慣れた水色の髪が見えた。

「楯無……か」

楯無は俺のベッド脇にあるイスに座って、頭はベッドの上で自分の腕を枕にして寝ていた。

「ここで寝てんじゃねえよ…」

なんとなく手を伸ばして、その頭を撫でる。
ああ…髪の毛サラサラだなぁ……

「んっ…拓、神？」

どうやら目が覚めたようだ。

「ああ、おはよう…なんてな。もう夕方だぞ？」

「…だ、大丈夫なの！？　終わってから急に倒れたって聞いて、織斑先生に場所聞いて…！」

「そこまで心配されてもな…疲れで気を失っただけだ。でもありがとう、楯無」

「そうなんだ……まあ、どういたしまして？」

「なんで疑問だし…まあいいや」

「……本当、良かったわ。君に何も無くて」

「俺は死にませんよ。不死身（笑）ですから」

不死身の某サワーさんって本当、不死身だよね。
そして最後は思いっきり幸せだよね。

「笑ってなによ、笑って……」

「ねえ…真面目な話、してもいい？」

急に真面目な顔になって、俺の目をしっかり見てくる楯無。

「あ、ああ。わかった」

「……拓神は、あの無人機のことを知っていた。違う？」

ああ、やっぱり、ごまかしはきかないか。特にコイツには…

「……あってるよ。再起動については知らなかったけどさ」

「どうして知ってたの？」

「…知りたいのは、ここの生徒会長として？　それとも個人として？」

「質問に質問で返すのは、おいしくないなぁ…」

「これだけは聞いておきたいからさ」

今、生徒会長として。を選んだ場合、俺に真実を教えるつもりは無い。

さあ、どうする？　楯無。

「そうね……私は…生徒会長としての義務もあるでしょうけど、個

人よ。拓神を好きな一人の女として、君の事を知っていたい」

…いつも通りストレートだなぁ。心が揺らぐじゃん。

“教えたくない、普通に暮らして欲しい”って。

「……知ってる理由を、教えても良い。でも、聞いたら戻れない」

「いいわ。…もしものときは拓神が面倒見てくれるんでしょ？」

即答かよ。しかも…

「なんだよそれ……本当に？」

「ええ、覚悟はできたわよ」

「……わかった、教える。まずは――――――――

全てを話す事にした。

俺のこと。

そして半神について。

無人機、バグ。

現状で楯無に隠していることを全て話した。

無論、転生者であることと楯無の想いを受け入れられない理由も。

流石にこの世界の未来で起きることと、ティエリアについては教えなかったけれど。

話の最中、楯無は常に真剣な表情だった。
途中、驚きで多少表情が変わることはあったけれど、ほとんど気づかない程度。

――これで全部。……どう思った？　俺は普通の人じゃないんだよ…ただでさえ転生者だ。幸せになる資格すらない」

多分、今の俺はとても乾いた笑みを浮かべていることだろう。
そんなレベルで――

「――これが現実」

言い終えた俺は、うつむく。
今は楯無の顔を見れなかった。

「「……」」

「「……」」

長い長い沈黙。
本当は短いのかもしれない。でも、とてつもなく長く感じる。

「ねえ」

楯無が口を開いた。

「何？」

「拓神は、本当にそんなことを思ってるの？」

「……なにが？」

「『幸せになる資格がない』なんて、本当に思ってるの？」

「ああ……思ってｒ――」

「――馬鹿言わないで！」

初めて聞く楯無の怒声。

俺は、うつむいてた顔を上げて楯無を見る。

「私の気持ちはいい、フラれても仕方ないって思える。けど…けど、そんな悲しいこと……言わないでよ…！」

「楯無……」

「ここにいるのは、拓神。『玖蘭拓神』以上でも以下でもない。拓神は拓神だよ……ここにいる拓神は偽者かなにかなの？　違うわよね…なら幸せになる資格も権利もある。だから……！」

「っ…！」

すっかり忘れてた。

俺は俺、それ以外じゃない。そんな当たり前なことを…

転生したから、俺は普通の人間じゃないから…そんな理由はただの建前。

――なんでもない、俺は……俺だ

「ゴメン、楯無。俺は俺だよな……ハハッ、なんでかすっかり忘れてたよ。……ありがとな」

「…うんっ」

今の半泣き状態の楯無からは、いつもの威厳もなにも感じ取れ無かった。

居るのは、ただの女子。一つ年上の女の子、それだけ。

ポフッ。とまた楯無の頭に手を載せて、撫でる。

恥ずかしいのか、頬を朱に染めて少しうつむいた。

◆

「落ち着いたか…？」

「拓神のせいだよね？」

あの後、楯無が復活（いつもどおり）になるまで俺は頭を撫で続けていた。

いつもの楯無の裏側を見れた気がして。それと、あんな状態の楯無は…可愛かった。

「なあ、楯無」

「ん？　なに？」

「なんで、俺のことを信じたんだ？　普通だったらあんな事言っても信じてくれない」

「それは…拓神が、あんな場面で嘘をつくとは思えないもの」

「えらく信用されてるなあ……信じてくれてありがとう」

…俺も人のことを言えないくらいに、楯無を信用してはいるが。

というか、なぜ楯無に本当のことを話したんだろう…？

（…甘えたかったのかな……楯無に）

俺は一応は、そう結論つけることにした。

「で、楯無。どうするんだ？」

「何が？」

「俺について。…お前が俺に好意を寄せてるのはとっくに分かってる。というかアピールしすぎだ」

「あら？　嫌だったの？」

「うぐ…それは……」

「あはっ♪　冗談よ」

「私は……拓神がどんなでも私の気持ちは変わらないわ。あなたの…拓神のことが好き」

今更だが、面と向かって“好き”と言われたのは初めてだ……前世込みで。

そんな理由で、今更ながら顔が赤くなったのがわかった。

それでも、楯無からは目を逸らさない。

「……俺とお前じゃ、流れる時間が違いすぎる。俺の寿命は、人の寿命と桁が違うんだ」

「それでも。私が死ぬまでは、あなたのそばに居たい」

「まったく。本当、俺のどこにそんな魅力があるって言うんだ……」

「私からしたら、あなたは十分に魅力的よ?

……今すぐ食べちゃいたいくらいに」

ゾクッ、とした感覚が背筋を凍らせた。

というか、楯無は有言実行しそうで怖い…そして既に近づいてきてるのは、幻覚だと信じたい。

「お、おい、冗談……だよな?」

「……そう思うのかしら?」

じりじりと、ベッドの上の俺に迫ってくる楯無。
ベッドの上に上がると、四つん這いのまま俺の上に来た。

「それで……」

「？」

「あなたの答えは…出たの？」

「何の？」

「私の気持ちに…想いに対する答え」

どうなんだろう…

（俺は……楯無のことが……好き……？　こんな俺でも、受け入れてくれた楯無が……

好き…なんだよなあ）

今なら分かる気がした。楯無の言っていた『魂が惹かれる』という言葉の意味が。

本能で求めてしまう。俺は、楯無を…

（ああ、これは…宣言通り、楯無に“心を奪われた”よ……）

「俺は……」

「うん…」

「楯無のことが……」

「うん…」

「……好きだ」

言ったことで、なんだかもどかしくなって……近くにあった楯無の唇を奪った。

キスは一瞬で、俺はすぐに離れる。

「…嬉しいな♪　ありがとう」

「それは俺の言うべき言葉だよ……それと提案が一つある」

「提案？」

「そう、提案」

「どんな？」

「…俺と同じ時間を生きるつもりはある？」

「……それは、私があなたと同じような存在になる。ということ？」

「ああ、そのままの解釈でいい。…別に今すぐじゃなくていい。いつでも、その決意ができたときで」

「なら、もう――『ダメだ』…どうして？」

「これは、そんなにすぐ決めて良いことじゃない。俺の時間は数千年、楯無が俺に飽きたとしてもどうにもならない」

むしろ俺は、今すぐにそうしてしまいたかった。

けど、本当にこれは簡単なことじゃない。

数千年は…永すぎる。

「なら、安心して良いわよ。私が拓神に飽きることなんてないわ」

「そんなこと、言いきれ『る、わよ？』…」

「言ったでしょう？　魂が惹かれてるって。私はいつまでも…それこそ永久（とわ）でもいい。拓神と一緒に居たいの」

「……本当に？」

「本当に」

ずいっと顔を、鼻が触れるくらいまで接近してきた。

「だから…『迷惑になるかも』とか、そんな考えは捨てなさいな」

…心を先読みされた気分…というかされた。
俺は今から、それを考えようとしてた。
それと――――

「……更識家はどうする？」

「そうね……ある程度したら、妹に任せるわ」

笑顔でそう言い切った楯無。

「いいのか？」

楯無の妹『更識簪（さらしきかんざし）』。一年四組所属の専用機が無い、専用機持ち。
性格は楯無とは正反対。

「あの子はそんなに弱い子じゃないもの」

「そうか…楯無がそういうなら」

「しつこいけど、本当に良いのかよ？」

「ええ、お願いするわ」

「そうか……わかった」

そう答えた俺は、今俺の上に居る楯無と場所を入れ替わるため、
楯無の腕を引く。

「？　――きゃっ」

楯無をベッドに引き倒すと、俺は起き上がって楯無の上に。
周りから見ると、俺が楯無を押し倒しているように見える。

「…じゃあ、抵抗しないで」

それだけを告げて、楯無にキス。
そして、楯無の口内に舌をすべり込ませる。

「ん――――んんっ！？　っ…」

自分の体液――唾液――に体の中を流れる、血液ではなく、あれから新しく感じているモノ――神力――を混ぜる。
そしてそれを、繋がっている口を通して楯無の方へ流し込む。

「んっ――――（ゴクン）」

それを楯無が飲み込むのを確認した。
それがちょっとエロく見えた俺は、少し楯無とのキスを堪能してから唇を離した。

「ふぁっ……拓神って、以外と強引なのね」

体を起こして、楯無から離れる。

「少なくとも楯無が言える台詞じゃない……なにか感じないか？血液じゃない、体の中を流れるナニカを」

「ええ、まだなんとなくだけれど…これが神力？」

「ああ。人は誰でも神力を少しは持ってる、って父さん（神）が言ってた。俺はそれを増幅させただけ」

「……これで私も拓神と同じになれた？」

「まあ、な。……その感じてるものを目に行くようにイメージしてみて」

「え、ええ。わかったわ」

楯無が一度目を閉じて、少ししてから開く。

その目は“金色”に輝いていた。

「成功。見てみ」

ベッドの隣の棚の上にある、小さな置くタイプの鏡を取って楯無に向ける。

その目を一度見開いてから、楯無が口を開いた。

「…金色……境界の瞳（ウォーダン・オージェ）みたいね…」

「あれより性能が良い。意識すれば、制限無くどこまでも見えるよ…解除にはその目から神力が無くなる感じで、イメージ」

そういうと楯無はもう一度目を閉じて、開く。
すると、いつも通りのルビー色に戻った。

「OK、解除もできてる。他にも色々あるけど、使い方は今と同じ。その場所に楯無の神力を集中させるイメージでいい」

「そう、わかったわ……そうだ、楯無が借り物の名前ってことは知ってるのよね？」

「ああ、更識家当主が継ぐ名前だろ？」

「そう。でも、あなたには本当の名前で呼んでもらいたいな」

「それを知らないぞ？」

「だから教えるの」

そういうと、楯無は俺の耳元に口を寄せて

「私の本当の名前はね…更識■■よ。特別なときはそう呼んでちょうだい」

「ああ、わかった。■■」

「久しぶりね、その名で呼ばれたのは……少し、寝てもいいかしら？」

「それは、体が力に慣れてないから負荷がかかったんだと思う。少しすれば慣れて違和感も何も無くなるはず……おやすみ」

「ええ、おやすみなさい……」

すぐに寝息が聞こえてきた。

俺も気持ちの面で疲れが増えて、すぐにでも倒れそうだったからその場で並んで寝た。

……今の幸せを噛み締めながら。

拓神と楯無（後書き）

ついに拓神をデレ？させました～！

金色に輝く目については、イノベイターの目をイメージしてください。

今7後どうなるのかな？　かな？

二巻はいいとして、三巻は楯無さん出せないですからね。
このタイミングでくっつけたのにはそんな理由があったりします。

では、感想・アドバイスお願いしますｍ（＿＿）ｍ

事の結末（前書き）

結局サブタイは少し変わりました。

今回は学校のＰＣから投稿（笑

学校にＳＤカード持ち込んでｗｗ

では、どうぞ

事の結末

保健室のベッドの上で眠りについた俺が起きたのは、日がもうどっぷりと暮れた頃だった。
もちろん楯無も一緒で。
そして誰もここに来なかったことに驚きだ。

「あー、寝すぎちゃったかしら？」

「いや、あの力はまだ慣れてない状態で使うと、気力を一気に消費するらしいから。多分そのせい」

「…使わせたのって拓神だよね？」

「……はい、そうです」

「敬語、戻ってる」

「仕方がないだろ。んなこと言われたら、非は俺にあるんだから」

「そんなわけで、罰ゲーム♪」

「人の話を無視するな！」

ったく、何で寝起きなのにそんなに元気あるんだよ。

「もう両想いだから…いいわよね」

「なにが？」

「こういうこと」

俺はお互い寝転んだままの楯無に抱きしめられて、楯無の顔が俺の胸に。

そして、顔をうずめるようにしてきた。

「お、おい！？」

「はふぅ、拓神の香り…」

「ちょっ、何やってんだお前！」

あれ？　楯無ってこんなキャラだっけ？

どうしてこうなった！？

それから少しして、俺は解放された。

「ふう、拓神エネルギー補給完了。さ、行くわよ」

「拓神エネルギーってなに！？　てか、どこに行くんだ？」

「拓神エネルギーは拓神エネルギーよ。行き先は食堂に決まってるでしょ、もう夕食の時間よ？」

室内の時計に目を向ける。
すると、既に七時を回っていた。

「あ、マジだ」

「それとも、ここでこのまま私とえっちぃ事でもする？　私は構わないわよ？」

「俺が構うから。そして人の話を聞け」

「ゴメンゴメン♪」

「うわっ、謝る気ないだろ……まあいいや、行くぞ」

ちょっとした仕返しのつもりで、声だけかけて保健室からさっさと出て行く。

「あ、待って！」

すぐに追いかけてきた楯無が、俺の隣に並んだ。

「で、どうしようと思う？　バグについて」

「こんなところで話していいの？」

「ああ、どうせプログラムかなにかのバグの方だと思われる。…さっき説明した通り、バグは予測不能だ。神でもな。それで世界のどこかに巣を作る、でも行動基準は不明」

「謎ばかりね…」

「それで更識の力を使えないかと思うんだよ、俺は。発生したバグと巣を探すだけでもな」

「出来ると思うけど…そのバグがどんな形なのかも、なにも分かってないんじゃ無理よ。闇雲すぎるわ」

「ネックはそこだよな…このルートはまだ無理か。なら……？　楯無、どうした？」

「見てみなさい、面白そうよ」

「ん？　なにが？」

「いいから」

たった今曲がろうとした角で、楯無に引き止められた。
楯無は、気づかれないようにその角のあちら側をうかがっている。

「？」

そして俺も、ワケも分からぬまま身を潜めることになった。
角から、向こう側のことを覗く。

「…一夏と篠ノ乃？」

「ね？　なにか面白そうな雰囲気でしょう？」

これは確か……一巻の最後か！
そう思い出した瞬間に、箒が一夏向けて声を出した。

『ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……』

なんか聞いてることに罪悪感を感じてきた。

といっても、イベントを見逃すわけにはいかないにゃー。

『わ、私が優勝したら――つ、付き合ってもらう！』

一夏に指を突きつけながら箒がそう言った。

「これは面白そうね。フフフッ」

それを聞いた楯無は、意味ありげな笑みを浮かべた。

あれか、あの『優勝したら一夏と付き合える』っていう噂を流したのはお前だったのか。

「あんまり騒ぎを起こすなよ」

「分かってますよ、私の旦那様♪」

……突然何を言いやがる。

いや、間違ってはないんだろうけどもさ。

「で、食堂に行くのか行かないのか。どうする？」

「あ、そうね…」

楯無が、自分の腕時計を確認する。

俺も、自分の携帯を開いて現在時刻を確認。

「もう七時半すぎちゃったわね…部屋にもどる？」

「…だな。キッチンもあるしいいだろ。食材も一回分くらいはあったはずだ」

そんなわけで、俺たちは自分達の部屋に戻ることに。

「あー、俺料理すんのメンドイ」

「私がやるからいいわよ。拓神は座っててて」

「オーライ、今回も期待してる」

ちなみに楯無の料理は何度か食べたことがあるが、上手い。かなり美味い。両方とも誤字ではない。

俺も出来ないことはないが、楯無の料理と比べると月とスッポンくらいの差。

（…だと本人が思っているだけで、実際はそれなり）

楯無の料理を美味しくいただいた後は、それぞれの行動に移る。

楯無は、生徒会長の仕事。

俺は『マイスターズ』の確認。

今日の戦闘で、何かしらの影響が出ていたら対策しなければなら

ない。

◆

楯無が部屋から出て行ったあとで、ティエリアに話しかける。

「ティエリア、『マイスターズ』の詳細データ出してくれ」

『わかった。……表示するぞ』

ネックレスから空中投影ディスプレイが展開、そこにデータが表示される。

そしてその画面の隅には、ティエリアが写っている。

「無人機との戦闘の前後で何か問題は？」

『現在のところは無い。しかしあのバグという存在が未知数だ、今でも問題のサーチは続けている』

「わかった、それは続けてくれ」

『了解』

他には――

「ああ……そろそろ第三世代機を普通に使い始める」

『なぜだ？　アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２でも現環境なら十分対応できているぞ？』

「慣れといた方が後々有利だ。それにＶＴシステム事件の時には、第三世代機の姿を生徒の前でさらすことになる」

『全力…か？』

「そういうことだ、ティエリアもそのつもりでいてくれ。ＧＮセファーもエクシアとデュナメスで使うかもしれない」

『了解した。そのつもりで調整をしておこう』

「任せた。それと聞きたいことがある、ＧＮアームズはどうなってるんだ？」

『ＧＮセファーと同様、任意で展開可能だ。だが、エクシアとデュナメスでしか使えない』

「問題ないさ。他に問題は……キュリオスだな」

『キュリオスが問題とは？』

「ああ、巡航形態への変形って大丈夫なのか…ってな」

『そういうことか……基本的には問題ない。あの変形は人の形をかなり維持しているからな、以降のキュリオス系列機も同様だ』

「そうなのか…なら良かった、気兼ねなく使える」

本当によかったと思う。巡航形態のときは常に痛みがあるとか無理だ。

『それと『キュリオス　ガスト』になれば大気圏の突破が可能だ。もちろんその後の大気圏外活動も可能になっている』

ディスプレイに、ガスト仕様のキュリオスの画像とスペックデータが表示される。

「……この世界の事、色々超えたな」

『……そうだな』

宇宙で活動可能とか…行ってどうするんだよ……

『ん？　…更識が帰ってきたようだ。全てのウィンドウを閉じる』

目の前にあった空中投影ディスプレイが消失、ティエリアの声も聞こえなくなった。

ガチャッ

「ふぅ、ただいま」

「ああ、お帰り」

ティエリアが言ってた通りに楯無が帰ってきた。

どうやって知ったのかは気にしない方向で。

「仕事ってなにしてきたんだ？」

「今日の襲撃事件に関することね…来月に『学年別個人トーナメント』ってあるじゃない？　まだ確定じゃないけど、個人じゃなくてタッグになりそうよ」

「もしもの事態に対する対策と、自己防衛のために……か？」

「ご名答、その通りよ。また今回みたいなことがあっても、二組・四人いれば訓練機でも時間稼ぎにはなる…ということらしいの」

「ま、妥当だろ。もしもなら俺が力技で遮断シールド破るし」

「ふふっ。ま、頼りにさせてもらうわ」

微笑んでそう言った楯無は、自分のベッドで横になった。

「？　シャワー浴びないのか？」

「少し休ませてもらうわ、お先にどうぞ」

そう言われて、断る理由は無い。

「お言葉に甘えさせてもらうよ。じゃ、お先に」

着替えを持って洗面所（脱衣所も兼ねている）に。

てきぱきと服を脱いで、洗面所からシャワールームへ。

ちなみに、この学園のシャワールームは広い。

流石に二人はきついが、一人だと十分な余裕があるくらいだ。

シャァァァァァ……

とりあえず頭からシャワーを浴びる。

「はあっ、今日は疲れた……」

精神面でも肉体面でも…な。

ある程度浴びてからシャワーを止めて、シャンプーを取って髪を洗う。

ちなみに、俺はリンスやコンディショナーはつけない。

理由？　面倒だから。

またシャワーを出してシャンプーを落とす。

そこまでしたところで、拭くためのタオルを洗面所のほうに忘れたことに気がついた。

扉がある後ろに振り向いて――――

ガチャッ

ドアの開く音。

そのまま恐る恐る首だけで振り向くと…

「はーい。忘れ物よ？」

楯無。

俺のタオルを持っているが、なぜかスク水。そしてエロい。

「ありがと…じゃなくて、何でスク水――うおっ、入ってくるな！」

さっきの通りこのシャワールーム、広いには広いが一人の場合。
二人はきつい。
つまり、必然的にお互いの体がくっつくわけで…察してくれ。

「スク水で何しに来たんだ…？」

「タオルを渡しに来たの」

そういってポフッ、とタオルを頭に載せられた。
持ってきてくれたことは普通にありがたいので、髪を拭く。

「……じゃあ何でスク水？」

「あら、裸の方が良かった？」

「違う！」

俺は裸だけどな！

「あははっ、本当は背中流しに来たの」

「そうかい…好きにしてくれ」

やっぱり勝てる気がしない。

「…じゃあ、好きにしちゃうよ」

そう言った楯無の手が、俺の前にまわってきて…

「お、おい！　なにして――っ！？」

その綺麗な指が、俺の胸板を這うようになぞる。

「な、なにをっ…」

「ふふっ、拓神は可愛いなあ」

「背中を流すって言ったろ――くぅっ」

「『好きにしてくれ』って言ったのは拓神だよ？」

耳元で囁くようにそう言われる。

というか言葉の内容はどうでも良くて、楯無の熱い息が耳にかかる。それと胸をなぞる指の感覚で、なにかこみ上げてくる感覚が俺の理性を削る。

「っ…好きなように解釈するなよ」

「え？　違った？」

「分かってるくせに――うぁっ」

「ふふ、拓神も好きに動いていいのよ？」

「ああ、そうかい」

神力についての追加知識。

これは、体外に出す際には大体自由に変質させることが出来る。
ちなみにこれは楯無にした、力を渡すとは別。
毒とかにも出来ることには出来るのだが、それをすると自分まで確実に食らうのでそういったのは使えない。
頻度が高そうなのは（まだ使ってないため、どれをよく使いそうなのか分からない）、治癒（再生）と睡眠。
今考えたが、睡眠はコイツをとめるのに重宝しそうだ。

そういうわけで、さっそく。
首だけで楯無の居る後ろを振り向く。

「なあに？」

「いや、そろそろ止めようと」

片腕を伸ばして楯無の頭を引き寄せて、口付けをする。
それと同時に口から、『睡眠』に変質させた神力を出す。

「んっ――――ふぁっ……何かした？」

「眠らせるために、な」

すぐに楯無の目は虚ろになって、閉じられる。
そして俺にもたれかかるように寝てしまった。

「…あぶねぇ。さて、何とかするか」

まず自分だけシャワールームから出て、着替えを着る。
そしてまたシャワールームに戻って、楯無をお姫様抱っこで抱きかかえる。

そして邪念を振り払いながら水で濡れた楯無をある程度拭いて、俺のワイシャツを気休め程度でもスク水の上から着させて、ベッドの上に寝かせて布団をかけた。

「これで、よし…と」

自分の服は濡れないようにしたから問題ない。

その後、もう一度シャワーを浴びて体を洗った。

出てきてから、まだ慣れてない力を使った影響なのか、いつもより大きな眠気に襲われた。

「ふあぁ…っと。……ふう、寝るか」

そして俺は、“楯無が居る方の”ベッドに入る。

いつも迫られたりしてるんだ。このくらいのご褒美はもらってもいいだろ?

俺は、楯無の頭を一回撫でてから頬にキスして目を閉じた。

事の結末（後書き）

どうでした?

諸事情で（学校だから）時間がないので今回はこのあたりで。

では、感想・アドバイス待ってます。

次回『休日は・・・』

休日は・・・（前書き）

今日も学校で投稿のＩＳです。

では、どうぞ

休日は・・・

六月頭の休日。

大体の生徒は学園の外に出かけたりして、普段より閑散とした学園。

それに違わず、一夏も五反田弾（ごたんだだん）という中学時代の友達の家に出かけた。

そして俺は、そんな休日にも関わらずアリーナに居た。

「――モード選択（セレクト）『キュリオス』」

『了解、モード選択ＧＮ－００３『キュリオス』』

今まで纏っていた白とモスグリーンの装甲――『デュナメス』――から、白とオレンジの装甲――『キュリオス』――に変わる。

左腕に細身のシールド。

右手には二連装ビーム砲のＧＮサブマシンガン。

両膝には巡航形態での主翼。

そして背中に巡航形態時の機首となるパーツ。

ＧＮ－００３『ガンダムキュリオス』

人型から巡航形態に変形。
アリーナの中央を支点にその周囲を巡る。
中央には的（ターゲット）が出してあって、それは自動で攻撃を行ってくるタイプのもの。
的が撃ってくる弾を、左右のロール・急上下昇で回避。
そして人型に戻って、全ての的をＧＮサブマシンガンのビームで撃ち抜く。

そこまで終えた俺は一度地上に戻ることにした。

「『マイスターズ』解除」

装甲がＧＮ粒子になって消え、運動用のジャージに戻る。
俺の機体の特性上、ＩＳスーツを事前に着る必要は無い。

専用機持ちの特権『パーソナライズ』。
これはＩＳの展開と同時にＩＳスーツを展開するもので、着替える必要が無い。
ただし、それにはエネルギーを消費するために緊急時以外で使われることはあまり無い。
が、俺の機体のコアとして扱われている『ＧＮドライヴ』。無限にエネルギーを生産し続けるコレだと、多少のエネルギー消費は気にもならない。

そういえば、今日なぜ俺がアリーナに居るのかというと、確認のためだ。
先月あった襲撃事件。あれから俺は第三世代ガンダムを使っての自主訓練を始めた。

今日はその最終確認。
その四機にもそれぞれ慣れたし、デュナメスでの狙撃精度も十分になった。
なぜこんなに早く上達するのかは、父さん（神）が枷を外してくれたからだと思う。
これまでよりも身体スペックが上昇してる。
……ちなみに『ラジエル』は元が戦闘用の機体ではないので使ってない。

――どうだった？

――もう十分だろう。いろいろと、一生懸命努力している者には悪いんだが。

――そう言うなって、その代わりにこの学園だけは最低でも守るさ。

――当たり前だ。そうでなければ何のための力だ？

――分かってるよ、ティエリア。

この力は守るための力。
相手を“破壊する”力だとしても、俺にとっては守るための力だ。

――あの無人機に独白したようにな。

「あ、終わったんだ。お疲れ様」

「ん？　――楯無か。どうしてここに？」

ピットに戻った後、聞こえた声に反応すると、制服姿の楯無。

「こっちの事もひと段落ついたから、拓神の様子を見に来たの」

「なら、こっちも丁度ひと段落ついたところだ」

「残念ねえ、久しぶりに拓神と戦おうと思ったのに」

「…いつからお前はバトルマニアになったんだ？」

「あら、失礼ね。どのくらい強くなったか気になるだけよ？」

「自分で確認しないといけないタイプ…か？」

「ええ、出来ることはね」

そうらしい。

思ってみれば、楯無について知らないことは結構ある。

「ま、俺はもう上がるけど？」

「それじゃ、私もここに用事は無くなったわね」

お互いにアリーナに用は無くなったから、寮に向かって…正確には部屋に向かって歩き出す。

「今日も教師陣との会議だったんだろ？　議題は『学年別個人トーナメント』か？」

「その通りよ。……結局、タッグマッチになったわ」

「ふうん。さて、誰とペアを組もうか……」

「…私とは、学年が違うから組めないわよ？」

「んなことは分かってる」

真面目にどうするか…原作どおりなら、一夏はダメ。

俺は――――！　そうだ、のほほんさん《本音》に頼むとしよう。

「というか、それだと『学年別個人トーナメント』じゃなくて『学年別トーナメント』だよな…？」

「そうね。でもまあ、生徒への発表はもう少し経ってからでしょうしね」

「…まだ先月の襲撃事件のこと色々やってるもんな」

「おかげで、こっち《生徒会》にも仕事が多く回ってきてるわよ？」

「うわ、面倒だ」

ちくせう。あの無人機め…いや、送り込んだ本人知ってるけど。

「ねえ、拓神」

「なに？」

「あの力について聞きたいんだけど…」

「ああ、答えられる範囲なら答える」

「最近、身体能力が上がってる気がするんだけど…これって神力の影響？」

「合ってて合ってないな。俺と同じ存在になったってことは、体のリミッターが少し外れてるってこと。それがデフォルトでさらに神力を使って強化が出来る…って具合だな」

「そっか」

「だから普段は力をセーブしとかないと、人が出来ないことも出来るから……」

「…人外よね？」

「ストレートに言いすぎ…っと部屋に着いた」

話をしながら歩いていたら、部屋に辿りついていた。

最近じゃ、部屋への道のりを体が覚えてる。

さっさと部屋に入って、話の続き。

俺らは、ベッドに隣同士で腰掛ける。

「てか、半神なんだから人外なのは当たり前だ」

「あ、開き直った」

「事実だからな。人の姿でも人じゃない存在…ってとこだ」

「まあ、それはどうでもいいわ。拓神と居られるなら、ね♪」

「…どうして、そんな恥(はず)い台詞をサラッと言えるんだ?」

今更でも、流石に気恥ずかしい。

「いいじゃない、二人っきりなんだし」

「そうだけどなぁ……こっちが恥ずかしい」

「あら、私もよ。……それより、どうしたら拓神と一緒になれるか考えてるんだけども?」

「…おい、なんか卑猥な方に聞こえたぞ」

「だってそうだもの。……ね、私とキモチイイ事、しない?」

「今はまだやらない。急ぎすぎだ。別に、俺はお前といつまでも一緒に居る」

「嬉しいこと言ってくれるわね。でも、その台詞も十分、恥ずかしいと思うけど?」

「いいんだよ。二人っきりだろ？」

「もう、仕方ないなあ」

「何がだよ」

ゾクッ、という嫌な予感…また何をする気だコイツは。

「ふふっ、それはしてからのお楽しみ♪」

「するってなにを…っと」

するっとベッドの上に行った楯無に、後ろから抱きしめられる。

「――ありがとう。本当に嬉しいわ…」

「楯無……当たり前だ。俺もお前と居たいからその力を渡したんだからさ」

「今は、本当の名前で呼んで…」

「ああ、わかったよ……■■」

「うん…」

嬉しそうに頬を赤くした楯無。

それにいつもとのギャップがあって、可愛くて…俺はいつの間にか、楯無にキスをしていた。

◆

楯無とある程度…まあ、察してくれ。

その後で、俺は今月の予定表に目を向けていた。

『学年別個人トーナメント』――――いや、『学年別トーナメント』か。

一週間かけて行われるこの行事…といってもすぐにアレが起きるだろうけど。

これで確認するのは、一年・浅い訓練段階での先天的な技能。二年・そこから訓練した成長能力。三年・具体的な実戦能力の評価……こんな感じの説明だったはずだ。

それで、特に三年の試合には企業からのスカウトをはじめ、多くの注目が集まる。

もちろん一年・二年も見られるわけで、才能・実力が十分あるとなれば声をかけられるくらいにはなる。

ちなみに前回、クラス対抗戦での襲撃事件。

あれについては緘口令（かんこうれい）が敷かれ、直接関わった者には誓約書を書かせていた。もちろん俺と楯無も書いた。

「拓神、食堂に行きましょう？　もう夕食の時間だわ」

「おう、行くか」

時間が進むのはやっぱり早い。もうこんな時間になってたのか…
…イチャつきすぎたか？
まあ、そんなことはともかく、部屋から出て食堂に向かった俺と楯無。

ついたら、料理を受け取って空いてる席に座った。
と、ここで。

「ふふっ、ちゃんと広がったようね」

楯無の目線の先は、スクラムを組むようにして集まっている女子。
その話の話題は『学年別個人トーナメント』で優勝すれば一夏と付き合える。というもの。

「もう手回ししたのか」

「ええ、何事も迅速に。よ？」

「余計なことまで迅速にやらなくても…でも面白そうだから賛成だ」

「なら、良かったじゃない？　あ、噂をすればなんとやら、かしら？」

「ああ、そうだな」

食堂の入り口からたった今入ってきた一夏と鈴。

それぞれ食事を受け取った後、俺たちを見つけた一夏と鈴がこっちに来た。

休日は・・・（後書き）

お分かりとは思いますが、二巻突入です！

ＶＴシステムどうしましょう…他にも考えることが多くて大変です^^；

では、感想・アドバイス待ってます。

次回『転校生は・・・』

転校生は・・・（前書き）

えー、今回も学校から投稿です！（爆笑

今日中にはもう一話くらい投稿したいですね。

では、どうぞ

転校生は・・・

食堂に入ってきた一夏と鈴は、俺たちのところに来た。

「一夏くんに鈴ちゃん。こんばんわ」

「先輩、こんばんわです」

「あ、こんばんわ」

ちなみに一夏、鈴の順だ。

「あん、楯無って呼んでいいのよ？」

「で、でも…なぁ」

「ええ…ってなんであたしに振るのよ！」

「だってさあ…」

「あたしは楯無さんって呼んでるわよ？」

「えっ！？　そうなのか？」

「はいはい、夫婦漫才おつかれ」

このままだと、いつまでも言いあってそうなので止める。

鈴は“夫婦”というフレーズに反応して赤くなった。

パシャッ！

「真っ赤な鈴ちゃんの画像ゲット♪」

楯無…いつの間に携帯出したよ。

「なっ、あ、ああっ！　た、楯無さん！　消して！　消してください！」

羞恥でさらに赤くなる鈴

「んー、どうしよっかなぁ～」

「消してください！　お願いします！」

「じゃあ、一夏くん」

「は、はい？」

「これからは私のこと、楯無って呼んで。それが条件」

すごく楽しそうな楯無。
うん、やっぱりドSだな。俺もどちらかといったらSだ、と自覚はしてるけども。
そう言われた一夏の顔を、鈴が必死の顔で睨んだ。
それに気おされたのか、一夏は口を開く。

「え、えっと…楯無、さん」

「んふふ、合格♪」

さっと携帯を操作して画像を削除。その画面を鈴に見せた。
それを見た鈴は、ほっ、と息を吐いて安心したような顔をする。

「あ、ここ座らせてもらいます」

「どうぞ」

そこで今まで立ったままだった二人が、俺たちの居る机のイスに座った。
ちなみに、俺の向かいは一夏。楯無の向かいが鈴となっている。

「なあ、そういえば拓神は何で楯無さんと一緒に居るんだ？」

「ん？　いや、別に。一緒に食事を取るから、一緒に居るんだけど？」

嘘は言ってない…よな？

「あら、別にごまかさなくてもいいんじゃない？」

楯無……

「うん？　玖蘭、どういうことよ？」

「いいのか？」

「構わないわ。…いえ、むしろその方が、ね」

ばらしとけば、俺に寄る女子が少なくなる。…独占欲ですかァ？
嬉しいねェ。
――――っと、ちょっとアクセラ化したんだぜい。

……今度から、一回に二つ入れるのは止めよう。

「そうかい。どういうこと、と言われたら……まあ、俺と楯無は付き合ってるってこと」

「「……」」

一夏と鈴、沈黙
そして――――――

「「「「「――えええええっ！？」」」」」

返ってきたのは二人に加え、近くの話が聞こえるポジションに居た女子十名（学年はバラバラ）ほどの、悲鳴にも近い叫び。
その後、思い思いに口を開く。

「この世界に神はいない…！」

「こんな現実、私は…イヤだね」

「ああ、世界の悪意が見える……」

「美人だし、何でも出来るのに、さらに彼氏まで居るなんて……万死に値するわ…」

…この際、全員がネタじみてるのは気にすることじゃない。

つかコレ、無意識に声だしてるよな？　狙ってないよな？

そして楯無、得意げな顔で周りを見るな。このカオス狙っただろ。

「ほ、ホントなの！？」

そして鈴である。

俺が反応する前に、楯無が口を開く。

「ええ、本当よ。ね、拓神♪」

「ああ…でも人前でくっつくな」

楯無が、俺の片腕に抱きついてきた。

ほら、さっきの女子がさらに絶望に染まった顔になってるぞ？

「あら、いいじゃない。もうばらしたんだし」

…ここで、久々に一夏が声を出した。

「あ、あの…俺たちってお邪魔でしたか？」

「気にしなくていいのよ？　私達も気にしないから」

「俺は気にするからな？　人前でイチャつく気は無いからな？」

「なら、部屋ならいいの？」

「別に良いよ？」

「やった♪」

おい、どうして肉食動物の目になる？

……帰ったら早く対処しよう。

「え、えっと…なんていうかアレなんで、俺たちはこの辺で」

「え、ええ。失礼させてもらうわ」

まあ、目の前でこんなにされたら…なあ。

気持ちは分からなくないが、同情はしない。

「了解…ま、凰はがんばれ」

後半は小声で。鈴と、隣の楯無だけに伝わるレベル。

「なっ、なににょ――ッ…！」

あ、噛んだ。

またもや恥ずかしさと、失態の羞恥とで赤くなった鈴。

そしてそれを、ニヤニヤ顔で見てる俺と楯無。

そんな状況下だ。鈴はさっさとどこかに行こうとして――

「あ」

「あ」

「一夏、あってなによ、あって。――あ」

順番は上から、一夏・箒・鈴。

箒はこの前の『付き合ってもらう』発言から、一夏とギクシャクしてる状況だ。

…このメンツで「あ」って……レア――なんてもんじゃなくて、これっきりだろ。

「じゃ、私達はおいとまさせてもらいましょうか」

「いまさらどの口がそんなことを言うのか…」

「この口。……塞いじゃう？　もちろん口で」

この台詞を聞いた鈴と箒は一夏から視線を逸らして、顔を赤くする。

「……さて、帰るか」

「あっ、ヒドーイ。待ってよ～！」

酷くない。原因を作ったのはお前だ。
そして部屋に帰った後は…察してくれ。

◆

月曜の朝。

いつも通り、隣で寝てた楯無を起こして――最近これに幸福を覚えるようになった――朝やるべき事をサクサクと済ませて、教室に入った。

――と、とたんに今までＩＳスーツのカタログを見ながら、あれこれ言い合っていた女子の視線が俺に集まる。
理由は……楯無との件についてだろうなあ。

案の定のようで、クラスメイトの女子は俺に寄って来た。

「ねえ、玖蘭くん！　あの話…二年の先輩と付き合ってるって本当なの！？」

「ああ、マジだぞ？」

「「「きゃあああああっ！！！」」」

ぬおぁ！　み、耳がぁぁっ！
ソ、ソニックウェーブだと！？

「で？　告白はどっちから？」
「どこまで行ったの？」
「どこを好きになったの？」
等々…ｅｔｃ

一気に質問攻めに飲み込まれる。
こんなのは入学当初以来だぜい…

「そういうのは、二人の秘密だから答えないぞ」

「「「きゃあああああっ！」」」

ぬぅっ、今のどこに叫ぶ要素がっ！

結局この状況は、織斑先生が鎮圧するまで続いた。
ちなみに、俺も出席簿の一撃をもらうことに…なんでさ。

◆

「さて、改めて…諸君、おはよう」

「おはようございます！」

乱れの無い返事。さすが織斑先生。
実際に言ったらマジで首が飛びかねない理由が、頭の中にどんどん出てくる。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

下着で何が構わないのか、三〇字以内での説明を求めたい！

ほかにも、全員が突っ込んだだろう…心の中で。実際に言う勇気は無い。

ちなみに、学校指定の水着＝スクール水着だ。

絶滅危惧のアレが、こんなところで使われているとは誰も思わないだろう。

そしてこの間、楯無が着てたのもコレだ。

そして個人用のＩＳスーツ。

学校指定のものがあるのに個人で用意する理由は、ＩＳは操縦者に合わせて一人一人、十人十色の仕様に変化するものだから、早いうちに自分のスタイルを確立することが必要とのこと。

「では山田先生。ＳＨＲを」

トレードマークと言っても良いその大きめな眼鏡を拭いていた山田先生。

突然織斑先生から話を振られたことに驚いたのか、慌ててソレをかけ直す。

「え、ええとですね…今日は――『も』ですかね？　転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「え…」

「「「「「ええええええっ！？」」」」」

さて、来たか。

シャルル・デュノア…いや、シャルロット・デュノアにラウラ・ボーデヴィッヒ。

ちなみに、転校生の情報は事前に楯無から聞かされている。

……シャルル・デュノアは怪しいということも。

――ん…、彼――いや彼女か。

――お、ティエリア。そうだよ。

本当に久しぶりな気がするのは、気のせいなのか…？

――最近、僕の扱いが悪くなっている気がするんだが？

――そうか？　そんなことはないと思うけど…？

――そうか…ならいいんだ。彼女は…

――原作通り、だろうな。ま、一夏に任せるさ。説得はあいつのほうが上手いだろ。

――そうか、了解した。

ティエリアとの会話を終えると、教室のドアが開く。

「失礼します」

「……」

入ってきた二人をみて…正確にはその片方を見て、クラスのざわめきは怖いくらいに静まる。

理由は簡単、その片方が男子にしか見えないから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました――」

転校生は・・・（後書き）

シャル&ラウラ登場です！
どうしようどうしよう、主にシャルのほうどうしよう。

では、感想・アドバイスお願いします！

次回「二人の転校生」

二人の転校生（前書き）

昨日のうちに投稿したかったです。

アリアのアニメ始まりましたね。
早くレキでないかな。ワクワク♪
白の武偵のほうの創作意欲が湧きました！

では、どうぞ

二人の転校生

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルの自己紹介。

教室は『嵐の前の静けさ』とでも言うほど、静まっている。

「お、男……？」

誰かがそうつぶやいた。

普通だったら聞こえない音量のそれも、今の異様に静かな教室では聞こえる。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

彼女――――いや、彼は現状、完全に男子だ。

街角調査で見知らぬ人に聞いて、１０人中９人は男子と答えるだろう。

深い金髪。黄金色とでも言うそれを首の後ろで束ね、人なつっこそうな笑みを浮かべている。

体は男子にすれば華奢で、初見の印象は『貴公子』が一番しっくりと当てはまる。

ちなみに、街角調査の残り一人は……『男の娘』。いや、男じゃん！？

「きゃ…」

「きゃ？」

さあ、来るぞ、嵐がっ！！！

「「「「「「きゃあああああああああっ！！！！！」」」」」」

っ！？――ばっ、馬鹿なっ！

耳を塞いでいたのに、貫通されただと！？

…次からは神力も使って防御することを考えよう。

すぐに、さっきまでの静けさはどこへやら。女子が騒ぎ出す。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～！」

キター！（おだゆ○じ風）

……なんか、言わなきゃいけない気がした。

まあ、シャルルが男子として入ってきたから、俺と楯無のことはいつの間にか認知されてる……そうなるといいなぁ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生のうざったそうな、ぼやき。

けれども、それだけでクラスは静かになる。さすが織斑先生。

「皆さん、まだ自己紹介は終わってませんよ～」

その山田先生の声で、俺はもう一人の転校生『ラウラ・ボーデヴィッヒ』に意識を向ける。

髪は白に近い、輝くような銀髪。

それはまとめることもせず、腰まで下ろされている。

右目の色は赤。楯無よりも深い赤色。

そして、左目には眼帯。

某ボスのしていそうな、マジな黒眼帯。

スネ○ク！　ス○ーク！

――ゲフゲフ、何でもない。

ラウラの印象は、やはり『軍人』

身長は、横に並ぶシャルルに比べて低い。女子の中で比べても低い部類に入るくらい。

当の本人は、口を開かないでただ一点…織斑先生だけを見つめている。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉に、佇まいを『ピシッ』と効果音がつきそうな感じで直すラウラ。

それには、クラスメイト全員がポカーンとなった。

教官。と呼ばれた織斑先生は額に手を当て、めんどくさそうに息を吐くと口を開いた。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ラウラはドイツ軍特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』、通称『黒ウサギ隊』の隊長……だったかな？

そろそろ原作の記憶が、細かいところから薄れてきやがった。

……でもまあ、それでもいい。他人の、俺の知ってるはずの無い過去を知ってるというのは気分が悪いからな。

ここでやっと、ラウラが口を開いた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

うん、それだけ。

クラスは沈黙、山田先生はあせあせ。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

冷徹な雰囲気を纏ったラウラは、反論は許さない（織斑先生以外）という空気をかもしだす。

ふと、一夏とラウラの目が合う。

「！　貴様が――――」

ラウラはツカツカと一夏に歩み寄り――――

バシンッ！

「……」

「う？」

強烈な無駄の無い平手打ち。

つか、なに間抜けな顔してんだ、一夏。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

クラス中が、一夏とラウラに注目。

箒なんかは、口をポカンと開けて固まっている。

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

ここで、突然の事にログアウトしていた一夏が戻ってきた。

声を上げて抗議するも、ラウラは軽く受け流し、ツカツカと自分の席に座ると、腕を組んで目を閉じる。

「あー……ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

こんな状況でも織斑先生が話し始めると、全員の意識が織斑先生に向く。……いや、どんだけだよ。

さて、さっさと教室から脱出しよう。

女子と一緒に着替えるなんざゴメンだ。変態のレッテルを貼られちまう。

「おい、織斑と玖蘭」

「はい？」

教室から出て行こうとしたところで、織斑先生に一夏ともども呼び止められる。

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「織斑君と玖蘭君？　初めまして。僕は――」
「話は後にしとけ。一夏、さっさと行くぞ」
「おう！」
一夏がシャルルの手を取って先導する。
「一応、俺ら男子は毎回アリーナの更衣室まで移動することになってる。早めに慣れてくれ」
「う、うん」
「一夏、早くしないと不味いぞ」
「分かってる！」
早く行かないと不味いことに――
「ああっ！　転校生君発見！」
「しかも、織斑君と玖蘭君も一緒！」
くそっ！
「いたっ！　こっちよ！」
「者ども、出会え出会えい！」
ここは武家屋敷じゃない！　というツッコミをしたい衝動に駆ら

れるが、そんなことをしてる暇は無い。

「織斑君と玖蘭君の黒髪も良いけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃあああっ！　見てみて！　織斑君と手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

あーもう、ツッコミを入れたい！

なんだよお前！　毎年河原の花あげてたのかよ！　…いや、自分で採ってきたヤツだし、綺麗であれば良いのか？　それと感謝が伝われば……まあ、置いとこう。

「な、なに？　何でみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「ああ、その通りだ」

「……？」

何でワケがわからないって顔をする？

…ボロが出るの早すぎだろ。一夏がこういうところでも鈍感でよかったな。

「いや、普通に珍しいだろ。ＩＳを操縦できる男って、今のところ俺たちしかいないんだろ？」

「あっ！　――――ああ、うん。そうだね」

「さて、雑談はそろそろにしとけよ？……包囲された」

「えっ、うわ本当（マジ）だ」

「ど、どうするの？」

走ってたはずなのに、いつの間にか行き先の通路も全てが女子で通行止め。

どんだけエネルギー有り余ってるんだよ、お前ら。

「こうなったら……」

「「こうなったら？」」

おい、一夏とシャル。お前たち今日始めて会ったのに、なんでそんなに息が合ってるんだよ。

「シャルル、まず謝っとく。ゴメンな」

「え？　なんで？」

「……悪い」

まず、一番手近な廊下の窓をあける。

その後、シャルルをお姫様抱っこで抱き上げて――――

「さらばっ！」

「え、お、おい、拓神！？」

「ちょ、まっ――――」

――――窓から飛び降りる。

一夏？　生け贄だよ、生け贄。こういうときは犠牲がつきものだ。

ちなみに、ここは三階。

結構高いね。常人だったら飛び降りれるか降りれないか、危ういだろうな。

ま、俺は常人でも人ですらないんで、っと。

「きゃあああああああっ――――！？」

シャルルの悲鳴。

もはや声だけだと女子だぞ？

そのままだんだん地面が近づいて――――

ダンッ！

着地。膝を折って衝撃を殺す。

それを確認してから、呆然としているシャルルを下ろす。

「ほれ、さっさと行くぞ。デュノア」

「……え、あ、うん。それと、僕のことはシャルルでいいよ？」

「オーライ、そういえば自己紹介がまだだったな。俺は玖蘭拓神、さっきの生け贄が織斑一夏だ。俺のことは拓神って呼んでもらっていい」

「うん、わかったよ拓神」

「おう、ちっ時間が無い。走るぞ！」

「わかった！」

やばい。遅刻したらやばい。織斑先生がっ！

一夏？　だから、生け贄って言ったじゃん？

全力で走って、アリーナの更衣室に到着。

「さっさと着替えるぞ。織斑先生に叩かれたくないだろ？」

「それはね。痛そうだし」

「痛いで済めば良いな。――っと真面目に不味い」

痛いで済めばいいほうだ。

激痛だぞ激痛。そして毎回五〇〇〇個の脳細胞が死滅していくんだ。

俺は、いつも通りに制服の下に着込んでいるジャージになる。

エネルギーはいくら使ってもいいんだ。アレ――ＩＳスーツ――

を自分で着るのはめんどくさい。

シャルルの方を向くと、シャルルは既にＩＳスーツ姿だった。

すごいよね、デュノア社。体のラインとか、これだけ隠せるんだから。

「あれ？　拓神はＩＳスーツ着ないの？」

「ん？　ああ、ちょっと特別っていうか。行くぞ」

俺とシャルルは足早に、更衣室からグラウンドへと向かった。

二人の転校生（後書き）

次回は、なるべく早く投稿したいです。

では、感想・アドバイスお願いしますm（＿＿）m

次回「実戦訓練」

実戦訓練（前書き）

途中で保存したところ以降のデータが消えまして、一応ここまで書き直しました…ｏｒｚ

何度目だろう…でもめげません。

そのおかげで少し短くなりましたが、どうぞ。

俺とシャルルがグラウンドに到着した時には、もう時間ギリギリ。
十秒遅かったらアウトだった。

え？　一夏？　……合掌。

「おい玖蘭、織斑はまだか？」

「えっと、来るときにシャルルを逃がす盾…生け贄にしたので、もう少しかかるとおもいますよ」

「……そうか」

なにやら複雑そうな顔をした織斑先生は、グラウンドの入り口の方に顔を向ける。
兄妹として何か思うことがあるのかな？
まあ、織斑先生“だけには”弟さんを生け贄にしてスミマセンって言いたいけど。一夏には言わないよ。

それから5分後、一夏がグラウンドに走ってきた。

「遅い！」

バシンッ！

「っ――！　……すいません」

「織斑、早く並べ。授業が始まらない」

しょんぼりとした一夏が、俺の隣に並ぶ。

なんやかんやで、笑いを堪えるのに必死な俺だ。

そんな一夏にセシリアが話しかける…自殺行為だ。理由は分かるだろ？

「あら一夏さん、随分遅かったですわね」

ま、その原因俺だけどね。

「スーツを着るだけなのに、どうしてこんなに時間がかかるのですか？」

ちなみにＩＳスーツ。当たり前だがＩＳに乗れるのは例外である俺と一夏を除き、女性のみ。つまりスーツも女性用のみしか必要が無い。

だから普通のＩＳスーツは水着…まあ所詮スク水に近く、肌の露出は多い。でもＩＳにはシールドバリアー及び絶対防御があるので、スーツの面積は少なくても何の問題もない。

それでも、ＩＳスーツにも通常の拳銃の小口径弾を防ぐ（衝撃は通る）くらいの防御力はあるんだが。

「道が混んでたんだよ」

あながち嘘じゃない。
一夏は女子に足止めされて遅れたんだから。

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

美しい花には棘がある…だっけか？
セシリアお前そんなこと言って、鈴と言い争ってなかったか？

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？　そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんわよね」

「なに？　アンタまたなんかやったの？」

後ろの列（二組）から鈴が話しに加わる。…くそっ、被害者が増えていく。なにも、出来ないのか……

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ!?　一夏、アンタなんでそうバカなの!?」

ああ、もう手遅れなのか…

「安心しろ。私の前にも二名いる」

織斑（ラスボス）先生登場。ターミネーターのＢＧＭでどうぞ。
ギギギギッ、と錆び付いたネジのような動きで後ろを振り向く鈴とセシリア。

バシバシーン！

あー、今日も良い天気だなあ～。よく響くんだぜい？

◆

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「「「はい！」」」」」」

二クラス合同の授業のため、人数も通常の倍。三倍で赤では無いのであしからず。

織斑先生への返事も、いつもより大きい。

ちなみにあの二人は…

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

二人とも涙目で叩かれたところを押さえて、鈴に至っては呪詛をつぶやくように一夏の名前を出してる。

……うん。そうだね、怖いね。
元ネタ古いよなぁ。

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活気溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――――凰！　オルコット！」

「ど、どうしてわたくしまで！」

そろそろ織斑先生に対する抵抗は無意味だと知れ。

「専用機持ちはすぐに始められるらだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前ら少しはやる気を出せ――――あいつにいいところを見せられるぞ？」

うわっ、人の恋心を利用してくれやがった。ヒデエ。

「どうした玖蘭、何か言いたそうだな」

「な、なんのことですか？」

あぶなっ、なんで！？　心読めるの？　それにしても危なかった。

「やはりここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

それにしても単純だなコイツら。

こんどコレ利用して、楯無と一緒に弄ろうか？

「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとでも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は――」

キィィィィン……。

空気を切り裂く音。

……来たみたいだな。

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

一夏に向かう、見覚えのありすぎる影。

ドカーン！

一夏はかろうじて白式を展開することに成功したが、ぶつかってきた影と一緒に数メートルごろごろと転がる。

土煙が晴れ、そこにいたのは――――

我がクラスの副担任山田先生（ＩＳ装備）。

そして一夏は、山田先生のＩＳスーツでより強調されたその豊満な胸を鷲掴みしている。

うん、死ねば良いのに。

――ティエリア、デュナメスの右腕とピストルを展開。

――了解、ＧＮ－００２『デュナメス』部分展開。

俺の右腕が、装甲に包まれる。手の中にはＧＮピストルが一丁。

ビシュン！

一夏がビームを、背を反らせてかわす。

これは俺じゃない。やったのはセシリア（怒りｖｅｒ）。

「ホホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

ガシーン

今度は鈴。

両手に持った双天牙月を連結。両刃の青龍刀にすると、それをフルスイングで投げる。

「うおおおおっ！？」

それを再度のけぞってかわす一夏。
ちなみに双天牙月。連結すると、ブーメランのように投擲可能。
そう“ブーメラン”のように。
つまり――帰ってくる。

のけぞって、仰向けに倒れた回避不能の一夏に向かって双天牙月が迫る――

「はっ！」

ドンドンッ！

銃声。やったのは山田先生。
いつものほわほわした雰囲気から一転。目つきも鋭くなって、上半身だけを起こした状態で、双天牙月を射撃。その軌道を逸らした。

「なら、俺が狙い撃つ」

ババッ！

俺は、右手のピストルを構えて双天牙月の軌道を再修正。もちろん一夏の方に。
これ以上の修正は山田先生にも無理なようで、双天牙月はそのまま一夏の――

ザンッ！

――一夏の首、そのギリギリの地面に突き刺さった。

あ、もちろん俺がわざと外した。死人を出すわけにはいかない。

一夏は口をパクパクさせて、まばたきすらしない。

「ちっ、ミスったか」

「拓神!?　お前何してくれてんだよ!?」

「ん?　お前みたいなラッキースケベは許せないだけだ」

な?　と、セシリアと鈴に話を振る。

二人はもちろん、と肯首で答える。

「命拾いしたな。次は無いぞ?」

右腕の装甲とピストルを、粒子に返還して元に戻す。

「まったく、授業が進まないだろう。おい小娘ども、さっさとはじめるぞ」

「え?　山田先生と二対一で?」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける……ああ、それと玖蘭」

「なんですか?」

呼ばれる理由が見当たらないんだにゃー?

「この戦闘が終わったら次はお前だ」

「へ？　ど、どうゆう？」

「なに、お前にも山田先生と戦ってもらうだけだ」

なにそれ？　弟を生け贄にした仕返しですか？　…ブラコンだぁ～！

ズパンッ！

あるぇ？　いま出席簿が音速超えた気がする。そしてそれは俺の頭に。

「――――っ！？！？！？」

イテェ。容赦なく痛い。半神であるこの体でも、すげぇ痛いんですけど！？

「ふん、失礼な事を考えた罰だ」

このｂ――――これ以上なにか考えるのは止めよう。また音速超えの出席簿を食らいたくない。

「ごほん！　では…はじめ！」

実戦訓練（後書き）

次回、主人公の戦闘シーン入りまーす。

最近ティエリアがさらっと出てくるだけですね…ティエリアァァァ！

では、感想・アドバイスお願いしますm（＿＿）m

次回『実戦訓練　2』

実戦訓練その2（前書き）

久々の戦闘シーン……大丈夫か不安です

では、どうぞ

実戦訓練その2

「では、はじめ！」

よく響く織斑先生の声。
俺が激痛で悶えてる間に、三人の用意は終わっていたらしい……イテェ。

セシリアと鈴が飛翔。上に向かったのを確認して、山田先生も空に。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

戦闘開始。
まずブルー・ティアーズ……メンドイ。ビットの射撃を山田先生は、いつものほわほわした感じからは想像もできないような機動で全て回避。
次に鈴の衝撃砲。回避に加え、実体盾での防御で全てを凌ぐ。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみろ」

「あっ、はい」

上空での戦闘を見ながら、シャルルが解説を始める。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。――――

略　省

「――――でも、知られています」

シャルルの説明が終わると同時、上でも決着がついた。

山田先生が射撃でセシリアを誘導、鈴と衝突させて両者の動きをとめたところにグレネードを撃ちこんで終了。

グレネードの爆煙の中から、鈴とセシリアがおっこちてきた。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ……何回面白いように回避先読まれてんのよ…」

「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！　なんですぐにビットを出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！」

負けたのに元気だなあ。

一対一の戦闘だったら五分五分だろうな。

理由は専用機の優位性。操縦技能は二人より山田先生の方が上だろうが、専用機の個人に合わせ操作性などが個人に適応される。

……でも、それでも山田先生の技量だと五分五分の状態まで持っていかれる。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。……さて次は玖蘭だ」

「面倒です」

ズッパァァン！！！

「ごぶぁっ！？」

「いいからやれ」

「はい……」

さっきより威力が上だよ……地面をのたうち回ってる俺からの報

告でした。

「いつつ……『マイスターズ』」

――全く、君は馬鹿なのか？

ぐあっ、心にダメージ。

『『マイスターズ』起動、モード選択（セレクト）ＧＮＹ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』』

ティエリアの余計な一言とともに展開される、もう見慣れた深紅の全身装甲。

装備は右腕にプロトＧＮソード、左手にビームライフル、両足にはピストル。

「じゃあ、山田先生」

「はい、やりましょうか」

――ティエリア、準備を頼む。

――了解している。

…ん？　山田先生は俺たち男子と話をするとき、いつもあわあわしてる感じなんだが……全身装甲だから良いのか？
まあいい、楽しめそうだな。

「では…はじめ！」

山田先生と同時に空へと飛び出す。

「先手は…もらう！」

右腕のプロトＧＮソードの刀身を展開し、山田先生に切りかかる。
山田先生は、冷静に後退して回避。

「そこです！」

プロトＧＮソードを振り切った状態の、隙だらけの俺向けて山田先生はアサルトライフルで弾丸を叩き込んでくる。

――俺の狙いはコレだ。

その弾丸の射線に入るように、左手のビームライフルを投げる。
実弾の弾丸がビームライフルに何発も突き刺さり、爆散。ＧＮ粒子を含む爆煙が辺りを包む。

「モード選択『デュナメス』」

『モード選択（セレクト）、ＧＮ－００２『ガンダムデュナメス』』

その爆煙の中で、俺は装甲を変える。

深紅から、白とモスグリーン主体の装甲に変化した。

「ガンカメラ展開」

額のＶ字アンテナが降りて、ガンカメラを露出させる。

俺は右肩にマウントされているＧＮスナイパーライフルを取り、射撃準備。

全身を外套のように覆うフルシールドを翼のように動かして、煙を四散させる。

山田先生は、あの無人機のときに俺の機体が変化することを知っているので驚きは無いが、下に居る女子はいろいろと言いあっていた…まあ、無視だけど。戦闘中だし。

「狙い撃つぜ！」

山田先生をロックオン。狙いを定めて、引き金を引く。

――機体の制御と防御は任せた！

――了解。

機体制御と防御をティエリアに任せて、狙撃に集中する。

バシュン！

まず一発、コレは回避された……ＭＩＳＳ

バシュン！

二発目、その山田先生の回避先に一発……ＨＩＴ

バシュン！

三発目、よろめいた山田先生に一発……ＨＩＴ

バシュン！

四発目、よろめいているうちにもう一発……よろめきながらも回避された。ＭＩＳＳ

ここで、山田先生が接近してくる。

「せいっ！」

近接ブレード――敵武装情報、武装名　《ブレッド・スライサー》――で、切りかかってきた山田先生。

ガンカメラを収納。左手をスナイパーライフルの持ち手から離して、尻部にあるバーニア。そのサイドにあるビームサーベルを引き抜いて受け止める。

鍔迫り合い。
刀身と刀身がぶつかっている部分から、スパークが飛び散る。

「これで！」

「まだ！」

山田先生が近接ブレードを持っているのとは逆の手。左手に持っているアサルトライフルを、この超至近距離で撃ってくる。
俺が右腕とスナイパーライフルを下ろすと、右側だけティエリアの操作するＧＮフルシールドが前面に。

ガガガガガガギィ！

金属（弾丸）とぶつかり合う、少し耳障りな音。
この至近距離からの弾丸でも、ＥカーボンにＧＮ粒子を纏うこのＧＮフルシールドを破ることはできない。

「甘いですよ、先生！」

スナイパーライフルを量子に返還。
空いた右手でもう一本。バーニアの反対側にあるビームサーベルを引き抜く、と同時に切り上げる。
そのビームサーベルは、山田先生のアサルトライフルの銃身を切り裂いた。
俺と山田先生の中心でそのアサルトライフルは、残っていた弾薬が爆発して爆散する。

その爆発の衝撃で、お互いに距離をとった。

――ティエリア、機体制御をこっちに。

――わかった。

「さすが玖蘭くんですね。強いです」

「山田先生こそ、いつもとは大違いですよ」

ビームサーベルを両方とも仕舞って、両足の太ももものホルダーからピストルを取り出す。

山田先生も、新しくマシンガンを展開した。

「…再開といきましょう」

「いきます！」

サークル・ロンドで円を描きながらの射撃。

加速と減速。急停止をしてお互いに相手の弾丸をかわしつつ撃つ。

やはり山田先生の技量は高い。楯無とまではいかないが……流石、元代表候補生。

互いの弾丸は何もない空間を切り裂き、最終的にはアリーナの遮

断シールドに当たる。
……さて、そろそろこの無限ループを打開するか。

「ＧＮミサイル！」

腰のフロントアーマー、両膝の装甲が開いてＧＮミサイル計二四発を発射する。
山田先生は回避しつつ遮断シールドの近くへ。すれすれを沿うように飛んで、ミサイルを遮断シールドにぶつけて無効化していく。
しかしそのうち一発が山田先生への直撃コース。山田先生はそれを実体盾で防御。
それと同時に、ミサイルはシールドに突き刺さる。そしてミサイル内部からＧＮ粒子を相手に送り込む。

「えっ！？　きゃあっ！」

その結果、山田先生の実体盾は内部から膨張して破壊された。
膨張による爆破で吹き飛ばされた山田先生向けて、両手のピストルを連射。確実にシールドエネルギーを削る。

「ま、まだですよ！」

体勢を立て直した山田先生は、マシンガンを連射してくる。
俺はピストルを仕舞って、再度スナイパーライフルを右手に展開しつつ弾幕を回避。隙をみて接近していく。

接近したところで、左手でビームサーベルをまた引き抜きながらマシンガンを切り裂く。
今度は爆散せずマシンガンは破片となる。
ビームサーベルに山田先生も近接ブレードで応戦。また鍔迫り合

い。
俺は力任せにそのブレードをビームサーベルで弾き飛ばす。
その隙に俺はサーベルを捨て、少し下がって両手で保持したスナイパーライフルの銃口を山田先生の腹部に押し付けた。
「山田先生、終わりですよ」
「そうみたいですね…」
その状態で引き金を、引く。
――ビシュゥゥゥン！
対象物との距離がゼロの状態で撃ちだされたビームは、山田先生を下に吹き飛ばしながら、先生のシールドエネルギーをすべて削りきった。

実戦訓練その2（後書き）

最後のほう大丈夫でしょうか？

キュリオスも出そうかと思ったんですけどね。
今回はデュナメスのみでした。
キュリオスには今後出番作りますよー。ほんとうですよー

では、感想・アドバイスお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『実践訓練その３』

実戦訓練終了～（前書き）

今回も学校か（ｒｙ

まあ、そういうことです。
それと、サブタイちょっと変更。

では、どうぞ

実戦訓練終了～

落ちていく山田先生を回収しようかとも思ったが、Ｓ・Ｅを０にされたらＩＳが強制解除されるわけじゃない。
そんなわけで、山田先生は衝突する前に機体の制御を取り戻し、あぶなげなく着陸した。

それを確認して安堵の息を漏らしてから、俺も下へ降りる。

「玖蘭君、お疲れ様でした」

「山田先生もお疲れ様です」

俺は『マイスターズ』を解除しつつ、山田先生に答えた。

「ふん、玖蘭はまだ機体性能に頼っている部分が多いな。動きが荒いぞ」

「でしょうね。自覚はあります」

やっぱ織斑先生は手厳しい……

パンパン！

織斑先生が手をたたいて、他の生徒たちの意識を集中させる。

「さて、模擬戦の実演も終わった。早速授業に入る。専用機持ちは織斑、玖蘭、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰か……玖蘭は話があるからこちらに来い。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

そう合図すると、シャルルと一夏の二グループに女子が集中する。

「織斑君！　一緒にがんばろう！」

「わかんないとこ教えて～」

「デュノアくんの操縦技術みたいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループに入れて！」

少なくとも今は授業中だから、織斑先生の雷が落ちても知らんぞ？　てか、話ってなんだろう～、なんでだろ～……ごめん、古すぎる。何年前だコレ。

マジで呼ばれる理由が見当たらない…

「えっと…織斑先生、何ですか？」

男子に集まった女子に対する指導（きょうかつ）が終わった織斑先生に話しかける。

「ん？　ああ、言いにくいのだが……アイツを何とかしておいてくれないか」

アイツ？　織斑先生が示す先――グラウンドの出入り口――には……

「ハロー☆」

楯無。

「なぜに！？」

「知らん。なんにせよ、原因はお前だろう。何とかしておけ、そのうち妨害に入りそうで邪魔だ」

「……ええっと、授業は？」

「今回だけ特別だ。いや、アイツを何とかしておけ……これがお前への指導だ」

うわぁ……授業より疲れるんじゃないか？　別にいいけど。

「じゃあ、そうします――ってなにすれば？」

「私に聞くな。授業の邪魔以外なら勝手にしていろ」

「…了解です」

楯無、お前まさか織斑先生まで振り回してるんじゃないだろうな……？

足早に楯無の元まで駆け寄る。

「授業中に何の用だよ？」

「ちょっと真面目なお話。とりあえず拓神は着替えて。屋上に行きましょう」

「？　ああ、わかった」

真面目な話ってなんだ？

それを気にしながらも、アリーナ更衣室でジャージの上から制服を着て楯無と再合流。そのまま屋上に向かう。

「で？　話ってなんだ？」

屋上のフェンスに背を預けて、話を切り出す。

楯無も同じように、俺の隣でフェンスに身を任せた。

「そんなに急かさなくても。授業サボれてよかったでしょ？」

「まあな…つかお前は何でサボってるんだよ」

「私も許可はもらってるからいいの。……正直なところ、ＩＳ関係

の座学って専用機持ちにとっては復習だから暇なのよ」

「オイ、復習でもしっかりやれよ。つか生徒会長がサボっちゃだめだろ」

「まあ、細かいことは気にしない気にしない。じゃ、そろそろ本題に入るわね」

「はぁ……了解」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ～？　ま、本題なんだけど…ＶＴシステムって知ってる？」

「『ヴァルキリー・トレース・システム』、略称ＶＴシステム。モンド・グロッソでのヴァルキリー受賞者の動きをトレースするシステム……それがどうかしたか？」

「流石、拓神ね。ご名答よ♪」

どこからともなく取り出した扇子を楯無は開く。そこには『大正解』と書いてあった。

…たぶん、自分で書いたんだろうな。

「で、ある情報筋――――といっても更識家なんだけど、うちの諜報部からの情報で『ドイツのＩＳにＶＴシステムが仕込まれている可能性がある』らしいのよ。何か知らない？」

更識家どんだけだよ。やったとこでも極秘情報だろ、それ。

俺は原作知識で仕込まれてることは知ってるけどさ。

この世界で未来のことを教えると何が起きるかわからないからな……余計なことにならないようにするとしよう。

「俺は知らない……ボーデヴィッヒを警戒しろと？」

「ええ、話が早くて助かるわ。でも、念のためのよ念のため。自然に見ててくれればいいわ。……拓神が他の女の子を意識的に見てるのは気に食わないけどね」

「ＯＫ。てか嫉妬するなら俺に頼むなよ」

「頼れるし、制圧できる能力もあるから頼むのよ？」

「そりゃ……。ありがとうって言うべきかなんと言えばいいのか…」

「キスでもいいわよ？」

「なんでだよ！」

本当なんでだよ！　話のつながりが見つからない！

「じゃあ、えっちぃこと？」

「なんでさ！」

「あははっ♪　冗談よ冗談」

「当たり前だ。真昼間からなに言い出しやがる」

「あら、じゃあ夜ならいいの？」

「……さあな」

自分で墓穴掘った感があるなあ。

「可能性はアリって考えていいのかしら？」

「黙秘で」

「攻めちゃうわよ？」

「……逃げ道は？」

「無いわ」

即答ですか…そのうち覚悟決めとこう。それまでは抵抗するけど。

いや、いっそのこと抱いちまおうか……まだ早いよなぁ。

「…まあ、そっちの話はともかく。本題は終わったのか？」

「逃げたわね」

うるせい。逃げてもいいだろうが。

「まあ、ＶＴシステムについての話だけだからね。私からの話は終わり」

「そうかい。いまから授業にもどるのもアレだしなあ…なんかない？」

「私とえっちぃこと、する？」

「事あるごとにそれ！？」

「ふふっ、だって拓神の反応かわいいんだもん」

ぐあっ…やっぱし楯無に弄られる運命なのか、俺は。

そしてその笑顔はいろんな意味で反則だ。

「はあっ」

「ため息大きいなぁ、おねーさんのハートは傷ついちゃうぞ？」

「楯無が、おねーさんって言ってるの久々に聞いた気がする。そしてそんなに簡単に傷つかないだろうが」

「むー、ひどいなあ。…なに？　ずっとおねーさんって言った方がいい？」

「俺は残念ながら、姉フェチとかじゃないんだなぁ。…楯無みたいなのは好きだけど」

「えっ？　と、突然なに？」

不意打ちには弱いのか？　追撃による検証、と。

「ん？　彼女のことを好きって言っちゃだめか？」

「そ、そんなことはないけどさ……」

「……ぷっ、ククッ」

「え！？　なに、なんで笑ってるの？」

「だって、楯無いつもと違いすぎ。自分が攻めるのよくても攻められるのは弱いんですかぁ？」

「――――っ！　もう、私ををからかっちゃだめよ？」

「いや、いつもからかわれてる仕返しができるのが、こんなに楽しいとは」

検証結果。楯無は攻めるのが好きでも、攻められるのに弱い。

「むー……ふんっ」

ぷいっとそっぽを向いてしまう楯無。

…い、いつもとのギャップが！！　か、可愛いんですけど？

そんな楯無の耳元に顔を近づける。うん、もうちょっと弄りたくなっちゃったね。

「なあ、楯無」

「……」

「…キスしていい？」

ぴくっと一度だけ反応したが、それ以降は何もなし。

よし、続けよう。

「だめか？　なら…」

溜めて……

ふっ

楯無の耳に向けて息を吹く。

「あっ……」

小さく声を上げ、一瞬こちらを見ただけでそれ以降の変化は無し。

「次は…どうしよっか？」

「……」

そろそろやめてあげるか。

見返りをあげなきゃだし。

「もう、可愛いなあ。…そういうところもさ」

俺は、手を楯無の腰に回して後ろから抱きしめた。

「ごめんごめん。好きな子には意地悪したくなるだろ？　……どうしたら許してくれる？」

「……して」

「聞こえない」

「…キスして？」

「わかった」

横を向いた楯無の、その唇に自分のを重ね……数秒してから離れた。

と、ここで楯無に動き。

俺の腕の中で体を動かし、俺と向き合う格好になる。

そして、その顔にはいつもの不敵な笑みを浮かべてた。

……ありゃ、やられちゃったかな？

「んふふ、かかったわね？　――――んっ」

今度は楯無から唇を重ねられる。

そして俺の方に舌を侵入させてきた。

「んんっ！　んく…っ…ん……」

「ん、ちゅっ――――ごちそうさま♪」

「ふうっ、お前なあ……」

「あら、何か文句ある？　弄られた見返りくらいあってもいいでしょう？」

うわー、楽しそう。

嵌められたし…計算高すぎるぞ楯無！

「最後にキスしてあげたよな」

「あの程度じゃ駄目よ。まだ、もうちょっとして欲しいけど…」

と、ここで午前中の授業が終わる合図。

って…ええっ!?　もう昼間!?　んな馬鹿なっ!?

「もうお昼だからね。食堂に行くわよ？　誰かここに来るかもしれないし」

「あー、了解」

楯無を抱いてた腕を放す。

「なに？　残念なの？」

「……かもな」

ぼそっ、と小声でつぶやく。

「え？　なんて言ったの？」

「気にするな。行くぞ～？」

あんなこと、直接は言えないだろうが。

楯無に言ったらどうなるか目に見えてるしな。

俺は逃げるように、フェンスから身を離して屋上の出入り口に向かって歩き出した。

実戦訓練終了～（後書き）

そううういえば、箒とセシリア最近居ないなぁ…

そして楯無である（笑

感想・アドバイスお願いしますm（＿＿）m

次回『シャルルと一夏と』

シャルルと一夏と（前書き）

前回の次回予告、間違えましたすいません。修正しておきます。

前話は、昨日投稿できなかった分と思ってください。

では、どうぞ

シャルルと一夏と

早速だが…結論から言うと俺は、昼飯のイベントに乗り損ねた。

「……ちくせう」

いや、ある意味セーフなのかもしれない。

セシリアの料理は、確か本のとおり…否、本の“写真の”とおりに作られたもので、原作で一夏は我慢して食べていたはずだ。

……お人よしの一夏ならともかく俺は耐えられない。

そして俺も食べさせられていたかも知れない。という可能性がある以上、行かなくてよかった……と思っておこう。

ちなみに昼食は普通に、楯無と一緒に食堂で食べた。

シャルル目当ての女子がわんさか騒いで居て、居ないとわかると普通に食事を取ってシャルルを探しに行ったが…たどり着いたのか？

「ん？　どうかしたのか？」

「いや、なんでもねえよ。つか、俺はなぜに呼ばれた？」

そんなこんなで、俺が今居るのは一夏とシャルルの部屋。

結局シャルルは原作どおり、一夏と同室になった。

……俺の部屋、すでに楯無が居るもんな。二人部屋だし。

「いや、いろいろとあって男子三人だけでゆっくり集まれてなかったろ？」

「まあ、そりゃそうだけどさ」

ちらっとシャルルのほうを見ると、苦笑いが返ってきた。

「で？　男子組で集まってどうすんのさ？」

「ああ、改めて自己紹介といこうぜ」

「うん、僕はいいよ」

「俺もＯＫだ」

「じゃあ俺から…俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。改めてよろしくな」

「うん、よろしく。一夏」

「おう。んじゃ次、拓神」

「はいよ。俺は玖蘭拓神、拓神って呼んでくれていいぞ。よろしく」

「拓神もよろしくね」

「ああ、よろしくな」

シャルルと握手。
……やっぱり男子の手にしちゃ柔いな。偽装するなら、もうちょっと気を使ったほうがいいと俺は思う。

「じゃあ、最後は僕だね。…シャルル・デュノアです、シャルルって呼んでね」

「おう、よろしくな。シャルル」

「シャルル、よろしく」

「よろしく」

改めて一夏と俺は、シャルルと握手をした。

「さて、自己紹介も終わったところで提案だ」

「ん？　拓神、どうした？」

「なあ、シャルル」

「うん？　なに？」

「一夏のＩＳの特訓、付き合ってやってくれないか？」

俺の提案はコレ。どうせそういう話の流れになっただろうけど、さっさと話を進めたほうが都合がいい。

「あっ、俺からも頼む」

「一夏は、他の連中より知識も経験も不足してるからな」

「ぬぉっ、そんなにズッパリ言い切らなくても……」

あ、一夏が凹んだ。……気にしない気にしない。

「だって事実だし」

「ぐあっ……」

お、凹みの深さが倍くらいになったぞ。

「あははっ、二人って面白いね」

「いや、俺が一夏を弄って反応を楽しむのが好きなだけだ」

「やめろよ！　俺で楽しむなよ！」

「え？　一夏、なんか言った？」

「ヒデェ！」

こんな風にな♪

「さて、話がそれちゃったけど戻すぞ？」

「そらしたの誰だよ！」

「シャルル、頼まれてくれるか？」

一夏は無視に決まってる。

ちなみにシャルルは、このやり取りで笑っている。

「ははははっ……うん、喜んで」

「本当か！」

あ、一夏が復活した。

……まだ潰し足りなかったか。

「もちろん。一夏にはお礼したいし、専用機もあるから役に立てると思うしね」

「ありがたい、ぜひ頼む！」

「うん、任せて」

いまさらだけど、シャルルの声って和むなぁ……。流石、ほんわかヴォイス。

まあ、さて、シャルルが引き受けてくれたことだし…帰るか。

「さてと、俺はもう自分の部屋に戻るぜ？　時間だし」

「あ、おう。わかった」

「じゃあね、拓神」

「ああ…じゃな」

じゃ、おやすみ～。と言い残して、俺は一夏&シャルルの部屋から出て行った。

◆

あれから五日～

今日は土曜日。この学園、土曜の午前中は座学で午後は自由時間になっているため、大体の生徒がアリーナでＩＳ操縦の訓練をしてる。

しかもここ、第三アリーナには男子が三人も集まってることで使用希望者が続出。おかげでかなりの人口密度（笑）だ。

それで一夏は、シャルルも加えた…というより、あれからはもっぱら俺とシャルルだけが一夏の指導をしている。

あいつら、俺の言ったことなんざ忘れてやがるし…どっちのために特訓をやってるんだか……はあっ。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「どうせお前のことだから『わかってるつもりだった――』とか考えてるんだと思うが、ちゃんと把握しろ。情報はそれだけで武器になる」

「ぐぬっ――――はい、そうです…わかったつもりでいました……」

クカカッ、図星だったのかよ。

「やっぱり知識としてだけ知ってるって感じだったね。さっき僕と戦ったときも、ほとんど間合いを詰められないで終わったよね」

「アレだけボロ負けすれば、やる気も出るだろ？」

一夏は先ほどシャルルと戦闘して、ほとんど近寄らせてもらえず、射撃武器でS・Eを削られきって終了だった。

うん、見てて笑ったよね。いや、シャルルの技量が一夏より高いだけだけど。

「うっ……、でも確かに、勝ちたいって思うな。ていうか、シャルルには『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』読まれてたよな…」

「一夏の瞬時加速って直線的だから、反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「だからこそ、射撃武器の特性を一夏はよく知ってないといけないってことだ。じゃないと対戦じゃ勝てないぞ」

「うん、拓神の言うとおり」

「わ、わかった。…でも直線的か……」

「あ、瞬時加速中は無理に軌道を変えないほうがいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪骨折とかするからね」

「……なるほど」

「ま、そこから先は自分で考えろ。人に頼るんじゃなくて自分で考えたほうが力になる」

あ、ちなみにコレ、体験談ね。

「あ、おう。わかった」

「じゃあ、射撃武器の練習してみようか。はい、これ」

シャルルが自分の武装――――五五口径アサルトライフル《ヴェント》――――を、展開して一夏に手渡す。

「え？　他のやつの武装って使えないんじゃなかったか？」

「もっと参考書とか読んどけ。…他人の武装でも、所持者が許可を出せば使えるようになる」

でも俺の武装は無理。ＧＮ粒子が必要だからな。

他の機体で使うなら、ＧＮ粒子コンデンサーを後付武装（イコライザ）に入れておいて展開しなきゃ無理だ。

「――うん、今一夏と白式に使用許諾（アンロック）を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

「か、構えはこうでいいのか？」

さて、ここから先はその武器を使ってるシャルルに任せたほうがいいな。

俺は準備でもしておくか。

――ティエリア？

――ん？　なんだ？

――デュナメスをすぐに展開できるように準備しといて。

――わかった。

コレでよし。後は待つか。

ということで、俺は一夏の訓練の様子を立ちっぱなしで見ることにした。

そのうち、一夏がヴェントを使って射撃訓練を始める。

シャルルに支えられながら、出したターゲットを撃つ。中央には当たらなかったが、外れることはなかった。

……まあ結論から言って普通。

その後シャルルがお手本を見せる。

狙いは良く、すべてが的の真ん中に。

まあ暇だから、シャルルの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』について。

この前俺が戦った山田先生の使っていたＩＳもラファールだったが、まずアレとは色から違う。

シャルルの機体の色は、量産機のネイビーではなくオレンジ。

そして背中に背負ってる推進翼は、中央部分から二つの翼に分かれるように見える。もちろん推進翼の性能も量産型よりもこちらのほうが上だ。

アーマー部分も山田先生の使っていた機体より小さくなっていて、マルチウェポンラックとしての大きなリアスカート。そこにも小さめの推進翼があってこちらは基本的に姿勢制御用らしい。

一番の変化といえば、肩のアーマー。

本来のラファールに装備されている４枚の物理シールド。それは全て外されていて、その代わり左腕の装甲と一体化したシールドが装備されている。

右腕は射撃の邪魔にならないように装甲は無く、スキンアーマーのみ。

以上、『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』の説明終了。

さて――来た。

「ねえ、ちょっとアレ」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナ中が騒がしくなる。原因は――

「おい、貴様」

――ラウラ。ボーデヴィッヒ。

シャルルと一夏と（後書き）

ラウラさんは次回ということで。

それと、ＶＴシステムをどうやって鎮圧しようか悩んでます。
とどめは一夏に決めさせるつもりなんですけどね。

それとお知らせ。
今週末、金曜から二泊三日で修学旅行なんで、更新できませんです。
ご了承をｍ（＿＿）ｍ

では次回『ドイツの黒兎』

ドイツの黒兎（前書き）

修学旅行前の最終投稿です。

では、どうぞ。

ドイツの黒兎

「おい」

ＩＳのオープンチャンネルに、ラウラの音声が流れ込む。
その対象は、一夏。

「……なんだよ」

いつもは人の良い一夏が不機嫌そうにするのも仕方が無い。
なにせ、一夏は意味もわからずぶたれてるからな。
それでもお人よしはお人よしだ。俺が一夏だったら、ラウラからの通信は無視してる。
一夏が返事をすると、ラウラは飛翔して少し近づいてくる。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

事情を知らない奴が聞いたら、『なんだこいつ、バトル・ジャンキーか？』と思われる発言だ。
ストレート《素直》なのはいいことだとは思うが、素直の方向がなぁ…

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

ラウラの戦う理由。それは、一夏を排除すること。
何年か前の、第二回モンド・グロッソ。当時日本代表だった織斑先生は、決勝で不戦敗となって第一回の優勝に続く二連覇を逃してしまった。
原因が一夏。一夏はモンド・グロッソ決勝戦当日、謎の組織――亡国機業（ファントム・タスク）――に誘拐された。誘拐の目的は不明。
その誘拐事件のときに、織斑先生に情報提供をしたのがドイツ軍。俺からすれば、なぜそんなに都合よく情報を手に入れていたのかが謎だ。
…まあ、それはともかく。そのときの『借り』で、織斑先生は一年間ドイツのＩＳ部隊で教官をすることになる。
そしてラウラはそのときに織斑先生と出会った。そしてその強さに惚れ込む。だからこそ、ラウラは織斑先生に惚れ込んだからこそ、一夏を憎む。
織斑先生の経歴に傷をつけた一夏を。
――この件について、原作知識を統合して考えるとこうなるな。
「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し遂げただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」
存在を認めない。とか、極論もいいところじゃねえか。
確かに一夏が居なければ大会二連覇はできただろうさ。けど、もう過ぎたことをいまさらになって持ち出して何になる？　ただ良くない事を招くだけだ。
それが俺の意見。
「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

直後にラウラはＩＳを戦闘状態にシフトさせた。

そして、その肩の大型レールカノンを一夏に向ける。

――ティエリア、デュナメスを。

――了解。マイスターズ展開、モード選択（セレクト）ＧＮ－００２『ガンダムデュナメス』

ゴガギンッ！

シャルルが、レールカノンの弾丸を一夏とラウラの間に入って左手のシールドで防御。それと同時に、右手にはすでに撃てる状態になっている六一口径アサルトカノン《ガルム》をラウラに向けた。

バシュゥン！

「シャルル、俺も手伝うぜ」

ガンカメラを収納しながら言う。

俺は今、ラウラ向けてＧＮスナイパーライフルを片膝立ちで構えている。

今は当てないように、それでもラウラのぎりぎり撃った。読み通り、ラウラは後ろに飛びのいてこちらを向く。

「貴様ら……」

「突然撃った奴に、反論の余地は無いはずだけど？　……次は当てる」

再度ガンカメラを展開、今度は当てる照準でラウラに狙いを定める。

…それにしてもシャルルはすごいな。

今さっきの武装展開、瞬きの間に…とでも言うのか。それほどの早さで《ガルム》を展開、照準していた。

前回の『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』についての補足だ。

あの機体は基本装備（プリセット）をいくつか外して、その代わり拡張領域（バススロット）が倍になっている。

ただ武装が多くてもそれは有利とは言わないし言えない。大量の武装を持っていたとしても、同時に運用することはできないから。

でもその欠点をシャルルの特技『ラピッド・スイッチ』は克服する。

先ほどの速度での武装展開。それは、大量の武装であってもむしろ自分を優位に立たせる。

多数の武装による距離を選ばない戦い。シャルルはそれができたはずだ。名称は忘れたが、近づかれれば距離をとっての射撃、離れられれば距離を詰めての近接戦。という戦法が。

俺は誰のために解説しているのか知らないが、その間もラウラとシャルル・俺の間での緊張感は高まっている。

手も装甲に包まれているから汗で滑るということは無いが、俺はスナイパーライフルのグリップを握りなおし、再度照準を合わせる。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

キィーンというスピーカーの音とともに、教師の声がアリーナに響く。騒ぎを聞きつけた担当教師だ。

「……ふん。今日は引こう」

あっさりと戦闘態勢を解除したラウラは、身を翻してアリーナの出口へと歩いていく。

俺はラウラの背中に向けて戦ってたら、負けたのはお前だ。と言おうと思ったが飲み込んで、デュナメスを解除した。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ。拓神も」

「気にすんな。俺は（今の）アイツが気に入らないだけだ」

（）の中は心の中だけに留めておく。明らかに不自然だからな。

「拓神ありがとね。援護してくれて」

「だから、気にしなくていいっての」

「それでも、ありがとう」

……面と向かってありがとうって言われるのは結構気恥ずかしいな、これは。

「気持ちは受け取っとくよ。…さて、そろそろあがるか」

「あ、もう時間だね」

「おう、そうだな。あ、シャルル、銃サンキュな。いろいろと参考になった」

本当に参考になったかどうか心配ではあるな。

「俺は先に帰るぞ？　いいか？」

「うん、大丈夫。じゃあね」

「おう、またな」

「ああ」

確か一夏がこの後ＢでＬな人まがいな感じになったはず。いや、別にどうでもいいけど。シャルルには一夏がごめんって謝りたいけど。

…そんなことを考えながら、俺はアリーナを後にした。

◆

部屋に戻ると…まあアイツが居るのは確定しているわけで。

ガチャ

「お帰りなさい、あ・な・た♪」

ほら、ドアを開けて二秒以内で楯無。

「ていうか何でメイド服？」

そう、今日の楯無はどこから調達してきたのかメイド服を着てる。

似合ってるけどさ。

「え？　会長はメイド――」

「ストップ！　いろんな意味で駄目！」

「ええー、いいじゃん」

危ねぇよ……いろんな意味で。

「で、どうするの？」

「なにが？」

「だから……ご飯にする？　お風呂にする？　それとも、わ・た・

し？」

「全部無しで。疲れたから」

即答。

さっきのとかで精神的にも疲れた。ちなみに食欲は単に無いだけだ。

「ちぇ、つまんないの」

ちょっ、このメイド（笑）舌打ちしたんですけど！？

「寝てるから、なにかあったら起こして」

「ん、わかったわ」

俺はどさっとベッドに寝転ぶ。

ん？　俺は何か忘れてるような気がするんだけど……なんだっけ？

たしか結構重要なイベントのはず。

――あ、シャルルの招待がばれるイベントじゃん。

時計を見ると、俺がアリーナを出てから三十分くらい経ってる。

ネックスプリングの要領で、ベッドから跳ね起きた。

「わっ……どうしたの？　いま寝転んだばっかりなのに」

「いや、やること忘れてた。そゆことでちょっと出てくる」

「そう、行ってらっしゃい」

「ああ、行ってきますっと」

さて一夏は…職員室にまだ居るか？　いや、たぶんまだいるだろ。俺は先生に見つからないようにダッシュで、階段を下りて寮の玄関に。

「あ、居た」

「拓神か、さっきぶり。どうかしたのか？　慌ててるみたいだったけど」

「い、いや、なんでもない。それよりどうしていまさら帰ってきたんだ？」

「ああ、白式の正式な登録に関する書類だってさ。ま、名前を書くのが大体だったけどな」

登録ねぇ……あれ？　マイスターズってどうなってんの？　…まあ、これは後で。

「ふうん…。あ、そうだ。これからお前の部屋行ってもいいか？」

「？　何しに来るんだ？」

「ちょっとな。で、いいのか？」

「おう、むしろ歓迎だ。行こうぜ」

「オーライ」

ファーストフェイズ、違和感無く接触完了。セカンドフェイズに移行する。

俺と一夏は一緒に一夏の部屋へと歩き始めた。

ドイツの黒兎（後書き）

次回はシャルですね。ヤフー！

時間もないんで、あとがきはこの辺で。

次回『シャルル』

シャルル（前書き）

二本目です。

これが本当に修学旅行前最終投稿になります。

では、どうぞ

シャルル

「ただいまー。って、あれ？　シャルルがいないな」

一夏の部屋に到着……セカンドフェイズ終了、これよりサードフェイズに移行。

「シャワーじゃないのか？　水音するし」

「お、本当だ。…あ、そういや昨日シャンプー切れたって言ってたな。ちょっと届けてくる」

「ああ、わかった」

サードフェイズも終了、これからファイナルフェイズに移行する。

一夏は、棚からシャンプーを取り出して脱衣所のドアを開ける。
ちなみに、俺からその中は見えない。今わざわざ見ようとするのもアレだしな。

ガチャ。
――ガチャ。

二重に響いたドアが開く音。
ファイナルフェイズ、第一段階まで突破っと。

「ああ、ちょうどよかった。これ、替えの――――」

話を切り出した一夏の言葉が止まった。

『い、い、いち……か……？』

そして聞こえたシャルル…否、シャルロットの声。

「へ……？」

「一夏、なぜ間抜けな声を出すんだ？　あ、俺も居るから」

『た、拓神も……』

俺は見ないぞ？　もし見てそれが楯無に伝わったら…たぶん貞操奪われるんじゃないか？

まだ俺は……イヤだね。

「え、えっとだな。えーっと……」

嫌な沈黙。それでも俺は、何が起きたのか知らないふり。

「きゃあっ！？」

ガチャンッ！

「…えーと……」

「……」

そろそろこの沈黙なんとかしてくれ…。話かけるもなにもできないから。

「ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくから……」

シャルルの返事は、俺には聞こえなかった。

そして一夏が脱衣所から出てくる。

「おい、一夏？　どうしたんだ？」

「……い、いや、な。その……女子が…居た」

「は？　女子？」

「あ、ああ。…ちょっと落ち着かせてくれ」

「お、おう」

一夏は沈黙、俺も一緒に沈黙。

……人数が何人でも、沈黙ってキツイものがあるんだぜい。

少ししして…

ガチャ……

控えめにドアの開く音が、静かなこの部屋に響く。

「い、一夏。あ、上がったよ」

「お、おう」

シャルルの声が響いたほうを向くと、そこに……女子が居た。
いつものジャージ姿のシャルルなのだが、胸を隠す用のコルセットをしていないし、ジャージという服装の特性上、体のラインがくっきりと浮かんで胸があることがわかる。

「……やっぱりか」

そして全てを踏まえた上で、俺はこの発言をした。
ファイナルフェイズ、最終段階突入だ。
もちろんこんな発言をすればシャルルと一夏の反応は……

「っ――!?　た、拓神。やっぱりって……どういう…」

「拓神は知ってたのかよ?」

「いや、確信は無かったんだけど。もう今のシャルル…いや、デュノアさんを見たら確信もなにもだしさ」

「でも、どうしてそう思ってたんだよ」

「それを答えるとなると、デュノアへの演技の指導からになるんだけどもな」

だってさ、男子の振りしてても女子みたいな行動が多すぎるもん。
この子。

「まあ、それは飛ばして。まず、女子みたいな行動が多い」

「でも、それだけじゃわかんねえだろ」

「本題は次だ。デュノアの実家…デュノア社だな。その社長…これはデュノアの父親。その息子にシャルルって名前の息子は居ない。もちろん愛人とかを含めて、だ」

愛人、という言葉にシャルルはびくっと反応する。

そしてこの情報元は原作と……更識家ってすごいね。とだけ言っとく。

「そこまでわかって……」

ここでシャルルが口を開いた。

「そこまでわかってて、どうして僕を問い詰めたりしなかったの？」

「？　当たり前だろ。なにか事情があるって考えるのが普通だし、友達をそれだけの理由で問い詰めていいわけが無い」

「そ、それだけって…！」

「それに、さっきも言ったろ？　確信が持ててなかったんだ。だから、話してくれるのを待ってた。友達は信じるもんだ。まあ……結局、こんな形で俺らにばれたワケだけど」

はぁ、なにかっこつけてんだよ俺は。

俺も本当のことは話してないってのに。

「…ま、俺から言いたいことはこのくらいだ」

「そっか…なんか、ありがとうね」

「おいおい、なんで感謝されるんだよ」

「問い詰めてないでくれたのもだし、それに僕のことを信じてくれたから……」

「そうかい…俺の話は終わったからな。後は一夏と二人でゆっくり話せばいい」

「え？　拓神はどうするんだ？」

あ、ちょっと一夏の存在忘れてた。まあいいや。

「ん？　俺は邪魔だろ？　一夏のほうがシャルルと関わってるんだし」

「そ、そんなことないよ！」

おおう、シャルルが突然大声だしたから驚いたぜ。

「それに拓神にも、僕から事実を話したいから」

「……わかった」

少しの間があって、シャルルは口を開く。

「僕が男子のフリをしてたのは、実家からの命令なんだ。実家って

いうのはさっき拓神が言ってたデュノア社、そしてそこの社長が僕の父」

俺は黙って耳を傾ける。一夏は今の言葉に噛み付いた。

「命令って…親なんだろ？　どうしてそんな――」

「それはね、僕が愛人の子だからなんだよ」

一夏も“愛人”の意味がわからないほど世間に疎くない。そこで口をつぐんだ。

「あの人に引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それでいろいろと検査をする過程でＩＳ適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

つまりシャルルの父親は『利用できるなら利用しよう』という魂胆なんだろう。

自分の娘でも利用する、か……。反吐が出る。

「父に直接会ったのは二回くらい。会話は数回かな。普段は別邸で生活してるんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参っちゃうよ、母さんもちょっとくらい教えてくれたら、戸惑わなかったのにね」

あはは…と、乾いた愛想笑いを浮かべるシャルル。

あー、なんだか話を聞きたくなくなってきた。以上イラつくと、デュノア社に乗り込むかもな。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だってデュノア社は――」

一夏の言葉を遮って、俺が口を開く。

「シェアはともかく、所詮第二世代機は第二世代機……ってところか」

「厳しい事言うね…。でも、そのとおりだよ。リヴァイヴは結局第二世代型。そして、フランスは欧州の統合防衛計画『イグニッション・プラン』からは除名されてるからね。第三世代型機の開発は急務なの。国防のためもだけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

確か前にセシリアが、自分もＩＳの実稼動データを取るためにＩＳ学園に来た。って言ってたな。

ドイツからラウラが来たのも、それが関わってるとみて間違いないと思う。

「……話を戻すね。それでデュノア社も第三世代型機の開発をしていたんだけど、もともと遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。データも時間も圧倒的に不足していて、なかなか形にならなかったんだ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされて、次のトライアルで選ばれなかったら援助を前面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって話になったんだ」

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。急目を浴びるための広告塔。それに――」

「俺たちのデータ取り。か？」

さっきか話を遮ってばかりの気もするが、そんなこと今はいい…と思う。

「そう、僕はあの人に、二人のデータを盗んで来いって言われてるんだよ」

一夏はともかく俺の機体のデータ採取は、外から見ただけのデータに過ぎない。

スキャンもなにも通さないからな。GN粒子の汎用性は高いのだ。

「とまあ、こんなところかな。でも一夏にはばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されて……デュノア社は、つぶれるのか他の会社の傘下に入るのか。まあ、僕にはどうでもいいことかな」

「「……」」

「ふう、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう、二人とも。それと、今まで嘘ついててごめん」

深く頭を下げたシャルルに、俺は話しかける。

「何でお前が謝るんだよ。悪いのはお前の実家だろ？　お前が頭を下げる道理はねぇよ」

「でも、僕がそれを実行しようとしたのも事実だから…」

「シャルル、お前はそれでいいのか…？」

「一夏？」

一夏がシャルルの両肩をつかんで、目と目を合わせた。

シャルル（後書き）

シャルルの説得は次にも続きます。

では、次回はたぶん月曜日になると思います。
できるだけ日曜に投稿したいとは思ってますが…はい。

感想・アドバイス等、お願いしますｍ（＿＿）ｍ

では次回『シャルル・デュノア』

シャルル・デュノア（前書き）

活動報告も出しましたが…

私は、帰ってきたぁぁぁぁ！（ガトーさん風

修学旅行、楽しかったんですけど、きつかったです。

では、どうぞ

「いいのか、本当に、それで……」

一夏がシャルルの肩を掴み、目を合わせたまま問う。

まあ、俺も。

「良くないんだよな？」

「え……」

「いいわけないだろ。親が何だってうんだ。どうして親だからって理由だけで子供の自由を奪う必要がある。おかしいだろう、そんなものは！」

俺の親は、背中を押してくれるタイプだったからな。…いや、父さんは今でもそうか。俺に新しい人生をくれた。わがままも聞いてくれたしな。

「い、一夏……？」

シャルルが怯えと戸惑いが混じった表情になる。それでも一夏は言葉を止めない。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、

親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

親なんか、ねぇ。……一夏が親に対していい気持ちがあるはず無いのはわかってる。けど、それは言いすぎな気もする。

「ど、どうしたの？　一夏、変だよ？」

「落ち着け一夏。デュノアが戸惑ってるだろ」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなった」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は――――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

「……」

俺の父さんは六年前、俺が十歳のころに失踪。行方は不明……だった。実際は自分の世界に帰っていた。

母さんは事故で。母さんが半神になるという手もあったが、それをしてなかった。理由は俺のため。父さんの失踪に関しては知っていたようで、俺には『行くべき場所に行った』と伝えられた。……まさかそれが神の世界だとは思いもしなかったというか、実際昔の俺は死んだと思ってたな。行くべき場所＝天国って感じで。…いや、天国に行ったで間違ってないな。あの世界だし。

「その……ゴメン」

シャルルは一夏に対して、申し訳なさそうに顔を伏せる。

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に両親なんていまさら会いたいなんて思わない。…それより、シャルルはこれからどうするんだ」

「どうって……時間の問題だと思う。フランス政府も事の真相を知ったら動くだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利が無いから、仕方が無いよ」

そう言って痛々しい笑みを浮かべたシャルル。

一夏はそれに対して拳を握り締めた。

そして俺は口を開く。

「選ぶ権利が無い？　さっき一夏が言っただろ？　誰にだって生き方を選ぶ権利はあるんだ、自分のしたいように動けばいいさ。少なくとも、ここにいる三年間はな」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

俺の台詞につなげて特記事項を述べたのは一夏だ。そして一夏はそのまま言葉を繋げる。

「――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間はシャルルの望まない限り大丈夫だ。それだけ時間があれば、何とかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろ」

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項は五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

「なにが勤勉だ。周りに追いつこうと必死なだけだろ」

シャルルが笑ったことでこの場の空気が少しは和み、俺も軽口を言う。

「んなっ……」

「はい、図星確定。がんばれよ劣等生？」

「ああ、もうっ！　なんでそんなにスパッと言うんだよ！　つーかなんでお前は男の癖に授業についていけてるんだ！」

「お前みたいにあの分厚い資料を捨てなかったからな。つか、電話帳と間違えるとかあり得ない。必読って書いてあったのによ」

「ふふふっ、やっぱり二人って面白いね。というか一夏、そんなことしたんだ」

「――――っ！　は、話を戻すぞ！」

「逃げたな」

「逃げたね」

一夏はシャルルにも言われて、話を戻すといって逃げた。

「と、とにかく！　これからどうするか決めるのはシャルルだ。考えてみてくれ」

「…うん、そうするよ」

「さて、んじゃま、俺は部屋に戻るよ」

「拓神、ありがとね。話を聞いてくれて」

「デュノアもよく話してくれたな。ありがとう」

「うん。……それと、僕が男じゃなくてもデュノアじゃ無くて名前で呼んで欲しいんだけど」

「あー……悪い、俺の彼女が嫉妬しそうだから、デュノアのままで」

楯無、独占欲かなり強いからなぁ。

「えっ！？　拓神って恋人いたの？」

「ああ、二年の先輩だけどな。……言っておくが、俺は年上だけが好きとかじゃ無いからな？」

「そうなんだ……わかった。デュノアのままで良いよ」

「悪いな。じゃ、俺は帰るよ。一夏もじゃあな」

「おう、またな」

俺は、シャルと一夏を残して二人の部屋を出た。そして自室の方に歩き出す。

「あ、玖蘭さん」

「ん？　オルコットか」

寮の廊下でセシリアと遭遇したにゃー。

「一夏さんは部屋に？」

「ああ。部屋に居たぞ」

「そうですか。ありがとうございます」

「いや、別に良いよ。行くのか？」

「ええ、夕食のお誘いに」

「そうか」

セシリアは俺の横を通り抜けて、一夏の部屋に歩いていった。

少し足早な気がするが、気にしてはいけないだろう。

◇

暗い、暗い闇の中にそれ…否、彼女は居た。

「……」

いつからこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれたときにはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見るというが、彼女は違う。闇の中で育まれ、影の中で生まれた。そしてそれはいまも変わりない。

光の無い部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っている。

ラウラ・ボーデヴィッヒ

それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味を持たないことも理解している。

けれど唯一の例外である教官に――織斑千冬に呼ばれるときだけは、その響きが特別に意味を持っている気がして、そのたびにわず

かな心の高揚を感じていた。

（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由…）

それは一条光のようであった。

出会ったときに一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。

心が揺れた。体が熱くなった。そして願った。

ああ、こうなりたい――――と。

これに、私はなりたいと。

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。

自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。

唯一自らを重ねて合わせてみたいと感じた存在。

ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない。

（織斑一夏――。教官に汚点を残させた張本人……）

あの男の存在を認めはしない。

（どんな手を使ってでも……）

確実に排除する。

不確定要素は邪魔だ。

（玖蘭拓神……）

そこらの代表候補程度であれば、訓練機であっても専用機と対等以上に戦えるＩＳ学園教師。

それに、あの山田真耶という教師は元日本代表候補だと聞いた。

それをほぼ無傷で撃破した本人。
それは不確定要素だ。織斑一夏を排除する事の。
（ならば、排除する。目的のために）
暗い闘志をその心に宿したラウラは静かにまぶたを閉じる。闇と一体になりながら少女は夢の無い眠りへと落ちていった。

◇

「そ、それは本当ですの！？」
「う、ウソついてないでしょうね！？」
月曜の朝、一夏とシャルルと三人で教室に向かっていた俺は、廊下まで聞こえる声の元を自分たちのクラスだと特定した。
「なんだ？」
「さあ？」
「いつものことだろ」
それがちょっとうるさいだけだ。と付け足す。

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなのよ？　月末の学年別トーナメントで優勝すれば織斑君と交際でき――」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃあああっ！？」」」

一夏がクラスに入って声をかけたら、返ってきたのは悲鳴だった。

まあ、アレだろうな。楯無の流した噂話。

シャルル・デュノア（後書き）

やっと書き上げました。
昨日は疲れで書く気になれず、ダウンしてましたよ（笑
ラウラの出番少ないなーと思ってあのコマ追加しました。
…それを言ったらティエリアどうしよう、なんですけど。
楯無さんも居ないなぁ。
では、感想・アドバイス待ってます。
次回『シュヴァルツェア・レーゲン』

シュヴァルツェア・レーゲン（前書き）

…何も書くことないんで、どうぞ

シュヴァルツェア・レーゲン

放課後、場所はアリーナ。
そこでは銃声と爆音が響いていた。一般生徒はすでに居ない。
居るのは専用機持ちのみ。
ラウラ・ボーデヴィッヒ、セシリア・オルコット、凰鈴音。
そして彼女たちが操るＩＳ。
シュヴァルツェア・レーゲン、ブルー・ティアーズ、甲龍
状況は二対一の模擬戦。
いわずもがな、組んでいるのはセシリアと鈴音。

そして現状で優勢なのは――ラウラ。

「このっ！」

ジャカッ！

甲龍の両肩のアーマーが開き、衝撃砲が発射される。

「無駄だ」

が、それにラウラが右手をかざすだけで、ラウラに届くことは無い。

……とまあ、解説してるのは俺だな。

現状じゃあ、ただ模擬戦をやってるだけで止める理由が無いからな。俺はアリーナの隅で待機。

デュナメスで外部迷彩皮膜を使ってる。まあ、ステルス状態だ。下手に動いたりしない限りは、ばれることも無いし。

鈴音は衝撃砲を続けて撃つが、右手をかざすだけのラウラに届かない。

ＡＩＣ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、通称『慣性停止結界』。

空間を圧縮し衝撃を発射する衝撃砲にとって、相性が最悪どころではない。ＡＩＣの前ではなんの効力も発揮しないのだから。

そうこう言ってる間に、ラウラが攻勢に出る。

離れて援護射撃を行っているセシリアの射撃をするりするりとかわし、鈴音に接近。近接格闘戦に持ち込む。

ラウラと鈴音が重なり、セシリアは狙いが定まらず撃てない。

ラウラは両手首のプラズマ手刀、鈴音は両手の双天牙月で打ち合う。

「はっ！」

手刀で青龍刀をはじき、無防備な鈴音にラウラは手刀を叩き込む。

「きゃああっ！」

胴、足に次々と斬撃が当たり、アーマーを損失させる。

――拓神、甲龍のダメージレベルがＣに達した。

――了解。

さて、準備しておくか。

鈴音は斬撃を何回か受けた後、最後の一発となった一撃でその衝撃を利用、後ろに飛んだ。

鈴音が離れたことで、ＦＦ（フレンドリーファイヤー）の心配が無くなったセシリアは狙撃を再開。ビットも使った攻撃を開始。

それでもラウラには届かない。

ＡＩＣがエネルギー系の武装に対して効力が薄くても、ラウラには持ち前の高い操縦技能がある。

ＢＴレーザーをかわしたラウラは、肩の大型レール砲でセシリアを狙撃。

回避するセシリアだが、二発目を回避先に撃たれ直撃した。

――ブルー・ティアーズのダメージレベルＣに突入。

――……オーライ。なら、狙い撃つとしようか。

――了解。外部迷彩皮膜解凍、ガンカメラ展開。

先ほどまで何もなかった空間に、ＧＮスナイパーライフルを構えたデュナメスが出現する。

俺はスナイパーライフルを構えた状態で外部（ステルス）迷彩皮膜を使用してた。

それと同時に頭部のＶ字アンテナが下がり両目の部分を隠すと、その上にガンカメラが露出する。

「狙い撃つぜ？」

ハイパーセンサーに表示されるガンカメラモード用のカメラアイの標準が絞り込まれ、ラウラをロックオンする。

俺はためらい無く指を屈伸させた。

バシュン！

ＩＳとビーム。その二つの反応が急に出現したことと、その後者が自らに向かっていることを知ったラウラは一瞬の動揺を見せる。

だが、それだけの隙があれば、銃弾ほどの速度を持つビームがラウラに到達するのは簡単だ。

「くっ！？」

それでもラウラは軍人。一撃目の直撃の後、すぐにそこから飛びのいた。

俺の放った二発目と三発目は空を切り、アリーナのシールドバリアーに当たって消失する。

「さすが軍人だねぇ」

「貴様、いつからそこに居た？」

「最初っからだよ。流石にオルコットのＩＳのダメージレベルがＣに突入したら、黙ってるわけにもいかないだろ」

「今貴様が居るところに反応は無かった。それにいままでアリーナ内に貴様は居なかった……どこから現れた」

「ずっとここに居たさ。種は明かせないけどな」

俺は手札をわざわざ見せる馬鹿でもないんでね。と付け加えてその場から飛翔。少し距離を置いてだが、ラウラの目の前に行く。

「そうか。……まあいい。貴様は織斑一夏を排除する上で邪魔な存在だ。まず、今ここで貴様から排除させてもらおう」

「あーらら、俺まで排除対象入りかよ。…ま、できるならやってみろよ。その左目も使えばいい」

「――っ！　……そうか、遠慮は要らないと見た。本気でつぶしてやろう」

ラウラはそう言いながら、左目の眼帯をむしりとる。

現れたのは金色の目。『境界の瞳』《ウォーダン・オージェ》

瞳に移植されるナノマシンによる擬似ハイパーセンサーのソレは、脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化と、超高速戦闘下での動体反射を向上させる。

つまり、ＩＳでの戦闘力も上昇する。

「わ、わたくしたちを忘れておりませんこと？」

「そうよ！　まだ決着はついてないわ！」

セシリアと鈴音からの抗議。自分の現在状況を理解していねぇなこいつら。

「ダメージレベルＣの二人は帰れ。ＩＳに悪影響が出てもいいなら

止めないけどな」

「「うっ……」」

「わかったならさっさと修復しに帰れ――」

ズガンッ！　――ガギンッ！

「のわっ！？」

横から砲弾…ラウラか。
しかも直撃コース。ティエリアのサポートでフルシールドを動かしてもらってなかったら直撃だったな。

「いきなりは卑怯なんじゃね？」

「防いでおいてよく言う。……もう戦いが始まっていることくらい、貴様にもわかるだろう？」

「そうだったな。……なら、狙い撃つぜ！」

チャッ、とGNスナイパーライフルをラウラに向けて発砲。
放たれたビームをラウラは横に回避。俺はその回避先を予測してトリガーを引き続ける。
ラウラも大型レール砲で撃ってくるが、それは実体弾とビーム。どちらが勝つのかは目に見えてるから、反応さえできれば撃ち落せる。

「ならば！」

ラウラが、狙撃のために動かない俺向けて右手をかざす。
すると、俺のトリガーを引く指が動かなくなる。それにその場から動くこともできない。

「…ＡＩＣってのは面倒だな」

――ティエリア。

――わかってる。

ガキンッ！

と、ラウラの肩の大型レール砲が俺のほうを向く。

「よくそんな軽口を叩ける」

「くらえ！」

「甘―い、甘―い、ばぁ…ってか？　ＧＮプロトビット！」

俺が叫ぶと同時に大型レール砲はピンクのビームに撃ち抜かれ、その機能を失う。
流石のラウラでも、これには驚きの声を上げる。

「なにっ！？」

「独立機動兵器（ビット）もってんのはオルコットだけじゃないんだなぁ、これが」

やったと思わせたところでそれを打ち破るのって…楽しいよな。

――君は悪魔か……

――なんか言ったか？

――いや、なんでもない。

ちなみにＧＮプロトビット。最初から展開済みで、ラウラの気が向かないように移動させてここまで待機させておいた。

『セファーデュナメス』意味的には『力天使の書』ってところだな。

もちろん俺の背中のコーンスラスターにはＧＮセファーのコアブロックが装備されてる。

「さて、こっちの手の内もある程度出たところだし、第二ラウンドと行こうぜ！」

左手でビームサーベルを抜き放ってラウラに突進する。

スナイパーライフルを使うほどだ。完全な遠距離仕様と思っていただろうが、近接戦も十分できるぜ？

「おらよっ！」

ビームサーベルを右から左に振りぬく。

ラウラはそれを、左手のプラズマ手刀で受け止めた。

「がら空きだぞ！」

そういったラウラは、残った右手の手刀を俺に叩き込もうと振り上げる。

「だから甘めぇ！」

さっきは一基だけの展開だったプロトビットを、今は全六基の総展開にしてある。

その六条のビームがラウラを六方向から狙う。

「くそっ」

悪態をつきながらも、ラウラはバックステップでそれを回避。

六条のビームは、先ほどまでラウラの中心があった場所で見事に交差する。

「これでどうだよ！」

膝と腰のフロントアーマーが展開。内蔵された二四基のＧＮミサイルを全弾発射する。

「それは無駄だ！」

ラウラが両手を別の方向にかざす。

右手は前方のミサイル。左手は後方のビットに。

二四のミサイルはその場で停止。両肩から飛び出してきた二つのワイヤーブレードに切り刻まれ、誘爆して全て落とされる。

ビットもすぐに撃てた一基の動きを止められ、ミサイルを撃破するだけの時間を作られた。

「……流石だな、ボーデヴィッヒ」

「貴様に賞賛されても何も感じないなっ！」

ラウラが身をわずかにかがめ加速しながら、俺に突っ込んでくる。

これは――――瞬時加速（イグニッション・ブースト）！

両手首のプラズマ手刀を構えたラウラに対し、俺はＧＮスナイパーライフルを投げ捨てて右手でもビームサーベルを引き抜いて迎撃の態勢に。

ガギンッ！

しかし、ラウラの加速は突然割り込んできた黒い影に止められる。

黒い影は――――織斑先生。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「織斑先生！？」

割り込んできた織斑先生は、ＩＳどころかいつもどおりのスーツで、一七〇センチはある刀身のＩＳ用近接ブレードを持ちラウラのプラズマ手刀を受け止めていた。……この人本当に人間ですか？

織斑先生は近接ブレードを肩に担ぎながら口を開く。

「模擬戦をやるのはかまわん――――が、他の生徒のアリーナ使用の邪魔はするな。それは教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで付けてもらおうか」

改めて回りを見渡すと、さきほどまでと同じく一般生徒はこのア

リーナ内にいない。
居るのは、俺、ラウラ、あの二人と一夏とシャルル。
一夏とシャルル、お前ら来てたのかよ。

「教官がそう仰るなら」

素直にうなずいたラウラはＩＳを解除。アーマーは光の粒子となって、待機状態の黒いレッグバンドに戻る。

「玖蘭、お前もそれでいいな」

「了解です」

俺もデュナメスを解除。デュナメスだったＧＮ粒子は、俺の首に待機状態のネックレスとなって再構築される。

「貴様らも聞こえていたな？」

「「わかりました」」

「では、学年別トーナメントまで一切の私闘を禁止する。わかったな？」

「はい」「了解」

俺とラウラが同時に言う。
ラウラは一瞬忌々しそうな顔でこちらを見ると、背を向けて歩いていった。

シュヴァルツェア・レーゲン（後書き）

主人公とラウラがやりあいましたよ～

そしてセファーデュナメスです。エクシア版も登場は予定してるんですけどね。まあ、ご期待を。

ティエリアがいろいろと……ドンマイですね。

楯無さん出さないとなあ……そして前回も同じようなことを書いた気がします（爆笑

では、感想・アドバイスお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『学年別トーナメント開催！』

学年別トーナメント開催（前書き）

例にそって今回も学校から（笑

では、どうぞ

学年別トーナメント開催

先の戦闘後、場所は自室。
ＩＳもろとも負傷したセシリアと鈴音の二人は保健室。付き添いで一夏とシャルルも保健室に。
俺はさっきの戦闘のことを盾に自室に帰ってきた。いや、『疲れた』って説明したのはウソでもないんだけども。

ガチャッ

「おかえりなさーい」

「ただいま」

帰ってきた俺を迎えたのは案の定楯無。というか楯無以外ありえない…いろんな意味で。
その楯無は、ベッドに寝転がって雑誌を読んでいたみたいだ。

「聞いたわよ？　ラウラちゃんと戦ったんだって？」

「まあな」

荷物を置いてから、ベッドに腰掛ける。
ちなみに部屋のベッド。いつの間にか一つになって、その代わりにベッドの大きさが大きくなってた……誰がやったのかは言わずも

がな。

「久しぶりにちょっと本気になった」

「嘘でしょ。拓神が本気になったら、私でもかなわないもん」

「……本当か？　かなりぎりぎりの戦いになると思うけど」

だって、今までの楯無の技量に加え神力での戦闘力上昇。

……まあ、学園最強がさらに強化されたということで。第三世代ガンダムでもキツイかなーってところ。

「まあ今回ビット使ったしな、ＡＩＣ対策で。だからちょっと本気」

「アクティブ・イナーシャル・キャンセラー……だったかしら？戦ってみてどうだったの？」

流石は楯無。知ってたのか。

「一対一ならチート。動きとめられてレール砲で乙。一対二なら効力は薄いな。集中を乱されたらそこで効果が切れた。ビットがあれば一人でも対処可能――こんなところ」

「へえ、よくそこまでわかったわね」

「言ったろ、俺は転生者。前の世界の頃からこの世界のことを知ってる……そうは言うものの、最近重要なところ以外の記憶が薄れてきてるんだけどな」

「そこから情報を持ってきてるのね。……ねえ、未来のことも知っ

てるんでしょ？　私に教えてくれないかしら」

「…駄目。そうすれば、起きる問題を何とかしようとお前は動くだろ？」

「ええ、もちろん。そうでなければ、未来の知識を持っている意味が無いわ」

「そうだな。だが、それで世界は変化してしまう。そしてそれは俺の知っている歴史を変える。…他にも問題が多発するんだな、これが。ってなわけで教えることは無理。理解した？」

「それなら、仕方ないわね。…じゃあ、これだけ教えてくれない？」

「答えられる範囲で」

「ありがと。……拓神の知ってる歴史は、どこまで？　月日で答えてくれればいいわ」

「それなら大丈夫だ。俺の知っているのは、今年の十月の半ば位までだ」

原作の七巻。それまでが、俺の原作知識の限界。

「そう、わかったわ。ありがと」

「――――さて、話を戻そうか」

「そうね」

「で、ラウラについて他に聞きたいことは？」

「彼女の目的は――――」

「一夏の…織斑一夏の排除だな。どうやら俺も、目的達成の障害として排除対象になっちまったみたいだが、…楯無に比べたら全然弱いな」

「あら、うれしいこと言ってくれるわね」

「事実だもんな。えこ贔屓も、何もしてるつもりは無い」

原作でもそうだったとおり、ラウラは楯無と比べれば弱い。しかもこの世界では楯無は神力で強化されて、その差はさらに広がっている。

――――あ、そういえば忘れてた。

「なあ、今度の学年別トーナメントってタッグだよな？」

「前に言ったはずよ？　…今日全生徒に告知されてるわ」

「それで相談なんだが――――――――ってできるか？　楯無の権限で」

楯無の耳元に口を寄せて、コソコソ話をするように聞いた。

「そうねぇ……無理じゃないわよ。でも本当にいいの？　かなり不利なのはわかってるでしょ？」

「問題ないさ」

「そう、じゃあそう取り計らっておくわ」

「サンキュ楯無――――んっ」

久々に俺から、楯無の唇を奪った。

さっき耳を寄せられるくらいに近いんだ。このくらいはできる。

「――ん……こんなことされると、おねーさんは変な気分になっちゃうぞ？」

「やめい。……ただ感謝の意を示しただけだからな、間違えるなよ」

「むー、仕方ないなあ」

はい、拗ねてる顔ご馳走様っと。

さて、楯無とラウラ対策でも一緒に考えますか。

◇

六月も最終週。今週は丸々一週間学年別トーナメントが催される。

まあ、それに応じて生徒会の仕事も増えるわけで面倒なんだけども。

しかし今回ばかりは面倒なのは生徒会だけではないんだな、これが。朝からほとんどの生徒が自分の仕事をこなすために走り回っている。

会場の整理に来賓の案内から雑務まで、仕事の幅は広い。
結局一夏のペアはシャルルで落ち着き、セシリア・鈴音は不参加。
ラウラと箒はなんの因果か、抽選でペアとなった。

まあ、そして俺たち生徒会。楯無・虚さん・本音・俺の四人が今していることといえば。

「では、Aブロック一回戦一組目からはじめましょう」

「はじめよ～」

「んじゃ、会長からよろしく」

「はーい」

えらくお気楽な空気の中で、お手製のくじ引き。
こんな空気でも今回の学年別トーナメントの対戦を決める重要な仕事なのだが…そんな雰囲気は今のところさらさら無い。

「じゃあ、これ」

まず楯無が引いたのは『織斑一夏ペア』のカード。

「さっそくか。じゃあその対戦相手は俺が引くな？」

「わかりました」

「引くのだ～」

「誰かな？」

「んじゃ、これで」

俺が引いた一夏たちの対戦相手であるカードは、『玖蘭拓神ペア』

――って俺かよ！　原作じゃここはラウラペアじゃないの！？

「自分を引いたのね」

「すごい運だね～」

「では次を決めましょう――」

とまあ、全ての組み合わせを決めるまでこの空気でのくじ引きが続いた。

「初戦から一夏たちか…骨が折れるぜい」

愚痴りながら、アリーナのピットへと歩く俺。

向かうピットは、当たり前に対戦相手である一夏とシャルが居るピットとは逆のピット。

到着すると制服を脱いで、いつものジャージ姿に。

そしてピットの射出用カタパルトの傍らに立つ。

「ま、手加減も何も無し…というかしたら負けるな、こりゃ」

――気は抜くなよ。

――わかってるって。サポートは任せる。

――わかっているさ。…時間だ。

――了解だ。デュナメス展開。

『了解、モード選択（セレクト）ＧＮ－００２『ガンダムデュナメス』展開』

淡い緑のＧＮ粒子が、俺の体にモスグリーンと白の装甲を構築する。

「追加、ＧＮセファー展開」

『了解、ＧＮセファー展開。モード『セファーデュナメス』』

見慣れたデュナメスの背に、前にラウラと戦った時にも使ったセシリアのものと比べて大き六基のＧＮプロトビットが、左右に広がるように装備された。

――さて、行くか。改めて頼むぜ？　相棒。

――ふっ。了解した、相棒。

ティエリアと軽い一言をかわして、ピットのカタパルトに乗る。
目を閉じて、一度深呼吸して、目を開く。

「セファーデュナメス、玖蘭拓神。目標を撃破する！」

カタパルトで加速、アリーナへと俺は射出される。
心地のいいレベルのGが体に掛かり、自然とリラックスした状態で、俺は戦いを始めることになった。
俺がこちらのピットから射出されたと同時に、あちらのピットから出てくる白とオレンジの機影が見えた。

「まさか一回戦目でお前らと当たるなんてな」

「そうだな」

「負けないよ」

「ていうか拓神。お前、パートナーは？」

「俺のパートナーは居ない。唯一の一人参加だ。だからさ……全力で相手してやんよ」

そう、少し前に俺が楯無に頼んでみたのはこれだ。俺を一人でトーナメント参加させること。
結果、楯無の権限で俺は一人で出ることになって、今俺は一夏とシャルルの目の前にいる。

「さあ、はじめっぞ！」

俺がそう叫ぶと同時、試合開始のブザーが、アリーナに鳴り響いた。

学年別トーナメント開催（後書き）

エクシアにするかデュナメスにするかで……デュナメスになりました。

ラウラに手札を見せないという意味でもデュナメスを選びました。

もちろんほかの機体も出番作りますよ。特にキュリオス。

感想・アドバイス待ってます。

次回『ＶＳ　一夏＆シャルル』

ＶＳ　一夏＆シャルル（前書き）

書くのがしんどかったです……

一応、何かあれば書く直そうとか思ってます。

では、どうぞ

ＶＳ　一夏＆シャルル

『ビーーーー！』

試合開始のブザーが鳴り響く。
それと同時に俺、一夏とシャルルも動き出した。

「行けよ、ビット！」

背のコアブロックに装備されていたＧＮプロトビットが、ティエリアの制御で二人に向けて動き出す。

「二対一だからって余裕でいると、足元すくわれるぜ？」

「そんなこと」

「わかってるよ！」

「ならいいさ……デュナメス、目標を狙い撃つ！」

ＧＮスナイパーライフルを構えて、まずは一夏を狙い…トリガーを引く。
一夏に接近戦に持ち込まれるとまずい。零落白夜は、エネルギー質のものを全て無効化する。つまり、ビームサーベルの刀身では零落白夜を発動させた雪片弐型を受け止められない。

「うぉぉぉっ！」

一夏もそこまで馬鹿じゃないみたいだ。ビームサーベルを消滅させられることをわかっているようで、ビームが数発命中することもいとわず瞬時加速（イグニッション・ブースト）で接近してきた。

「ちっ」

零落白夜も発動して雪片弐型を振り下ろしてきた一夏に対して、上に飛んで距離をとった。

先ほどまでの俺は地上に居るため浮いてなかった。つまり、一夏の振り下ろした雪片は地面に食い込むことになる。

どうせＩＳのパワーアシストで、一秒あれば雪片を引き抜いて体勢を整えられるだろうから、一発でもＧＮスナイパーライフルのビームを命中させる。

ちらっと、ティエリアのビットに任せてあるシャルルのほうを向いてみた。

流石ティエリア制御のビット。いまだに一基も落とされること無く、シャルルの翻弄してこっちに来れないようにしてくれてる。

――流石だな、ティエリア。

――無駄口を叩いてる暇があるのか？

――まあ、一夏相手なら。

――油断していると足元をすくわれる。……君が言った事だぞ。

――そうだな。じゃ、ビット任せた。

ティエリアとの会話から、意識を一夏のほうに。
一夏は体勢を整え、再度接近してきていた。

「だから、接近戦は分が悪いんだって」

右膝のアーマーを開く。そしてそこに内蔵されている四基のＧＮミサイルを射出。
一夏は横に避けるが、知ってのとおりミサイルは追尾する。また俺も俺と距離をとるしかなくなった一夏に対して、ガンカメラの展開とカメラアイを起動。ＧＮスナイパーライフルで狙撃を行う。

――背後に注意を！

ティエリアの忠告から一秒経たないうちに背中に衝撃が。俺は前のほうにつんのめる形になる。

「なっ！？」

「僕のこと、甘く見ちゃ駄目だよ」

即座にガンカメラを収納して後ろを確認すると、ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を二丁構えたシャルル。
ビットの包囲を抜けて来たのか……

――すまない、押さえ切れなかった。

――ビットだけじゃ限界があって当たり前だ。ビットをシャルルの足止めじゃなくて、こっちのサポートに回して。

――了解した。

俺が指示を出したと同時にシャルルのショットガンからの面での弾幕。

俺はシャルルのほうを向いて、ＧＮフルシールドで身を包み防御する。

ガガガガキンッ！

ショットガンの弾とシールドがぶつかる音。

それと一夏の様子を見ると、ミサイルを一発でも受けたらしく左腕の装甲が手の部分を残して無残なことに。それでも俺のほうに接近してきていた。

「んなろっ」

腰部フロントアーマーを開き、ＧＮミサイル十六発をシャルルに。

シャルルはすぐにショットガンで迎撃、全基を撃ち落す。

俺はその隙に、シャルルと一夏から十分に距離を取った。

「なら今度は――乱れ撃つぜぇ！」

ＧＮスナイパーライフルを収納。両腿のホルスターからＧＮピストルを二丁引き抜く。

そして、二人向けて両方のトリガーを次々と引く。
俺がトリガーを引くのと同時、ピストルに片方三基づつビットがサポートに入り射撃、二人の回避先を読むように援護射撃を行う。

「くそっ！」

「まだまだ！」

「追加だ！　くらっとけ！」

左膝のアーマーを開き、残った最後のＧＮミサイル四発も吐き出す。
知っている一夏は回避、シャルルは左腕のシールドで防ごうとする。
ＧＮミサイルは爆破でダメージを与えるんじゃなくて、内部にＧＮ粒子を送り込んで破壊する。現状では一夏の判断のほうが正しい。
シャルル、そのシールドはもらったぜ？
シャルルの左腕のシールドには二発のＧＮミサイルが突き刺さる。
そして内部にＧＮ粒子を送り込んで…

「――えっ！？」

バァン！

左腕のシールドの“外装だけ”破壊した。
……確かシャルルのシールドの中には、盾殺し《シールド・ピアーズ》が仕込んであったから、そのせいだな。
その証拠に、外装の破壊されたシールドの内部からリボルバーと杭が融合したような武装が覗く。

「パイルバンカー……」

「くっ！」

シャルルは弾の切れたショットガンをすぐに収納。それとほぼ同時に新たな武装アサルトライフル《ヴェント》を呼び出して撃ってくる。

俺も多少のダメージは無視で、ピストルを乱射する。

「――――これならっ！！」

一夏の二度目の瞬時加速。

また後ろに逃げようとしたが、何かに阻まれて下がれない。

「なっ！？」

「逃がさない！」

俺の背後を取っていたのはシャルル。いつの間に！？

こんなことが可能な芸当は……瞬時加速か！

俺の背後を取ったシャルルは、その左腕の外装を破壊されたシールド――パイルバンカー――を俺に向ける。

「前も後ろもかよ――――このぉっ！」

かろうじて、体をシャルルを右側に、向かってきている一夏を左側になるように動かす。正確には、二人ともＧＮフルシールドの可動範囲内に入るように。

その直後、超加速した一夏とシャルルのパイルバンカーの準備が整う。

「「これでっ！」」

ザンッ！　――バキィ！

ズガン！　――メキッ…

二人から一撃づつもらった。シールドでガードしたものの、一夏の零落白夜を発動させた雪片弐型を受けた左側のシールドは当たり所が悪く、外側から一つ目のヒンジの部分に当たりその先を切断される。パイルバンカーを受けた右側のシールドは大きな亀裂が。

左手を動かしてピストルとビットのビームを放ち、一夏だけは俺から遠ざける。

シャルルは――簡単に言えば間に合わなかった。

ズガン！　――バキャァ！

パイルバンカーの二発目。先ほどの亀裂が一気に広がって、一つ目のヒンジから先が砕けた。それと、S・Eに対するダメージは防げても内側に来るダメージは……防げない。衝撃が通った俺の体は痺れる。

「まだまだ！」

次の一発。俺を守るものは何もない。

「シャルル行け！」

一夏はもう決まると思っているみたいだ……けど！

「くそっ！　――まだだ！」

パイルバンカーの衝撃が通り、少し痺れる体を無理やりに動かし、機体を少しだけでも下に動かす。
まだ上の部分のシールドだけは残ってる。なら、そこで防ぐ！

ズガン！　――バキャァ！

残っていた右側のフルシールドは全て破壊されてしまう。残ったのは普通のＧＮシールドのみ。
だが、それが最後の一撃だった。今まで撃てなかったティエリアの援護射撃が、今の衝撃で俺が動いたことで狙えるようになりビットのビームがシャルルに命中。俺とシャルルを分断する。

――助かった。

――まだ終わってない。行こう。

――ああ、勝つさ！

まだトランザムを使うわけにはいかない。けど、それでも！

「まだだ、まだ終わらない！」

再度一夏とシャルルの両方にピストルとビットの銃口を向ける。

「…これでもまだ駄目なのかよ」

「毒づいても駄目だぜ一夏。終わってないのは終わってないんだか

らさ！」

左右のピストルのトリガーを引く。

それにあわせて、俺の周りで滞空するビットからも二人に向けて射撃。

二人は左右に避け、それをビットが先読みして当てる。

「でも……埒が明かないな。なら、仕方ない」

俺は機体を加速させてシャルルに急接近する。

――ビットは一夏の足止め頼む。

――わかった。

全てのビットを一夏に向かわせて、そのままシャルルに接近していく。

シャルルは接近戦の用意で、近接ブレード《ブレッド・スライサー》を右手に呼び出した。

俺も左手のピストルをホルスターに戻してビームサーベルを引き抜く。

「「はあっ！」」

ビームサーベルと近接ブレードで近接格闘。鍔迫り合いに入り、そのままの至近距離で右手のピストルを撃つ。

シャルルの左手のアサルトライフルでその銃口をずらされ、ビームは明後日の方向に。そのままアサルトライフルを向けられる。

「これならどう？」

「やらせない」

ピストルを仕舞うのももどかしく投げ捨て、二本目のビームサーベルでその銃身を切り裂き、シャルル本体にも斬撃を当てた。

「――――あっ！」

「チェックメイト。だ、シャルル」

斬撃を当ててシャルルの体勢を崩させると、右手の近接ブレードも弾き飛ばす。これでシャルルは丸腰。

右手のビームサーベルで再度の斬撃。それにあわせて左手のビームサーベル発振器を仕舞い、ＧＮスナイパーライフルを展開。

山田先生にしたように銃口を押し付け、問答無用でトリガーを引く。

「ジ・エンド」

バシュゥン！

ピストルとビットの連撃をすでに食らっているシャルルの機体にこの攻撃を耐えるすべは無く、戦闘不能に。シャルルはよろよろと地上に降りていった。

「一夏、後はお前だけだぞ」

「はっ、ここまでやっといて負けられるかよ。シャルルのためにも

な」

「さっさと決着を付けようか！」

ビームサーベルを仕舞い、ＧＮスナイパーライフルを両手で構えた。ガンカメラも展開し、カメラアイも起動させる。

今の一夏はティエリアの操るビットに翻弄されていて、こっちに接近できる状況じゃない。なら好機だぜ。

「狙い撃つ！」

次々にトリガーを引き、ビームを連射。

――――何発か命中したところで、一夏が何か覚悟したような顔になったのがわかった。一夏、何するつもりなんだ？

「はぁぁぁぁぁっ！！」

ビットの射撃を無視して一夏が急加速…捨て身かよ！

零落白夜はまだ使えると思っていい。そうなるとこっちにもう受け止められる武装は無い。特攻がこんなにも厄介だったなんて……聞いてないぞ！

「仕方が無い、か」

ＧＮスナイパーライフルを収納して、両手にＧＮピストルを持つ。

「くらぇぇぇぇっ！」

最大まで加速した一夏が零落白夜までも発動して突っ込んでくる。

さて、覚悟を決めようか――――

――俺の勝ちだ一夏。

一夏が雪片弐型を振りかぶって、振り下ろして――――

「……トランザム」

俺に刀身が届く寸前、トランザムを発動。俺は一瞬で一夏の後ろに回りこむ。

回り込んだのと同時にトランザム終了……一秒のトランザム、ってな。

一夏の後ろを取った俺は、一夏の背中にピストルを向け……とにかく引き金を引く。

大体両方あわせて二〇発くらい撃ったところで、決着がついた。

『試合終了。勝者――――玖蘭拓神』

その放送が聞こえた後すぐに俺は、地上に降りた。

降りて、『マイスターズ』を解除する。

「勝った……か」

そのつぶやきに、さっきの攻撃で墜ちた一夏が応えた。
もちろん白式は解除済みで。

「ああ……俺たちの負けだ」

「……拓神、強いね。二人がかりで倒せないなんて」

先にリタイアとなったシャルルも近寄ってくる。

「こっちだって本当にギリギリだったんだから、同じくらいだよ」

実質的にはこっちも二人なんだよな、ティエリアがいるから。
……楯無に、俺を一人にするようにって頼んだ理由のうちにこれもあるんだよな。

「まあ、とりあえずはお互いお疲れってことで」

「ま、一夏の言うとおりか」

「そうだね。お疲れ様」

「ああ……さ、戻ろうか。次の試合もあるからな」

ということで、俺　ＶＳ　一夏＆シャルルの結果――

――ギリギリで俺の勝ち。

ＶＳ　一夏&シャルル（後書き）

結果は拓神の勝ちでした。はい。

フルシールドを破壊されるところはちょっとわかりにくいかも知れませんが、ご了承をｍ（＿＿）ｍ

結局トランザムは使わせちゃいましたよ。セカンドのケルディムの一秒トランザム、かっこよすぎですよね。やりたかったんです。だからデュナメスでやらせてみました。ケルディム出してからでも良かったかもしれませんが；；

というかデュナメスって、アニメ本編だとトランザム使ってないんですよね。スペシャルエディションだと使ってるみたいですけど。

あと、トランザムはワンオフ・アビリティーなので三世代機でも任意解除可能になってます。

それと「ジ・エンド」とか、かっこつけさせたかっただけです。

あと、一対二の戦闘描写は辛いです…。二人同時はデュナメスじゃ無理ですし、機体を変えるつもりも無くて…はい、自分で首絞めてます。

もはやティエリアにビットでがんばってもらって、片方相手してもらいました。あ、描写が無いですけど最終的には六基中三基撃墜された、という作者の脳内構想です。タイミングは脳内で適当に。（↑なぜ描写しない

感想・アドバイス等できればお願いします。作者の動力源なのでｍ（＿＿）ｍ

次回『ＶＳ　ラウラ＆箒』

ＶＳ　ラウラ&箒（前書き）

ラウラ&箒なのに、箒は戦闘に参加してません（笑

では、どうぞ。

VS　ラウラ&箒

一夏&シャルルとの戦闘を終えた俺はピットに戻る。
一夏たちと反対方向のそこに居たのは、ラウラと箒のペアだった。
――ああ、そういえばこの二人は次の試合だったっけ。
そんなことを思いながら、横を素通りしてピットの隅のほうに行こうとしたらラウラに呼び止められた。

「貴様、また邪魔をしてくれたな」

「あん？　何もしてねーよ？」

「今の試合、貴様が負ければ次の試合で私が織斑一夏を排除できていた」

学年別トーナメントはそのままトーナメント戦。組み合わせ的に、このラウラ&箒はこの試合で勝てば俺とあたることになってる。
ということは、先ほどの試合で俺が負けていれば一夏とシャルルがラウラに当たったということだ。
次のラウラたちの対戦相手には悪いが、専用機持ち…そして高い技術を持つラウラに訓練機で勝つには楯無レベルの強さが必要だと思う。だから、訓練機で参加の次の相手ペアはたぶん勝てない。
……まあ、だからこそのこの宣言だと思うけども。

「ふうん。なら都合がいいな」

「なに？」

「まあ、一夏をやらせるわけにはいかないんだよ」

「ふん、まあいい。予定通りだ。まずは貴様から排除してやろう」

心の中で「その台詞、そっくりそのままかえしてやんよ」とつぶやきながらラウラを見る。

ラウラは俺を睨んでいて、視線が交錯。はたから見れば雰囲気もあわせて完全に睨み合いだな。

そんなとてつもなく入りにくい空気に入ってきたのは箒だった。

「時間だ。先に行くぞ」

いや、入ってきたとは言わないか。

それだけをラウラに向けて言うと、自らは打鉄を装備してピットを出て行った。

「……玖蘭拓神、首を洗って待っているんだな」

ラウラもそれだけ言って、ピットからシュヴァルツェア・レーゲンを装備して出て行く。

「ふぅ……」

それを見て俺は、深く息を吐いた。

「……なんか俺の心労の原因が一夏な気がする」

『君からも突っかかってるじゃないか』

今のピット内には俺しか居ないから、ティエリアも外部音声で話せる。

『それで、君はどうするつもりだ？』

「なにが？」

『ラウラ・ボーデヴィッヒの相手だ。実力はあるぞ』

「楯無より下なら別に。一夏とシャルルはコンビネーションでしっかりしてたからな、それをまったく無視のボーデヴィッヒ位ならいける」

『そうか。機体は？』

「キュリオス。サブマシンガンは両手で、左腕にシールド。右腕にはハンドミサイルユニット装備して」

『了解』

さて、あとはＶＴシステムか。そうだな……

「ティエリア、あとエクシアをフル装備での展開準備もよろしく」

『セファーは？』

「もちろん展開で」

『了解だ』

これでよし、か。

さてどうなってるかな？

ラウラと箒が出て行って5分くらいが経った。ということで試合を中継しているモニターに目を向けた。

「瞬殺だなぁ、おい」

でもまあ、結果は目に見えてたんだけど。

すでに一人はリタイア、もう一人もボロボロ。

「えっと、たしか俺は次の試合、向こうのピットから出るんだっけ」

たぶんすぐに次の試合始まるじゃん！　十分であっちまでいけるのか？

まあダッシュだな。

俺、ダッシュ中

「はっ、はっ…到着」

『ビーーーー！』

さっきまでいたのと反対側のピットに俺が到着したと同時に、試合終了のブザーが鳴り響いた。
セーフ。たぶん十分もすれば次の試合、俺とラウラ&箒ペアの試合が始まると思う。
機体が動かなくなった訓練機のペアは下の出口から出ていく。ラウラはすでに戻っていて、箒も今向こうのピットに入った。

時間は少し流れて～

『それでは、第一アリーナ第三試合を始めます。各選手は準備をお願いします』

さて、行きますか！

「『マイスターズ』展開」

『モード選択《選択》ＧＮ－００３『ガンダムキュリオス』』

武装はまだ展開せずに、装甲だけ。
ＧＮ粒子が白とオレンジの装甲を構築した。

『各機能オールグリーン』

「オーライ、行くぜ！」

俺は、勢いよくアリーナに飛び出した。
ラウラと箒はすでに出てきていて、空中で静止した俺の目の前に居る。

「来たか……潰してやろう」

「俺は負けるつもりは、さらさら無いな」

また睨みあい。いや、俺は顔も装甲に包まれてるからあっちに見えてるのかわかんないけど。

試合開始まで、後二十秒

――ティエリア、武装展開。

――了解。

GNサブマシンガン二丁、GNシールド、ハンドミサイルユニットが相次いで展開される。

「篠ノ乃、貴様は邪魔だ。手出しをするな」

「なっ！？」

そう言い放ったラウラは箒の反論を聞こうともせずに、俺のほうに向き直る。

「いいのか？　戦力を削って」
「あの程度、戦力にもならない」
箒の気分は悪くなる一方だが、そんなことは気にも留めないラウラ。
……箒のイライラが一夏に向かないことを祈ろう。
試合開始まで…5、4、3、2、1――開始！
「叩きのめす！」「手加減は無しだ！」
俺とラウラは同時に動き出す。箒はラウラの後ろのほうで動かない。
それはおいておいて、俺はラウラに距離を詰めさせず空けすぎさせずの距離を保つ。
そして両手のＧＮサブマシンガンをラウラに向けて撃つ。
ババババババッ！
命中精度と威力は低いがその代わりに連射速度は高い。
そのビームの弾幕を、ラウラは回避しながら接近しようとしてくる。
俺はラウラとの距離を一定以下にさせない。ＡＩＣを食らってもかなわないので、機体制御はティエリア任せでランダム回避。
「ちょこまかと！」

「わざわざ敵の思惑通りになるやつもいねぇだろ！」

両手のＧＮサブマシンガンの連射を続ける。

集弾性能がそこまで良くないことがむしろメリットになって、バラけた弾がときたまラウラのＳ・Ｅを削るが、ほぼ無傷といってもいい。威力が低い弾丸が十発程度当たったところで致命傷には程遠い。別にこのままラウラのエネルギーが切れるまでこれを続けてもいいんだが……味気なさ過ぎる。

ということで、俺は行動を起こすことにした。

「くらいな」

右手のＧＮサブマシンガンでの射撃を止め、右腕のハンドミサイルユニットからミサイルを撃ちだす。

左手のサブマシンガンの連射はラウラの行動を遮るように変更する。

「ふっ！」

ラウラはＡＩＣでまとまって飛んでいくミサイルの中心にある一発を止め、ほぼ同時に肩のレール砲をそれに向かって撃つ。

レール砲の弾丸はミサイルに着弾しミサイルを爆破。その爆破に大体のミサイルは誘爆し、ラウラに向かうミサイルは誘爆を逃れた一発のみ。たぶんすぐにこれも撃破されると思う。

そんなことはどうでもいい俺は、ティエリアから機体の制御を受け取って誘爆でできた爆煙に戸惑い無く飛び込む。

爆煙の中でもハイパーセンサーには捉えられる。ただ一瞬でも俺を見失ってくれればいい。俺は右手のＧＮサブマシンガンを収納。腰のリアアーマーからビームサーベルを引き抜く。

そして煙から飛び出す。

「はぁぁっ！」

この機体――キュリオス――の特徴は速度。巡航形態なら最大で瞬時加速並みの速度を出せるし、人型のままでも十分な速度が出る。（イグニッション・ブースト）

その状態で左手のＧＮサブマシンガンを連射しながらラウラに急接近。右手のビームサーベルを振るう。

ラウラはそれを左手のプラズマ手刀で受け止めた。プラズマとビームでぶつかっている部分からスパークを撒き散らす。

「甘いな」

ラウラは左手のプラズマ手刀を展開。それを振るってくる。

「甘いのはそっち」

俺はキュリオスのシールドをクローモードに変更。シールドの前の部分が真ん中から割れ、クローになる。それでラウラの右腕を掴む。

「まだだ！」

ラウラは両肩からワイヤーブレードを射出してくる。

「それでも！」

右手のビームサーベルでラウラの左手のプラズマ手刀をはじき、自身の体は左に移動させワイヤーブレードを回避、クローで掴んだままのラウラの右腕を引っ張るようにしてラウラを投げ飛ばす。そ

して体勢が不安定なラウラに対して左手のＧＮサブマシンガンを連射する。

「くぅぅぅっ！」

「どうしたよ、最初の威勢は！」

……頭の中がバトルジャンキーみたいになってるけど、気にしたら負けだな☆

俺は銃身が焼け付く前にサブマシンガンの連射を止めてラウラに再接近。ビームサーベルを振りかぶる。

「――――はっ！」

ラウラはビームサーベルを振りかぶった俺に対して左手を向けてくる。

それと同時に、俺の体から自由が奪われた。

「…警戒はしてたつもりなんだけど」

「甘かったな」

ガキン！　という大型レール砲の駆動音とともに、その砲口が俺に向く。

「くらえ！」

ドンッ！――バァン！

「ぐぁっ！？」

レール砲の狙った場所は俺の右腕、どうやら武器を奪ってから俺を倒そうという魂胆のようだ。放たれたレール砲の弾は正確に俺の右腕に直撃。装甲を破壊され、ビームサーベルも壊された。かなりの衝撃が俺の右腕に走る。

――くっそ。ティエリア、何か方法は？

――キュリオスのＧＮバーニアを最大出力にすればあるいは……

――なんでもいい。とにかくこの状況の打開を！

――わかった。…脚部ＧＮバーニア出力最大、全ＧＮ粒子を推進系に。

両足のＧＮバーニアの出力が全開になり、ＧＮ粒子を大量に噴出す。それとともに、じわじわとだが俺の体は動き始めた。

その事実に、ラウラの顔は驚愕に変わる。

「なっ、慣性停止結界に逆らうだと！？」

「いっけぇぇぇえ！　キュリオス！」

俺が叫ぶと同時に、噴出すＧＮ粒子がさらに勢いを増して――

俺は急上昇した。

「――ってあぶねぇ！」

俺はアリーナ上部の遮断シールドに衝突しそうになる。それもかなりの速度で。

「し、心臓に悪いな。これ」

「まあ、それはともかく…。さて、反撃といこうか」

ＶＳ　ラウラ&箒（後書き）

最初からエクシアにしようかとも思ったんですが、キュリオスに出番を作らないとって事でキュリオスに。次話はエクシア出ます。

ＡＩＣ突破しちゃったけど、いいですよね！　ついやっちゃいましたけど！　キュリオスの推進力ならいけるかな、と。軌道ステーションの３ブロックを高度維持できるだけの推進力ならいけるんじゃね。と思いました。

……そして楯無、またで番無かった…

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『ラウラの歪み』

ラウラの歪み（前書き）

休みだってことでだらだらしてこっちを書かないという…ｏｒｚ

まあ気を取り直して、どうぞ。

ラウラの歪み

「まあ、それはともかく…。さて、反撃と行こうか」

「ふん、まだどちらが優勢なのか理解できないのか？」

「さあな」

俺の現状、右腕の肘から先の装甲損失。同時にビームサーベル一本損失、か。まだいける。

……そろそろ本気出（トランザム）して良いか？　――いや、まだか。んじゃま、もうちょいこれでいくかな。

「理解できてるのは……まだ戦いは終わってないって事だけだっ！」

その言葉と同時に俺は飛び出す。

ラウラがＡＩＣを使うモーションを見せたところで巡航形態に変形。急加速してＡＩＣを食らわずにラウラ向けて突進する。

変形したことに驚いていたラウラむけて残った左手のＧＮサブマシンガンを連射、そして連射を止め前方にＧＮフィールドを形成して――

「これでもくらっとけ！」

ガッ！――――ズガンッ！

――体当たり。

俺の突進は確実にラウラを捉え、そのままアリーナの壁面に押し付ける。

「ぐっ、がっ！？」

「へっ、終わりと思うなよ！」

ラウラを押し付けた直後人型に戻ってサブマシンガンを収納、シールドをクローモードに。最大まで開いたクローの基部からＧＮシールドニードルを出し、まず肩のレール砲を貫く。

レール砲は爆散するが、それを気にせずＧＮシールドニードルでラウラを斬りつける。

「こ、このぉ！」

「ちぃっ！」

ラウラが反撃として全て、六基のワイヤーブレードを射出してくる。それを俺は後ろへの急加速でかわして再展開したサブマシンガンで全てのワイヤーブレードを撃ち落した。……片腕って忙しいのな。

これでラウラに残った武装はプラズマ手刀とＡＩＣ。プラズマ手刀とＡＩＣは併用できないみたいだから、実質的な攻撃力はプラズマ手刀だけ。

とはいえ、片腕でそれを捌ききれるかといわれると……きつい。

こっちのGNサブマシンガンも離れると当たらないし、近づけばプラズマ手刀と打ち合うことになる。ってお互いに詰まってね？
それでもやるしかないってか。

「行くぜ！」

「貴様程度に！」

ラウラは両手のプラズマ手刀を展開。俺はビームサーベルを左手で持つ。
そして互いにが互いに向けて加速、すぐ近接戦闘の交戦距離に。

「はっ！」

「このっ！」

「これで！」

「まだだ！」

プラズマ手刀を一本のビームサーベルで捌く。無理であれば足を使ってラウラの腕を蹴り上げる。
その押収。気を抜いたらプラズマ手刀の餌食。
ラウラの隙を見出すため、全神経を目の前の対処に向ける。

捌き、蹴り上げ、斬りかかり、捌き、捌き、蹴り、捌き、蹴り上げ……

延々とそれを続けると、ラウラが痺れを切らしたのか両手の先を俺に向けて突っ込んできた。

単調な直進の動き。つまり、隙。

「もらったぞ！」

「それは俺の台詞だ！」

かわすため上昇、ラウラが俺の真下に来たところでシールドクローを展開。ラウラの腕ごと体を拘束する。

「くそっ、はなせ！」

「これで、オシマイだ！」

シールドニードルを何度も伸縮させラウラにダメージを与え続ける。

シールドニードルを出す基部とラウラの距離はほぼゼロのため、ラウラは絶対防御が発動。Ｓ・Ｅはごっそりと持っていかれてることだろう。

「ぐううっ……！」

相殺しきれなかった、貫く衝撃にラウラの顔に苦悶が浮かぶ。

そしてＩＳも蓄積されたダメージで強制解除の兆候、紫電が走る。

トドメになる最後の一撃を叩き込もうとしたところで、ラウラに異変が起きた。

◇

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……）

まだ、まだ私は目的を達成していない。それまで、それまでは――

（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

こんなところで負けるわけにはいかない。そのためには――

（力が、欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。

そして、そいつは言った。

『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類なき最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｃｌｅａｒ．
≪Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒｅｃｅ　Ｓｙａｔｅｍ≫……ｂｏｏｔ．

◇

「うあああああ！！！」

突然、ラウラが絶叫を発する。俺は異変に気づいたところでシールドクローを閉じてシールドを構えた。

次の瞬間、シュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、俺はシールドを構えたまま吹き飛ばされる。

「ぐぅっ！？」

予想以上の衝撃に左腕が少し痺れる。
電撃が収まると、シールドの表面からは煙が立ち上っていた。
そして俺はその視線をラウラへと向けて、口を開く。

「……ＶＴシステム……」

俺の視線の先のラウラ。そのＩＳは変形を……いや、その程度では済まない。
装甲だったものはグニャリと粘土のようになって、ラウラを包んで……否、取り込んでいく。

黒い、深くにごった闇、“歪み”がラウラを飲み込んだ。

俺は管制室への回線（チャネル）を開く。

「楯無！　そこにいるか？」

少し間があって――――

『え、ええ、居るわ』

返ってくる聞きなれた、というより毎日聞いている――――信頼できる者の声。

「良かった。織斑先生に言って非難を指示、あとお前は非難の誘導を」

『待って！　拓神の機体はダメージが！』

「俺は心配無用だ。だから『あっ！　どこに行くの！？』…どうした！？」

『今、一夏くんがここを飛び出していっちゃった…』

なんでそこ《管制室》に居るんだよ一夏。

「まさかこっちにくるつもりか？」

『おそらく。あの刀――雪片を見たとたん血相変えて走っていったわ』

「余計なことを…」

『それより！　拓神の機体は！』

「だからそれは気にすんな。……ちっ、時間も無いか。言ったことは頼んだ」

一方的に通信を切る。

楯無はすぐに動いたようで、放送が入る。

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定、鎮圧のために教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに非難すること！　繰り返す――』

その放送が終わるとシュヴァルツェア・レーゲン“だった”ものはラウラを完全に飲み込み、表面を心臓のように脈動させながらもゆっくりと地面に降りていく。

地に足を着くと、いままでのゆっくりな変化が嘘のように急速にその形を変える。

そして最終的にそれが形成（かたな）したのは、黒い全身装甲のＩＳのような何か。

ボディラインはラウラのものであって、最小限のアーマーだけが腕と脚に付いている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目があるべき場所には装甲の下にあるアイライン・センサーが赤く煌いている。

そしてその手に持つ武装は、かつてブリュンヒルデとなった織斑千冬が使用していた武装『雪片』。

「テメェが変わったなら、俺も変わってやるよ……エクシア」

『モード選択、ＧＮ－００１『ガンダムエクシア』』

俺の体はＧＮ粒子に包まれ、オレンジと白からトリコロールの機体に変わる。

キュリオスで損壊し生身の腕が見えていた右腕は、新たに展開された無傷のエクシアの装甲になった。

『ＧＮＲ－０００『ＧＮセファー』展開』

追加装備のＧＮセファーも装備される。デュナメスと同様コーンスラスターにコアブロックが付き、そこから左右にＧＮプロトビットが展開される。

『セファーエクシア』。意味は『能天使の書』

全ての展開が終わったことを確認して、右手のＧＮソードの刀身を展開。左手には右腰のアタッチメントからＧＮショートブレイドを。

プロトビットは俺の周りで銃口を黒い歪みに向け、そして俺はその両手の剣を構える。

「玖蘭拓神、ガンダムセファーエクシア……その歪みを駆逐する！」

ラウラの歪み（後書き）

最近出番の無い楯無さんに出番を作りました！

キュリオスのシールドニードル連打は、原作シャルのシールドピアーズを意識してみました。

そしてエクシアもセファー化（笑

エクシアを出す出す言っといて、見せ場は次回送りです。

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『その歪みを駆逐する　ｂｙ拓神』

その歪みを駆逐する　ｂｙ拓神（前書き）

戦闘シーンは半分くらいですね。やっぱりいろいろと難しいです、戦闘シーン。

では、どうぞ。

その歪みを駆逐する　ｂｙ拓神

「――――その歪みを駆逐する！」

「――――！」

刹那、こちらの戦意を感じたのか黒いＩＳが俺の懐に飛び込んでくる。

居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、一瞬で詰められた間合いから放たれる横の一閃。

ギンッ！

俺はそれを左のＧＮショートブレイドで受ける。が、ショートブレイドは俺の手から弾き飛ばされる。

そして敵はそのまま上段の構えに移った。……レプリカでこの戦闘力かよ、千冬（オリジナル）は化け物か？

続いてその構えから鋭い縦一閃。

ガギィ！

俺は自分と雪片の間にＧＮソードを滑り込ませ、その斬撃を受ける。なんつー重さだ！

「ぐっ――おらぁ！」

左手を腰の後ろに回してＧＮダガーを引き抜き、指の間に挟んだ二本のそれを敵に向かって突き出す。
敵はそれをバックステップでかわす。
そのバックステップで離れた敵向けてダガーを投げつける。それは雪片で全て切り落とされた。

「おいおい……まったく、一度でいいからコイツのオリジナルを見てみたいぜ」

声は聞こえてるだろうから、織斑先生に向けた嫌味のつもりで言ってみた。後で怖いぜ☆
それはともかく。俺は黒いＩＳに突っ込む。

「おおっ！」

ガンッ、ギンッ、ギャッ、ガッ、ガギッ――

ＧＮソードを、敵は全て雪片でいなすか弾く。それでもレプリカ程度に反撃させるほど俺は弱くない。
と、そこで。

「――拓神！　どけよ！」

それと同時に、黒いＩＳは横から来た白いＩＳに吹き飛ばされた。

「一夏……なんで来た」

白いＩＳは、一夏の白式。
普通のＩＳの修復が二～三十分程度で終わるわけが無く、ＧＮミサイルで破損した左腕は破損したまま。

「そいつが気に食わねぇからだよ！　アレは千冬姉のデータだ、それは千冬姉だけのものなんだよ！」

「ブラコンとシスコンか……救えないな」

その瞬間、背筋に何か冷たい感触が走ったので、この思考を捨てる。

「だからって、お前がアイツを倒せるのか？」

「ああ、やってやる！　あのＩＳも、そんなよくわかんねえもんに振り回されてるラウラも、一発ぶん殴らないと気がすまねぇ」

「ま、できるならやってみな――――できるかどうかは知らねぇよ」

一夏の後ろに黒い影が見えた。俺は一夏の脇を通り、それが振り下ろす刀をＧＮソードで受け止める。

ガギィン！

「でもな、今のここで油断は大敵だぜ？」

今受け止めたのはわかりきっているが、あの黒いＩＳの雪片。さっきはただ一夏に突き飛ばされただけで、ダメージは無い。
俺はそのまま力任せにＧＮソードを振り上げ、雪片を弾く。

「――プロトビット！」

六基のＧＮプロトビットが、黒いＩＳを取り囲むと同時に射撃。しかし黒いＩＳはこれも避けてみせた。

「やっぱりこの程度じゃ駄目だよなぁ……で、一夏。どうする？」

「……やるよ。俺が、やる。コイツを倒す」

どうやら、一夏の決意は固いみたいだ。なら、友人の俺がすることはその背中を押すことか。

「なら、俺がやるからトドメはお前がやれ。俺は一瞬で決める」

「おう！」

――ティエリア、セファーを収納（クローズ）

――了解した。

背中からコアブロックが消え、プロトビットもその全てをＧＮ粒子に還す。

「覚悟しろよ？　まばたきも禁止だ」

プロトビットのかく乱から開放された黒いＩＳに向き直る。

「その歪み、俺たちが破壊する――『トランザム』」

俺は赤い残像を残しながら黒いＩＳに肉薄。振り下ろしてきた雪片をかわし、すれ違いざまにＧＮソードで横一閃を叩き込む。

「一夏！」

「ああ！　――『零落白夜』発動」

斬撃を受けて隙を見せる敵。そこに零落白夜は発動させた一夏が、雪片弐型を上段に構えて接近。防御行動を取れない黒いＩＳを縦一閃。

「ぎ、ぎ……ガ……」

俺と一夏に十字に切り裂かれた黒いＩＳは紫電を走らせながらラウラを解放、力なく崩れ落ちたラウラを一夏が抱きとめた。

「やっと終わったか……」

俺のつぶやきは、この広いアリーナに消え去った。

◇

強さとは――何なのか。

その答えを見つけられたのは、ただの障害だと思っていた二人のおかげだった。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う』

『強さねぇ……そうだな。自分の正義に従ってやりたいことを貫くことじゃないか？　やりたいことやらなきゃ、損だろ』

……では、お前たちは……？　どうありたい？　何をやりたい？

『俺のやりたいことか？　……俺はただ守りたい。好きな女と、その世界を。そのために力を手に入れたんだからな』

――お前には守りたい者がいるのか……

『ああ、最高の奴だ。本当の俺を受け入れてくれた。――ソイツに呼ばれてるからな、俺は行くよ』

そう言って、やさしい微笑みを浮かべていたそいつはこの場から

消えた。
私は残ったもう一人を意識する。
――お前は？
『俺は……俺はまず強くありたい。そしてやってみたいことがあるんだ』
――お前も、やってみたいこと……？
『ああ。でも、俺は拓神みたいに守りたいものがまだわかんねぇし、それだけの強さも無い。――それでも、強くなって誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦ってみたいんだ』
――それは、まるで……
『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ』
― ― ― ―

――――――

◇

「ふぅ、疲れた……」

自室に帰ってきた俺を迎えるのは、誰もいない。
楯無は今回の件についての対処で忙しいみたいだ。
このあとは、すぐにでも教師陣の事情聴取を受ける事になっている……気が重い。

「にしてもさっきのは――――相互意識干渉（クロッシング・アクセス）？」

『ああ、そのようだ。こちらでも確認した』

「ＧＮ粒子による脳量子波拡張の影響か？　じゃなきゃ俺まで巻き込まれる理由は無いはずだ」

『可能性は――無いとは言えないか。調査するか？』

「いや、いい。どっちにせよ、ダブルオーライザーになれればこれ以上のことができるんだからさ」

それにしても相互意識干渉……本音を隠せない場所なのか？　それでも、悪くは無いな。

それからさらに数時間後。

『トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため――――――』

ピ、と誰かが食堂のテレビを消す。

今は、俺・楯無・一夏・シャルルで夕食をとっている最中。

俺と一夏の事情聴取が終わったのがついさっき。楯無も仕事がちょうど終わり、シャルルは一夏を待っていた。

そして何があったのか興味津々で集まってくる女子をかわして、今になる。

「一夏くん、七味取ってくれる？」

「あ、はい」

「あ、次僕にください」

「はーい」

当事者二人までがのんびりしすぎだと言われても、気にしてはいけないのだ。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ」

「一夏、爺くさいぞ。……ん？」

食堂の入り口付近。そこに溜まっていた女子のテンションが暴落した株を持っていたかのように下がっていた。

ちなみに理由は知ってる。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

ばたばたー、と数十名の女子が走り去っていった。

「どうしたんだろうね」

「さあ……？」

ちんぷんかんぷんなシャルルと一夏を目の前に、俺と楯無は顔を見合わせて静かに笑う。

「……」

女子の去った後に見覚えのあるポニーテールを発見。箒だ。
口からエクトプラズム（？）が出ているかのように見える。
そんな放心状態の箒に一夏が近寄っていった。

「さて、私たちは部屋に戻りましょう？」

「え？　あ、ああ」

半ば強制的に楯無に手を引かれ食堂を出ることに。

……後ろから鈍い打撃音と打撃音が聞こえたのは気にしてはいけないぜい。

その歪みを駆逐する　ｂｙ拓神（後書き）

次かその次で二巻終われるかな、と。

やっぱり歪みを壊す＝エクシアですよね。エクシアかっこいいです。
次はヴァーチェに出番を……ナドレどうしよう。トライアルシステムを使いたい。

感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『つかの間の？』

番外編　ラウラ&等戦・アナザー（前編）（前書き）

感想でリクエストをいただいて、自分もやろうと思ってたことだったので書いてみました。

では、どうぞ。

番外編　ラウラ&箒戦・アナザー（前編）

「さあ、行こうか『マイスターズ』展開」

『了解。モード選択、ＧＮ‐００５『ガンダムヴァーチェ』』

今回俺が纏うのは白と黒の重厚な装甲。『ガンダムヴァーチェ』。
そしてその巨体に見合った火力を持っている。

【ガンダムＯＯの初見で超火力が良いという理由で作者が好きだった機体でもあったり（笑）
ちなみに今はガンダム全機大好きです！】

「ガンダムヴァーチェ、目標を破壊する」

その言葉とともに、俺はピットを飛び出した。
空中でラウラと箒と相対する。

「逃げずに来たか……機体が違う？　舐めているのか」

「いや、それは無いから。この変化がこの機体の特徴だから」

「ふん、まあどうであれ貴様を排除するだけだ」

試合開始まで後、5、4、3、2、1――――開始。

「先手はもらったぜ」

両肩のGNキャノンを左右それぞれラウラと箒に向けて発射する。

ズガズガァ！

発射のモーション大きい＋連射不可能なので、訓練機である箒にもあっさりと回避された。

「……ま、当たるとは思ってなかったけど」

とにかく接近されるとこの機体では圧倒的に不利なので、キャノンに加え右手のGNバズーカも撃ちながら距離をとる。

一撃でも受けると莫大なS・Eを持っていかれる大出力ビーム。あの二人はいつしかエネルギーが切れると考えているだろうが、その概念はガンダムには通用しない。それに今の俺は武装にまわすGN粒子の量を最大のスピード（と言っても遅いけど）で連射しても切れないようにティエリアに調整してもらって、実質的に弾切れは無い。

俺はひたすら撃ち続け接近をなるべくさせないようにする。

ほぼ膠着状態と言っていいその状況で動いたのはラウラだった。

「くらえ！」

ＧＮバズーカをラウラ向けて放つ。ＧＮキャノンは箒の足止めに使う。

太いビームを避けたラウラはそのまま接近してくる。くそっ、まだ撃てない……

「次弾までのタイムラグは見切った！」

そんな熊さんの台詞を言って接近してくるラウラ。

「残念だったな！」

ギリギリでバズーカへのＧＮ粒子のチャージは終わった。撃てる。

「どっちが！」

トリガーを引こうとした瞬間、ラウラの速度が急上昇した。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）か……っ」

「こちらの番だ！」

すれ違いざまにプラズマ手刀での斬撃を受ける。俺の背後を取ったラウラはワイヤーブレードを射出、腕に二つ脚に四つで俺の四肢

を拘束した。

「まだだ！」

右手を無理やりに動かしてＧＮバズーカをラウラに向けて――

「私を忘れてもらっては困る！」

「あっ――！」

――横から飛び出してきた打鉄装備の箒にＧＮバズーカを蹴り飛ばされ、俺の手からＧＮバズーカが離れる。

「くっ――それでも！」

今の俺に残された使える武装、ＧＮキャノンを俺を拘束するラウラに向けようとする。

「やらせない！」

だがキャノンは途中でラウラのＡＩＣにつかまって、ラウラのほうを向く前に止められる。

「だとしても！」

「なにっ！？」

ヴァーチェのＧＮバーニアを全開、ラウラに力で勝とうと前進する。

――拓神、上だ！

――えっ？

ティエリアからの忠告に斜め上を向いたところで、打鉄の近接ブレードを上段に構えた箒を俺が捉えた。

「ふっ、今回だけ頼らせてもらうぞ篠ノ乃箒！」

「まさかお前に頼られるとはな。だが、任された！」

箒は何が何でも優勝しようと躍起になってないか？　なってるよな！？

「くっそ、ＧＮフィールド！」

『ＧＮフィールドは展開不能だ！』

見ると、足のＧＮフィールド発生器はラウラのワイヤーブレードでそれを開けず、キャノンに内蔵されたそれもＡＩＣで展開できない。

「はぁぁぁぁっ！」

急接近してきた箒がブレードを振り下ろしてくる――仕方無いか……

――ティエリア、ナドレを！

――了解。ヴァーチェ、外装を排除（パージ）。

篝のブレードが俺にあと少しで届くところでヴァーチェの胸部外装が吹き飛び、その吹き飛んだ外装が篝をピンボールのように吹き飛ばす。

その後もＧＮキャノン、脚部、バックパック、腕部、胴とワイヤーを引きちぎりながら外装がはじけ飛ぶ。

最後に頭部の装甲が、内側から大量の粒子供給コードを覗かせながら排除（パージ）された。

「見せちゃったか……これがこの機体の真のの姿、『ガンダムナドレ』」

重厚なヴァーチェの面影はまったく無い細身の機体。頭部の大量の長い粒子供給コードは女性の髪を思わせる。

ティエリアの計算でちょうどいいところに落ちてくるＧＮキャノン。そこからグリップが出てきて、それを俺は掴む。

そして即座にラウラと篝向けてそのトリガーを引いた。

「ぐあぁぁっ！」

「っ！？――ぐぅぅっ！」

排除した装甲でバランスを崩していた篝はその太いビームに飲ま

れ、ラウラはすんでのところで回避しようとするが左の手足とその周囲を飲まれる。

結果、箒はＳ・Ｅを全て削られ戦闘不能。ラウラはＳ・Ｅはまだ残っているものの機体に大ダメージを受けた。

番外編　ラウラ&等戦・アナザー（前編）（後書き）

リンドウ様、こんな感じでどうでしょうか？

本編を書け、という人はスミマセンｍ（＿＿）ｍ

自分でもすごくやりたかったんですコレ。

本編の次話とコレの後半の投稿は明日になります。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

つかの間の？（前書き）

上手に甘くできた、かな？かな？

……うぇっ。

気を取り直して、どうぞ。

つかの間の？

俺は楯無に手を引かれ、自室に帰った。

「お、おい、どうした？」

「へ？　なにが？」

「だから急にどうしたんだよ？」

「むー、自覚無いの？」

自覚？　……なんの？

「……その様子だと無いみたいね」

「？」

「だ・か・ら。あの時、私に心配かけたって思わないの？」

「ああ、だから心配するなって言ったじゃん。それにもっと俺のこと信用してくれないのか？」

「……まあ、いいわ。私に心配させた代償は払ってもらうわよ？」

へ？　代償って……ゾクッ。

「ふふっ、覚悟なさい」

ドサッ、とベッドに仰向けに押し倒されて、楯無が俺の上に跨る。

「ちょっ！？　たてな――――んっ」

反論の余地も無く、楯無に唇をふさがれた。
そして彼女の舌が俺の口の中に入ってくる。

「んっ…はっ…んむっ…んっ――――――ふぅ」

離れると、楯無の口から俺の口へと垂れ下がる糸のように線が繋がる。
それが切れる前にもう一度口をふさがれた。

「ふっ…あ…ん…はふっ…んうっ――――――ふはっ」

また楯無と俺の口の間に線が繋がる。楯無は今度はそれを舐め取るとまた顔が近づいてきて、くっつくかつかないかのところで止まった。

「これで終わりだと思う？」

「思いたいけど、終わらないんだよな？」

「もちろん♪　……拓神が望むなら最後までいっても良いわよ？」

「それ、望んでるのはお前じゃないのか？」

「うわ、拓神ったらえっちぃ。でも当たり。んー、私のほうがえっちぃかな？」

「そうかもな……」

「でも、私は拓神と一つになりたい。……あなたとがっｔ――」

「言わせねぇよ！？　いろんな意味で危ない！」

前にもあったよな、そういうのを使おうとしたこと！

「なに？　じゃあストレートに言ったほうが良かった？」

「さっきとは違う意味でアウトだ！　この小説を十八禁にするつもりか！」

「あら、メタ発言は禁止だぞ♪」

あっ、なにこれ可愛い――じゃなくて。

そして、むしろそれが一番のメタ発言だと俺は思うでせうよ。

「ああもう。ともかく、一回離れてくれ」

「ヤダ」

「じゃあ……攻めても良いか？　――答えは聞いてない」

俺と楯無の位置を反転させる。俺が上、楯無が下。

「きゃっ……また強引だなぁ」

「いつも強引なのはどっちだよ――――んっ」

さっきみたいな深いキスじゃなくて唇を合わせるだけで、俺は楯無の唇をついばむようにキスする。

そのキスのときにすごく近い距離で見た楯無の目は熱っぽく潤んでいて、頬は紅潮してて。……とにかく、いつもより色っぽくて――

「楯無…今のお前、エロい顔してるぞ」

「なによそれ。でも、拓神もそうよ？　私が欲しくてたまらないって顔してる」

マジでか……無意識なんだが。理性が外れかけてるのか？

「……どうであれ、今はまだ食わないけどな」

「あら、どうして？　こんな良い女が目の前で欲しがってるのに」

「自分で良い女って言うか……。楽しみは後に取っておくってな。あと何年一緒だと思ってるんだ？」

「……数千年、でしょう？」

「そういうわけだ。まだお楽しみをするには早いんだよ」

「……でも、こういうことはしたいんでしょう？」

「えっ？　なにをっ！？」

楯無は俺の手を取ると、自分の胸に押し付けた。俺は目線をそらして、手の感触も無視――――できなかった。

……すげぇ柔らかい――――って無視しろ俺、無視するんだ。正気を保て。楯無に乗せられたら負けだ。

でも、それを感じ取ったのか楯無はさらに胸を俺の手に押し付けてくる。さらには残った方の手で目をそらすことさえさせてもらえない。

振り払おうにも、楯無に取られている方ではない手はベッドについていて、離せば俺は楯無にのしかかることに。

「私の胸の感触はどう？　ふふふっ」

くすくす笑いながらも顔が赤い楯無。ああ、ちくしょう……

ガチャッ――

ガチャッ？

楯無と目を見合わせて、部屋のドアを見る。

「お邪魔しますー。玖蘭くｎ……」

入ってきたのは山田先生。――いや、誰が入ってきたなんてどうでもいい。ただし織斑先生以外。ちなみに他の人だったら神力を使って気絶させてもいいと思ってる。ただし一夏に限り徹底的に頭を殴って記憶を吹き飛ばそうとも思ってる。

……まあとにかく、問題なのは今の俺たちの格好であって。

俺は楯無の上に乗り、胸に手を当てている。つまり、俺が楯無を襲っているように見えるわけで。

「は、はわわっ……そ、そのあなたたちがそういった関係なのは、し、知っていましたが…その――――――きゅぅ……」

山田先生は混乱して目を回して、その場で気絶してしまった。

ふぅ、山田先生は気絶させる必要がなくて良かった

「えっと、どうするの？」

「俺に言う？」

「「……」」

結局どうするか思い浮かばなかったので、とりあえずベッドに寝かせて起きるのを待つことに。

「あ、そうだ。記憶って神力で消せないの？」

「無理。そこらへんは本当の上級神にしか操れないらしい。あとは時を止めるとか、そういったのは無理っぽい」

「へえ…じゃあ、山田先生どうする？」

「とりあえず起きたら、あれは気のせいだってとにかく思い込ませればいい。ＯＫ？」

「とりあえずわかったわ」

数分後

「あ……えっと、私はどうしたんでしたっけ？　どうしてベッドに……」

やっと起きたよ……

「あ、先生気がつきました？」

「さっき入ってきたところで突然コケて、頭打って気絶したんで…大丈夫ですか？」

「あ、そうだったんですか。すいませんでした」

（（コケて頭打って気絶、に何の疑問も持たない（の）！？））

今の俺と楯無の考えてることは同じだと思う。そして、どうやらさっきの気絶のショックで記憶は吹き飛んでるらしいにゃー。

……うん、久しぶりにやったぜ。

「え、えっと、頭が痛いとか無いですよね？」

「はい、そこらへんは問題ありませんよ。先生は石頭ですからー」

えへん、と胸を張るようにする山田先生。いや……

（（そういう問題！？　てか（というか）威張れないし、それに石頭だったの（か）！？））

たぶんこれも思考が楯無とシンクロしてると思う。

ツッコミもなにやらおかしい気もするが、それより山田先生ェ……

「そ、それなら良かったです。で、俺の名前を呼びながら入ってきたんですけど何か用が？」

「あ！　そうでしたそうでした、忘れるところでしたよ！　実は男子の大浴場が解禁になったんです。織斑くんとデュノアくんは食堂にいたから先に伝えましたので、入れる日程のほうはその二人に聞いてください。良かったら入ってくださいね。では、お邪魔しましたー」

そして何事も無かったかのようにここから出て行った山田先生。

というか出て行くときに本当にコケて気絶しないか、すげぇドキドキしたんだけど……

さて、確か今日の風呂は一夏とシャルルのお風呂イベントだったよな。というか俺もシャルルのことは女子って知ってるし、わざわざ行くような真似はしないぜい。

「ね、拓神。拓神は大浴場行くの？」

「今日は行かない。理由は明日になればわかると思うよ」

「ふぅん……じゃあ、さっきの続きする？」

「やらねぇよ。山田先生のおかげでいろいろと覚めた（誤字じゃないぞー）」

「あらざーんねーん。もう少しで落とせたのに……」

「本人の目の前で言うなよ」

本当にあと少しで落とされてたよ、あれは。

……だって好きな女が目の前にいて、誘ってきてるんだぞ？　普通の男だったらどうするか。……わかるよなぁ。

「とにかく、俺はシャワー浴びてから寝る」

シャワーを浴びてる間楯無の襲撃を注意していたが、流石に楯無もさっきので興が冷めたようでそれは無かった。

つかの間の？（後書き）

山田先生の武力（？）介入！（笑

久々にいちゃいちゃ書きました～☆
もうちょとエロめな要素入れても良かったかな？

そして楯無はまたもネタ行使（爆笑

では、感想・アドバイス等お願いしますm（＿＿）m

次回『展開は唐突に？』

番外編　ラウラ&等戦・アナザー（後編）（前書き）

とりあえず、こんな感じで。

では、どうぞ。

番外編　ラウラ&箒戦・アナザー（後編）

箒を戦闘不能に、ラウラに大ダメージを一撃で与えた俺はＧＮキャノンをラウラに向ける。

『粒子再チャージ完了』

「ボーデヴィッヒ、終わりだ」

粒子チャージの終わった両手のＧＮキャノンをラウラに向け、トリガーを引ｋ――――

「うあああああ――――っ！？」

突然のラウラの絶叫。それと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから電撃があたりに撒き散らされ、俺は両腕をクロスさせて一応の防御を取る。

「くっ！？　――――来たか…」

「あああああああ――っ！！　……」

ラウラの絶叫が収まるのとほぼ同時に、ラウラの体は粘土のようにぐちゃぐちゃになったシュヴァルツェア・レーゲンに包み込まれた。

黒い、深く濁った闇が、ラウラを飲み込んでいった。

「ＶＴシステム。……篠ノ乃博士の言葉を借りるけど、本当に不細工な代物だな」

その間にも粘土人形を作り出すように、ラウラを包むシュヴァルツェア・レーゲン“だったもの”は変形……いや、造形していく。

そしてそれが地に足をつくと、その速度を早め急速に造形される。

ラウラのボディラインをまんま反映したような黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳが造形され、腕と脚に最小限のアーマーが造形され、頭部にフルフェイスのヘルメットのようなアーマーが造形され、最後に――

「『雪片』、か」

その手に一夏の扱う雪片弐型。その原型であり現役時代の織斑先生の愛剣を複写（トレース）したものが握られた。

俺はすぐさま織斑先生に通信を繋げる。

「織斑先生、避難勧告を早く……」

『わかっている。…山田君』

『は、はいっ！』

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定、鎮圧のために教師部隊を送り込みます！　来賓、生徒はすぐに非難してください！　繰り返します――』

『織斑先生？』

『何だ？』

『一夏は今何をしてますか？』

『アイツならピットで白式の整備を――『織斑先生！　一夏が！』――なに？』

通信に割り込んできたのはシャルル。

『一夏がアイツを倒すって飛び出して行っちゃって……ぼ、僕はどうすれば？』

『お前は待機だ。…玖蘭、時間稼ぎを頼む』

「了解…でも、倒しても良いんですよね？」

『……コアは壊すなよ』

それには応答しないで通信を切った。どうせトドメを刺すのはアイツだろうし。

「らしいからさ、死合おうぜ？」

「――――！」

向き合ったとたんに、黒いＩＳは俺の懐に飛び込んできた……早い！

「ちっ！」

ビームサーベルを抜く暇も無く、盾にした両手のＧＮキャノンを切り裂かれる。

俺はＧＮキャノンを放棄してすぐさまその場から離れる。直後黒いＩＳの巻き込むようにしてＧＮキャノンは爆散した。

「ちっとは――――って望めないよな」

黒いＩＳはその爆発をものともせずに、爆煙の中から姿を現した。すぐに俺向けて突っ込んでくる。それに対して俺は膝アーマーからビームサーベルを抜く。

ジジジィィィ！

実体験とビームサーベルがぶつかる。熱量で溶けてもいいはずだが、雪片にそんな感じは無い。模造品とはいえ、雪片は雪片か……

それよりビームサーベルで良かった。実体験なら叩き折られてい

てもおかしくない衝撃が俺の腕に走ったからな。

「くっ！」

空いてるほうの手にもビームサーベルを持って、不意打ち的な感じで振る。

しかし黒いＩＳは今までのほうを弾くと、そちらも弾いて見せた。

「ちっくしょ、パワーが……」

ヴァーチェの装甲を排除したことで、そちらに内蔵されていたＧＮコンデンサーも捨てることになり、必然的に一度に使えるＧＮ粒子の量も少なくなる。それで当然機体の出力は落ちる。……それでも機体が軽くなったぶん機動性は上がっているんだけども。

――ビームライフルを頼む。

――了解。

左手のビームサーベルを膝の中に戻すと、開いた左手にビームライフルが展開される。

「くらえ…っ！」

通常のビームライフルより高出力なそれを撃つ。しかし――――

「は…？」

それを黒いＩＳは雪片で“切った”。オイオイ……ビームって切れるもんなのか？

「でも、そうじゃなきゃ面白くないよな……！」

スラスター全開で黒い機体に接近、右手のビームサーベルで切りかかる。

当たり前のように雪片で止められるが、

「この距離じゃ外さない！」

敵機の頭にビームライフルを向けてトリガーを引く。

しかしそれを、黒い機体は上体を後ろにそらすことで避けた。でも――

「それで避けれたと思うなら……万死に値する！」

俺が銃口から出したのは、ビームはビームでも銃口から発生させるビームサーベル。そしてそれを振り下ろす。

しかしそれは、黒い機体が後ろへ思いっきりバックステップしたことでかわされた。

「これまでかわすのか……自信無くすぞ。つーか早く来いよ一夏っ……！」

「行くぞ拓神！」

やっと来たか……一夏。

「おせぇぞ！」

「悪い。道が混んでた」

どこぞの畑に立ってるヤツと同じ名前の奴が言いそうな言い訳だな。知らんが。

「ま、いいさ。さっさと片をつける。俺がサポートはするから行け一夏！」

「おう！」

――やっぱ見せ場は主人公にってな。ティエリア、トライアルシステム発動。

――・・・との同調……完了。トライアルシステム発動シークエンス、全段階終了まで……一〇

「一発で決めろよ？」

「サポートがしっかりしてればな」

「はっ、言うようになったな。こっちは完璧だ。お前はただ突っ込んで、ラウラをこっちに戻してくればいいんだよ」

「アイツも、あのＩＳも一発殴らないと俺の気がすまないからな……行くぜ？」

女子を殴る宣言はどうかと思うんだよな……

――トライアルシステム、発動準備完了。

「よし、行けよ一夏！」

「――――うぉぉぉぉっ！」

「トライアルシステム発動！　さあ、お前の罪を数えろ！」

俺を中心に一定半径のＩＳの制御を奪うシステム……トライアル《裁判》システム。

「俺から、敵対者への判決は……有罪だ」

『トライアルシステム対象、シュヴァルツェア・レーゲン』

飛び込んでいった一夏に対する対応を取ろうとする黒い機体の動きが完全に停止する。

雪片も、その手から零れ落ちた。

「はぁぁぁっ！」

一夏が振り上げた雪片弐型を振り下ろした。

ズサッ！

黒いＩＳは真っ二つに切り裂かれ、中から出てきたラウラが崩れ落ちた。それを一夏が受け止めて――

「殴るのは、勘弁してやれよ？」

番外編　Ｆｉｎ

番外編　ラウラ&等戦・アナザー（後編）（後書き）

リンドウ様、期待に沿えてましたでしょうか？

トライアルシステム、対象は決められるようにしてみました。

そしてついでに拓神にかっこつけさせました！

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

では、これからも「転生者は・・・」をお願いします！

展開は唐突に？（前書き）

なんでしょう、サブタイの終わりに？をつけるの気に入りました。
続くかはわかりませんが。

では、二巻の終わりで短いですがどうぞ。

展開は唐突に？

翌朝のＳＨＲ。教室にはシャルルとラウラの姿が無い。
ラウラはともかく、シャルルが居ないのはみんな疑問に思っていると思う。

「み、みなさん、おはようございます……」

ふらっ、ふらっ、としながら教室に入ってきた山田先生。事情をすでに知ってる身としてはお疲れ様です、としか言えない。

「織斑君、何を考えているのかはわかりませんが、私を子ども扱いしようとしてるのはわかりますよ。先生、怒ります。はぁ……」

だがそれを実行するつもりは無いようだ。というかできそうに無い。いまの山田先生が怒ったところで、誰も反省しようなんて気は起きず……むしろ山田先生が心配になる。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

山田先生の言葉は煮え切らないが、『転校生』に反応するクラス女子一同。すでに今月は二人も来ていて、いろいろと不思議に思ったりするのは普通なんだが。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

この声は――――シャルルだな。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ぺこり、と頭を下げるシャルル――シャルロットに、理解の追いつかないクラスメイトはとりあえずな感じでぺこりと頭を下げ返す。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります……」

本当に、お疲れ様です。

そろそろ、状況を飲み込み始めたのが数人出てくる。

「え？　デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったってワケね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは――――」

「ちょっと待って！　昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！！」

俺は脱衣場にも入って無いけど。

そして二人目、知ったかぶりをするな。

ザワザワザワッ！！　その事実に教室が一気に喧騒に包まれ、それはすぐに教室から溢れ出す。織斑センセー、ＨＥＬＰ！

バシーン！

教室のドアが蹴破られるか、という勢いで開かれた。

「一夏ぁっ！！！」

登場したのは鈴音。おい、お前二組だろ。ＳＨＲはどうしたよ。

「死ね！！！」

鈴音のＩＳアーマーが展開され、すぐに衝撃砲フルパワーで開放。

一夏、ご愁傷様。よかったな。明日の新聞の一面は飾れるぞ。

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原型をとどめておらず、クラスメイトは口々に悲しみの声を漏らす』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿でした」「あるいはイチジクでした」「破裂した缶コーラでした」「あるいはペ●シコーラでした」「せめて俺のＩＳで痛みも死体も無く逝かせてやりたかったです」

もちろん最後のは俺だ。その前に同じ内容のがあるがツッコまない。

そして使う機体はもちろんヴァーチェだ。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

あまりのことに肩で息をする鈴音。

「……」

着弾する直前、標的の一夏と衝撃砲の弾との間に割り込んだのは、シュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラだった。

衝撃砲をとめたのは言わずもがなＡＩＣ。というか着弾してたら教室が大変なことになっていただろうから、ラウラに感謝だ。

「助かったぜ、サンキュ。……っていうかお前のＩＳもう直ったのか？　すげえな」

一夏は直ったといっているが、肩の大型レール砲は無い。

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん――むぐっ！？」

一夏は突然胸倉をつかまれ、ラウラに引き寄せられ――――唇を奪われた。

「！？！？！？！？！？」

「あー……何というか、ご馳走様」

クラス中が呆然として固まる中で、俺の言葉も消え去った。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁？　婿じゃなくて？」

はい、ラウラの私の嫁発言いただきました。
やっぱりラウラはいままでの感じよりこっちのほうが良いな。纏ってる空気もちょっとはやわらかいし。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

えっと、ラウラに吹き込んだのは黒ウサギ隊の副隊長……クラリッサだったっけ？　それは二次元に対する話だ。現実で言ったらただのイタイ子だ。
まあ、それはともかく。こんなことになれば黙ってない連中が居るわけで。

「あ、あ、あ……アンタねえええぇっ！！」

ジャキン！

鈴が衝撃砲を再展開。
逃げ出そうとする一夏に対して箒、セシリア、シャルロットも加わって（箒は日本刀…危ねぇ！）――――

ドガァァァァンッ！

この日の朝、比喩的表現でも幻想でもなく、リアルに教室が揺れた。

幻想なら俺の右手が――ハイ、スイマセン。そんなことできません。

展開は唐突に？（後書き）

束さん視点は、オリジナル要素を突っ込んでうまく書ける自身が無かったのでカット。

ってあれ？　この話、主人公が一言しか言ってない？

そ、それはともかく、次回から3巻突入です！　イエー☆

福音戦でヴァーチェを出したいですね。後楯無をどうやって出すか。

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿　＿）ｍ

次回『とある朝？』

設定（まとめ）

と、いうことで……本編でなくてすみません。

とりあえず、作者も何がなんだかわからなくなっている漆黒のほうの二の前にならないためにも（↑オイ
ここで現時点までの設定を。

☆

主人公

『玖蘭拓神』

詳細は主人公設定で。

初期からの変化

半神という事実を知り、その力を神に解放してもらう。
そのため、寿命は大体約一万年。
そして『神力』という力を行使できる。

『神力』

神、またはその血が強く流れる者、覚醒させられた者のみが行使できる力。

覚醒のためには、行使できる者からの神力の受け渡しが絶対条件。

その質を自由に変化させることが可能で治癒（再生）や麻酔、身体強化などを基本とし、攻撃や防御にも使用可能。

ただし、できるのはその質を変化させる事なので、神力自体で物体を作ることはできない。

主人公のＩＳ

『マイスターズ』

『ガンダムＯＯ』の機体になることができ、設定上可能であれば再現可能なことに加え、ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２のスラスターをコーンスラスターに変更した場合などの機体バランスの崩壊等は、常時ティエリアが調整・制御することで起きない。

支援ＡＩとして、ティエリアの人格を持っている。

これはＩＳにあるとされる深層意識を表面化したもので、機体制御や武装展開などを搭乗者に代わり行うことも可能。もちろん独立

機動兵装の制御も行うことができる。
外部音声で会話することもでき、ＩＳ展開時には見えているハイパーセンサー上の隅にパイロットスーツ姿のティエリアとして可視化する。
また、プライベート・チャネルの応用で念話のような会話も可能。

現在一次移行（ファースト・シフト）状態で、ダブルオーの第三世代機相当の機体までを使用可能。
だが搭乗者の玖蘭拓神の意向でガンダムを基本的に使用し、フラッグやイナクト・ティエレンは使用されない。
二次移行（セカンド・シフト）を行うことで、第四世代機の使用が可能になる。

機体のスペックとしては現在存在する全ＩＳ中トップクラス。
二次移行すれば、確実にトップになる。
高い演算能力も持ち合わせていて（この部分はとあるものとのリンクによって成り立っている。リンクしているのはティエリアだが、ＩＳの深層意識なので実質的にはこの機体自体もリンクしている）それぞれ複雑な機構を持つ様々な機体を、一機あたり１０秒で展開の準備を済ませることができる。

コアは作中で拓神に『ＧＮドライヴ』と呼称されたが、ＩＳのコアでもある。
コアネットワークにリンクし、絶対防御などのＩＳが基本的に持つ全ての機能を有しているが、それと同時に無限機関であるＧＮドライヴの機能も有している。
この機体が生成するエネルギーはＧＮ粒子であり、それを特別に変換してシールドエネルギーなどのエネルギーを使う機能を使用し

ている。
ただしシールドエネルギーは戦闘中の回復は不可能なため、戦闘中に無限にシールドエネルギーがあるなどということは起きない。その理由は戦闘中は生成される粒子を本来の機体と同様に使用するため、最低限のコアネットワークなどを維持する量のエネルギーしか生成していない。
しかし、それに伴いシールドエネルギー残量０でも戦闘の続行は可能だが、その状態で被弾すると直接機体と搭乗者の体にダメージを与える。

機体装甲は一つが変化するのではなくそれぞれが別のものなので、機体を変更した場合には損傷すべてがリセットされる。
損傷した機体は自己修復されるが、損傷に比例し長い修復時間が必要。

ワンオフ・アビリティー
『トランザム』
貯蓄される高濃度圧縮粒子を全面開放し、通常時の三倍のスペックにまで機体スペックを上昇させる。
デメリットとして、貯蓄していた粒子を全て使い果たすために使用後は機体性能の極端な低下を引き起こす。

話の中で使用した特別な機能

『トライアルシステム』

『ラウラ&箒戦　アナザー』で使用。
ナドレ、アルテミーなどトライアルシステム搭載機でのみ使用可能な機能。
コアネットワークを介して敵機の制御を奪取する。

おまけ

活動報告でも書きましたが完成した『ダブルオークアンタ　フルセイバー』です。

＞ｉ２３２４１―３０８３＜

設定（まとめ）（後書き）

一応こんな感じです。

本編じゃなくてすみません。今から書きます……なるべく早く上げられるように。

では、アドバイス等待ってます。

とある朝？（前書き）

遅れて申し訳ありませんっ！！

……ガンプラ作ってました。それでそっち終わって小説書き始めて書きおわったらこんな時間に……ｏｒｚ

スイマセン。では、どうぞ

とある朝？

「ん……」

睡眠から意識が浮上する。
それでも、抗いたくない眠気。
チラッとうつろな目で時計を見ると、まだ朝の五時。
このまま身を任せてもう一度眠りに入りたい。
脇腹になにやら感触があるのは……まあ、楯無だろ。

もう一度この眠気の沼に溺れて――

「じゃあ、私に溺れてみる？」

……楯無？
その声が聞こえた次は、唇に柔らかい感触。
沈みそうになった意識が再浮上して、俺は目を開ける。

「あ、おはよ」

「あ、ああ、おはよう……」

目の前に微笑む楯無の顔。
今の楯無は俺の横から半身を乗り出すようにして俺の上に。

「って、いまなにした？」

「なにって、おはようのキスよ」

……なんかもう今更感があるぜい。

といってもおはようのキスなんてされたのは初だけど。

ふと俺は視線を少し下げた。

「――――っ！」

問題は楯無の服装。

下着にワイシャツだけ。しかもボタンは外してあってブラや……

とにかく、いろいろと見えてる。

楯無いわく、これが一番寝やすいんだとか。いままではこんなことをされなかったからほとんど気にしてなかったんだが……これは危険だ。

「楯無、離れてくれ……」

俺は目をそらしながら言う。……あれ？　なんだか逆効果な気がする。

「え？　……そういうことね。じゃあヤダ」

「じゃあってなんだよ！？」

いたずらな笑みを浮かべた楯無はブラに包まれたその豊満な胸を俺の胸板に押し付けてくる。

そしてその服越しでもわかる感覚は俺の気持ちを昂ぶらせた。

「だ、だから、そういうのはやめろって。朝からナニするつもりだよ……」

「やめろって言う割には、この後の展開を期待してない？」

「し、してないっ」

だけどもどこかで期待してる自分がいる現実……これはあれか、男の性ってやつか。

しかも、別にイヤじゃないというのが……あー、なんかスイッチ入った気がする。

「……楯無、お前はなに狙ってる？」

「さあ？　なんだろうね♪」

「へえ、じゃあこんなのは？」

楯無の背中に手を回して抱きしめてから、横に転がって俺が上になる。

一度体を離してから顔を近づけてキス。舌を滑り込ませると、楯無も舌を絡めてくる。

チュッ、クチュッ、チュパッ、プチュッ……

唇を離し、俺はそのまま楯無の首筋から鎖骨を通って胸元まで舌でつぅーっとなぞった。

「ひゃっ…あっ……んっ……」

色っぽい楯無の声をＢＧＭに行為を進める。
ブラの前は飛ばしてそのままさらに下に進んで行き、臍に到達したところで止める。

「やっ……はぁ、はぁ…また誰か、来ちゃうよ……」

少し荒い息の楯無。
部屋の鍵は開けっ放しだったか……

「じゃあ、来ないようにしないとだな」

一度上体を起こし、扉のほうに片手を向ける。

ガチャッ

鍵の閉まる音。
神力を変質させ空間に干渉――ＡＩＣの上位互換のようなものだ――して操作、内鍵を回した。
神力はとっくに体に馴染んだ。もう前みたいに少しの使用で急激に疲れるなんてことは全く無い。

「これでいいな？」

「拓神…と、突然どうしたの？」

「？　お前のせいだろ。ことあるごとに誘ってきてよ……こういうことをされたかったんじゃないのか？」

言葉遣いまでSに変わってる気がするけど気にしない。
また楯無の体に舌を這わせて下に。下腹部のショーツの少し上で止まった。

「ひゃぅ…あんっ…んんっ……あっ、そこは…」

「ん？　まだ本番はしないに決まってんだろ。前にも言ったはずだぜ？」

「……そういう気分にさせておいて？」

「あぁ、そぉだな。いつも俺がやられてばかりだから……お前への罰（しかえし）だ」

「そんな……ひぅっ」

残念そうな楯無の声は無視。さらにさがって左足の太ももに舌を這わせる。

「――さぁて、折り返しだ」

太ももから上に。
さっき腹部を通ったから、今度は脇腹をなぞっていく。さっきからだが、ところどころで楯無の身体はピクピク反応して、

「ひぁっ…んんっ…やあっ…んふぅ……」

体は行為を始める前より赤みを帯びて熱を持っている。
胸の高さくらいまで行ったところで飛んで胸元に。そこからまた

首筋に戻った。

「あっ…ああっ…ひゃんっ……」

「……少し我慢しろよ」

「？　……――――っ！」

そして忠告してから首筋で歯を立てる。

楯無の体はそれで、ビクッ！　といままでで一番の反応を示した。

少しだけ、必要以上に傷つけないように歯に力を籠める。

「痛っ――――！」

「……俺の所有印を付けただけだ。詫びは――――」

残したのは俺の歯型の一部。

次は顔をずらして唇を重ねる。最初の貪るようなものではなく優しく、愛しく。

「――――ふぅ…これで良いか？」

「もう……バカ」

「くくっ、…そういえば忘れてた」

先ほど歯型を残したのとは逆。楯無の右側の首筋に顔を埋め、口付け。強めに吸ってこちらにはキスマークをつけた。

「もう…恥ずかしくて部屋から出れないじゃない……」

「見せ付けるためだ。無いつもりで生活してればいいだろ？」

たぶん今の俺は、かなりいたずらな笑みを浮かべてると思う。

「さて、これで終わりだ。物足りないならまだ相手するけど？」

「も、もう満足したわよ。だから……は、離れて…」

今の俺と楯無は超至近距離で見つめ合っている状況だ。

「わかった――って思ったが、さっきの仕返しとしてヤダ」

「し、仕返しは今ので終わったんじゃないの？」

「あれは今までの分。今のはさっきの分」

「……ううっ……」

今までの過激なアプローチは何だったんだってほどに赤くなる楯無。

ま、止める気は無いけどな。

数分後

「このくらいで許すか……さて、俺はちょっと朝の風浴びてくるから」

「あ、う、うん」

簡単に制服の上下を着て部屋の外へ。

そしてそのまま寮の外に出た。……いろいろ千切れ飛んでる理性を回復させるために。

拓神は、楯無が部屋でもてあました性欲を発散させていることを知らない。

◇

キーンコーンカーンコーン

予鈴の響く教室。俺は自分の机で腕を組んで目を閉じていた。

朝飯は……さっきの楯無でいろいろと満腹だったから食べてない。

――なあ、ティエリア。

――む？　なんだ？

――さっきの俺と楯無とか……見てないよな？

――……見てはいない。見るに耐えなくなって機体調整をしていたからな。

――見ては無い？　というか最初は見てた……？

――ああ……そうなるな。

――ふうん、今度から最初も見るなよ。

――見るつもりなど無い。

予鈴から二分くらいで、織斑先生が教室に入ってきた。

そしてさらに約一分後。

「到着っ！」

一夏の手を引いたシャルル改めシャルロットが教室に。ＩＳの部分展開をしている。

それほどまでに急ぐ理由が――ああ、織斑先生のＳＨＲだからか。

だが残念なことに織斑先生はもう居るので……

「おう、ご苦労なことだ」

なんというか、ドンマイ？

シャルロットは見たことも無いような青ざめた顔をしている。やっぱり怖いよな織斑先生は。

「本学園はＩＳの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの学園にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし――」

スパァンスパァンッ！

なんだか久しぶりな気がする出席簿アタック。餌食はシャルロットと一夏。

「敷地内でも許可されていないＩＳ展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

クラスのメンツは、優等生のシャルロットが規律違反をしたことが信じられないようで、一同にぽかんとしていた。

同じく遅れそうになっていたらしい箒とラウラは、説教をされている二人の後ろをすり抜けて着席。このメンバーだと鈴も居ただろうから、二組のそっちもセーフだろ。

「デュノアと織斑は放課後教室掃除をしておけ。二回目は反省文の提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「「はい……」」

朝から怒られた二人はとぼとぼと着席。

キーンコーンカーンコーン

それとほぼ同時になった本鈴。それでＳＨＲが始まった。

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは学生だ。赤点などとってくれるなよ」

ＩＳ学園といえど俺たちは高校生。もちろん普通科目の授業も存在し、テストも期末テストのみが存在する。

そしてそこで赤点を取るとその後の夏休みは連日補修を受ける羽目になる。

俺？　……半神っていいね！

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外し過ぎないように」

この校外実習はイコール臨海学校。

三日間のうちの一日目は自由時間で、海で遊べるとあってこの学年のテンションは高い。

あー、そういえば楯無は来れないのか。それと俺も水着買わないと……

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

まあ、とりあえずは今日も授業にすっかり取り組み（をするフリ、をし）ますか。

ちなみに今日山田先生は実習の下見、ということで不在だそうだ。

それでクラスメイトがずるいなどと言って、織斑先生に黙らされたのはお約束。

とある朝？（後書き）

半分以上ラブシーンという……プラモの塗料とかのシンナーで頭やられちゃった、かなかな？

――二度目は駄目ですね。はい。

とりあえず、読み返してみて自分で恥ずかしいっていう自己嫌悪。なんでこんなこと書いてんだよ。俺は…僕は…私は……

そして出番の少なかったティエリアに出番を（笑

感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『海に着いたら十一時！　～オーシャンズ・イレブン～』買い物は……特に主人公のイベントにならなそうなので飛ばします！

海に着いたら十一時！　～オーシャンズ・イレブン～（前書き）

原作のサブタイトルってかっこいいですよね。

十二時までには投稿したかったんですけどね。

では、どうぞ～

海に着いたら十一時！　～オーシャンズ・イレブン～

「☆Ｕ☆ＭＩ☆ＤＡ☆！！」

おい、誰だ。お前は今すぐこのバスから落としてやろう。どうだ、嬉しいだろう？

……と、まあ、よくわかんない女子生徒が騒いだが、たぶん臨海学校ということでテンションが崩壊してるんだと思う。いや、そうじゃなきゃ困る。

俺たちが乗っているバスがトンネルを抜けると、窓の外には一面の蒼い海。そうするとさっきみたいなテンション崩壊なのが出てくる。

とりあえず臨海学校初日、天候は最上級の快晴。窓の外の海は日光を反射してキラキラと煌いて、岸には穏やかな波が打ち寄せていた。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなぁ」

そう言ったのは前の席の一夏。

「う、うん？　そうだねっ」

そしてその隣はシャルロット。様子がおかしいのは……

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

終始笑顔で話すらろくに聞いていないシャルロット。その視線の先は手首のブレスレットに。一夏が臨海学校のための買い物に付き合ってくれたお礼としてプレゼントしたらしいが……このたらしめ。

ちなみに俺が買い物行くときに楯無も誘ったが、『出かける用事があるの♪』とかで一人だった。……なんだか寂しいぜい。

「うふふっ♪」

ご機嫌を二乗。さらにトランザムを発動させて、ツインご機嫌で三倍を超越したご機嫌ぶりのシャルロット。

「まったく、シャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

一夏たちの席の通路を挟んだ反対。俺の左前の席に居るセシリアが若干むくれた顔で言う。

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……」

何だろう、そろそろ怖くなってきたぞ？　流石のセシリアもシャルロットに何か言う気は無くなったみたいだし。

「昨日、途中で二人だけで抜けたと思ったら、まさかプレゼントとは……不公平ですわ」

まあ、実際世の中そんなもんだけどね。

「あー……まあ、その、なんだ。セシリアにはまた今度の機会にな？」

本気で一発殴れば、この鈍感が直るか？　それだったら嬉々として神力まで使った本気の一撃を叩き込むのに。

「や、約束ですわよ」

「おう。あんまり高いのは無理だけどな」

……さて、後十分もすれば目的地に着くな。音楽でも聴いてよ。イヤホンを付けて、ウォ○クマンを操作。どれにしようかなーっと。

よし、これでいいな。選曲は『ＵＶＥＲｗ○ｒｌｄ／シャカビーチ』夏だぜ！　……あんまり伏字になってない？　気にするな！

♪～♪～♪～♪～♪～……

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

さすが千冬さん。音でかくしてノイズキャンセリングまで使ってるのに聞こえたぜ。

とりあえずイヤホンと本体は仕舞って、と。

その通りほど無く宿舎の旅館に到着。
クラス一台、計四台のバスからわらわらと生徒が出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

おおう、百人単位が同時に言うとそれだけで迫力あるなぁ。
そんな俺たちを出迎えてくれたのは、ここの女将さんだった。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

歳はどのくらいだろう？　……いや、そういうのを詮索するのは悪いな。
でも、しっかりとした大人の雰囲気は感じられた。

「あら？　こちらが噂の……」

ふとこちらを向いた女将さんが織斑先生に尋ねる。

「ええ、まあ。今年は男子が居るせいで浴槽わけが難しくなってしまって申し訳ありません」

織斑先生の敬語聞いたの、初めての電話以来だな。

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子達じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「始めまして、俺は玖蘭拓神です。よろしくお願いします」

え？　いつもの俺のキャラと違う？　…だいたい見ず知らずの大人に会うときはこんなもんだ。

「ご丁寧にどうも。清洲景子です」

「はぁ……しっかりしてるのはそっちだけです。ほら、お前も挨拶しろ、馬鹿者」

ぐっ、と一夏の頭を押さえつける織斑先生。
そしてその状態で挨拶する一夏…（笑）

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、こちらこそよろしくお願いしますね」

俺のときもした丁寧なお辞儀をする清洲さん。

「不出来の弟でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

確かに。主にＩＳ関連でだが。

「くくっ、確かに……」

バシィッ！

「痛いっ！？　頭が裂けるように痛いッ！？」

「……笑うな。そしてお前もだ」

俺も？　特に迷惑かけた覚えはそんなに無いんだけども……？

てか、どっから出てきたんだよその出席簿！

そして清洲さん、まあまあ…的な視線送るの止めてください。俺のガラスのハートが……

「お前の心など鋼だろうが。なにがガラスだ」

「心読まないでください！　そして男子の心は女子と違う意味で繊細なんです！」

だよな？　と一夏にアイコンタクト

「うんうん、だよなぁ……」

バシィッ！

「何がだよなぁ、だ。お前の心がそんな繊細であるものか」

実の弟にもヒデェよこの人。

ほら、一夏がのた打ち回ってるじゃないか。

「ふふっ、それじゃあみなさん、お部屋のほうにどうぞ。海に行かれる方は別館のほうで着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

女子一同は『はーい』と返事をすると、旅館の中に。
……そういえば、俺の部屋ってどこだ？　原作だと一夏は織斑先生の部屋だったけど……俺もそうなるのはイヤだぞ！

「ね、ね、ねー。たっくん、おりむ～」

んぬ？　この独特なしゃべり方は一人しか居ないぞ？

「のほほん、どした？」

ああ、ちなみにこの間の学年別トーナメントでペア組んでくれって言ったら、
『もう組んじゃった～。それに、たっくんと組んだらお嬢様に嫉妬されちゃうよ～』
とのことだった。それで、一夏以外の他のヤツと組んでも嫉妬されるってことだよな。って考えになって、俺が一人でエントリーする理由の一つになった。
以上、裏話終わり。

「たっくんとおりむーの部屋ってどこ～？　一覧に書いてなかった～。遊びに行くから教えて～」

「いや、俺はまだ知らない。……一夏は？」

「そういえば俺もだ。廊下にでも寝るんじゃねぇの？」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～」

「よし一夏。俺とお前が同室だったら、寝るときお前を廊下に追い出してやる」

「ちょっ！？　ジョークだよジョーク！」

えらい慌て様だな。

くくくっ、これだから一夏を弄るのは楽しいんだ。

「織斑、玖蘭、お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい」

「あ、はい。じゃな、のほほん」

「じゃぁね～」

うおぁー、やっぱりのほほんって存在自体が癒しだ。

「あ、あの織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんですか？」

「黙ってついてこい」

一夏が☆封殺☆ＤＡ☆

あれ？　なんだろう、俺のテンションまで……やっぱりアレか、夏だからだな。この前の朝のだって…あれは……

あー……あれは考えるのやめとこ。顔熱くなってきた。

とりま、織斑先生について歩いていっていって着いたのは……

「ここだ」

「え？　ここって……

「『教員室』？」

そこの扉には教員室の文字が書いてある紙が張ってある。

「最初は個室という話だったのだがな。それだと就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってな」

織斑先生は一回だけはぁ、とため息をついて続ける。

「結果、織斑は私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだけど……」

まあ、だれも自分から鬼の巣には来ないよな……ん？　あれ？

「織斑先生……“織斑は”？　俺はどうなるんです？」

まさか床で寝ろとか無いですよね？　だったらＩＳ使ってでも学園に帰りますよ？

「玖蘭、お前はそこだ」

指されるのはここの隣の部屋。

「さすがにここに三人は少し窮屈なのでな、隣なら問題なかろうということだ。うるさかったら指導しに行くからな」

「あー、わかりました。……えっと、部屋に入って良いんですか？」

「ああ。ほら、鍵だ。今日は自由時間だからな。満喫しろよ」

鍵を受け取って、とりあえず部屋に。そろそろ荷物を持ってるのがキツイ。

海に着いたら十一時！　～オーシャンズ・イレブン～（後書き）

早く福音戦を書きたいな～♪

といっても、戦闘のアイデアはまとまり始めたばかりですけど。

＞ｉ２３３６１―３０８３＜

エクシアの現在状況ですね。
これ以外のパーツも塗装は終わらせました。
ＧＮソードの刃とかはクロームシルバー＋クリアーで塗りましたし。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『夏だ！海だ！』

夏だ！海だ！（前書き）

と、サブタイの割には一夏たちと絡みません。

そして案の定あの人登場！

では、どうぞ

夏だ！海だ！

俺は織斑先生から受け取った鍵を使って、割り当てられた部屋に入った。

「十分……すぎるだろ」

外側の壁は一面のガラス張り。今も、日光に煌く海面が綺麗に見えてる。

次に洗面所の確認ついでに、その先のドアを開けて風呂を見てみた。

「本当に俺一人でここ……？」

ついついそう言うのも仕方ないと思いたい。

綺麗な風呂場の浴槽は、大人の男のが脚を伸ばしても大丈夫なほどに広い。

男子の旅館の大浴場は時間交代で一部時間帯のみ使用可能との事。それ以外は部屋のを使え、だそうだ。ちなみに織斑先生より。

「とりあえずは……海だろ」

デカイボストンバッグから水着やタオル等の一式が入った手提げカバンを取り出して、ちょっと高めのテンションで俺は部屋を出た。

◇

更衣室のある別館へ歩いてると……

「う、ウサ…ミミ？」

なぜかウサミミが地面に“生えて”いた。
これって確かあの人だよな……
そしてその近くに居る一夏と箒。

「……、私は関係ない」

一夏が箒に話しかけたようにすると、俺にはかろうじて聞こえたそれだけを言って箒は行ってしまった。
……よし、面白そうだから一夏を見てよう。

まず一人残された一夏は、周りを見回して……ウサミミに近づいた。
そして触れた。んでもって、引っ張った。

「のわっ！？」

とりあえず、ウサミミが生えていたとしてその先に何があるわけ

でもなく、一夏は盛大にすっころんでくれた。
今の俺は笑いをこらえるので精一杯だ。

その一夏のところに、セシリアが来た。
一夏は倒れたままそっちを向いて……セシリアがスカートを押さえながら、ざざっ！　と後ずさる。
あのやろう、またラッキースケベを……はぁっ

キィィィィィン……

突然空気を裂く音が聞こえてきて……空気を裂く音？

ばっ！　と真っ青な大空を仰ぐ。そしてそこにはこっちにくるオレンジ色。
ちょ、こっち来んな！
直撃しないってわかってても怖いものは怖――――

ドカ――――ン！

なぞの飛行物体Ｏ（Ｏ＝オレンジ）は、一夏と十メートルくらい離れた地面に突き刺さった。
そう、巨大なにんじんが突き刺さった。

原作で知っていたはずだが、あまりにもぶっ飛んでいて可笑しな光景に固まる俺。
いや、知ってても理解できる光景じゃねぇよコレ。

パカン、と真っ二つに割れたにんじんの中から人が笑いながら出てくる。

残念なことにこの場所からだと声は聞き取れない。

少しすると、そのにんじんから出てきた人物――篠ノ乃束博士――は、トタタタター……と走ってった。織斑先生に見つかったらどうなるんだろうな。

まあ、今あったことは忘れて、海に逝くとするか！

あのあと俺は一夏と合流して、別館で着替えて――

「海かぁ、久々に来たぜ」

「俺もだ。何年ぶりだ？」

――砂浜に出てきた。

「あちちちっ」

俺の隣で一夏が太陽で熱せられた砂浜の餌食に。

「くははっ、馬鹿だろ？　馬鹿なんだろお前。ザマァ」

え？　俺？　俺はビーサン履いてるぞ。

「い、いいんだよ！　久々に来たんだからこういうのも懐かしいし！」

「ふうん。まあどうせ海に入るだろうし、俺もそうするか」

たしかに、来たなら満喫しないとな。

ビーサンを適当な物陰に置いて、先に行った一夏を追う。

「おい、一夏――」

しゅっ！　とそんな俺のすぐ脇を、なにやらツインテールをなびかせたヤツが通り過ぎていく。

「い、ち、か～～～～っ！」

正体は鈴音。

そんな鈴音は、一夏に飛びついた。

「まあ、なにやらほほえましい光景だけども……俺は泳ぎに行って来るぜ～」

「あ、おう。後でな」

了解。と言って、俺は波打ち際に。

「え～っと、なにか目印は……」

海を見渡して、遠くないちょうどいいブイを見つけた。

「さて、と。とりあえずあのブイまで泳ぐかな」

バシャン！　と海に飛び込んでクロールでブイ向けて泳ぎだす。
特に急ぐわけでもないし、ゆっくりと海を楽しみながら泳ぐ。

（ここの海、キレイだな……）

旅館も最高レベルであれば、海のほうもレベルが高いようだ。ここの海の水は透き通っていて、少し深いところでも海面から海底が見える。
ブイまであと半分といったところで一度体を休めるために止まった。

「ぷはっ……久々に海で泳いだな。あっちでも海には行ってなかったし」

あっち＝前世だ。
さ、あと半分泳ぐんだぜぃ。
特にクロールに意味を見出せなかったので、腕はだらっとさせてバタ足だけで進む。

（はぁ…やっぱり泳ぐのは気持ち良い）

腕を使ってない＋泳ぎ方？何それおいしいの？　状態なので一気に落ちた進行速度。
それで、あと四分の一くらいまで来た。

（……あと少し）

浮力に身を任せて、顔だけ出して進む俺。
さっきから波が顔に掛かって……げほっ、げほっ。

もう少しでブイにつくといったところで。

（――!?!?!?　なにがっ!?）

腕を掴まれたような感触がある、と思った次の瞬間には海に引きずりこまれた。

急なことに息を吐き出してしまったためそう長くは持たない。と、変に冷静になった頭が導き出す。

とっさな事のおかげで目を閉じてしまっていた俺は、状況を確認しようと目を開いた。

（くっそ、なにが……）

視線を何かの感触があるほうに向ける。

そこにあった。いや、居たのは――

――なっ!?　楯無ぃ!?

楯無。なぜ？　どして？　これって参加一年だけだよな？
つーかなぜに引きずり込まれてんの！？

直後、楯無が止まってこちらを振り向く。
楯無の水着はシンプルなスカイブルーのビキニ。だけども、とても似合っている。

……違う！　そうじゃない！　そうじゃないし、そろそろ息がまずいっ。

もう息が苦しいどころではなくなってきた。本能的に顔が歪んで首に手を当てる。
それが何を意味するのかを理解したらしい楯無が、すっと近くに来た。

そして唇を重ねられて、ぷくぷくぷく…と楯無から口渡しで空気が俺に渡され、俺の頭が再起動。
即座に神力で俺と楯無を中心に二メートルくらいの球体を作った。
もちろんなかには空気有。
その床？　まあ、とにかく下に足をついて俺は荒い息のまま寝転がる。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……なにしてんだよ！」

「あはっ♪　やってみたかったのよ、ああいうシュチュ」

なんか反論する気持ちまで疲れに変えられた気がする。

「それに、拓神もあの程度じゃ死なないでしょ？」

「まったく……そうなんだけど」

神力を扱える者は死にかけると自己防衛で無意識のうちに神力を行使、その死を免れる。

つまり、寿命以外で死ぬことはあり得ない。

……でも気絶とかは自力じゃ回復しないけどにゃー。

とりあえず、俺の息が落ち着いたところで話を切り出す。

「で、楯無。お前は何しに来たんだ？」

「簡単よ。拓神に水着見せたかったし、そのチャンスだったから」

楯無はくるりと一回転してみせた。

改めて見た楯無の身体は、やっぱりバランスがしっかり取れていて……綺麗だった。

水着はシンプルなスカイブルーで、ほとんど無地だが、そのシンプルさが魅力を増させているというかなんというか…

「そうか……その、まあ、似合ってるぞそれ」

まあまあ恥ずかしかったので、俺はそっぽを向いた。

この間あんなことをしておいていまさら、とも思うだろうけどいろいろと違う。

「ふふ、ありがと」

チラッと見たそう言う楯無の頬は、心なしか赤くなっているように見える。

「…この前買い物誘ってくれたときあったでしょ？　あのとき私もコレ買いに行ってたの。一緒に行けなくてごめんなさいね」

ああ、そうだったのか。

「気にしなくていいさ。…つーかお前、よくあんなに潜ってられたな」

「神力での強化を使ってみたからよ。すごいわね、これ」

「神の力だからな。その程度できなくて神の力じゃお笑いだろ？」

「そうなのかもね」

「ああ、そういえば楯無。お前どうやってここに来た？」

まず第一に今日の？S学園は、俺たち以外通常授業のはずだ。

「特別に学校休む許可……といっても、この後ちょっとロシアに行ってこなきゃいけないんだけど。それで午後の飛行機で行くから午前中は時間が空いてたのよ。それでこっちに来ちゃった☆」

「織斑先生に許可は？」

「とってないわね。見つかったら大変よ」

そう苦笑気味に言う楯無は、そんな状況も楽しんでいるみたいだ。

いや楽しんでると言い切ろう。

「でも流石に海の中に居れば気づかれないでしょ？　ＩＳも潜伏（ステルス）モードだし」

まあ、用意のいいことで。

「ははははっ。……まあ、ありがとな。俺に会いにきてくれたんだろ？」

「うん」

答えた楯無は、すぐに俺に抱きついてきた。

水着でいつもより強調された胸が当たっていろいろとあれだが……まあ、耐えられなくはない。

「じゃ、どうする？　上には出られないからこの中だけだけど」

「じゃあ――――」

その後、昼間近くまで俺と楯無は他人は不可侵な球体の中ｏｒ球体を出た海中で二人で海を楽しんだ。

夏だ！海だ！（後書き）

やっぱり登場のあの人＝楯無。
ちなみに来た理由が理由なんで次話以降の三巻終了、四巻まで出番が……です。

福音戦の構想がある程度出来上がってきましたよ。書くのがワクワクです。

では感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

おまけ
作ったエクシアです！

＞ｉ２３３９８―３０８３＜

アップ

＞ｉ２３３９７―３０８３＜

ほかにもあるので、みてみんのＩＤもＩＳですのでよろしければどうぞ

次回『嵐の前夜』

嵐の前夜（前書き）

昨日投稿できなくてすみませんm（＿＿）m

では、どうぞ

嵐の前夜

昼間になって楯無は午後の用事のために帰って、俺も昼食を取るために砂浜に戻ってきた。

「ん？　なんだ？」

すると、一箇所に人だかり。中心に誰か居るようだけど……何があった？

それに近づいて、中心を見れる位置まで行く。

そこに居たのは――――

（水着姿の織斑先生か……）

人だかりの中心は織斑先生。

校内でもかなり人気のある先生だし、否定するところも無いようなスタイルを黒い水着がさらに強調していて――――ゾクゥッ！

な、なんだ？　なんだか蛇に睨まれた蛙になった気分だ。なったこと無いけど。

気のせい……か？　なんか背筋に冷たいものが走ったにゃー……

と、とりあえず、手近に居る一夏を弄ろう。

「一夏くぅぅん？」

「な、なんだっ」

「実の姉を見て…何想像してるのかなぁ？」

「なっ、そ、そんなわけないだろ！」

「鼻の下伸ばしてたくせにさぁ……なあ、デュノア」

一夏の隣に居たシャルロットに話を振ってみた。

「うん……一夏、織斑先生に見とれてたよね。鼻の下伸ばして」

「しゃ、シャルまで！？　な、何言ってるんだよ……」

よし、シャルロットはこっちの味方だ。

「へぇ、じゃあ一夏は織斑先生に見とれてなかったと？」

「うぐ……黙秘で」

「その申請は却下されました（棒読み）」

「なんでさ！」

クフフ…やっぱり人を弄るのはこうじゃないと。

それと、そのネタは駄目だ。お前となんら関係がない。

「はぁ。そら、お前たちは食堂に行って昼食でもとってこい。自由時間が無くなるぞ」

織斑先生の一言で、集まっていた女子はすたたたーと旅館のほうに走っていく。自由時間が多く欲しいのは誰も変わらないらしい。

いまここに残ったのは、俺・一夏・シャルロット。鈴音とかは……あ、まだ鈴音とセシリアは鬼ごっこやってやがる。

他のヤツは……

「えっと、先生は？」

「私か？　私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらうさ」

「そうですか。じゃあ俺たちは昼食に行ってきます。行こうぜ拓神、シャル」

「うん、わかった」

「あ、先行っててくれ。ビーサン回収しなきゃいけないからさ」

そういえばだ。今思い出した。別に盗られて困るものでもないけど、もしそうなったら気分悪いし、置いて帰ったら帰ったで悪い。

「ああ、じゃあ先行ってる」

「また後でね。ほら行こっ、一夏」

「お、おう」

一夏はシャルに引っ張られて別館の方に。

確かビーサンはここだったよなーと、あったあった。

目的を達成した俺は、一夏たちを追って別館のほうに向かった。

◆

楽しい時間はさっさと流れ去って、時刻は午後七時半。

午後の海では、のほほんたちとビーチバレーやったり、一夏と競争したり、一夏とラウラとかのやり取りをイライラしながら見たり……ああ、最後のは愚痴だな。

今は大広間を三つ繋げた大宴会場で、みんなで夕食をとってる。

「うん、うまい！　昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなぁ」

「そうだね。ほんと、ＩＳ学園って羽振りがいいよ」

「うまいもん食えるんだ。それだけで十分満足だよ」

気持ち的にも胃袋的にもな。

というか、どこからこんな金が出てくるのか知りたいが、それを

今口にするのは無粋だ。
今の席は一夏を中心にその左右にセシリアとシャル、一夏の向かいが俺。

夕食のメニューは刺身に小鍋、それに山菜の和え物が二種類。さらに味噌汁とお新香。
それとここの旅館は食事の際は浴衣着用だそうで、俺も例に漏れず浴衣なんだが……ちょっと慣れないな。いままで着る機会も無かったし。

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

だそうだ。俺にはその違いがよくわからないんだよな、これが。
わさびはわさびだろ。

「本わさ？」

頭の上に？マークを載せたシャルロットが、一夏に聞く。

「ああ、シャルは知らないのか。本物のわさびをおろしたやつを本わさって言うんだ」

「えっ？　じゃあ、学園の刺身定食についてるのって……」

「あれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せてあるやつ」

「……何でそんなにすらすらと出てくるのか俺はただ疑問に思いま

す。と拓神は一夏に問いただします」

「拓神、なんだその喋り方」

うわ、質問のほうは無視されたよ。って拓神は自分の心の中で毒づきます。……なにやってんだろ。

「あはは……じゃあ、コレが本当のわさびなんだ」

「そう。でも練りわさでも最近はおいしいのが多いぞ。店によっては本わさと練りわさを混ぜて出したりもするから」

本当なんでそんなことはすらすら答えられるんだよこの健康オタク。と拓神は（ｒｙ

「そうなんだ。はむ」

えっと……え？　見間違いじゃあ……無いんだよな。

今、シャルロットがわさびの山を食べた。純粋なのはいいと思うけど、流石に……

「お、おい？　シャルロット？」

「――っ～～～～～～～～！！」

案の定、涙目＋鼻を押さえるシャルロット。

「だ、大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

いまさらだが、前世のこの作品でのシャルロットの人気の高さが理解できた気がする。俺もそうだったし。

あ、ここが物語の世界でも俺にとっては現実リアルの世界だから、今は前世で持ったようなそんな感情はまったく無いぞ。

「ふ、風味があって、いいね。……おいしい、よ？」

さすが優等生。こんな時まで優等生か……

そのあと、慣れない正座で足が痺れて食事を取れないセシリアに一夏が食べさせて騒ぎになって、それを織斑先生が鎮圧しにくるある意味いつも通りだった。

◆

夕食を終えた俺と一夏の男子組は、大浴場の露天風呂に入っていた。

本当、高そうな料理に露天風呂って……本当に臨海“学校”か？

「カポーン…」

「拓神、どうした…？」

「いや、言ってみたかっただけ。ところで一夏」

「うん？　なんだ？」

「お前って、好きな奴いるのか？　もちろんＬＩＫＥじゃなくてＬＯＶＥだぜ？」

「ぶっ！？　おま、急になんつう話を振りやがる」

いや、いつも鈍感ぶりを見せ付けられているこっちとしては、一度は聞いてみたいからな。

「で、どうなんだ？」

「……よくわかんねぇ。まずその好きって感覚がわかんないんだよ」

だろうな。じゃなくてあの鈍感だったら正直……死ねばいいのに。と拓神は（ｒｙ

「そりゃあ、確かに一人ひとりそれはばらばらだとは思うんだけど。でも、絶対に共通してると思うのはある」

「それは？」

「簡単だ。『ソイツと一生一緒に居たい』……これだけは、どんな価値観でも変わらねぇよ。それにどんな理由（ついか）が付いてきてもな」

「ふぅん、そういうもんなのか？」

「そういうもんだ。ま、俺の場合それに加えて『絶対に守りたい』ってのが追加されるんだけど」

「楯無さんをか？」

「もちろんだ」

楯無が弱くないとしても、男ってのはそういうのだろ。好きな奴は絶対に守り通すってな。

……？　そういえば、俺はいつからこんなくさい台詞を言うキャラになったんだ？　……まあ、仕方がない。そう、仕方がないんだ。

「で、お前は？　誰と一緒に居たい？　篠ノ乃か？　凰か？　オルコットか？　デュノアか？　ボーデヴィッヒか？」

「……それでもまだわかんねぇや。……でも、そいつら以外にも千冬姉も他のクラスメイトのみんなも、俺は守りたい」

だろうな。この鈍感野郎は欲張りすぎなんだよ。一人が守れるものなんてたがが知れてるのに……でも――

「一夏らしいな。でも全員守れるとでも思ってるのか？　だとしたらかなりの自信過剰だな。いっそのこと馬に蹴られて死ぬといい」

「おい！　今までのしんみりした空気はどこに行ったよ！？　そしてヒデェ！」

「俺がいつからお前に優しい言葉だけを掛けるようになったよ？だとしたら今すぐにでも俺は死にたいな」

「もっとヒデェよ！」

「それにさ、俺たちにあんな空気は似合わない…だろ？」

一夏は一瞬ポカン…とした後、口を開く。

「……ははっ、確かにな。俺たちにあんな空気は似合わねぇよ」

「ああ。……でもな、俺がさっき行ったことは真面目だ。お前が絶対に守りたい奴、少しは考えとけよ」

俺はそれを告げて風呂から上がった。

久しぶりの一人の夜か。…寂しくないわけでもないな。

嵐の前夜（後書き）

最後のほうで、久々に真面目な拓神登場。
でも結局はいつも通りに戻るんですけどね。

さて次回は、紅椿の登場。
そして福音戦に。
久々の戦闘シーンです。

――そして空気のティエリア（爆笑

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『紅椿』

紅椿（前書き）

やっと書き上げました～。
ほぼ原作どおりなんですけどね。

では、どうぞ。

紅椿

合宿二日目。

本日の活動内容と言われれば、ＩＳの各種試験装備運用及びそのデータ取り。

これを今から夜まで丸一日。もちろん昼休憩などはあるけども。

ちなみに専用機持ちの皆さんは大変だ。それぞれの所属国家から送られてきた専用パッケージなどの大量の装備のデータ取りをこなさなければならないからな。

俺は特にそういうのは無いから、まずはキュリオス・ガスト仕様の大気圏内運用とＧＮアームズでも使おうかと思ってる。

後はデュナメスのトペルスード…魚雷ってＩＳの空戦でどう使えと？　相手をまず沈めてから追い討ちを掛けろと？　……えげつねぇ。

他に……エクシアのアヴァランチとヴァーチェのフィジカルは使えるな。アヴァランチの粒子チャージに時間が掛かるのが悩みだけど。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ！」

織斑先生に言われてビクッ、と身を竦ませたのは遅刻と一番無縁そうに見えるラウラ。……寝坊らしいけど何があった？

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者同士の会話など、通信に使われています。それ以外にも『非限定情報共通（シェアリング）』をコア同士が各自に行うことで、さまざまな情報を自己進化の糧として吸収していることが近年の研究でわかりました。これらは製作者の篠ノ乃博士が自己発達の一環として無制限開放を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとの事です」

よくこんな長い文章をスラスラ言えるな……流石は現役軍人。

「流石に優秀だな。遅刻の件はコレで許してやろう。もしわからないなどと言ったら五〇キロマラソンでもしてもらおうかと思っていたんだがな」

うわ、きっつ。

良かったなラウラ。お前のほうが知ってるとは思うが、この人はマジで言ってるから洒落にならない。するつもりが無いんだろうけども。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と返事をした一同はてきぱきと動き出す。

目的がＩＳの運用なのでもちろん全員スク水――ゴホン、ＩＳスーツ姿だ。

何かこの後に起きることを忘れている気がするが、まあ仕方が無

い。
　それより――さっきから俺のこめかみあたりに走るノイズみてぇのはなんだ？　チリチリとするんだけど……？　でもこの感覚、前にどこかであった気がするんだよ。いつだ？
――まあ、これも考えても出てこなそうだから後回しで良いだろ。さて、俺も始めるかな。
――ティエリア。
――久しぶりだな。
――？　昨日の夜話しただろ。
――まあ、気にするな。それで？　君はこの時間どうするつもりだ？
――キュリオスガストで宇宙に出ちゃ…駄目だよな。
――当たり前だ。現時点で単独大気圏離脱・宇宙活動可能なＩＳは存在しないからな、騒ぎになるから止めたほうがいい。
――んじゃ、大気圏内巡航で。待機（スタンバイ）よろしく。
――了解した。

ちなみに今俺たちが居る場所は四方を崖に囲まれた秘密のビーチ、といった感じのところだ。外に出るには、一度海中に潜ってトンネルを抜ける必要がある。どこの映画の世界だっていう突っ込みは禁止だ。

ふと周囲を見渡すと、訓練機組みの生徒がＩＳを運び始めたところだった。

「ああ、篠ノ乃。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

織斑先生が箒を呼ぶと、箒は一緒のグループの生徒にＩＳの運搬を任せて織斑先生の元に。

――ああ、思い出した。確かこの後……

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～ん！！！」

ズドドドド……。と、なにやら砂浜の砂を巻き上げながら、ウサミミをつけた女性が猛スピードでこちらに走ってくる。

そこまでは一万歩譲ってＯＫとしよう。だれがなんと言おうとＯＫな？　問題はそのウサミミの女性で――

「……束」

織斑先生が若干あきれ気味にその名前を紡ぐ。

――そう、いま猛スピードで走ってきているのは稀代の天才……鬼才のほうが良いのか？　ともかく、その『篠ノ乃束』博士だ。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――アヴルヘイｍｕっ！」

束さん向けて織斑先生の『全人類平等アイアンクロー』が炸裂。

「うるさいぞ、束。それともなんだ、今言いかけた危ない台詞など二度と吐けないようにしてやろうか？」

「ぐぬぬ、それは勘弁。……それにしてもやっぱり相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

怖い、なんか今日の織斑先生いつもより怖いんだけど。

そして束さん。なんでそのアイアンクロー抜けだせるんだよ…やっぱり只者じゃないのか。

すたっ、と着地した束さんはくるっと箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

相変わらず束さん関係になると複雑な表情を見せた箒。

しかし束さんはそれは無視で話を進める。

「えへへ、お久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

絶対最後の一言は余計だと思う。

――がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……し、しかも日本刀の鞘で叩いた！　ひどい！　箒ちゃんひどい！」

頭を抑えて涙目で箒に抗議する束さん。

そんな様子を、他の一同はポカンとした表情で眺めている。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」

「んん？　奇妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私を置いて他に居ないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生、束さんの前に撃沈。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

自己紹介が適当だ…

確かこれでもずいぶんましになったんだよな。織斑先生の手によって。

……たぶんあれだよな。そういう態度を取る度に殴られたり、アイアンクローされたりだったんだろうなぁ。

それでも、それを聞いた女子は目の前の人物が誰なのかを理解して、騒がしくなった。

「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まってるぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

いや、ここまで有名でインパクトのある人を無視は……辛いんじゃ？

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

そんなやり取りに、山田先生がためらいがちに入っていった。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさっき言ったように無視してもらって構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

そう言われて走っていく山田先生。

束さんがふとこっちに目を向けたとき、なぜか俺と目が合った。

「ん？　んん～？　君は玖蘭…拓神くん、だったかな？」

「はい。そうですけど、なにか？」

織斑先生ならびに一夏と箒は、他人を嫌う束さん自ら他人である俺に関わったことに驚いていた。

「君、いろいろと面白いね。特にＩＳは。どうしてだろうねぇ」

知らない人には話が見えないだろうが、このＩＳ『マイスターズ』はこの人からもらったことになっている。父さんがどんな風にそうしたのかはわからないけど。とにかくそれで、この人と俺によくわからない関係ができた。

「その緑の粒子、重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させ、陽電子と光子を発生させる……だっけ？　実に興味深いよ」

どういうことだ？　なぜそこまで知っている？　このＩＳには俺とティエリアの許可がないと開かないセキュリティーが掛かっているはずだ。たとえ相手が束さんであろうと。

「うふふ、どうして？　って顔してるね。簡単だよ、君がそれを使ってるところは見てきたしね。いつも発生させてる緑色の粒子、それを生み出す方法を考えてみただけだよ。どうやら地球じゃ実現不可能みたいだけどね」

それだけで……やっぱりダブルオーの原作に出てたエイフマン教授以上の天才。

「だとしても、『マイスターズ』は渡しませんけど？」

「あら残念。というか、そういう名前だったんだ――あ、無理やり奪ったりは絶対にしないから安心して。そんな方法をこの束さんが取るわけないだろう？　それに久しぶりに持った研究対象だし、答えを見ちゃったらつまらないっしょ？」

――そして根っからの科学者みたいだな。

「あ、あの、姉さん……それで、頼んでおいたものは？」

俺と束さんの会話（？）に、ややためらいがちに入ってきたのは箒だった。

俺が束さんの中で箒よりも優先順位が上のわけも無く、すぐ束さんは箒に向き直る。

「おお、そうだった。――ふっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと真上の空を指差す束さん。その指と声につられて全員がそうした。――直後。

ズドーン！

でかい衝撃と地響きを伴って、ひし形の金属の塊が砂浜に突き刺さる。

「のわっ！？」

「っ、と」

俺と一夏がちょいとバランスを崩したが問題は無い。
墜ちてきたそれはその外壁を量子に変換して消えて、その中身を陽光の下にさらす。

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿（あかつばき）』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

装甲の色は真紅。それの装甲が、日光を浴びて輝いた。

紅椿（後書き）

今回は、さらっとティエリア（爆笑

そして束さんに絡まれた拓神。

束さんならエイフマン教授みたいなことはできるでしょう、ということでＧＮ粒子をちょっと解析させて見ました。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『悲劇への序章』

このサブタイトル、わかる人にはわかりますよね。

悲劇への序章（前書き）

やっと投稿……ふぅ。

では、どうぞ

悲劇への序章

「『紅椿（あかつばき）』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

現行の中には、たぶん『マイスターズ』も入ってるんだろうなぁ。
といっても各ガンダムの得意分野での負けは無いと思う。
エクシア限定であっちも近接戦に重点があるから同程度、だけども機動性はとかはあっちが上。
デュナメスでの射撃戦ならこっちは負けない。キュリオスの高機動、ヴァーチェの高火力でもこっちが勝てるだろうな。
……性能のイメージとしては、近接戦中心のジンクスってところか。

というか、すごいことをさらっと言いすぎな気もするぜい。

「さあ！　箒ちゃん、今からフッティングとパーソナライズを始めようか！　私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――――」

「はやく、始めましょう」

なんだろ、こうしてると束さんがかわいそうに見えてきた。

……まあ、その原因を作ったのもこの人なんだけども。

「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか」

束さんがなにやら手元のボタンを操作すると、紅椿の装甲が開き操縦者を受け入れる体勢に。紅椿が少しかがんで乗りやすくなるおまけつき。芸が細かいぜい。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」

開いたコンソールに指を走らせる束さん。……うわっ、タイピング神早えぇ。

追加で空中投影ディスプレイを六枚展開。同時進行で同じく空中投影のキーボードにも指を走らせる。

「近接戦闘を主体に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。後は自動支援装備も付けておいたからね！　おねえちゃんが！」

束さん、『おねえちゃんが！』ってかなり強調した。

「それは、どうも」

ん～、近接戦闘主体の万能型……ダブルオーライザーと同じ感じか。だとしてもダブルオーライザーのほうが性能は上だろうけど。

それと、模擬戦で紅椿の相手するときはキュリオスで戦ったほう

がよさそうだ。

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪　箒ちゃん、また剣の腕あがったねぇ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フッティング終了～。超早いね。さすが私」

口を動かしてても、手は止まらない。

パッ、パッ、とかなりのスピードで変化する画面のデータにも全て目を通しいく。

……あー、なんか悪いけど、見てるだけってかなり詰まんないな。――ッ！　消えたと思ってたのに、またこのノイズかよ……

ジジジジ……というテレビの砂嵐のようなノイズが、俺のこめかみの辺りで暴れだす。

それと同時に、嫌な予感が脳裏をよぎった。

くっそ、イライラする。なんなんだよ……

――ティエリア、今何かこの付近で起きてるでかい問題・事件は無いか？

――どうした、急に。

――嫌な予感がしてね。ああ、福音じゃないぞ。

――少し待ってくれ……リンク…条件指定……なにも無い。小さなものならともかく、大きな事件などは発生してない。

――その検索半径は？

――五十キロといったところだ。

――充分だな。……わかった、福音はともかく何かあったら報告を。

――了解。

意識を目の前に戻す。

紅椿の方は終了したらしく、一夏が白式を展開して束さんがそれにケーブルを繋いでフラグメントマップを見ていた。

そして一夏と束さんはなにやら言い合っている。

「いいです！　おお、許可が下りたよ！　じゃあ早速――」

「だあっ！　わざと意味を間違えないでください！　ノーです、ノー！　ノーサンキュー！」

「む！　じゃあ私はノーザンライツだ！」

なんじゃこの争い。……言えることは不毛の一言だぞ？

「じゃあじゃあ、女の子になるなんてどうかな！　いっくんが！」

「なんなんですか、それは！」

「ん？　最近読んだマンガにそういうのがあったんだよー」

あー、男が女になるやつ？　あれだろ？　コレのアニメと某緋弾の間にやったアニメ。

「あー……ごほんごほん」

本当に不毛な争いを止めたのは箒だった。咳払いして一夏と束さんの話に入る。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい、三分経った～。あ、今の時間でカップラーメンができたね、惜しい」

たとえの基準が……まあ、カップ○ードルだな。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージどおりに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

プシュッ、プシュッ…と空気の抜けるような音で、紅椿に接続されていたケーブルの類が全て外れる。

そして箒がまぶたを閉じて集中すると、紅椿が目の前から消えるような急加速で飛翔した。

「おわっ！？」

その急加速の衝撃波で砂浜の砂が舞い上がる。

顔を上に上げると、二百メートルくらいの上空で静止する紅椿が見えた。

何で見えるのかって？　神力使いましたがなにか？　ちなみに上を向いてるから、目の色が変わったことは気づかれない。

それと一夏……ＩＳつけてるんだからそのくらい驚くなよ。

「どうどう？　箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

ＩＳのプライベートチャンネルを使ってるのか、箒の口は動いても音声はこっちに聞こえない。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月（あまづき）』で左のが『空裂（からわれ）』ね。武器特性のデータ送るよん」

束さんが送ったデータを受け取った箒は、しゅらん…とさすがの身のこなしで左右の腰にある日本刀型ブレードを抜く。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説付き～♪　雨月は対単一仕様の武器で打突にあわせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！　するぶきだよ～」

……言い回しが物騒なのは気にしないでおこう。

箒は試しとばかりに突きを放つ。右腕を左肩まで持っていって構え、そこから突きが放たれる。

それと同時に周りの空間に赤色のレーザー球がいくつもの球体して出現、そして順番に弾丸になって雲を文字通り蜂の巣にした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻勢エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ撃ち落してみてね、ほーいっと」

いきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出す。

製作者なんだ。未発表のＩＳコアをいくつ持ってても不思議は無い。

それが量子から物体を構築すると、一斉発射。十六のミサイルが箒に向かう。

「箒！」

「――――やれる！　この、紅椿なら！」

一夏の心配は無用。

右脇下に構えた空裂を一回転するように凪ぐ箒。さっきの赤いレーザーが今度は弾丸ではなく帯状の刃になって広がり、全てをミサイルを切り裂いた。

ミサイルの爆煙がゆったりと消え去る中で、あの真紅のＩＳは悠々と空に浮いている。

その場に居る一部の者を除く全員がそのスペックに驚愕し、言葉を失う。

全員が黙る中、束さんはうんうんと満足そうに笑顔でうなずく。

そして織斑先生は厳しく、鋭い目線でそれを見ていた。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

そこにいつもより二倍はあわてた山田先生が来る。
その焦りように紅椿に唖然としていた生徒は元に戻った。
俺も力を解除して先生を見る。

「どうした？」

「こ、こっ、これを！」

山田先生から織斑先生に渡される小型端末。その画面を見て、織斑先生の顔は曇った。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

今日欠席してるのは四組の専用機の無い専用機持ち。そして楯無の妹の『更識簪（さらしきかんざし）』。
確かまだ専用機が使えなくて、こういった行事は休んでる。

小声で喋っていた先生二人は、それを見ている生徒の視線に気づいて手話に…しかも軍用のに切り替えた。

「そ、それでは、私は他の先生にも連絡してきますのでっ」

山田先生はそういうと、この場を走り去る。

「了解した。――全員、注目！」

そして織斑先生が手を叩いて生徒を振り向かせた。

「現時刻をもって、ＩＳ学園教員は特殊任務行動に移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館にもどれ。連絡があるまで室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況がぜんぜんわかんないんだけど……」

突然のことに女子の間でざわざわと騒がしくなった。

「とっとと戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな！！」

「「「は、はいっ！」」」

織斑先生の一喝で、全員が大慌てで動き始める。そして織斑先生

は言葉を続けた。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、玖蘭、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰！　――それと、篠ノ乃も来い」

「はい！」

妙に元気な返事を返したのは、つい今さっき一夏の隣に降りてきた箒だった。

……やっぱり、浮かれてるな。

悲劇への序章（後書き）

ティエリアの出し方、ちょっと無理があったかな（笑
次回以降は、出番がある……予定です！

今回、ほぼ原作どおりですがやっと戦闘に近づきましたよ。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『作戦会議』

作戦会議（前書き）

時間もないのであとがき最低限以外書きません

作戦会議

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥の大座敷、風花の間に俺たち専用機持ち七人と教師陣が集められた。

照明が落とされた暗い部屋に、空中投影ディスプレイの光だけが俺たちを照らす。

「二時間前、ハワイ沖での試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告が入った」

来やがったか。バグの介入があるとかなり厄介だぞ……

どうでもいいけど、イスラエルって聞くとデザート・イーグル思い出すの俺だけ？　あのハンドキャノン。身体を鍛えてるＩＳ操縦者ならららくらく撃てそうで怖い。織斑先生なんかは両手で二丁撃ちとかできるんじゃね？

「……」

まあ、俺のどうでもいい考えとは別に、代表候補生の四人は、顔つきを険しくして状況の把握に努めている。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通

達により、我々がこの事態に対処することになった」

投影されるディスプレイに、ここ周辺の地図と福音の通過予測ルートが表示された。

織斑先生は言葉を続ける。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

軍用ＩＳ、通常はスポーツ競技として使われるＩＳを軍用に転用したもの。

用途が用途だけに、相手に極力怪我を負わせないなんていうことは考えられてない。

それを俺たちに任せるんだから、仕方ないとはいえ大胆な判断だよなー。

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは挙手するように」

「はい」

まず手を上げたのはセシリア。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヵ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

セシリアの要求通り、『銀の福音』のスペックデータが開示される。

代表候補の四人と教師陣はそれを基に相談を始めた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……私のＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動を両立させた機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージは送られて来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「総計火力なら、ヴァーチェを除く俺のどのガンダムをも超えるか……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

わかるとは思うが、上からセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ。

一夏と箒は経験の無さからか話に入ってない。

ちなみに俺のは独り言だから気にしないでくれ。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

俺が偵察を仕掛けてもいいんだが、それだと今回バグが襲撃する可能性はゼロじゃないし、俺はそっちに備えたい。

「やっぱり一度きりのチャンス……ということは、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

ここで山田先生も話に入ってきた。

そしてその言葉に俺も含めて全員が一夏を見る。

「え……？」

「『え……？』じゃねぇよ」

「そうよ。一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳで無ければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「「「「「当然」」」」」

俺を含めた五人の声が重なる。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

織斑先生にそう言われた一夏の目が、変わった。
覚悟を灯した目に。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」

「なら俺の『マイスターズ』も。高機動モードならオルコットと同程度は出ます」

とは言うものの、追加バーニアかガスト仕様になればさらに一・五倍から二倍の速度は出せる。

「ふむ……。まあ、どちらかが――」

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

織斑先生の声を遮る、底抜けに明るい声。
発信源は――天井。
他の人と同じように見上げると、束さんの頭が天井から逆さに生えていた。
……やべ、何この状況。シュール過ぎね？

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？　はっ、はいっ。あの、篠ノ乃博士、とりあえず降りてきてください……」

「とぅっ★」

くるっと空中で一回転、そして着地。

こういう博士って感じの人は、身体能力低いってイメージあるんだけどな……

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

山田先生の制止をかわした束さんは問答無用で続けた。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」

そう束さんが言うと、織斑先生を囲むように小型ディスプレイが展開された。

「紅椿の展開装甲を展開して、ほいほいほいっと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」

そのあと、すぐにメインディスプレイにも紅椿のスペックデータが表示される。

この人……乗っ取ったのかよ。

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」

またもトンでもないこと言ってくれた。

「はーい、ここで心優しい束さんの解説開始～。いっくんのためにね。

――――――――（割愛）――――――――

はい、いっくん理解できました？　先生は優秀な子が大好きです」

ここでアンタ先生じゃないだろ。というツッコミはしちゃいけない。

ピピピピピピピ――――

ん？　プライベート・チャネル？　この番号は……楯無か。

――ピッ

『あ、拓神』

『ああ、何だ？』

『拓神は、今なにか感じてない？　なんかノイズっていうか、雑音っていうか……とにかく嫌な感じ』

『突然だな――――……今、ノイズって言った？』

『ええ。ノイズっていうか雑音みたいのが聞こえるの』

楯無にも……

『……俺もだ。しかもだんだん強くなってる』

『私はそんなこと無いかな。一定で強くなったりは無いよ』

『じゃあ、このノイズ……なんだと思う？』

『あれ、かな。…バグ』

――――やっぱり……

『バグ、か。なら、来たら俺が対処しますかね。俺が居るとこのほうが近いみたいだからな』

『ゴメンね、今回も協力できないや。信頼してるわよ』

『ああ、任された。……って、バグの始末は元々俺の仕事なんだけどな。そのために力を解放してもらったんだし』

『それでも、大切な人の手伝いくらいはしたいでしょう？』

『また恥ずかしげも無くそういうことを……ま、手伝えるなら手伝ってもらうさ』

『その時が来たら任せてね。じゃあ、切るよ』

『おう、じゃあな』

『じゃあね。また今度』

プツッ……

バグだったか……！　やっと思い出した。この嫌な感覚は、クラス対抗戦のときの嫌な感じ……。

今回は、誰にも被害は与えず終わらせる……！

さて、そろそろこっちの話に戻らなきゃな。

今どうなったんだ？　確か原作だとここで束さんが『白騎士』の話を持ち出してたはず。

「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらい掛かる？」

おっと、ここまで進んでたのか。……結構長く話してたみたいだな。

「紅椿の調整は、七分あれば余裕だね★」

あれ？　原作であったセシリアの反論が……ああ、俺も同じくらい出せるって言ったからか。

「よし、では本作戦では織斑・篠ノ乃両名による目標の追撃及び撃墜を目的とする。作戦開始は三〇分後。各員、直ちに準備にかかれ」

織斑先生が、見慣れた手を叩くという合図をする。

それ皮切りに、全員がせわしなく動き出した。

作戦会議（後書き）

感想・アドバイス等待ってます。

次回『傷痕』

傷痕（前書き）

サブタイが内容と微妙なのは気にしないでくれるとうれしいです。

今までで一番長くなりましたよ。

では、どうぞ。

傷痕

午前十一時半。
福音撃墜の作戦開始時刻。

宿である旅館前の砂浜には一夏と箒。
俺は他の専用機持ちの面子同様にブリーフィングをしていた大広間で、指揮を執っている織斑先生たちと一緒に。

そしてバグのノイズは……刻々と強く。
まだ俺の捜索半径内には入ってきてないが近づいてきている。
場所の特定が完了し次第、俺も出るつもりだ。……無断の予定だから懲罰くらい受けるだろうけど。

前の大型空中投影ディスプレイにＩＳを装備した一夏と箒が表示された。
一夏は紅椿を装備した箒の背に乗る形になっている。

「織斑、篠ノ乃、聞こえるか？」

インカムを使っての織斑先生の問いに二人はうなずいて答えた。

「今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ。短時間での決着を心がけろ」

『了解』

『織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？』

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験が皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

『わかりました。できる範囲で支援します』

言葉遣いはいつも通りでも、どこか浮ついた声色の箒。
それには、こちらの専用機持ちメンバーからも声が出た。

「箒、なんか浮ついてない？」

「そうだね。大丈夫かな？」

「どうも調子がいいといいましょうか……」

鈴音、シャルロット、セシリアだ。
ラウラは何も言わなくても、厳しい顔つきで箒を見ている。

「――織斑」

『は、はい』

「これはプライベート・チャネルだ。声は出さなくて良い。……どうも篠ノ乃は浮かれているな。あんな状態では何かし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ」

『わかりました。意識しておきます』

「頼むぞ」

プライベート・チャネルから、オープン・チャネルに戻る。

「では――――はじめ！」

その言葉と同時に、紅椿は急加速で飛び出した。

今度は、驚愕の声が上がった。

「あのスピード、瞬時加速（イグニッション・ブースト）の非じゃないよ！」

「なんというスピード……」

「あれが、第四世代機の力ですの！？」

ディスプレイに表示される二人を写した映像の中で二人はどんどん遠ざかり、ものの数秒でそのカメラでは点として写るほど遠のいた。

表示される情報が、映像からレーダー表示と二人の機体情報に切り替わる。

――ティエリア、今の索敵半径は？

――先ほどと同様、半径五十キロ圏内でアンノウン……バグの索敵をしている。

――それで、出たか？

――出たなら報告しているさ。

――まあ、そうだろうけど。引き続き頼む。

――了解。

ディスプレイに表示されるレーダーで、一夏と箒の二人が『銀の福音』にどんどんと接近していく。紅椿の性能なら後一分も経たずに交戦距離だ。

海上を横切る一つの光点と、それに近づいていく二つの光点が――重なった。

――拓神、ここから二十キロ沖にアンノウン反応を確認した。

――なっ！？　捜索半径は五十じゃないのか！？

――こちらでもたった今そこに反応が出たんだ。

――……わざわざ巣から移動してここまで来る必要は無い、ってことか。たぶんその場所で実体化――でいいのかわかんないけど、出現したんだろうな。

――どうする？

――場所は二十キロ沖……キュリオスガストでトランザムを発動させた場合の到達時間は？

――三分以内だ。大気圏外へ一度離脱すれば半分は縮まる。

――少しでも早く行きたいけどな……。大気圏外に出るってのは危険だな、国際問題的に。

――だろうな。

――ってわけだ。キュリオスガストの展開準備を頼む。

――了解。

二十キロ……ここのレーダーにもう少しで入る距離だな。ＩＳ相当の速度なら五分くらいでここに到達することになる、無駄な余裕はなさそうだ。

そこで俺は、ダッシュで大広間から外に出た。

後ろから織斑先生の『どこへ行く！』なんかが聞こえたが、気にしたら負けだ。帰ったら怖いぜい！

◇

「全く、こんなときに何だアイツは」

多少のイラつきを隠さない千冬がそう言う。
その声には呆れと怒気が含まれていて、作戦中で無ければすぐに追いかけて捕らえていた事が容易に想像できた。

（まあいい、後で懲罰の一つでもくれてやればいいだろう）

そう完結して、千冬はディスプレイに向き直る。
つい今までレーダーだったのが、映像も表示されている。理由は監視衛星を利用しただけで、もちろん合法的に使用許可を取ってだ。
申請の許可がさきほど下りたことが、千冬には真耶から報告されていた。それのリンクが繋がったのだ。

映像に写っていたのは、二対一でも引けをとらず、むしろ優勢の福音だった。
総計で三十六もの砲口を持ち、それを利用した連射速度で一夏と箒を攻撃する福音。
しかもそれから放たれるエネルギー弾も厄介な代物で、触れれば爆発する――つまり、かすっただけでもそこをえぐられるという、あくまで“実戦”を想定した武装。
そして必然的に回避重視になってしまう一夏と箒だった。

千冬は険しい顔つきでそれを見る。
そこに、いつもと違う鋭い真耶の報告が入った。

「織斑先生、ここから約二十キロの海域にアンノウンの反応が！」

「なに？」

「数は十。ＩＳコアの反応はありません」

ＩＳコアの反応が無い、ということに千冬はひっかかりを覚えた。
それはまるで――

――クラス対抗戦のときに復活した無人機のようだ、と。

「ええっ！？」

「どうした！」

ただでさえ緊急時なのに、それに重なるアンノウンの報告に千冬の声も荒くなる。
この大広間の中に集まる専用機持ちの間にも更なる緊張が走った。

「こちらからそれに向かって、超高速で向かう機影があります！
この反応は――玖蘭君です！」

大型ディスプレイが二分され、その半分に広域レーダーが映される。
確認できるのは十のアンノウンと、それに向かう拓神の反応。
その移動速度は、最新機であり最高性能機である紅椿をも遥かに上回っていた。

「玖蘭との連絡は？」

「無理です、繋がりません。あちらから拒否されているみたいで……」

「ちっ…。アイツは、アレが来ることを知ってたとでも言うのか…」

拓神の力や、『マイスターズ』本来の性能を一部しか知らない千冬はそう考えた。

「どうしますか？」

こういうときだからこそ落ち着こうとする真耶の声にも、焦りが多くなる。

「本来ならここの専用機持ちを出すべきなんだろうが……」

どう考えても、あのスピードに追いつける機体は存在しない。紅椿の展開装甲を全て機動力に回しても……

「……あくまでこちらの本来の作戦は福音の撃墜だ。そちらを優先して対応する。アンノウンは玖蘭に任せるしかないだろう」

その判断を下した千冬は、福音の戦闘の映像に目を向けた。

その顔に複雑な表情を浮かべながら。

◇

俺は旅館の廊下を全力疾走で駆け抜け、その途中にあった窓から外に飛び出した。

「展開準備は！」

『終了している』

「オーライ、『マイスターズ』展開！」

『了解。モード選択（セレクト）、ＧＮ－００３／ａｆ－Ｇ０２『ガンダムキュリオス　ガスト』』

キュリオスの装甲に包まれるが、その足には大型ＧＮバーニアユニット。背にある機首ユニットはアビオニクスを強化された大型のものに換装されている。武装もＧＮサブマシンガンから超長距離射撃用のＧＮロングバレルキャノンに。

単独で成層圏突破が可能な機体の名は、突風の名を冠された主天使『キュリオス　ガスト』

旅館の建物にダメージを与えないよう高度を上げてから巡航形態に移行、バグに向けて航行を開始した。

「キュリオスガスト、これより迎撃に向かう――トランザム！」

ただでさえ単独で大気圏を突破して宇宙（ソラ）に飛び出せる速度を持つ

ガスト仕様。そのトランザム使用時の加速力は計り知れない。
ほんの一瞬で音速の壁を突破して最高速度に。空気抵抗で、前方に展開したＧＮフィールドと大気の境が高熱を帯びる。それでも速度は落とさずにバグに向かった。

◆

『敵機捕捉』

「確認してる」

超加速を始めて、ティエリアの推測通り三分経たずに目標を捕捉した。

『敵機の総数は十。――ジンクスだ』

「黒いジンクス…カッコイイじゃねぇか。トランザム解除」

目の前に出てきたバグは、流石にＧＮ粒子は放出していないがジンクスの形状をしていた。
ということは、性能も……
とりあえずトランザムを終了させ戦闘に備える。

『トランザムシステム解除。――敵機ロックオン』

「了解。先制攻撃を仕掛ける！」

巡航形態のまま、ＧＮロングバレルキャノンで十機のバグジンクスの一体に狙いを定め、そして撃った。

こっちが相手の索敵圏外に居るため、存在は気づかれずビームだけがバグジンクスに迫る。

突如飛来したビームに反応できなかった一機のバグジンクスは直撃を受け、残骸になったその姿を黒い霧のようなものに変えて――消えた。

残りは九機。

だが、それで敵（こちら）の存在に気づいたバグジンクスが戦闘陣形に。お互いの背を合わせるように円を描く。

俺は一度人型に戻って雲の陰に入り、そこで止まった。

「モード変更、デュナメス」

『準備（スタンバイ）……ロード……完了（コンプリート）。ＧＮ－００２『ガンダムデュナメス』』

一瞬で機体が変わる。

オレンジと白からモスグリーンと白に。

「追加展開。ＧＮアームズ」

『準備……ロード……完了。ＧＮＲ－００１『ＧＮアームズ』』

俺の背後に明るめのブルーのカラーリングがされた大型支援機が出現する。

ＧＮアーマー
ガンダムとドッキングすることでガンダムの火力と機動力の大幅な引き上げが可能。
ちなみにドッキングするまでの制御はティエリアだ。

「ドッキング頼む」

『ドッキングモードに移行』

ＧＮアーマーが上下に広がってドッキングモードに。
そこに俺が後ろ向きで入り、コーン型スラスターと両足を固定。
デュナメスのＧＮフルシールドを閉じる。

『ドッキング完了。ＧＮ－００２＋ＧＮＲ－００１Ｄ『ＧＮアーマーＴＹＰＥ－Ｄ』』

ＴＹＰＥ－Ｄの装備は、エクシア用のＴＹＰＥ－Ｅと共通の大型ＧＮキャノンと脚部クロー。それにＴＹＰＥ－Ｄ用に右アームにはＧＮツインライフル、左アームには超大型ＧＮミサイルポッドが装備されている。

「さあ、圧倒させてもらうぜ！」

バグジンクスとの壁になっていた雲を突き破りながら、俺はＧＮアームズで突進する。
気付かれ九機からビームライフルの猛攻を受けるが、距離が開いているため回避は容易。
回避しつつ左アームのミサイルポッドを開いた。

「くらっときな！」

バシュシュシュシュ――――――！

全弾発射（フルバースト）。数十発のミサイルが九機のバグジンクスに向かう。
それも一方面だけでなく三百六十度から。

バグジンクスはそれに対して背を合わせた円形を維持したまま、メリーゴーランドのように回転をはじめてビームライフルを撃ちまくる。

ビームの弾幕にミサイルが次々に撃墜されて爆煙を撒き散らした。
少し経つとライフルの銃声は消えて、爆煙に包まれたバグたちだけ。
俺はそこに向けて右アームのＧＮツインライフルと大型ＧＮキャノンを撃ち込む。

『大型ＧＮキャノン、圧縮粒子残量限界。チャージのために二〇秒使用不可』

「ＯＫ、作戦続行する」

爆煙の中に向けてツインライフルを撃ちながら、少し後退して様子を見る。
残っていた九機の内、爆煙の中から出てきたのは……七機。そのうち目に見える損傷が無いのは五機。
あれだけやって撃墜二……長引きそうだ。

俺はミサイルの切れたミサイルポッドを閉じて、ツインライフルをバグジンクスに向け――

『左斜め上方に新たな敵機反応！』

「なにっ？　――――ぐぁっ！？」

機体に走る強い衝撃。……くっ、被弾したか！

『ＧＮアーマーの損傷危険域に突入！　早く離脱を！』

「ちっ、了解！」

ドッキングを解除、その場から緊急離脱する。

次の瞬間に、ＧＮアーマーはバグジンクスと敵の増援のビームライフルを受けて目の前で爆散。

俺は回避の距離が足りずに爆発の爆炎に少し飲まれ、Ｓ・Ｅを消費した。

「誰だよ！」

ビームライフルを避けながら、頭上を見る。

そこには――――

「アイツら――――スローネ三機かよ……！」

たった今シールドバリアーを貫いてＧＮアーマーを破壊したのは、スローネアインのＧＮランチャー。もちろんその傍にはツヴァイとドライも居る。

これで敵の総数は十。数的には最初と同じでも、戦力的には大幅なアップ。

「戦況は極悪ってか？」

『追加で悪い報告がある。織斑、篠ノ乃の両名が福音に撃墜された』

本当に悪い報告だなコノヤロー……こっちは俺がやるしかないんだけど。

「了解。といっても助けに行けるわけでもなし……この戦闘に集中する」

『薄情な男だな』

「今はそんな感情を持ち合わせられるほど余裕じゃねぇだろ」

今まで俺の上に居た三機がバグジンクスと合流した。

「この状況、デュナメスじゃ分が悪い。モード変更、ヴァーチェ」

『準備……ロード……完了、ＧＮ－００５『ガンダムヴァーチェ』』

モスグリーンと白から、重装甲な黒と白に。

俺がそれを展開したと同時に、合流したバグたちは一斉に攻撃を開始してくる。

「粒子圧縮率最大でＧＮフィールド展開！」

『ＧＮフィールド展開、粒子圧縮率最大』

俺が、淡い緑の球体に包まれる。そのＧＮフィールドで全てのビームを弾き、俺は防御に徹した。

このフィールド内なら、ランチャーの直撃を受けてもダメージは

無い。
唯一心配なのはツヴァイの実体剣だけ。……それでもあちらの弾幕でツヴァイはこっちには近寄れない。
「GNバズーカへの粒子チャージを停止。GNフィールドに最優先で粒子を回してくれ」
『了解した』
GNフィールドの淡い緑が少し濃くなる。粒子量が増加した証拠だ。
そして俺はさっきまで閉じていた通信を開いた。
「織斑先生、聞こえますか？」

傷痕（後書き）

はい、福音はともかくバグにはスローネが追加されました。

……あれ？　ガンダムとはいえ一機であれ相手にするって、無理ゲーじゃね？　むしろ相手にもガンダム居るし。

……ノリで登場させちゃったスローネですけど、何とかします。

では、感想・アドバイス等待ってます。

……最近、楯無とのイチャラブが無いなぁ。

次回『スローネ強襲』

スローネ強襲（前書き）

なんだかもはやサブタイが、ダブルオーのを使いたいだけになってるきが……ｏｒｚ

まあ、気を取り直して、どうぞ。

スローネ強襲

『織斑先生、聞こえますか？』

そんな拓神の声が千冬に届いたのは真耶からアンノウンの増援と、一夏・箒両名の撃墜の報告が届いてすぐだった。

救助班に一夏と箒の救助に行くことを言いつけると、通信に反応する。

「ああ。…玖蘭、なぜ独断で行動した」

通信越しでも反論を許さない威圧感のある千冬。しかし拓神は普通に口を開く。

『こいつらは、俺が倒すべき相手とだけ言わせてもらいます』

音声だけの通信だが、よく聞くと物が高速で通り抜ける音や衝撃の音が聞こえる。

「交戦中のお前との通信を長引かせるつもりは無いからな、最低限だけ伝える。まず、織斑と篠ノ乃は撃墜された。よって作戦は失敗だ」

『知ってます。……といっても、俺は抜け出せそうにありませんけどね』

「なぜ知ってるかは聞かん。次だ。今からそっちに専用機持ちの増援を送る」

千冬の判断は指揮官としては当たり前だ。

拓神とアンノウンの対比は一対十。

さらにアンノウンの正体は不明だが、拓神の状況を鑑みるにＩＳと張り合えるほどのものなのだ。

『必要ないです、というか邪魔』

だが、拓神は増援を断った。

千冬が反論する前に拓神は言葉を続ける。

『言っときますけど、こいつらは紅椿と張り合えます。しかも今の篠ノ乃みたいに慣れてないなんてことは無い。まあ、エースほどの強さを持ってるわけでも無いですけどね。ああ、さっき追加された三機は別でエースですけど』

多少早口気味に言っていたが、聞き取りにくいわけではない。

つまり、“拓神は紅椿並みの機体十機を相手している”。

しかもエースが三機居るとまで言った。

それならなおさら――と思うだろう。しかし千冬は経験からくる確証があった。

――今の拓神に、他人を気にしながら戦う余裕は無い。

ここに居る専用機持ちが弱いとは思わない。むしろ各国家の最高戦力と呼べるだろう。それだけの価値が専用機持ちとその専用機にはある。

……まあ、それでも千冬にとってまだまだ未熟なこの四人を制圧することは容易いが。

しかし、今の拓神にとっては邪魔にしかならない。

基本的な拓神の戦闘スタイルは一対多。

……使用している『ガンダム』がもとよりその状況を想定されていることもあるが。

だが、自分側が複数の場合でも拓神は十分に動ける。ただし条件として――

――そのパートナーが拓神についていけるなら。

今のセシリア・鈴音・シャルロット・ラウラが、拓神の戦闘についていくことはできない。

現実的に今現在、世界中を探しても拓神についていけるのは『更識楯無』だけ。

楯無と同程度のＩＳ技能を持つ人間は他にもいるだろう。だがその他の人間は拓神の動きを知らない。つまり、拓神に合わせられないし拓神も合わせることができない。

だから、今の千冬にできることは無かった。

「……できるのか？　お前に」

『さあ？　でも最悪、刺し違えてでもここに居るのは倒します』

そんなことをさらっと言いのけた拓神に、千冬だけでなく真耶をはじめとするその場に居る全員が唖然とした。

『……黙らないでくださいよ。俺が今から特攻するみたいじゃないですか』

「……いや、お前のやろうとしていることはそれと同義だぞ？」

『言いましたよね、最悪は。です最悪。それ以外は俺の勝ちですから』

何より――

『楯無残して俺が死ぬことは無いんで。心配しなくていいですよ』

つまり拓神は十機ものＩＳと同等な敵を相手に勝つ。と言っている。

それは、全盛期の千冬にも難しいこと。

「そうか……なら一つだけ命令だ」

説得を諦めた千冬は、一つだけ命令を出すことにした。

「死ぬな。必ず生きて帰って来い。……これは命令だ。達成できれば、お前への懲罰は無しにしてやる」

それは、少しでも拓神が勝つ確立を上げるための命令。

『……了解です』

「では、私は健闘を祈らせてもらう。次話すのは、こっちに帰ってきたときだ。ではな」

プッ――――

と、通信が切れた。

◇

『織斑教諭からの命令は守れそうか？』

「守らなきゃ、織斑先生だけじゃなくて楯無にも怒られるっての」

俺はのんきかも知れないが、通信を切った後ＧＮフィールドの中で雑談まがいのことをしていた。

それでも頭は状況打開のために動いている。

ＧＮフィールドの周りにはジンクスの赤いビームが飛び交い、ＧＮフィールドが無ければ今頃蜂の巣。

ツヴァイのバスターソードとファングの攻撃はファングの射撃だけ。接近しては来ない。来れば他の機体のビームでほいほい撃墜されるだろうしな。

それとなぜジンクスのことをバグが知ってるか、なんて無駄な思考はとっくに捨てた。

「さて、勝率は？　ティエリア」

『現状を考えて計算すると…勝率は十％あればいい方だ』

「十％以下ね……十分だ」

十％あれば勝てる。

何より、人の力ってのはそんな数字じゃ表せないからな。

「ＧＮバズーカへの粒子チャージ再開。ああ、遅くていいぞ。ＧＮフィールドの粒子圧縮率をなるべく下げるな」

『わかった』

さっきとは逆に、ＧＮフィールドの緑がほんの少しだけ薄くなった。

今の俺が警戒することは実体剣かそれと同等のものだけ。通常の射撃はＧＮフィールドの前では無力だ。

それに接近するにも、バグジンクスの射撃を何とかしなければどちらからも接近できない。

……膠着だなぁ。

「打開するにはトライアルシステム――駄目だ。こいつらコアが無ぇ。……やっぱり『トランザム』か」

でも、トランザムの限界時間を過ぎればやられる。

それでも、それしかないのは事実。

『粒子チャージ完了。チャージ分のＧＮ粒子をＧＮフィールドに』

ＧＮフィールドの濃さがさっきと同じに戻った。

「ティエリア、トランザム発動準備」

『打って出るつもりか？』

「その通り。あとは――エクシアとキュリオスの展開もすぐできるようにしておいてくれ」

『デュナメスは？』

「この状況下じゃまともに使えるのはミサイルとピストルだけだ。それならエクシアとキュリオスで代えが効く」

『では、エクシアにセファーは？』

「要る。即座に展開できる準備もだ」

『了解。全部で三十秒もらえれば済む』

「オーライ。任せた」

ここまでと同じ弾幕を耐えて十秒経過。

ジンクスはこれまで通り。スローネはツヴァイとドライがアイン

に粒子供給用ケーブルを繋いだ。十五秒経過。

スローネアインのＧＮランチャーの砲身が展開され、ＧＮハイメガランチャーの発射準備が終わる。二十秒

ズガァァァァァッ！

莫大な攻撃力を持ったＧＮハイメガランチャーが、俺だけに向けて放たれた。

ＧＮフィールドを展開していても途方も無い衝撃。それと同時に一気に斜め下へＧＮハイメガランチャーで押され、小島のような陸地に叩きつけられる。

その衝撃で小島の中心部にはクレーターが出来、小島全体が爆煙に包まれた。

ＧＮハイメガランチャーの掃射は終わり、様子見なのかバグジンクスの攻撃も止まる。三十秒！

スタンバイ・コンプリート
『準備完了』

「はっ、ナイスだティエリア。トランザム！」

貯蔵された圧縮粒子が開放され、爆煙のなかでヴァーチェが赤に染まる。

「ＧＮバズーカハイパーバーストモード」

体の前でＧＮバズーカを両手で構え、砲身を展開する。

「目標を消滅させる……。圧縮粒子全面開放！！！」

――ズガァァァァァッ！

無人機襲撃のときに撃ったビームより数倍太い、さっきのＧＮハイメガランチャーよりも太いビームが煙幕を切り裂き、スローネを狙う。

俺がまず狙ったのはツヴァイ。一番脅威になる存在。

極太のビームはかわそうとしてアインの真後ろに行ったツヴァイの右半身と動けなかったアインの右半身をえぐって後ろに突き抜けて、その後ろに居たバグジンクス二機を文字通り消滅させながら、青い空に一条の光の柱を築いた。

これでもこの後のことを考えて粒子の消費はなるべく抑えている。

右半身を持っていかれた二機は本当のＭＳなら爆散してるだろうが、まだ動けるといったようにツヴァイは左のバインダーから四基のファングを展開し、二機ともに残った左手にビームサーベルを持つ。

「まだだ！」

掃射が終わると、すぐに俺は動いた。

「――キュリオス！」

装甲をキュリオスに変え、バグジンクスの弾幕を抜けて一瞬で距離を詰める。

「――エクシア！」

距離を詰めることが出来たところで、エクシアに換装。
背のＧＮプロトビット六基をファングにぶつけて相殺。コアブロックを収納。
その間にも自分自身はツヴァイに肉薄してＧＮソードとＧＮロングブレイドでツヴァイを斬る。
ＧＮソードはビームサーベルに止められるが、残ったＧＮロングブレイドで上半身と下半身を真っ二つに。ツヴァイは黒い霧になって消えた。
背後から切りかかってくるアイン。トランザムの速度なら簡単に避けられる。一瞬でアインの背後に回りこむと、両腕の剣でＸ字に切り裂く。ツヴァイと同じく黒い霧のようになって消滅した。

「次っ！」

倒した達成感を味わう暇は無い。

腕を左右に広げてバグジンクス二機の間を通り抜ける。
ドライは戦闘能力はジンクス以下だから後回しだ。
俺が通り抜けたあと、左右のバグジンクスはツヴァイと同じく上半身と下半身が別れて消滅。

「次っ！」

残りはドライを入れて四機。

一体のバグジンクスに狙いを定めて急加速。
赤い残像を残しながら接近し、ＧＮソードを振り下ろす。
ビームサーベルで防御する暇も無く、そのバグジンクスは真っ二つになって消滅する。

「ハッ！」

左手のＧＮロングブレイドを一体のバグジンクス向けてダガーのように投擲。

不意打ちに、そのバグジンクスはビームサーベルを抜いていたが胸部にＧＮロングブレイドが突き刺さる。

「これで！」

そしてそれを俺はライフルモードにしたＧＮソードで撃つ。

ＧＮロングブレイドに当たったビームは、ＧＮロングブレイドを爆散させてそのバグジンクスを破片でギタギタにした。黒い霧になって消滅する。

「まだだ！」

俺に残された時間は約十秒。

でもトランザムなら十分な時間。

ＧＮソードのグリップから手を離して、ビームサーベル二本を抜く。

そしてそれも投擲。続いて残ったビームダガーも投擲する。

わざと回転を与えて投げたそれは、バグジンクスをしっかり五つに別けて消滅させた。

「ラスト！」

あと五秒。

左腰のＧＮショートブレイドを左手に持ちながらドライの真上に。

真上から真下のドライ向けてショートブレイドを投げる。そしてそれを追うように、ＧＮソードのグリップを再度持ってソードモードにしながら自身もドライに向かう。
真上から投げられたＧＮショートブレイドは重力でさらに加速されて、ドライの頭部から深々と刀身部分を全てドライに埋める。
そしてその動けないドライを、俺は上からＧＮソードでＧＮショートブレイドごと切り裂いた。
ドライも黒い霧になって消滅。

『『トランザム』終了』

そこまで終えてトランザムの限界時間。
エクシアの機体が、赤からトリコロールに戻った。

「はぁ、はぁ、はぁ……やった、のか？」

自分でもあまりのことに肩で息をする。
今のは、今の俺が出来る全力だった。

『バグのこの領域からの消滅を確認』

それを聞いて、俺はやっと一息ついた。

スローネ強襲（後書き）

ガッツリ拓神＆エクシア無双！
でも、ブレイドまでソード以外全部投げたのは意味があります。
それとヴァーチェのハイパーバースト、あれくらいは出来ますよね。

キュリオスは一瞬だけの登場。
前回活躍してますからね。デュナメスも。

ヴァーチェを活躍させるといって、結局見せ場はエクシアに取られましたよ（笑
……ヴァーチェ、扱い難しいんですよ。

では、感想・アドバイスお願いします。

次回『堕ちる天使　～フォーリン・エンジェル～』

堕ちる天使　～フォーリン・エンジェル～（前書き）

前回ので対バグは終わったと思うでしょうね。

――終わってませんけど。

では、どうぞ。

ティエリアからバグ消滅の報告を聞いて、俺は一息つく。

なんにせよ、乱れた息を整えて整えてからだ。

「終わったか……。ふぅっ、少し休憩して――」

『!?　拓神、戦闘準備を!　こちらに高速で接近するバグ、一機を確認した!』

「終わったんじゃなかったのかよ!　キュリオス!」

だが、装甲がすぐに変わることは無かった。

『だめだ、エクシアのサポートに集中するために解除してしまった。すまない』

「わかった。このままエクシアで迎撃する」

『本当にすまない……』

「気にするなよ。……目標の到達まであとどのくらいだ?」

『あと――五秒で接触する。方角は南東、すでに視認可能』

ティエリアに言われた方角を向くと、かなりのスピードでこちらに突進してくる黒い機体。

「なっ、あれは……ＧＮフラッグ！？」

◇

拓神が、ジンクスとスローネを撃破した直後。

「玖蘭君、アンノウン十機……撃墜しました。玖蘭君は健在です」

信じられない、といった感じの真耶がそう言う。

「ふっ……アイツには流石、という言葉を送ってやろう」

千冬は、あのトランザムとやらを使ったのだろう。と予想する。

レーダーでもわかるくらい一気に動きが良くなり、一分ほどで十機のアンノウンを撃墜してしまったのだ。

ちなみに一夏と箒が撃墜されてから、専用機持ちにも自室待機の命令が出て大広間から追い出されている。

「……織斑先生、定時報告です。織斑君と篠ノ乃さんを撃墜した福

音はいまだ発見できません。ステルスモードに入ったようです。ですが、光学迷彩の類は搭載されていないので、監視衛星での捜索を続けています」

「そうか……」

安堵の表情だった千冬の顔が少し歪む。

もしも彼女の手元に専用機があったなら、千冬自身が出撃して福音を捜索していただろう。

しかし、無いものねだりをしても仕方が無い。だから、千冬はここで司令塔としての役割を果たそうとしていた。

「……玖蘭は？」

「いまだその空域に滞在中」

「わかった。……引き続き福音の捜索を」

「了解」

千冬個人としては、今すぐにでも重傷を負った一夏のところに行きたい。

なぜなら、一夏は千冬のたった一人の家族だから。

でも、今は教師だ。プライベートとは分け、仕事（やること）は全うする。それが織斑千冬という人物だった。

「――織斑先生！」

「どうした？」

「レーダーに新たなアンノウン反応！」
「なに？！　行き先は？」
「それが、かなりのスピードで玖蘭君のところに向けてです！」
「ちっ、集中力が切れたところでも狙うつもりか……！」

◇

突如現れたＧＮフラッグ。
それは、俺に到達する前に左手でビームサーベルを持った。
「まだ終わってなかったのかよ……！」
さっきので集中力はほとんど使い果たした。
そのまま集中していればまだ持ったのかもしれないけれど、一度途切れさせた集中力は戻ってこない。
「それでも――やるしかないよな」
粒子残量がほとんど無く重い機体を動かす。
ＧＮソードをソードモードにして、ＧＮフラッグが速度をそのままに振り下ろしてくるビームサーベルを受け止めた。

が、それまでの速度が追加された重い一撃。衝撃に押され、体勢を崩す。

「ぐっ……！」

ソードを腕ごと弾かれた形の、隙だらけの俺。

ＧＮフラッグは俺の左肩にビームサーベルを振り下ろした。

――ズザンッ！

「ぐっ――――がぁぁっ！？」

あるはずの絶対防御を抜いて、俺の左腕は肩口から切り落とされる。流れ落ちるおびただしい量の血。

気が狂いそうな痛みを何とか我慢してＧＮフラッグを蹴り飛ばし、ティエリアに指示を出す。

「ぐぅぁぁ――はぁ、はぁ……セファー展開」

『了解、残っているのは二基だけだ。それより早く止血を！』

「い、いいからっ、俺の腕を回収してきてくれっ……！」

『わ、わかった』

ＧＮソードをライフルモードに変えて、近づかれないように牽制する。

痛みで狙いが定まらないが、牽制になればいい。とにかく撃つ。

牽制になったようで、ＧＮフラッグは迂闊に近づいてこない。
その間にティエリアが、ＧＮプロトビットで挟むようにして腕を回収してきた。
少し朦朧とするが、切り落とされた腕とそれに付いたままの装甲との間に神力を流し込んで、外側に力を加えるようにしてエクシアの腕部装甲を破壊。
その間にも、そこから下のエクシアの装甲は血塗れていった。

「くっそ、目がかすんで来やがった。ぐぅぅ――――……腕を、くっつけてくれ。切られた、とこをあわせて、くれればいい」

その間もライフルの連射は止めない。
ティエリアが指示した通りにする。俺のほうの切断口に腕のほうが触れて、激痛をもたらす。

「うあぁぁぁ――っ！　はぁっ、再生、をっ……」

また神力を行使。そこに再生の形質変化をした神力を流して、切れた腕を繋ぐ再生をする。
本来なら切られた方は無くても再生できるけど、あったほうが早くて使う神力の量も少ない。

痛みは消えたが、不快な痺れや、痛みの錯覚は残った。
左手を開いたり閉じたりして、腕に不調は無いか確かめる。
痺れて反応が遅かったりでおかしいが、動かすことに問題は無い。
それでも今の戦闘中は使い物にならないと考えていい。

もう少しで神力行使者保護の自動再生が始まるところだった。
自動再生すると、腕は無くても元に戻る。でもその代わり多くの

神力を消費して、ただでさえ疲れのある俺に追い討ちを掛けることに。

「ちっ、ふらつくなぁオイ。何やってくれてんだよ、テメェ……」

極限状態に一度なったせいで、ちっとおかしくなったみてぇだな。

「この借り……今返すぜぇ？」

ＧＮソードをソードモードに。

自分の体のことは無視で急加速を掛ける。

どぉやら、さっきのトランザムで粒子を使い果たしたせいで、絶対防御とかＰＩＣとかが消えてるみてぇだ。

さっき絶対防御は発動しなかったんじゃなくて、絶対防御が無かった。

急加速で肉薄すると、ＧＮフラッグはビームサーベルを横に薙いで来る。

それをＧＮソードで受け止めて、弾き飛ばし、無防備なＧＮフラッグの下半身にＧＮソードの横薙ぎを当てる。

それでＧＮフラッグの両足を付け根から切り払った。

するとＧＮフラッグは空いている右手で、俺の胴にパンチ。

「ぐふぅっ！」

絶対防御も何もない今、衝撃は直に俺本体に伝わった。

そしてそのパンチで俺は吹っ飛ばされる。

ＧＮフラッグが突進しつつの突きをしてきた。狙いは俺の頭。
それを頭を左に曲げてかわす。っても、右頬らへんの装甲は焼かれて、右肩付け根のグラビカルアンテナは中ほどから無い。

「く…ぉらよ！」

ＧＮソードでＧＮフラッグの首を刎ねる。
それが確認できたと同時に蹴りも入れて、吹き飛ばしてやった。

だが吹き飛ばされている途中でＧＮフラッグは体勢を建て直して、ビームサーベルの切っ先を俺に向けて構えて特攻してきた。

「その程度で、やられる俺じゃねぇんだよ！！」

無理やり気味に右半身を下げてその特攻をやり過ごす――と見せかけて。

「なんてなぁ♪」

ＧＮフラッグの軌道上でＧＮソードを横にする。
つまり、自分からＧＮソードの刃にＧＮフラッグは突っ込む。

切り裂かれ、ＧＮフラッグはやっとその姿を黒い霧に変えて消えた。

「はっ、あっけねぇ。……ちっ、体が限界かよっ」

すでに意識も限界。さっきの一撃だって上手くいったのはたまたまだった。

「ティエ、リア……この状態で帰ったら、どのくらい、掛かる？」

『ざっと十五分くらいだ。だが、その体では……』

「まぁ、無理だろうな。死なないとはいえ、意識がぷっつりいけば、海へ真っ逆さまだ。でもさ――」

「帰んなきゃ、いけねぇんだよ」

『わかっているさ。――しまった…！』

「どした？」

何があったってんだ。こちとら、意識保ってるだけで精一杯だってのに。

『ここの現在位置は、もうすぐ福音の通るルートだ！　まさか――バグに誘導されていたのか！？』

はっ、オイオイオイ、ここまでボロボロで福音（あれ）とやりあえとでも？　ってか、福音の通るルートなんで知ってんだよ、お前。

あ――

「――――っ、もう来ちまったみてぇだぞ？」

ハイパーセンサーにアップで表示された、こちらに向かってくる『銀の福音（シルバリオゴスペル）』。

「天使（ふくいん）に、墜とされる天使（ガンダム）……はっ、皮肉だな」

次の瞬間、俺は福音の放ったエネルギー弾の嵐に飲み込まれ――――意識がブラックアウトした。

堕ちる天使　～フォーリン・エンジェル～（後書き）

イメージは最終決戦だったので、トランザム使用後の隙をついてＧＮフラッグ登場です。
ハムさんが居ないのが悔やまれる！

原作と違ってＧＮフラッグには勝っちゃいましたけどね。

あと、第三世代ガンダムでトランザムを限界まで使うと、性能低下に加えＩＳのシールドバリアー・絶対防御などが消えます。
かろうじてコアネットワークに接続できてるくらいです。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『天からの光』

天からの光（前書き）

サブタイをちょっと変更です。前話の予告もこっちにあわせました。

では、どうぞ。

天からの光

拓神が再出現したアンノウンと戦闘開始した直後の司令部（大広間）。

「玖蘭君、交戦開始しました」

「……？　山田君。先の戦闘と今の玖蘭の戦闘、場所がだんだんと移動していないか？」

「え？　あっ、確かに……。かなり沖のほうに移動しています。現在位置はここから直線距離で約三十キロ地点です」

「十キロも……。まさか……」

「……誘導されている。と？」

「その可能性もあるだろうな。もしかしたらさっき以上の大戦力に囲まれるやもしれん」

そんなことになったら――

「ええっ！？　それだと、今の消耗した玖蘭君では！」

「確実に墜とされるだろうな」

それでも増援は送れない。
戦力うんぬんかんぬんの前に、間に合わないのだ。通常のＩＳなら。
到着したときには戦闘が終了している。
「だが今の私達には、祈るしかない」
「……」
沈黙の帳が、この大広間を満たした。
投影されている大型ディスプレイ。
そこには拓神が戦っている場所周辺のレーダーが表示されている。
先まで使っていた監視衛星は、すでにこちらの制御を離れたために画像は見えない。
ピピッ！
そのレーダーに、突然赤い光点が表示される。
その赤い光点が示すものは――
「！　……織斑先生、福音の反応を確認しました。このまま進むと玖蘭君が戦闘をしている空域に介入してしまいます！」
「……最悪だ。恐らく介入した福音は玖蘭とそのアンノウンを、敵とみなして無差別に攻撃するだろうな。そして」
福音と戦闘が勃発した場合、今の玖蘭に勝ち目は無い。

千冬はそう言い切った。

思い出すのは無人機襲撃事件の後で、拓神のところに行ったときのこと。

『ワンオフ・アビリティー『トランザム』です。機体の各部に圧縮・蓄積したエネルギーを開放することで性能を三倍に引き上げる機能ですよ』

拓神がそう言っていた。さきほど動きが突然良くなったのはそれを使ったから、と千冬は推測する。

しかしそれは――

――エネルギーを再蓄積するまでは使えない。さらに、使い終わった後はエネルギーがほとんど無くなる。

ということの裏返し。

（今の拓神はその状態で戦闘を行っている。束はなにかあの機体が普通ではないと言っていたが……）

どちらにせよ、今の拓神が福音相手に勝つことは不可能だ。

「織斑先生、玖蘭君が再度出現した一機のアンノウンを撃墜しました。しかし――」

「そこに福音が迫っている、と」

「……はい、その通りです」

それは――チェックメイトではないか。

極限状態とほぼ万全。どちらがどちらに勝つなど、目に見えている。

案の定――

「……玖蘭君の反応、ＬＯＳＴしました……」

そんな報告が、真耶から伝わった。

◇

最後に福音からの攻撃を受けた俺は、海に落ちた。

――はずだった。

気がつくと、知らない空間。

あの真っ白な空間でもなくて、頭上には球体。ここの四方を囲む壁は、その球体から伸びた太いコードが埋め尽くしている。

「これは――ヴェーダ？」

これは見覚えがあった。たしか、外宇宙航行型母艦『ソレスタルビーイング』内にあるヴェーダのターミナル。

ダブルオーのアニメで何度も見た場所だ。太いコードよりこっち側に空中投影されているディスプレイがあって、そこには大量の情報が次々と流れている。

「ってか、何で俺はここに？」

でも、ここに来る理由が思いつかない。

海に落ちても俺が死ぬことは無くて、海底で目が覚めたと思う。

「そうだ……ティエリア？　おい、ティエリア！」

応答無し。

ネックレスはあるんだけどな……

「居ないのか？　……『マイスターズ』展開」

……こちらも応答無し。

ティエリアの補助なしでＩＳを展開することも、武装を展開することも可能なのにだ。

「どうなってる……。ティエリアは居ないしＩＳは使えないって。……なら」

神力を開放、これは出来た。

目に神力を集めて、周囲を見渡す。……生体反応も気配も無い。

（範囲を拡大……）

このターミナルの外まで見渡せるように拡大。

しかし、ターミナルの外は黒一色で何も見えない。存在していない。

「これも無駄か……」

『変革者の反応を確認、プログラム起動』

神力をの行使を止めようとした瞬間、ヴェーダに異変が起きた。
一面のディスプレイの情報は、赤くなって途方も無い速度でスクロールしていく。

「なにが……」

俺は神力の行使をやめずに、周りを見渡す。
異変があったのはディスプレイとその色だけ。

「どうなってる？」

『ヴェーダが、君とその存在を感知したんだ』

「ティエリア！？」

突然聞こえたティエリアの声はいつものネックレスからではなく、頭上のヴェーダから。

その後、目の前にティエリアのホログラフィックが投影された。

そしてそのティエリアが口を開く。

『始まるぞ……』

「なにがだ？」

『第二形態移行（セカンド・シフト）だ。これには条件があった』

条件？　そんなこと、聞いてない。

『君の力を解放してから、神が後付けしたからな。そしてその条件は――』

――君がこの空間で神力を行使すること。

「は？　じゃあ、この空間に来れなかったら二次移行できなかったのか……？」

『そうなる。ああ、忘れていたがこの空間は別の次元や特別な世界というわけではない、この世界に実在しているんだ。このヴェーダの判断で君がここに転送されるようになっていた』

「どうやって転送したのかはともかく、俺は精神だけとかじゃなくてここに居ると？」

『その通りだ。先ほど墜ちた海中に君は居ない。ヴェーダが君をここに転送したからな』

「なるほど。……どのくらいで第二形態移行は終わるんだ？」

『ヴェーダをなめてもらっては困るな、もうすぐ終わる。……ああ、言い忘れていた。この転移は神の力を借りたものだから、君がここを出た後二度目の転移で戻ってくることは出来ない』

「わかった。じゃあ、終わるまで待つか。ティエリアに質問してな」

『質問？』

「このヴェーダは『マイスターズ』とリンク……いや、お前とリンクしてるんだろ？」

『ああ、その通りだ。各機体を準備するときはヴェーダからその情報を引き出している』

「なら、操縦支援とかそんな形でいい。他の機体とリンクできないか？」

『プログラムを積めば操縦支援と処理能力上昇の恩恵は受けられる。それで、既存のＩＳなら十五％の基本性能上昇が望めるな』

よし、それならあれができる。

「そのプログラムの構築をしてくれ。国際ＩＳ委員会に渡して、世界に広めてもらう」

『そんなことをして、君に何のメリットが？』

「まずはバグに対抗する力を、既存のＩＳに持たせる。最低でもノーマル第二世代型がバグジンクスくらいには勝てるようにな」

『だが、それはつまり敵対されるとこちらが不利になるぞ？』

「もう一つ、ヴェーダとＩＳが繋がることでこっちだけが受けられる恩恵があるだろ？」

『……トライアルシステム』

「そう、今まではコアをわざわざハッキングして制御を奪わなきゃならなかった。でも、そのプログラムでヴェーダとのリンクを作れば……」

『一度に世界中のＩＳを制御下に置くこともできる……』

そういうことだ。

本来ならトライアルシステムの範囲しか制御を奪えないが、ヴェーダに直接リンクしているティエリアの助力があれば、リンクしている機体全てを無制限に制御下に置くこともできる。

それならば、いくら強い機体に敵対されようと一瞬で優位性（アドバンテージ）を取れることに。

……まあ、最終手段には違いないんだけどな。

話が終わったところでヴェーダの情報処理も終わり、ディスプレイも元に戻った。

『終わったな。…二次移行が終了した、元の座標に戻るぞ』

「ああ、頼む」

『了解……だが、最後に聞かせて欲しいことがある。これは僕自身の意思だ』

「なんだ？」

『君が『ガンダム』を、『マイスターズ』を駆る意味はなんだ？』

「駆る意味か。……理由ならあるな」

「お前は覚えてるだろ、ティエリア。無人機襲撃の時に言った。俺はコイツで……『ガンダム』で自分の周りの世界だけは少なくとも守る。絶対にな」

『そうか……ふっ、十分だな。――――行こう、その守るべき世界を壊させないために』

「もちろん。これからもよろしく頼むぞ、相棒」

その言葉を最後に、俺はヴェーダのあるその場所から消えた。

◆

ヴェーダのあった場所に居た俺が、気がつくと海底に仰向けで沈んでた。……どんな急展開だよ。

――ともかく、今は現状確認をしなきゃならない。

こちらに戻るときにとりあえず再展開されたであろうエクシアは、それまでの戦闘の傷を残したままだった。

まず、左腕の装甲は肩から指先まで何もない。これは自分でやったけどな。

次に右肩と頭の間は黒く焦げ付いて、そこにあるグラビカルアンテナも半ばから消え去ってる。これはＧＮフラッグにやられた。

さらに……というか最後。福音のエネルギー弾を浴びたせいで、機体の各部は抉れてボコボコ。頭部は被弾してないのと、かろうじて素肌が見えてないのが救いだ。

「なんていうエクシアリペア状態だよ。……ティエリア、居るだろうな？」

『もちろんだ。君の身を案じていたが……ふざけられるなら問題あるまい』

「ふざけてはないが、問題は無いぜ。とりあえず、俺が墜とされてからどのくらい経った？」

『約三時間といったところだ。現在、この海上で福音と専用機持ち五人による福音への攻撃が行われている』

「そんなにね……。このままの機体状況で動けるか？」

『損傷でスペックが落ちてはいるが、いける。ただ、ＧＮソードが……』

ふと右手に目をやると、ほとんど全壊状態のＧＮソード。

あの時…福音のエネルギー弾を受けたとき、とっさに壁にしたからなぁ……

「こりゃまた……ご苦労さん」

左手で触れて、言葉を掛けた後で粒子に返還して収納した。

ズガアアァァン！！！

突然の海中にも聞こえる轟音と、それに付随する衝撃。

そして――ここまで届く海面からの光の柱。

『海上より高エネルギー反応。正体を――――『銀の福音』の第二形態移行と断定した』

音と衝撃が消えても残留している、天からの光の柱。俺に、昇って来いとでも？

「上等だ、行くぞ！」

俺は半壊したエクシアのまま、その天からの光を垂直に上昇していった――――

天からの光（後書き）

サブタイとの絡みが薄いなぁ……

それはともかく、某量子演算コンピューターさん登場（笑
ここのティエリアはセカンド最後期状態です。

そして裏まで考えてる拓神（爆笑
トライアルシステムの使用見越してます。

それと、感想で「ＧＮ粒子のレーダー無効化効果は?」と指摘されたのでここで私のなかで決定したことを。

まず、バグはＧＮ粒子を放出しません。
ビームなど撃ってきますが、それはバグの力で、ＧＮドライヴ的なのは積んでません。つまり、バグは出現すると通常レーダーに引っかかります。
次に拓神のマイスターズはコアネットワークに接続してるので、通常レーダーには掛かりませんが、位置情報はわかります。
それに付随して、教師陣が使っていたレーダーなどの機類は通常レーダーとコアネットワークを利用した位置情報表示のハイブリッドという形にさせてもらいます。

ご都合主義といった感じなのはすみません。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『剣士と天使、再臨』

剣士と天使、再臨（前書き）

昨日は投稿できずすみません。

では、どうぞ。

剣士と天使、再臨

今は、機体変更する数秒が惜しい。
ティエリアに変更の準備は任せたが、ボロボロのエクシアのまま海上を目指す。
ここがかなり深いところだったのと、水圧も影響で思うようなスピードは出ない。ただでさえスペックは半分程度しか発揮できてないし……

まあ、このエクシアで海上に出たところでまともに戦闘なんか出来ない。
今持ってる武装は、右手首に内蔵されたＧＮバルカンと海底に落ちてたのを拾ったビームサーベルだけ。
しかも左手では使えない。装甲がない以上、ビームサーベルにＧＮ粒子を供給する方法が無いからだ。

『……海上まで、あと五〇メートル。それと悪い報告だ。形態移行の影響で、機体の変更にあと三分は掛かってしまう。このままで持ちこたえてくれ』

「そういうのを無茶振りって言うんだろ。……ま、できる――――いや、やるさ」

直後、俺は盛大な水飛沫を上げながら、海面から上空に飛翔した。

◇

専用機持ちの独断行動。

動ける専用機持ちの五人は、居てもたってもいられずに『銀の福音（シルバリオゴスペル）』の撃墜に向かった。

……そのせいで、索敵を続けていた教師陣は多少混乱したのだが。

「まったく、あの馬鹿者どもは……」

「あはは……。現在、福音と専用機持ち勢の戦闘は継続中。あと少しで監視衛星の再申請が通るかと」

「それは任せたぞ、山田君」

「はい」

この大広間のふすま。その外で自室待機の命令が出ていたにもかかわらず、ドタバタとした足音がしたのが千冬の耳に入った。

ふすまがノックされ、返事も待たずに開かれる。

居たのは数人の女子生徒。その顔は焦りに染まっていた。

「お、織斑先生！」

「何だ！　今は作戦行動中だぞ！　自室待機の命令が出ていたはずだ！」

「そ、それが……！」

「織斑君が……！」

「居ないんですよぉ……！」

「何っ？」

一夏は福音に撃墜され重症。

これが千冬の持っていた情報だ。一度見ただけだが少なくとも、動けるような傷ではなかった。

それが……居なくなった？

千冬は内心焦ってセンサー類に目を向ける。

それで千冬が白式を見つけるより早く、真耶から声が飛んだ。

「織斑先生、白式の反応を確認しました！　一直線に福音との戦闘空域に向かってます！」

「どうなっている！　織斑は重症ではなかったのか！」

「そ、そのはずなんですけど……」

（生体再生でもしたというのか……？）

これを考えたとき、千冬の中にあった考えの一つにスポットが当

たる。

もしも――白式に使われているコアが白騎士のものだったら？
あれには、生体を再生する能力もあった。それならば、一夏があの状態から出撃できたのにも頷ける。

「……報告ご苦労、お前たちもこれまで通り自室待機だ。早く帰れ！」

「「「は、はい！」」」

ドタドタ……と来たときとは逆に、足音が遠ざかっていった。

「衛星の使用許可はまだか？」

「い、今取れました。すぐリンクさせます！」

真耶がキーボードに指を走らせると、大型ディスプレイに交戦空域の映像が表示された。
即席のコンビネーションでも志が同じおかげか、専用機持ち五人の動きは良い。

そのうちに鈴音が捨て身で接近し、福音の特殊なウィングスラスターの片方を奪った。代償として、鈴音はカウンターの蹴りを食らって海に墜ちる。
続いて箒が二刀で福音に肉薄する。性能任せの急加速で、不意を突き刀は福音の右肩装甲に食い込む。しかし、福音は自らの手のひ

らの装甲が焼けるのもいとわずにその二刀を掴み左右に広げた。
両腕を開いた状態になった箒。その無防備な胴に砲口が向けられた。それが発射される寸前、箒を乗せた紅椿は前宙をするように一回転。その途中、踵落としの要領でつま先から発生させたエネルギー刃を使って残ったほうの翼も切り落とした。
両翼を失った福音は海に沈む。

「お、終わったんですか……？」

「いや……まだだ。まだ終わってない……」

「え？」

カッ！　と上空からの映像に光点が出来たと思うと、それは急激に大きくなり海面を抉る。
それは光の珠だった。そしてその中心に居るのは……

「福音を中心に強大なエネルギー反応が……。一体何が起きて……」

「『第二形態移行（セカンド・シフト）』……」

「ええっ！？」

空に舞い戻った福音は、切り落とされた翼の付け根からエネルギーの翼を展開した。
ただでさえ高スペックだった機体が移行でさらに強化され、ラウラ、シャルロット、セシリア、箒の順番で戦闘不能にされていく。

「織斑の出番は無いと思ったが……。今あれに勝つには織斑か――

―」

「玖蘭君、ですか」

「ああ。……その希望は薄いのだがな」

ボロボロの状態に加え、福音の追撃まで受けた拓神だ。

（もし生きていたとしても、今すぐ戻ってくることは……）

「でも、その薄い希望は叶ったみたいですよ」

「なに？」

「現在福音と交戦している場所、その真下の海中に玖蘭君の反応を確認しました。現在、海上に向けて上昇中です」

「はぁ、まったくうちの男子どもは……」

「ピンチに駆けつけてヒーローにでもなるつもりか？」

◇

「再戦と行くか！」

海上に飛び出した瞬間、一夏の声が聞こえた。

――そういえば、戻ってくるタイミングだったな。と思いつつ俺も口を開く。

「なら、俺も混ぜてくれよ！」

右手に逆手で握ったビームサーベルの刀身を展開、不意打ちで福音に斬撃を仕掛けた。

まあ、それは福音の装甲を掠めるだけで回避される。

「拓神！？　お前、なんでそんなボロボロなんだ！？」

「アンノウンと戦闘した後でへばってるとこにコイツが来たんだよ。それで、落とされたんだよ」

だからさ――

「リベンジだ、福音」

俺は一夏の隣に移動して、福音を見据えた。

「いや、お前は下がってろよ拓神。そんな機体じゃ……」

「ヤダね。――でもって、福音ははやる気満々みたいだ」

バッ！　と福音が広げたエネルギーの翼から、俺と一夏に向けてエネルギー弾が掃射される。

「ハッ！　ばら撒けば勝てると思ってるのか？」

自身に迫る最低限のエネルギー弾だけを手首のＧＮバルカンで迎撃する。

通常のエネルギー弾なら何発も命中させないと迎撃できないだろうが、これぱかりは福音の特殊なエネルギー弾がこっちの利になる。

着弾点で爆散するそれは、少しの衝撃で爆散させられる。つまり、ＧＮバルカン程度の火器でも迎撃が出来た。

最低限を迎撃して残りは回避する。当たらなければどうということは無い！

後少しだ。あと少しで俺は万全になれる。

それまでは頼むぜ、エクシア。

一夏を見ると、左手の新装備『雪羅』をシールドモードからクローモードにして福音に肉薄していた。

瞬時加速で接近した一夏はそのクローの先端からエネルギー刃を出して、福音に一撃を当てた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルＡで対処する』

またエネルギーの翼を大きく広げ、さらに胴体からも生えるエネルギーの翼も伸ばす。

そして、エネルギー弾の掃射が始まった。

「何度も食らうかよ！」

一夏はそう叫んで、雪羅をシールドモードに。それから零落白夜

のシールドを発生させる。
エネルギー弾は、一夏を覆うそれに触れたとたん消滅して爆発も起こらない。

俺はさっきと同じように最低限をＧＮバルカンで迎撃、残りを回避している。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音はそう告げると、エネルギー翼を自身の身体に巻きつけて繭のようになった。
ちっ、厄介な攻撃を……

翼を回転させながら開き、全方位に大量のエネルギー弾をばら撒く。
そう、全方位に。
つまり福音に墜とされて、今戦闘参加していない五人のところにもということ。

「くそっ！」

案の定、一夏はそれを行かせまいとそいつらの前に出ようとした。
……浅はかなり。

「一夏、お前は攻撃に集中してろ！　防御に回るのは俺で良い！」

とりあえず、ＧＮバルカンのビームを小島のようなところ……ん？
あれって俺がＧＮハイメガランチャーで押し付けられた島じゃ？
クレーターっぽいの出来てるし。たぶんあれで数百メートルは沖に押されたな俺。

……まあ、今はどうでも良いか。

その小島に居る五人への射線に入るエネルギー弾を、バルカンで迎撃していく。

自分のほうは無視だ。なんてったって――

『全領域クリアー、システムオールグリーン……拓神、終わったぞ』

「ナイスタイミングだ。モード変更『ダブルオーガンダム』！」

――もう三分は経った！

剣士と天使、再臨（後書き）

サブタイの剣士＝一夏なのに…一夏影薄い……
そしてそれは次回もでしょう（笑

やっとダブルオーが出せます！
やったぁ！

では、感想・アドバイス等待ってます。

次回『ダブルオーの目覚め』

ダブルオーの目覚め（前書き）

本文が少し短かったので、もう一つの案をおまけとして後半に入れました。

では、どうぞ

ダブルオーの目覚め

『モード変更、ＧＮ－０００００『ダブルオーガンダム』』

エクシアと同じトリコロールの装甲。
両腰には長剣――ＧＮソード？――が二本、腰の後ろにはビームサーベルの発振器。

一番の特徴は、背のバックパックから伸びるアームに保持される二基のＧＮドライヴ。
そしてそれが実現するツインドライヴシステム。
そのシステムは、粒子生産量を二倍ではなく二の二乗する、既存のガンダムを超えたガンダム。

それがダブルオーガンダム。

俺は機体をエクシアからダブルオーに変更した直後トランザムを起動、さらに両肩のコーンスラスターに覆われたＧＮドライヴを前方に向けて大量の粒子を放出する。
それだけで、こちらに押し寄せていた福音のエネルギー弾は消失した。

「これがダブルオー……」

同調しきっていない二基のＧＮドライヴでのトランザムはリスクが大きい。すぐに解除して両腰のＧＮソード?を両手に取る。

「一夏」

「なんだよ、今から本気か?」

「まあ、そうだな。……一つ言っとく。お前に出番はやれそうに無いから」

「へ?」

一夏が理解できてないうちに……っと。

前方に向けたままだったＧＮドライヴを後ろに回して、福音に向けて急加速。

「コイツは……瞬時加速（イグニッション・ブースト）以上だな」

一瞬で福音に急接近。

両手のＧＮソード?を振りぬいて、福音の頭部から生える一番大きなエネルギー翼を両方とも断ち切った。

主翼を失った福音は落下を始める。

「まだ終わらないよな、福音?」

その通りで、落下の途中で再度エネルギー翼が生えて姿勢を立て直し、エネルギー弾の嵐を見舞ってくれた。

「残念ながら無駄なんだよ！」

もう一度両肩のＧＮドライヴを前に。

今度は前方に粒子を集めてＧＮフィールドを形成、エネルギー弾を全て防御。

ある程度続いたエネルギー弾のの衝撃が収まる。

ＧＮフィールドに衝突したエネルギー弾が撒き散らす爆煙。それを裂きながら、俺は福音に再接近した。

「悪ぃが、ここから先は一方通行だ！」

右手のＧＮソード?を振り下ろす。

それを福音は腕で受け止めた。俺は止められた瞬間に福音を蹴り飛ばす。

そして蹴りで体勢を崩した福音に追撃を仕掛けた。

「だから……さっさと、墜ちろ！」

左手のＧＮソード?で右から左に横薙ぎ。

それを福音がバックステップでかわしたのを確認した俺は、右のＧＮソード?の切っ先を向けて福音に突っ込む。

その突きを、福音は左手の平で受けて無理やりに止めた。たぶん装甲は貫いて、中の操縦者を守るために絶対防御が発動したはず。

福音もただやられる馬鹿じゃない。この至近距離でもエネルギー弾を俺に向けて集中させて飛ばしてきた。

俺はそれを両肩のＧＮドライヴの向きを変えて、高い機動性でその場から回避。

福音の横合いに回りこんだ俺は右手のＧＮソード?で福音を切り払い、吹き飛ばす。

「拓神！」

そこで一夏から呼ばれた。

「俺達も参加させてくれよ」

視界に入れた白式の後ろには、黄金の粒子を放つ紅椿。

――――紅椿のワンオフ・アビリティー『絢爛舞踏（けんらんぶとう）』を発動させて、白式にエネルギー供給したのか。

「俺たちもコイツには借りがあるからな」

「ふっ。好きにしろよ」

「でもさ…ぼうっとしてると、何も出来ずに終わるぞ。二人とも」

両手のＧＮソード?をライフルモードに。

手持ちの火器としては標準的なサイズだが、ツインドライヴの高出力のおかげでその威力は大型砲にも匹敵する。

それを福音に向けて撃った。

だが、福音は流石の機動性でそれを回避している。

俺は撃ちながら接近していく。

福音もエネルギー弾を撃ちだしてくるが、俺も全てを回避する。

福音との距離が縮まったところでソードモードに切り替え、スラスターを最大出力に。

瞬時加速（イグニッション・ブースト）以上の加速力で福音に近づき、ＧＮソード?を振るう。

福音はかろうじての回避を続けるが、限界があり装甲に損傷が目立ち始めた。

これ以上は限界と判断したのか福音が後ろに向けて大きく加速、俺との距離を離す。

だが、その福音に近づく白と赤。

「行くぜ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で接近した一夏が、雪片弐型を両手で持ちで横に薙ぐ。

福音はバク宙の要領でそれを避け、エネルギーの翼を一夏に向けた。

――一夏たちの狙い通り。

「箒！」

「任せろ！」

一夏の掛け声に応じて、同時に接近していた箒がその二刀でエネルギー翼を切り落とす。

「逃がすかぁぁぁっ！」

さらに脚部展開装甲を展開し、そこでのブーストを掛けた蹴りが福音に直撃する。

その攻撃で体勢を崩した福音を、一夏が返す刀で右脇から左肩にかけて斬撃を加えた。

福音は最後の抵抗とばかりに残ったエネルギーの羽を全て一夏向けて飛ばす。

そしてその羽と一夏との間に、俺が割り込む。

ＧＮドライヴを再度前方に向けてＧＮフィールドを展開。

「無茶はするものじゃないぜ？」

「悪い」

「気にするな。……でも代わりに見せ場はもらった」

急加速で福音に肉薄し、左のＧＮソード？で左脇から右肩にかけて斬撃。一夏のつけた太刀傷と重ねてＸ字になる。

そしてその交差点に、右のＧＮソード？で突きを入れた。装甲に先端が突き刺さる。

「――もう、暴走は終わりだ」

そう言って、突き刺したＧＮソード?を鍵のようにまわす。

バキンッ！

突き刺した部分から装甲に罅が入り、それは俺や一夏がつけた傷に広がっていく。

『――ア……リ、ガトウ…』

「っ――！？」

そんな声が聞こえた気がした。

直後『銀の福音』の装甲は、量子に変換されて消える。

俺は、ＩＳスーツだけになった福音の搭乗者を抱きかかえた。

そしてつぶやく。

「――ようやく終わった…」

本当にようやくだ。

俺がアンノウン……バグとの交戦を開始してから数えると、もう四時間は過ぎた。

――かなり激動の四時間だった気もするけどな。

まず一対十――合計の数だと十三――で戦って、その後出てきたＧＮフラッグに左腕切り落とされて、かろうじて勝ったと思ったら

福音に撃墜されて、気がついたらヴェーダのある場所に居て、そして帰ってきて、第二形態移行（セカンド・シフト）して……そして今、福音を倒した。

本当に激動だった……

「終わったな」

「ああ、やっと……な」

一夏と箒は肩を並べて空に。

その空にもう蒼は無くて、夕闇のあかね色。それに眼前に広がる世界は包まれていた。

☆おまけ☆

『ダブルオー起動時ＩＦ』

『モード変更、ＧＮ－０００００『ダブルオーガンダム』』

エクシアと同じトリコロールの装甲。
両腰には長剣――ＧＮソード？――が二本、腰の後ろにはビームサーベルの発振器。

一番の特徴は、背のバックパックから伸びるアームに保持される二基のＧＮドライヴ。
そしてそれが実現するツインドライヴシステム。
そのシステムは、粒子生産量を二倍ではなく二の二乗する、既存のガンダムを超えたガンダム。

それがダブルオーガンダム。しかし。

――ＧＮドライヴ同調率、七六％でストップ……ツインドライヴが起動しない！？

「なっ！？　ぐぅっ――！」

ティエリアからの報告の直後、福音のエネルギー弾の直撃を受ける。
今の攻撃は、Ｓ・Ｅと絶対防御で全て相殺出来た。
でももうＳ・Ｅは残っていない。次は装甲を削られる。

「くそったれが！」

手足を動かそうとしても、どこも何も動かない。
その間にも福音は次の発射の準備を始める。

「動いてくれダブルオー！」

ハイパーセンサーに表示される同調率が、七九まで上昇。でもまだ足りない！

「動け、動いてくれ！」

福音が次弾を――――――撃った。
俺に迫る無数のエネルギー弾。

「頼む！　目覚めてくれ！　――トランザム！」

『なッ!?　拓神、トランザムの使用を!?　オーライザー無しでは……！』

悪いけど、オーライザーを展開している時間は無い。
トランザムで同調率を無理やりにでも引き上げる！

「目覚めろ！　ダブルオー！！！」

途端、身体に伝わるかすかな振動。

――ダブルオーが目覚めた！

両肩のＧＮドライヴを前方に。
暴力的なまでの量のＧＮ粒子が、機体前方に吹き荒れる。
それは福音のエネルギー弾を吹き飛ばし、福音本体までも吹き飛ばした。

（以下、本文と同じ戦闘）

ダブルオーの目覚め（後書き）

福音戦終了です。

ダブルオーの描写、しっかり出来てましたかね？
自信あんまり無いです。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『作戦終了』

Ｐ．Ｓ　少し前の千冬さんの台詞に、誰もツッコンでくれなかった…ｏｒｚ

作戦終了（前書き）

どうも、約十日ぶりです。

本当にすみません！
テスト勉強で書いてる時間があまり無くて、投稿できませんでした！

そして点数微妙という……あ、でも社会（歴史）だけは良かったなぁ。

では、本編どうぞ

作戦終了

「作戦終了――と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるからそのつもりでいろ」

砂浜にて、疲れ果てた俺達を仁王立ちで待っていた織斑先生から浴びせられたのは、冷たい一言だった。

そして今、一夏達は織斑先生から説教を食らっている。

俺は免除らしい。というか、織斑先生が『死ぬな。必ず生きて帰って来い。……これは命令だ。達成できれば、お前への懲罰は無しにしてやる』って言ってたし。

というわけで福音の操縦者――アメリカ国家代表『ナターシャ・ファイルス』――を医務室扱いの部屋に預けてから、俺は部屋に戻った。

――で、どうして織斑先生以外から説教受けなきゃならない？

部屋に戻って一休みした後、俺は楯無に通信した。

内容は今回の報告。流石に腕切り落とされたとか生々しいことは

報告しないが、その他のことは全部報告。

結果――楯無から通信越しに説教されてます、と。

『聞いてるの？』

「あ、ああ、聞いてる」

『まったくもう、いくら死なないからって無茶しすぎでしょ？　他の専用機持ちに手伝ってもらえばよかったのに』

「それは織斑先生から提案されたけど…正直、あいつらがバグに勝てると思うか？」

『……絶対に無理、とは思わないけどきつそうよね』

「しかも一夏が撃墜されてそっちに気が向いてたからな。それに…楯無以外は要らない」

『あら、嬉しいこと言ってくれるわね。……でも話は逸れないわよ？　……まあ、最後だけれど。別にいいのよ、無茶しても。でもね、あなたが傷つくと心配する人がいるのは覚えておいて』

「……ああ、了解」

今度から心の中心にでも留めておこう。

『で、“あなた”が広めようとしてる……』

「ちょっと待て。今の“あなた”おかしくなかったか？」

『……何のことかしら？』

ごまかすのか……。明らかに夫婦とかの『あなた』だったよな！？

「……まあ、今のは気にしないから続きを」

『むー、つまんないなぁ。ま、いっか。……あの『操縦支援プログラム』？　ってどう支援するの？』

「なにがいいのかは置いとくぞー。ほら、機体のポテンシャルをうまく生かせてる操縦者って国家代表くらいだろ。……たとえばセシリア、あのＢＴ兵器は偏向射撃で真価を発揮するのに使えてない。とまあ、こんな感じだろ？　さすがにその問題は操縦者任せだから、プログラムは少しくらいしか補助できないけどな。普通のＩＳ学園生徒だと訓練機でも満足には使えない。……ああ、一年な？　けどそのプログラムは、操縦者に合わせて総合性能をできる限り引き上げる」

『でも、機体自体がそこまでするポテンシャルはもう無いわよ？　プログラムの搭載は出来ても、機体がそれを処理できないんじゃ意味が無いんじゃないの？』

「そこで出てくるのが『ヴェーダ』。ヴェーダとリンクさせて外部（ヴェーダ）で情報を処理すれば、その機体自体のポテンシャルには頼らないよ

うにできる。ただ処理し終わった情報に対処するだけだからな。その程度なら第二世代機だろうと問題は無いさ」

『『ヴェーダ』ねぇ……。量子演算処理システムってまだ実用化されてないのよ？　あな――拓神の話を聞いてるとヴェーダは完全に完成してるようね』

また“あなた”って言いかけたな……

「もちろん。でもプログラムには一つだけ欠点があるんだよな」

『？』

「楯無みたいにこれまでの機体でほとんど完璧に機体を扱える奴は、このプログラム使用時との感覚のズレを慣らさないといけないんだよ。まあ、数時間で済むだろうけど」

『なによ、そんなに欠点でも無いじゃない。国家代表レベルなら、少しのズレがあっても問題ないわ』

「へえ、そうなのか。なら大丈夫だな。とりあえずプログラムを転送しようか？」

ちなみにプログラムは俺があの空間に居る間には出来上がってたりする。……ヴェーダパネェ。人がやったら何日掛かるんだよ。

『そうね、お願いするわ。一応こっち（ロシア）の人に見てもらわないと、『ミステリアス・レイディ』には搭載できないから』

「ああ、そういえばＩＳって国家のものだったっけ。第三者が無断

で改造とかは施せないんだったな」

『ええ、だから使えるのかどうか聞いてみるの』

「オーライ、転送する」

――ティエリア、楯無に構築したプログラムデータを転送。

――了解……転送率…三〇…五〇…八〇…一〇〇パーセント、転送完了。

「転送したけど、どうだ？」

『来た来た。ありがとね』

「一応、どういたしまして」

『じゃあ、私はこれ見せてくるから通信切るわよ？』

「わかった。一応それはお前と見せる人だけで秘匿しとけよ？　そのうちにＩＳ委員会に渡すからそのときまでは」

『りょーかい。じゃね☆』

ピッ――――

と、開いていたプライベート・チャンネルの回線が閉じた。

――あ、そういえば。
確か白式と紅椿ってどこにも所属してなかったよな？　……あえて言うなら篠ノ乃束所属？
ふむふむ、プログラムの実践に使えそうだぜい。
まあ、学校に戻ってから提案してみるか。

「……暇になった」

さてどうするか。
楯無との話は終わったし、あのメンバーは説教食らってるだろうし。
――あ、そうだ。第二次移行で『マイスターズ』は機体の数以外に何か変化あったのか？

「ティエリア」

『む？　なんだ？』

「『マイスターズ』、第二次移行（セカンド・シフト）で機体以外に何か変化はあったか？」

『ああ、そうだ。それに関して報告しなければいけないことがあった』

「？」

『『ダブルオーガンダム』並びにその系列機。……まあ、ツインドライヴ搭載型のことだ。この『マイスターズ』に積まれているＧＮ

ドライヴは一基……だったんだがツインドライヴが使えるようになって二基に増えた』

「マジで？　それは……他の機体にもツインドライヴの高出力が流用できる？」

『それは無理らしい。増えた片方は封印されていて、ツインドライヴのときだけ開放されるみたいだ』

「なんだそりゃ」

『まあ、他の機体ではツインドライヴの高出力に耐えられずに損壊する可能性もある』

「ダブルオー限定ねぇ。…ま、ツインドライヴでなくても『ガンダム』は強いから、問題ないだろ」

『まあ、その通りだ』

ふと壁に掛けてある時計を見上げると、説教が始まってから三十分くらい経っていたのでティエリアとの話を切り上げる。

そして部屋から外に出た。

作戦終了（後書き）

なんとなくでＧＮドライヴの数を増やしてしまった……ｏｒｚ

テス勉の反動で頭の中ちょっとあれなようです。

このときにイチャラブシーン書いてたら、たぶん……（苦笑

一応次回で原作三巻は終わる予定です。

もしかしたら二話になるかもですけど。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いします。

次回『星空の光』

星空の光（前書き）

昼間のうちに投稿できました！

一昨日ぶりです。
また一日空いてしまった……

今回の流れをどうしようか悩んでたのと

……メイプルストーリーやってました。
現在５５レベ。職業はエヴァン。キャラネームは『ＫａｎａｍｅＭ』。
もしメイプルやってる方で見かけたら声でも掛けてください。
ワールドは『かりん』です。チャンネルは１１に居ることが多いですね。

では、話がそれましたが、どうぞ

自分の部屋を出て旅館をうろうろ散歩していると、一夏と鉢合わせになった。

……ん？　一夏の様子がおかしい。

まあ、某ポケットなモンスターみたいに進化するわけではなさそうだけども。

てかあれ、こっちの世界にもあったし。タイトルは変わってたけど、内容はまんまっぽかった。

――思考が変なほうに飛んだな。……まあ、直接本人に聞けばいいだろ。

「おい、一夏？」

「あ、拓神か」

「どうかしたか？　なんだか浮かない顔してるけど」

「そ、そうか？」

……やっぱり何かが不自然だにゃー。

「なんかあるなら話せよ。……聞くだけはしてやるから」

「ああ――って、聞くだけ！？」

このツッコミ、これでこそ一夏だ。

「ま、答えられることなら答えてやんよ」

「ああ。ありがとな」

――さて、そろそろ落とすか。

「誰もお前の心配なんかしてないんだよ。お前がそんな感じだと――」

「――俺に面倒が回ってくるかもしれないからな」

これは建前じゃないかって？

んにゃ、本心だぜい？

「結局自分のため！？」

「当たり前だろ。結局な、人は自分が一番なんだよ」

「やっぱりコイツヒデェ！」

いまさらだな。そんなことは今更だぜ？

「で、なに考えてたんだ？」

「……結局聞くんだな」

「当たり前だ。何のために話しかけたと思ってるんだよ」

気にならなかったら、放っておいたさ。

「いや、な。……今回の戦い、俺は――守れたのかって」

「ふぅん。……ま、俺は聞くだけだからな」

「やっぱり答えてくれないのかよ！」

「もちろんだ」

「自信満々で答えられることじゃねぇからな！」

ツッコミはスルーの方向で。

「ただ――お前が守りたかったもの、それは残ってるか？」

「――え？」

「なにを守りたかったのかは聞かない。けど、それは残ってるか？
今、お前の近くに残ってるのか？」

「俺が言うのはそれだけ。後は自分で、な」

なんか、柄にも無いこと言った気がするぜい。
とりあえず、散歩再開するか。

俺は、一夏を残してその場を後にした。

◆

時間は流れて、日は完全に落ちた夜。
夕食も終わり、今日の夜空には天の川が綺麗に流れてる。満面の星空だ。

ザッ、ザッ、ザッ……
ザァン、ザァン……

そんな時間に、俺は砂浜に居た。
今の俺に聞こえるのは自分の足音と、波が打ち寄せる音。それに動物や虫の鳴き声。

「ふぅ……」

ドサッ、と砂浜に腰を下ろす。

「おぉ……」

そしてその場で寝転ぶ。
眼前には、一面の星空。ちょうど真上には天の川が。
俺はつい感嘆の声を漏らした。

「……来て正解、だな」

こうやってると、世界に自分ひとりだけのようで――

「いや、楯無（アイツ）も居ればいいな……俺の隣に」

なんて考えてる俺は、いまさらながら独占欲はかなりのものみたいだ。
自分で考えてて苦笑する。

アイツは、楯無は俺の中で一番の特別。
恋人だからって理由もあるけど、一番は……俺を認めてくれたから。
しかも、俺と同じ時間を歩いてくれるとまで言ってきた。
たまに弄られるのがアレだけど……別に嫌じゃない。むしろやり返すし。

とにかく俺は――――玖蘭拓神という存在は絶対に、何を掛けてでも、どんなことをしてでも、これからずっとアイツを守るって決めた。

だから、さ。

「わがままかもしれないけど――――ずっと見守っててくれよ、父さん。母さん」

七夕だしな。短冊は無いけど、届いてくれるだろ。俺のお願い事。

◆

「――――ん……」

すぅっと意識が浮上する。

目を開けてあたりを見回すと、そこは海岸。真上には夜の空。

「……はぁ、起きたか馬鹿者」

後ろから聞こえた威圧感たっぷりの声に、とっさに振り向く。

「まったく、さっきアイツらに指導して旅館に戻ってみればお前が

居ないとはな。一体なにをしてるんだ？」

どうやら、俺はあの寝転んだまま寝てしまったらしい。

半神のこの体が風邪をひいたりすることはほとんど無いけれど、それでも少し寒いと感じた。

「いやぁ、ちょっと海岸に出てきて、それでそのまま寝ちゃったみたいです。あははは……」

自分でも笑うしか出来ないぞ、この状況。

「はぁ、まあいい。説教の代わりに聞きたいことがあるんでな」

「はい……？」

「玖蘭、お前あのアンノウンのことを知っていたな？」

『知っているか？』じゃなくて『知っていたな？』。まあ、俺があんなことすれば誰でもその関係には気づくだろうけど。

「ええ、まあ。といっても、情報は少ないんですけど」

「やはり、か。……あれはなんだ？　少なくともＩＳでは無い」

「アレには、絶対防御もシールドバリアーもありませんから」

バグは、ＭＳをそのまま人間サイズにしただけのような感じだ。

「では、あれはなんなんだ？」

「俺はバグって呼んでます。世界のバグ……この世界の異常ですよ」

「ではなぜ今まで見つからなかった？　あれほどの存在、見つからないわけが無い」

「さあ？　でも、発見した俺からすれば殲滅対象ですけどね」

原因が俺だなんて言えないし。

「気にしないでいいです。バグはこっちの敵ですから、対処はこっちがします」

「いや、次は専用機持ちにも対処に当たらせる。お前一人では複数方向からの侵攻には対処できん」

「……誰も一人なんて言ってないです、楯無も知ってますし。でももし専用機持ちのメンツを出すなら、一対一だと危ないですよ。それにバグはだんだん強くなってるみたいですし、ＩＳを取り込むとかわけのわからないことまでしますから。その実例が……あの無人機です」

それに人が乗ってないぶん痛みとかで動きが鈍ることは無いし、エネルギーはどこから持ってきてるのかしらないけどかなりあったし。

「……生徒をむやみに危険の前にさらすわけにもいかないが、手段があるなら対抗するしかないだろう。他に留意する点は？」

「たぶん実弾兵器は効果が薄いです。まあ、デュノアのパイルバンカーとかは別ですけど」

他のこともダブルオーの原作通りに見ていいと思う。

ＧＮ粒子は放出してなかったけど、その分装甲表面に何かしらの防御のためのものがあると見ていい。

とりあえず、俺のＧＮ系武装は通用した。

「それでは、現行のＩＳの大多数は実弾兵器が主武装だ。対抗できないぞ」

「だから厄介なんですよ。たぶんあの専用機持ちの中でまともに戦えるのは一夏の『零落白夜』、オルコットのＢＴ兵器と篠ノ乃の展開装甲のレーザーだけ――ああ、そういえば一夏は荷電粒子砲を使えるようになってましたからそれも」

「そうなると最大で二人一組（ツーマンセル）か」

「そうなりますね」

この三人に、他の三人を一人づつ付けてサポートに回らせる。

俺的には一夏とラウラ、セシリアと鈴、箒とシャルロットがいいとは思ってるが……。もしもなら、いっそのこと六人を一つのチームでまとめてもいい。

「他には？」

「もう無いです。それに、少しすればその戦いも楽になりますから」

「それはどういうことだ？」

「織斑先生でも、まだ教えられません。そのうちわかりますから」

「そうか……ふぅ、話が長くなったな。そら、部屋にもどれ。もっとも、時間はほとんど無いがな」

「え？」

空を見上げる。

まだ太陽は出ていなかったが、空は白みがかっていて、朝の訪れを感じさせていた。

◆

「結局寝なかった……」

この体、寝なくても全くといっていいほど問題は無いが……眠いものは眠い。

朝からのＩＳの撤収作業は、午前十時頃には終了。

それぞれが自分のクラスのバスに乗り込み出発準備終了。

……ねみぃ。

――よし寝よう。

一夏がまた何かやらかしてたのと、目を閉じる寸前に見慣れない金髪が視界の隅に写ったが、気にしないことにした。

星空の光（後書き）

オチが微妙だ……

それでもとりあえずこれで原作の三巻は終了です。
４巻……夏休みどうするか悩み中ですね。
全く考えてない～～ｏｒｚ

そんなんなんで、また間が空いちゃうかも。
ついでに少しストックを作っておきたいですし。
でも出来る限りは早く投稿していきたいです。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『夏休み、開幕！』

夏休み、開幕！（前書き）

またもや間が空いてしまった……

夏休みのネタをどうしようかって悩んだり（学校でも）、ＰＣに触る時間が少なかったりで思うように出来なかったんですよね。

結局ストックも作れずじまい……はぁっ。

でもまあ、気を取り直して。どうぞ。

夏休み、開幕！

臨海学校が終了して帰校。

俺が三日ぶりの自室に到着、それに遅れること一時間ちょっと。

楯無もロシアからＩＳ学園に戻ってきた。

……そのときに抱きつかれたのは余談として。

あのヴェーダのプログラム『ＶＢＰ』（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）は、楯無の『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』に搭載された。――というか楯無があっちの技術者に要請して搭載してもらったらしい。

もう慣らし運転も済んでいるようで……。さすが楯無、要領がいい。

それでも搭載するかどうかのときは、少し話し合いがあったらしい。まあ、当たり前って言ったら当たり前だな。国家代表の楯無が持ってきたとはいえ、よくわからないプログラムだし。“自国の”ＩＳに搭載するのにはためらう。

……しっかし、楯無はそれをしっかり論破してきたようだ。

俺も早いうちにＩＳ委員会へ、この『ＶＢＰ』をもって行くしかないな。

すでに知ってるロシアは楯無が口止めしたし。

夏休み中に織斑先生を頼らせてもらうとしよう。

「なあ、楯無」

いつも通り……久々にだけどベッドに並んで座っている楯無に、声を掛ける。

「なに？」

「お前って夏休みはどうするんだ？　帰省するんだろ？」

「ええ、まあね。実家に戻るわよ」

「……じゃ、俺はその間は暇だなぁ」

「なに言ってるの？　あなたも連れていくわ♪」

「――――は？」

◆

楯無の衝撃発言から、時間（とき）は流れて八月。

ＩＳ学園は、普通の高等学校よりも遅れて夏休みに突入した。

そしてなんやかんやで、俺も楯無の実家に。

「……なんでさ」

某正義の味方を目指した人の口癖がでても仕方が無い。

とりあえず、情報を整理しようか。

◆

連れて行く発言から数日後の自室で。

「一応聞くけど、お前の両親ってどんな人？」

「そうね……まずお父さんは要注意」

「どんな風に？」

「親バカって言えばわかるかしら？　更識家を継ぐための修練のときは別として、私達に甘かったわ。結構な頻度でお母さんに制裁されてた記憶があるわね」

「……まあ、制裁（それ）については俺が言うことは無いな。性格とかは？」

「拓神は、簪ちゃんわかるわよね？　私の妹」

「ああ、四組に居るんだろ？」

「そうそう、あの子に似てるわ。なんていうか、ネガティブっていうか……暗いのよ」

バッサリ切ったなぁ……

「あ、でも簪ちゃんほどでは無いわよ？」

また……自分の妹をバッサリ切るなぁ。

「わかった。続けてくれ」

「次、お母さんは……私？」

――え、えっと？

「性格が私そっくり……いえ、私がお母さんに似たのね」

それは……

「拓神の予想通り、その状況をかき回すのが大好きよ。私でも対抗できないくらいに」

「お前の強化版ってところか。……勝てないな」

楯無でも勝てないとか……。

いや、親だから学校でやってるみたいに強く出れないのはわかるけど。

……心を乱されたら負けだな。

◆

――と、こんなやり取りだった。

楯無以上の強敵か……。

まあ、もういまさら帰ることも出来ないので顔を上げる。

目の前には、昔ながらの大きな日本家屋。その門。

そこにある表札――といっても、普通の家みたいな小さいものではなく大きく、字も達筆なもの――には、『更識』の二文字。

なんとなく、こんな感じなのかな～。くらいは考えていたが、予想以上にでかいぞこれは。

「楯無よ、帰ったわ」

楯無がそう門の前で言うと、その門からガコンという恐らく鍵の類が外れる音がして門がゆっくりと開く。

遠隔操作か何からしくその先に人は居なかった。

……外見は古いんだけどなぁ。

その門から母屋にむかって石畳が敷かれていて、この家の雰囲気とマッチしている。

「行くわよ？」

「あ、ああ」

「どうかしたの？」

「ただ単に緊張してるってものあるんだが……、こういうところってなんか使用人とかが出迎えたりするイメージがあったりなかったり……」

そう言った俺に、楯無はケラケラと笑う。

「あはは。ま、うちがどんな家か知ってるでしょ？　対暗部用暗部。秘密は多いのよ」

つまりは、情報漏洩の可能性を減らすために使用人とかの人数は少ないってことか……

「あと、緊張はしなくて良いわよ？　どうせすぐ――――」

楯無の言葉に耳を傾ける俺だったが、それは最後まで聞けなかった。

「あら、お帰りなさい」

俺の右側を歩く楯無の向こう側。この石畳が分かれて続く先に、女性が立っていた。

「あ、お母さん。ただいま」

あれが楯無のお母さんか……

髪の色は楯無と同じ水色。でも、楯無や簪と違ってその髪は腰の辺りまで伸びている。

顔つきはやわらかく、今は微笑みを浮かべていて、雰囲気はおしとやか。そして正直言って美人だ。

「？　そちらの男の子は……」

「前に連絡したときに言ったと思うけど……。改めて、私の恋人」

「ど、どうも」

「まあ、そうだったの」

そう言って俺を見てくる楯無のお母さん。

顔は微笑みを称えたままだが、目がほんの少し、ほとんど気付かないレベルで細まった。

品定めするような――――そんな目。

俺の背筋には何か嫌な予感が走る。

「じゃあ、私もご挨拶を――――」

疾！

何気ない動作で、楯無のお母さんは石畳の地を蹴った――――って、ええ！？

俺の実力でも測るつもりなのか……？

とにもかく、楯無の――――ああ、もう楯無母でいいか。

楯無母は和服にも関わらず、ほんの一瞬で俺との間合いを詰めてくる。

「うぉっ！？」

楯無母は、俺から見て右に一度体を振ってフェイントを掛けると、俺の首に右手を伸ばしてくる。

とっさに左手に持っていた荷物を手放して、俺はその伸ばされた腕の手首を掴んだ。俺に触れる寸前でその手が止まる。

「きゅ、急ですね……」

「あら、止められちゃった」

いやいや、常人には絶対に止められませんでしたよ今の……

「ああ、言い忘れてたわね。お母さんは私の前の『楯無』よ」

その情報遅せぇ！

「……けっこう出来るのね。全力じゃなくても結構真面目だったのに」

「お、お褒めに預かり光栄、ですね」

俺に伸ばされた腕から力が抜けたのを感じると俺もその手を開放し、楯無母もその手を下ろした。

「じゃあ、改めて。……始めまして、私は『更識春香（さらしきはるか）』。よろしくね」

「はい……俺も名前言ってませんでしたね。俺は『玖蘭拓神』です」

「ええ、よろしく」

今度はたぶん握手として差し伸べられた手、その手を恐る恐る握り返す。けれど何もなく普通の握手だった。

「ふふ、なにかあるって考えてたわね？」

ぎゃあ、ばれてる。

「実力ならさっきの一手でわかるわ。……あなたは強い」

「あはは……ありがとうございます」

すっと離れる手。

……春香さん、まだあそこまでできるのにどうして『楯無』の名前を譲ったんだ？

これも春香さんにまた読み取られたようで、春香さんに柔和な笑みを向けられた。

「うふふ……、まあ、まずは家のほうにどうぞ」

「あ、は、はい」

言われたとおり、ついていこうとしたら――

――グシッ！

「っ――――！？」

わ、脇腹に鈍い感覚がぁっ！？

「わ・た・し　のこと、忘れてないわよね？」

や、やっぱり楯無か……

「あら、お母さんに嫉妬しちゃった？」

「ち、違……」

「ふふっ、強がらなくていいのよ？」

「うぅぅ……」

なんと！　あの楯無が速攻でやられるとは……春香さん恐るべし。

というか、意地張ってる楯無も可愛いな……」

「もぅ……声、出てる」

「あ……」

少し赤くなった楯無が、恥ずかしそうにしてこっちを見てる。

「あらあら、お熱いわねぇ」

こんな春香さん中心の流れで歩いていると、更識家の玄関に到着した。

夏休み、開幕！（後書き）

オリキャラ登場！
あと一人出ます～
わかりきってはいますが、楯無父ですね。

この後の展開は自分にもわからない！（オイ

では、感想・アドバイス等お願いします。

次回『夏休み　ｉｎ　更識家』

夏休み　ｉｎ　更識家（前書き）

やっと書き上げた～！

ＰＳＰのアーマードコア３ＳＬやってたら、全く進まなかったんですよね（オイ

そしてこれ投稿した後は、メイプルにＧＯです。

では、どうぞ。

夏休み　ｉｎ　更識家

楯無の家の玄関に入った俺は、遥さんに促されて家の中に中に上がった。

同時に見つけたこの二人とは違う人影。

あれは……

「あ、お父さん。ただいま」

「ああ、お帰り。体の調子は大丈夫だったか？」

へえ、あれが楯無のお父さんか……早速調子聞くとか……

とりあえず容姿はダンディという言葉が当てはまる。目と髪の色は黒…だけど髪は少し薄い黒。服装は春香さんと同じく和服だ。

「うん、大丈夫」

「そうか――ところで、そこの男は誰だ？」

ちょっ！？　目が怖い！　狩人の目だよ！

「ほら、あなた。この前連絡が来たときに言われたじゃない、その子の彼氏」

「ほう、そうか……なら――」

「……あなた？　余計なことはしませんよね？」

「（ビクゥッ！？）も、もちろんだよ」

なにがあったんだ！？

そういえば親馬鹿だって言ってたな、そしてよく制裁されているとも……女尊男碑関係なく尻に敷かれてる感じみたいだなぁ。

「あー、始めまして。僕は『更識秋哉（さらしきしゅうや）』その二人のどちらかに聞いたことから予想できると思うけれど、もともとは更識の人間じゃないよ」

「あ、はい、始めまして。俺は『玖蘭拓神』って言います。……知ってるとは思いますけど、二人目の男子ＩＳ操縦者です」

「ああ、知っているよ。よろしくな」

「ええ」

手を差し伸べられたので、それを取り握手。

そして小さな声で秋哉さんが口を開いた。

「……君が娘にふさわしいかどうか、見極めさせてもらうよ」

少しだけ警戒した俺から、すぐに秋哉さんが離れた。

友好的な笑みを浮かべているけど――額に汗がにじんでる。

そして俺の後ろ――正確には春香さん――から放たれるプレッシャー。……秋哉さん、予想できてましたよね？　でもって俺を

壁にしないで。

「あなた？　あとでちょっとお話、しましょうね♪」

「あ、あぁ……」

あ、汗の量が増えた。

と言うかこれは『お話』ではなく『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ』フラグ……ご愁傷様です。

……んでさ、一つどうしても気になることがあるんだよね。

――どうしてあなた達はそんなに外見が若いんだ!?　某魔王の両親並みなんですけど!?　本当に高校生二人の親ですか!?　ｅｔｃ

そんなことを心の中で葛藤していると、

「拓神」

「――あっと、なんだ？」

楯無から呼ばれた。

「ほら、お父さんとお母さんも。立ち話もなんでしょ、居間に行きましょ？」

「ええ、そうね」

「そうするか」

「じゃあ……」

と言うことで、居間に移動。

そこで改めて挨拶したあと、なぜかお茶会に突入した。

……まあ、俺も満喫しているが。

「（んぐんぐ）……あ、このお茶菓子美味しいですね」

「それ、私が作ったのよ。お口に合ってよかった」

「へえ、春香さんもお料理上手なんですね」

「ありがとう。……あ、お義母（かあ）さんって呼んでもいいのよ？」

「ブッ！　きゅ、急ですね……」

つい噴出しそうになった俺は悪くない。

「ちょっと待つんだ。僕はまだ認めては――」

ズカッ！

「ぐふっ……！？」

「あらあらこの人ったら、どうかしたのかしら？」

何したんだろうね、春香さん。見えなかったし見ても無いからな……

「ねぇ、拓神。そう呼んじゃえば？」

「お前もかよ……」

「嫌なの？」

「嫌じゃないけど……まだ早いだろ」

「いいじゃん。お父さんはお母さんに任せておけばいいし」

「なんだそれ……」

楯無とお互いの顔を見合わせて、クスッと笑う。

◇

「ちょっと待つんだ。僕はまだ認めては――」

ズガッ！

「ぐふっ……！？」

拓神のほうからは見えない位置で、春香の拳が秋哉の脇腹に入った。

秋哉はやられた場所を押さえて呻く。

「あらあらこの人ったら、どうかしたのかしら？」

春香のわざとらしい言い方にも何もいえない秋哉。

実際、先ほど拓神が予想したように秋哉は春香の尻に敷かれている。ちなみのこれは世界の風潮が女尊男碑で無くとも変わらない…だろう。

「ぐっ、おまえな、いまのは効いた……っ」

「うふふ、あなたが余計なこと言うからよ？」

「ま、まだふさわしい、って認めたわけじゃないぞ」

「いいじゃない、認めてあげても。私は認めたわ」

「お、お前が認めても僕は…」

「さっき、庭で不意打ち止められちゃったし。私の不意打ち止められるなら、たいしたものじゃない」

「なっ……本当か？」

まだ腹部の痛みに苦しみながらも、秋哉は目を少し見開く。

春香は体術などの強さは秋哉以上……といっても、幼い頃から更識家の修練を受けた春香に秋哉が勝てというほうが難しいが。
そして春香が本気でないでとしても、そこまで手を抜くタイプでは無いことを秋哉は知っていた。

「それにね……」

「それに？」

少し痛みが引いてきた秋哉は、視線を春香が向いているほうに向ける。
そこにはお互いに笑顔の楯無と拓神。

「私は、あの仲を裂きたくないもの」

「……」

秋哉はばつが悪そうに顔をそむける。

「……僕も、それは出来そうにない」

「じゃあ、認めてあげて。恋人になってるんだから『楯無』の事情（わけ）を知らないわけじゃないでしょうしね」

「……わかったよ、僕の負けだ。……いつも春香には敵わない」

「ふふっ、まあ、敵うようにがんばりなさいな♪」

春香は想い人にだけ向ける笑顔を、秋哉に向けた。

◇

あの後、更識家に着いたのは午後一番だったのだが、いつの間にか時は流れて夕方に。

夕食を頂いた後、なし崩し的にここに泊まることになった。

……楯無が着替えとかは持ってた。というか、最初から泊まらせるつもりだったなコイツは。

風呂も使わせてもらって、楯無が俺のジャージを持ってきていたが、浴衣を準備してくれていたのでそれを着た。

そして俺にあてがわれた部屋……さっきまでいた本邸の隣にある別邸の一室に行く。

「ここ……だな」

本邸と繋がった通路の突き当たり。その右側……は、ここであってる。

襖を開いて中に入ると、布団が敷いてあった。他にあるものは時計とテレビ、棚の上に花が生けてある。

一人で暇な俺は荷物（楯無が持ってきていた俺のもの）を置いて、テレビをつけた。

「今日って何か面白い番組やってたっけな～」

ニュース、次、教育系、次、バラエティ、次、某青い猫型ロボッ

ト、次、ゴチ。今日の最下位誰だろ……あ、や〇っちだ。次、某…
何角形だっけ……のクイズ番組。…ぷっ、いや、それは無いだろｗ
ｗ

「あら、楽しそうね」

「ん？」

俺が入ってきた入り口から聞こえた声に反応する。
いるのは案の定、楯無。

「やっほ、来ちゃった☆」

そう言いながら、俺の隣に座る。
うっ、くそ、楯無から良い匂いがする……しかも妙に色っぽいし。
浴衣か、浴衣がいけないのか？　しかも風呂上りで少し顔赤いし、
髪の毛湿ってるし。
よ、よし。テレビで気を紛らわすしかない。

楯無から視線を外してテレビのほうに。

ピ――――プツンッ。

ってあれ？

突然テレビが消える。手元に置いてあったリモコンは……無い。

「探し物はこれ？」

楯無のほうを向くと、意地悪な笑顔でリモコンを手にしていた。

「な、何で消すんだよ」

「えー、だって、せっかく来たのに相手してくれないんだもん」

……仕方ないだろ。今のお前を相手してて変な展開になれば、たぶん理性が持たないんだから。

てか、だもん。じゃないだろ、だもん。じゃ。いや、可愛かったけど。

「ああ、そうだ――お父さんとお母さん、両方とも拓神のことを私の許婚として認めてくれたのよ」

「そうなのか？　秋哉さんはいろいろ言ってたのに」

「お母さんに説得されたみたいよ？」

「そうなんだ……」

☆Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆……じゃないよな？

……そして楯無の目が怖いのは気のせいだと信じたい。

夏休み　ｉｎ　更識家（後書き）

楯無父『更識秋哉』登場！

……うーん、そこまで親馬鹿ではなくなっちゃいましたね。そういうのを期待していた方、スミマセン。

そして楯無と拓神の婚約が決定！

次話はイチャラブさせるぞ～。イチャエロでもいいかも。

夏休み中に二回はイチャラブ入れたいですな。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『夏休み　ｉｎ　更識家　２』

夏休み　ｉｎ　更識家　２（前書き）

午前中から何書いてるんだ俺は……

スーパーエロエロチック……だと自分では思ってます。

準備はＯＫ？

では、どうぞ

なんだか、嬉しいけど嫌な予感っつー、よくわかんない感覚に襲われてるんですけど……？

「あ、お母さんから伝言があったっけ」

「春香さんから？」

「えーっと、『そっちの別邸からこっちの本邸には音とかは聞こえてこないから、何してても大丈夫よ～☆』だって」

「うぉぉぃ！　あの人は何を期待してるんだ！？」

それは、つまりあれだよな。ナニしてても問題ない、と。

……理性の崩壊に余計拍車が掛かったよ！

「そういうことで、私も最近拓神とご無沙汰だし……」

「俺達ってそういうことまだ一回もやってないからな？」

「まあ、細かいことは気にしちゃ駄目よ★」

細かくないからな！――と心の中でツッコミ。

というか心の中でしか出来なかった。

理由は簡単。俺に覆いかぶさるようになった楯無に唇を奪われたから。

「んっ……、ふふっ」

一度離れ、楯無は今のキスの感触を確かめるようにその綺麗な指を唇に当てた。

そしていつもの天真爛漫な笑みではない、色っぽい笑みを浮かべた楯無ともう一度、今度は深く唇を重ねた。

「……んぅ…っ……ぁぅ……ん……んぁ……」

ちゅぽっと互いの舌と唇が離れて、その間に細い銀の水糸ができる。

つぅっと伸びているそれは、楯無が舐め取ることで消えた。

「ほら、拓神も積極的になっちゃいなさい？　“私はあなたのもの”なんだから」

ま、あなたも私のものだけど。と楯無は付け足す。

「……ヤっていいってことか？」

「いまさらじゃない。そしてね、女の子にも性欲はあるのよ？　男の子より潜んでいるけど」

全くコイツは……言葉でも理性を削ってくるなんて。

俺は、本能に従って動き出した。

体勢はそのままで、楯無と唇を重ねる。

「んんっ…んふっ…あ…ふぁっ…んぅっ…んく……」

さっきより激しく舌が絡みあって、くちゅくちゅと水音を立てる。

それでも、今の俺はそれを全く気にできない。

その他の相乗効果もプラスされて、俺の理性は崩壊寸前。目の前の女をどうしようもなく求めてしまう。

「ぷは……、でもな……」

「ふぇ……？」

「ほとんど毎回、楯無の思うとおりに動いてる気がしてるんだよな」

「（びくっ）」

真面目に襲いかけたあの時だって、楯無に乗せられてた気がするし。

いまだって……なぁ。

本当に襲ってもいいんだけど……、コイツの掌に乗ってるようでつまらない。

「そ、そうかな……？」

「さあ？　どうなのか知ってるのはお前だけだし」

「「……」」

沈黙の後、楯無が「よしっ」と声をだした。

「確かにそうね。でも拓神はもう乗ってくれないらしいし、なら……」

「なら？」

「もう待つんじゃなくて、自分から行けばいいわよね……ふふっ」

「な――――」

ちょっと予想外な展開。

そして言うが早いか、楯無は自分の浴衣の帯を解いて、また俺の唇を奪った。

「ん……、安心していいわよ。私、今下着つけてないから」

何が安心!?　俺の理性は危険なんだけど!?

……確かにつけてないな。ブラの前の布とか見えないし。

下の方？　……見たら（理性の）負けだ。

楯無は身体を密着させてきて、俺が視線を下げると楯無と俺の間に挟まれて窮屈そうな胸が。

足も絡められて、俺の足には太ももの柔らかい感触。

「それじゃぁ、いただきます♪」

俺に顔を寄せてきて、ぺろっと首筋を舐め上げられる。

「っ――――な、なにを」

「言ったでしょ？　いただきますって」

それだけ答えると、今度は耳たぶを甘噛みされる。

「っ――――ぁ――――」

「ふふふっ、さていつになったら拓神の理性は崩壊しちゃうのかな？」

その状態のまま楯無の手が俺の腰あたりに伸びたと思うと、俺の浴衣の帯は簡単に外された。

それで俺の胸元を開き、自分の胸を押し付けてくる。楯無の浴衣はかなりはだけて、すでに隠すと言う役目はほとんど失っている。

胸から伝わってくる感触は、いつもの布越しで感じる柔らかいだけじゃなくて、二点の少し違う感触も付加されていた。

さらに楯無はその状態で胸をこすりつけてくる。

「んっ……あんっ……んぁっ……ふぁ……」

色っぽい嬌声を耳元でささやかれ、その息が耳にかかってぞくぞくっとした感覚を与えられる。

「っ…くぅ……」

「あはっ、気持ちいい？」

そして楯無の片手は、楯無の後ろにある俺の急所に。

「わぁ、こっちは正直みたいね？」

「ぅあっ……！　おま、本当に処女（ハジメテ）なのか…？」

柔らかい手で触れられて、快楽が脳天まで突き抜ける。

「もちろん。ただ知識があるだけよ♪」

どこから仕入れてきたんだよ……。

「んっ…。拓神以外は付き合いたい相手って、出来なかったし。…好意を向けられたことはあるけど」

「そうかよ……っ！　……そりゃ、光栄だな」

引き金を引くのを堪え、もう完全には理性で押さえつけられなくなった本能で楯無の胸に左手を伸ばした。

「ふぁ…っんん……！　ん、気分が…っ…乗ってきた？　ひゃぅっ……！」

「お互い……っ、だろ？」

右手も理性の楔が抜けて、楯無の頭を引き寄せて唇を重ねる。

「うん……。んっ、ひぅ…ぅぁ…あっ…ぁむ……」

いつものキスには無い嬌声混じりの声を聞いて、どうしようもない欲望に駆られる。

このまま最後まで抱きたい。全てを貪りたい。コイツの何もかもを俺のものにしたい。コイツを俺に染め上げたい。……とにかく、コイツを俺のものに。

ぬちゃっと粘り気のある感覚が、下腹部に。そして今そこにあるのは楯無の……

楯無の頭に回していた手を離し、そっちを触れる。

「！！　ひゃぁっ……！　んっ、あっ、ああっ……！」

触れた瞬間、ぬちゃりという感覚に加えて楯無の喘ぎ声がいっそう大きいものになった。

それで多少気分が良くなった俺は、弄りを続ける。

「ひぅんっ…！！　ああぁっ！　す、ストップ…ぅ！　だ、ダメっ！」

「なに言ってるんだよ、何度も誘ってきたのはそっちだろ？」

心がSの気で埋め尽くされ、俺は快楽を覚える。

「だ、だってっ！　自分でするの、とっ……！　全然っ、違っ……！！」

「自分でシてたのか……。で、どんな風に違う？」

意地悪気味に言う。もちろん手は止めない。

「あっ、んはぁっ！　き、気持ち、良すぎてっ……！　頭のなか、狂っちゃいそぉ……！」

本当に何も考えられないのか、素直に質問に対する答えが返ってきた。

「へぇ、じゃあ……イっちまうといい」

「ひゃう！　あふぅっ！　ひゃあぁっ！　んんっ！！　も、無理っ――ふぁあああぁっ！！」

弄る手を強くする。

と、俺の上で楯無の体が二、三回、ビクビクっと痙攣した後、俺にしなだれかかってきた。

「楯無……？」

「んっ…あっ……はぁ、はぁ、はぁ……」

息がかなり乱れて、その吐息は熱い。

「はぁ、はぁ……ぅぅ」

ガクッ、と楯無の体から力が完全に抜けた。

気絶してる……。激しすぎたのか……？
俺のほうは……萎えてるし。

とりあえず神力を使って楯無の汗やらを払拭。そしてぐちゃぬちゃになった俺の右手とかも。
楯無の浴衣を直して帯を付け直してやる。楯無のことが終わったら自分も直して、散らかった布団とかを元通りに。
楯無を布団の左側にちゃんと寝かせて、俺もその布団の右側に入る。

時計はもう、夜の十一時過ぎを示していた。

ふぅ。明日、楯無になんて言われるのか……

夏休み　ｉｎ　更識家　２（後書き）

……引っかからないよね？
まだＲ１５で大丈夫だよね！？

……こういうの描写したの初めてかも。
漆黒のほうはここまで書いてないし。

……うわぁ、自分で書いててドキドキしましたよ。
内容と、引っかからないか（ガクガクブルブル）の二点で（笑

まあ、トランザムしてもらえたでしょうか？

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『夏休み　ｉｎ　更識家　３』

夏休み　ｉｎ　更識家　３（前書き）

ヒャッホォォォォイ！　久々にネットが出来る！！

……テンションヒャッハァ中です！（意味不

というか、週末更新になってきてますね……

そして前回のやりすぎた感をいまだに引きずっている！（笑

では、どうぞ。

寝ようと思ったけど……まあ、あんなことをした後で寝れるはずも無く、気を失っただけの楯無が起きるのを待つことにした。

……うわぁ、暇だ。

叩き起こすのは悪いしなぁ。

だからって何もしないでいると、さっきのを思い出して……そういう気分になるし。さっきは萎えたけども……

……とにかく、早く起きてくれ楯無。

十数分後

「…んっ……ぅん……？」

「気がついたか？」

うっすらと目を開いた楯無に、俺は声を掛けた。

「あ、あれ？　私……」

「なんであんなところで気ぃ失うんだよ。ったく、こっちはお預けだぞ…」

事の顛末を思い出したらしい楯無の顔が、真っ赤に染まる。

しかしそれと同時にさっきの快楽も思い出したのか、目も熱っぽく変わった。

「……じゃあ、続き、シたい？」

「……シたいけど、今はしない」

「どうして？　欲望に忠実になっていいのよ？」

さっき意識取り戻したのに、もういつも通りに戻ったのか楯無に迫られる。

「一回冷めたから、気分が乗らない」

とか言いつつも理性が急速に失われて、さっきの欲望が戻ってきた。

抑えろ、抑えるんだ俺。

「むぅ、いけず。私はもっと気持ちよくなりたいのに……」

「欲望に忠実なのはお前だろ……」

「とにかく、今日は終わり。…お前は自分の部屋にもどるのか？」

「戻らないわよ。拓神と一緒に寝るから」

……出来たら戻って欲しかったなぁ。

一人は寂しいけど、朝から理性削られたくないんだよ……

「ヤっても無いのに、春香さんにからかわれるぞ？」

「だから、続きをしましょう？　どうせからかわれるなら、そう思わない？」

「確かにそうなんだけど……」

今回ヤらずになにか言われて、次本当にヤった時にもなにか言われるならそうなんだけどさ……

「じゃ、決定ね？」

「でも、今日は本当に気分的に乗らないから止めよう。その代わり――」

「その代わり？」

「――夏休み中には、お前の処女（ハジメテ）をもらう」

俺もヤりたいって気持ちはあるんだ。

時と場合と状況は選ぶけどな。

「……ん、わかったわ。じゃあ、約束」

一瞬不服そうな顔をした楯無だったけれど、提案を返してきた。

「ゆびきりか？」

「違うわ、キス。契約のキスよ」

「契約って……。まぁ、わかった」

俺が了解すると、楯無は目を閉じて少し唇を突き出す。
それに応える俺は、唇を重ねた。
さっきしていたような激しいキスじゃなくて、優しい、確かめるようなキス。

……それをどのくらいしていたのかはわからなかったけれど、見計らってお互いに離れる。

「契約成立、よ♪」

「ああ、わかったよ」

というか、俺がいつまで衝動に耐えられるかなんだよなぁ。

「じゃあ、もう寝ましょうか」

「そうだな……」

だから、寝れそうに無いんだけどね。

「おやすみなさい、拓神」

「おやすみ、■■」

その夜、結局俺が寝付けたのは、夜中の三時過ぎだったと言っておく。

◆

日は明けて？　……とにかく、俺が楯無の家に来て最初で最後の夜は明けた。

眠気に後ろ髪を引かれながらも上半身を起こそうとして――止まる。

そして左腕に感じる俺のものではない重み。それを視界に入れて、不意に口元がほころんだ。

その重みの正体――――楯無は俺の左腕を抱くようにして寝ていた。
動かせる右手で眠気眼をこすって、意識を多少まともに。
そして時計に目を向けた。
「……まだ六時にもなってないのか」
寝てたのは二時間くらいか。
……とりあえずはこれだけでも寝れたからよしとしよう。
それから俺は楯無の方を向いた。起こすつもりは毛頭無い。
そっと右手を伸ばして、その頭に触れる。
寝ている間に乱れた髪を直してから、さらさらの髪を梳くようにしてそっと楯無の頭を撫でた。
「……んっ……すぅ…」
一瞬反応されただけなので、俺は楯無の頭を撫で続ける。
これの結論――――――――癒されるなぁ……。
起きてるときにやると顔を少し赤くしたりで可愛いけど、寝てるときもなんかいい。
不意に、カチッと時計の針が少し大きく音を立てたように聞こえた。
確認すると、短い針は六時を指している。
「ん……っ……ふぁぁ……」

うっすらと目を開いて、楯無が起きた。
見計らって手を離す。

「おはよ、楯無」

「ぅん……おはよぅ……」

まだ眠そうな楯無は、頭を左右にふるふると振って意識を覚醒させる。

「ん――――っ！　……ふぅ」

さらに両手を頭の上で組んで伸びをすると、息を一つ吐いた。

「改めて……。おはよう、拓神」

「ああ、おはよう」

ちゅっ、と一瞬のキスをされる。
……まったくもっていつも唐突だ。

「おはようのキスよ♪」

「…じゃ、お返しだ。……ん」

「んっ……ぅん…。…ふふっ」

今度は俺から、もう一度キスをして離れる。

「さて……って、俺この家のことほとんど知らないんだっけ」
「どこに行きたいの？」
あまりしすぎると行為に発展しそうなので、話を切り替える。
「寝起きだから、顔洗いたいんだよ……」
「りょーかい。というか、この部屋を出て目の前よ？」
「そうなのか？」
昨日はこの部屋に入るだけで周り見てなかったしな……
言われたとおり、入ってきたところから出て目の前の扉を開くと、目の前に洗面台があった。
ばしゃっ――
水を少し勢い強めで顔に浴びせる。
いまさらな気もするが、突然キスとか恥ずかしいものは恥ずかしいんだ。
その火照りを収めるために、いつもより回数多めで水を被る。
「――ふぅ……」
なぜか思い出した夜の約束……というか契約？

『――夏休み中には、お前の処女（ハジメテ）をもらう』

……我ながら大胆というか、少し軽率な気もしないでもない。

まあ、アイツも望んだことだし、何でこんな事言ったのかは理性が削られてたからということにしておく。

「……戻るか」

すぐ横に掛けてあったタオルを借りて水を拭い取って、それから部屋に戻った。

◆

バシッ！

ふすまを開けた俺は、すぐさま閉じた。

理由？

――まあ、楯無が着替えてた。

ニアミスしちまったなぁ。

しかもまだ寝間着代わりの浴衣を脱いだところだったから……つまり、下着もなにも身に着けてなかったわけで。

……完全に裸っていうのは始めて見た。昨日のアレでも浴衣は脱げてはなかったし。

改めて見ても出るところは出てて、締まっているところは締まっていて、スタイル抜群……煩悩退散、煩悩退散っと。

少しして、楯無から声が掛けられる。

「あ、もう大丈夫よ？」

「おう……わかった」

改めて部屋に入る。

楯無は動きやすそうなラフな格好に着替えていた。

あまり知らないから詳しく言えないけど、簡単に言うと上は夏らしく白を基調とした半袖。下はハーフのジーパン、といった感じ。

「この服、どう？」

感想を求められたから、素直に思ったことを口にする。

「いいと思うぞ。楯無らしい服装だしな」

「そう、ありがとう」

向けられた笑顔に妙な気恥ずかしさを感じて、つい顔を背けてしまった。

「ああ、さっきお母さんが朝食が出来たからって呼びに来たわ」
「だから着替えてたのか……」
「まあね。じゃ、拓神も早く着替えて」
おう、と答えて、楯無を部屋から出してから私服に着替えた。
俺の服装は白と緑中心の半袖と、下は生地が薄めのジーパン。半ズボンは好きじゃないんだよ。

◆

時間は飛んで朝食後。
朝食は春香さんが作ったもので、とにかく美味しかった。美味しかったとしか表現できないくらい美味しかった。
料理とかは使用人の人がやってるのかな～と思っていたけど、春香さんがやっていた。理由は『私がやりたいから』だそうだ。そういうのを有言実行するあたり、楯無の母親って感じはする。
ピピピピピピッ――――
「？」

部屋に戻った俺の携帯端末が、メールの着信を示す音を立てた。
差出人のところには『ＩＳ学園』。
この学園のアドレスは学園が生徒に対して連絡を行う場合に使われるものだ。
内容は……っと。

『山田です。
――とにかくすみませんっ！
実は玖蘭君のＩＳについて書類のほうで問題がありまして……
本来なら夏休みに入る前に言っておかなければいけなかったんですけど、見落としてまして……
とにかく、一度ＩＳ学園に戻ってきてください。至急でお願いしますっ！』

山田先生ェ……
まあ、なにか言っても仕方ない、か。
……楯無誘ってデートにでも行こうかと思ってたけど、今日は無理そうだ。
ＩＳ関係の書類って無駄に量が多いんだよなぁ……。

夏休み　ｉｎ　更識家　３（後書き）

自分で書いておいてあれですが……

……朝っぱらからなにイチャイチャしてんだよぉぉぉ！

そして先に言っておくべきでしたが、またも間が開いてスイマセンｍ（＿＿）ｍ

結構前にネットが出来るのは金・土・日の三日間ということを言っておきつつも、その後少しの間は今までどおりにやってましたからね。

このことは皆さんに忘れられているでしょう。

あ、あとアーマードコアＳＬもエンディングまで行きました。水曜日に。……ネットが出来ないのって勉強のためなのにゲームやってる俺、駄目人間だなぁ。

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『久しぶりの学園』

久しぶりの学園（前書き）

おとといぶりです。昨日投稿できなくてすみません。

……メイプルやってました。現在６６レベ。
５月２０日に始めてこれですよ（笑

では、どうぞ

久しぶりの学園

山田先生からのメールを確認した俺は、楯無を探していた。
さっき部屋に戻るときは一人だったから。

……まだあそこにいるのか？

足を進める先は朝食をとった居間。
ふすまを開くと、お茶を飲んでいる楯無と春香さんの姿。

「あ、拓神君。どうかしたの？」

まず俺に反応したのは春香さん。

「学園から呼び出されたんで、楯無に報告しに」

「呼び出しってどうしたの？　単位落としたわけじゃないわよね？」

俺の言ったことに楯無も反応して返してくる。
そして失礼な。単位落とすようなまねは、一夏じゃあるまいしししない。

「書類だと。俺のＩＳはいろいろ特殊だからな、篠ノ乃の『紅椿』と同じで登録国家が無いんだよ」

登録国家が無い。

それはつまり、俺を引き込むことが出来れば『マイスターズ』もその国家のものになるということ。

……まぁ、『マイスターズ』は国家じゃなくて俺のものって言い張るけどな。

「山田先生から連絡（メール）が来て、至急学園に来てくれだとさ」

「あ、じゃあ私も着いてくわ。生徒会の仕事もしないといけないし」

「あー、あれか？　“学園祭”。一般公開するわけでもないのに、華やかにやるしな」

なんか生徒会室に書類が来てた気がする。

「ええ。いまは虚ちゃんと、本音ちゃん……に任せてあるけど、会長がやるのもあるから」

ああ、あの更識家従者の二人は学園に残ってたのか。どうりでこの屋敷に居ないわけだ。

あとのほほんさんは戦力にカウントできないから仕方ない。

「そういうことなら行ってらっしゃい。でもそうなると、もう夏休み中は戻ってこないんでしょう？」

「あ、そうなっちゃうかな……」

「たまにしか戻ってこないのは寂しいけど、あなたのやることはしっかりやりなさい？」

「うん」

この会話にちょっと引け目を感じた俺は、気まずそうに口を開く。

「悪い。なんか俺のせいでここにいるのが短くなっちゃったみたいで……」

「いいのよ。どちらにせよ、今日中には学園に戻る予定だったんだから」

気を使ってくれた楯無に感謝しながら、俺は楯無と一緒に学園に戻る準備を始めることにした。

◆

……まあ、準備といっても丸一日居なかったわけで。

俺はバッグの中から引っ張り出した私物と、昨日着ていた服をバッグに戻して終了。

この間十分以内。

そんな簡単に準備を終えた俺は、先に玄関から出て楯無を待つことに。

約十分後

「お待たせ」

朝の格好にカバンを持った楯無が玄関から出てきた。
その後ろには秋哉さんと春香さんの姿も。

「一日も無かったですけど、お世話になりました」

その二人を確認した俺は、お礼を言って頭を下げた。

「これからもお付き合いしていくことになるでしょうし、そんなにかしこまらなくてもいいわよ？」

そこで秋哉さんが、言いずらそうに口を開いた。

「その、な。……気は進まなかったんだが、拓神君のことを少しは調べさせてもらったよ。僕達は君の素性を知らなかったから」

そういえば、昨日はそういう話はしてなかった気がする。
ってか、もう調べ終わったのか……さすが更識。
それにまあ、娘の婚約相手のことを知らないってのもアレか。
この状況で何を言われるのかは――

「ご両親を、亡くしてるんだったね」

「ええ、まあ」

――わかっていたつもりだったけど。

少しの沈黙。

母さんはその通りだが、父さんは上の世界に帰っただけだから、俺の心のダメージは少ないのがまだ救いだ。

「……僕達でよければ、君の両親の代わりになれればいいと思ってるよ」

俺がそう言った秋哉さんから春香さんに視線の先を変えると、春香さんは微笑みながらうなづいた。

「ありがとうございます。……俺はそう言ってもらえるだけでうれしいです」

家族の暖かさ……。そういうのは、久しぶりに感じた気がする。

◆

あれから数十分後。

俺と楯無は学園に戻ってきていた。

俺は職員室に。楯無は生徒会室に向かう。

「（コンコンッ）山田先生、玖蘭です」

職員室のドアをノックして中に入りながら来た事を告げると、山田先生がパタパタと早足で近づいてきた。

「よかったです～。来てくれましたか」

「先生からの呼び出しを断る生徒は居ないと思うんですけど」

「そっ、そうですよね。とにかく、こっちに来てください！」

山田先生に手を取られ、職員室の山田先生の机まで案内される。机の上には終わらせたらしい書類と終わってないらしい書類が、二つの山になって置いてあった。

……なんて量だにゃー。

「その、これなんですけど……」

山田先生が指差すのは、机の中心に置いてある4、5枚の書類の束。

……と、そのまえに。

「山田先生、そろそろ手を離してください」

まだ山田先生の手は俺の手を掴んだままだった。

それを指摘すると、さっと手を離して頭を下げてくる。

「あっ、ご、ごめんなさい！　嫌でしたよね、すみませんっ！」

……入学してからの数ヶ月で、山田先生のこの自爆には慣れた気がする。

ちなみに職員室のほかの先生方は、全く気にせずに自分の仕事を続けている。

……慣れてるんだろうな。

「謝るのはいいですから。これは何の書類なんですか？」

「えっ、は、はいっ。これはですね、ＩＳの登録に関する書類なんですけど……」

「記入漏れ？」

この類の書類は、入学してすぐに書かされた覚えがあるぜい。

「そうなんですよ……」

山田先生が指摘するところは、登録国家、製作者（または製作国家）、その他詳細の一部。その三箇所。

「えっと、登録国家は無いから仕方ないとして、製作者……」

神なんて書いたら、楯無以外には頭のイカれたアホだとしか思われないし……。あ、そうだ。

「あの山田先生」

「は、はいっ。どこかわからないところでもありましたか？」

「いや、そうじゃなくてこの書類ってどこに提出するものなんですか？」

「この書類は……国際ＩＳ委員会ですね」

……よし、好都合。

「文章じゃ伝わりにくいこともありますし、それに俺もＩＳ委員会には用事があるんで、直接委員会の本部に俺が行く方法ってありますか？」

「えっ？！　それは玖蘭君が委員会の本部に行くって事ですか？」

「ええ、その通りです」

俺がそう言うと、山田先生は考案になって何かを考え始めた。

「そう……ですね……」

「織斑先生に頼むのは駄目なんですか？」

俺の提案に、山田先生は顔を上げる。

「それは、織斑先生に聞いてみないとわかりません……」

「織斑先生はまだ学園の中に？」

「あ、はい。そろそろ戻ってくるかと」

「じゃあ、一応織斑先生に聞いてみるって事でいいですか？」

「はい、わかりました。でも書類に記入することは記入してくださいね」

そういうことで、織斑戦先生が戻ってくるまで空欄を埋めるだけ埋める。

そして国際ＩＳ委員会にある俺の用事というのはＶＢＰのことだ。
ＩＳに関する技術は公開することになっているが、各国家が全てのＩＳに搭載してくれるようにしなければ意味が無い。
必要なら、その性能も見せる必要があるだろうしな。

ＶＢＰでバグ関係について思い出した。
とりあえず一夏と箒の機体には積ませてもらうとしよう。どこにも属していないし、二人の許可さえもらえればいい。

後はバグに対抗するための訓練か。
少しでも技能は上げてもらわないと困る……死なないためにもな。

こっちも織斑先生に要相談……と、心の中のクリップボードに留めておく。

「玖蘭君、織斑先生が戻ってきましたよ」

「あ、はい」

おっと、思考のほうにのめりこんでいたんだぜい。

「玖蘭、お前がどうしてここに居る？」

「いや、これです」

目の前の書類を指差すと、織斑先生は鋭い目線で山田先生を見る。

山田先生からは「あはは……」と乾いた笑い声。

「はぁっ……。それで？　玖蘭、お前は私に何か用でもあるのか？」

「“アレ”関係のはなしもあるんで、聞かれない場所でお願いします」

「“アレ”……ああ、わかった。ついて来い」

『アレ』で理解した織斑先生。

言われたとおりに織斑先生についていって、俺は職員室を出た。

久しぶりの学園（後書き）

まずは更識家を出るときですね。
そこで拓神にお義父さんとお義母さんって呼ばせようと思ったんですけど没ネタに。

それと山田先生、ちゃんと書けてましたか？
自分的には出来たほうだと思うんですけどね……

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『対策会議』

それでは（恐らく）また来週～。

対策会議（前書き）

どうも、不定期更新その一。的な感じです（笑
今後も基本週末更新、たまに平日。といった感じになると思います。
いまさらですが、どうかご了承をｍ（＿＿）ｍ

……そしてサブタイと内容が微妙にかみ合ってない気が。

まあそこは皆様の感じ方てお任せします（アレ?投げやり?）。では、どうぞ

対策会議

織斑先生の後を追って、着いたのは生徒指導室。
……極たまにここから悲鳴が聞こえると噂で聞いた。
ちなみにこの部屋の管轄は織斑先生。

……まあ、そんなことはどうでもいいとして（いいのか？）。

生徒指導室内に入り、机を挟んで、俺と織斑先生は向かい合った場所に座る。

「ここなら問題ないだろう？」

「ええ。それじゃ、先は“アレ”以外のことで」

「山田先生がミスった書類のことと、俺個人での用事があるんで、国際ＩＳ委員会にアポって取れますか？」

「学園の名目で取れば可能だ」

「ならお願いします。日時はなるべく早くしてもらえると助かるんですけど」

「あちらの予定しだいだな。私ではどうにもならん」

「まぁ、最悪夏休み中であれば問題ないんですけどね」

「まあいい……それで？　個人的な用事とは何だ？」

「それはアレについての対策関係です。あれがどういうものなのかは教えませんけど、それに対抗する物（プログラム）を渡します」

ＶＢＰ（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）はアレに対抗するため、可及的速やかに世界に渡す必要がある。

「ふむ……アレに対抗するための物（プログラム）か。それはどんなものだ？」

「すぐにわかるとは思いますけど……基本的には操縦支援による機体性能の底上げです。平均で大体一五パーセントの性能上昇は見込めます」

「そこまでの代物か。戦争にでも使われれば、脅威だな」

「それは問題ないですよ」

「なに？」

「他から持ってきたものを渡すわけじゃないんですよ。こっちで作ったものを渡すんです……」

自分でもあれだが、唇の端がつりあがるのを自覚できた。

「カウンターはあるというワケか……」

「もしかして敵になるかもしれない連中にも渡すことになるんですから、手綱は握りますよ。それが力を提供する見返りです」

「ふっ、まあいいだろう。そのお前の個人的用事に対して私は干渉しない。……無論、責任もこちらでは負わない。それでかまわないな？」

「はい、大丈夫ですよ」

「ならいい。他に何か？」

「いえ、“アレ”以外はこれだけです」

まずは第一目標クリア。

ま、次の話のほうがメインなんだけどな。

「そうか――ではアレ……“バグ”関係とはなんだ？」

バグ――俺がこの世界に来たことで発生した不可思議な存在。

ＩＳと同等の戦闘能力を持ち、他の物体を侵食。またオリジナルほどでは無いとはいえ“ガンダム”すら模倣する。

――どこのＥＬＳだと言いたくなるが、違いはある。

第一に外見に決まった姿が無い。ＥＬＳ（エルス）でも最初は特有の形態をしているものが多かったが、こいつらは最初からなにかを模倣している。色は黒以外無いようだけど。

そして第二に目的が見えない。現時点では何をするわけでもなく、出現は散発的。……まぁ、それすらもなにかの布石かもしれないか

ら気は抜けないんだけども。

「まずは一夏達の訓練ですね。あいつら、今のままだとバグに――

――――殺されますよ」

このことを隠していても仕方ない。

現実は現実だ。知らないほうがマイナスになる。

俺と織斑先生の間に、暗い沈黙が流れる。

そしてその沈黙は織斑先生が破った。

「……それで？　どうするというんだ？」

「夏休みの後半に、最終週でいいですから、一年の専用機持ちは全員呼び出してください。とにかく模擬戦で戦闘の勘をつかませます。ボーデヴィッヒはともかく、他の面子……特に一夏と篠ノ乃は、経験が福音のときしかありません。今戦えば、いくら第四世代型とはいえすぐにやられる」

「ふむ、了承した――――が、なぜ一年だけなんだ？　更識はともかく、他にも専用機持ちは居るぞ」

「知ってますよ。でも確か今出てないのは二人で、その二人はコンビだったはずです。なら、こちらのグループに組み込んでしまってその力を発揮できないのは惜しいですから」

「ほう、よく知っているな。そしてその判断は妥当だ」

まぁ……原作知識だからな。それも七巻。

「ああ、それとバグに対抗する組み合わせですけど、全員……あの六人でまとまって動いたほうがよさそうです。といっても、俺に決定権は無いんで決断は織斑先生に任せますけど」

「そうか……お前と楯無はどうする？　ワンマンで遊撃か？」

「俺たちは、ツーマンセル・アーミーですよ。自分で言うのもなんですけど――――――最強の」

俺がそう告げると、織斑先生は笑いを漏らした。

「くっ、ふははっ――――……、確かにな。他人は足手まとい……いや、お前達についていけないだけか」

そしてニヤリとした顔でそう言いきった。

まあ、正しいんだけども。

俺と楯無。神力を扱え、人間を超越した存在。

それは、人間には出来ないようなことも出来るということ。

故に俺のパートナーは楯無一人。

「まあいいさ。その分、もしものときは働いてもらうがな」

「わかってます。この学園は全力で守らせてもらいますよ」

「それで……話は以上、ということでいいのか？」

「ええ。じゃあ、頼みます」
「わかった。それとＩＳ委員会の日時は追って知らせる」
「はい」

◆

生徒指導室から出た俺は、生徒会室に向かった。
目的は楯無に今回の話の結果を教えること。
ちなみに、楯無には今回話すことを全て教えてある。

ガチャッ――――

「おーい、楯無居るか？」

生徒会室のドアを開けながら中に入ると、いつもの三人がそこに居た。

「はーい、居るわよ」
「拓神さん、こんにちわ」

「わ～、たっくんだ～」

わかっているとは思うが、上から楯無・虚さん・本音の順。

「来たってことは、そっち話は終わったのね」

「ああ。報告だけど、機密だからこっちに来てくれ」

生徒会室には来たばかりだけども、楯無を連れ立って出て行く。

あの二人は更識家の従者だ。だからこちらに首を突っ込んでくるようなことはしない。

行き先は俺たちの自室。俺たちの部屋なら、話を聞かれたり見られたりする心配は無い――

――とかを考えているうちに、部屋に着いていた。

部屋に入って、いつものようにベッドに腰掛けてから話を始める。

「さて、と。どっちから話す？」

「そうね……じゃ、軽いほうから。拓神がＩＳ委員会に行くのはどうなったの？」

「そっちは、織斑先生にアポをとってもらえることになった。日時は未定だけどな」

「アポくらいだったら、先生に頼らなくても取れたのに」

「学園の名目で取るなら、それなりの地位の人が出てくるだろ。そ

っちのほうがやりやすいんだ」

「まぁ、拓神の目的だったらその方がいいでしょうね。ＶＢＰでしょ？」

「ああ、その通り。……ついでに他の手回しもしてくるけど」

「他？」

「ＩＳの書類の未記入部分のだな。製作者とか、そこらへんを説得してくる」

「……脅しちゃ駄目よ？」

と言っている楯無だが、目は少し笑っている。

まあ、ちゃんと説明したのにもかかわらず馬鹿にされたりしたら、☆Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆するけど。

「わかってるよ。……この話はこれで終わり」

「じゃあ、次は一夏君たちの特訓の件ね」

「織斑先生に了解はとったし、元の予定通り夏休みの最終週に一年の専用機持ちは全員呼び出してもらうことになった。……あの子の機体も早くロールアウトしてくれるといいんだけど。完成すれば戦力としては申し分ないだろうし」

「あの子に関しては、私はあんまり力になれそうに無いなぁ……」

「楯無には悪いけど、あの子のこと、今は仕方ないって割り切るし

かないか……」

原作どおりなら、十月までにバグが行動を起こされなければまだ何とかなる。

それに戦力は惜しいけど、同じくらい時間も惜しい。

「……今はここで止まってても仕方ないな、先に進もう。何をするのかはもう言ったろ？」

「模擬戦で実戦の感覚を掴ませる、でしょ？」

「そういうことだから、休憩を挟んでひたすら模擬戦になるな。あっちのメンバーの武装は壊さないようにしないとならないけど……やれるよな？」

「あら、何言ってるの？　私“達”なら、問題ないでしょう？」

「ははっ、だよな」

――――これで、今後の予定は大体決まったな。

対策会議（後書き）

真面目パートはまだ続きそうです。

……その反動でとんでもないものを書いてしまおうか（爆笑

ちなみに作中だと、夏休みを４週間と考えて現在１週目が終了な感じです。

……あと３週のうち一週間は一夏達の強化。一週間の半分くらいでＩＳ委員会。そこのもう半分でイチャラブ。

……一週間あまっちゃったなぁ（笑

では、感想・アドバイス等待ってますｍ（＿＿）ｍ

次回『拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）』

……なぜかバカテス風（笑

ＩＳ委員会へ（前書き）

サブタイは持ち越しです。

――遅れてスイマセンでした！！！ｍ（＿＿）ｍ
約２週間ぶりくらいですね。本当にすみません。

そして来週も忙しそうです。
まず明日は高校の説明会、そして来週木・金と期末テスト……ｏｒｚ

前書きであんまりながくなるのもなんで、続きはあとがきで。
では、久しぶりの本編どうぞ。

ＩＳ委員会へ

バシィッ！！

「――――痛ってぇ！？」

寝ていた俺は、頭への強烈な痛みで目を覚ました。

……マジ痛ぇ。

「一度声をかけたが起きなかったのでな。強硬手段に出させてもらった」

そんな俺の隣に居るのは、楯無ではなく織斑先生。

そしてもちろん今叩いたのも織斑先生。

というか、楯無はこの場に居ない。

……浮気して逃避行とかじゃないからな？　というか、逃げても楯無相手だと無駄な努力だからな？

……ＯＫ？

じゃあ、ここまでの経緯を説明するにゃー。

◆

俺が山田先生に呼び出されて学園に戻った日から二日後、織斑先生に呼び出された。

俺は二日前と同じように、生徒指導室へ。

俺が部屋に入ると、すぐに話を切り出してきた。

「来たな。呼んだ理由は一昨日の、ＩＳ委員会の話がどうなったかを伝えるためだ」

「決まったんですか？」

「ああ。会談は明後日、とのことだ」

「急ですね……」

「ちょうど相手の予定が空いているみたいだ。それと……世界最強

《私》と二人だけの男性ＩＳ操縦者《お前》のネームバリューは、あっちにとって相当のものらしい」

後半のことは苦笑気味に、織斑先生は言う。

「それで、だ。こちらを出るのは明日の夜。移動手段は航空機だから、その中で睡眠を取る。……ということでだ、準備しておけよ」

「了解です」

「では、明日の午後八時頃に学園のゲート前に集合だ」

そのあと補足事項をいくつか聞いてから、俺は自室に戻った。

――まだ午前中だし、今日一日どうしよ。準備は明日だけでも十分だし。……と、思いながら。

時刻は、午前九時ちょいすぎだった。

自室に戻ると、部屋の中用の……ちょっとラフすぎね？　という格好をした楯無の姿が。いや、いつも通りなんだけどな。

「あ、おかえり～」

「ただいま」

声をかけてきた楯無は、ベッドの上で雑誌を広げてた。
……中央を陣取るなよ。俺、二度寝しようと思ってたのになぁ。
「それで？　織斑先生と話してきたんでしょ？」
「ああ、そうだよ」
「あれだよね、拓神がＩＳ委員会に行くってやつ」
「そそ。出発は明日の夜だとよ」
「……急ね？」
「何でも、あっちの予定が開いてる日がちょうど明後日なんだと。あとは、世界最強《織斑先生》と男性ＩＳ操縦者《俺》のネームバリューだってさ」
織斑先生はともかく、俺はどうなんだろうな？　と付け足しておく。
「ん、結構あるんじゃない？　言い方は悪いけど一夏君と拓神って、男性が利権を取り戻すための貴重なサンプルなんだから」
「そんな期待を抱いてる奴らには、幻想を抱いて溺死しろ。って言ってやりたいな。……俺はそんなモルモットになるつもりはさらさらだし」
あるいは、国際ＩＳ委員会……別に壊してしまっても構わんのだろう？　ってのも良いかもしれない。……いや駄目だけど。でもや

ろうと思えばできるけど。

「んー？　拓神は、今のままの世界で良いってこと？」

今の世界＝女尊男碑でいいのかどうか、か……

「ま、そうは思ってないな。……むしろ変えてやるよ」

ＶＢＰはそのための第一歩ってやつだ。

一応俺の中には、男性がＩＳを操作するための方法ってのも思い浮かんでる。

とりあえずは、乗れないなら乗らなければいい。とだけ言っておくにゃー。

「変えるというよりは、男女平等に戻す。……どうせ放っておいても、いつかはそこに落ち着くんだろうけど」

どっちかを持ち上げれば、もう片方はいわずもがな。

なら、どっちも同じにすればいい。……安易だけど、結局はそこに戻ってくるんだよな。

「まあ、そうなるでしょうね。いつかは」

「楯無もそう思うのか？」

「ええ。いくらＩＳが世界最強の機動兵器だっていっても、いつまでも対抗手段が無いなんていうことは無いでしょうし」

だって、世の中に絶対は無いもの。と付け加えた楯無は、言葉を続けた。

「拓神のことだもん。今は無理でも、そのうち男でもＩＳを操縦できるようなものを考えるでしょ？」

……いやー、怖いね。脳内アイデアとかも見透かされちゃってんのかな？

「まあ、あってもその技術が確立するまでは誰にも言わないと思うな」

今の俺は頭の回転がかなり速くなっただけで、基本的な思考の仕方は力を開放してもらうまでと変わってないからどうせ誰かが考え付くだろう事だけど。

「いつになるのかしらね。その頃には平和だと良いんだけど」

「まあ、気長に待とうぜ」

こう言うのは何回目かわかんないけど、時間はまだまだ残ってるんだからさ。

「ふふっ、そうね。――――あ」

急に楯無が、思い出したように声を上げる。

「…？　どうした？」

そして楯無は俺のその問に答えるように、ベッドに腰掛けた俺の後ろに動いてきた。

「はい、こっち向いて」

「あ、おう」

俺は疑問に思いながらも言われたとおり、後ろの楯無と向き合う。

「――んっ」

ちゅっ……

突然――まぁ、これも良くあることだけど――キスされた。

「ん……――――なぜに？」

「今日は、おはようのキスしてなかったでしょ♪」

「あ、ああ。そうだった…な」

もうキスなんて三桁超えるくらいやってるだろうけど、気恥ずかしいのは気恥ずかしいんだ……。

楯無は普通に美少女だし、前世で彼女が居た経験も無いし。

「それと、明後日からまた拓神と会えないみたいだから、補給★」

なんの!?　……というツッコミはし飽きた。

それに楯無を置いていくのは悪いと思っているので何をされようが……訂正、ある程度のことなら受ける。

「泊まる準備とかは明日あれば十分だよね。……だから、今日は二人っきりで」

「ああ……一線を越えなきゃ、寮でも大丈夫だろ」

そしてこの日一日は、丸々楯無とイチャついてた。

……理性はかろうじて大丈夫だったと言っておこう。

次の日、朝から行く準備を始めて、夕方には確認までの全てが終わった。

そして織斑先生と集合して、空港まで行って、旅客機に乗って――

――

◆

――――今に至る。

目的地は、北アメリカ北西のアラスカ。

ＩＳ条約とも言われている『アラスカ条約』が結ばれた地であって、国際ＩＳ委員会の本部もアラスカに作られている。

叩き起こされた理由は、もう三十分もしないうちに到着するため。

「いつつ……。もうちょっと優しい起こし方って無かったんですか？」

「そう思うなら、一度声をかけただけで起きろ」

……無理ゲーじゃ無いけど、それって結構きつくね？

とりあえずそれ以上は反抗しても無駄なため、『マイスターズ』で小型の空中投影ディスプレイを目の前に一枚展開。

――ティエリア、今大丈夫か？

今ディスプレイには情報が羅列されているけれどフェイク。不自然にしていると不審に思われるので、ディスプレイを展開してティエリアに話しかける。

――問題ない……が、最近は僕の出番が全く無いじゃないか……。

――いや、夏休みだしな……ＩＳを使う機会自体がないだろ？

――それはわかっている。……それで、用件はなんだ？

――相談って言ったら相談だな。来週くらいから、一夏達の強化をすることはわかってるよな？

――ああ。確認している。

――それで、どこまでいけると思う？

――ある程度バグに対抗できるくらい、といったところだろう。

――それは個人で？

――そうだ。一応ヴェーダで仮想シュミレーションもしてみたが、不確定要素も含むとそれくらいだろうな。

なら、パーティーを組んでの戦闘なら勝てるか……？

――オーライ、サンキューな。ついでにあの六人でパーティーを組んで戦闘した場合はどうなるのかをシュミレートしておいてくれ。

――バグの戦闘データは福音のときのでかまわないか？

――ああ、それしかないだろうし。

――了解した。結果が出次第報告しよう。

ディスプレイを閉じて、ティエリアとの会話も終わらせる。

それから数分、俺と織斑先生の乗った旅客機は空港に着陸した。

ＩＳ委員会へ（後書き）

楯無とのシーンは入れる必要があったのかって？
必要でしょう！　今回、全体的にあんまり上手に出来ませんでしたけど。

そして前書きの続きに。
つかれすぎて、花澤さんの恋愛サーキュレーションに癒してもらう日々です。あの曲はいいです。最高です。耳がほんわかです。幸せです。

でも期末テストは迫ってくる！　ｏｒｚ
そして再来週には到達度テスト（たぶん）合唱発表会なるものも二週間後くらいにあるので、学校ではその取り組みも。……今日も十回以上歌ったなぁ……（鬱）のどが痛いです。

ああ……テストの課題やってねぇ……

鬱です。マジ鬱です。

なので感想・アドバイス等待ってます。返信はすぐに出来ないかもしれませんが、ください！（なにが『なので』なんだ？

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　上（前書き）

お久しぶりです！　お待たせしました！

一学期のテストも今週で全て終わり、後は夏休みの突入を待つだけ的な感じです！

では、どうぞ

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　上

空港から出ると、迎えという黒スーツ（一人）がこちらにコンタクトしてきた。
その人の運転する車に乗って移動すると、十分ほどでビルの前に到着。

ビルは建てられてからまだ数年しか経っていないようで、目立つ汚れは無い。もっとも、清掃はしているだろうけども。
車から降りて、そのビルの中に入る。
入ったビルの中は特に目立つ装飾も無く、見当たるのは受付とエレベーターとイスくらい。

「地味だ……」

中に入った第一声がそれだった。
にしてもなぜにここまで普通なんだ？　ＩＳの管理を一任されてるところだから、何かあると思ってたけど……。

すると織斑先生が、その疑問の答えを口にしてくれる。

「普通の会社なら、見栄えをよくするためにもなにかするだろうな。だが、ここはあくまでＩＳの管理・監視を目的とした機関だ。外見は関係ない。それにそれ相応の運営費もかかる。だから、余計なところに金を使ってないんだろう」

ふむふむ、そういうことか。

確かこの機関は国連が運営してる筈だから、ここの運営費も各国が出してる。と言ったところか。

ＩＳ学園は日本政府が全ての費用を持っているけども、ここはそれとは話が違うんだろう。

今現在、各国はＩＳの開発を急いでいる。なぜなら『ＩＳ』は最強の機動兵器。開発で出遅れれば、ディスアドバンテージを負うことになる。――すでにフランスは出遅れかけているみたいだが――たとえ米国のような超国家であっても、その影響力の低下は否めない。『ＩＳ』という存在はたった一機でさえ一国を相手取れるポテンシャルを秘めている。そしてＩＳを相手取れるのはＩＳだけ。ならそのＩＳを全て撃破されてしまえば……もう抵抗する術は無い。蹂躙されるだけだ。現行の通常兵器ではＩＳに勝つことはできない。

そしてそれゆえ、かけている金額もそれ相応。

だからたぶん、こっちにはどの国も最低限の金額しか渡していないと言ったところだろう。とはいっても、数億単位なんだろうけどな。

……そういえば、ここの世界で国連軍が組織されたらＩＳを何機指揮下に置くんだ？

というかそもそも、こっちの世界の国連軍って……？　元の世界だと、必要に応じて組織されるって感じだった……筈。知ってるのは一般的なことだけでそこまで詳しくは無い。

「……ま、いまはどうでもいいことか……」

「何をブツブツ言っている。早く行くぞ」

「あ、はい」

おっと。さて、意識を切り替えるにゃー。

◆

受付に行った後で案内されたのは、それなりに上層の一室。……というか『接客室』ってプレートがある。

とりあえず今は頭の堅い役人さんが出てこないことを祈っておこう。

「（コンコン）ＩＳ学園教師の織斑千冬様と、ＩＳ操縦者の玖蘭拓神様が到着いたしました」

「ああ、入ってくれ」

ここまで案内してくれた黒スーツは俺達が来たことを中に居る人に伝えると、一礼をして立ち去っていった。

織斑先生がドアを開ける。

「失礼します」

「失礼します……」

室内に入るとそこには、ちょうどソファから立ち上がったところらしい初老の男性。
日本人……？　いや、アジア系か？
「お忙しい中、このような席を設けていただき申し訳ありません」
「いえいえ、これもこちらの仕事なので」
日本語に違和感が無い、ってことは日本人……か？
といってもＩＳの登場以来、日本語は世界に広まったんだよな。
そうなった理由はＩＳのコアとか篠ノ乃博士以外は弄れないところは元々日本語で、弄れないから変更不能。だから日本語を使えるように、と言う簡単な理由だ。
……というか、なんでこんな解析してるんだろ？　名前を聞けば一発だろうに……。
「玖蘭、挨拶をしろ」
っと、話が進んでた。
「あ、はい。……玖蘭拓神です。二人目の男子ＩＳ操縦者……は知ってますよね」
むしろ知らなかったらこの機関の存在意義は何だ。
「もちろんですよ。……私は駈杉、駈杉真（くすぎまこと）。ここでの役は『国際ＩＳ委員会・ＩＳ管理課』の課長、といったところです」

「課長さん、ですか……」

結構上……だよな。課の課長だし。

そしてやっぱり日本人だったのか。

「ええ、まあ。私自身、そんな器（うつわ）ではないと思ってるんですけどねぇ……」

この人――――駈杉さんは、どうやら頭の固い役人タイプじゃないみたいだ。

心の中で、ホッと安堵の息を吐いた。

「……ああ、すみません。どうぞ、そちらにお掛けください」

「では」

「わかりました」

俺と織斑先生がソファに座り、駈杉さんも机をはさんで向かいの席についたところで、織斑先生が話を切り出した。

「まずは書類の提出を」

そう言って、持っていた結構厚いファイルを駈杉さんにわたす。

「今年はイレギュラーな事態が多く、書類の提出が遅れて申し訳あ

りません」

……イレギュラーの主体って俺らのことだろうなぁ。

「仕方ありませんよ。こちらでも、織斑君と玖蘭君についてはいろいろとありましたから」

ああ、そういえば身柄の引き渡し要請とかあったな。……応じるわけないけど。

だってどうせデータ取りやら、下手すれば体細胞の検査とかの名目で解剖もどきなことされる可能性だってあるわけだし。正真正銘の隅々まで検査、ってか。

でもたぶん、そうされても人権問題に発展はしないだろ。そんなことは有耶無耶（うやむや）にする事ができる規模の組織なんだから、ここ。

……とかいう脳内妄想を暴露してみたんだぜい。

織斑先生と駈杉さんは事務的な会話してて、俺の入る隙が無くて暇なんだにゃー。

◆

～十数分後～

「――ということで、ＩＳ学園からの報告を終わらせていただきます」

「はい、確かに」

やっと終わったか……。

駈杉さんは受け取って、今まで目を通していた書類を自分のカバンの中に入れると、今度は俺のほうを向けて問いかけてきた。

「それでは――玖蘭君。君の話というのはなんでしょう？」

さて、本番はここから、ってな。

「まぁ、いたって端的に言えば……技術の提供と言ったところです」

「技術の……？」

「と言っても、ハードじゃなくてソフト……ＩＳの本体とか武装じゃなくて、機体制御のプログラムなんですけど」

「そうですか……ですがそれなら、わざわざここに来る理由にはなりませんよ？　何か目的が？」

鋭いというか、核心を突いてくるな、この人。

「あはは……。ストレートですね」

「いや、ここに来る前からこういう仕事はしてましたからね。こういうときは遠回りにするより、ストレートに聞いたほうがいいんですよ」

「まぁ、とりあえずはそのプログラムを見てください」

俺の持っている肩掛けバッグの中から、携帯情報端末を取り出す。大きさは一般的なノートパソコンと同じくらい。

それと一緒にプログラムの入ったメモリも出して、その端末に入れる。

端末を起動させ、空中投影のキーボードとマウスを動かして、今回のためにティエリアとヴェーダの演算機能を使って作ったシュミレーションの映像を出す。

これはプログラムを実機に積んで取ったものじゃなくて、ヴェーダを使ってシュミレートしたやつだ。だからそこに写ってるＩＳもＣＧ。それとシュミレートとはいってもヴェーダの演算能力を使った実際と差異のほとんど無い。

キーボードとは別に出した空中投影ディスプレイにシュミレートムービーを写す。そこにはプログラムを適用したものとそうではないものの二種類が比較として出されている。

……さて、どの程度の話で認めてもらえるか。初手で認めてもらえれば楽なんだけど……

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　上（後書き）

３０００字カッキリ（と、文字カウントでは出た）な今回でした。
文字数が多くなりそうだったので、今回はここで切って上ということに。

やっぱり、こういう交渉系は難しそうです。

そういえば、バカテスの二期始まりましたね。
昨日早速録画して、今日学校から帰ってきて速攻で見ました。
あと、ＴＢＳのほうでもマヨチキ！　と　アイドルマスター（こっちはあまり知りません）が始まって、受験の年代だというのに見た過ぎる！　この二つが終わった後?で、僕は友達が少ない　もやるらしいですし。
マヨチキと僕は友達が少ないで、両方とも主人公の妹の中の人が花澤さんなのにはテンションヒャッホゥ！！　です。あの二つのキャラでの花澤さんの声、楽しみだぁ。

では、感想・アドバイス等待ってます。よろしくお願いします。

次回「拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　下」

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　下（前書き）

投稿できたぁ！
また来週なんてことにならないでよかったです。

では、どうぞ～

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　下

机上に置いた情報端末から投影される空中投影ディスプレイは上下で二つの映像が写されていて、それぞれＣＧで表されたＩＳとその機体の各種パラメータが表示されている……というか表示した。

今回のシュミレーションで使ったＩＳのデータはデュノア社製第二世代機『ラファール・リヴァイヴ』のデータ。

同じ汎用機でも打鉄（うちがね）のように近接戦重視の仕様でなく、汎用性の高いラファールを使ったほうがなにかと便利だからな。

「これでよし……じゃあ、見てください」

そう言うと、駈杉さんと織斑先生は空中に映し出される映像に目を向けた。

駈杉さんと俺＋織斑先生は向かい合っているが、このディスプレイは両方から見ても正常に写る仕様のものだから問題はない。

……ちなみにこれは純粋にこの世界の技術。スゲェよな、ＩＳのそういう副次影響って。

「とりあえず大きい影響のほうがわかりやすいでしょうから……」

あらかじめ設定しておいたキーを押すと、エネルギー消費の大きい動作――瞬時加速（イグニッション・ブースト）――をＣＧ表現されたＩＳは使う。

エネルギー残量やエネルギー効率も、そこに表示されているパラメータには表示しているため、差はよくわかる……と思う。

実際ＶＢＰを積んであるほうが、エネルギー残量・エネルギー効率ともに高数値を示している。ちなみに両方デフォルト仕様の機体性能なのは、準備中に説明しておいた。

「わかりましたか？」

「はい、大丈夫です。……使用エネルギーは減少していますが、効率が良くなっているようですね」

織斑先生は口を開かなかったが、説明する相手は駈杉さんなのでそのまま話を続ける。

「これはわかりやすいエネルギー消費で見せましたけど、一挙手一投足のエネルギー効率も良くなっていて、総合的には約十五％の性能上昇になってます」

エネルギーを使用するレーザー兵器などを運用する上では、もっと高い効果を見出せると思いますが。と付け加えて、映像をそれに合ったものに切り変えた。

「……そして今はエネルギー効率でしたけど、他にも射撃時の高精度な照準や反動制御などもこのプログラムの補佐対象です。それを総じて約十五％の性能上昇になりますね」

映像をどんどん切り替えていく。

ちなみに現行のＩＳ総数は４６７……『マイスターズ』を入れると４６８なわけだが、普通のＩＳコアの数でいくと４６７機。しかし現在は半数以上が開発にまわされていて、稼働しているＩＳはその残り半数。４６７でもヴェーダにはほとんど負担にならないため、その半数だとヴェーダの負担は極めて少ない。だから、二百を超え

る数のＩＳを平行して補佐をしてもヴェーダに問題は全くない。
……ヴェーダすげぇ。

「ふむ……確かこのシステムの名称は「ＶＢＰ（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）」でしたか？」

「『ヴェーダ』の意味は『知識』ですから……『知識で支援する』といった感じになりますね」

流石にヴェーダの存在を気取られる発言はマズイ……。
事前に気付いといてよかったぜい。

「このシュミレーションで見る限り、確かにすごいシステムだとは思います。……ですが、あくまでもこれは“シュミレーション”。実機に搭載するとなると、各国家のＩＳとの相性やさまざまな状況に応じての柔軟性が求められます」

「それは……そうですね」

本音をぶちまけると、すでにヴェーダを使って各国家の全機体でのシュミレーションも全て終わらせてる。その平均が十五％……と、ティエリアが言ってた。
機体のデータ？　――ヴェーダなら簡単に機密情報だって集められるそうだ。

「でしたら、そちらで試してもらっても構いません。それなら、あなた方の調べた確かなデータですよね？」

「時間が掛かりますよ？」

「問題ありません。あくまでもこれはプログラムの提供ですから」

「そうですか。――で、本題は？」

「このプログラムをいずれは全国家のＩＳに搭載したい。というのが、俺の望みですね」

「なぜ？」

「ロマンですかね、自分達の作ったものが全世界で使われるんです。あなたも男ですからわかりますよね？」

「子供の頃に追い求めた夢、というやつですか。……いやはや懐かしい。私たちのときは、今のＩＳのようなものや巨大ロボットがあれば……などと思っていましたが、今更ながらすごい世の中になったものです。……ですがそれゆえに共感できる。夢（ロマン）を求めるのは悪くない、と」

俺も男だ。ロマンくらいはあるし、今言ったのもウソじゃない。

……だってそうだろう？　ＩＳの世界に来た理由の一つだってそういうのだ。

あとは――来たるべき時への備えだけどな。今は動きの少ないバグでも、いつ俺たちの目の前以外のところに現れるかなんてわかったものじゃないし。

「わかりました、私もその手伝いをさせてもらいますよ。なるべく

早くその望みが達成できるように……」

「本当ですか！？」

「ええ。…それに、こういった私情を抜きにしてもこのプログラムはすごい。私が何もしなくても、その能力が確かになれば世界に広がっていくでしょう」

――これで君の目的は達成したのか？

――まぁな。まさか賛同してくれるとは思ってなかったけど。

――男というのは、そういうロマンを求める生き物だということだ。

――……ちょっと貶めてないか？

――いや、むしろ大人になろうとそういう夢を持っていられることは、尊敬に値する。

――そうかい。……とりあえずご苦労様、ティエリア。

「じゃあ、これは駈杉さんに渡しておきます」

端末からメモリーを抜き取って、渡す。

「確かに、預かりましたよ」

これで全てのフェイズ終了、っと。
俺は端末を閉じてカバンの中に仕舞う。

「織斑先生、俺の用事も全て終わりましたよ」

「ん、そうか。……では、このあたりで」

「はい、お疲れ様でした。また縁があれば会いましょう」

◆

行きの時と同じ黒スーツさんに送られて空港に戻り、何事も無く飛行機には乗れた。

――また暇な時間かぁ……。そのくせ隣は織斑先生だから緊張するって……。

数時間後～

『まもなく本機は日本国領海に到達致します。到着は予定通り日本時間――時となっております』

そんなお仕事ボイスで、寝ていた俺は目を覚ました。

「――――ふぁぁ……」

ちなみに余計な情報としてこの航空機はＡＮ○の中型航空機だ。あの青いラインの。一応こういうところにもＩＳの技術っていうのは流用されていて、航空機の性能は前の世界のより高い。……まぁ、どうでもいいことだけども。

どうやら出発して一時間くらいで寝て、そのまま半分くらいの時間を寝てすごしていたらしい……どんだけ疲れてたんだ俺。

「織斑先生、何かありました？」

「いや？　食事があった以外は何もなかったが？」

なん……だと……？

「……起こしてくれなかったんですか？」

「起こそうとしたさ。だが起きなかった……それだけだ」

なんで……なんでこんなオチなんだにゃー?!?!

帰ったら速攻で楯無に飯を作ってもらおう。と心のメモ帳に書き留めて、少しでも空腹感を紛らわすために俺はもう一度目を閉じた。

――――起きたばっかりで寝れるわけがなかったけどな……

拓神とＩＳ委員会とＶＢＰ　下（後書き）

オチが微妙というか……ｏｒｚ
拓神をこんなノリにしたことって、ほとんど無かったですからね。

まぁ、とりあえず交渉は成功ということで。
どこかのタイミングでバグに襲撃させるのも面白いかなーと思ったんですけど、さらに長くなるのでボツネタに。

次は……イチャラブに持ち込みたいなぁ。久々にやる気が出る！

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『拓海と楯無の情事』

拓神と楯無の情事（前書き）

遅くなって申し訳ありません！！
活動報告ではできる限り更新すると言いつつｏｒｚ
しかも先ほど更新した活動報告で１２時には投稿すると言ったのに
……

ホント、申し訳ないです。ｍ（＿＿）ｍ

では、いいかげん本編のほうどうぞ。

拓神と楯無の情事

あれから二日経って……つまるところ今日は金曜日だ。

戻ってきた次の日は残っていた夏休みの課題の処理。楯無に手伝ってもらったおかげで残っていたものは全て終了。

その次の日。つまり昨日は、生徒会の仕事があった。

内容は学園祭について。学園祭の予算や学園祭中の仕事の確認等々、とにかく事務仕事。今回ばかりはいつもは何もしないのほほんさんでさえ働いていた。……そのペースはどうとも言えなかったし、それを明らかに予測した仕事量の割り振りだったけども。

――そして今日はオフ。予定は何もない。

そんなことを考えつつ寝たからか、目を覚ますと八時を過ぎていた。休みでなければ朝食抜きで教室直行しなきゃいけない時間。……そして俺と同じなのか隣にいる楯無もまだ寝てる。

腕を抱かれる感じになってるが……よっ……起こさないように外すのはもう慣れた。それにしても結構個人的に嬉し……ゲフン、危ない格好してるよな、コイツ。下着にワイシャツって。……さて、顔洗ってくる――――

――ガシッ

「……起きてたのかよ」

「てへっ☆」

……とりあえず今のはスルー。ドキッと来たとか、そういうのは無い。……無いからな？

まぁ、そんなことはともかくなんで楯無が寝たふりなんてしてたのかってのは、わかってるつもりだ。

だから――楯無の頭に手をまわして引き寄せて、キスをする。

「ん、おはよ」

「…おはよう♪」

それにしても……ドンだけ恥ずかしいことやってんだよ、俺ら。

しかもそれを平然と出来るようになってしまった自分に対して……。うん、俺ってこういうことするヤツだったっけ？

諸々の雑念を無視しつつ、ベッドから降りようとして――楯無に引き止められた。むしろ抱きつかれた。

「ちょ、おい？！」

「なに？　抱きついちゃ駄目？」

「そうじゃないけど……全部わかってやってるよな、お前」

今の服装とか、胸が当たってるとか、女子の甘い匂いとか……。

「もちろん♪」

まぁ、はい、そうでしょうね。

楯無は後ろから抱き着いてきてるため、背中に双山と薄い服越しにわかる肌の感触――って考えたら負け。考えたら（ｒｙ

――俺がそう脳内で繰り返していると、楯無が俺の耳元で口を開いた。

「ねぇ、拓神」

「ん？」

「……あの“約束”は、いつ果たしてくれるの？」

甘い声でささやかれて、俺はついビクッと反応してしまう。

いや、いつまでも自分にお預けができる俺でもないけど。これでも健全？な男子高校生だ。

「もう時間は無いわよ？　来週は、みんなの特訓でしょ？」

「ああ、わかってるよ」

そう言いながら首に回されてる楯無の手を取って、後ろを向く。

向かい合ったところで、さっきしたみたいに楯無を引き寄せ、今度はキスじゃなく楯無の首筋をペロッと舐め上げた。

「ひゃっ！」

「くくっ……。挑発してきたんだから……な？」

俺はそう言いながら、楯無のシャツの中に手を潜り込ませる。

……狙いは脇腹だ。

「んっ……、ダメっ、そこ弱ぃ、のにっ……ふぁっ！」

楯無の吐く息に艶っぽいものが混ざってきた。

そこで舌を這わせるのはやめて、前にもしたように犬歯を突き立てた。

「っ――！　あっ……」

楯無の綺麗な首に痕を残して、一度離れる。

次にまた楯無の顔に近づいて、唇にキスを――

――しない。

「……え？」

「予約だ。……今夜のな」

そう言ってから、ポカンと固まっている楯無から離れる。

「まさか、朝から……とか考えて無かったよな？」

「へ？　……あ、うん。もちろｎ「嘘だな」むぅ…」

「そうだろ？　まったく、楯無はえっちぃなぁ」

少しニヤニヤしながら目の前の楯無を見てると、抗議の目線を向けられた。

しかもちょっと顔を俯(うつむ)かせて、上目使い。それプラスちょっと赤くなった頬。

「わかってるくせに。……意地悪」

……！

……ヤバイ。自分で原因作っておいてあれだけど、目茶苦茶そそられるんですが？

本当、このギャップはヤバイ。

俺はつい楯無を抱き締めて、ベットに倒れこんだ。

節操なし？　いや、本能にはかなわないというか……。

「えっ……？」

「たった今、夜にって言ったばっかりなんだけどなぁ」

一撃で理性が大ダメージを受けたよ、まったく。

「どうし――――んぅ！？」

楯無が言い切る前に、その口を口で塞ぐ。

舌も入れて、口の中をぐちゃぐちゃにかき回した。

「ふぁ…んむぅ…んく…ぁむ…っ……」

「んぅ、ぷはっ……。なぁ、今からどうしたい？」

そう聞くと、少しの間があってから返答が返ってくる。

「……このまま」

「え？」

「このまま、続けて。貴方を――拓神のことを感じたい。全部……」

「……わかった」

まずはどうするかと考えて……

とりあえず、もう一度楯無の唇に自分の唇を重ねることにした…

…。

――描写を始めると最後まで（作者が）止まらないので省略――

事が落ち着いたのは昼前だった。

――俺は今まで我慢してた分をぶつけた感じがあったから、余計な負担をかけてないといいんだけどなぁ……。

そう思いながら、上半身を起こして隣に目を向ける。
そこにいるのはシーツだけで体を隠した楯無。
ついさっきまで交わっていたから、息が少し乱れたままだ。……俺もだけど。

「……ふぅ……大丈夫か？」

「ん。……大丈夫だけど……拓神」

「？」

「激しすぎ。初めてなのに……」

「あー……、悪い」

「それにべとべとだし。……クスッ」

俺が少しばつの悪い思いをしていると、楯無は色っぽい笑みを浮かべてから、手についた白濁とした液体をペロッと舐め取った。

そのエロい仕草にまた欲が沸いてきたが、体力ではなく精神力の問題で俺の思考から消滅。

「シャワー、先に使っていいぞ？」

そう言って俺はもう一度ベッドに寝転んだ。

まあ、あれだ。とにかく体がだるい。

それと、別にシャワーを使わなくとも神力を使えば体の汚れは落とせる。……といっても、気分的にはシャワーとかのほうが気分がいいけど。

「シャワーを一緒に――」って誘われた……が、却下した。それは第二ラウンドのフラグだぞ……。

理性が振り切れれば、肉体的・精神的な疲労とか気にならなくなると思うからな。

その間にベッドを綺麗にする。

白いのやら赤いのやらを神力で掃除。……うん、ヤってる最中のことをイロイロと思い出してアレだった。

楯無と入れ替わりで俺もシャワーを浴びる。その描写？　本気で誰得だよ……。

シャワーを浴びて部屋に戻ると、楯無は下着も付けずにYシャツを羽織っただけでベットに腰掛けていた。
服装についてはいまさらなので気にしないでその隣に腰掛ける。
すると、楯無は俺の肩に頭を乗っけてきた。

「ね、拓神」

「なんだ？」

「拓神は今、幸せ？」

唐突に何を聞かれるか身構えたが、その心配は今の質問に答える間くらい不要だった。

「当たり前だろ。楯無――いや、■■はどうなんだよ？」

「もちろん幸せよ。大好きな人を感じられたから……」

「そう、か……。俺も大好きだよ、■■」

「……うん」

そう答えた楯無がまぶたを閉じる。
数十秒して開いたその目には、どこか子悪魔的な光がともっていて……

「――もう、貴方は本当に私のもの。絶対に逃がさないわよ？」

妖艶な笑みも加えられて、占領宣言されてしまった。別に異論は無いが。

むしろ――

「望むところだと言わせてもらう。そして、お前も俺のものだ。ずっと手放さない」

そんなことを真面目に言い合ってしまって、不意に互いの頬に赤みが入る。それでも視線は互いから外さなかった。

さらに徐々に近づいていく俺たち。そんななか、そういえば――と浮かんできた言葉。

それを唇が重なる直前に告げた。

「■■――――愛してる」

拓神と楯無の情事（後書き）

……なんでしょう

――――やっちゃった☆

では済まない気が……

しかも結構時間をかけてこの有様です。はい。

本当自分の才能の無さがツライ。

まぁ、どうでしょう？

少しでも砂糖をはいてもらえれば目的達成です。トランザムしちゃう人はいないでしょうから（爆笑

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓開始！』

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・上（前書き）

サブタイが「特訓開始！」の癖にまだ始まりませんよ一夏達の特訓。

今日中にがんばってもう一話投下したいなぁ……

……宿題がっ！！

それと前話少し改稿しました。

では、どうぞ。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・上

さっそくだが、前話のことは気にしなくていい。むしろ気にするんじゃないぜい。

……前話ってなんだ？

「拓神？　どうかした？」

「ん？　いや、ちょっと電波を」

「……」

楯無からジト目で見つめられて――

楯無……やめてくれ！　ジト目で見られると結構辛いものがあるんだにゃー！

……

「ま、ふざけるのもここまででいいか」

「そうね。じゃ、始めましょうか」

今日は週明けの月曜日。

そして今現在、俺と楯無は学園のアリーナ空中で向かい合っている。

時間は午前中。一夏達の特訓は午後からなので、その前に一回模擬戦でも……。ということに。

俺の装備しているガンダムは今現在もっとも使っている……と思う『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』。

展開していなかった頭部装甲も展開させて、各種武装も展開する。

――久々だ……本当に久々だ……。……頭部装甲展開。ならびに右腕へプロトＧＮソード、左腕へＧＮシールドとＧＮビームライフル、両膝にＧＮピストルを展開。

――あははは……。とにかく、サンキュー。

まず頭が装甲に包まれ、続いて手足にＧＮ粒子が集まって各種武装が呼び出された。

そして……ティエリア、とにかくスマン。

「いまさらだけど、あの蒼と白の機体じゃないのね」

「使ったら、隠してる意味ないし」

「そうだけど……手加減？」

「いや、そんなことは……」

「まぁ、いいわ。……使わざるを得ない状態にして、引きずり出してあげるから♪」

綺麗な笑み浮かべて、そんなこと言われてもなぁ……。

実質、この機体でもエクシアより多少低い程度の性能なんだけｄ

「いくわよっ！」――――

――――ガキィッ！

「え、ちょっ！？　急にくるなよ！」

「拓神が装備展開する前に、『始める』って言ったからね☆」

かろうじて刀身が未展開状態のままのプロトＧＮソードで蒼流旋（ランス）は受け止められたけど……ちくしょう、嵌められた。

「それにこの程度防げるでしょ？　実際防いだし」

そう言って不意打ちに失敗した楯無は、すぐに俺から離れる。

俺はその楯無に向けてビームライフルを撃つが、全部かわされた。

まぁ、簡単に当たるようじゃ生徒会長なんかやってないだろうけど。

そのままビームライフルによる射撃を続行。右手にもＧＮビームピストルを持って撃つ。

「そんなんじゃ当たらないわよ？」

「ちっ！」

やっぱり射撃は訓練じゃなくて経験の差が出るなぁ……。

ってもあちらさん、近接戦のほうが手が多いからワザワザ近づいてもな……。

ふむ、どうするか――

――っと、撃ってきたっ！

蒼流旋に内臓されている四門ガトリングの弾丸を回避しつつ、ビームライフルとビームピストルで反撃。

お互いにちょっとずつだけどもカスって、シールドエネルギーを削りあった。こっちは具体的に言うと３６程度。ＭＡＸは６００。残量５６４。

「楯無、さすがだな…！」

「あっさり対応してる拓神に言われてもねぇ……。ま、そろそろトップギアでいくわよ！」

「望むところだといわせてもらおう！」

「……そのネタに奔る余裕、どこまで続くかしら？」

直後、楯無の左右に浮かぶアクア・クリスタルのヴェールから、掌（てのひら）ほどの球体が二つ生み出された。

「――――行って！」

楯無の指示で、その球体は俺に近づいてくる。

迎撃しようとビームを撃つとその球体はそれを回避し――――細長い針みたいなものを飛ばしてきた。

「これは――――――――ビット！？」

正面からくる二本の針に、とっさにシールドを掲げた。

カカンッ！　と軽い衝撃がシールドを伝わって腕に響く。

……それで安心したのは駄目だった。

直後、甲高い音とともに左右の鎖骨辺りに衝撃が伝わる。

確認すると、それはさっき飛んできた針。

そしてシールドには点ほどの穴が二つ。

「超振動破砕でシールドを貫通してきやがったのか！？」

そしてその二本の針は、それを振り払おうとした俺の懐で爆発――正確にはナノマシンの発熱による気化――した。

「ぐぅっ……！」

こんなものを何度も当てられてはかなわないので、即座に続けて飛んでくる針を回避しつつその場から離脱する。

「S・Eの残量は……」

――S・E残量、残り５０４。

ティエリアからの回答を受けて――ふむ、一発でS・Eを３０削ったのか……。

というかこんなもの、初見で盾使った時点で回避不可能じゃねぇか。

あっと、楯無がナノマシンをつかったところで思い出したことをティエリアに伝えねば。

――ティエリア、楯無の生体反応はいつでも追っかけてくれ。もう分身に引っかかるのはゴメンだ。

――了解。分身を作り出したところで伝えよう。

――任せた。

「ちょ、楯無、こんなの使えるなんてしらねぇぞ!?」

こんな技は原作でもなかったし!

「拓神のいなかった時に考えついたのよ。ほら、このナノマシンって分身作れるくらいに汎用性高いじゃない？」

「……そしてサプライズってわけだ」

「そのとおり♪　名称は『アクア・ビット』ね」

でもビットって空間認識能力とか――って半神化してる時点でそんなものは取得済みか……。

ぶっちゃけ半神化ってイノベイター化の超上位互換だし。……脳量子波？　使おうと思えば使えますけどなにか？

「と、いうわけで。ビット！」

さらに追加の二つが飛んできた。

こんにゃろう。セシリアのビットの何倍厄介なオールレンジ攻撃だこれ？

……仕返しは、今度ベットの上でたっぷりいじめてやろう。

「ならこっちも！」

――セファー展開！　ビットは八基で！

――了解、十秒後に展開する。

十秒間、ひたすら回避。

シールドで受けても貫通されるのは痛すぎる。イコール、シールド防御不可ってことだし。

――準備完了（スタンバオンプリート）ＧＮプロトビット八基展開。

あれからキッチリ十秒、コーンスラスターへ換装されたアストレアのスラスターにコアユニットがドッキング。左右に四基づつのＧＮプロトビットが装備された。

「いけっ！」

向こうと同数の四基を射出。アクア・ビットと交戦状態に。

唯一の救いは、アクア・ビットは本体も水の塊だから、高熱源である粒子ビームが直撃せずともカスれば一部を蒸発させられるということ。

――もっとも、いくら削ろうとも完全に蒸発させない限りは活動を続行されるのでやるせないが。

とにもかく、アクア・ビットの抑えはティエリア操作のプロトビットに任せて自分は楯無に接近する。

「厄介な攻撃だよ！　あれは！」

「あら、褒められちゃった♪　……ね、新しい技があれだけだと思った？」

「まさか……」

「もちろん、まだあるわよ？」

楯無の左右にあるアクア・クリスタルの水でできたヴェールが翼のように広がって――

「『ミストルテインの枝』――――ファイアっ！」

こちらに楯無が掌を向けると……水の翼からあの針が無数に射出された。

「なっ！？」

どこのエナジー○ィングだよ！？　某反逆か！？　しかもその針ってビットと同じだろ！？　本家より凶悪じゃねぇか！

内心焦りまくりつつ、コアブロックの装備で強化された機動力で回避回避回避。シールド防御は無意味だとわかったので、シールドを収納。代わりに腰からビームサーベルを抜いて、直撃コースの針を全て蒸発させる。

……なんやかんやで、伊達に半年以上ＩＳに乗ってない。技量は楯無に及ばずとも、結構あがってる……ハズ。

――って、あれ？　いまさらだが楯無のこれって……

――ああ、君の予想通りＶＢＰ（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）の影響だろうな。

――つまるところ、あのプログラムは十分な効力を発揮してるってことか。

――当たり前だ。ヴェーダが作ったものなんだぞ？

こりゃ……苦戦決定だな。しかも勝てるかどうか……。

第四世代機の使用も考えねば勝てんかもな。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・上（後書き）

楯無さらに強化（爆笑
ついにビットまで（再爆笑

他にも新技考えてあります。

ちなみに今回出た「ミストルテインの枝」は、「ミストルテインの槍」その超小型版です。
破壊力が急低下した代償に、弾速や連射能力などが上昇してます。
しかも他の能力は据え置き。超振動破砕に加え気化まで使用可。
ぶっちゃけ、槍より使い勝手がずいぶん上です。連射すれば威力不足は補えますし。
しかもナノマシンはアクア・クリスタルで製造されているため、弾数もかなりもの。
デメリットとしてはナノマシンを使うために防御が薄くなりますが……
攻撃させなきゃ、どうってことは無いですよね！
ちなみにビットから撃ちだしてるのもこれです。

楯無の最強にさらに拍車が……
もし拓神と楯無が本気（神力を完全開放）で戦った場合、完全に人外の戦いになります（もはや笑いすら起きない

では、感想・アドバイス等よろしくお願いします！

次回『特訓開始！　その二　拓神と楯無の模擬戦・下』

……本当に次回で終わるのかこの戦い……？

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・中（前書き）

ひさしぶりです～☆

先週は緋弾のほうを数ヶ月ぶりに更新してまして、こっちには手付かずでした。すいません。

では、まだ続く二人の戦いをどうぞ。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・中

急降下。地面すれすれでそこから飛び退くようにサイドロール。
俺のいた所の真下の地面に、水でできた針「ミストルテインの枝」が突き刺さった。
直後、その針は気化され爆破される。そしてその衝撃で俺は姿勢を崩した。

「くっ……！」

「そこっ！」

体勢を崩した俺に向けて、さらに楯無から水の針が向かってくる。

「こんのっ！」

そのまま多少無理やり気味に地面を蹴って、その場から退避。
改めてシールドを展開し、爆破の前に構える。
……爆破の衝撃が来ない？

――キキキキンッ！

なっ！？　どうして！？
まだ楯無は枝を飛ばしてきてないはずだ！

「ふふっ、射出する場所はここからだけじゃないわよ？」

楯無の言葉に返す暇も無く、シールドを貫かれる前にシールドを破棄。シールドの裏を蹴って離れる。
直後、シールドはナノマシンの気化に巻き込まれて砂埃を巻き上げながら爆発した。

どうやら今の一撃はさっきまで俺のいた場所でナノマシンを集めて、そこからまた俺に向けて枝を撃ち出したらしい。
擬似的な偏向射撃……汎用性が高すぎるぞ！　ナノマシン！

「こうなりゃ仕方ないか……」

――モード選択（セレクト）、エクシア。セファーは引き継ぎ。

『了解。……モード選択ＧＮ－００１『ガンダムエクシア』』

約十秒の間の後、俺の纏っていた真紅の機体はトリコロールの機体に変化。
武装はセブンソードとＧＮバルカンに加えてビット。細かいことにビットのカラーリングも赤から青と白主体に。
アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２もエクシアのパーツ流用で強化された機体とはいえ、やはり第三世代の機体のほうが性能が上だ。

「出したわね？」

「まったく、いつの間にこんな強くなってんだよ……」

「ふふん、生徒会長は最強なのよ♪」

「……否定する要素がねぇ」

「それに拓神はまだ本気じゃないし。第二形態移行（セカンド・シフト）したんでしょ？　その機体はいろいろと特別だけど、バリエーションが増えたことは知ってるわよ？」

まあ、言ったしな。

さて……トランザムと第四世代、どっちのほうをつかわないようにするべきかと言われたら……トランザムか？

とりあえずダブルオーの使用も考えておくかな。負けたくは無いし、楯無になら機体をどれだけ見せても問題ない。

「まぁそれはともかく、第二ラウンドといこうか？」

「そうね。拓神の全力――――引き出してあげるわ！」

楯無が再度生成した二基のアクア・ビットが枝を撃ちながら近づいてくる。楯無はそれと同時にヴェールも再度広げて、そこから枝を射出する準備も整えていた。

それに対し俺もプロトビットを六基射出。四基はアクア・ビットに対応させて、二基は遊撃。背のコアブロックに二基残しておく。ビットを残す理由は粒子切れで戻ってきた物と入れ替えで射出するため。

続いてＧＮソードとシールド、さらに両腰のＧＮブレイド（ブレイド）も収納してビームサーベルの柄を両手に持つ。枝の弾幕の中で大きなＧＮソードと枝の前では無意味なシールドは邪魔なだけ。主力の射撃武装が使えないことになるけども、そのメリットよりデメリットのほうが大きい。それに実体剣では枝を弾くことしかできない。どうせ実体剣で切り裂いたところで、また集まって向かってくるに違いないし。

「いくぞっ！」

正面に向けて急加速。

ガンダムのスピードは瞬時加速（イグニッション・ブースト）には勝てないが、普通のＩＳより速い。さらにキュリオスにいたっては巡航形態で瞬時加速と同等の速度を維持できる。その後継機であるアリオスはそれ以上。

それはともかく、今の俺は枝が向かってくる中に飛び込むようなものだ。が、両手首のＧＮバルカンで向かってくる枝を迎撃しつつ接近する。

現状のこの機体は実質接近戦しかできないし。ソードは収納済み、バルカンは迎撃くらいにしか使えない。

枝を強行突破して、ビームサーベルの間合いまで後一歩というところまで詰め寄る。

俺はそこでビームサーベルの刀身を展開し、楯無も枝の射出を止めて蒼流旋を構えなおした。

「はぁっ！」

まず動いたのはランスとビームサーベル、そのリーチの差で勝っている楯無。

鋭く繰り出された突きをすれすれで避けた俺は、楯無の向かって右側にあるアクア・クリスタルを狙って右手のビームサーベルを振る。

まぁ、簡単にさせてもらえるわけが無く、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）であるアクア・クリスタルは動いて、そこから展開されているヴェールを浅く切り裂くに留まった。

「ふっ！」

蒼流旋を引き戻した楯無が再度突きを放つ。
俺はそれを左手のビームサーベルで弾いて、右のビームサーベルで袈裟切りに斬り付ける。
俺の一撃はいつの間にか蒼流旋から左手を離していた楯無の、その空いた左手に握られていた蛇腹剣（ラスティー・ネイル）に弾かれる。
この戦いでビームサーベルと楯無の蒼流旋や蛇腹剣が触れ合うのは一瞬だけ。楯無が鍔迫り合いには持ち込ませない。

なぜなら、ビームサーベルは超高熱の剣だ。ＧＮソードみたく表面にＧＮ粒子を纏わせているならともかく、できて水（ナノマシン）を纏わせることしか――といっても、普通ならそれで十分だが――できない楯無の蒼流旋と蛇腹剣では、一瞬以上触れていると融解させてビームサーベルで切り裂ける。
とはいえただ一瞬だけでも耐えられるのは、圧縮したナノマシンを刀身の表面に展開してビームサーベルと触れる時間を本当にコンマ何秒だけにしている楯無の技量ありきだが。

と、◇型のようにに展開しているアクア・クリスタルのヴェール。その下の先をこちらに向けた楯無は、そのままバク転の要領で蹴りを放った。
それにあわせてにヴェールも回転し、それが刃になって俺を襲う。ヴェールはバックステップをしつつビームサーベルを振って難を逃れたが、蹴り上げで右手のビームサーベルの発信機を手から弾き飛ばされてしまった。上に弾き飛ばされたビームサーベル。中のコンデンサーに残っている粒子でまだ刀身が展開されたままだ。不意にそれを目で追った俺は、驚きに目を見開く。

「戦ってる間は、相手に集中してなきゃ駄目だぞ☆」

そのまま一回転するかと思われた、というか俺もそう予測していた楯無だったが、俺に背を向けた逆立ちの状態で右回りにコマみたく回転。クルクル回転しながら落ちてきた、コンデンサー内の残留粒子で刀身を展開しているビームサーベルの柄の底に逆さまのまま踵蹴りを叩き込む。もちろんそれが飛ばされる先は俺だ。ビームサーベルの切っ先が俺に向かってきた。――なんつー曲芸じみたことを……。しかもそれが一連の動作の中に自然に組み込まれていることが怖い。

俺はもう仕方が無いと、残った左手のビームサーベルで発振器を切り裂く。切ったビームサーベルの柄は小爆発を起こして、手榴弾のように破片が飛び散る。楯無はヴェールでガードし、俺は左手のビームサーベルで一振りしてその破片を無力化した。

開いた右手に、先ほどしまったＧＮショートブレイドを再展開。小爆発の煙の先にいるはずの楯無に向かってスラスターを噴かす。

煙を裂きながら突進し、蒼流旋と蛇腹剣を持った楯無を捕捉した。

が、

――拓神！　それは水分身だ！　本体は上に！

「くっ！？」

ティエリアの忠告でとっさに上を仰ぐ。

そこには目の前に居る楯無と全く同じ容姿の楯無。

「あら、今回は気付いたのね？　でも――――」

パシャッと音を立てて、目の前に居た水分身が崩れる。

「水分身（それ）って、こういう使い方もできるのよ」

崩れた水分身を基点に、薄い靄が俺を囲む。こりゃあ――

「えい♪」

俺が回避する暇も無く、楯無が装甲に包まれた指を弾くようにすると……

次の瞬間、俺はナノマシンの気化による爆発に飲み込まれた。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・中（後書き）

この戦い、まだ終わらない！（爆笑
長引くｗｗ
次回で終わらせられると信じてます（笑

で、その次回なんですが来週末、自分の中学校では学園祭でして。
今週も昨日今日と、平日と同じように学校に行っていたわけですよ。
来週も土日無し。ただし月曜が振り替え休日。
そのため、更新できたとしてもイレギュラーで金までに投稿できるか、それが無ければその月曜まで投稿はできないです。はい。

……まだ準備の段階なのにヘトヘトなのですよ、わたくしめは（上条さん風に）。
先生、土日を……返してください。
なんで朝九時から6時まで学校に居なきゃいけないんですか……ｏｒｚ

そんなこんなですが、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

愚痴ってスイマセンでした。でも最後の中学学園祭なので、全力で楽しみますがね！　ふはは！　今年もグラウンド部門で優勝してくれる！（現在、１・２年と所属クラスが優勝中）
それと、うちの学校となりに市のホールがありまして。毎年そこでステージ部門もとい劇をやるんですよね。そして二年と三年はクラス劇。

本当に、学園祭って一回始まると終わって欲しくないですよね。最後だからこそ、今までよりも本当にそう思います。まぁ、何もかもイベントごとはすべて最終回な三年生ですから。学祭のエンディングで泣かないかな、俺……。

では、長々と書いてしまいましたが、次回もよろしくお願いしますm（＿＿）m

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・下（前書き）

続くなぁ、これ（笑

では、どうぞ～

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・下

楯無の清き熱情（クリア・パッション）に巻き込まれた俺。

だが、爆発の余波が巻き起こした土ぼこりの晴れた中で、俺はエクシアではなくヴァーチェの装甲を纏っていた。同時に薄緑の膜にも包まれている。

俺は指示してないが……

――僕の独断でヴァーチェとＧＮフィールドを展開した。余計なお世話だったか？

――いや、助かった。サンキュー。

エクシアのままだったら、いまので確実に落とされていた。

Ｓ・Ｅが半分の三〇〇を下回っているとはいえ、二五〇も残っているのはＧＮフィールドのおかげ。フィールドの範囲内に入り込まれていたものは防ぎようが無かったが、それもヴァーチェの堅牢な装甲でダメージは抑えられた。でもここまで減らされてはもう油断できないか……。

まだ俺はまともなダメージを楯無に与えていないんだ。アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２のときにたまたまビームをかすらせた程度。

「まだ墜ちてなかったのね？」

「このくらいで墜ちるわけにはいかないさ」

この間にもＧＮフィールドは、楯無本体のヴェールとアクア・ビットから射出される枝を弾き続ける。

そろそろ突破されるだろうから、それまでに次の手を打たないと……。

――キュリオスを巡航形態で。それとテールブースターの準備を頼む。

――了解した。

「いい加減反撃しないと、立つ瀬が無いよな……俺」

「私が、愛想尽かしちゃうかもよ？」

「それは困るから……行くぞ」

フッとＧＮフィールドが消失するのと同時に、俺はキュリオスの巡航形態・テールブースター装備に換装した。

それで楯無へのルートを一直線に進む。まずはテールブースターのに装備されている二門の大型ＧＮキャノンでルート上のビットや枝をなぎ払う。向かっている目標のために射程内に入っていた楯無本人は回避したが、目的のビットや枝は消せたので十分。

再展開されるビットや枝に備え、ヴァーチェほどの防御力ではないがＧＮフィールドを前面に展開して楯無に突進する。受け止める必要が無いなら、キュリオスのＧＮフィールドでも枝に対して十分

その役目を果たしてくれる。
ビットや枝を前面に展開したフィールドで弾き、後続は振り切りながら楯無へと向かう。
テールブースターの大推力ＧＮバーニアでただでさえ速いキュリオスがさらに速くなり、力任せに左右のヴェール二枚重ねの防御を突き破りながら楯無に突っ込んだ。
まず機体右側のサブマシンガンを楯無の左手向けて乱射する。そして楯無の左手から蛇腹剣（ラスティー・ネイル）を弾き飛ばしたところで、楯無をアリーナの壁に押しやりながら自分ごと突っ込んだ。
その衝撃で楯無の動きが一瞬止まったのを確認し、隙を突いて人型に変形。自由を取り戻した楯無の振る蒼流旋を左腕のクローモードにしたシールドで受け止めて掴む。さらに基部からシールドニードルを突き出し、蒼流旋を貫いた。持っていた二つの武器を使えなくしたところで右手のサブマシンガンを楯無の胴に押し付けるように乱射。初めは装甲が無くダメージを与えやすい頭を狙おうかとおもったが……まぁ、できなかった。戦闘中なのに甘いなぁ、俺。

「くっ……やれば、できるじゃない？　でも――」

「っ！？」

武器は封じ、集中力も散らせてビットの操作も妨げたはずだ。
なのに感じた危険を知らせる感覚に、楯無を蹴ってでも距離を取った。いや、正確には取ろうとした。
後ろに下がる瞬間に楯無の左腕が振り上げられ、右手のサブマシンガンの銃身が切り裂かれる。切られた場所が場所なので爆発することは無いが、銃身を切られた以上もう使えない。
そして振り上げられた楯無の手には――青い剣。
正確にはナノマシンで作った水の剣だと思う。たぶんそれで切られた。

使えなくなったサブマシンガンを収納し、代わりにクローとシールドニードルで確保したままだった蒼流旋を右手に持つ。

「さすが……。あっ」

そういえば、このあと一夏達との事があるんだった。

蒼流旋、小破させｔ……。まぁ、仕方ない仕方ない。

「獲ったモンは使わないとな」

ＧＮ粒子を操作して、蒼流旋に纏わせる。

できるかどうかわからなかったが、成功らしい。さすがガンダム。

そのまま右腕を引いて――突き出しながら、キュリオスの加速力で突進する。

「はぁっ！！」

「ふっ！」

当たる寸前に楯無の蹴り上げで俺の持つ蒼流旋は上に弾かれ、無防備になった懐にあの青い剣が迫る。

俺はシールドでそれを防ぎ、弾いてその衝撃で後退した。

「まだよ！」

左手にも持っていた青い剣を楯無が振ると、それがゴムかなにかのように伸びた結果鞭になり、蒼流旋とそれを握る俺の右手を絡めとって楯無のほうに引き寄せ始める。

「うぉっ！？」

そのせいで体勢を崩した俺はとっさに反対方向へスラスターを噴かせるが、ときすでに遅し。鞭を縮めながらこちらに向かって加速していた楯無から逃げることはできず、片手が使えない状態で――まぁ、これは楯無も同じだが――楯無に対応することになった。

楯無が空いている右手を引くと、握られた剣が三叉の槍に変形。それを突き出してくる。

「それっ！」

「ちっ！」

シールドで受け止めたが反動は殺せず後ろに弾かれそうになり、それを右手に絡みついた鞭は許さない。

突き出された右の三叉槍もグニャリと形を崩して鞭に変化し、左手も鞭に絡みつかれた。しかもご丁寧なことにシールドもぐるぐる巻きにされてクローを開くこともできない。

なにやらビットが無いとおもったら、こっちの操作に集中するためか……。

「さ、どうする？」

「両手がふさがってるのは楯無も同じだろ？」

「ざーんねん♪　……っと、保険は掛けなきゃいけないわよね」

鞭の途中から分岐した新たな鞭が足にも絡みつく。これで四肢を封じられてしまった。キュリオスの最大出力なら抜け出せないことは無いだろうが、そのバーニアの展開機構もナノマシンの水で封じられていて開けない。

「これで、ゲームオーバー★」

楯無が右足を振りかぶる。その足先からはまたもナノマシンで構築されたサーベルのような細い水の剣……アルケーかよ。

もう、限界か。連発してくるだろうからＳ・Ｅ残量も一五九じゃ耐えられない。ヴァーチェの重装甲ならともかく、キュリオスは装甲が薄いし。

――――でも、まだ負ける気は無いんだな、これが。

「ダブルオー！！」

『了解。ＧＮ－００００『ダブルオーガンダム』準備（スタンバイ）』

すぐさま今使える最高レベルの機体を呼び出す。

が、その前にバキィッ！　と装甲の叩き切られる嫌な音が響く。

そしてその衝撃も、俺へ伝わった。

確認するとキュリオスの装甲は左脇腹から右手付近までほぼ横一文字に切られていて、右手に持っていた蒼流旋は吹き飛んだ。

そして楯無は、追撃の左足を振り上げていて――――

『完了（コンプリート）。ＧＮ－００００『ダブルオーガンダム』展開』

「これで終わりっ！！」

「――――まだだっ！！」

楯無の声と俺の叫びが被たっと思えば、キュリオスがトリコロー

ルの機体に戻る。しかしそれはエクシアではなく、両肩に特徴的なコーンスラスターを備えた『ダブルオーガンダム』。
俺は即座に両肩のドライヴを前方へ向け、大量の粒子を放出する。
あの時――福音戦のときとは違ってトランザムは使用していないが楯無は後ろへ吹き飛ばされ、俺を縛っていた鞭も吹き飛んだ。

「ふぅ、間一髪。S・E残量は……一〇〇、か。上等！」

GNソード?を両手に持ち、構える。
目の前では楯無が体勢を立て直していて、俺の手から吹き飛んだ蒼流旋をさっきの鞭の応用で回収して構え直している。

「それが、本気?」

「手の内は隠すもんだろうよ。でも少なくとも、最高レベルだ」

会話が消える。
先ほどとは違う、なんとも言えない緊張感が漂い始めて――視線が交錯する。
俺のほうは装甲で包まれているが、同じタイミングで楯無も飛び出した。

ガキィッ――――！！

ソード?と蒼流旋がぶつかり金属音を撒き散らす。
俺はソード?二本、楯無は蒼流旋一本のままでぶつかり合う。
単純な出力・パワーだけならこっちのほうが上のはずだが、受け流されては意味が無い。

「うらぁぁっ！！」

「はぁっ！！」

何度も打ち合う。ビットも無い純粋な接近戦。……まぁ、あったとして自分に当たりそうだから使いずらいんだけど。

そして、均衡を保っていた打ち合いは純粋な性能差でこちらに傾きはじめた。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・下（後書き）

ついにダブルオーまでできた！（爆笑

……楯無さん、ドンだけすか。

次こそは終わらせます。というか、「下」を使った以上次で終わらないとどうしたらいいかわからなくなる！

では、感想・アドバイス等待ってますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・終』

ｐｓ．自分の作ったガンプラ画像をみてみんに投稿しまして、そのＵＲＬが活動報告にあるので、よろしければどうぞ。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・終（前書き）

ようやっと決着。
というか、結構無理やりかも。

では、どうぞ。

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・終

――二本のＧＮソード?で×を描くように切りつける。
楯無はそれを弾こうと下から上へ蒼流旋を振り上げたが俺の持つソード?は弾かれず、むしろ蒼流旋を押し込んだ。

「くぅぅっ！」

「ぅ――らぁ！！」

そのまま押し込んで切りつけようとしたが左右のヴェールから棒のようなものが延びてきて、一瞬だけソード?を受け止める。
その一瞬の時間で楯無はバックステップ。ソード?の届く範囲から抜け出した。

「やっ！！」

そしてすぐに攻撃に転向。
蒼流旋が俺に向けて突き出される。
俺はそれに対してソード?を横から当てて弾き、もう片方のソード?で楯無を切りつけた。
さっきと同じようなものがヴェールから伸びてきて、今度は絡み付くことでソード?の動きを阻害する。が、俺はそれを力任せに引きちぎってそのままソード?を振り下ろした。
楯無は振り下ろされたソード?を、引き戻した蒼流旋を上からぶつけて軌道を逸らす。
俺はそれに対応。振り下ろす途中でソード?を止め、振り上げた。

生身でやったなら腕にとんでもない負荷がかかることだろうが、パワーアシストと操縦者保護機能でその負荷はほぼ打ち消される。
手首をひねって力を加えやすい体勢になり、蒼流旋を上へと弾いた。

「くっ！？」

「これでっ！」

蒼流旋を弾いたのとは逆のソード？をライフルモードに変形させて至近距離で楯無へと向ける。
弾かれた衝撃で体勢を崩した状態では回避は不可能、と判断したらしい楯無がヴェールと蒼流旋を盾になるように構えたが……無駄だ。
ソード？の横になった刀身から放たれた一条の光線（ビーム）は楯無のヴェールを突破。蒼流旋の中ほどを貫通し、驚いた顔の楯無に直撃。
あわよくばその衝撃で後退しようとでも考えていたんだろうけど、それも甘い。
ツインドライヴの高出力で艦載砲レベルまで出力を高められたビームは、たった一撃でも致命的なダメージを与える。
数瞬の間の後、蒼流旋の機関部が爆発したことで起こった爆煙が晴れた向こうで、Ｓ・Ｅがゼロになって呆然とした顔の楯無を確認できた。

「嘘……」

「なにが？」

「シールド・エネルギー、まだ二五〇ちょっと残ってたのよ？　それが一撃で……」

楯無のことだ、ヴェールまで使って防御しようとしてたんだろう。
でもそれくらいではダブルオーのビームは止まらない。

「まぁ、だから奥の手なんだよ、コイツは」

しかもさっきのビームは通常より威力を高めるように、ティエリアに言って調整してあった。通常の射撃ならＳ・Ｅを二〇〇程度削るくらいだろう……それでも十分すぎるほど高火力なんだけども。
でも流石に砲撃専門のセラヴィーには劣る。ただ純粋に威力の大きい射撃をしたければ、ＧＮコンデンサに粒子を事前に蓄えておけばいいだけの話。そしてそのためのコンデンサが、セラヴィーには多く搭載してある。

「とりあえず下に降りよう」

そう楯無に言って、現在地である地上７～８ｍくらいの高さで『マイスターズ』を解除。
落下と共に感じる浮遊感を少しだけ味わって、ドンと地面に着地する。
楯無は普通に地面近くまで降りてきてから『ミステリアス・レイディ』を解除した。

「あーあ、負けちゃったなぁ」

「機体の性能差のおかげ。俺の腕前はまだまだだ」

「こーら。勝ったほうがそんなこと言っても、なんの慰めにもならないからそういうことは言っちゃダメだぞ♪」

そう言った楯無は俺の後ろに回りこんで、背中にしなだれかかってきた。

「あぁ……わかった。わかったから戻ろうぜ」

「むー、冷たいんじゃないの？」

「ほら、行くぞ～」

「あっ……」

俺は楯無の手をとって更衣室に繋がる通路に入る。

そしてそこで足を止めた。

「まったく、アリーナの中であんなことすると監視カメラに録画されるだろうが」

「いいじゃない、見せ付けてあげれば★」

はぁ……。ったく、やっぱりイイ性格してるよコイツは。

「俺が嫌なんだっての。……楯無のああいう態度は、他人に見せたくない」

横に居る楯無のほうを向き直って、その唇を奪う。

「ん……。前も言ったはずだ、俺は独占欲が強いんだよ」

もちろん、さっき監視カメラについて言った手前、この場所はその範囲外だ。

もう一度キスを――とかはしない。

「もう、いつも不意打ちなんだから……」

「そのほうが俺が楽しいからな。それに、そっちも不意打ちは多いだろ？」

「まぁ……家の仕事柄、ね」

そう言った楯無の顔にはどこか影があった気がしたが……すぐにいつも通りに戻ったから、気のせいだろう。

「じゃ、俺は外の出口で待ってるから。もう昼だし、食堂行こうぜ」

「わかったわ。じゃ」

別れて、俺はアリーナ出入り口付近の更衣室出入り口に。楯無は更衣室の中に入っていった。

俺の服装は制服を着崩しているだけで、展開しているときだけ中にＩＳスーツを着ている。そのときの服は格納領域行き。

それに出かけるわけでも寮の中でも無いから、私服は着れない。

「さて、すぐだろうけど待つか」

俺はアリーナの壁に体を預けて、出入り口の外に広がる空を眺めた。

◇

そして午後。

予定していた通り、一夏達が来た。

――駄菓子菓子。俺はあの五人組みにはまだ接触していない。

楯無が行って、なにかしらをすると……っても遊ぶんだろうけど。

ちなみに誘うのは、ほぼ織斑先生の命令だからみんな来てる。むしろ来ないと後が怖い。

「あー、やっときたか」

俺の待機場所はアリーナのカタパルト射出口。

それなりに高い場所から、たったいま入ってきた六人を見ている。

なにやらぎゃーぎゃーと騒いでいるようだが……楯無、なにをやらかした？

……あ、一夏が箒に殴られた。まぁ、どうせまたおかしな発言でもしたんだろうな。ほかの四人も一夏を睨んでるし。楯無はくすくすと笑ってるが。

さてと、楯無から合図がでたことだし、行くんだぜい。奇襲だにゃー。

すでに展開している白とモスグリーン、デュナメスの装甲。そして構えているＧＮスナイパーライフルの引き金を、俺は引き絞った。

牽制なので、だいぶ離れたところに着弾させる。

「っ――！？」

やはりというか予想通りに、一番に反応したのはラウラ。さすが軍属。ハイパーセンサーの拡大画像を通して見ている俺の前ですぐに『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開させた。

ほかの四人も警戒してＩＳを展開する。……って、楯無は笑って見てるし。

まぁ、いつもでも隠れててもしかたない。撃つときに解除して再展開した外部迷彩皮膜を解凍して姿を現す。

「ちっす。――さて、早速だけども、何をやるのかは事前説明したはずだから……始めようぜ」

特訓開始！　その一　拓神と楯無の模擬戦・終（後書き）

んむむ……やっぱりもうちょっと何かがほしかったかも。でも俺の限界でした。不満に感じたらすみません。
でもダブルオーＴＵＥＥＥＥがしたかった。でもその表現もまだまだですね。精進します。

それと最近、まだアイデアというかプロット段階なのですがオリジナルに手を付け始めました。やっぱり物語をつくるって難しい！
二次みたいに元の骨格がないですから……ってか、なにやってんだ俺。なにやってんだ受験生（爆笑

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ

次貝『特訓開始！　その二　さぁ、始まるよ……人類の革新が』

ではなく（笑
貝でもリボンズでもなく（笑

次回『特訓開始！　その二　始まる特訓』

特訓開始！　その二　始まる特訓（前書き）

久々に原作主要面子の出番ｗｗ
最近空気だった皆さんの登場です。

では、どうぞ。

特訓開始！　その二　始まる特訓

なんだか状況の理解できてないような四人。
ラウラだけは理解して……るのか？
とりあえずはカタパルトデッキから飛び降りて、そのすぐ下に着地する。

「なにするのか、ってのはわかってたよな？」

「あ、ああ。特訓だろ？　そうお前から聞いたし」

答えたのは一夏で、他の面子も首を縦に振っている。

「その通り。……ってことで、ＩＳは展開してることだし早速始めようか」

「え？　ちょっ、拓神！？　なんか説明とかないのか！？」

「……ああ、俺と楯無対お前らだろ？　無料（タダ）じゃないからなるべく武装を壊さないで行くつもりなんだが……よし、武器を攻撃するとき俺は威力を絞るから、ビットとかにビーム当たったら使用不可って事にしてくれ。ＯＫか？」

「わかったわ」

「はい。わかりましたわ」

「うん、わかったよ」

「了解した」

壊されるような武器を持っている四人が答える。

一夏と箒は……格闘武器だからどうしようもない。

「……それだけ？」

「あとは、より実践的な訓練だ。って呼ぶときに説明したぞ？」

「ふっ、すでに戦いは始まっている……ということか？」

ラウラが答える。

よかったぜい。一人だけでもしっかり理解してたにゃー。

「その通り――だっ！」

直後、轟音がとどろき、俺は横にステップで回避行動。

俺がつい今まで居た空間をラウラの大型レール砲の砲弾が通過していった。

「やはりかわすか……ならば！」

俺に向けて、ラウラが手のひらをかざす。

そこから飛びのいて、恐らく使われていたであろうＡＩＣの網から逃れる。

「食らうかよっ！」

「まだだっ！」

もう片方の手のひらが、俺に向けられる。
その先から逃げるように動いて、見えないエネルギーの網を回避し続ける。
……さて、そろそろいいか。
取り回しの悪いスナイパーライフルを収納し、両足のホルスターからＧＮピストルを両手に持って構える。

「ほら、ぽけっとしてない。あの二人だけじゃないんだから」

ボーっとこれまでの様子を見ていた楯無が、四人に呼びかける。
その呼びかけでハッとしたらしい四人が一斉に飛び立った。が、

「それと、敵は拓神だけじゃないわよ♪」

その声とともに、『ミステリアス・レイディ』に加え蒼流旋（さっき壊したやつではなく二本目）を呼び出した楯無の背後からのガトリング攻撃で、四人はバラバラに散開する。
その間にラウラをピストルで牽制。楯無と合流し、あっちの五人が集まるのを待つ。
そして集まったのを確認して口を開いた。

「さぁて、ここからが本番でいいよな？」

「ああ、わかった――

「「「行くぞっ！」」」「行きますわ！」「行くわよ！」「行くよ

！」

一夏・箒・ラウラ、セシリア、鈴、シャルロットが同時に返事を返してきて、それと同時に飛び出してくる。

――『アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』の準備は？

――問題ない、完了している。

――オーライ、『アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』展開

『了解。ＧＮＹ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』展開』

俺もアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２を展開し、楯無と一緒に飛び出す。

「行くぞ、楯無！」

「ええ！」

右腕にはプロトＧＮソード、左腕にはＧＮビームライフルとシールドのシンプルな装備を展開。プロトソードの刀身は展開させる。

それと同時に楯無に対してプライベート・チャネルを開いた。

［とりあえずは分断するか？］

［そうね……じゃあ、私がシャルロットちゃんとラウラちゃんに鈴ちゃんを相手するわ］

［了解。じゃ、まずはその方向で行くぞ」

通信は開いたまま、俺らを分断するように撃ってきたセシリアのレーザーをお互いに反対方向へロールして回避する。

正直、ラウラを楯無に相手取ってもらえるのはありがたい。楯無ならナノマシンの奇襲で集中力を簡単にそらせるからな。

「おぉぉぉっ！」

と考えていると、俺に向けて一夏が雪片弐型を構えながら突っ込んできた。

見れば、シュヴァルツェア・ハーゼでも隊長をしていて慣れているラウラを司令塔として、それぞれが得意な距離を保っている。

即席の連携だろうけど、いつも一夏をめぐっていろいろとやってるだけあって息はある程度合わせられるみたいだな。

「甘いっての」

初手から『零落白夜』と『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使って切り込んできた一夏を、プロトソードを使って受け止める。

プロトソードの表面、それも零落白夜に触れているところだけGN粒子によるコーティングが消失したが、受け止めることには何の問題も無い。さすがに瞬時加速まで使っている分、受けたときの衝撃は強かったがその分スラスターの出力を上げて対応。

「まずは、一発！」

「うぉっ！？」

雪片弐型を受け止めて、隙のできた一夏に向けて左手のビームライフルを撃つ。
一発目は簡単に当たり、二発目は一夏が下がったことでかすっただけ。

「やぁぁぁっ！」

「おらよっ！」

次に飛び込んできたのは箒。
箒の左手に握られる『空裂（からわれ）』をプロトソードで弾き、右手の『雨月（あまつき）』は、シールドを横からぶつけて弾いた。
そしてお互いに両手がすぐには使えない状況で、俺が箒を蹴りつけて距離を離す。
直後、俺と箒の間を蒼いレーザーが通過した。

「チッ、今度はオルコットか……」

セシリアのほうへ視線を向けると、四基のブルー・ティアーズを機体から切り離して射出している。

――プロトビットは？

――予想はしていたから、準備してある。

――ナイスだ。展開頼む、数は六で。

『了解、ＧＮプロトビット展開』

いつも通りスリースラスタータイプからコーンスラスタータイプに換装し、そこにＧＮセファーのコアブロックが被さる。そしてその両サイドに三基づつのプロトビットが展開された。

「行けっ！」

六基全てをセシリアに向けて飛ばし、制御をティエリアに任せる。チラッと楯無のほうを見てみたが、うまくあの二人を引き寄せてくれたようだ。

……分断に関しては言っただけで何もしてないし、俺。

「今度はこっちから行くぜっ！」

右手のプロトソードと左手のシールドを構えて、まずは一夏に突っ込む。

「おらぁっ！！」

体をコマのように右回転させて、その力も加えたプロトソードの斬撃を一夏にお見舞いする。

ガギィッ！　と重い金属音がプロトソードと零落白夜未発動の雪片弐型の間で鳴り響く。

一夏と向かい合っている状態の俺がシールドの装備されている左腕を体ごと背中のほうへ動かすと、そこにそこまで重くは無い衝撃が伝わる。

確認すると帯状にエネルギー刃を飛ばすことのできる空裂を振った姿の箒。

俺は右腕のプロトソードで一夏の雪片弐型を受け止めながら左手のビームライフルを箒に向けて撃つ。

それで箒を牽制してから、右腕のプロトソードを振り抜き一夏の体勢を崩させる。

「一夏、よろしく♪」

「は？　――っておわぁ！？」

背後からもう一撃エネルギー刃が飛んできたので、体勢を崩している一夏の手を引き斬撃からの盾に。

プロトソードの刀身をたたんでグリップからも手を離し、空いた右手にGNランチャーを展開。

「まぁ、ガンバ！」

一瞬の間のあとで太い一本の光条が、体勢を崩した一夏とその先に居る箒の二人を進行ルート上に収めながら直進していく。

一夏に直撃する瞬間、一夏を薄い光の膜が包みこみ、ビームはそれに触れた途端消え去る。零落白夜のバリア……やっかいだな。

「はぁぁぁ！！」

ビームを消し去った一夏の後ろから、紅い機影が飛び出してくる。

俺は振り下ろされる空裂と雨月の二本をランチャーを収納し再展開したプロトソードで受け止め、一夏にしたようにビームライフルを至近距離で箒に向けた。

特訓開始！　その二　始まる特訓（後書き）

この戦い、どう終わらせようか……
事実まだ決まってなかったり（笑

突然ですが、こんなのを考えてみました

楯無・セカンドシフト
「霧纏の女王（ミステリアス・クイーン）」
アクア・クリスタルが左右一対から左右二対、つまり四基に増える。形状もダブルオーのドライヴのような感じに。
四基に増えたことでナノマシンの生産能力が向上し、さらにアクア・クリスタル単基あたりの一定時間内生産数も増加。
ナノマシンは気化だけでなく凍結まで可能に。
そして装甲がレイディのときより多少多くなっている。
ヘッドギアがティアラに近い形状に変化。
武装の新規追加は無し。

ワンオフ
「霧纏う騎士達（ミステリアス・ナイツ）」
『ミステリアス・クイーン』を中心にして高濃度のナノマシンを散布・展開。
高濃度のナノマシンが霧のように大量散布された空間を作り出す。

ラウラ・ワンオフ
「ベクトル・キャンセラー」
慣性を停止させるのではなく、もののベクトルそのものを停止させる。一対一ではＡＩＣよりも凶悪。
集中することが必要な点は変わらないが、エネルギー系の武装に

対しても効果が十分に発揮される。
アクセラの能力を超限定したようなもの。

シャルロット・ワンオフ
「アームド・ワルツ（武装円舞）」
空間に武装を展開することが可能になる。銃や剣などの種類は問わない。
展開された武装はビットとなって自立的に目標に攻撃を仕掛ける。
シャルロットからの操作があればそちらが優先。
消費する弾丸もアビリティー発動中は補給され続け、瞬間火力と範囲攻撃力は第三世代ガンダムを上回る。

鈴・ワンオフ
「衝撃乱舞」
衝撃砲を好きなところから好きなように発射できる。
自分の体かＩＳアーマーのみだが、その汎用性は高い。全方位に向けて同時発射することもできる。

セシリア・ワンオフ
「ティアーズ・レクイエム（雫の鎮魂歌）」
任意のビットを総計で十基召喚。
通常のレーザービットに加えソードビット、ファングのような複合、シールドビットまでセシリアの考える形で召喚される。
破壊されると消失し、そのぶん再展開が可能となる。任意で消失させることも可能。
操作は「アームド・ワルツ」同様、基本はオートで目標に攻撃を仕掛けるがセシリアの操作が入る場合はそちらが優先されることになる。
召喚されたビットのエネルギーはアビリティーが発動している限り無限に供給される。

簪・ワンオフ
「嵐舞踊」
自分の周囲に大型ミサイルを召喚。
内部より小型ミサイルも射出され、大型ミサイル一機につき１５４の小型ミサイルが搭載されている。
親機である大型ミサイルも含めて１５５発ものミサイルを射出。
マルチ・ロックオンでその数だけ大型ミサイルを呼び出すことが可能で、総合計のミサイル数は白騎士事件の２３４１発を超越することも可能。
小型ミサイルを射出すると大型ミサイルの威力は落ちる。

こんなのを考えていた今日です。
セカンドシフトの案は楯無のみ。
ワンオフは白式と白騎士は生体再生までしてたから、物体の構築くらいならしてもいいかなと。
それにしても……みなさんチートな気がするｗｗ
そしてなんやかんやで一番強いのは楯無のワンオフだったり（笑
では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓開始！　その三　最初の模擬戦・上』

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・上（前書き）

まぁ、結果は予想できている方多いでしょうね……
とりあえずこっちは拓神対一夏・箒・セシリアです。

では、どうぞ。

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・上

超至近距離で等向けてビームライフルを撃つ。
一夏とは違い高速で回避されて直撃はしなかったが、掠らせはした。

「あー、もう面倒だ！」

ＧＮビームライフルとシールドを収納。プロトＧＮソードも一度収納してしまう。
そして改めて、右腕にはエクシアと同型で色違いのＧＮソードを展開。左腕にはＧＮハンドミサイルユニットとプロトＧＮショートブレイドを展開する。

――拓神、ブルー・ティアーズ全基の撃墜に成功した。こちらの損傷は軽微。一機も失ってはいない。

――よし、流石だティエリア。ビット全基戻してくれ。増設スラスターとして使う。

――了解した。

地面には、壊れてはいないが部分的に黒っぽく焦げているブルー・ティアーズが四基墜ちている。
さっき少しだけその様子をみたんだが……圧倒してた。動きのキ

レが違うし。
　というか、ビットがあっち四でこっち六だからってセシリア狙ってビットの動き止めるとか……結構鬼畜だなティエリア。
　そんなことを考えてるうちに六基のビットは全て戻ってきて――さっきから補給に帰ってきたりはしていたが――コアブロックに装着された。

「うし、行くか！」

　とりあえず、実弾兵器に対してめっぽう弱い一夏にハンドミサイルユニットの全弾を射出。十八発のミサイルを一夏に向かわせて、ハンドミサイルユニットを収納してから俺は箒に詰め寄る。

「ふっ！」

「甘いなっ！」

　突き出された雨月（あまつき）の剣先を左手のプロトショートブレイドで逸らし、右手のソードを振り下ろす。
　それは空裂（からわれ）に受け止められるが、雨月を引き戻される前にプロトショートブレイドを突き出す。プロトショートブレイドはシールドバリアーをやすやすと切り裂いて、絶対防御を発動させた。プロトとはいえさすがＧＮ兵器だな。

「くぅぅっ……！」

「でもやっぱ、深入りは厳禁か」

　ダメージで呻く箒を蹴って離れ、ソードをライフルモードに変形。左腕のＧＮバルカンとライフルモードのソードで、左右から迫っ

てきていた弾道型ブルー・ティアーズのミサイルを二発撃ち落とす。

「箒！」

「箒さん！」

俺と箒の間に割り込みつつ一夏が戻ってきた。

装甲がところどころ煤けているから、ミサイルの一、二発でももらったんだろうな。

一夏の振る雪片弐型をプロトショートブレイドで受け、その衝撃を利用して下がりながら俺の右上にいるセシリアの射撃を回避。ライフルモードのソードで反撃しておく。

「人より自分の心配してな！」

そこから再加速して、今度は右上に居るセシリアに向かう。

ソードのライフルで牽制しながら接近し、攻撃範囲に入ったところでソードの刀身を展開。後ろから飛んできた一夏のものだろう荷電粒子砲をかわしてからセシリアに切りかかった。

「っ……！　い、インターセプト！」

恥も捨てて近接用武装を展開するのは良いと思う。が、相手が悪かったな。

俺のプロトショートブレイドを受け止めたが……数瞬後にはインターセプトをプロトショートブレイドが切り裂き、セシリアにも刃が届く。

所詮はもしも接近戦になった場合のフェイルセーフ。雪片弐型や雨月・空裂みたいな強度のある剣ではなかった。

「きゃあぁっ！」

「もう一撃――チッ」

追撃のソードを振り下ろそうとして、その軌道を横に変更する。

もちろん刀身の面ではなく刃を当たるようにしながら。

ガギィィィ！　と、横から来ていた箒の持つクロスした二本の剣とソードがぶつかり合った。

その間にセシリアは距離を取って体勢を立て直し、スターライトmk?を持ち直して俺に向ける。

「いまだセシリア！」

「わかっておりますわ！」

右腕のソードで箒の対応をしつつ、セシリアの撃ったレーザーをプロトショートブレイドで切った。

まさかレーザーを切られるとは思ってなかったのか、セシリアは驚き目を見開く。

「な……くっ！」

何度も放たれるレーザーを足などに来た場合は動いて回避し、箒に遮られて無理なものはプロトショートブレイドで切り裂く。

それにしても……一夏はどこに？

「いまだ！！」

「っ！」

即座に周囲へと目を向ける。が、箒とセシリア以外は見当たらない。

って、セシリアが突っ込んできた！？

その手にあったはずのスターライトｍｋ？は収納されたみたいだ。

……徒手格闘でもするつもりかよ？

「どういうつもりかは知らねえが！」

向かってきたセシリアに、プロトショートブレイドを振り下ろす。

だが単調な斬撃は避けられて、そのプロトショートブレイドを持った腕ごとセシリアに掴まれた。

そしてそちらに気をとられた直後、箒に右腕を拘束される。

「一夏（さん）っ！！！！」

「おう！！　――――ぅらあああああっ！！！」

一夏？　どこに――――って遠いなオイ！

かなり離れていて、アリーナのシールドバリアーが張られているその一番上付近に白い影。そしてそれがこちらに向けて急降下してくる。

どうする？　ビット――は確実性に欠ける。この二人を狙ったとしても一夏がここにくるまでの時間稼ぎとしては十分だな……。ならば。

――アヴァランチダッシュ装備！　脚部だけでいいから！

『了解。・・・・・ダッシュユニット、限定展開』

一応ビットを展開し、一夏・箒・セシリアに二基づつ攻撃を仕掛けるよう、ティエリアにしてもらう。

それとアヴァランチダッシュの追加ユニットの内、ダッシュユニットのみだから展開までの時間は短い。

脚に、本来ならアヴァランチユニットと同時に運用されるはずのダッシュユニットだけ展開される。

ＧＮコンデンサへの粒子チャージはほとんどしてないからバーニアとしての意味は薄いが、追加武装としては十分だ。

一夏がこちらに到達するまでの数秒。

その間にダッシュユニットんも展開は終わり、ビットの集中砲火を受けてセシリアがＳ・Ｅをゼロにして墜ちた。箒は展開装甲を防御に回して防いでいる。セシリアの拘束から開放された腕を今から動かしても遅い。一夏はビット二基の攻撃を無視して、すでに『零落白夜』の起動した雪片弐型を振り上げている。

「これでぇぇぇっ！！」

振り下ろされる雪片弐型。それを俺は予定通り左足を振り上げ、ダッシュユニットのＧＮクローで雪片弐型の一夏の手元に近い部分を受け止めた。

「――はっ、残念！！」

「なっ！？」

「おらぁっ！」

雪片弐型を受け止めることに成功した俺は左手のプロトショートブレイドで一夏を切りつけ、すでにギリギリだった一夏のＳ・Ｅを

削りきる。
それと同時進行に右足で箒を蹴り飛ばし、雪片弐型を受け止めている必要の無くなった左足のクローよりビームサーベルを発生させて切りつけた。
俺の担当は後、箒だけだ。ならもう第三者からの奇襲は考えなくて良い。
奇襲を考えなくて良いなら……あとは追撃をかけるだけ。
クローからのビームサーベルで切りつけられ大勢を崩した箒に、右のクローからもビームサーベルを発生させて切りつける。それは箒の左つま先から発生したエネルギー刃によって防がれたが、ならばと右腕のソードで切りつけ、さらにもう一度左足のビームサーベルも叩き込む。
もとが崩れた姿勢からの無理やりな応戦だったため、箒は弾き飛ばされる。俺はその隙に左手のプロトショートブレイドを収納し、代わりにGNランチャーを展開。姿勢を立て直し始めた箒に向ける。

「これで、ゲーム・オーバー」

箒は回避はできないと思ったのか展開装甲の防御で防ごうとしたみたいだが、それじゃあ防御力が足りない。もうエネルギーも底をつく頃だろうし、事実明らかに防御のエネルギーは目に見えて弱弱しい。

箒はランチャーから放たれた太い光条に飲み込まれ、S・Eがゼロになって墜ちた。

「ま、三人ともお疲れさん。息が合ってるのはいいんだけど、捨て身なのはちょっといただけないな。確かに一夏の『零落白夜』の一

撃は強いけどさ」

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・上（後書き）

結果は……予想できてましたよね！（爆笑
でもがんばった。一夏達がんばった。

そしてなんだか出てきたダッシュユニット。
「別にアヴァランチダッシュで使わなくとも良いんじゃね？」の結果がこれです（笑
ダッシュユニットの単品登場。
ダブルオーザンライザーではなくザンダブルオーガンダムのようなものです（笑
いうなら「アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２ダッシュ」
今後も出ますよコレ。それなりに使えるって事が自分の脳内会議で判明したので（爆笑

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓開始！　その三　最初の模擬戦・下』

今度は楯無対鈴・ラウラ・シャルロットです。

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・下（前書き）

いろいろ言うより見てもらったほうが早い気がするので、どうぞ～

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・下

［とりあえずは分断するか？］

［そうね……じゃあ、私がシャルロットちゃんとラウラちゃんに鈴ちゃんを相手するわ］

［了解。じゃ、まずはその方向で行くぞ］

蒼いレーザーが拓神と楯無を分断するように放たれ、二人は通信をしながらそれぞれ逆に回避。

どうやらあちらの六人は二人に連携されることを嫌がったようだが、実際は二人とも単独戦闘のほうが得意不得意ではなく好みだったり。

「さて、行きましょうか」

楯無がそう言うと、楯無の目の前に居る鈴・シャルロット・ラウラの三人はそれぞれ構える。

前衛が鈴、中距離がシャルロット、後衛がラウラという布陣だ。

楯無も蒼流旋を構え、ヴェールを大きく広げて戦闘態勢に移行した。

「やぁぁぁっ！！」

まず先手を打ち、楯無に突っ込んだのは鈴。

連結していない両手の双天牙月を同時に振り下ろす、威力重視の一撃。

楯無はそれをヴェールで受け止める。……いや、『受け止めた』よりは水のヴェールで『包み込んだ』といったほうが正しいかもしれない。

双天牙月の刃がヴェールに当たったと同時、その刃は水に沈むようになってヴェールに包み込まれた。

まぁ、ヴェールはそこまで厚さは無いのでヴェールがへこむようにして包んだが。

「それっ！」

楯無はヴェールの一部に穴を開け、そこに蒼流旋を突き刺そうとする。もちろん狙いはその先に居る鈴。

鈴は引き抜いて下がろうとしたがすぐには抜けず、その間に蒼流旋の槍先が迫る。

当たる――と鈴が思ったとき、蒼流旋は横から射撃を受けてその先端がそれた。かすりはしたが、鈴はその間に引き抜いて後退した。

「やらせません！」

「あーらら、惜しい」

もちろん撃ったのはシャルロット。

その右手にはアサルトカノン「ガルム」が握られている。

そしてそれと左手に持った連装ショットガン「レイン・オブ・サタディ」を楯無へ向けて撃った。

しかしその弾丸は鈴の双天牙月を受け止めたのとは違うヴェールに当たり、それを弾丸は突破できずに水のヴェールの中で停止させられた。

「嘘ッ！？」

「やはりただの水ではなかったか……」

シャルロットは驚き、後ろでまだアクションを起こしていないラウラは忌々しそうにつぶやく。

「そうね、あなた達とは初めて戦うから説明してあげる。ラウラちゃんの言う通り、これはただの水じゃなくてナノマシンでできてる水。だからこんな風に弾丸を止められるし、こんな風に――好きなように操作できるの」

楯無が最後の台詞を言い切ったと同時、楯無の手のひらにはヴェールから分離した水の球体が乗っていた。

「じゃあ、これあげるわ」

ポイっ、と楯無がシャルロットに向けてその球体を放り投げる。

「え？　えぇっ？　ちょ、えええっ！？」

扱いに困ったシャルロットは、目の前に飛んできた球体に手を伸ばして――

「えいっ☆」

――楯無が左手の指を弾くと同時にその球体は破裂し、そこから針のような「ミストルテインの枝」がシャルロットへむけて飛び出した。

「きゃっ！」

シャルロットはとっさに下がろうとするが、スピードは枝のほうが上。球体が破裂してできた数本の枝はシャルロットに向かい着弾――しなかった。

枝は、シャルロットに当たる寸前で停止している。

楯無がラウラを見ると、ラウラはシャルロットのほうに手をかざしていた。

「ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）ね。弱点は集中力が必要なこと、だったかしら？」

「教える筋合いなど無いな」

「まぁ、そうでしょうね」

ラウラはシャルロットが十分に離れたことを確認して、ＡＩＣを解除。それと同時に枝は霧になって消えた。

「ひ、酷いですよ！」

「あら？　よくわからないものは受け取っちゃ駄目よ？」

「僕のせいなんですか！？」

「どうかしらね？」

……楯無、完全にシャルロットで遊んでいる。どうやらシャルロットの反応（リアクション）のよさを気に入ってしまったらしい。

「「シャルロット！　――――遊んでるんじゃない（わよ）！！」」

「ええっ！？　明らかに僕が遊ばれてたよね！？」

シャルロット……不憫な娘。

「さ、お遊びはここまでにしましょうか」

「やっぱり遊ばれてたぁぁ！」

叫びながらも、シャルロットは鈴とラウラの中間まで下がって両手に持つ銃を構えなおす。

それを見て楯無も改めて蒼流旋を右腕で構えなおした。

「それじゃ、今度はこっちから」

楯無が左手を掲げる。

すると一対のヴェールは楯無の真横に動き、左右のヴェールが翼のように大きく広がった。

三人はなにがあるかわからないため動けないが、すぐ動けるように準備をする。

「さぁ、醜く華麗に踊りなさい？」

「「「っ！！？？」」」

楯無は掲げた左手を振り下ろし、ほぼ水平で止めた。

それと同時に、左右に広げられた水のヴェールから数え切れないほどの水の針が射出される。しかも次々と射出され、その総数は徐々に増していく。

翼のようにヴェールを広げるのは攻撃範囲を広げるためで、そのあとの間は射出のためのナノマシンをチャージするため。腕を振り

下ろすのは……やりたかっただけだったりする。
あちらの三人とは初戦闘ということで、全ての工程をあちらが警戒している間に終えられたのは楯無にとってラッキーなことだった。
別にノーチャージでもヴェールを広げることさえできれば、数は減っても撃てる。
それに単に広げるだけでも水のナノマシンを増産する必要があるからそれで弾数も増す。
最悪、範囲は狭く数もさらに少なくなるが、元の大きさのままのヴェールでも撃つことは可能だ。楯無はそれを主に迎撃に使おうと思っているらしいが。
ちなみに「ミストルテインの枝」の形は自由自在。米粒サイズから拓神との模擬戦で使っていた剣ほどの大きさまで変えられるし、最も大きくすると「ミストルテインの槍」発動形態だ。
今撃ってるのはまともなダメージを与えられる大きさより少し大きい程度。あまり小さいと、数はあってもまともなダメージが入らない。
それでもミサイルなどの迎撃には十分なほど使えるが。

「くっ、このぉっ！！」

「うわっ！　くっ！！」

「この程度っ！！」

まずは最も近くに居た鈴に。その後シャルロット、ラウラの順でミストルテインの枝が襲い掛かる。
鈴は回避しながら衝撃砲と双天牙月で迎撃するが、いかんせん枝の量が多すぎた。どんどん被弾し、それらが次々と気化。爆発を巻き起こす。
シャルロットも右手に持つガルムを面制圧力の高いショットガン

であるレイン・オブ・サタディに切り替えて二丁のショットガン迎撃するが、やはり迎撃しきれず鈴と同じく爆発に巻き込まれた。
ラウラは自身の前にＡＩＣを展開し、自分に当たる射線のものは全て受け止めた。

「まだ甘いわね」

やり過ごした――と思ってラウラが安心したとき、ラウラの横合いから聞こえる声。

「な……に……？」

ゆっくりとラウラの顔がその声のしたほうを向く。
そこには蒼流旋に水を纏わせた、攻撃態勢の楯無。

「ふっ！！」

「がっ、ぐぅっ――！？」

ＡＩＣに集中していて行動が取れなかったラウラに、楯無は連続突きを放つ。
突きは何度もヒットし、最後の振りぬきでラウラは後ろに吹き飛ばされた。
そしてそのラウラに向けて、さきほどＡＩＣで止められていた枝と横を通り過ぎた枝が再集結し再射出された枝が殺到。
ラウラは二人と同じく気化爆発に飲み込まれた。

――――全ての気化爆発が収まった後で空に残っていたのは楯無

と、ちょうど戦闘を終えた拓神だけ。

二人はお互いのことを確認すると、地上に落ちた六人のところに下りていった。

特訓開始！　その三　最初の模擬戦・下（後書き）

楯無圧倒ｗｗ
ほぼ一撃必殺ですｗｗ

途中のやり取り、シャルロットが弄られたｗｗ
なんというか、シャルロット弄りって書いてて楽しいんですよ（笑

では、感想・アドバイスなどよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓！　その一　模擬戦終了』

あ、それと、またガンプラ作りました（オィ
活動報告のほうにＵＲＬはありますので、どうぞ。

特訓！　その四　模擬戦終了（前書き）

昨日の台風すごかったですねぇ。
自分のところでは学校が休みになりましたよ。

……おかげで書き上げられましたが（笑

では、どうぞ

特訓！　その四　模擬戦終了

ちょうどほぼ同時に戦闘を終えた俺達は、下にいるメンバーのところに降り立った。

「はい。とりあえず一回目、お疲れ様～♪」

「で、どうだったよ？」

楯無の後で、そう俺が訊いたら、

『無理。強すぎ。正直言って勝てる気がしない』

それぞれ口調は違うが同じことを言ってきた。

「……お前ら、なんでそんなに息ぴったりなんだ？」

「「「「「「そこじゃない（よ）（わよ）（ですわ）！！」」」」」」

「ほらまた……。まぁ、いいや。一応、この一週間で少なくとも一撃入れられるようにはなれ。うん」

「なぁ、そこって『してやる』じゃないのか？」

「なに言ってるのよ、一夏くん。今回の目的は技能を上げるのは二の次で、メインは戦闘経験よ」

「そういうこと。あ、でも一つだけ」

「なんだ？」

「お前と篠ノ乃は、ＰＩＣをマニュアル制御で使えるようになれ」

とか言っている俺だが、半分以上ティエリア任せだったりするんだぜい。

……いや、マニュアルでできるんだけど、ティエリアが制御してたほうが的確なんだよ。

さすがに半神でもヴェーダの演算能力には勝てないんだにゃー。

「ちなみに、あなた達以外の四人はそれが当たり前よ」

「そ、そうだったのか……」

「あ、そうそう。その指導は私が担当だからね」

「ああ、任せた」

人に教えるのは苦手だぜい。

さて、一夏達から代表候補四人のほうへ向き直る。

「さて、というわけでこっちの四人」

「私達（わたくし）はなにをするんですの？」

「簡単だよ。また俺と模擬戦」

「えっと、今すぐに……？」

「いや、流石に休憩は挟むよ」

それにしても簪を誘えなかったのは痛いな……。

でもたぶん、原作どおりだとまだ自力で『打鉄弐式』を組み上げようとしてるんだろうな。

俺が接触するのは無理だろうし、やっぱり一夏に頼むしかないのはわかってるんだが……やるせないな。できるなら夏休み明けすぐにでも一夏に動いてもらおう。

「ま、それはともかく」

――ティエリア、ダッシュユニットに粒子をチャージしといてくれ。

――使うのか？

――ああ。でも最初から展開する必要は無いから。

――了解した。ダッシュユニットだけなら十数分で終わる。

――オッケ。次にビットだけど、次から八基展開してくれるか？

――ふむ。なら展開形態も、セファーラジエル第五形態と同様にすることを推奨するがどうだ？

――第五……ああ、それで頼む。

――了解した。すでに粒子チャージは始めている。現在、チャージ状況は八パーセント。

――任せた。完了したら報告してくれ。

「オルコット、さっきインターセプト壊しちまったろ？　代えはあるのか？」

「あ、ええ。代えの武装や装甲は入学に当たってこちらに来るときに何セットか持って来ましたので。ですが、なんですの？　あの切れ味は。いくら私のインターセプターが予備的な意味合いで装備されている装備とはいえ、あんなに簡単に切り裂かれるなんて……」

「まぁ、あれは右手のデカイ剣より切れ味だけなら上だし。それ以上は機密だ」

さて、俺も少し休憩してくるかね。

◆

約十分の休憩後。

「さて、準備はＯＫ？」

「問題ありませんわ」

「いつでもいけるわよ」

「僕もＯＫだよ」

「いつでもいいぞ」

楯無と一夏、箒は別のアリーナへ移動した。さすがに広い範囲を使う模擬戦と、同じく広い空間があったほうが好ましい機動訓練を一緒にやるのは少しキツイ。

幸い、夏休みの最終週でもまだ前半ということで、学校に残っている生徒の数は二桁前半といったところか。そのうちアリーナを使用しているのはもっと少ないので、人が居ないアリーナもある。

――ダッシュユニット、粒子チャージ率九十％。戦闘行動に支障は無い、いつでもいける。

「よっし、なら……」

『ＧＮＹ－００１『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』ならびにＧＮプロトビット第五形態で展開』

アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２の背中にあるいつもは一つのコアブロックが、今回は積み重なるようにして二つ。それぞれ左右に二基づ

つのプロトビットが装備され、合計八基のプロトビットが装備される。

そのほかの武装はデフォルトで腰にあるビームサーベル。右手にGNソード、左手にはビームライフルと腕のアタッチメントにハンドミサイルユニット。両足にはピストルのホルスター。さらにグラビカルアンテナにGNランチャーを二基展開した。

「始めるぞっ！！」

俺の開始の合図と同時に空に上がった四人に向けてGNランチャーで砲撃。その結果を見る前に撃ち終えたランチャーを収納し、自分も飛び立つ。

――今の砲撃の相手陣営へのダメージは、ほぼゼロ。わずかに凰にかすった程度だ。

――ま、元から期待はしてなかったけどな。

四人の射撃を回避しつつ、接近してくる鈴音から少し距離を取り、プロトビットを上のコアブロックに装備されている内側の二基を砲撃用に残して六基を射出。中・遠距離で射撃をしている四人のほうに向かわせる。

ちなみに前衛が鈴音で中距離がラウラとシャル。でもってセシリアがフルバックという隊形

「まずはっ！」

残した二基のビットの銃口を前方へ向け、鈴音に向けて発射。

二本のビームは、その片方を鈴音に命中させた。

「ちょっ、そんな使い方できるなんて聞いてないわよぉぉ！」

が、鈴音は気合というか……とにかく、ビームに直撃したにもかかわらず突っ込んできた。

そのまま振り下ろしてきた双天牙月を、刀身を展開したソードで受け止める。

「驚いたなら、なんで動きを止めるくらいしないんだよ……」

「そんなことしたら追撃掛けられるでしょうが！」

「ま、ごもっとも――っと！」

ソードで双天牙月の刀身を押し返し、その反動で後ろに下がってそのまま回避行動に移行。俺に向かってくるレーザーやら実弾を全てかわす。

――すまない。押さえ切れなかった。

――六基（それだけ）で完全に止めるのはありえないっての。まだ生きてるんだよな？

――ああ、墜とされてはいない。

――十分だ。続けてくれ。

混じっていたブルー・ティアーズのものだと思われるミサイルは左手のライフルで迎撃し、ライフルモードにしたソードと背のプロトビットでシャルロットとラウラに牽制を掛ける。

「おらよっ！」

左手をラウラのほうに向け、ハンドミサイルユニットからミサイルを一斉発射。収納し、もう一つハンドミサイルユニットを呼び出す。そして今度はセシリア向けて撃った。

いつまでもそっちに気をやってはいられない。すぐに鈴音とシャルロットの位置を把握し、ソードとライフルを撃つ。

「本当、なんで四人も相手できるのさ……」

「シャルロットには『そこそこがんばったから』という答えをやる！」

「『そこそこ』ってなんなの！？」

「だーかーら、遊んでるんじゃないわよ！！」

鈴音の衝撃砲を避け、壊さないように威力を落としたビームで衝撃砲を狙って撃つ。

だがやはり、的が小さいのと動き回っているせいで当たらなかった。

そのまま接近してきた鈴音の双天牙月とソードで打ち合い、シャルロットと射撃で撃ち合う。

「楯無も言ってたけど、シャルロットを弄るのは結構楽しいな」

「会長はなんてこと言ってるのさ！？」

いや、本当に楽しい。でも手元が狂わないのは流石ってとこか。

不意にミサイルの爆発音が響いた。

――ミサイル着弾。オルコットに六発、ボーデヴィッヒに五発の着弾を確認した。

ふむ、まぁ十分だな。一人あたり一八発の内でそれだけ当たれば十分だろう。

「セシリア！　ラウラ！」

「だから、自分の心配したほうがいいっての！！」

とっさに振り向いて二人のほうを見たシャルロット。シャルロットに張り付いていたビットを鈴音に向かわせて、俺が接近する。

左手のライフルを収納し、代わりに練習以外では初めてＧＮハンマーを展開した。

「はぁぁっ！！」

「くっ――！？」

俺の振り下ろしたソードを、シャルロットは近接ブレード「ブレッド・スライサー」を展開して受けた。

「まだっ！」

「ぐぅっ！！」

ハンマーを、突き出すようにしてシャルロットの腹にぶつける。その勢いで後ろに吹き飛んだシャルロットにハンマーを撃ち出し、そのワイヤーを足に絡ませた。

「え？　うわっ！」

ワイヤーを引き寄せ、引っ張られてきたシャルロットにソードを叩き込む。そしてそのままワイヤーで振り回し、最も近い鈴音に向けて放り投げてやった。

「ほらよっ！」

「うわぁぁぁぁっ！？！？」

「ちょっ、こっちくるなぁぁっ！？」

ガンッ！　と二人は俺の考えどおりにに衝突し、鈴音はシャルロットに巻き込まれて地面に落ちていく。

特訓！　その四　模擬戦終了（後書き）

終わったと思ったらまた始まる模擬戦という（爆笑

ちょっと設定を変えてしまったので、そのところの話を改稿しておきます。セファーの装備形態についてですね。

四対一ってけっこう書きづらい……実際だったらそれこそ息もつかせないほどの攻防でしょうし。とりあえず何とかうまく表現できるようがんばります。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ

次回『特訓！　その五　模擬戦・拓神ＶＳ代表候補生』

ｐｓ　私の活動報告を見てくれるとありがたいですｍ（＿　＿）ｍ

特訓！　その五　模擬戦・拓神ＶＳ代表候補生（前書き）

武装神姫のＰＳＰ版の最新をアマゾンで注文。届くのは明後日かその次の日らしい……待ち遠しい！！

では、どうぞ。

シャルロットに巻きつけたワイヤーを外してから、巻き取って回収。
すでにシャルロットのＳ・Ｅはビットの追撃もあって瀕死状態…だと思う。少なくとも少しの間は動けないはず。

「次は……」

鈴は今シャルロットと落ちてった。セシリアのビットは弾道型を含んでティエリアの操るプロトビットで全て撃墜済み。ラウラはレールガンを使用不可。
それなら……。

「お前だっ！」

左側のグラビカルアンテナにプロトＧＮランチャーを展開。砲門の向く先は――セシリア。
背のプロトビット二基と合わせて発射。

――セシリアのとこに配置してあったビットを、シャルロットのとこに行かせてくれ。

――了解。

セシリアに向かった三発のビームは、ビットに気をとられていた

セシリアに全て命中し、セシリアを吹き飛ばす。

「きゃぁぁぁっ！」

「もう一撃っ！！」

接近しながらもう一度照準を合わせて、プロトランチャーへ粒子をチャージ。

チャージが完了し、確実にロックオンして――撃てなかった。

邪魔なプロトランチャーを収納して、その場から退避する。

回避した俺を追うように、四つのワイヤーがついたブレード――ラウラのワイヤーブレード――が追撃を仕掛けてきた。

「悪いがやらせるわけにはいかないのでな！」

「チッ」

それを全て右手のＧＮソードと左手のＧＮハンマーで叩き落とす。

ラウラのほうを見れば、二基のプロトビットの射撃を回避しながらワイヤーブレードを射出してきている。

ＡＩＣを使うほどの集中力は確保できなくても、この程度なら操作できるんだろう。どれだけティエリアがプロトビットを高度に操作したところで、足止めはできても攻撃の手を完全に止めることはできない。

仕方なくソードをライフルモードしてラウラを撃つ。

「セシリアは……」

ラウラへ牽制射撃をしつつ、セシリアの居るはずの方向を見てみる。

さっきビームの直撃で吹き飛ばされたセシリアは、その勢いでアリーナの遮断シールドに叩きつけられてたけど……。

「や、やってくれますわね……」

ふらふらとしながらも空に残っていた。

いや、実際はまだシャルロットすら撃墜してないけど。

「ラウラさん！　援護します！」

セシリアの放ったレーザーは、俺ではなくラウラに付きまとっていたプロトビットのほうへ向かう。

もちろんティエリアが操作しているビットが落とされることはほとんど無いだろうが、動きの抑制にはなった。

「面倒になったか……？」

「レールカノンが無くともっ！！」

接近してきたラウラに対して、ソードの刀身を再展開。ラウラのプラズマ手刀を受け止める。

至近距離で撃ち出されるワイヤーブレードは、左手のハンマーと両足で全て捌く。

「そこですわ――くぅっ！？」

セシリアにはラウラについていたビット二機が向かい、その足止め。

「おぉぉっ！！」

「この程度なら！」

ソードを力任せに振り抜いてラウラを弾き飛ばし、ハンマーを撃ち出してラウラへ向かわせる。

「ちぃっ！！」

バキィ！　と、ハンマーを受け止めたラウラの右手首のプラズマ手刀から破砕音が鳴り響いた。

どうやらＧＮ粒子の質量軽減効果の応用で威力の高まったハンマーは、単純な破壊力でプラズマ手刀を破砕したらしい。……なにそれ怖い。

ワイヤーを引き戻してハンマーを回収。ラウラの飛ばしてきたワイヤーブレードをハンマーを射出して全て弾き、そのままラウラへ向かわせる。

今度は受け止めずに回避されたので、それを追うようにハンマーを動かす。

ハンマーにもスラスターがついていて、それは射出のときに使うしこうやって少しくらいなら追尾させることもできる。

軌道を変えたハンマーがラウラへ向かっていく。それだけではなく、右手のソードをライフルモードにして撃った。

「くっ！！」

ラウラはビームを避けつつ、ワイヤーブレードを四つとも使ってハンマーの迎撃をする。

ＡＩＣを使わなかったのはいい判断だな。使ってる間は動けなくて、ビームに当たるだろうし。

ハンマーとワイヤーブレードが衝突する。それと同時に二度目の

破砕音。確認すると、ワイヤーブレードの刃の部分は四つとも砕けている。代わりにハンマーも止められたんだけども。
回収したハンマーと右手のソードを収納して、両腕にプロトＧＮソードを展開。
その後、下から来ていた不可視の衝撃と弾丸を迎撃する。

「嘘っ！？」

「完全に不意打ちだったはずなのに……」

「残念ながら、楯無と模擬戦してると不意打ちの回避なんてあたりまえだよ」

「なによそれ、もう無茶苦茶じゃない……」

「無茶苦茶で結構！」

プロトソードの刀身は展開したまま、グリップだけ収納して両手に足のホルスターからＧＮピストルを取りだす。別にグリップを握ってなくともプロトソードなら運用可能だ。
下に居る二人に向けてピストルを連射。まずは瀕死状態だったシャルロットのＳ・Ｅを削りきる。

「あちゃー、僕はもう終わりかぁ……」

「くぅぅ！！　絶対に一撃入れてやる！！」

どうやら鈴音さんは燃えているようです、と。
これで遠距離攻撃は、セシリアのスナイパーライフルと鈴音の衝撃砲だけ。

――プロトビット、六基全部セシリアに回せ。むしろそのままセシリア撃墜に追い込んでくれ。

――わかった。

――それと、ダッシュユニットの展開準備を。

――粒子のチャージは一〇〇%。いつでもいける。

――オーライ。

「……？　ビットが、ってセシリア！」

「わ、わかっていますわ！」

「おい、行くぞ！　はぁぁぁっ！！」

「わかってるわよ！！」

ラウラと鈴音が左右から同時に接近してくる。
セシリアはプロトビットに翻弄されているから、こっちに来ることは無い。

「来い！」

ピストルを左右それぞれに向けて連射。
その薄すぎる弾幕を回避して、二人は近接戦闘を仕掛けてきた。

「食らえっ！！」

「こんのぉぉぉっ！！」

双天牙月とプラズマ手刀をプロトソードで受け止める。

流石に重いな……でも！

「まだビットは残ってる」

砲撃用に使ってたビット二基を、俺自身の操作で動かして二人を狙う。

二人は回避運動に入る。その二人をピストルで撃ちながら、足にダッシュユニットを展開。待機状態のユニットをスキー板のように展開させ、先端のＧＮクローも展開。

「そらっ！！」

「きゃぁっ！！」

まず鈴音に向かって左腕のプロトソードを振る。双天牙月で受け止められるが、その間にプロトビットの射撃とダッシュユニットのクローから出したビームサーベルで切り裂き、鈴音は撃墜判定。右手ではピストルでラウラの牽制を続ける。

「くそっ！！」

「ＡＩＣは使わせないさ」

鈴音を墜とした事で、さっきの一斉攻撃に使った二基のビットも

ラウラの元に向かう。すでに制御はティエリアに譲渡済み。
ラウラに接近し、両腕のプロトソードをX字に振り抜く。流石に左手のプラズマ手刀だけでは受け止められず、そのとっさに出してきた左腕ごと押し切った。

「ぐぁっ！？」

「これで、終わり――！」

体勢を崩したラウラに、プロトビットとダッシュユニットのビームサーベルで攻撃する。
そして俺が右足を振りぬいたところで、撃墜。

「がぁっ！　――ぐっ、くそっ……」

「お疲れ」

セシリアは――――まだ生きてるのか。案外しぶといな。回避だけしかしてないけど。

――意外とがんばってくれる。

――そうだな。だが、ここまでとは……。

――ま、いいことだしさ。むしろビットだけでＩＳを倒すのはきついだろ。

――まぁ、そうなんだが。

――プロトビット、全部戻してくれ。

――了解。

セシリアを包囲していた六基のビット全てが俺の元に帰って来る。

「……？　情けか何かのおつもりですか？」

「いや、ビットがあると俺自身が撃てないし接近できないし」

ビットとダッシュユニットを含む機体各部のスラスター、ＧＮバーニアの出力を最大に。擬似的な瞬時加速（イグニッション・ブースト）で、ピストルを撃ちながらセシリアに接近する。

セシリアもライフルを向けてくるが……遅い。

腕を前に出した格好のまま突っ込み、プロトソードとビームサーベルで突き刺す。

いままでの戦闘にも言えることなんだけども、どの武装も最大出力で使うと絶対防御を貫きかねない威力を持っているので、バグなどと戦うとき以外はセーブしている。だから今回もＳ・Ｅを貫いて絶対防御を少し発動させた程度。

つまりはまだセシリアのＳ・Ｅはゼロになっていない。

「きゃぁぁっ！！　……ふ、ふふっ、この距離なら――ッ！？」

「かわせない、か？　残念」

セシリアが取りこぼしそうになっていたライフルを持ち直そうとしていたが、俺は背のプロトビット。その上段の四基を前方に向けている。

これなら、撃つのは俺のほうが早い。

「このこと忘れてたか？　ま、どっちにせよ終わりだな」

――――直後、俺の背にあるプロトビット四基から放たれた四本のビームが、セシリアを撃ち抜いた。

特訓！　その五　模擬戦・拓神ＶＳ代表候補生（後書き）

みなさん何かとがんばってた回（笑
特にラウラとセシリアあたりが。
不意打ち当たり前ってのもどうなんだ、拓神よ（苦笑

あー、来週からテスト期間だー。
……よし、届くであろう武装神姫で現実逃避をしよう。そうしよう
（オイ
と思いましたが、流石にそれはヤバイどころのお話じゃないので…
…でもたぶん自粛できない。俺はそういう人間だもの（爆笑

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓！　その六　楯無と一夏・箒』
次は楯無の一人称にチャレンジ……しようと思ってます。

＞ｉ３１８０８―３０８３＜
→またあそんでみた（笑

特訓！　その六　楯無と一夏・箒（前書き）

いやー、超久々に書きましたよ楯無サイド。
そんなに時間が掛からなくて良かったです。

では、どうぞ

特訓！　その六　楯無と一夏・箒

楯無ｓｉｄｅ

拓神とは分かれて、私は一夏くんと箒ちゃんの指導をすることになった。

むー。二人の指導を拓神から頼まれたって言っても、拓神が他の女の子とだけ居るっていうのはなんだかいい気分じゃないわね……。

まぁ、そのことをいちいち気にしてたら、この学園じゃ気が持たないんだけどね。なにせ拓神と一夏くん以外は全員女子だし。

「あの、どうかしたのですか？」

「ううん。なんでもないわよ箒ちゃん」

っと、ちょっとボーっとしてたみたいね。

私達がいるのは、拓神たちの居る第三アリーナから少し離れた第六アリーナ。

学園のモニュメントでもあるタワーを昇っていけるようになっていて、本来なら高機動実習や『キャノンボール・ファスト』のときに使われるアリーナなのだけど、急降下からの急停止するＰＩＣの制御の訓練を二人にしてもらうにはちょうどいいからね。

「さ、二人とも。まずはＩＳを展開して？」

「「はい！」」

二人が白と赤のＩＳを展開する。
でも私の目は、自然と赤のほうへ向いてしまう。
第四世代型ＩＳ『紅椿』。世界唯一の第四世代型機であり、開発者である篠ノ乃束博士お手製のＩＳ。そして現行のＩＳを全て凌ぎ、第四世代型の名に恥じないスペックを持つ。
……でも、こんな騒乱の中心になるようなＩＳを、自分の妹に与えるなんて……。
確かに同じ姉として、良いものをあげたいっていう気持ちはわかる。……まぁ、あっちも私のほうも姉妹関係は良いとは言えないみたいだけど。
篠ノ乃博士……あなたは一体何を考えてるのかしら？
まさか未来のことを予見して？　……それこそまさかね。なにより、この世界は本当の歴史とは逸れ始めてるって拓神が言っていた。
バグっていうアンノウンに、転生者で半神の拓神。さらに私も半神になった。イレギュラーが紛れ込んだ世界はどこか歯車が噛み合わなくなって、その部分を補正しようと動いている……。

「えっと、で、ＰＩＣをマニュアルにってどうすれば……？」

「あ、それはシステムのコンソールを開けばわかると思うわ」

「これ、か？　……あ、あったあった」

「箒ちゃんも大丈夫？」

「え、ええ。問題ありません」

ま、今はそんなことを考えていても仕方ないわね。どうせ答えは出ないのだろうし。……いや、確かな答えは無いっていうほうが正

しいのかしら。

「さ、それじゃ、まずはそのまま飛んでみて」

フワリと二人が少しづつ上昇を始める。

二人とも恐る恐る……といった感じで、ゆっくりと。

「本当なら見本を見せたほうがいいのだけど、あいにく一人でやってもわかりづらいのよ。ごめんなさいね」

「い、いやそんなっ！　――って、うわっ！？」

「箒！？　――って、うわっ！？」

慌てだした箒ちゃんがＰＩＣの制御を失って、続いて一夏くんもそれにつられて地面に落っこちてしまう。

「ちょっと、大丈夫？」

「痛てて……」

「うぅっ……。いっ、一夏っ！？」

土埃が晴れると、地面に倒れる箒ちゃんに、一夏くんは覆いかぶさるような体勢になってしまっている。顔がすっごく近い。

箒ちゃんは真っ赤になってアワアワと混乱しているのに、一夏くんは「悪い！　大丈夫か？」と純粋に心配している様子。

……なんというか、見ていて微笑ましい光景ね。でも、拓神があんな性格じゃなくて良かったわ。たぶん私のほうが我慢しきれなくなっちゃうから。

「ほら、イチャイチャしてないで。続けるわよ」

「い、イチャっ――！？！？」

「してませんよ！　第一、嫌がってるじゃないですか」

「むっ――」

「ぅわっ、ちょっ、箒！　なにすんだよ！！」

「ふん！」

「ったく、意味わかんねぇ……」

一夏くんを突き飛ばす箒ちゃん。どうしてか、今だけはＰＩＣのマニュアル制御ができてるわね。

恋も訓練も、まだまだ先は長そう。……私はその光景を、そんなことを思いながら見ていた。

◆

あれから数時間。夕方近くになってようやく、飛ぶことが形になってきた。
それでもまだ急制動はできていないし、飛ぶだけで精一杯の様子。
さっき一回タワーを昇ってもらったけれど、箒ちゃんが途中で制御を失って落っこちてきたときは内心ヒヤッとした。
まぁ、箒ちゃんは私じゃなくて王子様に助けられたわけだけど。

「――おーい、調子はどうだ？」

後ろのアリーナ入り口から聞こえた私の王子様の声に、つい嬉しくてニヤケてしまった。
でもそんな顔は見せられないから、平常心を意識して振り向く。

「――まぁ、筋はいいわね。まだまだだけど」

「そうか。まぁ、そんなもんか？」

「経験も技能も、足りないものがいっぱいだから。この二人は」

いまはアリーナの地面に座り込んでいる二人のほうへ目を向けて言う。
まだまだ、私からすれば全然といったほどに、この二人には足りないものが多い。
まぁ、国家代表（わたし）と今年の春にＩＳに乗り始めた二人を比べるのはかわいそうだけどね。

「そっか。……あっちの面子も同じ様な感じでへばってた」

「へぇ。一体何回戦ったの？」

「ん？　三回、だな。休憩と補給を挟んで」

「それはきついでしょ？　あの娘達も拓神も」

「俺は体より精神的に疲れたよ。でもいい経験にはなった」

四対一を三戦。しかもこの数時間の間に。

これはさしもの代表候補生でもクルでしょうね。

「そう。で、あなたのダメージは？」

「最後だけだけど、ボーデヴィッヒにビットを一個つぶされて、凰の特攻でちょっと食らったよ」

「そうなんだ。で、あの四人の様子はどうだったのかしら？」

「どうであろうとやっぱり代表候補生って感じだった。最後の戦闘はちょっと苦戦したし」

あはは、と笑う彼につられて、私も笑顔になる。

……うん、やっぱり拓神の隣は良い。これからもずっと居たいって思うくらいに。

スッ、と拓神の後ろに回って抱きつく。

「お、おい……」

「嫌かしら？」

「前もこんなやり取りがあった気がする……」

気のせいでしょ、気のせい。
一夏くんと箒ちゃんが見てきてるけど無視無視♪
腕に力を込めて、もっとくっつく。

「な、なぁ、離れてくれないか？」

「んー、イーヤ♪」

「はぁ、やっぱり？　そうですか」

嫌嫌って感じだけど、頬が赤くなってるのがわかるぞー。あ、私もか。
それに、お互いにドキドキしてる。二人が居なかったらキスするくらいには。

「ふぅっ。おーい一夏、篠ノ乃」

「なんだよ？」

「何かあるのか？」

「いやな、ＶＢＰってわかるか？」

「「ＶＢＰ……？」」

拓神の頭越しに二人の様子を見ると、顔を見合わせて？マークを浮かべてた。
流石に拓神の話しの迷惑になるだろうから、仕方なく離れる。

「正式名称、ヴェーダ・バックアップ・プログラム。ＩＳの操縦支

援プログラムなんだけど、お前らのＩＳに入れてくれないか？」

「操縦支援？　どんな？」

「簡単。いまお前らがやってるマニュアルでのＰＩＣ制御とか射撃の補佐とか、とりあえずは大体のことに補佐が掛かる」

「ちなみに私のＩＳにはもう入れてあるわ」

「それで、どうして私達なのだ？」

「ＩＳは個人の持ち物じゃない。……俺やお前らみたいな特例を除けばな。だから、搭載するにしてもその国の許可が必要なんだよ。楯無はそれをクリアしたみたいだけど、面倒なことには変わりないし」

そうそう、あれは面倒だったわね。

一部の連中は駄目の一点張りだし……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをした私は悪くないはずよ。

まぁ、この『ミステリアス・レイディ』を組み上げたのは私だから少しくらいは融通が利くんだけどね。

「その点、お前らはほぼ完全に個人で所有してる。だから、お前らの許可さえ取れれば乗せたいんだよ。悪くはならないのは保証するさ」

「私からもお願いするわ」

嫌な言い方だけど二人だけの男性操縦者も使ってるとなれば、かなりのネームバリューの恩恵が受けられる。

すでに私も使ってるから、ロシアのＩＳにはその稼働データ次第で搭載が早くなりそうだし。

「まぁ、俺は構わないけど？」

「一夏がそう言うなら、私も構わない」

「ああ、サンキュー」

箒ちゃんって、結構一夏くんに依存してるのね。
幼馴染ってことで、一番付き合いが長いんだろうけど。
拓神が二人から待機形態のＩＳを受け取る。

「プログラムだけで、今日の夜には返せるからな」

「わかった」

そう言うと、拓神は整備室のほうに歩いていく。
私は二人に、今日はもう終わり。と告げてその背中を追った。

特訓！　その六　楯無と一夏・箒（後書き）

何かおかしなところがあれば指摘お願いします。

いや、それにしてもそこそこ大変でした。

勝手が拓神のときと違いすぐる。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿）ｍ

次回『特訓！　その七　二日目突入！』

特訓！　その七　搭載へ？（前書き）

火曜にテストなのでストックを投下。
テスト嫌だよォォォ！！！

では、どうぞ～

特訓！　その七　搭載へ？

後ろから楯無が追ってきてるのを確認しながら、俺はアリーナの整備室に入る。
もちろん、二人のＩＳにＶＢＰを搭載するためだ。
二人で整備室に入って『白式』と『紅椿』、そして俺の『マイスターズ』を整備室に置いてあるＩＳ用の端末に繋ぐ。

「……あ」

「拓神、どうかした？」

「いや、白式の方って一応織斑先生に許可取ったほうがいいと思わないか？」

「あー……それはそうね。うん、確かに」

「だよな？　よし、連絡でいいか」

その端末から、職員室の端末にコール。
これはテレビ電話のようなもので、モニターに相手の顔が映る仕様のものだ。
事務の人に取り次いでもらって、織斑先生がモニターに映る。

『玖蘭、何か用か？　あいにく夏休み明け前は忙しくてな、長話をする時間は無い』

「大丈夫です。すぐ終わりますから」

『そうか。なら、なんだ？』

「ＶＢＰを一夏の白式に載せても大丈夫なのかどうか、一応聞こうと思ったので」

『もう動き始めているということか。……本来白式は日本所属のＩＳだ。だから、本来なら日本政府の許可が無ければ自由な改造はできない』

あー、やっぱり日本所属だったのか……。

俺が諦めかけたところで、織斑先生が言葉を続けた。

『だがな、今の白式はＩＳ学園所属だ。なにせお前や織斑は特殊すぎるせいで、各国からデータの開示を求められている。それが日本所属のままだとどうなるか、わかるだろう？』

「ああ、はい。日本政府が責められますね。確実に」

『そうだ。だからどの国家にも属さない、どの国家の命令にも従う義務は無いこのＩＳ学園所属の機体という扱いだ。もちろんお前のマイスターズもな。だから今は問題ない。不安だというなら、搭乗者に許可を取ったプログラムの試験運用という名目でやればいい。まぁ、どうであろうと学園内部以外からは何も言われないがな』

「そうですか、それなら良かった。紅椿は本人の許可さえあれば問題ないですよね？」

『あの機体はどこかの国家所属でも企業所属でもないからな。本人

が言いといったなら良いんだろう。……ただ、あのバカが何か仕掛けてないとは思えないがな』

「あ、あはは……。わかりました。手間を取らせてすみません」

『ああ、ではな』

プツリとモニターに開いていたウィンドウが消える。それと同時に通信も切れた。

「――さて、問題ないようだし、まずは白式からか」

白式のシステムウィンドウを展開して、それをマイスターズ経由でヴェーダに繋ぐ。

――ＶＢＰのプログラムを白式にインストール、できるな？

――無論問題ない。開始するが、構わないな？

――ああ、やってくれ。

――数分で全工程が終わる。

――オーライ。

モニターには白式のウィンドウの下にバーが表示され、それが左から右へと動いていく。

――ところで拓神、ものは相談なんだが……。

――どうかしたのか？

――そろそろ楯無嬢にだけでも、僕の存在を明かしても良いんじゃないか？

――あー、そうか。そうだな。

「よし、そうするか」

そろそろ頃合だろうし、楯無ならティエリアの存在をばらしても問題ない。

なによりアーチャーアリオスのときに、ＧＮアーチャーの操縦を任せようとも思ってるんだ。もう良いだろ。

……それよりなんで『楯無嬢』なのかが気になるが。

「拓神、急に喋りだしたけどどうしたのよ？」

「いや、そろそろ良いかなってさ」

「なにが？」

「コイツのことバラすの。――良いぞ、ティエリア」

待機状態のマイスターズから、ホログラフィックの人影が投影される。

肩より少し上までの紫色の髪に、中性的な顔立ち。眼鏡をかけて、

ダブルオーファーストシーズン時の私服を着たティエリアだ。
身長は元の大きさに戻っているので、目線の高さは俺たちとさほど変わらない。

『この状態になるのも久しぶりだ。――始めまして、楯無嬢』

「え……えぇ？　ちょ、ちょっと、どうなってるのよ？」

混乱して慌てる楯無を拝めるとは……。今提案してきたティエリアに感謝するべきだろう。

『僕はティエリア・アーデ。このマイスターズの制御人格だ』

「制御人格……？」

『ああ、ＩＳコアにあるとされる深層心理。それが表面に出てきたと考えてもらっていい』

「それって……」

「世界的にみれば、大発見どころの話じゃないな。ＩＳに自我はあるとされてるけど、それがこんな風に出てくるなんてのは前例が無い」

「これもあなたのお父さん……神様のおかげ？」

「その通り。でも、普通のＩＳにもそれぞれ人格がある。表に出れないほど深い領域にだけどな」

海で例えれば、海面から一万メートルレベルの海底ほどの深い領

域だ。
　たぶんトランザムライザーの意識共有領域なら、他のＩＳでも表に出てこれると思ってはいる。そしてその後で、素質のある人格だけだが、トランザムライザーの影響でイノベイターに覚醒するように、意識が覚醒するＩＳコアもあるかもしれない。
　あくまで予測の話だが、恐らくは起こる。

「んで、コイツにはＩＳ使ってるときに一部の制御とかを任せてる。ビットとかな」

「ああ、だからあそこまでうまくビットを使えるのね。……なにせ一人じゃなくて二人でやってるんだもの」

「まぁな。卑怯だと思ったか？」

「そうね……少しだけ。でも、実戦じゃ卑怯も何もないわ。……勝った方が称えられるのよ」

『その通りだ、楯無嬢。勝てなければ意味が無い、それが戦闘というものだ』

「あら、あなたは何か知ってそうね？」

『確かにな。……教えないが』

「ざーんねん」

「……おい、なに二人で話してんだよ」

あー、なんだかむしゃくしゃする。

「あら？　嫉妬しちゃった？」

「……そうかもな」

ピッ！　と端末が音を立てる。
白式にＶＢＰをインストールできた合図だ。

『全工程、何の問題も無く終了した。次に紅椿に移る』

「篠ノ乃博士のことだ、何かを仕込んでるかもしれない。何かあればすぐ引け。こっちの情報を漏らさないことを第一に考えてくれ」

『わかった。作業に入る』

ティエリアが目を閉じて、何かに集中する。
そして目を開くと、そこには虹色の輝きが宿っていた。

「彼も、神力を使えるの？」

「いや、違うよ」

まだ、ヴェーダは誰にもバラせない。
ひいてはティエリアがイノベイドであることも隠しておく必要がある。

「別の力か、人格の力ってことね」

「そゆことだ」

しばらくして、ティエリアがわずかに眉を顰めた。

「どうした？」

『セキュリティが何十重にも張り巡らされて、奥に進めなくなっている。普通の整備程度ならなにも問題ないが、プログラムの投入などはできないようになっているということだ。それに機体のシステム自体が通常のＩＳと違う。確かに大元は同じでも各所に改良が加えられていて、システム面でも従来のＩＳを超えている……これ以上の閲覧は何か仕込まれている可能性があるために不可能だ』

「うーん……確かに、箒ちゃんのほうがマニュアル制御がうまくいってたわね。そのおかげかしら」

『その可能性はあるな』

「こっちは諦めるしかない、か。でもそれだけの性能があるなら問題ない……？」

『総合的に見て、現在の第三世代ＩＳにＶＢＰを搭載した場合と比べると、少し劣る』

「でも、その程度じゃ問題ないだろ。……さすが博士ってな」

『これは僕の個人的意見なんだが、篠ノ乃束は発想力がずば抜けているんだろう。確かに技術力もあるが、全てはそこだ』

ティエリアの言い方から察するに、ヴェーダすら超える発想力。

それでＩＳなんて物を造り出したのか。

「とんでもない発想力ねぇ……まぁ、そんな人じゃなきゃＩＳなんて造らないだろうさ」

「常識を超えるから、それまでの常識を覆せるってことかしら」

楯無の言っていることは大方合っているだろう。

それまでの常識に囚われていれば、そこから抜け出せない。それから抜け出すことは、常識を超えるということ。

「ったく、恐ろしいな」

「そうね……」

『まったくだ……』

ティエリアを含めた三人の声が、広い整備室に響いた。

特訓！　その七　搭載へ？（後書き）

ティエついに出番が増えるか！？（爆笑
徐々に他のメンバにもばらしていくかと。

紅椿には束さん製のシステムが積まれていることにして、とりあえずは白式だけＶＢＰを搭載させてみました。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓！　その八　二日目突入！』

特訓！　その八　二日目以降へ突入！（前書き）

まずはサブタイを予告より多少変更しました。

どうも、三連休なのにこれしか投稿できそうになくてすいませんm（＿＿）m

それと、活動報告でコメを下さった皆様にはここで感謝の意を表させていただきます。どうもありがとうございました。

それでは、その詳しい話はあとがきでするとして、どうぞ

特訓！　その八　二日目以降へ突入！

「じゃ、確かに返したからな？」

「おう」

「ああ」

夕食の後、俺は食堂に来た一夏と箒を引き止めて、それぞれのＩＳを返却。

「白式へのインストールは何の問題も無かったけど、紅椿のほうに入れるのは無理だった。博士のセキュリティが掛かってさ」

「ありがとな、拓神」

「そうか……わかった」

「いや、礼を言うのはこっちだ一夏。それと悪い、篠ノ乃」

ＶＢＰの搭載に付き合ってもらってるのはこっちなんだし。

「姉のせいで手間を掛けたようだ。すまないな」

「あー、篠ノ乃が謝ることでもないんだが」

「いや、しかし……」

「じゃ、お互いにってことで」

「むぅ……了解した」

なんだか不服みたいだが、まぁ理由は大体察せる。

ま、それはおいといて、とりあえずは……と。

「ああ、ちなみに紅椿には元から博士のシステムが積んであった。既存のＩＳに使われてるやつをかなり改良したやつがな。だから、ＶＢＰを積まなくても十分サポートされてる。

それと一夏は、明日最初の起動のあと少し慣らせ。たぶん、っつーか絶対に感覚にズレがあるから。ＯＫ？」

「そうなのか……」

「おう、わかった」

二人に忠告をした後、じゃな～と言って俺は食堂から部屋に戻った。

ちなみに夜は何もなかったと言っておこう。

◆

夜も明けて、俺たちの特訓は二日目に突入。

今日は午前中からで、一夏と箒は最初からマニュアル操作のほう

の訓練をする予定だ。
……できることなら、今日中に一夏と箒には基本的なマニュアル操作にはある程度慣れて欲しいところだにゃー。そうじゃないと二人の実戦訓練ができないし。
それに――――とにかく、時間が無い。
……なんでかはわからない。が、そう感じる。直感で感じている、そんな感覚。
ただ、福音のときみたいな強いノイズは感じてないから、バグがすぐ来るってわけじゃなさそうだ。
だが少なくとも、準備をしておいて悪いことは無い。それに、バグだけじゃなくて亡国機業のこともある。
……改めて考えると問題は山積みな気がしてきたなぁ、オイ。
「……まぁ、今は考えても仕方なしっと」
とりあえず保留して、俺は昨日と同じ第三アリーナへ足を踏み入れた。
アリーナのフィールドに入ると、そこには既に四人が居て、集まってなにやら話している。
よし――こっそり近づこう。
そろりそろりと近づいて（楯無直伝の気配消去法を使用）、と。
「よぉ、早いな」
「「「「っ！？」」」」
バッ！　と一斉にこっちを振り向く四人……少し怖かったぜい。

「い、いつの間に……」

「安心しろ、今来たばっかで話は聞いてないから」

「気付けなかった……」

「気配が全く無かったのに……」

「全く気付きませんでしたわ……」

流石にＩＳを展開されてたらこっそり近づくのは無理だけどな。

ハイパーセンサーでバレる。

「さぁ、準備はＯＫ？」

『『マイスターズ』起動、モード選択（セレクト）ＧＮＹ－００１Ｆ２『ガンダムアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』』

両腕にプロトＧＮソード、ＧＮハンドミサイルユニットをそれぞれ装備。それに加えて右腕にＧＮハンドミサイルユニット、左腕にはＧＮシールドを装備。両膝の外側にもＧＮピストルを装備して、空に上がりながら四人から距離を取った。

あちらもそれぞれＩＳを展開して空に上がる。

そしてお互いに準備が完了したのを確認して――

「んじゃ、始めるぞっ！！」

――俺は両手のランチャーのトリガーを引いた。

◇

あれから五日経った。つまりは最終日。

一夏と箒は昨日までに大体マニュアル操作ができるようになっていた。

……二日前に様子を見に行ったら、楯無のナノマシンの「ミストルテインの枝」に追い掛け回されていた気がするが、気のせいだ。ああ、気のせいだ。うん。

こっちはというと、一番目に見えて変わったのはセシリア。自分が動きながらもビットの操作ができるように。

後はシャルロットもタッグマッチのときに使った瞬時加速をマスターしたみたいで、正直模擬戦でかなり厄介だった。

……なんか鈴音もシャルロットから教えてもらって使ってくるのが怖い。

まだ成功確率が低いみたいだけども、シャルロットと一緒に左右から同時に瞬時加速で近接格闘するのは止めて欲しい。瞬時加速のスピードを乗せた斬撃ってメッチャ重いんだよ。腕が軋むんだっての。肉体に掛けてあるリミッター外せばぜんぜん平気なんだろうけど、平常状態じゃキツイ。

そしてラウラは指揮の能力がさらに上がって、正直かなり厄介だった。たまに隙を見て使ってくるＡＩＣのうざいことうざいこと。

模擬戦じゃ一番最初に狙ってやったし。

「それじゃ、最後の模擬戦いってみよう♪」

「おい楯無、なぜにそんなにテンション高いし」

「「「「「「（コクコク）」」」」」」

あー、そういえば楯無って一昨日まで一夏と箒の指導だったから、あんまり疲れてないのか……。

もうこの六人はいろいろと疲れた顔してるのに。

「だって、みんながこの一週間でどのくらい強くなったか気になるのよ」

「そういえばコイツ、バトルジャンキー予備軍だった……」

予備軍なだけまだマシだな。予備軍じゃなくなったら……恐ろしっ。

「よっし、んじゃラスト一本！　初日と同じで、俺と楯無対お前ら六人で模擬戦だ。開始は十分後」

今回は武器壊しちまうかもしれないが。と付け加えて、俺も準備に入る。まぁ、内容はいつも通りティエリアとの話だ。

ちなみにティエリアとの通信は楯無にバラしたところで、脳量子波を介したものに変更した。といっても俺自身が脳量子波でヴェーダにアクセスし、そのヴェーダに居るティエリアと会話するといった方式で。一応楯無も、ヴェーダへのアクセスは不能でも俺の脳量子波を介してこの通信に介入しようと思えば可能だ。だからこそい

ままでＩＳのほうの秘匿通信を使っていたわけなんだけども。
ちなみに俺のヴェーダのデータ閲覧は最高ランクであるレベル７の領域まで可能だが、その処理が面倒なので調べたいことがあるときはティエリアに放り投げ……もとい任せている。
今現在のヴェーダには、ダブルオーの世界で収集されたデータ（意味が無いため、ダブルオーの世界のニュースや個人情報などは無い）に加え、ヴェーダが各国のメインコンピューターから収集してきた各種データが随時アップされ続けているようだ。……なにもアニメまで集めてくる必要はないだろうに。

――さて、今回はアストレア以外の機体も用意頼めるか？

――どの機体を？

――サダルスードＴＹＰＥ－Ｆと１．５（アイズ）ガンダムだ。サダルスードのリボルバーバズーカは弾薬リストも用意してくれ。

――了解した。早速準備を始める。それとリストはこれだ。

流石。仕事が早い。
さて、この最後の模擬戦……楽しくなりそうだな。
俺はそう思いながら、リボルバーバズーカの弾薬リストに目を通していった。

確か二種類組み合わせられたはずだから――

特訓！　その八　二日目以降へ突入！（後書き）

いつまで特訓書くんだこれ？
ということで……キングクリムゾン！！（爆笑
ちなみに後二話くらい夏休みを終了して、学園祭へ突入する予定です。

そしてサダルスードとアイズの登場フラグ
でもアイズ出せるか不安です。もし出せなくても何も言わないでください。お願いします。
ちなみに弾薬は種類が自分の知ってる内では原作内で明記されてないので、オリです。まぁ、ありきたりそうなのばかり出すつもりですが。とりあえずアリエネェといった変な弾薬は出さないのでご安心を。
ちなみに弾薬についてはリクエストしてもらって構いません。
……変なのでなければ採用しますので、どうかよろしくお願いします。

で、まえがきで書いた活動報告の件の報告を。
内容は、今あるＩＳの七巻。その設定でもう最後まで固めて良いか、といったことです。詳しいことは私の活動報告を見てください。
それで、もうあと少しでオリジナル展開に移行するつもりなので。
つまるところ原作乖離です。
活動報告を見ていただいて、何か意見があれば感想か活動報告に書いていただければ幸いです。
ちなみにこの作品は来年度（つまり四月）までには完結させる予定です。長引くかもしれませんが（汗

では、感想・アドバイス・上記の弾種リク等についてのコメお願いしますm（＿＿）m

次回『特訓！　その終　最後の模擬戦その1』

特訓！　その終　最後の模擬戦その１（前書き）

今週末の投稿一回目

平日に書き溜めたものを１２時にもう一話投稿します！

では、どうぞ～

特訓！　その終　最後の模擬戦その１

準備の後、アリーナの左右に俺・楯無とあの六人で分かれてそれぞれ機体を展開する。
今回の『アストレアＴＹＰＥ－Ｆ２』の装備は、両腕にプロトＧＮソードと両手にはピストル。そして左腕にはシールド、右腕にはハンドミサイルユニット。両足にピストル用のホルスター、背中にはコアブロック二基にビット８基という概ねいつも通りの装備。
楯無も俺の横で『ミステリアス・レイディ』の展開を終えていた。
向こうも全員展開したのを確認して、楯無が遠隔操作でアリーナのシステムに指示を出す。
そして、アリーナの中にカウントダウンの機械音声が流れはじめた。
静かなアリーナの中で、カウントダウンが、始まる。

カウントスタート
カイシマデ
『１０』
『９』
『８』
『７』

『6』
『5』
『4』
『3』
『2』
『1』
『0』

ゼロになった瞬間、俺は地面を蹴って飛び出す。
楯無も相手の六人に向かって加速する。
あちらの六人もそれぞれ動いて陣形を作る。

「ビット！」

下のビット四基と上の外側二基を自分の周囲に展開。残った上の二基を前方へ向け、ピストルと展開したビットと一緒に乱射してあちらの陣形をかき乱していく。
楯無は蒼流旋を持ち、ヴェールを広げながら先行していった。
乱射を展開したビットの粒子が尽きるまで続け、戻ってきたビットの粒子チャージを終了させてから、今度は全てのビットを自分の周りに展開させる。
楯無も動き回っている今の状態なら、わざわざビットを出向かせ

るより自分の周囲に展開しておいたほうがいい。

――いつも通りビットの制御は任せる。それと、ダッシュユニットは？

――了解した。ダッシュユニットへの粒子チャージはしてある。

――オーライ、展開してくれ。

両足に粒子が固まってダッシュユニットを形成。

ダッシュユニットのブーストをフルで使うと粒子が持つのは十数分……よし。

ピストルをそれぞれプロトＧＮショートブレイドとプロトＧＮロングブレイドに切り替えて、ダッシュユニットを待機形態から高機動モードに。先端のＧＮクローも展開し、機体本体とダッシュユニット双方のＧＮバーニアを出力最大に。

そして楯無の後を追うように、俺も六人のほうに向かう。

「さぁ、行くぜェェェェ！！」

今回は最初からクライマックスだ！

まず、一番手前で楯無のほうを向いている一夏を強襲。

高速を保ったまま、右腕のプロトロングブレイドとプロトソードで切りかかる。

一夏はそれに反応し、雪片で受け止めてみせた。

「ぐぅっ……！」

「へぇ……でも甘ェ！」

後ろからの攻撃を防いだことには感心したが、蹴り飛ばす感覚で左足のクローからビームサーベルを展開。それを振り払って一夏を突き飛ばしてやる。

吹き飛んだ一夏にビットからビームの掃射を浴びせ、次のターゲット……鈴音のほうへ体を向けた。

バーニア全開で急接近し、左腕のプロトショートブレイドとプロトソードで鈴音の双天牙月と鍔迫り合う。

「こんのぉっ！！」

「その程度っ！」

鈴音が押し上げてくる双天牙月を押さえつけ、右腕のプロトロングブレイドとプロトソードを振ろうとして――――体を横にスライドさせた。

直後、さっきまで俺が居た空間を衝撃の弾丸が通り過ぎていく。

「ちっ、外れた！」

「危なかったぜ、っと！！」

左右の砲口から次々と交互に放たれる衝撃砲を少し下がりながら回避。隙を見て、その肩ユニットにビットからのビームを撃ち込んだ。

宣言どおり、今回は破壊できないようにはしていないため、シールドバリアーを突き破ったビームが衝撃砲のユニットを双方共に撃ち抜き誘爆を引き起こす。

「きゃあっ！？」

「これで――ちッ！」

鈴音を切り付けようとしたところで、横から襲い掛かってきた荷電粒子砲が俺の目の前を通り過ぎていく。

つまるところ、俺は一夏に足止めされた。

「俺はまだ戦える！！」

「ボロボロで復活ご苦労様」

白式の装甲はところどころ焦げ付いていて、ボロボロだ。

まぁ、シールドバリアーを簡単に貫くビームの掃射を食らえばあんな感じになるんだろうけど。

「そしてさっさと退場しろっ！」

「嫌、だね――！」

「いい加減、食らいなさいよ！」

「まだだ！！」

一夏へビットの砲口を向け、俺自身は鈴音の双天牙月をプロトシヨートブレイドで受け止める。

そしてビットから一夏に向けて、八本の光条が何度も迸った。

「うおおおぉぉぉっ！！！」

一夏があの手この手でビームをかわすが、流石に無理だろ。うん。案の定、やがて処理しきれなくなったビームが一夏に殺到する。そして一夏にビームが当たる寸前、その一夏がオレンジ色に攫われた。

うん？　あれは……

「一夏！　大丈夫？」

「お、おう」

予想通り、一夏を助けたオレンジ　＝　シャルロットだ。あの速度は確実に瞬時加速使ってたな。

「ま、とりあえずオラよっ！！」

「うわっ！！」

鈴音の双天牙月を力技で弾き飛ばし、足のビームサーベルで突き飛ばす。

いまの、たぶん絶対防御が発動したな。なにせシールドバリアーは簡単に貫通したし、装甲にも突き刺さってた。

まだ墜ちては無いだろうけど、衝撃も通ったはずだから少しの間は足止めできるはず。

「鈴！」

「一夏、来るよ！」

「いけっ！！」

まず、全部のビットを一夏とシャルロットに向かわせる。そして俺も手に持っている二本のブレイドを二人に向けて投擲。続けて腰からビームサーベルを抜き取り、それも投げる。さらにピストルを足のホルスターから出して、それすらも放り投げた。ついでにＧＮハンドミサイルユニットを両手に呼び出して全弾発射。

ついでに、と思ったが流石にプロトソードを投げるのは無理だ。デカイ。

代わりにプロトＧＮランチャーを両手に呼び出し、そこそこの粒子圧縮率のまま、ビットやら投げた剣やらミサイルやらを対処している二人に向けてぶっ放す。

「「！？」」

ビームは直撃しなかったがというかそれは想定内で、今俺が放り投げたものとミサイルに誘爆し、小爆発をいくつも引き起こした。

そしてそれに二人は巻き込まれる。

さて――――機体を変えるか。

――機体をサダルスードに変更してくれ。

――了解。

『ＧＮＹ－００２Ｆ『ガンダムサダルスードＴＹＰＥ－Ｆ』展開』

いま纏っていた真紅の装甲はいつものようにＧＮ粒子に還元され、それが一瞬で違う機体を形作る。

白の部分は顔のマスクだけで、他はほとんどが深い青の装甲。そ

して両肩には特徴的なセンサーシールド。額と左胸部、両膝には大きさの違う緑色の円形センサー。

タロットの「星（水を汲む女神）」とみずがめ座のβ星をその名の由来とする『ガンダムサダルスードＴＹＰＥ－Ｆ』……シュミレーションで使ったことがあるだけの機体だが、問題ないだろう。

アストレアに比べて各センサー系が強化されているが、そのセンサーの性能を発揮するために装甲は薄くなっている。そのためにあまり実戦向きの機体ではないが、ＩＳにはシールドバリアーがあるし、センサーシールドはその名の通りシールド。いざとなればそれで防御すればいい。

「よし……」

俺は動きを確認するように、一度左手を握って開く。そして右手に持ったリボルバーバズーカを握り直した。

――機体センサーとリボルバーバズーカのセンサーの同調を完了。弾種リスト展開。

いろいろなウィンドウが開いている視界の隅に、他のものと同様の半透明なウィンドウが展開される。

展開されたのはさっき一度だけ確認した弾頭リスト。そこに十数種の弾頭が表示されていた。

そこから数種類の弾頭を視線指定（アイ・タッチ）で指定すると、武装を展開するのと同じようにリボルバーバズーカの中に弾が装填される。

ちなみにこれは普通のＩＳでもそうだ。わざわざ手で弾倉を変えるんじゃなくて、空になった弾倉を収納領域に収納して新しい弾倉を展開する、といった方式。コッキングも一部を除いて自動だ。

まぁ、シャルロットは実弾武装といっても多い種類の武装を使い分ける戦い方だから、ほとんど弾倉は持ってないだろうけど。

「さて、どうなった？」

といってもこの間は十秒も経ってない。

俺が全ての準備を完了して少し経ったところで、今まで留まっていた爆煙がアリーナに吹き込んだ風で流された。

爆煙の中から出てきた二人は、シャルロットが一夏をかばうような立ち位置だ。一夏は最初のビット掃射でダメージを受けていたから、今のも受けていたら墜ちていたこと間違いなしのはず。というか、今ので墜とすつもりだったんだけど。

「――――っ！　悪い、シャル！」

「それより、行くよ！」

「ああっ！」

もう来るみたいだし、さて、サダルスードの使い勝手を試してみるか。

俺はそう思って、二人にリボルバーバズーカを向けて構えた。

特訓！　その終　最後の模擬戦その１（後書き）

ああ～、いまさらにもなって拓神のキャラがぶれ続ける……何とかしなければ。

そして、サダルスードの出番は次回から。
弾薬については、締め切らせてもらいます。
なにせもう次話もだいたい書き上げてあるので。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓！　その終　最後の模擬戦その２』

特訓！　その終　最後の模擬戦その２（前書き）

久々の予約投稿！

では、どうぞ。

特訓！　その終　最後の模擬戦その２

機体が変わったことに警戒してるのか、突っ込んでは来ない二人。
ま、サダルスードの領分は遠距離だから好都合なんだけどな。

「まずは……」

リボルバーバズーカを二人に向けて構え、六連装のリボルバー型弾倉に装填された弾の一種を選ぶ。

「これだ！」

ドンッ！　と砲撃音と共に撃ちだされるバズーカの砲弾。
その射線上に居たシャルロットは横に避けた。でも――

「それじゃ、だめだ」

撃ち出された砲弾は途中で炸裂し、中の細かい鉄球をばら撒く。
クレイ弾。
ショットガンの散弾とは違って、銃口付近で散らばるのではなく、ある程度進んでから炸裂する弾だ。Ｚガンダムとかで使われてたのとほぼ同じ。
ばら撒かれた金属球が射線から逃れたシャルロットを襲う。ついでにといわんばかりに、一夏にも少し襲い掛かった。

「うぁっ！？」

「なっ！？」

「次っ！」

クレイ弾で動きの止まったシャルロットに、今度は何の変哲も無い通常弾を撃ち込む。

左腕のシールドでガードされたが、衝撃で少し後ろに後退させることはできた。

「くぅっ……！」

「次っ！」

今度は一夏に、少し面白いものをプレゼント。

一夏は自分に弾が向かってきてるのを確認して、さっきみたいなクレイ弾を警戒してか弾丸を切ろうとしてきた。

まぁ、クレイ弾だったならそれで自分に向かう鉄球を弾けたんだろうけど、残念ながらクレイ弾ではない。

「は！？　ちょっ、なんだこれ！？」

「何って――――トリモチだ」

トリモチ。

そう、アレだ。白い塊。

弾頭が炸裂して出てきたサッカーボールより少し大きめのトリモチは、雪片を持つ右腕と一夏の体をくっつけることに成功していた。

引き剥がそうとしてるが、そう簡単に取れるわけがない。というか、下手に触るとそこもくっつくぞ？

「念には念を、ってな」

両肩のセンサーシールドを後ろに向け、スラスターとして使用。

……これはＴＹＰＥ－Ｆ改修時に付けられた追加装備だ。

そのスラスターも使った加速でトリモチに悪戦苦闘している一夏に接近し、右足でアリーナの壁向けて蹴り飛ばす。

流石に一回では叩きつけられないので、体勢を崩した一夏に何度か蹴りを叩き込んでアリーナの内壁に叩き付けた。

「ぐっ！」

「オマケだ。ありがたく受け取れよ」

残った三発の弾丸＋既にリロードされている二発、計五発（全てトリモチ）を一夏の左腕・両足・胴体（二発）に撃つ。

壁にぶつけた状態で当てたので、一夏の体と壁はもちろんくっついた。

でも、別にダメージを与える武装でもないから、今の攻撃では一夏のＳ・Ｅはほとんど減っていないはず。

「いらねぇよ！　何だよこれ！」

「だからトリモチだって。さて、デュノアがこっち来たから相手しないと。凰ももう戻ってくるだろうし」

「ちょ、外せ！」

「嫌だ！！」

「何でそんなキッパリと！？」

「だってそんな状態のお前を見るのが楽しいから」

「なんだそれ！？」

「（笑）」

「（笑）ってなんでだよぉぉぉ！！！」

いや、何で外さなきゃなんないんだよ？　マジで。
いまは敵だぞ、俺ら。俺はただ敵の足止めをしただけだ。うん。
……楽しんだのは否定しないがな。
さて、マジであの二人来た。
ということで一夏を置いて上空に戻り、リボルバーバズーカの弾頭を再選択。そしてリロード。

「そらよっ！」

「この程度なら！」

次の弾丸を鈴音に向けて発射。しかし、クレイ弾を警戒して双天牙月をシールドのように扱うものの、そのまま弾の射線から逸れるだけで突っ込んでくる。
だが、いま撃ったのは弾丸は炸裂弾（バースト）。名前の通り炸裂（爆発）する。そして、

「そのタイミングはこっちの任意でもある、っと」

弾丸と鈴音がすれ違う瞬間、弾丸を炸裂させた。
この弾、相手にぶつかるかこっちの操作で爆発してくれる、結構

扱いやすい弾だ。

「えっ！？　きゃあっ！！」

「まず一人目」

鈴音は爆炎にのまれ、衝撃で吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。もうS・Eも残ってないはずだ。

最短ルートで接近しようとしたのが悪かったな。それが結果として弾丸とすれすれですれ違うことになったし。

「鈴！」

一夏がもがきながら叫んでるが、正直かなり不恰好だ。

というか、マジで動くなよお前。余計くっつくぞ？

「よくもっ！」

今度はシャルロット。

アサルトカノン「ガルム」を構えて向かってきた。

「悪いけど、接近戦はゴメンなんでな」

それは一夏を張り付けにした理由の一つでもあるし。

今度はさっきと同じクレイ弾をシャルロットに撃つ。

途中で炸裂して撒き散らされた金属球を、シャルロットはシールドで防いでやり過ごす。

「このっ！」

バンバンバンッ！　と、シャルロットが三点バーストでライフルを撃ってきた。
俺は確実に回避して、次の弾丸をシャルロットに撃ち込む。
シャルロットに向けて一直線に飛翔していく弾。

「もう食らわないよ！」

弾丸を大回りに避けるシャルロット。
確かに、クレイも炸裂もトリモチも一定の範囲から離れられたら効果は無い。
でもまだまだ弾の種類はあるんだよ。
弾頭が炸裂し、その特殊弾頭の効力を発揮させる。

［楯無、ちょっとそっちにも影響出るかもしれない］

［了解。問題ないわよ］

効果が発動する前に、一応楯無に通信を送っておく。
そして弾頭から迸るのは――――強烈な閃光と爆音。

「閃光弾！？」

ちなみにだが、閃光弾じゃなくて『閃響弾（せんきょう）』。まぁ、閃響弾といっても閃光弾（スパーク）と音響弾（ハウリング）の二つの弾頭を混ぜたものだけどな。
顔を驚愕に染めたシャルロットが、眩い閃光に飲まれた。
両方とも本来の用途は対人・施設制圧用だが、ＩＳに対して使えないわけじゃない。
直接の光と音はＩＳに遮断されても、人間は反射的に目を閉じて耳を塞ごうと動く。そして、そこには一瞬の隙ができるものだ。
自分の視界も閃光で埋められるが、機能ですぐさま視界がクリア

に。それと聴覚はもともと対策済み。
閃光に怯むシャルロット向けて、次の弾丸を発射した。
直撃すれば楽だったが、シャルロットの見せた隙は数秒にも満たない一瞬。直撃はせずに弾丸はシールドにに阻まれ、そのシールドに突き刺さる。
今度の弾丸は『徹甲榴弾（てっこうりゅうだん）』。
突き刺さった後に――――ドガァァン！！　この通り爆発を引き起こす弾頭だ。

［閃光弾、大丈夫だったか？］

［チョットびっくりしたけどね。でも、閃光弾なら閃光弾って言ってほしかったなぁ］

［それに乗じてしっかり攻撃してるくせに。……それにお前なら問題ないだろ？］

［まぁね。信頼してくれてありがとう♪］

ちらっと楯無のほうを向くと、ウィンクを返された。……ドンだけ余裕だよ。
まぁ、楯無はこっちの第三世代機と戦っても普通に対抗してくるからな……。いまの機体だと楯無のほうが圧倒的とは言わないまでも強いだろうし。
そして、爆煙が晴れて出てきたシャルロット。その機体は満身創痍と言って過言では無い。
一番被害を受けたであろう左腕のシールドは、大小さまざまな破片になって中のパイルバンカーもろとも地面に落ちているし、機体本体にも少なくないダメージが入っている。内部にも異常をきたしているらしく、飛んでいてもフラフラだ。

「ぐぅぅ……。や、やってくれた、ね」

「戦いは非情に無情に、ってな。情けを掛けて負けたら元も子もないし。……まぁ、これは他人の受け売りだけど」

昔のティエリアの考えらしい。

まぁ、ファーストの頃はマイスターとガンダムでも、後ろから撃つって言ってたくらいだしな。

――昔の話だ。

――そっか。って、なんで思考読んでるんだよ？

――いま君はヴェーダと脳量子波でリンクしているだろう？　その脳量子波にある程度の思考は乗ってくる。

――プライバシーも何もねぇ……。

――気にするな。もしも邪な考えが流れてきても、僕は気にしない。

――……心が傷つくから。そんな気使いされるとマジで傷つくから。つーか、いまさらだけど人間くさすぎるぞお前。

――いまさら、僕は人間だとは言わない。既に肉体も失われていることだ。だが、”人らしさ”くらいもっていてもいいだろう？

――まぁ、な。……さてと、戦闘に集中する。

――了解。

「まだ、僕は動けるよ」

「なら、無情に攻める！」

再度リボルバーバズーカを構えて、撃つ。トドメにふさわしい弾で屠ってやんよ。

放たれた弾はシャルロットむけて飛翔していく。

「これで、二人」

ある程度飛んでいった弾は、クレイ弾のようにその弾頭の中身をばら撒いた。

だがクレイ弾ではない。弾種は『クラスター弾』、ゆえにばら撒いたのは小型爆弾（マイクロクラスター）。

まともな回避もままならないシャルロットに無数の小型爆弾が降り注ぎ、起爆する。

「うわぁぁぁぁっ！！」

爆炎に包まれたシャルロットが地上に墜ちていった。

地面に叩きつけられてたが、問題はないはずだ。……なにか罪悪感が残るがな。

「さて、一夏は……放置で」

ごろごろ暴れまわって、トリモチの被害が広がってるバカなんぞ

知るか。

……いや、もう少し拘束すべきか？

「思い立ったら即行動ってな」

違う弾頭を装填。そして一夏に向かって撃つ。

「うぉっ！？　またなんか来た！？」

カーボンネットが入った弾。弾頭から広がったカーボンネットは、その四隅の杭のようなものを内壁に張り付かせて、一夏の体にかぶさる。

「何で俺だけこんなことになんてんだよ！？　ちょ、オィィィィ！！！」

さ、一夏（ネタキャラ）は放っておいて……ん？　原作主人公じゃないのかって？　いや、ネタキャラで十分だろう。あんなフラグメイカーは。

「よし、楯無のほう行くか」

特訓！　その終　最後の模擬戦その２（後書き）

サダルスード無双展開（爆笑
こんな戦い方でよかったですかね？
アストレアより、各種弾頭でトリッキーに。がコンセプトだったんですが。

そして、一夏イジメｗｗｗ
トリモチで絡め取って、そこをカーボンネットで固定。拘束完了！

これ、本当にアイズの出番が……。

現時点で残っているのは、一夏（笑）、セシリア、ラウラ、箒。
楯無は遊んでる（爆

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓！　その終　最後の模擬戦その３』

特訓！　その終　最後の模擬戦その３（前書き）

これにて特訓編終了！

……八割以上戦闘シーンだった気がする。それ＋一夏の扱いの酷さ（笑

では、どうぞ

特訓！　その終　最後の模擬戦その3

楯無のほうを向くと、楯無はかなり余裕を持って三人の攻撃を回避し続けていた。

ラウラの砲弾、箒の斬撃、セシリアのレーザー、どれもが当たらない。

全て回避し、無理なものは水のヴェールで防いでいる。

箒をランスで相手している楯無の背後に回りこんだラウラを見つけたので、どうせ楯無はかわすんだろうがその間に割り込み、掌（てのひら）に発生させたＧＮフィールドで大型レール砲の砲弾を弾いた。

「よいしょっと！　お待たせ」

「あら、もう終わったの？」

「ああ、もちろん。一夏は――」

「「「！」」」

『一夏』という単語に、楯無以外の三人が同時に反応。

もちろん視線はさっきまで俺が戦っていたほうを向く。楯無も向いた。

そして壁に貼り付けにされた一夏を見た楯無以外の三人は、「あれはなに？」的な表情を浮かべる。

「一夏は捕獲した」

「ぷっ、くくくっ……」

楯無は笑い始めている。

……まぁ、なんというか、一夏が白い餅みたいな感じだしな。

そういえば、硬化ジェルなんかもあったか？　当ててくればよかった。

「見てないで助けてくれよ！！」

「――――！　一夏っ！」

一夏のＳＯＳに一番早く反応したのが箒。急加速して一夏のほうに向かっていく。

まぁ、やらせないけどな。

「そらよ！」

「くっ！？」

ドンドンッ！　と箒に向かってクレイ弾を二連射。それで足の止まった箒に楯無がミストルテインの枝を撃って後ろに下がらせた。

「要らなかったかしら？」

「いや、撃ってくれるってのは織り込み済み」

「あら、そうなの？　なんか嬉しいわね」

「……さて、近接戦主体の篠ノ乃にこの機体はマズイか？」

サダルスードで対処できないわけじゃないが、箒の機体は他の連中のとは性能が段違いだ。念のために対応しておいて悪いことは無い。

――よし、アイズガンダムを展開してくれ。

――了解した。

『ＣＢ－００１．５『１．５《アイズ》ガンダム』展開』

青い装甲が一度粒子に還元され、また新しい形を造りだす。

白主体に紫色の装甲。背中にはコーンスラスターを基部にして左右一対に装備された、バインダーライフルを内臓している紫のバインダー。少し特徴的な頭部に、ハイヒールのような足装甲。

１《アイ》ガンダムの改修機であり、性能が１．５倍に強化された機体。

この機体の特徴は、背中に装備されたバインダーだ。六つのモードがあり飛行機のように左右に広げた「フライトモード」、バインダーを後方に向けた「ハイスピードモード」、バインダーを右側に寄せた「アタックモード」、左側に寄せた「ディフェンスモード」、アタックとディフェンスに即座に移行するために左右どちらかに寄せておく「スタンバイモード」、そして肩越しにバインダーを展開してアルヴァアロンキャノンを撃つ「アルヴァアロンキャノンモード」……この計六種類。またバインター下部に内蔵している「バインダーライフル」を撃つことも可能だ。

他の武装は、右手にリボーンズガンダムと同型のバスターライフ

ル。左手にはシールドで、その裏にビームサーベルが二本収納されている。

「ま、また機体が変わった！？」

「どれだけバリエーションがありますの！？」

ラウラとセシリアの驚く声が聞こえるが、まぁ仕方ない。

今までこいつらに見せたのがアストレアＴＹＰＥ－Ｆ２、エクシア、デュナメス、キュリオス、ダブルオー、サダルスード。

ここまでですでに六機。ヴァーチェも姿は見せてないが使ったし、ＯガンダムOも楯無相手に使った。ほかにもキュリオス・ガストやダッシュユニットなどの装備バリエーションを加えれば、その数は十を超える。

そしていまアイズガンダムが追加されたわけだ。驚くのも無理は無いし……正直それを見ていて少し楽しい。

「これでいいだろ」

全ての展開を確認して、シールド裏にある二本のビームサーベルのうち片方のロックを解除してシールドから落とす。そしてそれを左手でキャッチして、刀身を展開した。

ちなみにＧＮドライヴはオリジナルなため、刀身の色はピンク色をしている。ビームも同じく。

「楯無、援護任せた！」

了解。という声を背に受けながら、バインダーを空中制動能力を高めるフライトモードにして箒に接近。

すると俺の左右をミストルテインの枝が俺の左右を通り過ぎてい

き、箒の動きを制限させる。……ナイスだ楯無！

「ならば！」

動きを制限された箒がその場で箒が次々と突きや斬撃を放つ。もちろんまだ刀身が届く距離ではないが、それにあわせて発生した攻性エネルギーの突きや斬撃のエネルギー刃が向かってきた。

「このくらいなら……！」

前進しながら、バレルロールやバインダーを閉じたり開いたりするのを繰り返してエネルギー刃の弾幕を全て避ける。

「――届いたっ！！」

ビームサーベルの攻撃範囲まで近づいた俺はビームサーベルを振り下ろす。

箒はそれを交差させた二本の刀で受け止めた。でもただの刀じゃ……？　刀身が溶けない？

――どうなってるか、わかるか？

――ふむ……さっき撃っていたエネルギー、あれを圧縮して刀身に纏わせている。恐らくあの遠距離攻撃をするためのチャージかなにかだろう。ビームサーベルと拮抗しているのはその副産物だな。

――そういうことか……

溶かして切るのは不可能か……仕方ない。

「まずは……っと」

「なにっ！？」

箒の右手を蹴り飛ばして『雨月』を弾き飛ばす。これで遠距離での突きがくることは無くなった。斬撃よりも射程が長いから厄介だったんだよな。振り払う斬撃より突きのほうが連射速度も上だし。

「はっ！」

振り上げた足を振り下ろして踵落としを繰り出した。

バキィッ！　と紅椿の肩装甲を砕きながら、箒を真下に吹き飛ばす。

「追い討ちだ」

バインダーを折りたたみ、脇下から前方に向けてバインダーライフルとバスターライフルを連射する。

「くっ……！」

箒も全身の展開装甲を防御に回してガードしているが、そのガードの上から確実にＳ・Ｅを削った。

「うおらぁぁっ！」

射撃を中断、直後にバインダーをハイスピードモードに。瞬時加速（イグニッション・ブースト）に劣らない加速で接近してビームサーベルを振り抜く。

「ぐぁっ！？」

「悪いが、ここで墜ちろ！」

追撃の蹴り飛ばしでアリーナのシールドバリアーに叩きつけた。
その吹き飛ばしている間に、同時進行でバインダーをアルヴァアロンキャノンモードにしてチャージを開始。
正真正銘のフルパワーで撃つとアリーナのシールドどころか紅椿ごと箒を消し飛ばしかねないので、かなり威力を絞る。その分チャージは早くなるため、叩きつけられた箒が動けるようになる前にチャージが完了した。

「これで、三人目！」

ゴァァァッ！！　と粒子ビームの奔流が紅椿を飲み込む。
砲撃が終わり、紅椿はボロボロの状態で地面に落下した。
見た目は完全にオーバーキルだろうけど、粒子圧縮率はそんなに高くないから絶対防御を貫くことは無い。箒は怪我していたとしてせいぜいぶつかった衝撃とかでの軽い打撲程度だろう。それも一日と経たずに直る程度の。

「楯無のほうはどうだ？」

途中からこっちへの支援は止まっていた。
必要ないって判断したのもあるんだろうけど、主に残りの二人と戦っていたんだろうな。

「……なんだあれ」

うん、まぁ、つい口から漏れたのも仕方ない。
なんというか、一言で表すと「鬼畜」だ。うん。

「いやさ、あれは無いだろ……」

だって、楯無の水分身が二人に取り付いて同時に爆発だぞ？
取り付くイコールゼロ距離だぞ？
なんつーか、本当に容赦なく終わらせたな……。

――いや、アルヴァアロンキャノンで止めを刺した君が言うのも間違ってないか？

――あー、そうかもな。

――はぁ……。ところで彼はどうする？

――彼？

――織斑一夏だ。

あ、完全に忘れてた。
さて、今どうなってるんだ？

「んなろぉぉぉっ！！！」

ん？　トリモチがところどころ切れてる？
あぁ、左手の雪羅か。クローモードにしたんだな。

「へぇ、がんばるわね。一夏君」

「だな……って、いつの間に真後ろに来たんだよ楯無」

「たったいまよ？」

「とりあえず気付かなかった……。で、どうする？」

「拓神に任せるわ」

「マジかよ。そうだな……って脱出したよ一夏。んじゃ、弾幕で」

「了解★」

向かってくる一夏に向けて、俺はバインダーをアタックモードにしてバスターライフルを構え、楯無もミストルテインの枝の準備を終わらせる。

「「それじゃ、おしまい（よ）」」

「うおぁぁぁぁぁっ！？！？」

――――次の瞬間、一夏に無数の針と高威力ビームが襲い掛かった。

特訓！　その終　最後の模擬戦その３（後書き）

紅椿に対してアイズガンダムで無双の拓神君とエグイ技を使った楯無でした、と（爆笑

ぜんぜん強くなったように思えない一夏ラヴァーズ……強くなったんですよ？　ただ二人が強すぎなだけです。
アイズだって第三世代ガンダムくらいだったはずですし。
それと、アイズはうまく暴れさせられたでしょうか？　できる限りモードを出しましたが。

さて、次回からはようやく「原作に戻る」ボタンが押せます（笑
次は学園祭。ここから原作をだんだん壊していきますので。
できる限りのスピードで物語の完結に突っ走って逝きたいと思ってます！　目指せ三月までの完結！

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『特訓終了』

ｐｓ　こんどはリボーンズガンダム作ったので、活動報告のＵＲＬから見てください。

特訓終了　二学期へ（前書き）

昼までに書き上げられた！
……ギリギリですが。

では、どうぞ。

特訓終了　二学期へ

あれから時間は流れて九月三日。

一夏達の特訓が終わり、それに続き夏休みも終わって、二学期始業式に続く平常授業も何事もなく再開された。

……一夏が課題を部屋に忘れたのは予想の範囲内だったんだぜい。

それについてはとてつもなく痛そうな音が教室に響いたとだけ言っておくにゃー。

それと一夏と箒については特訓のときのＰＩＣのマニュアル操作。

最終日に戦闘ができるようになったとはいってもまだ制御が荒いから、二人にはもう少し練習が必要ぽい。

ただ大体のことは楯無が一通り教えたらしいから、自主練で大丈夫そうだがな。

さて、そろそろ回想は終わるんだにゃー。

いまは授業中だし、ボーっとしてると出席簿が……ガクブル……。

ギィィンッ！　ギンッ！――――

と、上空から聞こえてくる金属のぶつかる音の方へ、俺も他のみんなと同じように目を向ける。

二学期最初の実戦訓練は、俺ら一組と二組の合同で始まった。

上空で戦闘しているのはそれぞれのクラス代表である一夏と鈴音。

休み前と比べると、動きがかなりいい。特訓の成果が出たで良か

ったんだぜい。

「でやぁぁぁぁぁっ！！」

「くっ……！」

また二人の得物が交錯して、金属音を撒き散らす。

だが、一夏の持つ雪片弐型に『零落白夜』の輝きはもう無い。

かれこれこの模擬戦もすでに終盤。

ゆえに一夏と鈴音ともにＳ・Ｅは残りわずかで、一夏は零落白夜を発動させるＳ・Ｅが残ってない。

それに左手の雪羅もカノンモード用のエネルギーが切れ、クローもシールドも零落白夜を使うので使えない状態だ。

……なんでＩＳも展開せずに見てるだけでそんなことがわかるのかって？

だってこの前白式にはＶＢＰをインストールさせたし、それ経由でティエリアが白式の情報を教えてくれてますがなにか？　ちなみに鈴音のほうは勘。といっても、もう数ヶ月以上ＩＳに関わってるから大体わかる。

「さーて、そろそろ終わるか？」

もうこれ以上続けてもアレだし、それそろどっちか動くだろ。まぁ、高確率で一夏より余裕ある鈴が。

「無駄よ！　拓神のラッシュに比べたらその程度っ！」

お、やっぱり鈴が仕掛けた。って……その評価はいかがなものよ？

ただビットとミサイルとランチャーとピストルを同時に使ったフルバーストで攻めただけなのに……まぁいいか。

鈴音はまず衝撃砲で距離を少し開けて、連結させた双天牙月を投擲。一夏が衝撃砲をかわして双天牙月を受けきったところで真下から強襲。

殴りかかって一夏の手から雪片を弾き飛ばし、一夏が受けきったことで真下に落ちた双天牙月を、下から強襲するときに足で回収してリフティングのように保持していたそれをキャッチ。

トドメとして武器を失った一夏に衝撃砲と双天牙月のラッシュを決めて――――

「はい、しゅーりょーってか？」

言わずもがな、一夏の負けなんだぜい。

◆

午前の授業の終了後、俺と一夏の居るロッカールームには、当たり前だが俺らしか居ない。必然的に専用だし。

一夏がＩＳスーツから制服に着替えてるが……俺もそろそろ普通に着る用のスーツ用意するか？

「で、一夏。なぜ負けたでしょうか？」

「いつも通りだが唐突だな！　――まぁ、たぶん燃費の悪さだろ。どんだけ大飯ぐらいなんだか……」

そう言って白いガントレットを叩く一夏。それと唐突なのは気に

したら負けだにゃー。

「ＶＢＰ積んでるんだから、少しはまともになってるはずだぞ？」

「それ以上に燃費悪い。なにせＳ・Ｅを代償に使う能力ばっかりなんだって。カノンは違うけどエネルギーかなり喰うし」

「早々、トンデモピーキーってことだろ？　なら使いこなすしかないだろうよ。てか、零落白夜使いすぎ」

「うぐ……し、仕方ないだろ！　当たらないんだから！」

はいはい、言い訳乙。

「せめてもうちょっと工夫しろよ？」

「たとえばどんな？」

「教えないがなにか？」

「なんだよそれ！？」

いや、自分で気付かないと意味ないし。そういうのって。

普通の勉強とかと同じだ。

他人から教えてもらっても、結局は自分の中でやりやすいように解釈して自分のものにする。

だったら最初から自分で解釈できれば、変換っていう工程を一つ飛ばせるし。

……まぁ、時間は掛かるけど。でもそのほうが最終的に自分の力になる。

「ヒントっていえば、『ロスを減らせ』ってくらいか。後は自分で考えろ」

「教えてくれてもいいだろ？」

「……がんば！」

「はぁ……。わかってたよ、どうせ教えてくれないってことくらい……」

さて、一夏が軽くｏｒｚになったところで。

「やるべきことはそれだけじゃないから気をつけろよ？　基本戦略の組み直しから、遠・近の即時切り替え、今までしてなかった射撃訓練……ｅｔｃ」

「うあ〝ぁぁ……」

よし、追い討ち成功。ん？

コンコン……

『一夏、着替えは終わったのか？』

「篠ノ乃か。ほれ一夏、反応しろ」

「あ、ああ、いま行くから！」

一夏が手早く荷物をまとめてダッシュで出て行く。

俺はそれを確認して、ティエリアを呼び出した。
さすがに更衣室であるロッカールームに監視カメラは無い。出入り口にはあるが、流石に中には設置してなかったりする。
防犯っつーか、とりあえずこの学園に忍び込む奴なんて居ないだろうし。てか不可能だ。仮にできるとして生徒に紛れ込むって手もあるんだろうが、問題を起こせば織斑先生の餌食だし。
ま、そんな話は蛇足だったにゃー。

「ティエリア、外部音声オンでいいぞ」

「……了解だ。それで今回はどうした？」

「いや、俺もＩＳスーツあったほうがいいのかってな」

スーツって銃弾くらいなら貫通しないらしいし、着といてもいいかなと思い始めたんだが。

「君が着たいというなら出せるが、どうする？」

「型っつーか、形はどんななんだ？」

「ヘルメット無しのパイロットスーツだ。というか、いつも機体の下には展開してるんだぞ？」

機体の下って、見る機会無いし。機体変えるときも一瞬だけで見えないんだから仕方ないだろ？
んで、パイロットスーツっていうとあれになるのか……。

「カラーリングは？」

「指定してもらえばそれに変える。ちなみに今までは白（ノーマル）だった」

「んじゃ、黒に白のラインのモノクロで」

「わかった。言ってもらえればすぐにでも出せる」

「オーライ、サンキュー。後で頼む」

「了解した」

「ところでヘルメットってあるのか？」

「同じく言ってもらえれば出せる。だが必要なのか？」

あー、まぁ、大体今は必要ないだろうな。
でもま、何かに使えそうってったら使えそうだけども。

「んにゃ、今は確認しただけだ」

さて、俺も早く昼飯を食わないと午後が辛いんだぜい。
半神でもなんでも、俺はこれでも高校生の男子だからにゃー。

◆

午後は一夏がなぜか遅れてシャルロットの『ラピッド・スイッチ』の的にされただけで、特にことも無く終わった。
問題ないったら問題ないんだ。うん。一夏（ギャグキャラ）は大体死なない。

そして翌日、朝のＨＲと一時限目の半分を使った全校集会。
内容は今月の中ほどに予定されている学園祭のことで、どこの学校でもそうだろうがこういった行事は生徒会が中心。それはＩＳ学園でも変わらず、俺も壇上の見えない隅のほうに居る。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

司会の虚先輩がそう言うと、楯無が壇上の中心にあるマイクのところへと出て行った。
何をするかは知ってるが……こっちに飛び火しないよな？

「やあみんな。おはよう」

俺がそんなことでビクビクしてる中、扇子を持って笑みを浮かべた楯無が喋りだした。

特訓終了　二学期へ（後書き）

はい、ようやく五巻に突入しました！
さぁ学園祭はどんな展開を混ぜようか……（クフフフ

それにしても、武装神姫のＤＬＣの停止が長い……ＫＯＮＡＭＩさんよぉ！！（サーシェス風に
すでに一ヶ月以上経っているというのに……ｏｒｚ

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『ドタバタの幕開け』

番外　出遅れハロウィン（前書き）

はい、ということで、いまさらハロウィンネタを投下させてもらいます。

それにしても、予告に間に合いませんでした。本当にすいませんm（＿＿）m

では、どうぞ

番外　出遅れハロウィン

あえて言おう……ここには本編の時系列は通用しない！！

「っ――！？！？」

布団を押しのけて、俺は起き上がる。

なんでわけのわからない誰かの発言で叩き起こされなきゃならねぇんだ……。

本編？　時系列？　一体どういう……？

「はいはい、それ以上は危険だから駄目よ？」

むくりと起き上がる、今まで寝てたはずの楯無。

つーかよ、

「なんで心読んだし。なぜ読める」

「うーん……愛？」

いや、なぜ疑問系？

「本当はね……脳量子波だっけ？　になんだかいろいろと乗って流れてきてたのよ」

「むしろその方が問題だ！　なんで自然に感受してんだよ！？」

「自然じゃないわよ？　私がそうなるようにしてるもの」

「え？　ああ、そぉ……それは構わないけどさ、俺は流してないぞ？」

「ええ。なんか違うところから流れてきたんだけど、かなり強い感じだったから」

「はぁ、もういいや。これ考えてると疲れるだけだ」

確かに脳量子波使ってれば、空間認識とか攻撃回避能力とか反射能力が良くなるけどさ。体の方もその反射に十分追従できるし。

といっても……日常生活で使う必要あるのか？　超遠距離からの狙撃だろうと俺らは神力のおかげで死なないし、俺はともかく楯無は家柄で元々そういう危機回避能力は高いはずなんだが。

「……そういえば今日って何日だっけ？」

「今日は十月三十一日だけど、それがどうかした？」

「ちなみに現時点で本編中の月日は、九月四日ね」

「・・・・・・ん？」

「え？・・・・・・」

「ちょっと待てェェェェェ！！！　いま何を口走った！？」

「脳量子波で、一緒に電波まで受信しちゃったみたいね」

「なに受信してんの！？　それはアウトだろ！？」

「これで私も電波少女♪　……ねぇ、イトコ、これでいい？」

「違う！　いろいろと圧倒的に間違っている！！
共通点は水色の髪くらいだろ！？
別に、行方不明になって半年後に海で見つかったとかいう経歴は持ってないんだろ！？」

――って、俺もなに言ってんだ！？

「とにかく危険だ！　やめろ楯無！　それとも、十九歳で魔法少女を名乗り続ける覚悟でもあるのか！？」

「……ん、わかったわ。私の脳量子波もいろいろと危険を訴えてたし」

ふぅ、話に脈絡が全くといっていいほど無いが……九歳は少女だ。
だが十年経った十九歳は少女じゃない。断言しよう。

「はぁ、朝からなんてカオス……」

「ふふっ、たまにはこんな騒がしい朝もいいんじゃないの？」

「どうだか……」

あれから数分後。

いつものように抱きついてくる楯無の感触で、ようやく普通に戻ったことを俺の頭が理解し始めた。

あれが続くのは危険過ぎる。俺も何を口走るかわからない状況だったし。

でも落ち着いたら落ち着いたで、

「なぁ、離れてくれないのか？」

「いーや★」

夏休みに初めて……その……『そういうこと』をしてから、何度したのかは憶えていない。

だが。だがしかし、だ。

抱きつかれて触れてる肌の柔らかさとか、楯無のどこか蠱惑的（こわくてき）な匂いを思いっきり感じた状態で平静じゃいられるわけがない。

「……襲うよ？」

「ふふ、むしろ抱かれたいわね。――っていつもなら言うところだ

けど、今日はダメ。これから用事があるのよ」

名残惜しそうに俺から離れた楯無は手早く学園の制服に身を包み、用意を済ませた。

学園の制服をわざわざ着るってことは、生徒会長としての仕事…

…それか学園の先生絡みの件か。

「それじゃ、また後で会いましょ。でもたぶん、この部屋に戻ってくるのは夜になるでしょうけどね」

「ああ、わかった。それじゃ、一人寂しく帰りを待ってるとするよ」

「あはっ☆　それじゃあね、ア・ナ・タ。ん……」

「んむっ……」

多少強引に俺の唇を奪ってから、颯爽と部屋から出て行く楯無。

いつもの事ながら……まったく。

◆

俺はあと何億年経ったら、オマエに飽きるんだ？

「そういえば……」

楯無に言った通り、一人で部屋にいる俺はさっき楯無の言っていたことを思い出す。

「『今日は十月三十一日』……ハロウィンか」

さて、何もないってのもつまらないな。

「んじゃま、俺得な方向にもって行くとするんだにゃー」

◆

時間は流れて、夜。

ガチャリ……と、部屋のドアが開く。

まぁ、ノックも何も無しに入ってくるのは一人しかいないわけで。

さて、とりあえずハロウィンのお約束でも。

「「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ？」」

――あれ？
声が被った、だと？
まさか……

「あらら、考えることは同じだったかしら？」

ドアを開いたのはもちろん楯無。
そしてその表情は、イタズラな感じにに驚きが混じっていた。
駄菓子菓子、問題はその服装であって。

「あはっ★　どう？」

部屋に入ってからクルリと回ってみせる楯無。
その服装は――――魔女だ。

「あ、ああ。……似合ってるっていうか、可愛い」

お約束のような黒のトンガリ帽子に、オレンジと黒の二色を中心としたフリルの多い服とミニスカート。左腕には制服が入っているのか少し大きめの黒い手提げカバン。
そしてどこから持ってきたのか……右手には短いステッキを持っている。

正直言おう……かなり可愛い。楯無の雰囲気と魔女のコスがすごく合っていて、とにかく可愛い。
『綺麗』とかではなく『可愛い』。ここは重要だ。

「うふふ、ありがと♪　拓神もいろいろしたのね？」

部屋を見回す楯無。

いろいろとまで言われるような量はしてないが、少しなら。
まず部屋の照明を、明るめなクリアオレンジのシートを使って光をオレンジっぽく。
……照明の数が多くて、主要なところは全部やったから時間が掛かったんだぜい。
そしてハロウィンといえばこれだろう、と言うべき『ジャック・オー・ランタン』。カボチャに顔のアレ。
作るにも材料が無く、神力を使うにもどうイメージしたらいいかあやふやだったので、もう既製品を買ってきた。出入り口の棚に一つと、ベッド脇の小さいテーブルに一つ。大きさはテーブルに置いてある方が大きい。ついでに中に蝋燭（ろうそく）が入っている仕様。まぁ、火はまだつけてないが。なんというか、これがあるだけでハロウィンという感じがするから不思議だにゃー。
後は……俺の服装か。
はっきり言って魔法使いをイメージした。一見すると執事みたいな感じだが、マントとトンガリ帽のおかげで自分的には魔法使いに見えるようにした。……さすがにステッキとか杖は用意できてない。
……いや、神力を使って作るほど必要性を感じなかっただけだけど。
変装は訪問する側がするんじゃないのか？　って疑問は無しだ。
気にしちゃいけない。

――ふぅ、流石にこれだけすればいろいろに当てはまるのか？

「その服、似合ってるわよ？　魔法使いさん？」

「そ、そうか……」

しかしまさか、服装まで同じような考えになるとは……。いろんな意味で運命を感じずにはいられないな。センチメンタリズムな――とか言う気は無いが。

だが正直、この展開を全く予想しなかったわけじゃない。

「……はいよ」

「え？」

小さいオレンジ色の包みを、楯無に手渡す。

「ったく、料理なんていつ振りだったか」

たぶん本格的なものは、こっちにきてからいままで一回も無かったはずだ。

「中身はクッキーだよ。味の保障はできないけどな」

しかしまさかその一回目をクッキーで使うとは、思っても無かった。

本当に久々だったから、なんか自分でも危なっかしかったし。

「これ、拓神の手作り？」

「そ。……時間があったから作っただけだけどな」

ジャック・オー・ランタンの買出しついでに材料を買ってきたんだよな。もしもこんな風になったときのために。

まぁ、こうならなかった場合は普通に渡してただろうけど。

「――ありがとう！！」

「え？　ちょっ――ぐあっ！？」

楯無が急に抱きついてきたおかげで、ドタドダンッ！　と派手な音を立てながら俺は床に転ぶ羽目になった。
正直背中が結構痛い。

「拓神の手作りかぁ。……あ」

「ゴフッ、ゴフッ……どうした？」

「私はお菓子用意してないんだけど……どうしよう」

「それじゃあ……」

それじゃあ、イタズラに決まってる。

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔは？」

「お菓子をくれないといたずらするぞ……」

「ＹＥＳ……だから、とりあえずは――んっ」

「――んんっ！」

押し倒された状態のまま、両手で楯無の頭を引き寄せてキス。
そのまま舌を入れて、ディープなほうに発展させた。

「んむ……んぁ……んふ……」

「ぁんぅ……んっ……ふぁっ……」

クチャクチャと、互いに舌を絡め続ける。
俺の息がもう苦しくなってきたところで唇を離して、楯無を開放した。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「はぁ、はぁ、はぁ……っ。じゃあ、イタズラっていうより、お菓子の代わりをもらおうか」

「代わり？」

「楯無をもらう。今日の十二時までは、抵抗しちゃ駄目。完全に俺の所有物にする」

「えっ――――んむぅっ！？」

またなにか、楯無が口を開く前にその口を塞ぐ。

「んんっ――――ちなみに、拒否権は無いからな？」

「そ、それは、構わないけど……この服のままで？」

もうナニをするのかわかったのか。まぁ、こんな状態から発展するのは大抵ソレだけだけどな。

「当たり前だよ、魔女さん？」

俺はおどけた返事を返しながら楯無を抱きかかえて、ベッドに運ぶ。
そしてジャック・オー・ランタンの蝋燭に火を灯し、部屋の照明

は消した。
薄暗い光だけが、俺たちを照らし出している。

さぁ、魔女さん？　魔女狩りの時間だ……。

番外　出遅れハロウィン（後書き）

どうでしたか？
まぁ、後半は急いでやってたんで、雑かもしれません。

それにしてもこんな感じなのを書くのは……二週間？もう少し経ってますか。そのくらいぶりだったはず。最近は週一投稿なので。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

ドタバタの幕開け・上（前書き）

今回だけで学園祭当日いけるかな、と思いましたが無理だったので上下に分けました。

では、どうぞ～

ドタバタの幕開け・上

俺は打ち合わせとは別に何かあることを直感で予測しつつ、楯無の挨拶に耳を傾けた。

「さてさて、今年はいろいろと立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったわね。私の名前は更識楯無（さらしきたてなし）。君たち生徒の長よ。以降よろしく」

そう言って微笑む楯無。

悪く言えば「人たらし」な楯無だが、良く言えば「人当たりが良い」ということだ。

そんな楯無にすでに魅了されたらしい、熱っぽいため息が並んでる生徒のほうからここまで聞こえてくる。……とりあえずアンタらは女子で同性だろ。

それに、俺がそんなことでも嫉妬するのをわかってるんだったらヤメロ楯無。こっちみてニヤニヤするなっ！

「うふふ。では、今月の一大イベント学園祭だけれど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは……」

閉じた状態の扇子を取り出して、それを横にスライドさせる。と、それに反応するように、楯無の後ろには空間投影ディスプレイが浮き上がった。

……まぁ、こっちの仕掛けだが。

「のほほんさん、準備は？」

「ういうい、わかってるよ～。ポチッとな」

こんな感じのな。

でもポチッとなってのは、なんか爆発しそうな気がするんだぜい。

某ヤッターなロボのごとく。

さて、まぁ、一夏には今のうちにご愁傷様と言っておこう。

楯無がぱんっ！　と小気味のいい音を立てて扇子を開くと、空間投影ディスプレイにでっかく一夏の写真が映し出された。

「名づけて、『各部対抗織斑一夏争奪戦！』」

本当、一夏……ご愁傷様。絶対逃げられないんだぜい？

「え……？」

「「「えええええええ～～～～っっ！？」」」

改めて、こういう状況の女子パワーはすごいんじゃないかと思う。

いくら人数がいるとしてもこの広いホールが揺れる錯覚に囚われるとか……どんだけなんだぜい？

ちなみに楯無は満足気に笑っている。

「はいはい、静かに。これまでの学園祭では毎年各部活ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組には部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれだけではつまらないと思い――」

楯無がピシッと閉じた扇子で一夏を指す。

「織斑一夏くんを、一位の部活動に強制入部させましょう！」

またもや、叫び声がホールに反響。

そろそろ耳が……。

そしてこっちからだと、列の後ろに居る織斑先生があきれたようにため息ついてるのが見えるんだけど。

「うおおおおおっ！」

「素晴らしい！　素晴らしいわ会長！！」

「こうなったらやってやる……やぁぁぁってやるわっ！！」

「こうなりゃ、今日から準備始めるわよ！　は？　秋季大会？　あんなもんほっとけばいいのよ！！」

いや、秋季大会もがんばれよ。学園祭の後だけどさ。

それにしても、一夏は三年間でどれだけフラグを立てるのか見ものだにゃー？

しかしまぁ、男子の片方がこれだけ持ち上げられれば、もう片方である俺はどうなのかという声も出てくるわけで。

「それじゃ、拓神については本人からどうぞ♪」

俺も出るしかないか。

ここまではまだ想定内だ。事前の打ち合わせでもあったしな。

俺は舞台に少し駆け足で出て行って、楯無の空けたマイク前に立つ。

「えーと、一応はじめまして……っても、知らない人は居ないんで

しょうけど」

うっわぁ、人が多い。

――――見ろ！人がゴミのようだ！！

ああ、なんか緊張して変な電波来たんだが。

「生徒会副会長の玖蘭拓神です。ちなみに生徒会には会長権限で強制的に入れられました、はい。ちなみに俺としては別に嫌でもないので、これについての文句はナシで」

見回せば、まぁ仕方ないかと思っているような表情多数。

ふぅ、よかったぜい。ブーイングとか出たら、俺のガラスのハートが粉砕されるところだったにゃー。

「まぁ、そういうことで俺が他の部活に行くってことは無いですが、一夏をゲットするためにがんばってください。以上です」

ん？　なんか変に強い視線×五が俺に向かってるんだが……まぁ、気にしない気にしない。手回しなんかしたらつまらないし。

俺が斜め後ろに下がり、マイクの前にはまた楯無が立つ。

「はい。そういうことで、対象は一夏くんだけなんだけど……みんな、もちろんこの話乗るわよね？」

「「「もちろんです、会長！！」」」

「ふふ、よろしい♪　それじゃみんな、がんばって♪」

「「「サー！　イエス・サー！！」」」

なんだこれ。みんなノリ良すぎなんじゃないか？
でもまぁ、嫌な予測は消えてよかっ――――

「ああ、そうそう。……拓神は私の婚約者だから、手を出しちゃ駄目よ？」

最後の最後に爆弾落としてくれたなコノヤロウ！！
……このあと、どうなったかは簡単に想像できるだろ？

◆

休み時間のたびに事情聴取の名目で追い掛け回された俺は、放課後の特別ＨＲを『生徒会なんで、生徒会室行きます』と許可を取って離脱。
教室を出るときに一夏からの助けを請うような目線を受けたが無視。でも罪悪感なんて無かった。
……なにせ一夏のヤツ、俺が追い掛け回されてるときは巻き込まれないように避けてたしな。いい気味だぜい。
教室を出ると、他のクラスからも聞こえてくる話し合いの声。俺はそれを聞き流しながら、もはや通い慣れた生徒会室に向かった。

「生徒会でやるのはやっぱり”アレ”なんだろうけど……それにしても物騒じゃね？」

とかそんな独り言を少しこぼしながら歩いているうちに、生徒会室に到着。

そこそこ重厚にできているドアを開けて、生徒会室の中へ。

「あ、きたきた。遅かったわね」

「もう全員集まってたのか……」

そういえば、のほほんって俺が教室出るときはもう居なかったっけ。

なんとなく思い出しながら俺が定位置の椅子に座ると、虚先輩がお茶を出してくれた。

「あ、どうも」

「いえ、お構いなく」

まぁ、とりあえず一口。

……うん、やっぱり虚先輩のお茶は美味しい。

「さて、拓神も来たことだし、会議始めるわよ」

「ああ」

「はい」

「う～い」

せめてもう少しやる気を見せてくれよ、のほほん……。

「知ってると思うけど、学園祭で生徒会も催し物をするの。それで、何をやるのかってことね」

「ほいほ～い」

「はい、本音（ほんね）」

「お菓子バイキングなんてどぉかなぁ～？」

いや、それって……

「本音、どうせ自分が食べたいんでしょう？」

「そんなことは～……無いとは言えない～」

虚先輩のツッコミ……って否定しろよ、のほほん。

「会長、いまのは無しでお願いします」

「そ、そんなぁ～」

「うふふ。本音、私たちは生徒会なのよ？　なら、もっと大々的にやらないとつまらないでしょう？」

「で、そんなことを言う楯無はなにかあるのか？」

「もちろん☆　一夏くんには悪いけど、また景品になってもらうわ」

ま、悪びれた表情じゃないのはこの際置いておくとしよう。

「ということで、生徒会の催し物は『灰被り姫（シンデレラ）』よ♪」

楯無が告げたのは、たぶん原作を知っていなくても早々マトモなものだとは思えない響きだった。

◆

打ち合わせ……といってもほとんど楯無の説明による打ち合わせを終えた俺たち生徒会一同は、お茶会に突入する流れになった。

「そうだ。その前にゲストでも呼んできましょうか」

「ゲストって……一夏か？」

「わかってるじゃない。一応、今日のことはお詫びしなきゃね」

「おりむ～なら、教室か職員室じゃないかなぁ？」

「そう、ありがとう本音。行くわよ拓神」

「オーライ」

「いってらっしゃいませ。お茶の準備はしておきますので」

「頼んだわよ♪」

布仏姉妹に見送られて、俺たちは生徒会室から出る。

「んじゃ、教室から回って行こうか？」

「そうね」

ドタバタの幕開け・上（後書き）

テストが、テストがオワタぁぁぁぁ！！
やばいです、この時期に酷い点数を取ってしまいましたｏｒｚ
たぶんあれですね、これを書いてたのがテスト前日ってのが理由でしょうね（苦笑
ちょっと近場の公園で首吊ってきます……

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ
それでは～

次回『ドタバタの幕開け・下』……あるのかな？さーて、首吊ってこよ

ドタバタの幕開け・下（前書き）

首吊るうんぬんの前に使命的なことを思い出したＩＳです（笑
使命＝今のところ最後までの構想ができているこの小説だけでも完結させること。

では、どうぞ

ドタバタの幕開け・下

教室はすでに解散して誰も居なかった……ということで、いまは職員室前。
中から織斑先生の笑い声が聞こえるってことは、まだ一夏は中だな。

「織斑先生の笑い声なんて、初めて聞いたわ」

「ああ、俺もだ」

それにしても始めて聞いた。
この学園二年目の楯無ですら聞いたこと無いっていうなら、かなりレアもレアっつーことがわかる。

それから少しして、

「あ、出てきた」

「それじゃ、行きましょう」

二人して寄りかかっていた壁から背を離して、一夏の元に近づく。
そして職員室のドアが閉まったのを確認して一夏に話しかけた。
……もちろん背後から。

「やっほ」

「よう」

「のわわっ！？　――って、やっぱり拓神たちなのか……」

ふむ、さすがに耐性ができ始めてるのかにゃー？

「はぁ……楯無さん、今回は何の用ですか？」

「今回は今日のことのお詫びとして、生徒会室のお茶会に一夏くんを招待しに来たのよ」

「それならあれを無かったことに――って無理ですよね……」

「まぁ無理だな。あれだけ言っといていまさら引き下げってのもあり得ないし」

楯無の意味深な笑顔を見て諦めた一夏に、ハッキリ言ってやったぜい。

「はあっ……」

「それで、生徒会室には来るのかい？」

「ええ、お詫びって事なら行かせてもらいます」

「よろしい♪　素直な男の子はモテるわよ？」

「いや、そんなことは無いですから」

……改めて、ちょっと凹っていいかなコイツと思った。

アプローチを好意以外のなにと捉えて――ああ、そういえばアプローチ殺しだったか、この一級フラグメイカーは。

「さて、それじゃ――ちょっと待ってね」

「へ？」

「そしてなぜ俺の後ろに行くんだ楯無」

「わかってるでしょうに。じゃ、よろしくね」

「はぁっ、了解」

「え？　えっと……？」

どういう流れか知らないが、縦一列に俺・楯無・一夏の順になったのは都合がいい……のか？

さて、来るなら来いってな。

向こうに続いていく廊下に目をやると、竹刀片手に全力疾走で走って来る恐らく剣道部の女子生徒一名。

竹刀……神力無しの素手だと痛いな。

「ちょっと悪いな」

「やんっ」

楯無の制服の上着から、彼女がいつも使っている扇子を抜き取る。

その際に胸を触るような感じになったのは、まぁ仕方ないことだ。

俺得な仕返しなどではない。

「覚悟ぉぉぉぉぉっ！！」

「会長倒したかったら、まず俺を倒してからな」

ダッシュのスピードも上乗せされた竹刀を思いっきり振り下ろしてくる剣道部員。

その竹刀を楯無の扇子で受け流し、空いてるほうの手でその女子の首筋に手刀を叩き込んで気絶させる。

白羽取りもできるにはできるけどそれだと両手が塞がるからな、反撃しづらいんだよ。

しかしほっとしたのも一瞬。窓のほうから感じる攻撃の気配に俺はすぐ反応する。

直後、バリィン！！　と派手な音を立ててガラス窓が砕け散った。

それをなしたのは弓道の矢。そのまま楯無に向かった矢を手でつかみとる。

きた方向を見れば反対側にある校舎の窓から弓を射る弓道部員を一人見つけた。

「な、何だ！？」

「一夏、うるさい」

ヒュンヒュン！　と空気を裂いて飛んでくる矢を次々掴み取る俺。

それにしてもいい腕してるな、あの女子は。

十本ほど掴み取ると、次が飛んでこなくなった。矢のストックが切れたらしい。よろしい、ならば反撃だ。

キャッチした十本の矢を一本づつ、ダーツのような感じで投げ返す。まず一本目を逃げようとした相手の目の前の壁に突き刺し、動きの止まったところで当てないギリギリにタン、タン、と刺していく。十本が終わる頃には、恐怖からか弓使いの生徒は気絶したらし

く動かなくなっていた。よし。

「……お、終わったのか？」

「一夏、それフラグだから」

「――いまだっ！！」

案の定、バァン！　とすぐ横にあった掃除ロッカーが開いてそこからボクシングスタイルの生徒が一人飛び出してくる。……どこに隠れてんだよ。

そっちに気が向いたら、後ろからも聞こえる叫び声。

「これならどうよ！！」

確認すれば、同じくボクシング部らしい生徒がもう一人。

さて、どうやるか……よし。

「「うおぉぉっ！！」」

後ろから来る二人目のほうはまだ距離が少しある。

ということで、まずは前から来た一人目の右ストレートに対して右足で足払いをかけ、体勢を崩したところに左足で蹴りを決めてロッカーに叩き戻す。そしてその勢いそのまま、最初に襲ってきた剣道部員が持っていた竹刀を蹴り飛ばし、それを二人目に当てて撃沈させた。

「ふぅ、これで終わりってな」

悪い気もしたがついでなので金属製のロッカーに爪を突き立てて

ギィィィッ！　と嫌な音を鳴らしてやった。扉が開かないように抑えてるので中でドタンドタン暴れる音が聞こえてくる。

……ふぅ、やっぱり気絶してなかったか。手ごたえ軽かったんだよな。まぁ、いまので無力化はできただろうから結果オーライ。

「拓神、あなたなかなか酷いわね」

「いまさらだな。はい、返すよ」

扇子を楯無に返して、耳を押さえている一夏のほうを向く。

「おーい、だいじょぶか？」

「あ、頭の中がグワングワンするんだけど……」

「あの手のもんは嫌いだったのか？」

「いや、誰でも嫌いだと思うんだが……」

ん？　俺は前世から平気な感じだったんだが。

「そ、それにしてもいまのはなんだったんだ？」

「ふふふ。まぁ簡単に説明すると、学園最強である生徒会長はいつでも襲っていいの。それで、勝ったらその者が次の生徒会長になれる。ＩＳ学園の生徒会長の資格は、最強であることだからね」

「そういうなら、自分で対応してくれよ」

「あら？　別に騎士を付けちゃいけないって決まりは無いもの。そ

れに拓神に勝てないなら私にも勝てないでしょう？」

「……なんだかいろいろ無茶苦茶だこの学校」

「うーん、でも私が会長に就任して以来、襲撃なんてめったに無かったのになぁ。やっぱり一夏くんのせいかしらね」

「な、なんでですか？」

「ほら、今回の学園祭で一夏くんを景品にしたじゃない？　たぶんそのせいよ」

「ま、勝ち目の薄い運動部とか格闘系の部活が実力行使に出たってわけだ。楯無に取って代わって生徒会長の座について争奪戦をキャンセル。そしてお前を手に入れるってことだろうな」

でもまぁ、楯無が生徒会長である以上は俺がガードしなくても絶対に不可能なんだけどにゃー。

「それじゃあ説明も済んだところで、生徒会室に行きましょうか」

◇

数週間後。
ついに学園祭当日。俺と楯無は諸事情でちょっと寝不足気味だが問題ない。ちなみに真面目な理由でだからな？
さて、ＩＳ学園の学園祭は基本的には一般開放されているわけでは無いので開始の花火などは打ち上げないが、校内のテンションはそんなことは無関係に最高潮だ。
そんな学園祭当日に俺が何をしているかというと、

「裏方も裏方だなぁ、オイ」

場所は第四アリーナの整備室。そこには正直かなり物騒なものがずらりと並んでいたりする。
恐らくその筆頭はこのスナイパーライフル――形はＨ＆Ｋ・ＰＳＧ－１に近いが違う――だろう。それだけでなくハンドガンなどの小さな火器からタクティカルナイフや飛刀などの刃物類まで並んでいる。
何に使うのかと問われれば、生徒会の催し物『灰被り姫』で使うもの一式だ。もちろん全て本物で実弾。
それにしても楯無はなんて物騒なものを考えたんだか。

「仕方ないよぉ、ほかの人に準備させるわけにはいかないんだからさぁ～」

「それでこれ考えた当人はどこ消えた？」

「お嬢様なら、先ほど会場のチェックに行かれましたよ」

「いまさらだけど、このアリーナ丸々使うんだよなぁ……」

元々ＩＳで訓練するためのアリーナ。その広さはかなりのもので、そこが全て会場だというのだから驚きだ。このスナイパーライフルを扱うのにも十分すぎるんだにゃー。

さて、次に弄るのは……この王冠の仕掛けか。

というか流石と言うべきなのか、布仏姉妹。銃の扱いもできるとかどうなのさ？

「っと。のほほん、ドライバー取って。あ、マイナスのな」

「ほいほい～」

「サンキュ。――んで、このバッテリーがここと。これでオッケーなはず」

「ただいま。どう？　終わったかしら？」

あ、帰ってきた帰ってきた。

「俺はいま終わったところ」

「わたしもおわったよぉ～」

「私のほうも終わりました」

「よしよし、じゃあこれで全部オッケー♪　あとはキャストを集めるだけね」

「景品が景品なんだから、すぐ集まるだろ」

「まぁ、そうでしょうね。でもあの五人は欠かせないわよ？」

「それはわかってるって。これだってソイツら用だし」

さて、準備は終わったし、他の仕事もあらかた終わらせた。なら、

「楯無、二人で学園祭回ろうか？」

「うん、もちろんオッケーよ♪」

ドタバタの幕開け・下（後書き）

ようやくここまで。
次回からはガッツリ学園祭……の予定。

襲撃者迎撃のところがなぜか難しかった……一人増やしてみましたけど。
でも楯無って原作のままでも拓神と同じことできそうで怖い（苦笑

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますm（＿＿）m

次回『学園祭デート』

学園祭デート（前書き）

シンデレラの前に一本突っ込むことにしました（苦笑
そういえばデート話を書くのは何気に初だったり。

では、どうぞ。

学園祭デート

作業台から立ち上がり、楯無の手をとって整備室から出る。
布仏姉妹は、作業は終わっているにもかかわらず整備室に残った。
……まぁ、俺らの邪魔をしないようにとか気を使ってくれたんだろうけど。
つーか、もはやあの二人が俺たちを見る目線が温かいものから羨望に変わってるんだが気のせいか？
そういえば、虚さんと一夏の親友こと五反田弾（ごたんだだん）が会う頃だったよなぁ。もしかしてもう会ってたり？
どちらにせよ見守るだけだけどにゃー。
原作の限りだと弾は鈍感じゃないみたいだから、一夏のようなことにはならないだろうし。

「拓神？　どうかした？」

「ん、ああ。……なんつーかこういうデートみたいなの、俺たちあんまりしてないよなって」

考えてボーっとしててとっさに出たが、事実だったりする。
たぶん……というか、数えても片手の指で収まる数だ。
なにせ楯無は生徒会会長だし俺も副会長で休みが潰れることが多かったり、一夏達がデートしてたはずの臨海学校前は楯無のサプライズの仕込み。さらに夏休み中は楯無の実家に行って、その後俺がＩＳ委員会へ。
ぶっちゃけ夏休みは楯無の実家に行って、俺がＩＳ委員会から帰ってきた後でアンナコトもしたから、デートはしなくてもお互いそ

れで満足してたってのはある。
とまぁ、こんな感じでデートに行ったことはほとんどない。
楯無も同じ事を思ったのか、そういえば……というような顔をしてる。

「でも、まぁ、いいんじゃない？」

「ん？」

「今日は――アレが始まるまでだけど……デート、なんでしょ？」

でも楯無はそう言って笑い、繋いでいる手に力を込めた。
俺は、相変わらずだな。と思いつつ、手の繋ぎ方を指を絡ませた『恋人繋ぎ』に変えてギュッと握り返す。

「ああ。ま、学園祭だから何が起きるかわからないけどな」

「いいじゃない。そのほうが楽しいし、学園祭は楽しまないと。ね？」

「そうだな。それじゃ、行くか」

「ええ♪」

◆

行くか、とは言ったものの、お互い特に宛ても無いため、とりあえずは校舎内に入ることに。

クラスや部活ごとに出し物を考える性質上、必然的に各クラス内または部室や調理室などの特別教室での出し物が多い。

アリーナでＩＳを使ったものもあるにはあるが、主にそっちは各生徒一枚づつ配られるチケットで来る外の人に対する体験的なもののため、専用機持ちが行ってどうするといった感じだ。他には曲芸飛行なるもののあるらしいが、残念ながら時間がこっちの出し物の最終準備と被っていて途中で抜ける羽目になる。こういうのを最後まで見れないのは心残りすぎるから、最初から行かないっつー選択肢しか残ってなかったりするんだぜい。

だがまぁ、それを差し置いてもかなりの種類の出し物が展開されている。

……独創的というより奇怪といった類もあるのは、学園祭ならではご愛嬌だろう。うん。そう信じる。そして近付かないようにしておく。――――あ、なんか二年の生徒が引き込まれたっ！　客寄せらしき人物と話してたやつが急に教室から出てきた連中に引きずり込まれたっ！

一体、中でなにをしてるんだ……。だが近づくのは止めておこう。好奇心猫をも殺す、って言うだろ？

そしてこれには流石の楯無も頬を引きつらせて、不自然な表情を浮かべていた。

「な、なぁ、迂回して行かないか？」

「え、ええ。それがいいわね……」

よし、いつもは移動が面倒な広い校舎でも、今回ばかりはありがたい……。

「って、思ったけど許可出したのって俺ら生徒会……」

「で、でも流石に全部を把握するなんていうのは……神力でも使わない限り無理よ……」

「だよなぁ。でも少なくとも、俺が担当した書類にあんな……奇怪？　な感じのはなかったはずなんだが」

「私だって、見つけてたら却下するわよ……。でもそれは虚も同じでしょうし、でもそうなると……」

「のほほん……か？　いや、でも流石に……」

「こっちもこっちで忙殺されてたけど、あの子も忙しくて眠そうに船を漕ぎながら書類に判子付いてたわ」

「いやもうそれ決定だろ。つーか、中でなにやってるんだ？　少し距離があるここでもキャーキャー聞こえてくるぞ」

まぁ、仕方ないことだ。

確かに俺たちも忙しかったから、特に何を言うつもりも無いし。

……ただ、自分の処理する書類は気をつけようと思う。

「さぁ？　少なくとも、マトモじゃないでしょうね。でも行ってみた――」

「よし、とりあえず三階行くか」

あんなところ行ってたまるか！

俺は余計なことを言い出した楯無の手を強めに引いて、階段を上

がる。
　さて、三階には……俺たち一年の教室と美術室、音楽室が出し物があるみたいだな。
　とりあえず俺は楽器なんて学校でやるもの意外は全く扱えないし、自分クラスに行くのも今の状況ではあれだ。我らが一組は一夏効果で長蛇の列作ってるし。四組には楯無の妹の簪が居るから、行かないほうがいいだろ。
　となると、必然的に一組以外の教室ｏｒ美術室。よしここは無難に美術室かにゃー？
　とかなんとか、どこに行くかを考えながら階段を上がっていたら三階に着いた。

「んもう、強引ねぇ」

「あんなところに近づこうとするなよ……」

「なに？　心配でもしてくれてるの？」

「いや、とばっちりが来そうで怖い。というか、お前俺ごと行く気だったろ」

「あはっ♪　旅は道連れって言うじゃない」

「まず旅じゃないし、俺の直感じゃあそこへの道連れは犠牲と同義だ」

　喋りながらも、楯無の手を引いて美術室に足を進めた。
　さて、到着したけど……なになに？

「ここは普通に似顔絵らしいわね。どうするの？」

「それなら入って外れを引くってことはないだろうし、行くか」

ドアを開いて、美術室の中に踏み込む。途端、鼻をくすぐる絵の具など塗料類の香り。

「いらっしゃいませ！　――って、キャー！！　部長！　みんな！　会長と玖蘭君のカップルですよっ！！」

「「「誰であれ三組目キターー！！」」」

「なにっ！？　とりあえずこっちに来て貰えっ！」

「わかりましたっ！！　ということで、どぞどぞ～。部長はそっちに居るんで～」

いや、それはいいんだけど三組目って大丈夫か？　まだ午前中だけどさ。

促されるまま、あっちの勢いに乗せられて奥にあったイスに座らされる。目の前には部長らしき三年生が。

「私は、ここの部長やってる前川瑠璃（まえかわるり）。二人とも、よろしく」

「あ、はい」

「それで、似顔絵ってどんな感じのものなのかしら？」

「んー？　リクエストがあればその通りに書くよ。基本的に何でも可。一人で来たお客には理想の恋人とのツーショットとかオススメしてるけど……必要無いだろうし、どうする？」

それを描いてもらうって、もし俺だったら……うん、描いてもらってて悲しくなってくると思うんだぜい。

「そうね……」

「普通にこのツーショットを描いてもらえば良くないか？」

「じゃあ、そうしましょうか。というわけで、部長さんヨロシク♪」

「はいはい、任されました～」

前川さんは俺たちに「笑顔でね」と言うと、さっそく鉛筆を手にとって、それを白い画用紙に奔らせる。

こっちからだとどんな感じなのかはわからない。が、鉛筆は止まらない。喋るわけにもいかず、あまり動かないように意識しながらその行く末を見ていた。

外――屋外ではなく美術室の外から騒音は聞こえてくるが、この部屋だけは空気が違うように感じる。

前川さんが鉛筆を奔らせるカリカリという音がしっかりと耳に届いて、さらにその感じを助長させた。

そして何分経った後だろうか、前川さんが「よっし」と声を上げてその空気は霧散していく。

同時に今まで小さく聞こえていた他の教室からの騒音が、普通のボリュームに戻った。

「うんうん、自分でもいい出来だと思うよこれは。やっぱり素材が良いと描く方もがんばれるね」

手渡された画用紙を二人で覗き込む。当たり前だが、そこには鉛筆だけで描かれた俺と楯無。隣り合ったイスに座って前を向き、お互い微笑みながら、その間の手はしっかりと繋がっている。

絵については上手いとしか言いようが無い。素人目だからどう上手いとかはわからないが、そう思えるレベルだ。

つーか、手を離すの忘れてたし。なんかそういうのを絵に描かれるとか気恥ずかしい。といっても、そう思ってるのは俺のほうだけみたいだが。

「へぇ……」

「ふふん、どうだい？　イラスト関連で全国大会に行ったことのあるのは伊達じゃないんだよ。……悪いね、こんなナルシストな性格で。まぁ、何を言われても直す気はないんだけどさ」

全国行ったことあるのか……それは納得だな。性格については何も言うまい。

「えっと、一枚いくらでしたっけ？」

「あー、そうだそうだ。お金はいいよ。その代わり写真撮らせてくれないかい？　うちの部でも欲しいって子が多いからね」

俺たちの写真が欲しいって……どうするつもりだよ？

でもそれを肯定するように、背中に視線が集まってるのは事実なんだけど。

「じゃいくよ。はい、パシャっと」

「ちょっ」

「いえい☆」

いきなりで戸惑う俺と、しっかりピースまで決めてる楯無。……なんだかなぁ。

「うーん、玖蘭君がちょっとぎこちないけど、これはこれでアリだね。それじゃ、ありがとうね」

「どうもです」

「こちらこそ、ありがとうね」

「ついでだけど、友達にここのことを広げてくれるとありがたいよ」

ちゃっかりと宣伝してる前川さんの声を背に、俺たちは美術室を後にするのだった。

学園祭デート（後書き）

前川さん……元ネタ分かる人はわかりますよね。美術部というのもヒントですな。

はい、では、どうでしたかデート話。
自分は……上手く書けなくて苦労ものだったり。
原作に無い出し物って考えてあれですから。
――考えてませんね、ハイ（苦笑

とりあえず、次はシンデレラに突入できるかと。
でもどう書こう……。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『学園祭デート　2』

学園祭デート　2（前書き）

ぎりぎり投稿できたっ！

では、どうぞ～

学園祭デート　2

美術室から出た俺たちは、次に行く場所を考えながら校舎内を歩く。

「次はどうするの？」

「そうだな……」

自分のクラスはやめておく。

一夏目当ての客で長蛇の列ができているのは確認済み。確か二時間待ちだったはずだ。

そんな状態ではクラス内もドタバタして忙しいはずで、手伝わされるのが目に見えてる。

いや、楯無を巻き込んでメイド服な楯無を見てみたいなんて――1回見たことあるけど――思ってはいない。いないったらいない。

「んー、ふぁあぁ。どうするかな」

伸びと欠伸を一度だけして、思考を通常運転に戻して再開させる。

となると、一年の教室に近づくのは駄目だから二・三年生の教室か、さっきの美術部みたいな各部の出し物になる。

「出し物のリストにあった面白そうなの憶えてるか？」

「そうねぇ……爆弾解体ゲームっていうのもあったけどたぶん簡単すぎるわね。あとは技術部でハッキング対決とか、薫子ちゃんの写

真部だと『スクープ写真を狙え！』とかがあったわね」

その三つだけでこの学園が大丈夫なのかどうかすごく心配になったんだが。

てか、黛先輩は何を企画してるんだ……。

「……それにしても、やっぱり騒がしいな」

「仕方ないでしょ。学園祭だし」

隅のほうにある美術室から校舎の中央付近に近づくにつれて、騒がしさは増していく。

いや、確かに学園祭でテンションが高いのもあるし、招待チケットで外部から来てるのもあって普段の倍以上の人がこの学園内に居るんだけどさ。

それに加えて、学園の運営やってる人たちがこの学園祭にあわせて新規スポンサー獲得のために企業の人を呼んで説明したりしてるから、実際この学園の中に居る人は普段の三倍くらいなんだろうけど。

つーか、原作だとこれに便乗して亡国機業のオータムって学園内に入ってきたんだよな、たぶん。

いまもちらほらとスーツ着た人を見かけるし。俺に声でもかけようと思ってたのかもだけど、隣に楯無が居るし恋人繋ぎで手を繋いでるから声をかけてこない。というか来たらイラつく。

なにはともあれ、学園祭前に予測していた亡国機業の一夏への接触は無かった。ということは、いまの学園内には原作通りオータムが潜入してると考えて間違いはない。

……戦うことになったらこの睡眠不足のイライラをぶつけてやる。

とりあえず使う機体はケルディム・サーガとサダルスードでいいだろ。

「なぁ、楯無は眠くないのか？」

「ちょっと疲れてるけど、平気よ。慣れてるから」

「そっか」

「拓神は眠いの？」

「流石にな。一週間近く寝不足ってのは辛い」

体力的には、半神であるこの体は何の問題も無い。でも気力的には辛いのが現状だ。

これって慣れといたほうがいいのか？

「そっか。それじゃ、屋上に行きましょ」

「え？　なんでさ？」

「いいからいいから♪」

「え、ちょっ！？」

繋いだ手をグイグイ引っ張られて、階段を上がっていく。

屋上には何もなかったはず……？

「はい、到着～」

「えっと……で？」

「ここで休みましょ。まだ二時間くらいなら大丈夫だから」

そのままベンチの方まで引っ張られて、そこに二人並んで座る。

あー……マズイ。

春ほどじゃないけれど、秋も暑すぎず寒すぎずのちょうどいい気候だ。

それに今日は晴れて、気持ちのいい秋風まで吹いてる。

「悪い、楯無。ちょっと寝るから、起こしてくれ」

「わかったわ。おやすみ、拓神」

「おう……」

ゆっくり、ゆっくりと意識がまどろんで沈んでいく。

最後にもう一度「おやすみ」という楯無の声が聞こえて、俺の意識は完全に沈んでいった。

◆

……

……

……

「ぅ――――ん？」

――ようやく起きたか。

――ティエリア？

目は瞑ったまま、頭に響いた声に反応する。

俺は確か……楯無に屋上（ここ）に連れてこられて、眠くなって寝たんだったな。

でもなんでティエリアが起こしてくれたんだ？

……というか、この首と後頭部の柔らかい感触は……。

残った眠気を拭い去るように、ゆっくりと目を開ける。

「ぅ……楯……無……？」

「すぅ、すぅ……」

目を開けると、豊かな双丘を挟んで真正面に楯無の顔が見えた

俺はいつの間にやらベンチに寝かされ、楯無に膝枕をされている。

――拓神をそうしてから少ししたら、彼女も眠ってしまったんだ。

――そうか……。

――それと、もう一時間四十五分は経っている。そろそろ時間になるぞ。

――オーライ。

どうやら、ガッツリと寝ていたらしいな。

もう少し膝枕を楽しんでいたいところだが、時間だというなら仕方が無い。また今度頼んでやってもらうなりしよう。

俺は楯無を起こそうと、上半身を起き上がらせる。

すると、足への重さが消えたのに気付いたのか、楯無が目を開いた。

「ん……拓神？」

「ああ。おはよう、楯無」

「……私も寝ちゃってたのね。ところで時間は？」

「俺が寝てから、一時間四十五分は経ったってさ」

「あ、本当ね……。それじゃ、第四アリーナに行きましょうか」

「楯無、悪いな。デートって言っておいて……」

「ふふっ、いいのよ。学園祭を巡るのもいいけど、私は二人っきりで居られたほうが幸せだから。それに拓神の寝顔も見れたし」

「ははっ、そっか。でも、寝顔なんて何度も見てるだろ？」

「私の膝の上っていうことが大事なの」

そう言うと、楯無は立ち上がる。

俺もそれに続いて、ベンチから立ち上がった。
まぁ、楯無の言った意味は、俺が好きな人に膝枕をしてもらえてたのは嬉しいと思ってることの逆なんだろう。と、自己完結させてもらった。
少なくとも俺は、膝枕をするほうが逆になっても、好きな人に触れていられるだけで気分はいい。

「それじゃ、時間だし行きましょうか」

「行く途中で一夏達を連れてかないとな」

そうして俺たちは、屋上を後にした。

◆

と、いうことで、来たのは一年一組の教室。
もちろん目的は一夏達の誘か――ゲフゲフ、勧誘だ。
昼過ぎでピークも終わったのか、教室の中に居るお客は午前中よりずっと少ない。

「生徒会長、とーじょー☆」

「なぜテンション高いし」

そんなことを気にしていても仕方ないので、一夏相手に早速話を切り出す。

「と、そのまえに。一夏、面倒事が来たってのは当たってるけど逃げるなよ？」

「げ……」

まぁ、勧誘とはいっても。

「ふふん、悪いようにはしないから安心なさい？　というわけで、生徒会の出し物に協力して」

「疑問系じゃない！？」

「決定だもの」

「えっと……拒否権は？」

「あるわけ無いだろ？」

「そうよ？　夏休み以降の特訓の代償と思いなさい」

「うぐ……それを出すのは卑怯ですよ……」

「で？　いいわよね」

「はい……」

こんな風に強制だけどな。

とにもかく、一夏確保。

俺は一夏の肩にポンと手を置いて、諦めろとだけ告げてやった。

ラバーズの方はすでに楯無が勧誘に行って、どんどん陥落させている。
これで、主要な準備はほぼ整った。
後一仕事して、劇の幕が上がるのを楽しみに待てばいい。

「それじゃ楯無、先に行ってるからな？」

「おっけー。それじゃ、また後で」

「おう」

さて、それじゃ後一仕事の用意をしにいくか。

学園祭デート　2（後書き）

次からシンデレラ突入です。
……といってもすぐ終わりそう（笑

ケルディム・サーガが出せそうでテンション上がります！
あの機体かっこよくて大好きなんですよね。
HGででてないことが残念すぎる！
個人的には、ライルはデフォルトのケルディムよりこっちのほうが合ってるように思うんですけどね。なにせ乱ライルは乱れ撃ちのほうが得意ですし。

では、感想・アドバイス等待ってますm（＿＿）m

次回『灰被り姫〈シンデレラ〉』

灰被り姫〈シンデレラ〉（前書き）

今週の投稿！

……本当は土日で二話いける予定だったんですけどね。
友人の家でガンダムＥＸＶＳやってて書く時間削ってしまいました。

では、どうぞ

俺が向かったのは……というより、戻ったって言ったほうが正しいのか。

第四アリーナの整備室。出て行く前に整備していた武器の類は、テーブルの上に揃えて並べられている。

「あ、たっくんおかえり～」

戻った俺を出迎えてくれたのは、のほほんだった。

「よ、のほほん。虚さんが居ないみたいだけど、どっか行ったのか？」

「お姉ちゃんは、放送室に行ったよぉ～。たっくんはぁ、お嬢様と一緒じゃないの？」

「楯無はこれから一夏達をこっちに拉致って――もとい連れてくる」

「そっか。了解なんだよ～」

そんな会話の後、二人して置いてあるナイフやら銃を弄っていると、いつものあの五人を引き連れた虚さんがやってきた。五人とも、まだドレスは着ていない。

「あれ、虚さんは放送室に居たんじゃ？」

「途中でお嬢様と会いまして。それで彼女達をここに連れてくるように言われました。それと、お嬢様は織斑様の方へ向かわれましたよ」

「了解です。……んで、お前らはいまからどんなことやるのか聞いてるよな？」

「一夏の持ってる王冠を奪い取ればいいんでしょ？　フン、楽勝よ」

「あら、鈴さん、かなり余裕ですわね？　あれをいただくのは私（わたくし）だというのに」

「なに？　お前らには渡さん。あれを取るのは私だ」

「ふん、夫である私の手に入らない道理はないな」

「え、えっと、みんな？　まだ始まっても無いんだから、ね？　とにかく落ち着こう？　いま争っても仕方ない気がするんだよ……」

相変わらず、シャルロットは苦労体質みたいだ。

ま、今回の結果がどうなるのかは俺もわからねぇんだけどな。

「わかってるみたいだな。場所はこの第四アリーナの中。使いたいものがあればここのを使っていいぞ」

俺がそう言うと、案の定セシリアはスナイパーライフル、鈴は中国の手裏剣とも言われる飛刀、ラウラは二本のタクティカルナイフ、シャルロットは人が一人隠れるくらいは余裕な対弾シールドを選んだ。箒は持参の日本刀を使うらしい。

……なんでこんなものが用意してあるのかは誰も聞かないんだな。

まぁ、この学園内じゃ銃刀法違反も何も無いんだけど。

「では皆さん、こちらへどうぞ。着替えがありますので。本音もこっちに来なさい」

「うぃ～」

のろのろと歩くのほほんを最後尾に、七人がこの整備室から出て行く。

俺は残されたハンドガンやら……ん？　鉈（なた）？　こんなの整備中にあったっけ？　というかなぜ鉈。あれか、某鳴く頃とか某日記所有者デスゲームのごとくヤンデレになれということか。いや、後者は手斧だったはずだけど。

とにもかく、全てを保管用のコンテナにしまって、そのコンテナにロックを掛ける。

「これでよし、と。――ティエリア」

『ん？　どうかしたのか？』

誰も居ないのを改めて確認して、ティエリアに声をかけた。

「一夏の現在位置はわかるか？」

『ああ。ここからだと、向かいの場所にある更衣室内に居る。楯無嬢の反応もその近くの廊下にある』

ＶＢＰ（ヴェーダ・バックアップ・プログラム）を搭載している以上、それを司るヴェーダに直接リンク――というか、もはやヴェーダ内に存在しているティエリアには、位置情報から機体の情報まで、機体情報に関することほぼ全てが筒抜

けになっている。

「んじゃ、そろそろ準備が終わるな。一夏の位置は常にトレースしておいてくれ。それに、サダルスードとケルディム・サーガの準備を」

『了解。織斑一夏の位置情報は、何か問題が起きた場合伝えよう』

「任せた」

さて、俺は先に放送室に行こうか。

◆

「あれ？　もう居たのか、楯無」

「はぁい★」

放送室に入るとそこには見慣れた後姿が。

俺が声をかけると、楯無は振り向いた。

「一夏の準備は終わったってことか」

「そうよ。ところで、残った武器はちゃんとしまってきてくれた？」

「もちろん。ほら、キーは渡しとくからな？」

「確かに預かったわ」

俺がコンテナのカードキーを楯無に手渡すとほぼ同時に、部屋のドアが開く。

「会長、準備終わりました」

ドアの方を向くと、虚さんがそう言いながら入ってきていた。

「よし。それじゃ、始めましょうか」

楯無がマイクのスイッチをＯＮにする。

「さぁ、幕開けよ！」

彼女の声がアリーナに響くと、ブザーが鳴り響き照明が落ちる。

そしてセットにかけられた幕が引き上げられ、アリーナのライトがつく。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

楯無のナレーションにあわせてスポットライトに照らされた一夏が登場し、セット上を歩きだす。

そして一夏がセットの舞踏会エリアに足を踏み入れたとき、楯無が続きを喋りだした。

ただし――

「否、それはもはや名前ではない――」

――当たり前のように、原作通りじゃないけどな。

「幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち――」

ぶっちゃけたところ、続きを知ってても笑いを堪えられない。

といっても、これに対して思うことは一つだけだ。

「彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫〈シンデレラ〉』！！」

――――こんなシンデレラがあってたまるか。

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！」

血に飢えたシンデレラとか嫌すぎる。

でもまぁ、一夏の逃げ回る様が見れるのは楽しみだ。

あの一夏争奪戦の時、楯無の爆弾発言のせいで追い掛け回されてた俺を苦笑いで見てた一夏。

だが今度は立場が逆。……あぁ、愉悦だ。某マーボー神父じゃないけど。

「始まったわね♪」

そう楽しげにつぶやいた楯無の視線の先にあるディスプレイには、鈴音と格闘戦を繰り広げている一夏が映っている。

二人とカメラとの距離が遠いために音声はほとんど拾えていないがその代わりに映っている範囲は広く、スナイパーライフルを構え

てスコープを覗き込んでいるセシリアや、出方を伺っているほかの三人の姿も確認できた。
ともかく一夏、お前は“奴”に連れて行かれる前に一発もらっておけ。強化ガラスの靴でのかかと落としでもいいし、ライフル弾の直撃でもいいから。

「あ、やりやがった」

「ふふっ――王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自負の念によって電流が流れます」

楯無のアナウンスと同時、王冠を外そうと手を掛けた一夏に、服が少しくらいは焼ききれる程度の電流が流れる。
……そのボタンは俺の手の中だけどな。

「ああ！　なんということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私達には見守ることしかできません。なんということでしょう」

声はいつも通りでも、顔がすごい楽しんでる笑顔だよ楯無。
ちなみになぜ王冠の中に機密を隠してるのかっていうのは気にしちゃいけない。

「――さて、第二段階始動かしらね？」

出方を伺っていたほかの三人も参戦し、完全に乱闘と化しているセットの上。
それを確認した楯無が、無線で指示を出す。そして改めてマイクのスイッチを入れた。

「さあ！　ただいまからフリーエントリー組の参加です！　みなさん、王子様の王冠目指してがんばってください！」

ズドドドド……と、ここまで伝わってくる地響きと共に現れたのは、数十人のシンデレラ。

いわずもがな、ＩＳ学園の生徒たち。彼女達が、とんでもない気迫と共に一夏へ迫る。

……さて。

「楯無、仕事行って来る」

「もちろん私も行くわよ。……虚ちゃん、あとはよろしく」

二人で放送室から通路に出る。

恐らくもう、セットの上に一夏は居ないだろう。

「ティエリア、ケルディムサーガ展開」

『了解、『マイスターズ』起動。モード選択（セレクト）ＧＮ－００６／ＳＡ『ケルディムガンダム　サーガ』』

待機状態のネックレスを中心にＧＮ粒子が舞い、俺の体に機体を構築していく。

ノーマルのケルディムの機体色は、モスグリーンと白。それに対してサーガは、グレーやブラック。

ちなみにサーガとはＳｐｅｃｉａｌ　Ａｓｓａｕｌｔ　ＧＵＮＤＡＭ　Ａｒｍｓ（特殊強襲ガンダム武装）の頭文字から。

そして特殊強襲の名の通り、ケルディムサーガは基地内などに突入し戦闘を行うことを想定されていて、武装もそのためのものに変

わっている。
　まずデフォルト機の特徴である頭部のガンカメラは中・近距離用のクリスタルセンサーに変わり、次いでシールドビットは狭い空間では不利なため全て排除され、その代わりの防御手段として左肩にはＧＮスモールシールドが装備されている。ちなみにシールド中央にもクリスタルセンサーが内臓されていて、防御を行いながら索敵をすることも可能。
　そして武装も近距離用に全て銃身の短いものが七丁装備されていて、ＧＮスナイパーライフル？は短銃身化されたＧＮアサルトカービンに。ＧＮビームピストル？はそのまま、腰にデュナメスと同型のＧＮビームピストルがホルスターと共に追加され、シールドビットがあった両膝にはＧＮサブマシンガンが。後背部のＧＮドライブ周辺のシールドビットは、ＧＮミサイルコンテナに換装されている。
　ちなみにこの七丁というのはエクシアのセブンソードが意識されていて、ケルディムサーガの開発コードはセブンガンだ。
　また胸部装甲もかぶせるように追加されていて、隠れてしまった胸部中央のセンサーに代わり、左胸にセンサーが装備されている。

「さて、行こうか」

「お願いするわね」

「了解」

　俺は隣に立っている楯無を抱き上げた。
　楯無もＩＳを展開するという手もあったが、通路はＩＳを使うには狭く、移動するだけなら俺だけが展開すれば十分。

「しっかり捕まってろよっ！」

そして、俺は通路の床を蹴って飛び出した。

灰被り姫〈シンデレラ〉（後書き）

やっと戦闘シーンが来るー！
個人的に戦闘シーンは書いててすごく楽しいので。次回はがんばります！
それにしてもサーガかっこいいですよね、サーガ。
建物の中という本領発揮のできる空間なので、うまく書けるようにしたいです。

ところでガンダムＥＸＶＳ、楽しいですねあれ。
あれのためだけにＰＳ３が欲しくなりました。クリスマスにねだってみようか……もしくはお年玉を使うか。
ちなみに使ってる機体はデュナメスです。デュナメスで近接戦を繰り広げてました（ェ？
使い方違うのは重々承知ですが、したいじゃないですか！　ファーストシーズンのニールの対サーシェス戦のように！
ということで、近づいてはビームサーベルで斬るやら蹴るやらしてました。もちろん至近距離でスナイパーライフルも使ってました。
楽しかったです。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ

次回『室内戦闘』

室内戦闘（前書き）

うーん、こんな感じかな？
とかそんな感じで完成した今回。

では、どうぞ

室内戦闘

俺は楯無を抱えたまま、通路を徐々に加速しながら突き進む。
アリーナの構造上、幸いなことに通路は全て繋がっている一本道なため、障害物にいちいち止まる必要は無い。
たまにある緩やかでない急なカーブも、壁を蹴って方向修正をしながら突き進む。

その結果一分強ほどの時間で、アリーナの反対側にある一夏の居る更衣室までたどり着けた。

「ティエリア、ここで間違いないな？」

『ああ、白式の反応はこの中だ。このアリーナの構造との照合もしてある』

「扉はやっぱりロックされてる。私が解除してもいいけど……二、三分はかかるわ」

「それは大丈夫だ。ティエリア、リンクは？」

『問題ない。いつでも行ける』

「オーライ。楯無、ロックを解除して中に突入する。そしたら、一夏のガードに回ってくれ」

「了解よ。でも、用心に越したことは無いわね」

楯無はミステリアス・レイディを腕部だけ部分展開させると、水のナノマシンを操り自分の分身を作り上げていく。
いつも戦闘中に使う身代わり用とはわけが違うのか、少し時間を掛けてその分身は形作られていった。
俺はその間、一夏の現状の情報をティエリアから受け取る。
ヴェーダを介して、いま一夏の見ている映像がハイパーセンサーの中に新たなウィンドウとして開き、それを閲覧した。
一夏の視点はめまぐるしく動き、その先には黒と黄のカラーリングを施されたクモのようなＩＳとその操縦者の女が見て取れる。
女の背中からは八本のクモのような装甲脚が伸びていて、それぞれが爪のような剣か、銃口をその先端から見せている。

「準備、終わったわ」

「よし、行くぞ」

『セキュリティ解析……完了、システム掌握、ロック解除』

手をドアロック解除のためのコンソールの上に置くと、十秒と経たずにセキュリティが解除された。
そして楯無の分身が俺の後ろにつき、楯無本人は俺とアイコンタクトでうなずき合うと、ドアを開くスイッチを押す。

ヒュイン、と軽い音を立てて開いたドアから飛び込み、一夏に組み付こうとしていたクモＩＳの女に向けてＧＮアサルトカービンで牽制射撃を行う。
俺の撃ったビームは女が下がることで全て避けられ、向こう側の壁に穴を穿った。
一夏の様子を見てみれば、いつかの模擬戦のようにワイヤーでがんじがらめになって身動きが取れない様子。

クモ女がこちらを向く。楯無の分身はすでに女と一夏の間に入り、一夏の盾になるようなポジションを確保している。分身を構成している水のナノマシンは、当たり前だがミステリアス・レイディに使われているものと同じであり、防御用のヴェールと同じく盾になる。しかも今回は人の形を取っていることで厚みもあるため、ヴェールより防御力は上。クモ女の装甲脚に装備されている銃器では貫けないはずだ。

「オイオイ、誰だよお前ら。……ん？　その変なＩＳ、テメェが二人目か！　ちょうどいい！」

クモ女――ああ、もう。確か名前は、スコー……いやこっちじゃない。お、おー、オータ……ムだったか。そうだオータムだ。

オータムがイラついたような顔でこちらを睨むが、俺の姿を確認すると同時にその唇の端が釣り上がる。

しっかし、ガンダムを変なＩＳとは……言ってくれるじゃねぇか。えぇ？　亡国機業さんよ。

「どうせコイツを潰した後でお前のＩＳも戴くつもりだったんだ。でもまさかそっちから来てくれるなんてなぁ！」

「はっ、テメェにくれてやるＩＳは一機もないな。大人しく捕まりやがれ」

「ギャハハ！　ガキがでかい口叩いてんじゃねぇよ！　オラァ！！」

「趣味悪ぃ笑い方だなっ、と」

オータムが動く前に”攻撃の意思を感じ取り”、その場からさっさと退避する。

俺が動いてから一拍おいた後、俺の居た場所には八本の装甲脚から放たれた銃弾が突き刺さっていた。
いまの俺は脳量子波を開放してる。そうそう簡単に攻撃を食らってはやらない。
続けて放たれる銃弾を全て回避し、反撃としてアサルトカービンのビームを撃ち込む。

「ちぃっ、ちょこまかと！」

「それはこっちの台詞だっての！」

八本の装甲脚と本体はそれぞれ独立したＰＩＣを持っているらしく、オータムのＩＳ『アラクネ』はその恩恵なのか動きがしなやかだ。
……しかし、俺からすればその程度がどうしたという話。楯無より劣っているなら、俺にとって何の問題も無い。
事実、オータムの射撃に俺は一度もダメージを負っていないが、俺の攻撃はアイツに当たっている。
もっとも、それでも八本がそれぞれ攻撃を仕掛けてくるという手数は脅威なため、確実に回避またはスモールシールドで防御してから隙を見て撃ち込んでいる状況ではあるが。

「くっ、このガキ、調子乗ってんじゃねぇ！」

オータムの怒声と同時、その手にはマシンガン二丁が展開されていく。
流石にこれは捌ききれないか。
装甲脚の銃器はマシンガンのようにばら撒くものでは無いから回避できてるが、ばら撒かれると辛い。
いい加減、受身じゃなくて攻めに回るとしようか。

アサルトカービンを右肩のアタッチメントに懸架し、両膝からGNサブマシンガンを両手に持つ。
オータムの銃弾がそれと同時に飛んできたため、更衣室のロッカーの影に飛び込んで回避した。
俺を見失ったオータムのマシンガンが、並ぶロッカーに次々と穴を開けていく。
それをかがんでやり過ごし、俺の付近から離れた瞬間に俺は飛び出した。

「そこかぁ！！」

「だぁぁっ！」

狭い更衣室内を飛翔し、すれ違い様にサブマシンガンのビームを浴びせる。
その時にこちらも数発はもらったが、想定内だ。全てシールドバリアーが防いでくれた。
そのまま壁に突っ込んでいき、ぶつかるときに体勢を入れ替えて、三角飛びの要領でオータムの真上を取る。

「くらっとけよ！」

オータムの頭上を飛び越えながらサブマシンガンで撃ち、後腰部のコンテナから機雷を真下にばら撒く。ついでにと、フロントアーマーのGNミサイルも八発全て撃ち込んだ。

「なッ！？　がぁっ――――！！」

ドドドドガァァァン！！
GN粒子でなく通常炸薬である機雷が爆発して、爆煙がオータム

を包む。
　そしてその爆煙が薄れるのを待つと、そこには片膝を突き、特徴的な八本の装甲脚全てを失ったオータムの姿があった。

「げほっ、かはっ、がはっ！　……はぁっ、はぁっ。チッ、ガキのくせにこのオータム様に傷をつけるたぁ……死にやがれぇぇ！！」

「ちっ！」

　瞬時加速（イグニッション・ブースト）。瀕死の機体でそれを使ったオータムは、両手にマシンガンの代わりにカタールを装備して飛び掛ってくる。
　俺はサブマシンガンを膝のアタッチメントに戻す暇もなく真上に投げ捨て、上げた手でバックパックの両サイドからＧＮビームピストル？を取り、手斧状態のそれで二本のカタールを受け止めた。

「甘ェんだよ！！」

「くっ！」

　繰り出される前蹴り。後方宙返りでそれをかわし、今度はロッカーを足場にして天井近くに飛ぶ。

「二度目があるわけねぇだろ！」

「もともと狙ってねぇ！」

「ちぃっ！」

　天井を蹴って真下に自身を加速させ、上に向かってきたオータムに手斧状態のビームピストル？を思いっきり振り下ろす。

ガギィ！　と硬質なものがぶつかり合う音が響き、ぶつかり合った反動で距離を取った。

「ふっ！」

「オラァ！」

ビームピストル？をハンドガンモードに戻してオータムを撃つ。しかし、アサルトカービンやサブマシンガンのように威力や連射でシールドバリアーを抜くことができないビームピストル？では突っ込んでくるオータムを止められず、もう一度カタールと手斧での打ち合いになった。

「オラオラオラァァ！」

「ぐっ、このっ！」

カタールと手斧状態のビームピストル？が交錯して火花を散らす。いくら閉所戦闘用のサーガでも、格闘戦は荷が重い。こんな風に打ち合うのはこの機体の本分じゃないはずだ。

それに、グリップの基部がもう少しで限界を迎えるような気がする。

やっぱりさっさと終わらせるに限るか。長引かせる意味も無い。

「――これでも、くらえ！」

「がっ！」

左足を軸に右足で回し蹴りを叩き込む。そしてよろめいた隙に背後に回りこみ、そこでビームピストル？を乱射する。

「終わりだ」

シールドバリアー用のエネルギーをほとんど使い果たさせたところで乱射を止め、ビームピストル?も下ろす。

命を掛けた実戦なのに、これは少し甘いかもしれないが……ただ、ここまでで十分というだけの話だ。

「ふざけるなよ、クソガキ！　まだ終わってなんかいねぇんだよ！！」

まだ動ける機体で俺に向かってくるオータム。俺は動かない。

「なッ！？」

そして――オータムのカタールも俺には届かない。

オータムの脚部には水色をした蛇腹剣が巻きついている。それが、オータムの動きを止めていた。

「サダルスード」

俺の一言で、ティエリアが機体を変更してくれる。

グレーの機体から、全身蒼色をした機体に。

今思えば、この二機って似てるな。両方ともほぼ全身が白の無い同系統の色で、白いのはマスクだけってところが。

まぁそんなことはどうでもよくて、俺はリボルバーバズーカを構える。

「残念ながら、敵は俺だけじゃなかったわけだ」

そう言ってカーボンネットの弾丸を撃ち、オータムの体を拘束する。
これで原作のように、自分だけ逃げて機体を自爆させるなんて方法は取れなくできた。
ＰＩＣで動けるには動けるだろうが、足にはまだ蛇腹剣が巻きついたままなため、そのまま壁を突き破って逃げることも叶わないだろう。

「さて、と。話をいろいろと聞かせてもらおうじゃない」

ミステリアス・レイディを右腕だけ部分展開して、蛇腹剣の柄を持った楯無が話しかける。
実は本格的に戦闘が始まった後、分身体ではなく本体に入れ替わっていた。あの水分身はあくまでも突入時のダミーということだ。

「お疲れ様、拓神」

「おう。で、コイツはどうするんだ？」

いまだに抵抗を続けるオータムに目を向ける。
その諦めの悪さは評価に値するな……。

「とりあえず先生達に引き渡すわ。その後どうなるかは先生達次第ね」

「ふざけるなよ！　クソガキ共がぁぁっ！　このオータム様が負けるわけねぇだろ！」

反対側に動けないならばと、自分を縛る鎖である蛇腹剣を持つ楯無のほうへ突っ込むオータム。

しかしそれに反応した楯無が蛇腹剣を操作すると、それだけでバランスを崩して地に伏せる。両腕はカーボンネットで拘束されているため、受身を取ることすらできない。

もう終わった。ここに居る俺、楯無、一夏はそう思い、肩から力を抜いた。

室内戦闘（後書き）

拓神も言っていた通り、長引かせる理由が無い戦闘なため、最初のほうでフルバーストして一気に追い込みました。
でもそれでも粘るオータムさん（苦笑
ちなみにリムーバーは使わずじまい。

あぁ、ＰＳ３とガンダムＥＸＶＳが欲しい……
あと二、三週間くらいで何とかなることを祈っている自分が居る。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回「深青の襲撃者」

青い襲撃者（前書き）

明日が三者懇談二日目で休みなため、今週末二話目を投下。

では、どうぞ

青い襲撃者

オータムの抵抗は続くが、もうそれで終わったと思っていた。しかし、

「いい加減諦めなさい？　あなたは負けたの――――っ！？」

「楯無っ！」

俺も楯無も同時に敵意を感じ取り、機体を展開したままの俺が、部分展開状態の楯無を抱き抱えて一夏の居る方へ飛び込む。

その直後、六本のレーザーが外側の壁を貫き、さきほどまで俺と楯無の居た場所の近くを通過していった。

六つの穴を空けられた壁に更なる衝撃が加えられ、耐え切れなくなった壁が崩れ去る。

「――迎えに来たぞ、オータム」

崩れ去った壁の向こう側から現れたのは、深い青のＩＳを纏った少女だった。

「テメェ、私を呼び捨てにするんじゃねぇ！」

「誰だ！」

リボルバーバズーカを向けるが、青いＩＳ『サイレント・ゼフィルス』に乗った少女――確か『Ｍ（エム）』だった――は、それを臆することなくオータムに近づき、ナイフでカーボンネットを切り裂いた。

その脇を動けるようになったオータムが抜け、穴の空いた壁から出て行ったが、俺はリボルバーバズーカの銃口をMから逸らさない。ただ、これは威嚇。撃ってもどうせシールド・ビットで防御されて終わるだけだ。炸裂弾（バースト）を使えば爆風はMに届くだろうが、こっちにも影響が出る。

「おい！　待て！」

「一夏、無駄だ。もし三人同時に飛び出したとしても、逃げに徹されれば無駄になる」

キュリオス・アリオスで追いかけてもいいが、機体変更に十秒掛かる。今からの十秒はこいつが逃げるのに十分だ。

それに確か、サイレント・ゼフィルスにはシールドビットがあったはず。それを使われれば、さらに時間は掛かる。

楯無も今から動いても無駄だとわかっているのか、何も言わない。

「ふん」

Mは俺たちを一瞥すると、シールド・ビットを二基残して飛び出していく。

恐らくボロボロのオータムが、ラウラやセシリアに捕捉されたんだろう。

少しでも追い討ちを掛けようと俺が立ち上がった瞬間、天井近くを浮遊していたシールド・ビットが自爆した。

「ちっ！」

爆発が天井の表面を崩し、瓦礫が降り注ぐ。

楯無もミステリアス・レイディを完全に展開し、シールドバリア

ーのおかげで俺たちに被害は無いが、時間稼ぎはされたらしい。
更衣室であろうとアリーナ内の一室。そこそこ強固ではある。なので、爆発で崩されたのが表面だけだったのは幸いだ。
俺が空けられた壁の穴から外を見ると、もう奴らの姿小さく見えるだけ。

――ティエリア、アラクネとサイレント・ゼフィルスは？

――サダルスードの攻撃範囲内ではあるが、もう戦闘領域からは離脱している。サダルスードのままＧＮスナイパーライフルで狙い撃てないことは無いだろうが、シールド・ビットを考えると有効打にはならないだろう。

――そうか……一応追撃しておく。

リボルバーバズーカが収納された代わりに、右腕にはデュナメスのＧＮスナイパーライフルが展開された。
サダルスードのセンサーをスナイパーライフルと同期させ、拡大された深青の機体に狙いを定める。
トリガーを引くとピンク色の光条が一直線に伸びていったが、それは深青の機体に届く前にシールド・ビットによって阻まれて届かない。そうしているうちに、深青の機体は瞬時加速でも使ったのかかなりの速度で離れていった。
何度か撃った後、俺はスナイパーライフルの構えを解き、機体も解除する。

「はぁっ。逃げられた、か」

「そう、やられたわね……」

確かに、まさかサイレント・ゼフィルスがここまで出張ってくるとは思っていなかった。だから索敵もしてなかったし。
それとアラクネを起動不可にできなかったのは痛いな。原作で使った自爆なら、その後かなりの時間は行動不能に陥ったはずなんだが。

「ふぅ、戻るか」

「ええ、そうしましょう」

「えっと、あの、俺は……」

「とりあえずついてこい」

「お、おう」

◇

学園祭終了後の夜。
亡国機業の襲撃は一般生徒には伏せられ、俺達関係者は口外禁止との事。事情聴取と誓約書も書かされた……もう何枚目だこれ。

学園祭というのもあって、外部からのゲストが多数居るときにそんな事態が起こっていたというのは、学園側としては公にしたくない事実だろう。

幸いにも事が起きたのは第四アリーナの一室だけだったため、隠蔽は楽だったみたいだ。

また生徒側からしても、知らないなら知らないまま学園祭を終われて良かったはず。

大掛かりな撤収作業は明日の午前中を丸々使って行われることになっていて（生徒会の舞台等は業者を呼んでいて現在進行形で撤収中）生徒はもう解散済みなため、あれだけ騒がしかった校舎も今は静かだ。

そんな静かな夜の校舎の生徒会室に、俺と楯無と一夏の三人は居る。

「さて、それじゃ――一夏くんへの尋問でも始めましょうか」

「ああ、そうだな」

「えっ！　じ、尋問！？　ちょ、ちょっと待ってください！？」

「あはっ。冗談よ、冗談。ちょっとお話するだけだから安心して？」

「ほっ、ですよね。そうですよね」

「個人的にはちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたいこともあるけどな」

ＰＩＣのマニュアル制御についてだとか、怒りで周りが見えなくなるところとかについて、三十分くらいでいいからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたいところだ。いくら状況が状況とはいえお前は死にた

いのかと。

「ええっ！？」

「はいはい、拓神の個人的なお話はまた後で。今はこっちを優先して頂戴。一夏くん、あの女……二人のうちどっちかにでも見覚えはある？」

「い、いえ、無いです。でも、第二回モンド・グロッソのときに俺を誘拐したのは自分達だって言ってました」

「ええ、それはさっき君の白式の戦闘ログを閲覧したときに聞いたわ。それじゃあ、彼女達の組織について何か知ってるかしら」

「アイツが言ってた『亡国機業（ぼうこくきぎょう）』っていう名前しか……。亡国機業って何なんですか？」

「ストレートに言えばテロリストだ。それも、ＩＳを強奪できるレベルの組織力を持ってる」

俺の言葉に楯無が続けた。

「しかも奪ったＩＳを十分に扱える操縦者と、整備できる技術力もある……厄介な連中よ。始まりは第二次世界大戦の頃らしいけど、定かじゃないわ」

奪ったＩＳを使うだけなら、そこまで厄介じゃない。でも整備できるとなると厄介だ。消耗させて追い詰めることが難しくなる。

「そうなんですか……」

「ああ、ちなみにこの一週間ちょっとの間、一夏は狙われてたぞ。たぶんさっきのオータムって女に」

「そうだったのか……って、ええ!?」

「人が大勢居る昼間に仕掛けてくるほど迂闊じゃ無いでしょうから、夜に私たちが寮の外をパトロールしてたの。おかげで寝不足だけど」

そのおかげで学園祭が終わって気が緩んだときからかなり眠い。昼近くに二時間寝た程度じゃ、全快には程遠いみたいだ。

ついつい欠伸が漏れた。

「最善の手は私か拓神が一夏くんの部屋に泊まることだったんでしょうけど、それは私達の精神衛生上よくないからそういう手段に出させてもらったわ」

「は、はあ……」

「とまぁ、このくらいかしらね。私からは以上。何か聞きたいことはある?」

「えっと、じゃあ、一つ。そんなことを知ってる楯無さんって一体……」

「あら、私は拓神の婚約者で生徒会長なただのおねーさんよ?」

正直、ＩＳ学園の生徒会長な時点で”ただの”は付かないと思うんだが。

「そういうのはいいですから」

「そうね、私の家……更識家は昔から裏工作には強いのよ。暗部ってことね」

「おい楯無、話していいのか？」

「問題ないわ。亡国機業に狙われた以上、裏の世界のことにまったく無関係ってわけでもないし」

「そうか……」

まぁ、バグが大々的に出現したら裏も表も関係ないだろうけどな。なにせ世界がかかってるようなもんだし。

今現在、バグが出ても公開してない国がある可能性も無いわけじゃない。

俺や楯無は反応を感知できるが、その範囲がどこまでなのかはよく掴めてないのが現状だ。地球全体で見て、日本の裏側とかは感知できない可能性もある。わかってることは、少なくともロシアから日本までの距離と同じ半径はカバーできてるってことくらいだ。

「更識家は対暗部用暗部……お家柄ってやつよ」

「対暗部用暗部……」

「まぁ、憶えなくていいわ。無関係じゃないとはいえ、直接関係してるわけでもないし」

さて、と楯無が話を終わらせる。

「一応お話はこれで終わりよ。一夏くんも今日は疲れてるでしょう、早く休んだほうがいいわ。私達も今日はもう休みたいし」

「そうですね、じゃあ、失礼します。――って、あ」

「なんだ？　どうした、一夏」

「いや、シンデレラの時の王冠って……」

王冠……あ。

そういえばあれって……崩れた更衣室の瓦礫の下か。

「あー、そういえば忘れてたわ。仕方ない、あれは無かったことにしましょう。あそこにはもう業者が入っているでしょうし、その作業工程でどうせ処分されちゃってるわ」

「あれって一体なんだったんですか？」

「え？　一夏くんと一緒の部屋になれる権利を手に入れるための王冠よ」

「はぁっ！？」

「でもま、なしよ無し。それとも一夏くん、一緒になりたい子でも居るの？　なら今回だけ迷惑を掛けたお詫びとして一緒の部屋にしてあげるわよ？」

「いや、そういうわけじゃないです。じゃあ、失礼します」

そう言って足早に出て行く一夏の背中に、俺は声を投げかける。

「これからが大変だぜ、一夏。いろんな意味でな」

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは、それに免じて許してやろう。

青い襲撃者（後書き）

とりあえず、学園祭編はこれにてひと段落です。
次はまたオリジナルに行って終わりを早めるか、もう少しだけ原作やってからオリジナルに突入するか。
それは、簪の登場を考えつつ決めたいです。

書いてて思ったんですけど、自爆機能付きのシールド・ビットって厄介ですよね。今回みたいに置き土産として使えますし。

では、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『学園祭後』

学園祭後（前書き）

とりあえずすみませんでしたぁぁぁぁっ！！（土下座

またもメイプルをやっていてこの結果。昨日も3時過ぎまでやってました～。そこからこれを書き始めて、四分の一くらい書いたところで寝落ちしましたね。確か朝の5時くらい。

全く自分でも何をやっているのか……万死に値しますね。

ちょっと二階の、窓辺から飛び立ってきます。

学園祭後

数日後――――

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした」

学園祭のほとぼりも大体冷め、落ち着きを取り戻したＩＳ学園。
今日は学園祭前同様に、体育館で集会が開かれている。
内容は――アレだ。
各部の一夏争奪戦。その結果発表。

「それではこれより、投票結果の発表をはじめたいと思います」

楯無のその一声で体育館にいる全校生徒に緊張が走った。
俺はその様子を、壇上の楯無の隣で見守っている。
……なんでここにいるのかと聞かれれば、楯無に「副会長だから、今後はここね♪」と言われたと答えるしかない。
なんというか、相変わらずの自由っぷりだ。いや、不満は全く無いけど。

「投票結果、第一位は……」

ゴクリ。並ぶ全校生徒の方から、つばを飲むような音が聞こえた気がする。

「生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「「「「え……？」」」」」

「ククッ……」

ポカンとした空気に、俺はつい苦笑を漏らす。

あの時、放送室から見たパッと見だけでも全校生徒の半分近くは居た。

そしてこの劇の参加条件は『生徒会に投票すること』。

実質あの時点でもう結果は決まっていたのだ。

楯無も想定通りといった顔をしてたし。

それほどにおいしそうな餌だったんだろうな、一夏と同室ってのは。

それから数秒後、我に返った生徒一同からは案の定ブーイング。

「卑怯！　ズルイ！　イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！　おかしいわよ！」

「私達がんばったのに！」

ｅｔｃ

それを楯無はまぁまぁと手で制して続ける。

「劇への参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私達は参加を強要したわけじゃないのだから、立派に民意と言えるわね」

そう言ってウンウンと頷く楯無。

だが、まだブーイングは収まらない。

いや俺も同じ生徒会とはいえツッコミたくはある。

でもまぁ一夏の所属がどこであろうと個人的にはどうでも良かったりするからなにも言わない。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君は、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

しかし続いていたブーイングは楯無のこの一言で収まって、代わりに各部のアピール合戦が始まる。

まぁ、なんというか、学園の空気はいつも通りだった。

◆

「では、以上で学園祭の投票発表は終わります。続いて連絡を織斑先生お願いします」

直前にあった大騒ぎを気にもせず、いつも通りに司会を務める虚先輩。

そして下がった俺と楯無に代わって織斑先生がマイクの前に立つ。

それだけで騒がしかった生徒一同は一転シンと静まり、並ぶ列も一瞬でピシッと整列する。

流石織斑先生、いろいろと半端ない。

「んんっ、連絡だ。まぁ内容的には朝のＨＲで連絡しても構わんのだが、手間が省けるからいま連絡させてもらう。

……諸君も一学期の学年別トーナメントのことは憶えているな？

知っての通りで中止になったのだが、その代わりとして来月の半

ばに専用機持ちのみでタッグトーナメントを行うことになった。目的はあのときのようなことに対応するため、各専用機持ちの錬度を高めること。大方の生徒には直接の関係はあまり無いが、学年別トーナメントのとき同様に平常授業ではなく試合の観戦だ。一応、日程は二日間を予定している。レベルの高い試合を見ることで各々の成長にも繋がるだろう。専用機持ちの人数は三年に一人、二年に二人、一年に八人で十一名だが、玖蘭拓神は私事情により参加しない。よって、参加人数は十名。それぞれ準備を怠らないように。では、以上だ」

これだけでもういまの一年の異常さはわかるよな。
八人ってなんだよ八人って。全コア４６７個のうちでそれってどうなんだよ。

「織斑先生、ありがとうございました」

織斑先生が壇上を降りる際に、こちらに目配せしてくる。
内容的には「これでいいだろう？」的な感じ。いい加減、俺は織斑先生に頭が上がらなくなりそうだ。

「では、会長」

「はい。これで集会を終わります。解散」

◆

集会が終わり各々教室へ戻ったが、体育館には俺と楯無。そして織斑先生が残っていた。
俺たちの共通点は、全員がバグの存在を知っていること。

「玖蘭、これでよかったのか？」

「はい。協力ありがとうございました」

「なに、バグのことを突然聞かされたなら一蹴しているところだが、すでに知っているからな。危険な存在に対して、詳細不明だからといって何も手を打たないお堅い人間とは違うよ。私は」

ＨＲはいいが、授業には遅れるなよ。と言って教室に戻っていく織斑先生。
それを見送って、体育館には俺と楯無だけになった。

「それで、拓神はどうするの？　不参加ってことだったけど」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「専用機持ちタッグのことは知ってたけど、そっちは聞いてないわよ」

不機嫌そうに少し頬を膨らませる楯無……うん、可愛い。
って、そうじゃなくて。

「悪い悪い。ま、人数合わせってのも兼ねて、俺は当日ちょっと出かけてくる」

「どこへ？」

「宇宙（ソラ）に、な」

「え……？　行けるの？」

「じゃなきゃこんなこと言わない」

「でも、どうやって？」

「もちろん『マイスターズ』を使ってだ。キュリオス・ガストなら大気圏突破できるしな」

「はぁっ、あいも変わらずめちゃくちゃね。まぁ、神力使えばＩＳ無しでも行けるでしょうけど」

肩をすくめた楯無は、苦笑いしながらそう言う。あきれも混じってる気がした。

「それで？　何をしに行くのよ」

「バグに対抗する手段の一つを作ってくる。っても、一日じゃ終わらないだろうから、もしもが起きたときに間に合わせることになるだろうけどさ」

「内容は秘密なの？」

「そのほうが面白いだろ？」

「じゃ、楽しみにしてるわ」

「おう。……さて、それであの子のことはどうするんだ？」

「そう、ね……」

話題がこれに変わると、楯無はいつもの天真爛漫ぶりがウソのようにしゅんとしてしまう。

個人的にもあんまり見たくないな、こういう楯無。

落ち込むとか、そういうのにあんまり縁のなさそうな性格だからなおさら。

でも、あくまでもこの話は楯無と妹の簪の間での話だ。

なんとかしてあげたくても、あんまり俺が関わっちゃいけない。

――ホント、いくら人外の力をもってても、こういう時って無力なんだよなぁ。

人の気持ちはそう簡単に変わらない。なにかきっかけが無ければ。

今回の専用機持ちタッグが、原作のようにそのきっかけであることを心から願っている。

楯無がそっちに対応しっぱなしでも構わない。

俺は俺のやるべきこと、やらなければならないことをやる。

バグ。

俺がこの世界に呼び寄せた災いなら、それは俺が殲滅してやろう。

自己犠牲なんてしない。そんなことをすれば楯無が悲しむから。

あくまでもこっちは生き残ってあっちは殲滅させる。

それが俺の責任の取り方だ。

そして俺の誓った『自分とその周りの世界を守る』。いまは自分の中では『楯無とその周りの世界を守る』になっている。

これは使命でもなんでもない。俺の意思で、この誓いは完遂させ

てみせる。

入学当初にあった“俺”は幸せであってもいいのか、という悩みは全て消えたわけじゃない。

でも俺が幸せであって良いと、楯無は肯定してくれる。だから俺は幸せを求められる。求めてもいい。

正直なところ、俺はまだ不安定だ。まだこっちの世界に来て一年と経っていないのだから当たり前かもしれないが。

それでも自分が思ったように動いていられるのは、楯無が居るから。

楯無がいなければ、俺はＶＢＰを広めようとＩＳ委員会に行くこともなかっただろうし、バグにも俺一人だけで挑もうとしたはず。今回の専用機持ちタッグトーナメントの前倒しもお願いしなかったはずだ。

俺は楯無に依存している。精神面的にかなり。

あり得ない話だが楯無がバグに殺されたりすることがあれば、俺の精神は崩壊するだろう。そして休むことなくバグと戦い続けるだろう。自分の居場所を求めて。

「――み、拓神、どうしたの？」

「ああ、悪い考えごとしてた」

「そう。それでね、簪ちゃんのことは、一夏くんに任せてみようと思うわ」

「どうして？」

「私はもとより、拓神も無理でしょ？　もう私の婚約者だって言っちゃったから、簪ちゃんは心を開いてくれないでしょうし」

「どうして一夏なんだ？　同じ女子のほうが良いと思うが」

「彼には他人を惹きつける力がある。そうじゃなかったら、一夏くんを好きな子があんなに居るはずがないでしょう？　今回は、それに頼ってみようと思うの」

「そうか。楯無が一夏を頼りにしようってことにちょっと妬けるけど、今回ばかりは仕方ないか」

「もう、いいでしょ。私が異性として好きなのは拓神だけ。愛するのも拓神だけ。……信じられない？」

そんなことを言ってくるから、俺はどんどん楯無にのめりこんでいく。依存していく。

「まさか。俺が楯無を信じないわけがないだろ？　わかってる、理解してる、それでも嫉妬はするよ」

「ありがとう。でも、我慢して頂戴」

「わかってる。それでも、見返りは欲しいな」

「ふふっ、もうわがままね。……いいわ。今夜、いやっていうほどアゲル」

「それは……楽しみにするしかないだろ」

少し赤くなった顔を見合わせて、笑い合う。

ああ、この笑顔だけは、なんとしても、なにに代えても守ってみせる。

どんなことをしても。何かを犠牲にしても。どんな手を使ってでも。

そんな狂ったような愛の感覚が、改めて俺の胸の中で湧き上がった。

学園祭後（後書き）

ラスト……なぜこうなった。

あれ、なんで拓神がヤンデレに目覚めようとしてるの？
ちょっ、一体なにがあった！？
久々にシリアスな感じ書いた結果がこれですよ！

さて、今回も読んでいただき感謝します。
キャノンボールはスキップのノリですね。
原作六巻のあとがきにも本来なら予定してなかった話ってありましたし、無くても良いかなーと。
……セシリアの活躍が消えますけどね。
その代わり時系列がキャノンボールのときに専用機持ちタッグになるので、早まります。一夏の誕生日前です。
正直なところ、削らないと三月までに終わりません。
まだこの後もオリジナルが続いていく予定ですし……。

それでは、感想・アドバイス等よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『専用機持ちタッグに向けて』

専用機持ちタッグに向けて（前書き）

おくれましたっ！
具体的には三時間！

紅白見ながらやってたせいで作業スピードが遅くなったのは仕方ないと思います（オイ

では、今年最後の投稿どうぞ！

専用機持ちタッグに向けて

――翌日――

昨日の集会で発表された『専用機持ちタッグトーナメント』関係で、専用機持ちの面々は昨日の放課後から動き始めている。

楯無の妹の簪（かんざし）については、昨日の放課後になる前には楯無が一夏にお願いしていた。

……相変わらず、根回しに関しては手際いいよなぁ。

そして一夏は、今日の昼休みには行動を開始。

……こっちも相変わらずの行動力だな。

まぁ、一夏のその行動に関してはいつものメンバーからいつも通りにいろいろと言われていたようだが、それに対する対応はこっちのやることじゃない。

そんなそれぞれが対応に追われる中で俺は――

「自分で望んで参加しないって言ったのに、ちょっと残念だな……」

『しかたないと割り切るといい。専用機持ちのタッグトーナメントだ、注目も集まるだろう。それである程度は君に対する表向きの注目は下がるはずだ』

――自室でティエリアと話し合っていた。

楯無は他のメンバー同様、ＩＳの整備とパートナー探しに行っているためいない。

「まぁな。んじゃ、やること確認するか」

『了解だ』

内容はもちろん宇宙（ソラ）に行くときの手順。

それに、

「まず今回の目標は『プトレマイオス２改・ＴＹＰＥ‐ＩＳ』……もう面倒だから以後は『トレミー』って呼ぶけど、それの建造」

そう、プトレマイオス２。俺の戦艦を造ること。

ＩＳと付いている理由はそのまま。ＭＳではなく、ＩＳを運用するように改造するからだ。

「宇宙に上がる手順は、まず『マイスターズ』をＩＳのコア・ネットワークと断絶。シールド・バリアーも解除する」

ネットワーク断絶の理由は言わずもがな、コア・ネットワークを利用したレーダーを避けるため。シールド・バリアーは不要だから。

これによって、コア・ネットワークを使った通信であるオープン・チャンネルと個人秘匿通信（プライベート・チャンネル）は使用不可になって、俺が地上と話をすることは楯無との脳量子波でしかできないようになる。

『それに加えて光学迷彩（ステルス）の使用……か？』

「ああ、間違っては無いけどそれは神力使う。その代わりトランザムを使って一気に大気圏離脱だ」

『ふむ、トランザムを使うなら、そちらのほうが有効だな。だがその代わりに拓神の負担が大きくなるぞ？』

「その程度なら何の問題もないさ。レーダーはＧＮ粒子で無効化して、目視は神力で無効化する……これで決定だ」

『だが散布したＧＮ粒子の偽装はできないぞ？』

「そのくらいなら大丈夫だろ。いつもでも残るわけじゃないし」

『了解した。次だな』

「プトレマイオス２改の設計データを出してくれ」

『了解……これだ』

胸元のペンダントから空間に画像が投影されて、目の前に表示される。

「えっと、まずはカタパルトの改装か」

『カタパルトはアリーナのカタパルトとほぼ同型のものに改装すればいいと思うが、どうだ？』

「ああ、それでいいな。でも中央の第三カタパルトはしなくていい」

『それはどうしてだ？』

「どうせ三つも使わないだろうし、ＭＳサイズを人サイズにするんだ。片方二列はいけるだろ。……それに仕込みたいこともある」

『ふむ、了解した。ではこのような感じか』

データのカタパルト部分が変更され、ＩＳ用のカタパルトが片側二列づつになった。

「うん、いいな。中央の仕込みはまた後でいいとして、今度は管制系統か」

『どうする？』

「これはティエリアに任せる。ヴェーダで直接制御すればそれで良いはずだ」

『僕もそれで良いと思う。だが君達とトレミーで細かく連携するならば、僕が直接制御しなければならない。だから拓神へのサポートが疎かになってしまうが……』

「かまわない。いつまでもティエリアに頼りっぱなしじゃ、かっこ悪いしな」

ティエリアがいなくても、機体・武装の展開はできる。ティエリアにはトレミーの管制に集中してもらいたい。

『そんなことを考える必要は無いんだが……なにせ僕は君をサポートするためにここに存在しているのだからな。とにもかく、了解した』

いや、俺の問題だからさ。

それにティエリアがいなくても十全の力が出せるようにしないといけないし。

ま、それは置いておいて、

「次は全体的な改装だ。主に武装関係だけどな」

『現在の武装は大型ＧＮキャノン×４　ＧＮキャノン×４　ＧＮバルカン×４　ＧＮミサイル発射管×３８　ＧＮ魚雷発射管×４だな』

「ミサイル発射管は豊富だからそのままでいいだろ。でもミサイルのサイズがＭＳサイズだから、ＧＮマイクロミサイルに変更……いや、対艦用に必要だから魚雷発射管を普通のミサイルと兼用に改装して、それをあわせて１２門は対艦用のＧＮミサイルを撃てるようにできるか？」

『可能だ。……このような感じか』

またデータが書き換えられて、少しだけ発射管の付近が変更される。

「うん、ＯＫ。それと、バルカンは迎撃用にも増やしたいな。……トレミーはコンデンサー駆動だから粒子消費系を増やすのはあれなんだけど」

『それなら、ＭＳ格納庫をＧＮコンデンサーに改装してしまえば良い。そうすれば粒子の貯蔵量を一気に増やせる』

「あ！　その手があったか。よし、それで行こう。第一格納庫と第二格納庫の四分の三をコンデンサーに変える。それでカタパルトの真下に少しだけスペースをとっておいて、そこと第三格納庫の一部をＩＳの整備場にしよう」

少しだけとは言ったが、トレミーのスケールを縮小するつもりは

無いため、２６０ｍ級においての少しだ。そこそこの広さにはなる。それに第三格納庫の一部まで開放すればＩＳを二十～三十機くらいまでなら搭載・補給ができるだろ。

『ふむ……それで最適化すると、こうなるか』

格納庫がコンデンサーに変更されて、そこからＧＮ粒子が駆動系に送られるように粒子供給ケーブルが通される。

ＩＳの格納庫となるべき場所にはスペースが確保されて、整備時の保持用アームなどが設計されていった。

『これで粒子貯蔵量は三倍ほどになった。粒子消費系の武装の運用も、使いすぎは問題になるが基本的には問題なく運用できる』

「うっし。それならバルカンを左右片側六門の合計十二門に増やしてくれ」

『了解』

いままで装備されていたバルカンはそのまま、そのカバーの難しい穴を埋めるように追加の八門が追加される。

「ついでに後ろと左右向きのＧＮキャノンも各二門づつ追加してくれ」

どんどんデータが書き変わっていき、徐々に完成に近づいていく。

よし、後は……

「格納庫の残りをミサイル用の武装コンテナに。それと――」

◆

「――よし、こんなもんだろ」

『ああ。そうだな。ここまですれば十分だろう』

あれから数時間、ずっとトレミーの改修について話をしていた。

結果、武装は大型ＧＮキャノン×８　ＧＮキャノン×１０　ＧＮバルカン×１２　ＧＮミサイル・魚雷発射管×４２。

下部の水中用発進口は無くされ、その辺りもコンデンサーと追加の大型ＧＮキャノン四門になった。

ぶっちゃけ緊急時の発進とか、近場の外にでる扉から飛び出してからＩＳを展開すればそれで済む話だったりする。

「あとは建造場所とか、そういうのを当日までに考えていくか」

『ああ。一応、すでにある程度の目星はつけてあるからそこまで時間は掛からないだろう』

「流石。――さて、たまには俺が夕飯でも作るかな。楯無はもうすぐ戻ってくるだろうし」

『作れたのか？』

「少しはな。楯無とは天と地ほどの差だけど」

『僕もサポートするとしようか。情報が欲しいならいくらでも言ってくれ』

「サンキュー。それじゃ、始めるか」

いまとっさに思いついたことだけど、たまには悪くないよな。うん。

専用機持ちタッグに向けて（後書き）

今回はトレミー改装計画の話でした。
本来ならＩＳのエネルギーも貯蔵しておけるようにしようと思ったんですが、そのエネルギーのソースどうしようということで、オミット。
それに、戦艦が絶対防御使えたら強すぎますし。
……そういえばサブタイトル関係ないですね、気にしたら負けですね。

来年は最初からタッグの日になると思います。
ガッツリとキンクリですね。はい。

紅白は奈々さんをしっかり見ましたよ！
やっぱり良いですね、奈々さんの曲。
ポルノグラフィティも好きなので、連続だったのがすごくうれしかったりします。

では、感想・アドバイス等待っています。
今年最後の投稿となりましたが、来年もよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

それではみなさん、良いお年を！

次回『ソラへ・・・』

ソラへ・・・（前書き）

サブタイ、変えました（↑冷やし中華始めましたのノリで

よくよく考えたら、まだ拓神はトーナメントに介入しないのでそっち関係のサブタイつけても意味の無いことにいまさら気付きました（苦笑

さて、ではどうぞ～

ソラへ・・・

各々が準備に追われ、時間が経つのも早くすでに専用機持ちタッグトーナメントは明後日に迫っていた。
いまはトーナメントの二日前の真夜中。
トーナメントがあるのが金曜日だから、今日は水曜日だ。といってもまだ日は変わったばかり。
タッグの組み合わせは原作通りに楯無と箒、一夏と簪、鈴音とセシリア、シャルロットとラウラだ。
簪の未完成だった『打鉄弐式（うちがねにしき）』も、マルチ・ロックオン・システムを除いて完成している。
これで事が原作通りに進むなら、心配することはなにも無いそれにみんな原作より強くなっているはずだ。

「さて、それじゃ行こうか」

「ええ、行ってらっしゃい」

場所は真夜中の寮の屋上。
そこにある人影は、俺と楯無だけ。

「あ、そうだ。拓神」

「ん？　――んっ」

「ん――――……。行ってらっしゃいのキスよ」

「おう。じゃ、行ってくる」

楯無と普通のキスを交わしてから、俺はマイスターズを展開させる。

「キュリオスガスト、展開」

『了解。ＧＮ－００３／ａｆ－Ｇ０２『ガンダムキュリオスガスト』展開』

キュリオスの両足に大型のバーニアが追加され、巡航形態時の機首ユニットも大型のものに換装。手持ちで使用する武装も、大型のＧＮロングバレルキャノンに換装されたキュリオスを纏う。

『コア・ネットワーク切断、シールド・バリアー展開中止、トランザムスタンバイ』

「オーライ。それじゃ」

デットウェイトのロングバレルキャノンを収納してから、ピッ、と楯無に指を振って飛翔する。

まずはＩＳ学園から海上に出て、そこからトランザムで一気に大気圏を突破する予定だ。

「神力で認識阻害を発動っと」

神力を自分を囲うように展開し、それで認識阻害を発動させる。

自分からは何も変わったようには見えないが、外から見た場合は俺の姿を確認することはできなくなった。

「キュリオスガスト、目標に向かって飛翔する！」

◆

時間にして数分、すでに陸から十キロ以上離れた沖に出てきていた。

「ＧＮフィールドの制御はそっちに任せる」

『了解。ＧＮフィールド、前面に展開』

機首部を頂点に、コーンのようにＧＮフィールドが展開される。

「さぁ、宇宙（ソラ）に！――――トランザム！！」

ここに来るまでは粒子温存のために出力を抑えながら来ていた。

ぶっちゃけノロノロと。

だがもうそんなことは気にせずにフルスロットル。

トランザムで通常時の最高速度の三倍をもって真上に向かって突き進む。

すぐに雲を突き抜け、宇宙へと近づいていく。

秘匿されている軍事衛星を含めて、ルート上に障害物が存在しないことはすでにヴェーダとティエリアによって確認済みだ。

だんだんと上層に近づくにつれ、ＧＮフィールドが熱で赤く染まる。

「このまま最大速度で重力を振り切る！」

『了解！』

トランザムの限界時間はもうすぐだ。そして宇宙へ飛び出すのももうすぐ。

粒子の残量は気にせず、重力の鎖を引きちぎるように、宇宙へと向かう。

そして――――

『重力圏外への脱出を確認。そしてトランザム限界時間だ』

「ふぅ、上手く行ったな」

『まだ気は抜くな。いま認識阻害を解除すると見つかる』

「わかってるよ。目標座標までのナビゲートを頼む」

『了解した』

粒子はもうほとんど残って無い。

スロットルを抑え、スピードも落とす。

といっても、空気抵抗も重力もない宇宙空間だ。それでも十分にスピードは出る。

それと、酸素はガンダムフェイスの中で俺に供給されているから問題は無い。

ティエリアのナビにしたがって機体を操作していく。

時々デブリが飛んできたりするが、展開したGNサブマシンガンで撃ち落したり回避したりしている。

広大な宇宙で移動すること数時間。
時間の感覚はここに来るまでに消え去った。
途中で粒子のチャージもあらかた終わったため、通常のスピードに戻して航行している。
現在位置は月の裏側に回り込もうとしている感じだ。

『もうすぐだ……見えてきたぞ』

「ん？　オイオイ、ありゃ――――」

俺は見えてきた光景に目の見張って、息を呑む。
なにせ、月の影から見えてきたものは……

「『外宇宙航行母艦ソレスタルビーイング』……」

アニメで見覚えのある、クソでかい船だった。
確か全長は１５キロメートル。
ふざけてるのかと言いたいくらいデカイ。

「なんで隠してた？」

『そのほうが面白いだろう？』

「はっ、確かにな」

『これは神様からの最後のプレゼントらしい。『ずっと地球で生活すると、まずいこともあるだろう』だそうだ』

心の中で、伝わるようにと祈りながら「ありがとう、父さん」と言っておく。
なんだか口よりこっちのほうが伝わる気がするしな。

「トレミーは？」

『建造の準備は整えてある。だが、拓神が動いたほうが迅速にすすむだろうから、ハロの生産をしただけだ。この辺りの資材衛星は好きに使っても問題ない』

「サンキュー」

もとよりフレームなどのパーツは俺が神力を使って作ればすぐに作り終わる。
あとはそれをハロたちと組み上げていけば完成するはず。
話をしている間に、外宇宙航行母艦ソレスタルビーイングは目の前に迫っていた。

「とりあえず、少し休みたい」

『中には居住スペースもあるから問題ない。一番近い二十六番ハッチから中に入ってくれ』

「了解」

近くで開いたハッチを見つけて中に入る。
さらにその中にある二重扉の中に入ると、後ろで扉が閉まった。

『もうここには酸素がある。機体を解除しても問題ない』

「オーライ、マイスターズ解除」

機体が粒子になって消え、パイロットスーツ姿に。

パイロットスーツな理由は、足の裏に磁石が仕込まれてるため無重力下でも立つことができる。

でも、

「うぉっと！？」

『無重力なんだ、気をつけろ』

「ああ、わかってるわかってる。でも慣れなきゃキツイなこれ」

無重力とか、戸惑うしかない。

慎重に床を蹴って通路を進んでいく。

さらにもう一つの二重扉をくぐった。すると、

「おっ！」

『ここからは擬似重力がはたらいている。もう服に戻っても問題ないぞ』

「ああ、わかった。戻してくれ」

パイロットスーツから、馴染んだＩＳ学園の制服姿になる。

それにしてもすごいな。完全にオーバーテクノロジーの塊だ。

探検してみたい――が、そんなことをしていたら時間が無くなるので自重する。

『すぐ休むか？』

「ああ、そうしたい」

『ではこっちだ』

ティエリアのナビどおりに進み、休憩のできる部屋――というか、完全に俺たち用になっている部屋に到着した。

「父さん、サービス精神旺盛だなぁ」

苦笑しつつもベッドに倒れこむ。

長時間の移動で、体は疲れてなくても精神は疲れている。

俺は起きた後どうするかを考えながら、目を閉じた。

ソラへ・・・（後書き）

トレミーに続いて出したかった外宇宙航行母艦ソレスタルビーイング！
ヴェーダもこの中に。
でも擬似太陽炉は生産してませんし、ＭＳも無いです。作れますが。
つまりあの大型砲はいまは使えません。

それとですね、ようやっとＰＳ３購入しました。
ＥＸＶＳはアマゾンで頼んだので今日中には届きます！

では、感想・アドバイス等お願いしますｍ（＿＿）ｍ

次回『ソレスタルビーイングで・・・』

ｐｓ　なんとなく書いた拓神の設定画。へたくそな物でよければ、
活動報告にＵＲＬをのせてあるんでどうぞ。修正の可能性大ですが。

ソレスタルビーイングで・・・（前書き）

ＥＸＶＳを続ける合間にちまちま書いてました。
その割には結構早く掛けたと思いますね。はい。
……ニコニコの作業妨害用ＢＧＭに引っかかってましたが（爆

では、どうぞ

ソレスタルビーイングで・・・

いつもとは違う感覚で目が覚める。
隣にアイツが居ない……？
ここは……

「ふぁぁぁ……っと。そうだった、な」

欠伸で涙が滲んだ目元をこすりながら、体を起こす。
制服のまま寝たせいで制服に皺ができてしまったが気にしない。
立ち上がって改めて部屋を見渡すと、この部屋には生活に必要なものがほぼ全てそろっていた。
いま寝ていたベッド、テーブルとイスやソファ。キッチン、テレビ、中身は確認していないが冷蔵庫と箪笥。
テレビって……見れるのか？　いや、どうせヴェーダと繋がって地球から映像を持ってきてるんだろう。

『起きたか。どうだ？　調子は』

「おう、寝たおかげで気分はスッキリしてる。体の調子も問題ない」

『なら良い』

「あ、そうだ」

『ん？　どうした？』

「いま何時だ？　ああ、日本時間で」
『いまは十二時三六分……ちょうど正午を少し過ぎたところだな』
「水曜日の午後、か」
『そうだ』
よし、時間は丸一日以上はある。
明日は丸一日使えるとして金曜日――タッグトーナメント当日は、進行度次第とはいえ昼前には戻れるようにするとなると……使える時間はざっと四〇時間といったところだな。
余裕があるとはあまり言えないが、少ないわけじゃ無い。
さて、早速作業に入るとしようか。
「っし、作業に入る。サポートは任せた」
『了解だ』
◆
ソレスタルビーイング号内部からドックに出て、そこからキュリオスガストを装備して宇宙空間に出た。
「さて、この辺りか？」

『構わないんじゃないか？　このエリアなら資源衛星も多い』

場所はドックからそれほど遠くない。それどころかすごい近い。

まぁ、必要な質量があればそれでいいわけだから選ぶ必要もそんなに無いわけだが。

慣れないフワフワとした感覚に少し戸惑いながらもここまで移動してきた。

ここに来るときはずっと巡航形態だったから、また感覚が違う。

作業のために、足装甲と追加大型ＧＮバーニアだけ残して機体を解除。

ヘルメット有りのパイロットスーツだ。

「じゃ、設計データ諸々を表示してくれ」

『了解した』

ヘルメットのバイザーの内側をスクリーンとしているのか、それともバイザー自体がスクリーンなのか、バイザーに半透明なウィンドウが展開された。

「やっぱり最初は基礎フレームか……でも大きさが足りないな」

目の前にあるのがこのあたりでもそこそこ大きめな資源衛星だが、全長二六〇ｍの戦艦のフレームを形作るには足りない。

だが一つでそれをまかなえるレベルになってくると、その中を基地に変えてしまえるレベルだ。それをわざわざバラバラにするのは勿体無い。

となると、他の衛星を集めて合わせるしかないか。

「そうなると……あのくらいだな」

バーニアを噴かして別の資源衛星の裏側に回りこむ。
手をついてバーニアの出力を上げ、これをさっきの衛星の元に移動させる。
それを何度か繰り返して、そこそこの大きさの衛星を一箇所に集めた。
このくらいでいいか。

「フレーム設計の詳細を表示してくれ」

『わかった。これだ』

一回り小さなウィンドウに表示されたデータを含めて、形を頭の中でイメージとしてまとめる。
全長二六〇m、ここの大きさはこの程度。反対側も同じで、ここも――――。

「……よし、まとまった」

いま、俺の頭の中には立体的な図形が出来上がっている。
空間把握能力の応用でもあったり。
必要な大きさの空間をイメージし、そのなかに図形を投影。
三次元的にそれを把握して、修正を加える――と、こんな感じ。

「Eカーボンの原子の構成は把握してあるから問題なし。んじゃ、いこうか！」

集めてできた直径一〇〇メートルほどある塊に神力を流していく。

そしてその神力の質を、ここにある衛星をＥカーボンへと変えるものにした。
ついでにこの複数の衛星を一つにするようにとも。
それをした瞬間、目の前にあった資源衛星は黒っぽい一つの塊に変化していく。
Ｅカーボンの上から塗装が施されてないオーバーフラッグ等のように、Ｅカーボンの元の色は黒だ。
ちなみにオーバーフラッグに等に施されたビームコーティングは無色透明で、もともとの黒が機体色になっている。

「ファーストフェイズ、クリア……」

第一段階はＥカーボンの生成。
そして第二段階はフレームの形の形成。
質を変えた神力を改めて流す。
神力に包まれたＥカーボンが形を変え、プトレマイオス２のフレームとしての形を模(かたど)っていく。
さすがは神の力、そんな作業も一瞬で終わった。
出来上がったのは床も壁も何もない骨組み。
パッと見だと何がなんだかわからないが、よく見ればその面影は見える。
このフレームと外装との違いと言ったら、その密度だろう。
ＧＮ粒子には重量軽減効果があるといってもそれには限界がある。
だからフレームと外装とで比べると外装のほうが密度が低くて軽い。そしてフレームより脆い。
……まぁ、基礎であるフレームが脆弱とか話にならないんだが。
第一、艦の防御はＧＮフィールドがあるし、それでもＭＳサイズのガンダムの装甲より二倍以上厚い。
それにＧＮフィールド無しでもその装甲表面にはＧＮ粒子が定着させてあるおかげで、簡単な対空砲火など効きもしない。

「セカンドフェイズ、クリア……コンプリート」

形成に向けていた全意識を開放してやる。

それと同時に俺の体を強い脱力感が襲った。いや、虚脱感？

とりあえず全身から力が抜ける感じと、いつもはあるものが無いという感覚に襲われる俺。

「はぁぁぁ……。一気に使うとこうなるんだな」

俺の体の中に残っている神力は三分の二程度。

そんなに消費したって考えるべきなのか、これだけで済んだと考えるべきなのか。

それにもう少し節約できたかも……とは思うが、こんな大掛かりなことをするのは初めてだ。そんな微調整する余裕は無かった。

しかし三分の一でこれか。もと使ったらどうなるんだかな。まぁ、一気に力を使うことに慣れてないこともあるだろうが。

「ふぅ。ティエリア、これのドックへの運び込みは？」

『ハロ達の扱う機械で可能だ。それに任せられる』

「そうか、じゃあ頼む」

『了解した』

ティエリアがそういうと、プトレマイオス2を建造する予定の第三ドックから数十のハロが出てきた。

そのハロ達は全員（？）が、スラスターユニットと初代のボールのようなアームユニットが一緒になった装備をつけている。

それにしても……癒されるな、ハロ。

『拓神はどうする？　疲れたようだし、少し休むか？』

「いや、いい。作業を続ける」

『そうか、わかった』

移動していく俺たちの後ろでは、ハロがフレームに取り付いて少しづつ動かしている。

あのユニットには意外と馬力があるようだ。

「次はメインエンジンユニットのパーツを作るか」

プトレマイオス2は補給や補修を簡単にするために、ユニットを組み上げるような造りになっている。

居住ユニットはそれぞれがブロックのようになっているし、左右のエンジンも右と左で独立している造りだ。

もっとも格納庫などは例外だし、外装もかなり大まかな分割のされ方だが。

装甲は、あまり細かく分割してしまうと弱点となりうる装甲の継ぎ目が多くなってしまうっていう理由があるけどな。

それでユニットという利点が少し潰されてしまっているが、これぱかりは仕方の無い項目だ。

「神力を一気に使うことにも慣れないと」

人前――たとえば一夏達との戦闘中に神力を使うことはほとんど無いだろうが、もし使って戦闘をするときに使いすぎて脱力感に襲われて……じゃ話にならない。

それじゃあ楯無と周りの世界を守れない。
もしもになったら使うことに躊躇はしないつもりだし。

「さて、そのために使う資源衛星はどれにするか……」

『エンジンブロックはEカーボンだけじゃない。特殊な合金も使うから、まずはそれを生成することを推奨しよう』

「ああ、そうだな。サンキュ。それじゃあ――」

とにかく今はさっさと自分の仕事を終わらせるようにしよう。
早く地球に……楯無の元に帰るために。

ソレスタルビーイングで・・・（後書き）

トレミーの建造風景。
拓神はこんな作業を繰り返した後に、そのパーツを組み上げてってます。
でも……作った後少しの間は出番無さそうです。
第一、組み上げるだけでも一日二日じゃ終わりませんからね。
そのうち出てきます。

えと、次回はまた飛びます。
といっても、帰りになるだけですが。
感想で来たとある一軒を組み込むつもり……というか構想自体はできてるので、ＥＸＶＳをやる合間にさっさと書き上げます。

では、感想・アドバイス等お願いいたしますｍ（＿＿）ｍ

次回『地球へ・・・』

そういえば、こんなタイトルのアニメがあった気がする。地球の読み方がテラで。ＵＶＥＲｗｏｒｌｄの曲だった気もする。だが内容は知らない（笑
それではまた次回＾＾ノシ～

投稿後追加
オーバーフラッグの機体色については「ビームコーティングの色が黒」というのと「Ｅカーボンが黒であって、ビームコーティングは無色透明」という二つの説があります。
それで、ここでは後者のほうを使おうと思います。

ちなみに前者はガンプラなど、後者は雑誌インタビューなどで書かれていることらしいです（ガンダムｗｉｋｉより）

地球へ・・・（前書き）

サクサクと進めてきたこの件。
まぁ、ここで時間掛けてたら完結が遠のくのですが。
そういえば、もう９８話ですよ。設定含めてですけど。
思えば遠くまで来たものです。
……最初は楯無ヒロインでイチャつかせたいというだけで書き始めたような気がしますよ、この作品（笑

それでは、本編どうぞ。

地球へ・・・

パーツ製作は、休憩を含め丸一日以上の時間を掛けて全て作った。
それぞれの組み上げも、大まかな部分はそこからさらに時間を掛けて行った。
……が、予想していた通り俺が地球に戻る前に完成することは無かった。

「ま、それも当然だよな」

戦艦のドック兼格納庫のキャットウォークから、眼下で続けられるプトレマイオス2の建造を見ている。
途中からはハロだけではなくイノベイドの作業員もティエリアによって投入されたが、戦艦の建造は早々簡単に終わるものではなかったな。
現在の進行度は大体四〇パーセント。九〇パーセントになれば艦体自体は完成し、システム面の作業になる。
もっとも、システム・プログラムの面についてはヴェーダ任せになるだろうが。
まぁつまり、艦体のだいたい半分は一日半で出来上がったのだ。
ありえないことに。
それも神力の恩恵だ。デカいパーツを機械を使わずに機械よりすばやく動かし、組み上げていく。
だが俺が地球に戻ればそんなことはできなくなるわけで、組みあがるのはだいたい一週間後くらいだろう。
二十四時間休まずに作業を続けたとして、だ。
いまここにいるイノベイドに感情は無い。ただヴェーダから与え

られた仕事をこなすだけの人形。いや、ヴェーダの操るラジコンのほうがわかりやすいかもしれない。

だが機械のハロはともかく、イノベイドでも生身の肉体を持っている以上休息は必要。ナノマシンで必要な休息を減らしたとしても、結局は必要になる。

イノベイドの本来の仕事はこのソレスタルビーイング号内の点検・整備・環境維持が主であり、プトレマイオス２の建造と同時にその仕事もしてもらわなければ困る。

そんな理由から時間はさらに掛かると予想され……まぁ、完成するのは一週間半後なら確実だろう。

「さて、もう時間だし帰る――と思ったけど、その前に少し寝るか。神力も回復させないといけないし」

結局使い続けた神力は、最終的に最大値の五パーセント以下にまでなった。というか現状。

これだけでもステルスの認識阻害を掛け続けることは全く苦しくないが……体の虚脱感がすごい。なんというか、ダルイ。

戻ったときには戦闘中かも知れないのに、これだとヤバイ。

ティエリアに頼んでもう一回部屋までの道のりか、ここの地図を出してもらおう。まだ曖昧だ。

何せここの造りは複雑だし、俺はパーツ作りのときからこのドックにずっと居る。

呼びかけようとパイロットスーツでも外に出ている胸元のペンダントに触れ――――

「ヤベ、忘れてた」

――――触れられなかった。

そうだそうだ。プトレマイオス２の駆動用にＧＮ粒子を貯蔵する

必要があったから、マイスターズはその貯蔵庫のコネクターに繋いだままだ。
仕方ないと思いつつ、残り少ない神力を使って脳量子波でヴェーダにアクセス。ソレスタルビーイング号の地図を呼び出す。
「あっちか。時間は有限ってな」
部屋の場所を再確認した俺は、改めて歩き出した。

◆

「ティエリア、ＧＮ粒子の貯蔵はどうだ？」
『トレミー用の分も含めて、余裕を持って完了した。こちらで使用する分はもとよりプールしてあるから問題ない』
「そうか、んじゃ帰るぜ」
部屋で数時間休憩して、神力も二五パーセントくらいまでには回復。体の虚脱感も問題ないレベルまで回復している。
俺は貯蔵庫に行ってマイスターズを回収した後、帰るために最初に入ってきた二六番ハッチへと来ていた。
「マイスターズ展開」
『了解。ＧＮ－００３／ａｆ－Ｇ０２『ガンダムキュリオスガスト』

展開』

キュリオスガストを纏って、人型のまま宇宙に出る。
俺は一度だけ振り返ってソレスタルビーイング号を見てから、巡航形態に変形。地球への帰路に着いた。

「トランザムで一気に加速する。トランザム！」

『トランザム起動』

◆

地球から見て、月の裏側から表に出た。
この機体の宇宙での速度は８０ｋｍ／ｓ。
つまり秒速８０ｋｍ。……おかしい？　そんなことは無い。
００の劇中でガデッサに追加ブースター付けた状態で７８ｋｍ／ｓだから、ＭＳをそのまま縮小したマイスターズでも同じスピードは出る。
しかも追加装備でそうなっているガデッサ等とは違ってキュリオス系統はもとより高機動型。
第三世代と第四世代の総合的な性能差はあるだろうが、機動性なら負けない。
それは置いておくとして、月と地球の距離は約３８万キロ。
そしてキュリオスガストの宇宙での速度はだいたい秒速８０ｋｍ。分速４８００ｋｍ。時速２８万８０００ｋｍ。
不確定要素等やＧＮ粒子の節約を含めて、地球まで約二時間半だ。

……流石はガンダム。
まぁ、つまりはここから二時間で地球に帰れる。

「トランザムは……」

『戦闘の可能性も考えると、二度目の使用は推奨できないな』

「だよな。オーライ、現状維持で進む」

来たとき同様、サブマシンガンを展開して飛来するデブリを破砕しながら進む。
そうして何事も無く進んでいると、一時間半くらいで地球が間近になった。よし、予定より早く帰れそうだ――――――――

「なっ!?――マジかよっ!」

『どうした!?』

突然驚きの声を上げた俺に反応して、ティエリアも焦った声を上げる。
久々に感じるこの“ノイズ”。これは……、

「どうやら、バグさんのお出ましみたいだ」

『なに?』

とりあえず機体を人型に戻し、近場のデブリに取り付く。
ノイズはまだ弱い、それも臨海学校のときよりもずっと。だから距離はあると見ていいだろう。
ったく、あと三十分もしないうちに地球に帰れるところだったの

になぁ。

『情報の把握はできるか？』

「いや。現状、場所も数も無理だ。でも」

見つけた場合に先制するため、武器をサブマシンガンからＧＮロングバレルキャノンに変更する。

「まだ遠いな。ノイズが弱い。大方、地球の近くにでもいるんだろうさ」

『ではどうする？　戦闘を行うのか？』

「もちろん。奴らは俺の殲滅すべき対象だからな」

『わかった。センサーを戦闘用に切り替える』

「しばらくは予定通りに進む。んで、索敵に引っかかったら言ってくれ」

『了解』

こうなっては、余計に移動にトランザムを使えない。

臨海学校の戦闘のときにトランザムで一気に状況を巻き返せたことを考えても、切り札として取っておくべきだ。

俺は機体を改めて巡航形態へと変形させ、機首を地球へと向けた。

……

……

……

予想を裏付けるように、地球に近づくにつれてノイズは強まっていった。

ノイズを感じた場所からすでに五分は航行を続けている。

ノイズも臨海学校のときくらいに強まって、バグの存在を俺に伝えてきていた。

そろそろ、来る。

『っ！　レーダーに反応！　距離、直線で一〇〇〇ｋｍ！』

「来たか。……来ちまったか」

このスピードだと十秒程度で到達する距離だな。

ティエリアの報告を受けた直後に、スピードを三分の二に落とす。

それでも二十秒無い。

交戦距離だとするともっと少ない。

『交戦距離まで８ｓｅｃｏｎｄ。７、６、５……』

ロングバレルキャノンを機首センサーと同調させ、命中精度を上げる。

『４、３、２……』

ＧＮ粒子をチャージ、発射準備完了。

『1――、0！　交戦距離内まで接近、敵確認、総数十五！！』

「マジかよ……ま、やるしかないよな」

さらに速度を落とし、通常航行時の八分の一。秒速１０ｋｍ。
しかし速度の落ちた代わりに命中精度はグンと上がっている。
見えてきたバグの形は前回同様にジンクスタイプ。

「ロック完了――狙い撃つ！」

バシュゥゥン！　と、カメラで拡大されたバグジンクスのところに太めのピンクのビームが撃ち込まれたのを確認。
今の一発で二体を撃ち抜き、消滅させた。初撃は上等。
推進系に使っていたＧＮ粒子を火器に回して狙撃を続ける。
初撃でこちらに気付いたバグがこっちに向かっているがまだまだこっちの独壇場だ。
ヴァーチェ系統で一掃しようかとも思ったが、ヴァーチェは火力が高い代わりに弾速はこういった武装に劣るため、確実性を望んでこのまま続ける。
デュナメス系統？　確かに狙撃だけならデュナメスだろうが、あの数を相手するとなると機動力も高いほうが良い。
その分ＧＮ粒子の消費が激しいのは難点だけどな。

「そろそろ切り替え時かなっ、と」

かなりあった距離も、半分くらいに近づかれた。
こっちもあっちに向かって接近してるっていう原因もあるがな。
六体目を撃ち抜いて消滅させた俺は、ロングバレルキャノンを収納して両手にサブマシンガンを展開。人型に戻ってその場に留まる。

あちらから近づいてきてくれるならこっちは待ち構えている間にGN粒子の充填（チャージ）をさせてもらおう。
近接戦の邪魔になりそうな大きな機首ユニットをノーマルに戻して、ついでにシールドも両腕に装備する。
突っ込むために下半身を巡航形態に変えて……

……さて、始めようか。

「――行くぜェェェェっ！！」

地球へ・・・（後書き）

ありきたりな展開乙ですね、ええ。
……自分の残念な頭ではこのくらいしか思いつかないですよ。ハァっ。

それにしてもキュリオス系統主体の戦闘って思えばこれが初めて……。
だいたい移動にしか使って無かったですからね（汗
べ、別にニコニコでアレハレ無双を見たからテンション乗ってきたなんてことはないですからっ！
う、ウソじゃないんだからねっ！！

ゴホンゴホン。

キュリオス系の戦闘って、結構印象的なものが多いですよね。
主にハレルヤのせいで。
クローで捕まえてコックピットにグサッとか。
でもやっぱり１ｓｔ最後のアレハレ無双は良かった。
たぶんあの時点で最強でしたし、キュリオスは。
機体性能は上等、パイロットも超兵で最高クラス。
……たぶんアレハレが強すぎるからハレルヤ封印されたんでしょうね。

では、なんだか長くなった気もしますが。
感想・アドバイス等お願いいたしますｍ（＿＿）ｍ

次回『橙の流星』

橙の流星（前書き）

なんだ、これは……

前話の書いた時間→三時間半から四時間近く
今回→二時間

どうやら戦闘シーンを書くときはさくさく進むらしいＩＳです（笑

では、どうぞ

橙の流星

超高速でバグジンクスに肉薄した俺は下半身の巡航形態を解除して、目の前のバグジンクスに銃口を押し付けるようにして両手のGNサブマシンガンを撃つ。

一瞬で穴だらけにしたソイツを足場にして――追加バーニアで蹴りづらかったが――方向転換。さっきまで居た場所に銃撃が殺到しているのは気にせず、向いた先に居たバグジンクスを同じく蜂の巣にして消滅させた。

「あー、くそっ。せっかく超高速で動けるのに銃じゃもったいないか」

俺はそうつぶやいてサブマシンガンを収納すると、ビームサーベルを両手に持つ。

実際メリットがないわけではなかったが、一気に接近ができるのなら近接格闘のほうが効果的だ……と思う。

少なくとも個人的にはそのほうがやりやすそうだ。

「つっ、おっ！　危ねぇなっ――と！」

自分の体（きたい）スレスレを飛んでいく銃撃をかわしながら、一番近かったバグジンクスに瞬時加速（イグニッション・ブースト）以上の速度で突っ込んでビームサーベルでX字に切り裂く。

「次h――ちぃッ！！」

バグが消滅するときの黒い霧のようなものを切り裂きながら、左

右同時に突っ込んでくるバグジンクス二機。
それぞれのビームサーベルを左右一本づつで受ける。
バグジンクスがもう片手に持ったビームライフルを向けてくる前に、ＧＮシールドのクローモードに変形させてクロー部分を基部から伸ばして挟み――というか抉って、中央のＧＮシールドニードルで貫きつつ横に振り払い二体を切り裂いて消滅させる。

残りは四！

「どこに……！」

『後ろだ！』

「くっ！」

俺のティエリアの反応は同時。
どうやら格闘戦に意識が向いていた俺が反応するよりも射撃が早かったらしく、体に当たる部分は回避したが左肩パーツの半ばから先を吹き飛ばされた。
その被弾で左半身が前に出るような格好でバランスを崩した俺に銃撃が襲ってくる。
――――慣れない宇宙で機体の制動がうまくいかねぇ！

「こなくそっ！！」

右の上腕付近の装甲が削られ、今度は右半身が前に出るような格好になってしまう。
体をひねって続く射撃は回避していくものの、一発が左足の追加大型ＧＮバーニアに当たってバーニアが小爆発を引き起こした。
即座に左足の追加バーニアをパージしてそれを盾にするように飛

び退く。
損傷を負ったバーニアに追撃が当たり、ついには爆散してしまう。
「バランス修正は！？」
『すでに修正は済んでいる！　だが、機動力の四分の一はもっていかれた！』
それは仕方ないと割り切って回避を続ける。
修正のためには左足のバーニアの出力にあわせて、右足の追加バーニアの出力を抑制しなくてはならない。
最大での運用ができなくなったんだから落ちて当たり前だ。
「ちっ、やってくれやがったな……！」
直撃ルートだった一発を左腕のシールドで弾き、攻めに転じる。
左手のビームサーベルをリアスカートに戻してから改めてサブマシンガンを展開。
右手には刃を消したビームサーベルの柄を持ったまま、右腕のシールドでガードしつつ撃ち返していく。
「っても、これじゃ埒があかねぇっ！」
俺は防御を捨て、巡航形態に変形しながら切り札を切ることにした。
「トランザム！」
視界の中心に赤を背景に黒字で『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』と書かれたものが一瞬だけ表示され、視界がブレる。

トランザムのスピードで射撃を避けつつ、俺は四機のバグに突っ込んでいく。

残念なことにトランザムの限界時間までの時間はいつもより短い。

追加大型バーニアで粒子をいつもより多くしていた事に加え、戦闘が始まってからは粒子を出し惜しみ無しで使っていたツケがこんなところに来るとは。

それでも、四機だけなら！

「はぁぁぁっ！！」

機体の左側に懸架される状態のサブマシンガンを連射しながら先ほどのように一気に肉薄した俺は即座に人型に戻り、右腕のクローで一体を捕縛するとそれを残りの三体がまとまって反撃の準備をしていたところに投げつける。

そしてその追撃にサブマシンガンを乱射したが、クローで捕まえたヤツが盾になっている間に他の三体は散開して回避された。

「そこまでうまくいかないか……っ！」

またもや一箇所に終結した三体にむかってサブマシンガンを撃つが、まとまったまま動いて回避される。

ならば……一気に近接して右手のビームサーベルを刃を展開しながら振り下ろしたが、一番前のヤツではなく後ろから飛び出してきたバグジンクスの持っていたビームサーベルで切り結ぶ。

『両サイドに注意！』

それなら、と先ほどと同じようにクローの展開をしようとしたところで、残っていた二体に左右に回り込まれていることを警告されて下がった。

「うぉっ！？」

顔の目の前を銃撃が通過していく。

……いまのはギリギリだったな。

うっかり仰け反った状態を利用して、仰向けのまま巡航形態に移行する。

姿勢を立て直し、改めて超高速状態でバグジンクスの一体に狙いを定めつつ突進。

まとまった状態で相手するとさっきみたいなことになる。だったら引き離してしまえば良い。

生憎（あいにく）と、それが簡単に為せるスペックが今のこの機体にはある。

「これならどうだ！！」

機体正面にＧＮフィールドを発生させてバグジンクスの一体に対して突っ込む。

そしてそのままコイツを他の二機から遠ざける。

そこで人型に戻り、ビームサーベルの切り上げで切り裂いて消滅させた。

残りは二機！

「さっさと終わらせて帰らせてもら……う……クソッ！」

残りをさっさと――と思ったところでトランザム限界時間。

こりゃぁ、まずい……。

機体性能がガタ落ちして、絶対防御も消失した。

受けたらマズイのに、攻撃を受けやすくなってしまう。

左手のサブマシンガンをとりあえず乱射して、時間稼ぎをしよう

と近くのデブリの裏へと回り込んだ。が、

「ちくしょうっ！」

二体の射撃で十秒持たずにデブリは粉砕され、俺も姿をさらすことになった。

こうなりゃ、今できる最速で終わらせるしかない、か。

回避にだってＧＮ粒子を使うから、回避しながらじゃ一向にＧＮ粒子のチャージは進まない。回復も微々たるものだ。

だがそれも出力を抑えているからであって、バーニアを最大で使えば減りのほうが早いだろう。

なら、こっちの粒子が尽きるかあっちが消えるかの勝負だ。

残っている回復したが心もとない神力だと、あいつらの攻撃をどこまで防げるかわからない。

なにより使った後の虚脱感で集中力が落ちれば、それこそそこまで。

「やるしかねぇよな！」

『無茶だ！』

「はっ、無茶だろうとなんだろうとってな。悪いが、付き合ってもらうぜ」

『はぁ、仕方ない。了解した』

馬鹿正直に正面から突っ込んだ俺に対して、容赦ない銃撃が襲ってくる。

人型のままシールドで防ぎながら突き進むが、シールドをそれて脇腹のところを通っていった一発がリアスカート上部の一部を吹き

飛ばした。さらにもう一発が俺の手からサブマシンガンを弾き飛ばす。

だが何の問題も無い。それなら進むだけだ。

最後の一撃分の粒子は温存したまま、それが確実に決まる距離まで装甲をところどころ削りながら接近する。

もう少し、あと少し！

残った右足の追加バーニアに被弾する。だがまだあと少しは持ちそうだ。

中に残った全てのＧＮ粒子を使い切って急加速する。もちろんその直後には追加バーニアはパージ。

その加速で、一定の距離まで一気に近づけた。ならばあとはあいつらにトドメを刺す。

機体本体に残されたＧＮ粒子の半分を消費させ、足のバーニアからの加速に使う。

「これで正真正銘、最後だっ！！」

最後の最後に機体を瞬時加速以上まで加速させて二体の間に自分を突っ込ませた。

……第三者から見れば、オレンジ色をした流星が飛び込んだように見えるだろう

そしてシールドの先端を二体共ど真ん中に突き刺し、クローを開く。

引き裂かれた二体のバグが黒い霧のようになって消滅して――――

「はぁ、はぁ、はぁ……。終わったな」

『増援は？』

「今回は無しみたいだ。ノイズも完全に消えたよ」

それに内心とても安堵して、武器の構えを解く。

ビームサーベルの柄もリアスカートに戻した。

『了解した。……まったく、最後の無茶には肝が冷えたぞ』

「確かに時間掛けてれば通常のスペックに戻せてただろうけどな。時間かかり過ぎるって。――つーか、肉体無いのに肝が冷えたってどうなんだ、ティエリア？」

『そう感じるほどにヒヤヒヤしたということだ。わかっているだろう？』

「ははっ、悪い悪い。緊迫感が解けたら軽口でも言ってないとやってられねぇよ」

『まったく。それで、どうするんだ？』

「何がだ？」

『地球への帰還だ。機体はどうする』

ああ、そういうことか。

「このまま――いや、追加装備を元に戻してデフォルトのキュリオスにしてくれ。それでいい」

俺がそういうと、大型化されていたフロントスカートとリアスカ

ートが通常のものに戻った。
幸い推進系統は追加バーニアが持ってかれただけで、本体のバーニア、スラスターには異常は無い。
ところどころ装甲が無くなっているが、まぁ問題ない。

『アリオスにでも変更しないのか？』

「ここまでキュリオスできたんだから、あとちょっとだしな。このままキュリオスで行きたいって思わないか？」

『悪いが、僕はそうは思わないな。だが流石に大気圏突入になったら変更してくれ。何か不具合があるとマズイ』

「わかってるよ……巡航形態になってＧＮ粒子もある程度チャージできたらテールブースターを装備してくれ」

『了解だ』

「それじゃ、改めて帰ろうぜ」

キュリオスを巡航形態に変形させて、ゆっくりと地球に向けて動き出す。
この調子じゃ、あと三〇分くらいは掛かりそうだ。
トランザムが使えるはずも無く、ＧＮ粒子も底を突きかけでテールブースターもまだ装備できない、か。

まぁ、仕方ないと割り切ってゆっくり宇宙飛行と洒落込もう。

橙の流星（後書き）

もうちょっと拓神に損害与えても良かったかな、と思いつつ、あまりやってしまうとキュリオスのまま戻れないので。
キュリオスのシールドは使い道が多くて書いてて楽しいです。
生身の人間相手に引き裂きなんてしたらとんでもないことになってしまいますがｗｗ

さて、次回はようやっと帰還です。
専用機持ちタッグトーナメント当日。
もちろんなにがあるかと言えば――ですよね、あれですよね（笑

では、感想・アドバイス等お願いいたしますｍ（＿＿）ｍ

次回『ＩＳ学園よ、私は帰ってきたァァァ！！　ｂｙ拓神』
……うわぁ、なんだろうこの変更の可能性大なサブタイｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9869r/

ＩＳ　〈インフィニット・ストラトス〉　転生者は・・・

2012年1月9日01時42分発行